インド神話伝説辞典

菅沼　晃編

東京堂出版



踊るシヴァ神（ナタ・ラージャ）
〔カルカッタ博物館〕



聖なる水を汲む人々
〔ガンジス河上流の聖地・ハルドワールのガートで〕

まえがき

インドは宗教の国といわれるが、このことは同時に、インドが神話・伝説の国であることを意味している。インドにおいては、神話・伝説は宗教と深く結びついていて、現在でも人々の生活と密接なつながりをもっているからである。ヒンドゥーの暦にしたがって毎月のように行なわれるさまざまな祭礼は、すべて神話の世界のできごとにもとづくものであり、人々はその祭礼に参加することによって、そこに登場する神々や英雄たちの仲間入りを果たすのである。寺院や村の片隅に祀られている神々の像も、左足をあげて三界をまたぐかまえのヴィシュヌ神、悪魔を足の下にふみつけているドゥルガー女神などのように、神話の中で語られているとおりの姿をしているものが多い。人々は抽象的な神ではなく、天から流れ落ちるガンジス河の激流を頭髪で受けとめたというシヴァ神、野猪となって牙の上に大地を支えて人類を救ったというヴィシュヌ神の姿に畏敬の念をもち、熱烈な信仰をささげるのである。

聖なる河の水で沐浴し、神々に祈りをささげる姿を見るものは、だれであっても、神話・伝説が今なお人々の心の中に生きていることを感じずにはいられないであろう。インドの神話・伝説について

は、これを印欧神話としてギリシャ・ローマ神話や北欧神話との対比においてとらえようとする方法、もっぱら神話学的に扱おうとする方法など、さまざまなとらえ方が可能であろうが、いずれの場合にせよ、ヒンドゥーの聖なる詩人たちの言葉に耳を傾け、彼らが語る神々や英雄たちの物語をまず理解しようとする態度が必要である。このような観点に立って、本辞典ではヒンドゥーの神話・伝説の主張をできるかぎり汲みとり、紹介することにつとめた。厳密に言えば、神話、伝説、説話、昔話はそれぞれ別の性格をもったものとされようが、インドの文献においては神話と伝説とを明確に分けることはほとんど不可能であり、ヒンドゥー教の信仰の中でもこの両者は渾然一体となっているので、ここではヴェーダや叙事詩の中に記された神々の物語や英雄たちの伝説をすべて神話・伝説として扱うことにした。

しかし、一口にインドの神話・伝説といっても、『リグ・ヴェーダ』の神話とプラーナやそれ以後につくられた文献の神話とのあいだには数百年から一〇〇〇年にもおよぶ時間的な隔りがあり、同一の主題をもつ物語であっても、この間にさまざまな相違があらわれてくるのはむしろ当然である。また、叙事詩のようにぼう大な分量をもつ文献においては、同一の主題について各編で異なった記述をしていることもめずらしくなく、プラーナ文献にいたっては、その数の多さ、内容の複雑さとあいまって、神話・伝説の内容も多岐にわたるものとなっている。したがって、ある主題をもつ神話・伝説を正確に紹介しようとする場合には、それを記述している文献の名称をあげたうえで、その神話・伝説の内容を解説するという形をとらざるを得ないのである。そこで、本辞典では、必要と思われる場合には原典名とその編名・巻・章・節・詩句の番号などを明記したが、わずらわしさをさけるため、『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』については編名だけをあげることとし、小さな項目は出典を省略して一般論を紹介するにとどめた。

本辞典の執筆には約三年を要したため、出来あがった原稿全体を通読してみると、はじめの頃に執筆した項目と後のそれとのあいだに、記述上の不統一と内容上の重複があることに気づき、改めて全体の統一をはかったが、内容上の重複については整理し切れないところも残った。しかし、それぞれの項目はそれ自体で独立したものであることを考慮し、ある程度の重複はそのまま残すことにした。

本辞典の執筆には予想をはるかにこえる時間を要したため、東京堂出版編集部の方々に多大のご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げるとともに、この間辛抱づよく筆者を督励された小林英太郎氏に心から感謝の念を表したいと思う。また、原稿の整理、校正、索引の作成のために貴重な時間を費していただいた東洋大学大学院博士後期課程の田崎國彦、津崎浩一両君に衷心より御礼申し上げる。また、索引の作成はインド思想研究会の学生諸君にも手伝っていただいた。あわせて御礼申し上げたい。

一九八四年十二月

菅沼　晃

目次

凡例

一、本辞典は、インドの神話・伝説の中にあらわれる神名、女神名、人名、動植物、精霊的存在、地名、山川名などを項目として立て、解説したものであり、神話・伝説だけではなくヒンドゥー教、インド文化一般を理解する手引きともなるよう配慮した。

一、本辞典で取り扱う神話・伝説はインド一般のものであり、仏教のそれは含まれていないが、特に仏教と深い関係をもつ神名等については、項目の最後に仏教的解説を加えた。

一、文献、宗派、寺院、祭礼については巻末の附録を参照されたい。なお神話・伝説と関係深い叙事詩マハーバーラタ、ハリヴァンシャ、ラーマーヤナ、プラーナ、バガヴァッドギーターは項目として立てて解説した。

一、各項目の末尾に、関連する項目がある場合には↓印で指示した。これによって、その神話・伝説の広がりをつかむことができるであろう。

一、項目の解説の中で、文献は『 』であらわし、必要な場合には巻・章・節を明記した。たとえば『リグ・ヴェーダ』一・三二・一は、同書第一巻、第三二章、第一節の意味である。叙事詩については慣習にしたがって初編、森林編というように編名をあげた。

一、項目に立てられたものにはサンスクリットの原語をあげたが、解説文中の固有名詞には原則として原語をつけなかった。文中にかな表記されている語の原語については索引を参照されたい。

一、項目、解説文ともに、固有名詞は原形を出したが、一般にはハヌマーンのようにサンスクリットの文法でいう主格の形で呼び慣わされているものがあり、その場合には慣用にしたがった場合もある。

一、ブラフマンという語には文法的に中性と男性のものがあり、本辞典では中性の哲学的原理をあらわす場合はブラフマン、ヒンドゥー教の三大神といわれる男性神をあらわす場合には慣用にしたがってブラフマー(男性名詞、主格)と呼んで区別することにした。

一、インドの神々、英雄たちには多くの別名 (epithet) があり、これらを理解しないと物語の文脈がつかめなくなることがあるため、主要な神名・人名の項目の末尾に(別名)として主な別名をまとめて記した。

一、インドの神々の姿を文字で解説するのは容易なことではないので、できるかぎり図版で示すことにした。一々出典を記していないが、いずれもインド、ネパール出版の文献によるものである。

インドの神話・伝説(概説)

インドの神話・伝説に登場する神々や聖仙、半神的な存在、英雄、魔族などの数はほとんど無数といってよいであろう。これらの中には、インド・アーリヤ人の作った最初の文献『リグ・ヴェーダ』のもっとも古い部分に最初から姿を見せている神々もあれば、『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』においてはじめてあらわれる神々・聖仙もある。また、『リグ・ヴェーダ』では高い地位を占めていたが、叙事詩やプラーナに見られるヴィシュヌ、シヴァなどを中心とする神話・伝説ではワキ役に落とされている神々も少なくない。

これらの神々の栄枯盛衰はそのままインド・アーリヤ民族の文化の発展のプロセスを示すものであり、この点からインド神観史の発展段階を三期、あるいは四期に分ける場合があるが、ここではこの辞典の性格上、ヴェーダ系の神話・伝説と叙事詩・プラーナ系のそれとに二大別して解説をすすめたいと思う。一般的には、バラモン教の神話とヒンドゥー教の神話といいかえることもできる。しかし、これはあくまでも理解を容易にするための便宜的な分け方であり、ヒンドゥー教の神話といっても古い伝承をうけた上で形成されたものの多いことはいうまでもない。ただ、ヴェーダからブラーフマナ、ウパニシャッドにいたる諸文献に記される神話・伝説がインド・アーリヤ民族の正統的な文化にもとづくものであるのに対して、ヒンドゥー教の神話・伝説には正統的なものによりながらも、それ以外の土着的な要素が加えられているという点を見落としてはならないであろう。

ヴェーダの神話・伝説 西紀前数千年の昔、現在のヨーロッパ人の祖先たちとインド人の祖先たちが共通の言葉を使い、共同して生活していた時代があった。彼らをアーリヤ人といい、その原住地はほぼコーカサスの北方地域であったと推定されている。時代がたつにつれてアーリヤ民族は原住地の草原を出て他の諸地方に向かって移動を始め、西方に向かって移動した諸部族はヨーロッパの地に定住してヨーロッパ諸民族の祖となった。また、東に向かって移動した諸部族は西トルキスタンの草原地帯を経て、一部は西南に移動してアーリヤ系のイラン人の祖先となり、他は東南にすすんでヒンドゥークッシュを越え、インド西北部のパンジャーブ地方に侵入した。西紀前一三世紀の末ごろと推定されている。このパンジャーブ地方に侵入したアーリヤ人をインド・アーリヤ人とよぶ。

インド・アーリヤ人たちは、この新しい国土に定住して前一〇〇〇年ごろまでに『リグ・ヴェーダ』の宗教を完成させた。『リグ・ヴェーダ』Rg-veda は、インド・ヨーロッパ人のもつ最古の文献の一つで、リグは「讃歌」、ヴェーダ

は「知識」の意味で、とくに神々を祀るための宗教的知識をあらわす。ヴェーダ文献は本質的に宗教文献であり、『リグ・ヴェーダ』にはさまざまな神々にささげられた一千をこえる讃歌が収められており、この宗教性のゆえに一般にはバラモン教の聖典とよばれる。

『リグ・ヴェーダ』の宗教は本質的に多神教であり、大部分の神々は自然界の構成要素、諸現象、それらの背後にあってそれらを支配していると考えられる力を神格化し、崇拝の対象としたものである。神々は天・空・地の三つの世界に住むと信じられ、天神ディヤウス Dyaus、太陽神スーリヤ Sūrya、アーディティヤ Āditya、サヴィトリ Savitṛ、暁紅神ウシャス Uṣas などは天界に属し、風神ヴァーユ Vāyu、ヴァータ Vāta、暴風神ルドラ Rudra、マルト Marut神群、雨神パルジャニヤ Parjanya、雷神インドラ Indra などは空界に、地神プリティヴィー Pṛthivī、火神アグニ Agni、神酒ソーマ Soma などは地界に属するといわれる。

これらの自然現象・自然のエネルギーを神格化した神々のほかに、山・河・動物・植物などを神格化した神々も、ヴェーダの中には登場する。たとえば、河神シンドゥ Sindhu、聖河サラスヴァティー Sarasvatī などである。また、特殊な活動や職能、抽象的な観念を神格化したものもあり、工巧神トゥヴァシュトリ Tvaṣṭṛ、創造神ヴィシュヴァカルマン Viśvakarman、造物主プラジャーパティ Prajāpati、意志の力を神格化したダクシャ Dakṣa、激情を神格化したマニュ Manyu、信念・信仰の神格化シュラッダー Śraddhā などがこれである。天地の理法をつかさどる司法神ヴァルナ Varuṇa、無限をあらわすアディティ Aditi、言葉を神格化したヴァーチュ Vāc なども、このグループの神々である。

このほか、半神的な存在、精霊的な存在も、『リグ・ヴェーダ』の神々の世界では重要な役割をもっている。たとえば、天界の水の精女であるアプサラス Apsaras たち、彼女らの配偶者で天界の霊草であるソーマ Soma を守るガンダルヴァ Gandharva たち、人間のために死の道を開いたヤマ Yama、祖霊ピトリ Pitṛ、半神半人間の祭官族であるアタルヴァン Atharvan、アンギラス Aṅgiras などである。また、マルト Marut 神群、アーディティヤ Āditya 神群のように多くの神々を一群として崇拝する場合もあり、アシュヴィン Aśvin 双神やミトラ Mitra・ヴァルナのように二神を一体として、あるいは二神を並べて扱うこともある。

これらの神々、あるいは神的な存在に対して、ヴェーダの神話の中には、神々の敵とされる多くの魔界の存在が登場する。『リグ・ヴェーダ』の中でつねにインドラの敵とされるのはヴリトラ Vṛtra（障碍物）とヴァラ Vala（おおい隠すもの）であり、インドの先住民をあらわすダーサ Dāsa、

あるいはダスユ Dasyu も魔族とされている。また、神的存在の総称デーヴァ Deva に対して、神々の敵としての悪魔の通称はアスラ Asura といわれる。アスラは語源の上からはゾロアスター教の最高神アフラ・マズダーのアフラ Ahura に相当し、「生気・活力」を意味していたが、恐るべき呪力をもつものとして、ヴェーダの神話では魔神の列に加えられた。

ヴェーダの神々のうちには、インド・イラン共同時代に起源をもつ古い神々もあり、さらに古い時代にまでさかのぼることのできる神々もある。なかでも、ミトラとヴァルナの名が西紀前一四世紀のミタニ・ヒッタイト条約文の中に記されていることはよく知られている。このような古い神々、比較的新しい神々を含めて、神々の数は三三神とも、三三三九神ともいわれるが、そこに最高神という観念はなく、神々のランキングもない。それぞれの場合に、それぞれの目的をもって、一定の神に讃歌をささげるのであって、どんな神であっても讃歌をささげられる限りにおいて、その場合の主神でありうることになる。ヴェーダの神観念のこのような性格から、イギリスの神話学者・インド学者マックス・ミューラーはヴェーダの宗教を単一神教 Henotheism と名づけ、主神が祭祀を行なう度ごとに代わるというところから交替神教 Kathenotheism ともよんだ。ただし、それぞれの神にささげられた讃歌の数の多少が、その神の人気の程度をあらわすことは事実であろう。

ヴェーダの神々が自然現象やその背後にある力を神格化したものであることを見てきたが、一般にこれらの神々の姿は人間になぞらえて描写されている。ヴェーダの神々の世界を神話として見た場合、神格化 deitification というよりも人格化 Personification といった方がより適切である。インドラ神は勇猛な軍神として描かれているし、暁紅の女神ウシャスはうら若い美女として描写されている。他の神々も同様にして限りない美徳をもち、美しく、偉大である。しかし、その美徳はあくまでも人間を理想化したものであって、神々は不死で永遠の若さをもつ存在ではあるが、同時に人間としてのさまざまな性格を兼ねそなえていて、時には人間的な弱点さえ示すこともある。

『リグ・ヴェーダ』の神話のなかには、祈禱主神ブラフマナスパティ Brahmaṇaspati、ヒラニヤガルバ Hiraṇyagarbha、プルシャ Puruṣa を創造者とする宇宙創造神話が含まれているが、その中でも原人讃歌 Puruṣasūkta（『リグ・ヴェーダ』一〇・九〇）とよばれる創造讃歌はカーストの起源や祭祀の始まりを説くものとして重要である。この讃歌によれば、プルシャ（原人）は千の頭と千の目、千の足をもち「かつてあり、またあるであろう」この一切で

ある」と言われる。地上の諸存在はこのプルシャとよばれる巨人の四分の一にすぎず残りの四分の三は不死として天上にある。神々がこのプルシャを犠牲として捧げて祭祀を行なったとき、馬・山羊・羊などが生れ、プルシャを分割すると、プルシャの口からはバラモンが生れ、両腕からは王族（クシャトリヤ）、両太腿からは庶民（ヴァイシュヤ）が、両足からは隷民（シュードラ）が生れた。さらにその意から月が、眼から太陽が、気息から風が、へそから空界が、頭から天界が生じ、その他の存在もプルシャの身体から生れて世界が完成されたという。この創造神話の中で、祭祀の主であるプルシャが自分自身を祭祀の供物として最初の祭祀を行ない、宇宙の創造を行なったということは、インドにおける祭祀の原型を示すものとして重視されている。

『リグ・ヴェーダ』の神話には、神々のほかにもさまざまな存在が登場し、神々の世界に人間的な色彩を与えている。たとえば、プルーラヴァス王と美しいアプサラス（天界の水の精女）のウルヴァシーとの恋愛物語（『リグ・ヴェーダ』一〇・九五）、苦行に専心する聖仙アガスティヤと夫の愛を求めるその妻ローパームドラーの物語（一・一七九）、死者の王ヤマとその双生児の妹ヤミーによる人類繁殖の物語（一〇・一〇）など、後世の文献の神話・伝説にとりいれられたものも少なくない。

カーストの成立とバラモン教　ヴェーダの宗教・神話において、祭祀が重要な意味をもっていることはすでに見た通りであるが、この祭祀の儀式が複雑化すると、祭祀のときにささげられる讃歌を集成した『リグ・ヴェーダ』だけではなく、その際詠誦する歌詠を集成した『サーマ・ヴェーダ』Sāma-veda、祭詞を集めた『ヤジュル・ヴェーダ』Yajur-veda が編纂され、呪法に関する句を集めた『アタルヴァ・ヴェーダ』Atharva-veda がつくられた。

インドの西北部パンジャーブ地方に定住したインド・アーリヤ人は西紀前一〇〇〇年ころからさらに東に向かって移動し、現在のガンジス河とヤムナー河の中間の平原に住み、その文化圏を着実に拡げていった。バラモン（ブラーフマナ Brāhmaṇa=司祭階級）、クシャトリヤ（Kṣatriya=王族階級）、ヴァイシュヤ（Vaiśya=庶民階級）、シュードラ（Śūdra=隷民階級）という四つの階級が明確になったのはこの時代である。司祭者であるバラモンはヴェーダにもとづく祭祀や教学を独占し、バラモン優位の社会体制はこの時代に形成されて以来数千年にわたってインド社会を支配することとなった。この時代に成立したバラモン至上、ヴェーダにもとづく祭祀万能の宗教をバラモン教 Brahmanism とよぶのである。

『リグ・ヴェーダ』以外のヴェーダが編纂されたのとほぼ同じころ、四つのヴェーダのそれぞれに附属するものとしてブラーフマナ Brāhmaṇa とよばれる文献がつくられた。これはヴェーダの本文（サンヒター Saṃhitā）を説明・解釈したものであり、祭式を実行するための方法、そこでささげられる讃歌・祭詞の意義や目的などを多くの神話・伝説をまじえながら説き明かした文献である。

ブラーフマナにつづいて、四ヴェーダに附属する文献としてアーラニヤカ Āraṇyaka とウパニシャッド Upaniṣad が編纂された。アーラニヤカとは森林の中で伝えられるべき秘密の教えを説く書というほどの意味で、ブラーフマナを承けて祭式を説明するとともに、哲学的な問題にもふれる内容をもっている。ウパニッシャッドは「近くに坐って伝授すべき秘密の教え」の意味で、ヴェーダ文献の最後に位置していることによってヴェーダーンタ（Vedānta ヴェーダの終り）ともよばれる。長いあいだに二〇〇種をこえるウパニシャッドがつくられたが、一般的にヴェーダの伝統をうけるものを古ウパニシャッドといい、特定の哲学的立場、あるいはヒンドゥー教の宗派的な立場に立って編まれたものを新ウパニシャッドという。古ウパニシャッドのうち、仏陀以前に成立したものを初期ウパニシャッドという。したがって、ブラーフマナに直接つながるのは初期ウパニシャッドということになり、ヴェーダの神話をうけつぎ発展させるのはこれらの文献である。

ブラーフマナ・ウパニシャッドの神話・伝説　『リグ・ヴェーダ』の宗教は本質的に多神教であるということはすでに見たとおりであるが、他方、多神を一神に統一し、多元を一元にまとめようとする傾向も見えはじめている。

「（かれらは、それを）インドラ、ミトラ、アグニとよんだ。そして、それは天的な美しい翼をもった鳥である。賢者たちは唯一つの実在をさまざまに語るのであり、かれらはそれをアグニ、ヤマ、マータリシュヴァンとよんだ」（『リグ・ヴェーダ』一・一六四・四六）

このような傾向は哲学的にはブラーフマナを経てウパニシャッドの一元論へと展開していくのであるが、神話のうえからはまず造物主プラジャーパティ Prajāpati の宇宙創造説となった。プラジャーパティ（生類の主）はブラーフマナ文献で最高の創造神・万物の創造者とよばれるようになり、多くの創造神話が説かれるようになった。その内容は多種多様であるが、プラジャーパティが繁殖しようと意図して苦行（tapas）するというところに共通点があり、それがこの創造神話の特色となっているように思われる。

ブラーフマナの神話は、『リグ・ヴェーダ』の神話・伝説とヒンドゥー教の神話を結びつけるものとして重要な意義をもっており、叙事詩やプラーナのそれも何らかの形でブ

ラーフマナで言及されているものが多い。人類の祖といわれるマヌManuが彼の手の中に入って来た魚によって救われるという洪水伝説（『シャタパタ・ブラーフマナ』一・八・一・一―一〇）は、プラーナ文献ではヴィシュヌ神の魚としてのアヴァターラ（化身）の物語となり、天女ウルヴァシーとプルーラヴァス王との恋愛物語はさらに豊かな内容をもつものとなって（『シャタパタ・ブラーフマナ』一一・五・一）、プラーナの時代に伝えられた。

ブラーフマナの神話の中でとくに注目すべきなのは、その中にすでにヴィシュヌ、シヴァなどのヒンドゥー教の神々が姿を見せていることであり、アスラの三つの城を破壊したルドラ（すなわちシヴァ神）の物語はそのまま『マハーバーラタ』にうけつがれて、三つの都を破壊するシヴァの物語として展開している。

ブラーフマナに続く初期のウパニッシャッドは主として哲学的な主題を説くものであるが、哲学的な原理としてのアートマン・ブラフマンだけではなく、神話的な意味あいでのアートマン・ブラフマンによる宇宙創造神話をも記している（たとえば『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』一・四）。

バラモン教からヒンドゥー教へ　ガンジス河とヤムナー河の中間の平原に定住したインド・アーリヤ人はさらにガンジス河の中流から下流へと移動し、多くの部族を吸収してアーリヤ文化圏を拡げていった。農業生産の増大、それにもとづく商工業の発達、貨幣の流通などによってガンジス河中流の地域では多くの都市（nagara）が成立した。経済の発達は資産者階級を出現させた。文化的には古来のサンスクリットにたいしてプラークリット（Prākrit）とよばれる俗語が使用されるようになり、政治的にはマガダ、コーサラ、アヴァンティなどの君主国とともに、ヴァッジ、マッラ、リッチャヴィ族のようなサンガ（saṃgha）とよばれる共和政体をとる国があらわれた。

このような政治・経済的、文化的情勢のもとに、バラモンを頂点とする社会制度にも変化があらわれはじめる。ウパニシャッドにおいてはバラモンと並んでクシャトリヤ（王族）階級の思想家たちが活躍し、クシャトリヤの思想家がバラモンに対して教えを説くこともめずらしくない。また、沙門（śramaṇa）とよばれる反バラモン的な自由思想家たちも、伝統にとらわれないさまざまな哲学説を主張した。西紀前六～五世紀ころのガンジス河中流の諸国においては、このような自由思想家の活動を可能にする条件が整えられていたのである。これらの自由思想のなかで、もっとも重要なものが仏教とジャイナ教であり、ヴィシュヌ＝クリシュナの信仰を説くヤーダヴァ族の宗教もこれらの新しい思想・

宗教運動の一つであったといってよいであろう。

このような新しい社会の動きによって、バラモン教はそれまでのバラモン至上、祭祀万能の立場を保持しつづけることが困難になっていき、やがてヴィシュヌ神やシヴァ神の信仰にその座を譲り渡すことになった。ヒンドゥー教とは、このような時代の情況のもとに、バラモン教を土台とし、アーリヤ的要素とインド土着のさまざまな要素が複雑にまじりあって成立した宗教である。ヴェーダの神々が勢力を失い、インドの土着の信仰にもとづく神々の信仰があらわれはじめたのはマウリヤ王朝の時代であり、前四世紀ころの文献や碑文の中にヴィシュヌ、シヴァなどの名が見えはじめる。『リグ・ヴェーダ』においては最も多くの讃歌をささげられていたインドラはローマ神話のマルスに対応する軍神としてあがめられていたが、叙事詩やプラーナの神話ではヴィシュヌ神やシヴァ神に従う存在となった。ヴェーダの祭式において重視された火神アグニ、神酒ソーマ、司法神ヴァルナなどの神々も同じ運命をたどり、ヒンドゥー教の神話においてヴィシュヌやシヴァの崇拝者として再登場することになった。

ヒンドゥー教の神話・伝説　ヴェーダの宗教が多神教であることはすでに見たが、ヒンドゥー教もこの傾向をそのままうけついで、ヴィシュヌ、シヴァ両神を中心に、その神話にはさまざまな神が登場する。インドラ、アグニなどはヴェーダ以来の神々であるが、女神崇拝、神妃（Devī, Śakti）の観念などは明らかにインド土着の信仰にもとづくものであり、それらの土着的な神観念・信仰対象の中には、モヘンジョダロやハラッパーを中心とするインダス文明に起源をもつものもあるといわれる。また、樹木・樹霊の信仰、地母神の信仰も、農耕生活をしていたインドの先住民のものであり、リンガ（liṅga＝男性性器）やヨーニ（yoni＝女性性器）の崇拝も土着的な地母神の信仰と深い関係をもっている。これらは、長いあいだインド・アーリヤ文化の底にあって表面には出て来なかった土着的な諸要素が、ヒンドゥー教においてヴィシュヌ、シヴァ両神の信仰と結びついて種々の形であらわれてきたことを示している。とくにリンガの崇拝はシヴァ信仰と結びつき、リンガとしてのシヴァ神が全インドで祀られるようになった。

ヒンドゥー教の主神は、一般にヴィシュヌ、シヴァの両神にブラフマー神が加えられて三大神といわれる。ヴェーダの神々がおしなべて一般の信仰を失っていく中で、正統バラモン系の思想において最高の実在とされた中性原理ブラフマンは創造神として人格化され、男性神ブラフマーとなった。プラーナ文献では、シヴァを最高神としてその下にヴィシュヌ・ブラフマー両神を置く場合、ヴィシュヌを

中心に説く場合など、さまざまな説があるが、一般的にはブラフマー神よりもシヴァ、ヴィシュヌ両神にたいする信仰を強調していることが多い。これらの三神の信仰を調和しようとしたのが三神一体説（Trimūrti）である。シヴァを主神とするシヴァ派、ヴィシュヌを最高神として崇拝するバーガヴァタ派など、立場による相違はあるが、三神一体という場合、一般にブラフマー神が世界の創造をつかさどり、ヴィシュヌ神がこれを維持し、シヴァ神がそれを破壊する役割をもつといわれる。しかし、教義の上からは三神一体説が主張されるのであるが、実際の信仰の面ではブラフマー神はヴィシュヌ・シヴァ両神の信仰の陰に隠れ、ブラフマー神のみを祀る寺院はむしろ稀であるといってよい。

ヴィシュヌ神はすでに『リグ・ヴェーダ』（一・一五四・一～二）の讃歌のなかで全宇宙を三歩で踏み越える神格として描かれているが、インドラやアグニのように有力な神だったわけではなく、叙事詩の時代にナーラーヤナ・ヴァースデーヴァ Nārāyana-Vāsudeva（クリシュナ神の別名）と同一の神として説かれ、ついに最高神としての地位を獲得するのである。このヴィシュヌとクリシュナとの同一視ということはヒンドゥー教成立のうえできわめて重要な出来事であり、ヴィシュヌ信仰は叙事詩に説かれる「クリシュナ伝説」を通じてインド各地に広まっていった。

ヴィシュヌ神の信仰が、古来の神々のそれや土着の信仰と調和しながら、一般に普及するよりどころとなったものに、アヴァターラ（avatāra 権化・化身）の思想がある。これは、正義・道徳が衰え、不正義・不道徳（adharma）が盛んになるたびに、ヴィシュヌ神がそれぞれの場合に応じた神話的な動物や人物の姿をもってこの世に現われ、正義を興すというものであり、一般的には魚・亀・野猪など一〇の化身がよく知られている。ヴィシュヌ神話において、その妻とされるのは幸福・幸運の女神ラクシュミー Lakṣmī（あるいはシュリー Śrī）で、愛と望みと若さの神カーマデーヴァ Kāmadeva は彼らのあいだに生れた子である。ラクシュミーがギリシャ・ローマ神話のヴィーナス、アフロディテに比べられるのに対して、カーマはキューピッド、あるいはエロスに対比される。

シヴァ神もヴィシュヌ神と同様にインド・アーリヤ的な要素と土着のそれがまじりあって形成された神格である。『リグ・ヴェーダ』ではシヴァは「吉祥」の意味で、暴風神ルドラ Rudra の尊称として使われる形容詞であったが、暴風神としての恐怖と恩恵という二性格をもったまま、おそらくはヴィシュヌ神の場合以上に土着的な要素をとりいれてヒンドゥー教の主神となっていったのであろう。シヴ

ァ神がきわめて複雑な性格をあらわす神であり、その神話が多彩であるのは、このようなシヴァ神信仰の成立の事情によると思われる。このことがまた、シヴァ神がどの地方においても、どのような階層の人々によっても熱烈に信仰されているということの秘密でもある。

シヴァ神はこのようにさまざまな性格をもちながらも、ヴィシュヌのように化身をこの世に現わすのではなく、その働きに応じて無数の別名によって呼ばれ、崇拝される。たとえば、ルドラ神以来の恐怖の面をあらわす名称としてはバイラヴァ（Bhairava 恐ろしい殺戮者）、ブーテーシュヴァラ（Būteśvara 悪鬼の主）などがあり、生殖・生産・再生をつかさどる面としてはマヘーシュヴァラ（Maheśvara 偉大な神）、パシュパティ（Paśupati 家畜の主）などの呼び名があり、それぞれの像として祀られ、崇拝されている。リンガとしてのシヴァ神は十二大リンガと呼ばれ、全国一二カ所にシヴァ・リンガを祀る寺院があり、また、ナタラージャ（Natarāja 踊りの主）としてのシヴァはあまりにも有名である。

女神その他の神々　ヴィシュヌの神妃がラクシュミー、あるいはシュリーとされるのにたいして、シヴァの神妃はウマー Umā、あるいはパールヴァティー Pārvatī といわれる。ヴィシュヌ・シヴァの神妃として右の二女神の名が明確になるのは『マハーバーラタ』においてであり、女神（devī, śakti）の崇拝はグプタ王朝以後、インド民衆のあいだに急速に広まって行った。

シヴァ神の神妃も、夫の神と同じように、多くの別名で呼ばれる。ウマー、パールヴァティー、ガウリー、ドゥルガー、カーリー、チャンディーなどがこれであり、性格上からもシヴァ神同様に美・穏和・恩恵という面と、激しさ・恐ろしさの二面をもっている。黒色の身体で頭蓋骨の首飾りをつけ、血の犠牲を欲するというカーリー女神の姿は、シヴァの神妃というよりもむしろ独自の性格をもった女神信仰といった感じすら与える。

シヴァとその神妃パールヴァティーの子として生れたのがガネーシャ Gaṇeśa であり、象の頭をもち人間の身体をした姿については、多くの神話が語られている。ガネーシャは現在のヒンドゥー教徒の信仰の中で、知慧と好運の神として広く信仰され、銀行でも事務所でも、バスの中にさえもこの神の像や絵がかざられている。シヴァとパールヴァティーの子供にはこのほかスカンダ Skanda がいる。

ヒンドゥー教はすでに見たように多神教であり、三大神といわれるブラフマー・ヴィシュヌ・シヴァとその系統の神々のほかにもさまざまな神格が崇拝の対象とされる。その中でも「世界を守護する神」（Lokapāla, Dikpāla）とい

われるソーマ（月神）、アグニ（火神）、アルカ（日神）、アニラ（風神）、インドラ・クヴェーラ、ヴァルナ、ヤマがポピュラーな神として知られ、それぞれヒンドゥー教の神話のなかで重要な働きをしている。

叙事詩とプラーナ　このようなヒンドゥー教の神々・女神たちの物語を集成し、そのうえにバラタ族やラーマ王の事蹟を語ろうとしたのが、二大叙事詩『マハーバーラタ』Mahābhārata と『ラーマーヤナ』Rāmāyaṇa、およびプラーナ Purāṇa と呼ばれる文献群である。

『マハーバーラタ』は「バラタ族の戦争を物語る大史詩」で、全一八編、約一〇万の詩句で構成された大叙事詩である。ガンジス河とヤムナー河のあいだのクル地方を本拠地とするバラタ族が、カウラヴァとパーンダヴァの両陣営に分かれて一八日間にわたる血で血を洗うような大激戦を行ない、バラタ族の諸家はほとんど全滅する。『イーリアス』や『ニーベルンゲンの詩』にも比較されるようなクル平原の殲滅戦の悲劇が、この大叙事詩の中核となっている。この中核の物語を述べる部分は全体の五分の一ほどといわれるが、そこに登場するクル族の勇士や女性、聖仙などの中に、ヴィシュヌ神やシヴァ神がさまざまの姿を現わす。クリシュナ神は、ここではヤーダヴァ族の王として登場し、バラタの大戦争ではパーンドゥ王の五子のうちの第三子アルジュナの御者となって助言を与える。この叙事詩の本筋に出てくる人物はほとんどがクシャトリヤ（王族階級）であるが、その一人一人の出生・系譜を見るとすべて神々の子孫とされ、どこまでが神的な存在で、どこからが地上の人間となるのか判然としないのが普通である。ガルダ（ヴィシュヌが乗り物とする霊鳥）やナーガ（蛇）などの存在も同様であり、このような神・人・動物、その他もろもろの存在が渾然としているのがヒンドゥー神話の世界であるといってよいであろう。

『マハーバーラタ』の補遺として扱われる『ハリヴァンシャ』（Harivaṃśa ヴィシュヌの系譜）は、題名の示すとおりヴィシュヌ神が人間としてこの世に姿を現わした存在であるクリシュナ Kṛṣṇa について、その誕生、少年時代、英雄的な行為、牧人たちとの交渉などを描いたものであり、ヒンドゥー教徒の信仰にとって重要な書物であるばかりではなく、クリシュナ伝説の最大の資料でもある。クリシュナと悪王カンサとの対決、牧人ナンダとその妻ヤショーダーとの人間的なまじわり、クリシュナと牧女（ゴーピー）たちとの恋愛物語、とくに牧人の妻であったルクミニーの掠奪物語、インドラとクリシュナとの戦闘などは、現在でも広く知られている物語である。

『マハーバーラタ』と並び称される国民的な大叙事詩『ラ

ーマーヤナ』は、コーサラの王子ラーマが、ランカー島の魔王ラーヴァナに誘拐された妻シーターを救出するために魔王の居城に遠征し、猿の勇士ハヌマーンたちの助力によってラーヴァナを倒してシーターを救出するという物語を中心とする叙事詩である。全七編、約二万四〇〇〇の詩句からなるこの叙事詩は、伝承の上からはヴァールミーキ Vālmiki の編纂したものといわれ、ヴァールミーキは「最初の詩人」（Ādikavi）、『ラーマーヤナ』は「最初の芸術詩」（Ādikāvya）と呼ばれる。

『ラーマーヤナ』の主題は、『マハーバーラタ』に比べて一層ポピュラーであり、そこに登場する人物・動物は現在でもインドの民衆の人気者である。古い時代から今日にいたるまで、インドの民衆にとって、ラーマは最高の英雄、シーターは理想の女性であり、それを助けるハヌマット（ハヌマーン）は正義の味方である。叙事詩の神話においては、この国民的英雄ラーマもヴィシュヌ神の化身であるとされる。このようにして『ラーマーヤナ』の物語はヒンドゥーの神話・伝説の中核の一部を形成するものとなっていくのである。

二大叙事詩とならんでヒンドゥー教の聖典、したがってヒンドゥー神話の一大宝庫となっているものにプラーナ Purāṇa と呼ばれる文献群がある。プラーナとは「古い物語」（purāṇam ākhyānam）の意味で、創造（sarga）・再創造（pratisarga）・系譜（vaṃśa）・マヌの劫期（manvantara）・王朝の歴史（vaṃśānucarita）という五つの主題をもつといわれる。現存するプラーナがすべてこの五つの主題の全部を含んでいるわけではなく、その一部分しか述べてはおらず、そのほかの神話・伝説・宗教・祭式などの記述に多くのページを費やしているものも少なくない。一般に「十八プラーナ」といって一八種のプラーナを一まとめにしてマハープラーナ Mahāpurāṇa といい、それらのマハープラーナの補遺として扱われるものをウパプラーナ Upapurāṇa という。マハープラーナには『シャイヴァ・プラーナ』Śaivapurāṇa、『バーガヴァタ・プラーナ』Bhāgavatapurāṇa などのように、シヴァ派、ヴィシュヌ派の立場を明らかにする名称のもの、『ヴァーラーハ・プラーナ』Vārāhapurāṇa、『カウルマ・プラーナ』Kaurmapurāṇa、『マーツヤ・プラーナ』Mātsyapurāṇa のようにヴィシュヌの野猪・亀・魚としての化身名をもつもの、『ラインガ・プラーナ』Laiṅgapurāṇa のようにシヴァ神の別名（ここではリンガとしてのシヴァ神）をその名とするものなどがある。いずれもヴィシュヌ、シヴァ両神による天地創造を神話的に描き、さまざまな物語を通してヴィシュヌ・シヴァ両神の偉大さが語られている。また、『ブラフマヴァイヴァルタ・プラーナ』

Brahmavaivartapurāṇa、『ブラフマ・プラーナ』Brahmapurāṇa のようにブラフマー神の世界創造を説くものもあるが、実際は神話の中ではヴィシュヌ（クリシュナ）やシヴァ神が中心となっていることが多い。

古代の聖仙マールカンデーヤの名をとった『マールカンデーヤ・プラーナ』Mārkaṇḍeyapurāṇa は全プラーナ中で最古のものの一つといわれ、古来のインドラとブラフマーとがヴィシュヌ・シヴァ両神の上に立つ神話をもっているが、後世に加えられた「デーヴィーマハートミヤ」Devīmāhātmya（女神の偉大さ）という部分ではシヴァの神妃ドゥルガーを讃美しており、この部分は女神崇拝の根本聖典とされた。

このようにプラーナ文献では、ヒンドゥー教の三大神といわれるブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三神が説かれるが、その神話の中では何といってもヴィシュヌ、シヴァの両神が圧倒的な力をもっている。しかも、この両神の地位も、それぞれの神話によって、並列的だったり、シヴァがヴィシュヌの上に立ったり、その反対であったりする。このことは、それぞれのプラーナの宗派性によるのはもちろんであるが、その神話を作りあげた作者の信仰的な立場によるといってよいであろう。

インドの神話・伝説の特色　一口にインドの神話・伝説といっても、それは長いあいだに形成され、しかもさまざまな地域的な特性をもったものであり、これを限られたスペースで紹介することはきわめて困難であるが、ここでは便宜上、ヴェーダ系の神話・伝説、すなわちバラモン教の神々の世界と、叙事詩プラーナの神話・伝説、すなわちヒンドゥー教のそれとに分けて概説した。個々の神話に登場する神々や英雄たちについては本文にゆずることにして、最後にインドの神話・伝説の特色をまとめておくことにしよう。

インドの神話・伝説の基本的な性格は、まず何といってもそれがヒンドゥー教の実際の信仰と密接な関係にあるということである。神話がただ過去を語るものとしてあるのではなく、信仰的なものとして現在も人々の生活を支配し、心を支えるものとして機能している点は注目に値する。

つぎにあげられるのは、インド神話の土台となったヴェーダの神々が基本的には自然の諸現象やエネルギーを神格化した自然神であり、この性格がヒンドゥー教の神々にも大きな影響を与えているということである。ヒンドゥー教神話のヴィシュヌ神もシヴァ神も崇高な神々ではあるが、その至高さのゆえに動きをもたないという存在ではなく、ヴェーダの太陽神、暴風神の後裔としてあくまでもアクテ

ィヴであり、活動的である。このことはヒンドゥー教の神像の活動的な姿、ナタラージャ（踊りの主）としてのシヴァ神像、アスラを殺す姿のドゥルガー女神像などによく示されている。このようなヒンドゥーの神々の本来的な活動性が、とほうもない広がりと深さをもつインドの神話・伝説の基本的な性格を決定したといってよいと思われる。

第三にあげられる特色は、神話・伝説に登場する神々のランキングの問題である。ヴェーダの宗教が多神教であることについてはすでに述べたとおりであるが、この多神教的な性格がヒンドゥーの神話においても底流となっている点を見落してはならないであろう。ヴェーダの神話においては、もっとも多くの讃歌をささげられているインドラ神が他の神々に比べて有力であるように見えるが、このインドラ神も他の神々の上に立つ最高神というのではなく、ある神話ではアグニ神が有力であり、他のところでは別の神が中心となっている。叙事詩やプラーナの神話ではヒンドゥー教の三大神といわれるブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三神が最も有力であり、とくにヴィシュヌ、シヴァの両神が熱烈な信仰の対象となっているが、この両神のあいだの関係は文献により、あるいはそれぞれの神話によってさまざまに扱われる。ある神話においてはヴィシュヌ神が最高の地位に置かれているが、別の物語の中ではシヴァ神が優位に立ち、ヴィシュヌはシヴァ神を讃美するものとして描かれていたりする。女神神話においても、ドゥルガーやカーリーはシヴァの神妃としての地位よりも、マハーデーヴィー（大女神）としての独自な役割を果しているといってよいであろう。つまり、ヒンドゥー神話においては、ヴィシュヌ、あるいはシヴァを最高神としながらも、それらの神を頂点とした階級組織（hierarchy）をつくりあげようとする意図は希薄である。このことがそれぞれの神話に豊かな個性を与える原因となったと考えられるが、また反面その同じことが、神話の内容を複雑にし、私たちの理解を困難にさせていることも認めざるを得ないであろう。

次に、神々の性格ということを離れて、個々の神話にあらわれた特色について考えてみよう。神々や聖仙の物語の中で、重要な役割をもっているものに祭祀と修行（苦行）がある。祭祀を行なうということはヴェーダ以来の伝統で、普通の場合、犠牲の供物をささげて神を祀る供犠祭（yajña）が行なわれる。クシャトリヤ（王族階級）が登場する物語によく出てくるのはアシュヴァメーダ（馬祀祭）と呼ばれる祭祀である。これは王が即位する時に行なわれるものであるが、王位を継ぐ息子がないときにも行なわれる。叙事詩の神話・伝説では後者の場合が多く、『ラーマーヤナ』の物語の発端となるラーマ王子の誕生も、父のアヨーディヤ

ー王ダシャラタの馬祀祭によるのである。

苦行（tapas）もインドの伝統的な修行の方法であり、純粋に宗教的な解脱を求めて行なう場合と、ある目的のために実践する場合とがある。ヒマーラヤ山で苦行する行者としてのシヴァ神は前者の意味であるが、叙事詩やプラーナの神話・伝説では後者の場合も多い。後継者の生れることを願って苦行を行なうことも少なくなく、恋愛を成就しようとして苦行を行なうことすらある。いずれにせよ、苦行を行なうことによって得られる成果はきわめて大きく、ある聖仙が苦行によって神々をもしのぐほどの力を身につけたために天上の神々はあわてふためき、天の精女アプサラスをつかわしてその聖仙を誘惑させ、苦行を中断させた話もある。

このように祭祀と苦行は神話・伝説の物語の中で重要な意味をもっており、祭祀や苦行に専心しているとき、これを妨害され、中断されることは極度にきらわれる。夫が苦行にしたがっているとき、たとえ妻であってもそれを妨げ、精神の集中を乱すことは許されない。苦行にうちこんでいて妻をかえりみないというテーマはシヴァとパールヴァティー、ウッダーラカ仙の弟子で師の娘を妻としたカホーダ仙などの物語の中に語られている。とくにシヴァ神の心をパールヴァティーに向けようとした愛の神カーマは、キューピッドの矢をシヴァ神に射込もうとしたとき、シヴァ神から発射された熱線によって焼き殺されたという。このような祭祀・苦行にたいする見方はインドの宗教独特のものであり、このテーマはヒンドゥー神話の大きな特色となっている。

祭祀・苦行の目的としてもあげられているように、古代のインドにおいては、家系を継ぐべき子孫をもうけるということは社会的な義務であった。それは法典の定めるところであり、神話・伝説においても重要なテーマの一つとなっている。『マハーバーラタ』の物語のはじめにも、クル族の血筋を絶やさないということが大きなテーマとして扱われているところがある。『マハーバーラタ』初編によれば、クル族の王シャーンタヌの妻サティヤヴァティーは、息子のヴィチトラヴィーリヤが子供をもうけないままで世を去ると、クル族の血を絶やすまいとして息子の二人の未亡人と別の息子ヴィヤーサとを無理やりに交わらせ、その結果として盲目のドリタラーシュトラと青い顔色のパーンドゥが生れたという。これはヒンドゥーの慣習の一つでニヨーガ婚といわれるが、ドリタラーシュトラ、パーンドゥ両王の子孫たちが二大陣営に分かれて凄惨な闘いをくりひろげるバーラタ戦争の惨劇の前ぶれともいうべき印象を私たちに与える物語である。

最後に、ヒンドゥーの神話・伝説にあらわされる呪詛・呪いという観念についてふれておきたい。叙事詩やプラーナの神話のなかでは、呪詛によって獣の姿にされたとか、呪いによって曲がった身体にさせられたというたぐいの物語はめずらしいものではない。侮辱されたとき、理不尽な仕打ちを受けたとき、人々は相手を呪い、呪詛の言葉をあびせかける。神話・伝説の中では、呪詛はきまって効果をあらわし、呪いをかけられたものはそれを甘受しなければならないが、反対に呪いをかけ返すこともある。『ナラ王物語』のヒロインで貞節な女性の模範とされるダマヤンティーも、悪魔カリの呪詛によって王国も財産も失った夫ナラに見捨てられたとき、悲しみの余りに夫を不幸に落し入れたカリに「夫を不幸に落し入れたものは、夫が受けている苦しみ以上の大きな苦しみを受けるだろう」と呪い、彼女の呪詛によって悪魔カリは次第に力を失っていったといわれる。このような物語において見るかぎり、呪い（śapa, abhiśāpa）とは、人間の切なる願い、情念の最終的な表現であるかのように思われる。

人間の情念の激しさ・悲しさということも、叙事詩、プラーナの物語の隠れたテーマの一つである。『マハーバーラタ』の大戦争に、シカンディンという名の勇士が登場するが、彼は実はアムバーという女性の生れ変わりであったという。カーシー王の娘のアムバーは、クル族の長老ビーシュマによって婚約者との仲を裂かれ、これを恨みに思って、長いあいだ苦行を続け、ついに生れ変わってシカンディンという男性となり、バラタ族の戦争の中でパーンダヴァの勇士たちの助けをかりてビーシュマを打ち倒す。ここに見られるアムバーの情念はむしろ怨念といってよいほどのすさまじさである。しかも、長老ビーシュマはシカンディンがアムバーの生れ変わりであることを知っていて闘おうとしなかったと叙事詩は語っているのであり、人間の喜びも悲しみも、幸も不幸も、輪廻という大きなサイクルの中に包み込んでしまうところに、インド神話・伝説の最大の特色があるといってよいであろう。

インド神話伝説辞典

ア行

アイラーヴァタ Airāvata インドラ神の乗っている白象。巨大な身体で四本の牙を持つ。「大海から生れたもの」の意で、アイラーヴァナとも呼ばれる。神々が不死の霊水を求めて大海をかき回した時に生れたので、このようにいわれる。『リグ・ヴェーダ』などの古い文献にはアイラーヴァタの名は見えないが、プラーナ文献によれば人類最初の王とされるプリトゥによって、インドラが神々の王に、ガルダが鳥の王に任じられた。この時また、アイラーヴァタも象の王にされたという（『ヴィシュヌ・プラーナ』一・二二）。



アイラーヴァタに乗るインドラ神

象は太初においては翼を持っていて自由に天空を飛んでいたが、ある時、聖仙が説法している木の上に降り、その木の枝が折れた。怒った聖仙はすべての象に呪いをかけ、翼を取り上げて飛べないようにしてしまったという。しかし、象は雲を生み出す力を持つものとされ、インドラがアイラーヴァタに乗って雨を降らせるといわれる（『マハーバーラタ』戦争準備編）。

ヒンドゥー神話では八方を守護する八神はそれぞれ象に乗るとされ、東方を守る守護神としてのインドラの乗るアイラーヴァタも世界を支えるものとされる（同、ドローナ編、ビーシュマ編）。

（別名）アブラマータンガ（雲の象）、アルカソーダラ（太陽の兄弟）、ナーガマッラ（象の力士）、サダーダーナ（発情しているもの）、マダームバラ（発情しているもの）など。

→インドラ

アヴァンティー Avantī あるいはアヴァンティカーともいい、七大聖都の一つであるウッジャイニーのこと。

アウルヴァ Aurva ウールヴァの子孫と呼ばれる聖仙。聖仙ブリグの七人の子（チャヴァナ、ヴァジュラシールシャ、シュチ、アウルヴァ、シュクラ、ヴァレーニャ、サヴァナ）の一人であることから、バールガヴァ（ブリグの子孫）とも呼ばれる。

『ハリヴァンシャ』ではアウルヴァ仙の子孫についての次のような伝説を伝えている。アウルヴァは友から子供を

もうけるように勧められたとき、自分の子孫は他のものを破壊することによって生きながらえるだろうと予言した。彼は自分の大腿（ウール）から猛火を生み出したところ、その猛火は「腹がへった。この世界を食い尽したい（焼き尽したい）」と大声で叫んだ。すると、たちまち諸地域が猛火につつまれた。その時、ブラフマー神は世界の創造を中断し、アウルヴァの子供（猛火）に快適な住居を与え保護することを約束した。その住居はヴァダヴァー・ムカ（「雌馬の口」、「海底の火」を意味する）にあった。ブラフマー神は大海の中で生れ、そこに住んでいるからである。そこで、彼と新たに生れた火とは、世界の終わりの時に、ともに神々やアスラやラークシャサをともなった世界のすべてを焼き尽くしてしまうことになるのである。このため、アウルヴァという名称は端的にいえば海底の火を意味するのであるとい伝えられている。→ブラフマー

アガスティヤ　Agastya　アガスティともいい、『リグ・ヴェーダ』（一・一六五）に登場する聖仙。ヴァシシュタとともに、ミトラとヴァルナの子。彼らが美しい暁の女神ウルヴァシーを見た時アガスティヤとなる精子が出されたという。水がめの中で生れたことから、カラシスタ（水がめの子）、クムバサムバヴァ（水がめの中で生れたもの）、ガトーッドバヴァ（つぼの中で生れたもの）と呼ばれる。また、その家柄からマイトラー・ヴァルニ（ミトラとヴァルナの子）とも呼ばれ、ヴィンディヤ山を倒したという伝説によってヴィンディヤクータ（ヴィンディヤ山を悩ますもの）ともいわれる。また、大海を飲みほしたという言い伝えによりピーターブディ（大海を飲むもの）、サムドラ・チュルカ（口で大海を保持しているもの）とも呼ばれる。

『リグ・ヴェーダ』においては、アガスティヤは大仙ブリグの家系には属さず、七大聖仙の中にも含まれないが、インドラとマルト神群とのあいだに起こった不和を調停する役割を果している（一・一六五、一・一七〇、一・一七一）。アガスティヤ仙がもともとマルト神群のために用意した祭式にインドラ神が先に到着したため、それに遅れて空中に姿を現わしたマルト神群とのあいだに、言葉のうえで激しいやりとりが行なわれる。両者のあいだに立ったアガスティヤ仙は主としてマルト神群に対して「この頂礼（ちょうらい）をもちてわれは汝らに向こう。讃歌をもちて勇敢なる（汝ら）の好意を乞う。心喜ばしく、マルト神群よ、理解によりて怒りを棄てよ。馬を車より解け。頂礼を伴うこの讃頌は、マルト神群よ、心を込め意を込めて作られ、汝らに捧げられたり。神群よ、意により満足してそれに近づき来たれ。何となれば汝らは頂礼の増進者なれば。」（『リグ・ヴェーダ』一・一七一・一―二、辻直四郎訳）などの讃歌を捧げ、ついに両者を和解させる。『リグ・ヴェーダ』のアガスティヤ仙はプラーナ文献や叙事詩でも讃嘆を受けた。『マハーバーラタ』には、アガスティヤがその妻を創造したという伝説が記されている。

ある時、アガスティヤは自分の祖先たちが穴の中に逆さにつるされているのを見た。聞けば、彼らはアガスティヤが息子をもうけることによってのみ救い出されるという。そこで、彼はさまざまな動物の最も美しい部分から一人の少女を作り出して、ひそかにヴィダルバ王の宮殿に連れて行った。この少女は、鹿の眼などの動物の美しい部分を奪い、動物に損傷を与えることによって作られたことからローパームドラー（損傷を印とする女性）と呼ばれ、また父系によってカウシータキーとも、あるいはヴァラプラダー（恩恵を与えるもの）とも呼ばれる。ヴィダルバ王の宮殿で王の娘として育てられたローパームドラーは、成人ののちアガスティヤの求めに応じて彼の妻となった。彼はまた、超人的な力を表わして、ナフシャ王を蛇の姿に変えたり、元に戻したりしたことが語られている。

『ラーマーヤナ』でも、アガスティヤは目立った聖仙として扱われている。彼はヴィンディヤ山の南側の美しい国にあるクンジャラ山に庵を作って住み、南方諸国の聖仙の長であった。彼は南方諸国を荒し回っていたラークシャサ（羅刹）を支配下においたので、その地方はよく治まっていた。とくに、雄羊の姿をしたヴァーターピというラークシャサを食べてしまったこと、自分の眼の光でラークシャサの兄弟イルヴァラを殺したことは有名である。

アヨーディヤーの王子であったラーマが宮殿を追われて妻シーターと弟ラクシュマナとともに流浪の旅を続けるうちに、アガスティヤの庵にたどり着いた。彼は礼儀を尽してラーマを迎え入れ、その良き助言者となり、友人となって保護した。やがてラーマがアヨーディヤーに戻った時、彼もそれに従ったという。伝説の上で、アガスティヤ仙の活躍の場はヴィンディヤ山脈の南とされるように、彼は南インドでは今でも尊崇を受けており、南インドのタミール人たちにはアガスティヤが現在でも聖なる山アガスティヤ・マライ（アガスティヤの山）に住んでいると信じられ、また、南インドの夜空で最も明るく輝いているアルゴ座の一等星（Lanopus）と同一視されている。インド本土のみならず、アガスティヤはジャワ、カンボジヤ、ボルネオなどの諸地方でもそれぞれの神話体系に組み入れられて、高い地位を与えられている。→マルト、ナフシャ

アガースラ　Aghāsura　アガという名のアスラ Agha-asura の意で、アジャガラという巨大な蛇の姿をしてクリシュナとその仲間たちを呑みこもうとするアスラであり、

悪王カンサの将軍とされる。このアスラの巨大な口は洞窟の入口のようだったので、クリシュナの仲間たちと家畜はその中に入ってしまったが、クリシュナはこれを知って彼らを救い出し、ついにアガースラを倒したと伝えられる(『バーガヴァタ・プラーナ』一〇・一二)。

アクシャ Akṣa 『ラーマーヤナ』に登場するランカーの魔王ラーヴァナの長子。一打で八〇〇〇人を倒したといわれる猿の英雄ハヌマーンによって殺された。

アークーティ Ākūti 「意志・意向」の意味で、スヴァヤムブヴァ・マヌとシャタルーパーとのあいだの娘として神格化された神。ルチの妻となって、双生児であるヤジュニャ(祭祀)とダクシナー(祭祀の供物)を生んだ。この神話はバラモンが祭祀を行なう場合に、祭祀と供物が不可分のものであることを示しているといわれる。

アグニ Agni 『リグ・ヴェーダ』の火神。アグニは普通名詞の火であり、ラテン語 ignis(火)と同じ語源である。原始インド・ヨーロッパ人は火を家庭生活の中心である「炉の火」として神聖視し、これに悪魔を除く力を認めて、その中に供物を投入したと考えられている(辻直四郎著『インド文明の曙』五九ページ)。インド・イラン共同時代には火は強力、清浄、賢名な神格として盛んに崇拝されるようになり、次いでインドにおいてはアグニ、イランにおいてはアータルとして信奉されるようになった。



火の神アグニ

『リグ・ヴェーダ』全篇の約五分の一がアグニに捧げられた讃歌で、数からすればインドラに次いで第二位。アグニは火神であるとともに火そのものであり、天において太陽として輝く火、電光としてきらめく火、祭火として燃える火、これらはすべてアグニである。『リグ・ヴェーダ』に描かれているアグニは、主として祭場で燃える火のありさまになぞらえられており、黄金の顎と歯を持ち、頭髪は炎で、三枚または七枚の舌を持っていて、祭祀において火の中に投げ入れられた供物を味わうといわれる。アグニの食物は火の中に捧げられる供物であり、グリタ(バター)を好み、ソーマ酒を飲む。また、

牡牛、仔牛、牡馬、鳥とも呼ばれる。彼はまた、天地の子といわれ、輝く車に乗って天界をかけめぐり、暗黒を追い払う。天地両界に属することによって、二重の出生をもつものといわれ、水(天上の水、空中の雨、地界の水)とも結びついていて、水から生れた水の子ともいわれる。火は二個の木片(アラニ)、あるいは石片をこすり合わせて作り出すところから、木や植物、岩や石もアグニの出生の場所とされ、とくにアラニにより火を作り出す作法は祭式の重要な要素とされた。アグニは、このほか人間の身体のなかでは消化の火、忿怒の火、思想の火である。『リグ・ヴェーダ』の讃歌の中では、アグニの偉大性と浄化が常に強調され、天則(リタ)を犯すものや悪魔などを容赦なく絶滅させる反面、一般には恩恵に富み、信じるものを保護し、家庭の繁栄をはかり、子孫、家畜を与えるものとして描かれている。万人に共通する普遍の火を意味する場合はアグニ・ヴァイシュヴァーナラという。

「広き胸郭を持つアグニ・ヴァイシュヴァーナラのため、人々は霊感の言葉を宝玉(真珠)として奉呈す、(天則の)根底に達せんがために。何となればアグニは不死にして神々を敬えばなり。しかして彼は古くより、かつて規範を犯したることなし(三・三・一)。驚歎すべき(神)は、使者として天地両界のあいだを往来す。ホートリ祭官として座を占め、マヌス(人間の祖先)の司祭官として。アグニは日々高き住居(祭場の火炉)を心して護る、神々により励まされ、詩想に富みて(一二)。(金色に)輝き、(金色に)輝く車に駕し、常に黄金色を帯ぶるアグニ、水中に坐し、(人間のために)太陽を発見するヴァイシュヴァーナラ、深く沈潜し、(障碍を)克服し、威力に蔽われ、激烈にしていとも華麗なる彼を、神々はここに(地上に)安置せり(五)。」(辻直四郎訳)

後世のプラーナの伝承によれば、アグニの家系はヴィシュヌ—ブラフマー—アンギラス—ブリハスパティ—アグニと続くと説かれる。もはや『リグ・ヴェーダ』におけるような高い位の神格ではないが、プラーナや叙事詩でもアグニはしばしば登場する。『マハーバーラタ』では、アグニが消化不良を起こし、それを治すためにカーンダヴァの森を焼き払った話がよく知られている。

昔、シュヴェータキンという名の勇敢な王がいた。彼は信心深く、さまざまな祭祀を熱心に行なったので、祀堂の中は祭火の濃い煙でいっぱいになり、中にいた苦行者たちはたまらなくなって逃げ出してしまった。シュヴェータキン王はこれに懲りることなく、一二年間にわたる別の祭祀を始めたが、一人の聖者も参加しなかった。聖者たちは王を非難し、もしもう一度祭祀を始めたかったらシュードラに手

伝ってもらうようにと言った（ヒンドゥー社会ではカーストの最も下のシュードラは祭祀にタッチすることは許されない）。この侮辱に腹を立てた王はカイラーサ山へ行って激しい苦行を行なった。すると、シヴァ神が彼の前に現われ、その祭祀を助けるためにドゥルヴァーサスという僧を彼に与えた。そこで、一二年のあいだ、ドゥルヴァーサスは祭祀を行ない、アグニの口の中に絶え間なく供物の食物を投げ入れた。そのためにアグニは食べ過ぎてしまい、消化不良を起こして、輝いていた顔色も衰えて見えるようになった。しばらくのあいだ消化不良が続いたため、アグニはブラフマー神に治療を頼んだ。するとブラフマー神は、もし、神々の敵の住むカーンダヴァの森を焼き払うことができたら、消化不良を治してあげようと言った。アグニはすぐに森を焼き始めたが、森に住む者たちが火を消してしまった。落胆したアグニが再びブラフマー神のところに行くと、ナラ・ナーラーヤナが到来するまで待つようにとのことであった。アグニは彼らの到来を待つことにした。その時、パーンドゥの人々（パーンダヴァ）がクリシュナと一緒にインドラプラスタの町に住んでいた。暑さが耐え難くなった時、アルジュナとクリシュナはヤムナー河の岸辺にやって来た。アグニは、クリシュナとアルジュナが到着したことを聞き、この二人こそナーラーヤナとナラの化身であることを知って、一人のバラモンに変装して彼らに近づき、カーンダヴァの森を焼き払うのを助けてくれるよう頼んだ。どんな方法で森を焼こうとしても、この森に住んでいる親友タクシャカを助けようとしてインドラがどしゃ降りの雨を降らすので火が消えてしまうということもつけ加えた。この願いを聞いてもらうために、アグニはアルジュナには決して空にならない矢のケース、金の鎖で飾った四頭の白い馬、それに名弓ガーンディーヴァを贈り、クリシュナには神の武器チャクラーユダを与えた（これら全ては、かつてヴァルナがアグニに与えたものである）。アグニの願いは聞きとどけられ、クリシュナとアルジュナはアグニが森を焼くのを助けることになった。喜び勇んでアグニは森に火をかけ、インドラが豪雨を降らせると天蓋を作ってこれを防ぎ、ついにカーンダヴァの森を焼き尽した。このようにして、アグニの消化不良は全快した（初編）。

ある時、アンギラスが自分のアーシュラマ（修行道場）で激しい苦行をした結果、アグニよりもはるかに輝かしいものとなった。彼の輝かしさの前では、全世界が色あせてしまうほどであった。アグニはすっかり意気消沈してしまい、ブラフマー神に自分よりアンギラスを輝かしくするのは不当だと言い、これに抗議して世界から身を隠してしまった。さすがにアンギラスも心配になり、彼を見つけ出し

てブラフマー神のもとに連れて行った。そこで、ブラフマー神は「これより、世間の人々はアグニを父、アンギラスを息子であると認めるように」と宣言した。このようにして、アグニは再び最も輝かしいものという地位を取り戻した（森林編）。また、『ラーマーヤナ』にもアグニに関する物語が記されている。

聖者ヴィシュヴァーミトラは森へ帰る道すがらラーマとその弟ラクシュマナに出会ってシッダーアーシュラマに連れて行った。聖者はアーシュラマ（修行道場）の重要なことを二人の王子に説いて、次のように語った。ヴィシュヌがこのアーシュラマに長いあいだ住んでいた。ヴィローチャナの子でアスラの王であるマハーバリが神々をも支配していたのは、ちょうどその時であった。三界のすべてのものを征服し終って、魔王マハーバリは供犠を行なおうとした。そこで、アグニを首とする神々の代表がヴィシュヌのところに行き、「供犠が行なわれる前に、神々に対して恩恵を与えて下さい」と頼んだ。このようなアグニの要請によって、ヴィシュヌはヴァーマナ（ヴィシュヌ神の第五の権化、「倭人」）の姿となってマハーバリを地獄に送った（少年編）。

このほか、叙事詩やプラーナでは、アグニの妻スヴァーハーデーヴィーが、ダークシナム、ガールハパティヤム、アーハヴァニーヤムという三人の息子を産んだこと、あるいは、パーヴァカ、パヴァマーナ、シュチという三人の息子をもうけたこと、ニーラという猿が彼から生れたこと、偉大なる弓の名手ドリシュタディユムナ、スブラフマニヤ、聖者ブリグが彼から生れたことなど、ほとんど無数といってよいほどのアグニ物語が語られている。しかし、これらの叙事詩やプラーナに起源をもつヒンドゥー教神話においては、アグニにはヴェーダ時代の地位はなく、わずかに一守護神としての地位を保つだけである。すなわち、東の方角をインドラが守護し、アグニが南東、ヤマが南、ニルリッティが南西、ヴァルナが西、ヴァーユが北西、クベーラが北、シヴァが北東を守護する場合で、アグニはテージョーヴァティー（輝きに充ちたところ）と呼ばれる見張所に坐っているだけである。

ヒンドゥーの神像に表わされたアグニは、肥え太り、赤い身体で、牡羊に乗っている。

仏教に取り入れられたアグニは、十二天の一つとなり、火天（または火仙、火神、火光尊）として守護神の役割を果している。青羊に乗り、仙人形で表わされ、とくに密教で重んじられている。→カーンダヴァ、クリシュナ

アーグネーヤ **Āgneya**　アグニ、あるいは、その妻アグナーイーに属するものの意で、アグニ神の子の軍神スカ

ンダのこと。または、聖仙アガスティヤの通称。

アクルーラ Akrūra クリシュナの出身部族であるヤーダヴァ族の王子。クリシュナの伯父。ヴリシュニ王朝のシュヴァパルカと、カーシー王の娘ガーンディニーとのあいだに生れた。プラーナ文献では主としてクリシュナ伝説の中で説かれ、悪王カンサがバララーマとクリシュナを殺そうとしてチャーパプージャーと呼ばれる祭を行ない、これにクリシュナ兄弟を呼び寄せる使者としてアクルーラを遣わした。アクルーラはこの陰謀に気づいて、かえってクリシュナにカンサを殺すよう忠告した（『スカンダ・プラーナ』『バーガヴァタ・プラーナ』）。また、クリシュナの使者として首都ハスティナープラに行ったこともある。アーフカの娘スタナーを妻とし、デーヴァカ、ウパデーヴァカの二子をもうけた。→ヤーダヴァ

アゴーラ Aghora シヴァ神の別名。「恐れさせることのないもの・恐ろしくないもの」の意味で、シヴァ神の破壊・殺戮の力を慰撫するために用いられた言葉。

アジャ Aja 「生れないもの・不生」の意で、さまざまな神々・動物などの名称として用いられる。

㈠『リグ・ヴェーダ』の神格プーシャンに捧げられた雄山羊（一・一三八）。

㈡月種族の王。ヴィシュヌを祖先とするラグの子で、アジャの子がアヨーディヤーの王ダシャラタ、その子が『ラーマーヤナ』の英雄ラーマである。

㈢聖仙の名（『マハーバーラタ』静寂編）。

㈣ジャフヌ王の子。その子がウシカ王で、彼が子供を欲しいと思ってインドラ神に祈ったところ、インドラ神自身がその子供として生れた。その名をガーディといい、このガーディの娘サティヤヴァティーがリチーカと結婚して生れたのがジャマダグニで、その子がパラシュラーマであるという（『マハーバーラタ』静寂編）。

㈤このほか、インドラ、ルドラ、マルト神群中の一神、アグニ、ブラフマー、シヴァ、カーマなどの諸神の別名として、また聖仙の名称（『マハーバーラタ』）として用いられる。複数形で非アーリヤ系と想定される部族を指すこともあり（『リグ・ヴェーダ』一・一一八）、天文学ではアジャは白羊宮（Aries）を指している。

アジャータシャトル Ajātaśatru 「その敵が生れない人」の意で、㈠カーシー王の名。彼はクシャトリヤであったが、バラモンのガールギャバーラーキにアートマンについて説いたといわれる。

㈡シヴァ神の別名。

㈢パーンドゥ王の長子ユディシュティラの別名。

㈣ブッダの時代のマガダ国王。仏教を信ずる父王ビンビ

サーラを幽閉した物語は王舎城の悲劇として知られる。

アシュヴァッタ Aśvattha アシュヴァパーダともいい、天上に根を持ち、永遠の生命をもつといわれる聖樹（『カタ・ウパニシャッド』六・一）。その果実をピッパラということによってピッパラ樹とも呼ばれ、その木の下で仏陀がさとりを開いたということから菩提樹（ぼだいじゅ）とも名づけられる。学名は Ficus religiosa Linn. といい、クワ科の植物で、和名はインドボダイジュ（日本で「ボダイジュ」と呼ばれるものはシナノキ科の植物で、インドボダイジュとは別種）。長寿の樹として知られ、スリーランカーのアヌラーダプラの聖地にあるスリー・マハー菩提樹と呼ばれる樹は紀元前二八八年にアショーカ王の王女サンガミッターによってこの島に運ばれたといわれる。

ヒンドゥー教徒にとって古くから最も神聖な樹の一つとみなされて、シヴァ神ともクリシュナ神とも深い関係をもつ樹といわれる。クリシュナは牧人ナンダのもとで育てられたが、成長すると牧女たちとたわむれ、水浴中の牧女（ゴーピー）たちの衣類を盗み、それを持ってアシュヴァッタの樹に登ってしまったという。アシュヴァッタの葉はつねにさらさらと静かな音を立てているが、これは風によるのではなく、ヤクシャやキンナラやガンダルヴァなどによる音であると信じられている。この樹は、また、ヴィシュヌの妻ラクシュミーの住む樹とされ、ラクシュミーを祀る行事にかかわりをもっている。仏陀がこの樹の下で成道したという伝説から、仏教徒にとっても最も神聖な樹とみなされ、成道の地ブッダガヤーには菩提樹が植えられて、その下には金剛宝座が置かれている。

このようにアシュヴァッタ樹（ピッパラ樹、菩提樹）はすべてのインド人によって神聖視されており、スリーランカー、ネパールなどインドの宗教文化の及ぶところは同様である。ネパールのヒマラヤ山中の聖地ムクティナートには、アシュヴァッタ樹の大きな森があり、ヒンドゥー教徒、仏教徒、ポン教徒共通の巡礼地となっている。



アシュヴァッタの葉の上で遊ぶクリシュナ

アシュヴァッターマン　Aśvatthāman　『マハーバーラタ』に登場する勇士の一人。クル族が二つに分かれて戦った時、カウラヴァ軍の軍師となったドローナとその妻クリパーとのあいだに生れた子。彼が生れた時、大きな声で泣き、その声は馬の鳴き声に似ていたので、アシュヴァッターマン（「馬のいななき」の意）という名をつけられた（初編）。父親の名から、ドラウナーヤナとも呼ばれ、また、アーチャーリヤナンダナ、アーチャーリヤプトラ、アーチャーリヤスタ、アーチャーリヤサッタマ、ドローナプトラ、グルプトラ、バーラターチャーリヤなどの別名で呼ばれることもある。彼は父ドローナから弓術をはじめとする武術・軍略を学び、父に従ってクル族の大戦争に参加した。彼はカウラヴァ軍側に立って、ニーラ、アンジャナパルヴァー、スラタ、シャトルンジャヤ、バラーニーカ、ジャヤーニーカ、ジャヤーシュヴァ、スルターシュヴァ、ヘーママーリー、ヴリシャダラ、チャンドラセーナ、クンティボージャの一〇人の子、スダルシャナ、ヴリッダクシェートラ、チェーディラージャ、マラヤドヴァジャ、アビマニユ、シカンディン、ヴィラータ、サーティヤキなどの勇士や王たちと闘って彼らを倒した。カウラヴァ軍の敗色が濃くなった時、ドゥリヨーダナ王によってカウラヴァ軍の総司令官に任命されたこともある。『マハーバーラタ』においては、アシュヴァッターマンは父ドローナに次ぐ軍師・勇士として描かれており、パーンドゥ軍のアルジュナに匹敵する勇者として、多くの説話の主人公となっている。

マラヤーラム語で伝えられている『マハーバーラタ』では、アシュヴァッターマンが幽鬼を見たことが語られている。この戦いで八五歳になる父ドローナがパンチャーラ王の子ドリシュタディユムナに殺された時、怒り心頭に発したアシュヴァッターマンは、クリパとサートヴァタを従えてパーンドゥの陣地に急行した。彼はその敵軍の陣地の門のところで、幽鬼が立っているのを見た。それは血にまみれ、腰には虎の皮をまとってその上に蛇を巻きつけ、上半身には鹿の皮を着けた巨大な幽鬼であった。その身体からは無数の手が出ていて、それぞれに恐ろしい武器をもち、目と鼻と口から炎を吐き出しながら、アシュヴァッターマンの行く手をさえぎった。彼は父から習った得意の弓術で矢を射かけたが、幽鬼は魔力によってその矢をすべて払い落してしまった。絶望した彼がシヴァ神に祈りを捧げると、シヴァ神は人間の姿をして彼の前に現われ、彼に神聖な短剣を与えた。このシヴァ神の助けによって、幽鬼を倒して彼はドリシュタディユムナの寝室に入り込み、寝ている敵王を殺し、父ドローナの仇を討つことができた。

『マハーバーラタ』の第一〇編「夜間襲撃編」では、ド

リシュタディユムナを殺した時のありさまを次のように描いている。父ドローナを殺され、さらにカウラヴァ軍の総帥ドゥリヨーダナが戦いに倒れているのを知ったアシュヴァッターマンは激怒し、復讐の念にもえて、眠らずに戦場からすこし離れた樹の下で夜を過した。その夜中、その樹の上に巣を作って住んでいた鳥たちに、突然、一羽の恐ろしい姿のフクロウが襲って来て眠っている鳥たちを皆殺しにしてしまった。これを見て、彼は眠っている敵を襲って皆殺しにするという計画を思いつき、そばに眠っていたクリパとクリパヴァルマンの二人の勇士を揺り起こして自分の計画を告げた。クリパは眠っていて無抵抗なものを殺すのはよいことではないといって思いとどまらせようとしたが、彼は復讐のためにはどんな方法をとることもいとわない、たとえそのために来世は虫けらに生れ変わろうともかまわない、と決心して戦車で敵陣に乗りつけた。他の二人の勇士が門のところで見張っているあいだに、彼はドリシュタディユムナの天幕に侵入し、足げにして目をさまさせてから、家畜の首をしめるようにして彼を締め殺した。さらに、次々に眠っている敵の勇士たちを殺して回り、真夜中には敵軍の戦士をことごとく倒した。そのため、人間の死肉を食う鬼神のラークシャサやピシャーチャたちが群をなして集まって来た。このようにして、パーンドゥ軍を殲滅した三人の勇士は、いまにも息を引きとろうとするドゥリヨーダナのもとに急ぎ、敵を倒したことを伝え、ドゥリヨーダナはこの知らせを聞いて満足して息を引きとったのであった。

また、アシュヴァッターマンの頭に生えている宝石の話もよく知られている（夜間襲撃編）。父の仇ドリシュタディユムナを殺してからも彼の怒りはおさまらず、パーンドゥ軍全体を滅ぼそうと思い、父ドローナから授けられていたブラフマシラーストラという名の強力な矢をパーンドゥ陣に射込んだ。しかし、クル族全体の軍師であったドローナは、パーンドゥ側の勇士アルジュナにも同じ武器を与えていたので、両陣営から飛ばされたブラフマシラーストラが空中で衝突した。そこで、両軍の勇士たちが協議して、この武器を引き込めるように頼んだ。その時、アルジュナは、自分の武器を引き込めるかわりアシュヴァッターマンの頭にある宝石をさし出すように要求した。これに対して、アシュヴァッターマンは「自分の頭の上にある宝石はカウラヴァ軍とパーンドゥ軍を合わせたよりも価値のあるものだ。これを身につけたものは、どんな敵にも、災害にも、飢えにも悩まされることはない。この宝石は絶対に手離さない。」といって、その申し出を拒否した。熱心な説得の結果、その宝石を引き渡すことになったのであるが、アシュヴァッ

ターマンは矢を引きあげないで、かえってこの武器をアルジュナの義理の娘ウッタラーの胎内にあるクル族の最後の子に向けた。かつて一人の貧しいバラモンがウッタラーを見て、「カウラヴァ軍が敗れる時、あなたは一人の子供を生むであろう。その子は、胎内にある時に試練を受けなければならず、そのことによって、パリークシット（試みられたもの）と呼ばれるであろう。」といったように、ウッタラーから生れた死児はクリシュナによって生き返らされて、パリークシットと呼ばれた。このことがあった時に、クリシュナは「汝の矢でウッタラーの胎内にある子を殺したとしても、私は必ずその子を生き返らせよう。アシュヴァッターマンよ、汝は、このまだ生れていない子供を殺した罪によって、すべての人々から非難されるであろう。この邪悪な行為によって、三千年のあいだ、すべての人々に嫌われながら、この地上でさまよい歩かねばならないであろう。誰も汝とはまじわろうとせず、あらゆる病苦にさいなまれながら、地上で苦しみ続けるであろう。しかし、いま、汝が殺した子供は有名な学者となり、勇敢な王となり、次のクル族の王となって六〇年のあいだ国を治めるであろう。見よ、私はいま、汝の殺した子に生命を与えようとしているのだ。」とアシュヴァッターマンに語った。彼は、これを聞いて後悔し、不思議な力を持つ宝石をパーンドゥ側に手渡し、森の中に去っていった。↓ドローナ、ドリシュタデュムナ

アシュヴィン双神　Aśvinau　常に両数形で表わされるヴェーダ神話の双神。アシュヴィンは、一般的には「馬（aśva）を持つもの」の意味であるが、『ヴェーダ』の註釈家ヤースカはアシュヴィンを動詞 aś（充ちる、浸透する）に由来するとし、この双神は光と水蒸気で、あらゆるものに浸透することを表わすと解している。また、この双神を天と地、昼と夜、太陽と月、などと説明するものもある。もともとなんらかの自然現象を神格化したものであるが、早くからその関係は不明となったと見られている。『リグ・ヴェーダ』では、アシュヴィン双神に捧げられた讃歌は、インドラ、アグニ、ソーマに次いで多く、五〇篇を越えている。

アシュヴィン双神はインド・ヨーロッパ神話の中においても最も古い神格の一つで、アシュヴィン双神の別名ナーサティヤの名は、西暦前一四世紀の中頃の小アジアのヒッタイト王スピルリウマ（前一三八〇―一三四六）とミタニ王マティワザとのあいだに結ばれた条約の中に、ミトラ、ヴァルナ、インドラとともに現われている（辻直四郎『インド文明の曙』岩波新書、一一八ページ）。このようにアシュヴィン双神はインド人とイラン人が共に住み、共通の言語を用いていた時代に起源をもっているが、インド・アーリヤ族と分化してからイラン人が成立させた『アヴェスター』においては、悪神の列に加えられた。また、ギリシャ・ローマ神話のディオスクロイ（「ゼウスの息子たち」の意で、カストールとポリュデウケースのこと）が、ゼウスによって天上の双生児ジェミニとして星座のなかに置かれたのと対比されることもある。

『リグ・ヴェーダ』に現われるアシュヴィン双神は、常に若く、美しく、輝きに満ちており、ソーマ酒や蜜を好んで飲み、彼らの乗る車は翼を持つ馬に引かれている。彼らの性格は光と関係をもち、太陽スーリヤの娘スーリヤーを従えていることもある。農業・家畜、とくに馬との関係が説かれ、また、安産・病気治し、老いたものに若さを取り戻させる力があるとされている。

「アシュヴィン双神よ、ここに来たれ。ナーサティヤ（アシュヴィン）双神よ、注視をそらすなかれ。二羽のハンサ鳥のごとく、搾られたるソーマ（神酒）に近く飛び来たれ（五・七八・一）。〝聞け、樹木よ、分娩せんとする婦人の胎のごとく。わが呼声を聞け、アシュヴィン双神よ、しかしてサプタヴァドリ（聖仙の名）を解放せよ〟（五）。風が蓮池をいたるところに揺がすごとく、正にかく汝の胎児をして発動せしめよ。十月（とつき）満ちたるとき、生れいでしめよ（七）。」（『リグ・ヴェーダ』辻直四郎訳）。

『シャタパタ・ブラーフマナ』には、アシュヴィン双神の性格を物語る次のような話が記されている。チャヴァナという年老いて家族のものたちに棄てられた男がいた。その近くにサリヤータという聖仙が一族のものと一諸に住んでいたが、その息子たちは老衰してしわだらけになったチャヴァナの身体を見て、人間であるとは思わず、石をぶつけた。憤ったチャヴァナは、サリヤータの家族のあいだに不和の種をまいた。それまで平穏に暮していた家族のあいだに争いが起こるようになると、サリヤータはその原因を知りたいと思い、近くにいた羊飼いたちに尋ねたところ、息子たちが老人を辱めたことを知った。彼はお詫びのしるしとして娘スカニヤーをこの老いぼれた男に妻として与えた。

さて、世間の人々の病気を治してあちこち歩き回っているアシュヴィン双神がたまたま通りかかってスカニヤーを見そめ、誘惑しようと思った。双神は「こんな老ぼれた身体によりかかってどうしようというのです。この老人から離れて、私たちのところに来なさい。」とすすめたが、彼女は父の言いつけでこの老人の妻となったのであるから、彼が生きている限りその傍を離れることはできない、と双神の申し出をはねつけた。双神が二度目に言い寄って来た時、彼女は双神に「あなたがた自身が不完全なのに、あなたが

たは私の夫を軽蔑している」と言い、彼らがもし彼女の夫に若さを取り戻してくれたら、どうして彼らが不完全なのかを教えようと約束した。双神がこの老人をある泉に連れて行き沐浴させると、老人のしわが消え去り、若々しい青年となった。そこでスカニヤーはアシュヴィン双神に、彼らが不完全であるといわれるのはクルクシェートラで行なわれる大祭に他の神々の仲間になるよう招待されていないからであると告げた。そこでアシュヴィン双神は祭の場所へ行き、仲間に加えてくれるように頼むと、「人々の間を親しく歩き回り病気を治しているから仲間に加えることはできない」と断わられた。これに対して、双神は「あなた方は首領のいない祭を行なっている」と主張し、神々が「どうしたらよいか」と尋ねると、「まずあなた方の仲間に加えて下さい。そうすれば教えましょう。」と述べ、ついに神々もこれに同意したという。→チャヴァナ

アシュターヴァクラ Aṣṭāvakra 激しい苦行で知られる聖仙。『マハーバーラタ』に、その出生・修行などについての物語が語られている。昔、ウッダーラカ仙はカホーダという弟子を持っていた。カホーダの熱心な修行ぶりに感心した師は、自分の娘スジャーターを彼と結婚させた。スジャーターは結婚後間もなく妊娠したが、カホーダは修行に専心して妻をほっておいたので、胎内にいる彼の子供は父を非難して、「私はヴェーダのマントラ（言葉）を学んだことがあります。あなたは間違ってそれを唱えています。」と言った。これを聞いて怒ったカホーダは「お前の心は曲っている。お前の身もそのように曲げてやろう。」と言って、胎内の子供の身体を曲げてしまった。この子供は生れると、その身体に八つの曲ったところがあったので、アシュター・ヴァクラ（八つの曲った部分をもつ者）と名づけられた（『マハーバーラタ』森林編）。

アシュターヴァクラが胎内にいる時、その両親は貧乏のどん底にいた。カホーダは妻スジャーターに勧められて、ヴィデーハ王ジャナカのところに行き、いくらかの金を恵んでくれるように頼んだ。そのジャナカ王の宮殿で、カホーダは王家の学者ヴァーンディーナとの討論会に参加するように言われ、この討論会で敗れた彼は河に身を投げて死ぬことを求められ、止むなく河に入った。さて、ウッダーラカ仙はさらにシュヴェータケートゥという男子をもうけ、スジャーターもアシュターヴァクラを生み、二人の少年は仲よく成長していった。スジャーターはカホーダの死を二人に隠していたが、ある日、二人が河で水遊びをしながら言い争っているうちに、シュヴェータケートゥは「お前には父親がいない」と言ってアシュターヴァクラをやりこめた。この言葉に衝撃を受けたアシュターヴァクラは母親の

もとに行き、父カホーダに関するすべてのことがらを聞き出した。彼は何らためらうことなく、まっすぐにジャナカの宮殿に行き、討論の行なわれている祀堂に入ろうとした。彼は、年少であること、王の祀堂には学識すぐれた者しか入ることができないなどの理由で入室を拒否されると、年齢や身体の大きさでその人の学識や価値をはかれるものではないと主張し、制止を無視して入ってしまった。そこは、かつて父カホーダが討論に敗れたのと同じところであった。彼は、ここで父の論敵であったヴァーンディーナと論争し、見事に彼を論破した。論争に敗けた王宮の学者ヴァーンディーナはかつてのカホーダと同じ運命をたどらなければならなかった。彼が河の中に投げ込まれた瞬間、河の底に沈められていたカホーダはそこから解き放され、立ち上って岸に着き、はじめて我が子を抱いた。家に帰って父の手で身を清められると、アシュターヴァクラの曲った醜い身体はたちまち輝くばかりに美しくなった（森林編）。

成長したアシュターヴァクラは、聖仙ヴァダーニヤの娘スプラバーと結婚したいと思った。この申し出をうけて、聖仙は彼の娘に対する愛が真実であるかどうかを試そうと思い、「娘を妻にしようとしたら、ヒマーラヤ山の北に行きなさい。そこで、シヴァ神とパールヴァティー女神に敬意を表わしてから、さらに北に行くと一人の美しい少女に出会うだろう。この少女に話しかけてから、帰って来なさい。」と言った。アシュターヴァクラは言われたとおりヒマーラヤ山の北に行った。そこでクヴェーラ神のもてなしをうけ、一年のあいだ天女たちと踊りを楽しみ、シヴァ神とパールヴァティー女神に敬意を表わしたのちに、さらに北方に行った。そこで、彼は七人の非常に美しい女たちと出会い、そのうちの最年長のウッタラーに見そめられ、愛を告白された。彼がヴァダーニヤとの約束を話して彼女の申し出を断わると、ウッタラーは自分が本当は北方の女王で、彼の意志を確かめるために姿を変えてその前に現われたのであることを語り、彼を讃美した。こうして約束を果して戻って来たアシュターヴァクラは、めでたくスプラバーと結婚することができた（教訓編）。

アシュターヴァクラという名については、また別の物語がある。昔、アシタという名の聖者があり、シヴァ神に子供を授けてくれるよう祈り、苦行を行なった結果、デーヴァラという子供をもうけた。デーヴァラが成長すると、天界の女王ラムバーが彼を見そめたが、彼は心を動かされなかった。怒ったラムバーは彼に呪いをかけ、その身体を八つの曲ったところのある醜いものにしてしまった。そこで、それからデーヴァラはアシュターヴァクラと呼ばれるようになった。彼が六〇〇〇年のあいだ苦行を行なった時、彼

の前に愛人ラーダーを伴ったクリシュナ神が現われた。ラーダーはアシュターヴァクラの醜い姿に驚いたが、クリシュナが彼に近づいて抱きしめると、その瞬間に彼はもとの美しい姿に戻った。その時、天から車が降りて来て、それに乗って彼らは天に戻っていった(『ブラフマヴァイヴァルタ・プラーナ』)。また、アシュターヴァクラの名は、英雄ラーマがランカーからアヨーディヤーの都に戻った後に行なわれた即位式に参加した聖仙の一人のものともされる(『ウッタラー・ラーマーヤナ』)。→ジャナカ、ウッダーラカ、シュヴェータケートゥ

アショーカ　Aśoka　ヒンドゥー教徒、仏教徒ともに神聖視する樹木。学名をSaraca indica, Linn.といい、和名はムユウジュ。漢訳仏典では無憂樹といい、仏教三霊樹（インドボダイジュ、サラノキ、ムユウジュ）の一つ。生誕、結婚に関係深い木といわれる。

アースティーカ　Āstīka　プラーナに登場する聖者。聖者ジャラトカールと蛇神ヴァースキの妹とのあいだに生れた。アースティーカ（「信心深いもの」の意）という名の起りは、聖者ジャラトカールが妻のもとを去る時、胎内の子供は立派な、神々に対する深い信仰を持った人になるようにと祝福したことによるという(『マハーバーラタ』初編)。

プラーナの神話によれば、ある時、アビマニュの子であるパリークシット王は狩のために森を歩いているうちに、彼の矢に当って死んだ蛇を見つけ、拾い上げてシャミーカという名の聖者の肩の上に置いた。シャミーカの子のシュリンギンはこれを知って腹を立て、パリークシット王が蛇王タクシャカに噛まれて七日のうちに死ぬよう呪いをかけた。パリークシット王はこれを聞いて、大海の中にタクシャカの近づけないような一本柱の宮殿を建て、医者や魔術師に守らせた。六日間は無事に過ぎたが、七日目に今日こそ決着をつけようと心に決めたタクシャカは年老いたバラモンに姿を変え、王の宮殿に入り込んだ。タクシャカはさらに小さな虫となって果実の中にもぐり込み、王がこれを手に取るやいなやもとの蛇の姿に戻り、王に噛みついた。王はただちに死んだ。パリークシット王の子ジャナメージャヤは父の葬儀ののち、バラモン僧を呼んでサルパサトラの供犠（蛇を犠牲として捧げる儀式）を始めた。この祭祀の火で蛇たちが焼かれ、蛇族はほとんど全滅しそうに見えたが、タクシャカだけは見当らなかった。いら立った司祭僧たちの「タクシャカはどこだ」という声で大地が裂けるように思われた。恐れをなしたタクシャカは友人のインドラの宮殿に逃げ、インドラの寝床に巻きついていた。これを知った僧たちは呪文を唱えてインドラともどもタクシャカを犠牲の火のところに連れて来ようとした。この段階で、

神々はマナサーデーヴィー（プラジャーパティ・カシュヤパの心より生れた女神）のところに行き、この事態を救ってくれるように願った。そこで心やさしい女神は彼女の息子アースティカに命じて、蛇の犠牲祭を止めさせた。このようにして蛇族は生き残ることができたという(『デーヴィー・バーガヴァタ』第九編、『マハーバーラタ』初編)。→ヴァースキ、パリークシット

アスラ　Asura　神々の敵、魔族。阿修羅。もともと神を意味するデーヴァに対し、不思議な幻力・呪力をもった神格の呼び名で、ヴァルナ、ルドラなどがこれに属していたが、後には神々の敵、魔族の通称となった。ゾロアスター教においては、これに反して、古代インドのデーヴァに当るダイヴァの地位が下落して、アスラに相当するアフラが最高神とされている。アスラという語の語源解釈にはいくつかの説があり、「存在する、ある」を意味する動詞アス as に由来するとも、また、「呼吸、生気」を意味するアシュ aśu に起源をもつとも、「輝く」を意味するスヴァル svar から派生したとも説かれる。あるいは、「神、神格」を意味するスラ sura に否定の a を加えてアスラ a-sura（神ではないもの）としたとも説かれる。『リグ・ヴェーダ』の最も新しい部分や、『アタルヴァ・ヴェーダ』では、アスラは魔神の名称としてしか使われなくなっており、『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』では、プラジャーパティが生気（アス）からアスラをつくり出したといい、『ヴィシュヌ・プラーナ』では彼らはブラフマー神の大腿から生れたといわれる。『シャタパタ・ブラーフマナ』では、神々もアスラもともに造物神プラジャーパティより生れたが、神々が虚偽をしりぞけて真実をとるのに対して、アスラは真実をしりぞけて虚偽をとるといわれる。後世の文献では、一般にアスラはダイティヤ、ダーナヴァなどのカシュヤパ仙の子孫たちとともに神々の敵とされるが、乳海攪拌伝説においては神々と協力して乳海を攪拌し、アムリタ（不死の霊水）を得るために活躍したとされる。仏教では阿修羅、阿須羅、阿素羅、阿素洛などと音写し、非天、不端正と訳されることもある。六道の一つ、あるいは八部衆の一つとされ、仏教の伝統でも神々と闘う闘争的な悪神とされるところから、日本では「修羅の巻」、「修羅場」などの言葉ができた。

アタルヴァン　Atharvan　もと火の犠牲を司る僧職を表わし、『アヴェスタ』のアータルヴァン（火民）に対応する。古代インドの火供の僧は呪法師としての性格を持ち、このことからアタルヴァンは呪術僧の呪文を意味するようになり、さらには呪文・呪詞そのものを指すようになった。アンギラスが同様の意味で、とくに「敵対的な呪、黒い呪」であるのに対してアタルヴァンは「幸運をもたらす呪、白

い呪」を表わす。神話的には、アタルヴァンは火を作り出して祭祀を行ない、神酒ソーマを捧げた僧の名前とされ、このことから彼は「アグニ（火）の父」といわれる。彼はまた、ブラフマーの長男とされ、父よりブラフマンについての学問を学んだ。彼の子孫は、しばしばアンギラスと混同されている。プラーナの神話では、アタルヴァンはブラフマーの顔から生れ、カルダマの娘シャーンティを妻にしたという。

アチユタ　Acyuta　「不死のもの」の意で、ヴィシュヌ神の別名の一つ。万物を創造して止まないから、あるいは究極的な解脱と異ならないから、このようにいわれる。

アーディカヴィ　Ādikavi　「最初の詩人」の意で、ブラフマンのこと。あるいは『ラーマーヤナ』の作者とされるヴァールミーキのこと。

アディティ　Aditi　『リグ・ヴェーダ』の無垢の女神。「無拘束・無垢・無限」の意で、アーディティヤ神群の母神としてたたえられる。

「三柱（の神）の支援をして偉大たらしめよ、ミトラとアリアマンとの在天の（支援）、ヴァルナの冒しがたき（支援をして）」（一〇・一八五・一）。家内においても、他所の路上においても、悪しざまに罵る邪曲の者は、決してこれらの（神々）に力を及ぼすことなし（一一）。アディティの子ら（アーディティヤ神群）が、生存のため尽くることなき光明を授くる人間にも（三）。」（辻直四郎訳）。

のちの伝説では、アディティはダクシャの娘で、一二人の姉妹（ディティ、カーラー、ダナーユス、ダヌ、シンヒカー、クローダー、プラヴァー、アリシュター、ヴィナター、カピラー、ムニ、カドルー）があったといわれる（『マハーバーラタ』初編・五九・一二）。彼女がブラフマーの孫でマリーチの子カシュヤパと結婚して生れた息子たちをアーディティヤ（アーディティヤ神群）という。彼女には三三人の息子があったが、そのうちの一二人（ダートリ、アリヤマン、ミトラ、インドラ、ヴァルナ、アンシャ、バガ、ヴィヴァスヴァット、プーシャン、サヴィトリ、トゥヴァシュトリ、ヴィシュヌ）は一二アーディティヤ神群といわれる（初編・五九）。

(一)「ヴィシュヌ神がアディティの子として生れた物語」『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』では、ヴィシュヌがアディティの子として生れた物語を語っている。それはヴィシュヌ神がヴァーマナ（「倭人」）ヴィシュヌ神の第五番目の化身）としてアディティの胎内に入ったというもので、聖仙ヴィシュヴァーミトラが森のなかでラーマとラクシュマナの兄弟に語った物語である。この兄弟がシッダーシュラマに入った時、聖仙はこのアーシュラマ（修行道場）はヴィシュヌがヴァーマナとして長いあいだ滞在したところであるから神聖なところであると教えた。神々に倭人マハーバリの行なっている祭祀を妨害するように勧められて、ヴィシュヌはそこにいたのである。その時、カシュヤパの妻アディティは、ヴィシュヌが彼女の子として生れるようにと祈願して苦行を行なっていたので、ヴィシュヌはそのまま彼女の胎内に入った。そして一〇〇〇年たった時、彼女はヴィシュヌを産み、その子はヴァーマナ（倭人）と呼ばれた（『マハーバーラタ』森林編、教訓編）。

(二)「ブダがアディティに呪いをかけた話」　アスラ（神々の敵）の力が増大して神々が困っていた時、神々の母であるアディティは彼女の子供である神々をアスラとの闘いに送り出そうと決心した。彼女が息子たちの食物をつくり終えた時、突然ブダが現われてその食物をねだった。彼女は息子たちが食べ終えてもまだ残ると思って、しばらく待つようブダにたのんだ。しかし、このことがブダを怒らせ、彼女に呪いをかけて蟻として生れ変わらせた（『マハーバーラタ』静寂編）。

(三)「ナラカ・アスラにイヤリングを奪われた物語」　ある時、ナラカ・アスラ（「地獄のアスラ」の意）が天界に攻め入り、インドラ天の傘とアディティの耳環を奪ったことがあった。この時、ヴィシュヌ神はクリシュナとなってナラカ・アスラと闘った末、それらを取り返した（『マハーバーラタ』戦争準備編、集会編）。

(四)「アディティが獄につながれた物語」　カシュヤパがアディティとディティの二人の妻とともにアーシュラマ（庵）に棲んでいた時、アディティが熱心に彼に仕えたので、何でも望みの物を与えようと約束した。そこで、アディティは理想の子供が欲しいと思い、神に祈った。その願いはすぐに聞きとどけられ、インドラが生れた。インドラの出生は、もう一人の妻ディティの嫉妬心をかき立て、自分もインドラに等しい子供が欲しいと要求したので、カシュヤパはディティの願いをもかなえてやることにした。ディティが懐妊し、その美しさがいっそう目立つようになると、今度はアディティがねたみの心を起こし、インドラを呼んで、「もしディティに子供が生れれば、お前は別の天に追いやられるだろう」と告げ口した。これを聞いたインドラは、さっそくディティのところへ行って、「あなたにお仕えしましょう」と言った。ディティは非常に喜び、インドラの奉仕をうけるうちに眠り込んでしまった。その間にインドラはディティの胎内に入りこみ、彼の武器ヴァジュラで胎児を四九片に切りさいた。胎児が悲鳴をあげると、インドラは「泣きわめくな」（マー・ルダ mā ruda）と言ったので、胎児は四九のマールタ（風）として生れ出た。目覚めてこ

のことを知ったディティは、アディティに呪いの言葉を浴びせかけた。「あなたの息子は私の子孫を胎内で理不尽にも殺してしまった。この事件はあなたが引き起こしたことだ。あなたはその罪によって、長いあいだ獄につながれるだろう。あなたの子供たちも絶滅されるだろう」。このディティの呪いによってインドラは一たびは天上を追われ、アディティはデーヴァキーとなり、悪王カンサによってその子供たちは六人まで殺されることになったのである(『デーヴィー・バーガヴァタ』四)。→アーディティヤ、ディティ

アーディティヤ　Āditya　「アディティの子」の意で、通常は複数で表わされ、『リグ・ヴェーダ』に登場するヴァルナ、ミトラ、アリヤマン、バガ、ダクシャ、アンシャの六神があげられる場合(二・二七・一)、ダクシャとバガのかわりにサヴィトリが加えられて五神とされる場合、あるいはミトラ、ヴァルナ、ダートリ、アリヤマン、アンシャ、バガ、ヴィヴァスヴァット、アーディティヤ(太陽)の八神があげられる場合(一〇・七二―八)がある。またアーディティヤとして七神があげられることもあるが(九・一一四・三)、全体として太陽の光との関係が強く表わされており、アーディティヤは単数形では太陽と同義語となった。

「これらのグリタ滴る歌声を、われは太古よりの王者アーディティヤ諸神に、祭匙もて捧ぐ。ミトラ、アリアマン、バガ、強力に生れいでたるヴァルナ、ダクシャ、アンシャは、われら(の声)を聞け(二・二七・一)。アーディティヤ諸神は、動くもの・動かざるものを保持す、万有の守護者なる神々は、深謀遠慮にしてアスラ力(不可思議力)を擁護し、天則を持して、債務を取りたてつつ(四)。彼ら(アーディティア諸神)は三層の地、また三層の天を保持す、三種の掟を彼らの配分の中に。天則により、アーディティア諸神よ、汝らの偉大性は偉大なり、そはこころよし、アリアマンよ、ヴァルナよ、ミトラよ(八)。」(辻直四郎訳)。

のちにはアーディティヤ神群の数は一二神とされるようになり(『シャタパタ・ブラーフマナ』一一・六)、叙事詩では聖者カシュヤパとアディティとのあいだに生れた一二人の子供、すなわち、ダートリ、ミトラ、アリヤマン、インドラ、ヴァルナ、アンシャ、バガ、ヴィヴァスヴァット、プーシャン、サヴィトリ、トヴァシュトリ、ヴィシュヌのことをいうようになった(『マハーバーラタ』初編・五九・一四―一五)。

仏伝においては、ゴータマ・ブッダの家系がアーディティヤであるといわれ、このことからゴータマ・ブッダの別名としてアーディッチャバンドゥ(太陽の家系に属するもの)が用いられることがある。→アディティ

アディラタ　Adhiratha　パーンドゥ軍とクル軍との戦争の英雄カルナの育ての親(『マハーバーラタ』)。聖者ドゥルヴァーサスから子供を得るための呪文を教わったクンティーは、未婚であったが太陽神スーリヤに対してそれを唱えた。するとたちまち太陽神は彼女の前に現われ、太陽神の力によって彼女は身籠り、易々とカルナを生み落した。悪評が立つのを恐れたクンティーはこの子を箱の中に隠し、アシュヴァー河に流した。その時、ドゥリタラーシュトラ王の偉大な友人であるアディラタが河に沐浴にやって来た。彼の妻ラーダーは子供が生れないことを悲しんでいたので、アディラタはガンジス河に浮んでいる箱の中から子供を取り出し、家に連れ帰って育てた。この子が成長してドゥリヨーダナ王の友人カルナとなった(初編、森林編)。また、アディラタはアンガの王であり、カルナは彼の子供として育てられ、武術の修練のためにハスティナープラへ行った。カルナはここでドゥリヨーダナ王と会い友人となったともいわれる(初編)。→クンティー

アドゥヴァリユ　Adhvaryu　ヴェーダの祭式にたずさわる四人の主要な司祭僧の一人。祭式において、供物について監督し、祭壇を用意し、犠牲の器をととのえ、動物を連れて来て犠牲にし、『ヤジュル・ヴェーダ』の言葉を静かに唱えるのがアドゥヴァリユの役割であった。『シャタパタ・ブラーフマナ』(一二・八)の神話によれば神々のアドゥヴァリユはアシュヴィン双神であるとされ、また、アドゥヴァリユに対する犠牲の贈り物は車であったという(『マヌ法典』八・一〇九)。

アートマブー　Ātmabhū　ブラフマーの別名。「自分自身で生れたもの」、あるいは「アートマンより生れたもの」の意味。

アトリ　Atri　『リグ・ヴェーダ』に最も多く登場する聖仙。単数形で四〇回、その子孫を表わす複数形で六回述べられている。人類の祖先マヌとともに語られ、アグニが彼を助けたといわれる(七・一五・三)。インドラもアトリの祈りを聞き入れたというが、主として彼を保護したのはアシュヴィン双神である。彼らはアトリを暗闇より救い出し(六・五〇、七・一五)、彼が悪魔によって深い穴に押し込められたのを救出した。

プラーナでは、聖仙アトリはブラフマーのマーナサプトラ(意より生れた子供、すなわちマリーチ、アンギラス、プラスティヤ、アトリ、プラハ、クラトゥ)の一人とされる場合と(『マハーバーラタ』初編)、ブラフマーの子供の七人の聖者 saptarṣi の一人といわれる場合がある(同、静寂編)。叙事詩やプラーナでもアトリは古い聖者としてしばしば登場する。

ある時、神々とアスラたちとのあいだに激しい闘いが行なわれたことがあった。アスラ軍から雨あられと降りそそがれる矢のために太陽も月も光を失い、世界はまっ暗になった。神々は暗闇の中で手探りで歩かねばならず、彼らは大聖者アトリに助けを求めた。そこでアトリ仙はただちに身を変えて太陽と月になり、月として神々を照らし、太陽として強烈な熱気でアスラたちを焼き尽くした。こうして神々は救われたという（『マハーバーラタ』教訓編）。

ある時、カシュヤパ、アトリ、ヴァシシュタ、ガウタマなどの聖者たちがブラフマンの世界へ行くための修行の旅をしていた。その時、世界は干ばつで苦しんでいた。シヴィの子のヴリシャーダルビ王は通りかかった聖者たちに救済を求めた。しかし、彼らはこれを拒否したので、怒った王はアーハヴァニーヤーグニという火の供犠を行ない、それによってヤートゥダーニーというラークシャサ女が出現した。彼女はアトリたちを殺すために出現したのであるが、聖者たちはトリダントゥ tridantu（英語の trident に当る三叉のほこ）で彼女を打ちのめし、こなごなに砕いてしまった。彼らは彼女が森の中の池で育てていた蓮華を食べて満腹したのち、ブラフマーの世界に昇ったという（同、教訓編）。

プラーナに登場する女性の中で、夫に対する貞節心という点では、シーラヴァティーの右に出るものはいないといわれる。彼女は夫ウグラシュラヴァスを喜ばせるために、彼を自分の肩に乗せて遊女の家に連れて行こうとした。これを見た聖者マーンダヴヤはウグラシュラヴァスが日の出まえに死ぬようにとの呪いをかけた。悲しみにうたれたシーラーヴァティーは次の朝太陽が昇らないように呪いをかけた。果して翌朝太陽が出て来なかったので、トリムールティ神（ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三神が一体となったもの）はアトリの妻アナスーヤーを伴ってシーラーヴァティーのところに行った。アナスーヤーは彼女に呪いを止めるよう説得し、成功した。これに満足したトリムールティ神はアナスーヤーに何でも望むものを与えようと約束した。彼女は子供がなかったので子供が欲しいと言うと、ただちに聞き入れられ、ヴィシュヌ神はダッタートレーヤ、シヴァ神はドゥルヴァーサスという名前でアトリとアナスーヤーの息子となったという（『ブラフマーンダ・プラーナ』）。

またある時、大聖者アトリがカーマダの森で苦行をしている時、この国に大干ばつが起こった。その時、彼の妻アナスーヤーは砂でシヴァリンガ（シヴァ神の男性性器）を作り、熱心に礼拝した。どこにも飲む水がなかったので、アトリは妻に水をもらいたいと頼んだ。するとそこに突然、ガンガー女神（ガンジス河の女神）が現われてアナスーヤ

ーに「ここに穴が現われ、そこから水が流れ出るだろう」と告げた。すると、女神に言われたとおりのところから清らかな水が流れ始めた。彼女がガンガー女神に一月のあいだここにとどまって欲しいと願い出ると、女神はアナスーヤーが一ヵ月のあいだ苦行で得た神通力を女神に捧げるならばという条件でこの申し入れを受け入れた。アトリはこの清浄な水を大喜びで飲み、どうしてこの水を手に入れたかと妻に尋ね、事情を聞くと彼も女神を見たいと言った。するとガンガー女神はすぐに彼の前に姿を現わした。アナスーヤーは、さらに女神にいつまでもこの世界にいて欲しいと願うと、女神はアナスーヤーが苦行で得た不思議な力と夫への奉仕のすべてを女神の供養に一年のあいだふりむけ続けるならばそうしようと約束した。アナスーヤーはためらうことなくこの条件を認めた。その時、突然、シヴァ神がリンガの姿で現われた。シヴァ神はアトリとアナスーヤー夫妻の願いをいれて、アトリーシュヴァラという名でいつまでも彼らのところにいたという（『シヴァ・プラーナ』）。

→ガンガー、アナスーヤー

アドリカー　Adrikā　天上の水の精女アプサラスの一人。あるバラモンに呪いをかけられて魚の姿にされ、ヤムナー河に棲んでいたところ、一羽のワシが落した木の葉を拾いあげた。彼女はそれを口にしたが、その葉の上にヴァス族の王ウパリチャラの精子が落とされていたために身籠った。その時、漁師たちがこの魚を捕えて腹を裂くと、男と女の双生児が出て来た。漁師たちがこの双生児を王のもとに連れて行くと、王は男子を自分の子として育て、この男子はやがてマツヤ王として知られるようになった。他方、女の子は魚の臭いが強く、サティヤヴァティーと名づけられて漁師のもとで育てられ、後のヴィヤーサを産み、クル族のシャーンタヌ王と結婚してヴィチトラヴィーリヤ、チトラーンガダの母となった。アドリカーはこれらの双生児を産んだ後、呪いから解き放され、天に昇ったという（『マハーバーラタ』初編）。→サティヤヴァティー

アナスーヤー　Anasūyā　「嫉妬深くないもの、慈悲深いもの」の意で、聖者アトリの妻。『ラーマーヤナ』によれば、アナスーヤーはチトラクータの南にある森の中で、夫アトリと共に住んでいた。彼女は非常に慈悲深く、またきびしい苦行を行なってタパシュシャクティという神秘的な力を得ていた。シーターが彼らの住むところに来た時、アナスーヤーは心からもてなし、美しさを永遠に保たせる塗り薬を彼女に与えた（アヨーディヤー編）。またアナスーヤーが苦行で得た不思議な力でガンガー女神を呼び出し、干ばつで苦しむ人々に水を与えた話はよく知られている。彼女にはダッタートレーヤ、ドゥルヴァーサス、チャンドラ

という子供がある。↓アトリ

アナラニヤ Anaraṇya イクシュヴァークの系統に属するアヨーディヤー王。『ラーマーヤナ』によれば、彼はバーナの子でプリトゥの父である（少年編）。神々とランカーの魔王ラーヴァナとの戦いで、多くの王たちが戦わずして魔王の軍門に降ったのに対して、アナラニヤ王は呼び出しを受けて降伏か闘いかを迫られた時、ためらうことなく闘いを選んだ。激しい闘いののち、彼の軍は打ち破られ、彼は車から投げ出された。その時、彼は自分が負けたのは運命であり、魔王によるのではないと言い、自分の子孫であるラーマがラーヴァナを殺すであろうと予言したという。また他のプラーナによれば、ラーヴァナがアナラニヤの国を攻めた時、彼に決闘をいどんだ。この決闘でアナラニヤは死んだが、死を前にして彼はラーヴァナにダシャラタ王の子ラーマによって殺されるようにという呪いをかけたともいう（『ブラフマーンダ・プラーナ』四五）。また、彼が菜食主義者であったとの記事もある（『マハーバーラタ』教訓編）。

アナンガ Anaṅga 「肢体を持たないもの」の意で、愛の神カーマの別名。シヴァ神が苦行をしている時、パールヴァティーに対する情念をかき立てようとして修行の邪魔をしたために、その罰としてシヴァ神のひとにらみで肢体を焼かれてしまった（『ヴァーユ・プラーナ』一〇四・四八）。その後、ふびんに思ったシヴァ神はカーマがクリシュナの息子プラディユムナとして生れ変わるのを許したという。↓カーマ

アニルッダ Aniruddha 「妨害されないもの」の意味で、クリシュナ神の子であるプラディユムナの子。このハンサムな王子についてのさまざまな物語のうちでもっともよく知られているのは、ダイティヤ（悪魔）の王女ウシャーによって誘かいされたという話である。アスラの大王マハーバリの一〇〇人の王子のなかで最強のバーナ・アスラはシヴァ神に熱烈な信仰と供犠を捧げたので、喜んだシヴァ神は妻パールヴァティーとともにバーナの城を守ってやろうと約束した。誰もこの城を力でもって攻めようとする者がいなくなると、自分の力を過信したバーナは、シヴァ神と戦おうとした。これを知ったヴィシュヌは、バーナの旗じるしがやがて破られ、魔王は強力な敵対者に倒されるだろうと予言したので、バーナは落ちつかない日々をおくっていた。そんなある日、バーナの娘のウシャーはシヴァ神とその妻パールヴァティーが愛しあっているシーンを目撃した。この情景に刺激されたウシャーは愛人とそのような場面を演じてみたいと思い、パールヴァティーにその希望を語った。パールヴァティーは、三日のうちに夢のなか

で若くて美しい王子があなたの前に現われるだろうとウシャーに告げた。そこで、ウシャーは美しい衣服をまとい最上の装飾を身に着けてその時を待った。三日目についにハンサムな王子が夢の中に現われた。目覚めるやいなや、彼女は大声を上げた。その声を聞いてかけつけた大臣の娘チトラレーカーはウシャーの話を聞き、彼女が夢で見た王子を呪文（マントラ）の力によって連れて来ることを約束した。チトラレーカーは自分の知っている王子たちの似顔絵を見せているうちに、ウシャーはアニルッダの絵を見つけて抱きしめた。次の夜、チトラレーカーはドヴァーラカーの町から床に眠っているアニルッダをマントラ（呪文）の力でウシャーの部屋に連れて来た。このようにしてアニルッダとウシャーが同室で一夜を過していると、これを嗅ぎつけた魔王バーナはアニルッダをつかまえて監禁してしまった。王子アニルッダの姿が見えなくなってドヴァーラカーの町は大さわぎとなった。その時、ナーラダがこの町に来て一部始終を話したので、クリシュナとプラディユムナはただちにアニルッダの救出に向かい、バーナの宮殿を大軍勢でとり囲んだ。激しい戦闘ののち、バーナの旗じるしは破られて地に落ち、やがてバーナは殺された。そこでアニルッダはウシャーと結婚してドヴァーラカーに帰り、二人のあいだにヴァジュラが生れたという（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇・六一―二）。↓プラディユムナ

アヌ Anu アヌドルヒユともいい、月種族の王ヤヤーティの子。プラーナによればヤヤーティにはデーヴァヤーニー、サルミシュター、という二人の妻があり、前者とのあいだにヤドゥ、トゥルヴァシュの二人の息子、後者とのあいだにドルヒユ、アヌドルヒユ、プールの三人の息子をもうけた（『アグニ・プラーナ』一二）。アヌは年老いた父に彼の若い活力を与えるよう求められたがこれを拒んだため、父ヤヤーティから「汝の子孫には地上を支配させない」との呪いの言葉をあびせかけられた。しかし、彼の子孫は長いあいだ栄え、アンガ、バンガ、カリンガなどの国々を支配したといわれる。↓ヤヤーティ

アーパス Āpas 『リグ・ヴェーダ』の水の女神。アーパスは「水」を表わす女性名詞アプ ap の複数形。天界の水であるとともに地上の水をも表わしている。天上の水は神酒ソーマをはじめ、乳・グリタ・蜜・甘露となり、地上ではソーマの製造になくてはならないものである。『リグ・ヴェーダ』におけるアーパスは、慈愛に満ちた母といわれ、宇宙の母・妻とたたえられ、生物や無生物を産み、病気を治し、人間に繁栄をもたらす神として讃歌を捧げられている。

「海を首長とし、〔天上の〕大水の中より、〔アーパス

は〕身を清めつつ、休むことなく来たる。そがためにヴァジュラ（電撃）もつ牡牛・インドラが道を拓きたる、かかる女神アーパスは、ここにわれを支援せよ（七・四九・一）。その中央に王者ヴァルナが、人間の真実と虚偽とを見おろしつつ進む〔水〕、蜜（ソーマ）を滴らし、清く・澄みたる〔水〕、かかる女神アーパスは、ここにわれを支援せよ（三）。」（辻直四郎訳）。

バビロニア（シュメール）の神話においては、源初の水はアプス Apsu として神格化されている。

アーパスタムバ　Āpastamba　「天啓経」Śrautasūtra「家庭経」Gṛhyasūtra、「律法経」Dharmasūtra などの作者といわれる聖者。プラーナによれば、ある時、一人のバラモンがシュラッダー祭を行なおうとしたが適当な司祭が見つからなかったので、ヴィシュヌ神に祈りを捧げた。そこにアーパスタムバが現われ、バラモンが食物を供養すると、もっと欲しいと要求し、結局この祭式は行なわれなかった。腹を立てたバラモンは掌でアーパスタムバの顔に水をふりかけ、呪いの言葉を投げつけようとした。その水滴が彼の顔にとどく前に、アーパスタムバは水滴に止れと命じた。水は聖者の力によって途中で止り、塊となった。このことによって、彼はアーパ（水）スタムバ（塊）と呼ばれるようになったという（『ブラフマ・プラーナ』）。

アパーム・ナパート　Apāṃ napāt　「水の子」の意で、『リグ・ヴェーダ』の水神。インド・イラン共同時代にさかのぼる起源をもつ神格であるが、インドにおいては火神アグニの一つの形態、また地上の祭火として讃えられる。

「〔河川の〕あるものは合流し、あるものは〔海に〕近づく。河川は共通の容器（大洋）を満たす。清浄にして・輝くこのアパーム・ナパートを、清浄なる水はとり囲む（二・三五・三）。自己の住居に、搾るに易き乳牛を有する彼は、〔乳もて〕おのが本性を横溢せしめたり。彼は実質のある栄養を食らう。このアパーム・ナパートは、水中において強壮となり、彼に奉仕する者に財宝を与えんがために遠く輝く（七）。このアパーム・ナパートは、黄金の姿形・黄金の外貌をもち、彼こそ実に黄金色なれ。黄金の胎より〔来たりて〕座を占めたるとき、黄金の授与者たち（祭官・詩人の庇護者）は、彼に栄養を捧ぐ（一〇）。」（辻直四郎訳）。→アグニ

アパーラー　Apālā　『リグ・ヴェーダ』における最高の聖者アトリの娘。彼女は皮膚病にかかっていたが、水辺に行く途中でソーマ草を発見して家に持ち帰り、歯で嚙んでインドラ神に捧げた。インドラはアパーラーを三度清めて太陽のような皮膚を持つものとした（『リグ・ヴェーダ』八・九一）。

アハリヤー　Ahalyā　聖者ガウタマの美しい妻。マイトレーイーとも呼ばれる。彼女は早朝ガウタマ仙が礼拝をしているあいだに、インドラによって誘惑された。妻の不貞を知った聖者は彼女に呪いをかけ、姿が見えないようにしてしまった（『シャタパタ・ブラーフマナ』三・三）。

またプラーナの神話では、アハリヤーは夫ガウタマの呪いによって石にされたといわれる。ヴィシュヴァーミトラがラーマとその弟ラクシュマナを森からジャナカの宮殿へ連れて行く途中で、ある隠者の住み家の前に通りかかった。その時、ヴィシュヴァーミトラはラーマたちにこの草庵について次のように話して聞かせた。

この草庵にはかつてガウタマ仙が妻アハリヤーと共に住んでいた。インドラは美しいアハリヤーを見て恋におち、ガウタマが沐浴をしに出ているあいだにガウタマに変装して草庵のなかに入り込み、アハリヤーと交わった。そこに帰って来たガウタマ仙はこれを見て激怒し、二人に呪いをかけた。その結果、インドラは性器を失い、アハリヤーは石にされた。しかし、彼女を哀れに思ったガウタマは、ラーマがここに来て足で石に触れた時もとの姿にもどるようにした。性器を奪われたインドラは天界に上り、神々から代りに山羊の性器を与えられてもとの姿となった。

ヴィシュヴァーミトラがこのように語っているあいだに、ラーマが足でその石に触れると、美しい姿をしたアハリヤーが現われた。アハリヤーとガウタマは再びその草庵に住み、末長く暮したという。→ガウタマ

アパルナー　Aparṇā　もともとシャバラ、バルバラ、プリンダなどの部族によって崇拝されていた非アーリヤ系の女神。『ハリヴァンシャ』によれば、ヒマヴァット（「雪を持てるもの」の意、ヒマーラヤのこと）とメーナーの長女。彼女にはエーカパルナー（「一枚の草の葉で生活しているもの」の意）とエーカパータラー（「一枚のパータラ（葉）で生活しているもの」）という妹たちがあった。エーカパルナーとエーカパータラーが、その名の示すとおり一枚の葉と一枚のパータラで生活していたのに対し、アパルナーはきびしい苦行を行ない、一枚の葉にもよらずに生きていたので、このように呼ばれた（a-parṇa は「葉をもたないもの」の意）。アパルナーのあまりにもきびしい苦行ぶりを見て彼女の母親は「ウマー、ウマー umā umā」（「止めなさい、止めなさい」の意）と叫んだ。そこで、この偉大な女性苦行者はシヴァ神の妻となり、ウマーという名で知られるようになった。女神ドゥルガーはしばしばアパルナーと呼ばれる。

アヒ　Ahi　「蛇」の意味で、『ヴェーダ』における干ばつの悪魔ヴリトラのこと。アヒは冬を表わし、神話の上で

はインドラの武器ヴァジュラによって殺される。

アヒチャトラ　Ahicatra　あるいはアヒクシェートラ。『マハーバーラタ』に記された都市名。北パンチャーラ国の首都で、ガンジス河の北岸にあったといわれ、現在のラームナガルの近くに遺跡がある。

アビマーニー　Abhimānī　「誇り高いもの」の意味で、ブラフマーの長子である火の神アグニの別名。アビマーニーは妻スヴァーハーとのあいだに、パーヴァカ、パヴァマーナ、シュチという三子をもうけた。この三子はそれぞれ、電光の火、摩擦によってつくり出された火、水を飲み干す太陽の火を表わすといわれる。

アビマニユ　Abhimanyu　『マハーバーラタ』の英雄アルジュナと妻スバドラーとのあいだに生れたパーンドゥ軍の猛将。父アルジュナから武術を習い、のちに母に連れられてドヴァーラカーの町に行き、伯父クリシュナのもとで過したことがあったが、この間クリシュナの息子のプラディユムナに戦術を学んだ。のちに、ヴィラータ王の娘ウッタマーと結婚した。やがてカウラヴァ軍とパーンドゥ軍との戦争が始まった。最初の日に、アビマニユはコーサラ王のブリハトバラと決闘し、ビーシュマと死闘を繰り返したのちにその旗印を破った。二日目にはラクシュマナ、シャリヤなどと戦い、マガダ王のジャヤツセーナを倒した(『マハーバーラタ』ビーシュマ編)。そのほかビーシュマ編の諸章、ドローナ編ではアビマニユが勇敢に戦い、カウラヴァ軍の勇将たちが次々に倒されていくさまを描いている。しかし、彼はついにドゥッシャーサナの鉾によって打ち倒される。死後、聖者の不死の世界に昇ったという(同、ドローナ編)。

『マハーバラタ』では、アビマニユはアールジュニ(アルジュナの子)、サウバドラ(スバドラーの子)、カールシユニ(クリシュナの子孫)、アルジュナートマジャ(アルジュナより生れたもの)、パールグニ(パルグナ、すなわちアルジュナの子)などとも呼ばれている。→アルジュナ

アビーラ　Abhīra　アービーラともいう。シンドゥー河とサラスヴァティー河の河口に住んでいた人々のこと。バーラタ戦争ののちに行なわれた勝利の行進のあいだに、ナクラがこれらの人々を破ったという(『マハーバーラタ』集会編)。聖者マールカンデーヤによって、カリ・ユガの時にはアービーラ族やシャカ族のような人々がインド各地を支配するようになるであろうと予言されたとも、シュードラ(隷民)やアービーラの憎しみのために聖なる湖ヴィナーシャナがサラスヴァティー河から消えうせた(同、シャリヤ編)ともいわれ、また、アービーラはかつてクシャトリヤ(王族階級)であったが、パラシュラーマ(ヴィシュヌ神の第

六の化身)を怖れて山の洞穴の中に逃げ込んで伝統的な仕事をしなくなり、ついにシュードラになったともいわれる(同、馬祀祭編)。

アヒルブドニヤ　Ahirbudhnya　深いふちに住む蛇、あるいは天の海に住む蛇(『リグ・ヴェーダ』一・一八六)。プラーナではルドラ・シヴァの別名、あるいは一一のマルト神群の一神格名といわれる。ヴィシュヴァカルマンとその妻スラビーとのあいだに生れた子供の一人とされることもある。

アプサラス　Apsaras　天界の水の精。半神族。「水のなかで動くもの、雲の海のあいだを行くもの」の意で、美しい女性の姿でインドラの天界に住んでいる(『リグ・ヴェーダ』一・一三三)。天上界の踊り子といわれ、雲、あるいはかすみを象徴していると推定される。ガンダルヴァとの関係が深く、アプサラスであるウルヴァシーがプルーラヴアス王の妻となった話はよく知られている(『リグ・ヴェーダ』一〇・九五には両者の対話が記されている)。アプサラスの出生についてはさまざまな話があり、ガンダルヴァともどもプラジャーパティのばらばらになった身体より生れた(『シャタパタ・ブラーフマナ』九・四)、あるいは海をかきまわした時に生れた(『ヴァーユ・プラーナ』一・九)とか、鳥たちの母バーシーから生れたなどといわれる。

彼女らアプサラスは自由にさまざまな姿となることができ、しばしば水鳥の姿となる。彼女らは北欧神話におけるオーディン神の娘ワルキューレたちのように、戦闘で死んだ戦士たちを輝く色の車に乗せてインドラの天国に運ぶ(『マハーバーラタ』カルナ編)。他方、彼女らは美しく、官能的で、天上の誘惑者として英雄たちを魅了し、苦行中の聖者をも誘惑する。メーナカー、ラムバーなどのアプサラスがその代表である。

『ヴァーユ・プラーナ』ではアプサラスに一四のクラスがあるとされ、『ハリ・ヴァンシャ』は七クラスをあげている。また、天上のアプサラスに一〇クラス、地上のそれに三四があるとすることもある。また、『スカンダ・プラーナ』では三五〇〇万のアプサラスがあって、そのうちの一〇六〇が重要であるともいう。



アプサラス

のちに、アプサラスはガンダルヴァとともに、森の木々に、とくに神聖な樹木ニヤグローダ（バンヤンの木）、アシュヴァッタ（ピッパラ樹・菩提樹）、ウドゥムバラ（憂曇華）に棲むとされるようになり、それらの木々の上から彼らの演奏するシンバルとリュートの音が聞こえるといわれるようになった。アプサラスは、婚礼の行列に恩恵を与え、賭博で好運を得ようとする場合に祈りを捧げられることもあった（『アタルヴァ・ヴェーダ』四・三八）。↓ウルヴァシー、ガンダルヴァ

アマラ　Amala　アーマラカともいい、ヒンドゥー教徒の最も神聖視する聖樹の一つ。漢訳仏典では阿末羅、阿摩勒樹などという。学名をEmbelica officinalis といい、和名はマラッカノキ。ヴィシュヌ神、シヴァ神と深い関係をもっている。この木の神はジャガッドマートリー（世界の母）ともいわれ、カールッティカ月（一〇～一一月）の前半の九日に供養される。



ヒンドゥー教徒の神聖視する
アマラ樹

アマラーヴァティー　Amarāvatī　(一)「不滅なるところ」の意味で、メール山の東側にあるといわれるインドラ天の都の名。デーヴァプラ（神々の町）ともプーシャバーサー（太陽の輝きをもつところ）とも呼ばれる。この輝く都には一〇〇〇の門と一〇〇の宮殿があり、かぐわしい花と聖なる木々がとりまき、多数の天上の車が意のままに動きまわっている。そこにはシッダたち、アプサラスたち、ガンダルヴァたち、アシュヴィン双神、ルドラなどが住んでいるのであるが、きびしい苦行を行なって聖なる火にグリタ（聖油）を捧げるもの、戦闘で勇敢に闘って死んだものしかこの都を見ることはできない。このアマラーヴァティーへの道は星宿の道であり、死んだものは再び地上に生れ出るまでここにとどまっている。そこで「アマラーヴァティーに入る」ということは死を意味することになった。

『デーヴィー・バーガヴァタ』によれば、ブラフマンの世界はメール山の上に一万ヨージャナ（一ヨージャナは約七～八キロメートル）の広さに拡がっていて、ブラフマプリー（ブラフマンの都）と呼ばれる都の中央にマノーヴァティーという都があり、その八方を守るかたちで、東側にインドラの都アマラーヴァティー、東南にアグニの都テージョーヴァティー、南にヤマの都サンヤマニー、西南にニルリッティのクリシュナーンジャナー、西にヴァルナの都シュラッダーヴァティー、西北にヴァーユの都ガンダヴァティー、北にクヴェーラの都マホーダヤ、東北にシヴァの都ヤショーヴァティーがあるという（『デーヴィー・バーガヴァタ』八）。

(二)キストナ河（古名クリシュナー河）の南岸にある古代の大都市（現在は一村落のみ）。かつてのアンドラ国の首都で、アショーカ王（紀元前三世紀ころ）統治の時から仏教の中心地であったため、多くのチャイティヤ（廟）やストゥーパ（塔）、彫刻などが残っている。

アムバーリカー　Ambālikā　カーシー王の三姉妹（アムバー、アムビカー、アムバーリカー）の末娘。クル族の王シャーンタヌの子、ヴィチトラヴィーリヤの母サティヤヴァティーは、アムビカーの二人と結婚したが、子供がないままに世を去った。ヴィチトラヴィーリヤの母サティヤヴァティーは、家系が絶えることを恐れて、父親を異にする息子ヴィヤーサを呼び出し、アムビカーと交わって子供をもうけるよう言いつけた。ヴィヤーサは気乗りせず、アムビカーもそっけない態度のヴィヤーサを好きになれなかったが、母の命令に従うほかなかった。このようなニヨーガ婚により生れた子供がドリタラーシュトラで、生れながらにして盲目であった。サティヤヴァティーは次にはアムバーリカーと交わるようにヴィヤーサに命じた。この時、アムバーリカーはまっ青な顔色をしていたので、生れた子供の顔は青色であった。そこで、この男の子はパーンドゥ（「青白い」の意味）と名づけられた（このドリタラーシュトラの子供たちと、パーンドゥの子供たちとの対立が原因となって、クル族を二分する大戦争が起こることになった）。五体満足な後継者の生れることを熱望したサティヤヴァティーは、再びアムビカーにヴィヤーサのもとに行くように命じたが、アムビカーは一計を案じて侍女を変装させてヴィヤーサのところに行かせた。ヴィヤーサはそれとは知らずに交わり、このとき侍女は大いに満足したので、その結果、容姿、才能ともにすぐれた子供が生れた。この子はヴィドゥラと名づけられ、クル族屈指の指導者となった（『マハーバーラタ』初編）。↓サティヤヴァティー、ヴィヤーサ

アムビカー　Ambikā　カーシー王の三人の娘のうちの一人。↓アムバーリカー

アーユス　Āyus　プルーラヴァスと、その妻である天界の水の精女ウルヴァシーとのあいだの長男として生れた。彼の妻スヴァルバーナヴィーから息子ナフシャが生れた（『マハーバーラタ』静寂編）。

あるいは、蛙の王の名前。この蛙の王の娘スショーバナ

ーは月種族の王パリークシット王と結婚したといわれる。

アヨーディヤー　Ayodhyā　ガンジス河の一支流ゴーグラー（古代のサラユー）河の岸辺にあった古代の都市。かつてのコーサラ国の首都。現在のフィザーバードより約六・五キロメートル、またデリーの南東約二一八キロメートルのところにあったと推定されている。インドの伝説上の最初の王マヌによって建設され、彼の子のイクシュヴァーク王の都となってから、彼を祖とする日種族の諸王の都となった。アヨーディヤーを治めた諸王にはマーンダートリ、ハリシュチャンドラ、サガラ、ラグ、ダシャラタ、ラーマがあり、叙事詩ではラーマの都とされる。このことによってインドの七大聖都の一つとされるが、ジャイナ教徒にとってもリシャバ、アジタなどの生れた聖地であり、また仏教徒にとっても聖地とされ、かつてはアショーカ王の建てたストゥーパがあったという。

アラカー　Alakā　クヴェーラ神の都。メール山の上にあるガンダルヴァの住居。ヴァスダーラー、ヴァススタリー、プラバーとも呼ばれる。

アラカナンダー　Alakanandā　「光とよろこび」の意で、ガンジス河の四支流のうちの一つ。プラーナの神話によれば、神々の世界のガンジス河を表わし、天界を流れるのがアラカナンダーと呼ばれ、祖先の世界（地界）を流れるのがヴァイタラニーと呼ばれる。天界を流れ出したアラカナンダー河はデーヴァヤーナ（天の道）を通ってブラフマーの世界に流れ入る。ここから、シーター、チャクシュス、アラカナンダー、バドラーという四本の支流に分かれ四つの方角へ流れ落ちる。まずシーター川はメール山の上に流れ落ち、ガンダマーダナを通って東の海に流れ入る。チャクシュス川はマーリヤヴァーン山の上に流れ落ち、ケートゥマーラを通って西の海に流れ入る。アラカナンダー川はヘーマクータ山（「雪の峰」の意でヒマーラヤ山脈の北側にある）の上に流れ落ち、バーラタヴァルシャ（インドのこと）を通って南の海に流れ入る。第四のバドラー川はシュリンガヴァーン山の上に流れ落ちて北の海に流れ入る。このうち最も神聖視されるのはアラカナンダー川で、この川で沐浴するものは大きな果報があると信じられていたという（『デーヴィー・バーガヴァタ』八）。

アラニヤーニー　Araṇyānī　『リグ・ヴェーダ』の森の女神。森林を神格化したもので「野獣の母」とも呼ばれる。

「森の女神よ、森の女神よ。今や姿も見えがてなる女神、なれいかなれば人里を尋ねざる。なれは恐れを感ぜずとてか（一〇・一四六・一）。（聞こゆるは）さながら、牛ありて草を食むに。見ゆるはさながら、（人ありて）庵を結ぶに。たそがれて、森の女神の呼ぶ声は、さながら

に車の轢り（三）。香油の薫り馥郁と、鋤かねど食はさわなせる、百獣の母、森の女神を、われ今ここに褒めてけり（六）。」（辻直四郎訳）。

アラムブシャ　Alambuṣa　バーラタの大戦争でカウラヴァ側に立って闘った巨大なラークシャサの名。リシュヤシュリンガの子で、この戦争の第一日目に、ガトートカチャと激しく闘い、倒された（戦争準備編、ドローナ編）。

アラーユダ　Alāyudha　バーラタの大戦争でカウラヴァ軍について闘ったラークシャサ（羅刹）。バカースラの兄弟。パーンドゥ軍のビーマセーナ、ガトートカチャと闘い、後者に殺された（『マハーバーラタ』ドローナ編）。

アリヤマン　Aryaman　アーディティヤ神群に属する太陽神。『アヴェスタ』神話のアイリヤマンに相当する。『リグ・ヴェーダ』においては、同様にアディティの子といわれるミトラ、ヴァルナとともに、天則（リタ）を保持し、崇拝する人々に安全な旅路を用意する神として讃歌を捧げられている。→アーディティヤ

アルカ　Arka　ヒンドゥー教徒の神聖視する樹の一つ。学名を Calotropis gigantea といい、和名はカロトロピス。太陽神スーリヤとも関係深く、また、インドの医学（アーユルヴェーダ）においては、この樹の花・葉・樹皮・樹液などすべての部分が薬用とされる。



薬用としても重要視
されるアルカ樹

アルジュナ　Arjuna　クル族の王パーンドゥの五王子のうちの第三子。『バガヴァッド・ギーター』の主人公。ユディシュティラ、ビーマとともにクンティーから生れた。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、パーンドゥ王にはクンティーとマードリーという二人の妻があったが、キンダマ仙の呪いによって妻に触れるとただちに生命をおとすと定めとされていたため、子孫をもうけることができなかった。しかし、彼の妻のうち、クンティーはかつてドゥルヴァーサス仙から神々に捧げれば子供が授けられるというマントラ（呪文）を教わっていたので、ダルマデーヴァ神にマントラを捧げて長子ユディシュティラを生み、風神ヴァーユによってビーマを生んだのち、神々の主であるインドラによってアルジュナを生んだ。アルジュナが生れたとき、天から「クンティーよ、汝の息子はシヴァと等しい力を持

つものとなり、インドラと同じように誰にも敗れることのないものとなるであろう。」という声があり、神々、七聖仙をはじめ動物たちも彼の誕生を祝ったという。

父パーンドゥ王亡きあとパーンドゥの五王子はハスティナープラのドリタラーシュトラの宮殿で、ドゥリヨーダナをはじめとするカウラヴァの王子たちと一緒に育てられ、ともに軍師ドローナとクリパから武術を学んだ。パーンダヴァの王子たちはすべての点でカウラヴァを圧倒したので、パーンダヴァとカウラヴァは次第に反目し合うようになった。中でもアルジュナは弓術において最も熟練した技をもっていただけではなく、すべてにわたって優れていたので、ドリタラーシュトラの息子たちはとくに彼を目の敵にした。王子らが教育の時期を終わったとき、ドローナは王子らにその武技を競わせようとして競技会を催した。アルジュナはこの競技会で最もすぐれた弓術を見せた。

やがて王位継承者に定められたユディシュティラがドゥリヨーダナの陰謀によってハスティナープラの都を追われたとき、アルジュナも兄に従って放浪の旅に出た。その間、パーンドゥの五王子はパンチャーラ国のドルパダ王の娘ドラウパディーの婿選びの会にバラモンの姿で出席した。近隣諸国から多くの若者が集まって来たが、ドルパダ王の用意した強弓を引き、空中高くあげた標的を射止めたのはアルジュナであった。このようにしてアルジュナはドラウパディーを妻とする資格を得たのであるが、一族の古いしきたりによってドラウパディーは五王子共通の妻となった（初編）。

クル族の長老ビーシュマの提案でクルの王国は二分され、パーンダヴァはインドラプラスタを都として平和な生活が続いた。五王子は、天上の賢人ナーラダの忠告によって、もし兄弟のうちのだれかがドラウパディーと一緒に過しているとき不意打ちしたものは一二年間追放されて禁欲生活をしなければならない、と申し合わせていた。ところが、ある日、盗人があるバラモンの家に入って家畜を盗んだ。このバラモンに助けを求められたアルジュナはただちにかけつけて盗人を捕えようとしたが、偶然にもそのとき武器はユディシュティラとドラウパディーが一緒にいる部屋に掛かっていた。アルジュナは兄弟間の約束とバラモンを守るクシャトリヤとしての義務とのどちらを取るべきかを考えたが、結局後者を選び、部屋に入って武器を取り、盗人を倒した。ユディシュティラは事情を聞いて引き止めたが、アルジュナはどんな場合でも定められたことは守らねばならないとして自分から森の中に入った。

この一二年間の追放の生活の中で、アルジュナはいくつかの冒険をした。ある時、ガンジス河で沐浴したあとで、

蛇王の娘ウルーピーによってナーガの国に引き込まれて結婚を迫られ、一夜を共にした。またある時にはマニプラ国にさまよい込んで国王チトラヴァーハナの美しい娘チトラーンガダーと恋におち、マニプラで三年のあいだ暮らした。さらに各地の霊場を巡拝したのち、彼はクリシュナの都ドヴァーラカーを訪れ、ヤーダヴァの部族ヴリシュニ族の歓迎を受けた。ここでアルジュナはクリシュナの美しい妹スバドラーに恋し、クリシュナのすすめによってライヴァタカ山を散歩しているスバドラーを力づくで奪って妻とした。追放の最後の年を霊地プシュカラで過したのちにインドラプラスタに帰還した。スバドラーはアルジュナとのあいだに一子アビマニユを産んだ。

アルジュナとクリシュナはヤムナー河のほとりの森の中で、アグニ神に出会ってカーンダヴァの森を焼くとき援助してくれるように依頼をうけ、アグニがつけた火を消してしまう森の獣たちを殺すための天の武器を与えられた。アルジュナにはガーンディーヴァと呼ばれる強力な弓と、矢が尽きることのない矢筒二個、猿の旗印をもち白馬をつないだ戦車が与えられ、クリシュナには正確に的に当たる円盤と誰も抵抗することのできない棍棒が与えられた。彼らはこのような武器によって、アグニ神を援けて燃えた森から脱出しようとするものたちを殺した（以上、初編）。

パーンドゥ王の長子ユディシュティラは二度の賭博の失敗によって国土をはじめとするすべてのものを失い、一三年間の追放の生活に入った。この間、アルジュナは神々から武器を手に入れるためにインドラ天に昇り、五年のあいだ天上で過した（森林編）。この追放の期間、パーンダヴァはマツヤ王のヴィラータの宮廷に行き、素姓をかくして王に仕えたことがあった。この時、アルジュナはブリハンナラーという女性名を名のり、宦官であると言って王女ウッタラーの舞踊師となった。カウラヴァがトリガルタ国と連合してマツヤ国に侵入して来たとき、アルジュナは王子ウッタマの御者となって若い王子を励まし、ウッタマがカウラヴァの強力な部隊を見て恐怖にかられて逃げだすと、彼をつかまえ、髪の毛をつかんで戦車の上にひきずりあげて闘わせた。カウラヴァ・トリガルタ連合軍を撃退して三日ののち一三年目が終わったので、パーンダヴァの人々ははじめて素姓を明した。ヴィラータ王は非常に喜び、アルジュナに自分の娘ウッタラーを妻とするよう申し入れたが、彼は息子アビマニユの妻としてこの申し出を受け入れた（ヴィラータ編）。

パーンダヴァとカウラヴァの対立が激しくなり、両陣営とも出来るだけ多くの国々を味方につけておこうとする努力が続けられ、有力なヤーダヴァ族の王クリシュナのとこ

ろへもカウラヴァのドゥリヨーダナとパーンダヴァのアルジュナがそれぞれ味方になるよう説得するために出向いた。これに対して、クリシュナは一方には「勧告」で、他方には「牧人の軍隊」で援助したいと答え、アルジュナは前者を、ドゥリヨーダナは後者を選んだ。そこで、クリシュナは戦闘には直接参加することなく、アルジュナの御者となってパーンダヴァを助けることになった（戦争準備編）。

一八日間にわたるクル族を二分する大戦争が始まった。アルジュナはカウラヴァ側に立った勇将ビーシュマと激しく闘い、その激しい闘いぶりは天神・鬼神も息を飲むほどであった。通常の闘いではビーシュマを倒すことはできないと知ったパーンダヴァは、シカンディンをビーシュマに対抗させ、シカンディンの背後からアルジュナが矢を放つことに決定し、アルジュナは不本意ながらもこの決定に従い、クル族中に比べるもののない大戦士ビーシュマを倒した（ビーシュマ編）。このようにしてパーンダヴァはカウラヴァを圧倒していくのであるが、一八日目の最後の夜、ドローナの息子のアシュヴァッターマンはパーンダヴァの陣営に夜襲をかけ、眠っている勇士たちを次々に虐殺した。この時、アルジュナの息子アビマニユの妻ウッタラーの腹に胎児として宿っていたクル族の最後の子も殺された。このため、ウッタラーは死児を産んだが、クリシュナによって再び生命を与えられた。この男子がパリークシットで、ユディシュティラのあとをうけて王位につくことになる（夜間襲撃編）。

大戦後、ユディシュティラは馬祀祭（アシュヴァメーダ）を行なって罪を清めたが、このときも犠牲馬とともに全国を廻る役割をうけもったのはアルジュナであり、いたるところで大戦で敗走した部族と出会い、戦わなければならず、いわばアルジュナは大戦の最後のしめくくりをすることになった（馬祀祭編）。

〔別名〕アインドリ（インドラの子）、バーラタ（バラタの子孫）、ビーマーヌジャ（ビーマの次に生れたもの）、シャクラジャ、シャクラナンダナ、シャクラスーヌ、インドラスタ、インドラートマジャ（以上「インドラの子」の意）、カウンテーヤ（クンティーの子）、パーンダヴァ（パーンドゥの息子）、パーンデーヤ（同）、パールタ（プリティーの子）、ガーンディーヴァダヌヴァン（ガーンディーヴァ弓を持ったもの）、ガーンディーヴァダーリー（同）、ガーンディーヴィー（同）、カピヴァラドヴァジャ（猿の旗印を持つもの）、グダーケーシャ（髪の毛を逆立てているもの）など。

アルナ Aruṇa 「紅いもの」の意味で、暁の神。ヴェーダの暁紅神ウシャスに相当する。闇を破って昇る太陽を

神格化したもの。プラーナの神話では聖者カシュヤパとその妻ヴィナターの子といわれる。ブラフマーの子（あるいは孫）カシュヤパの妻のうちヴィナターとカドルーが夫によく仕えたので、カシュヤパは彼女らのそれぞれに贈物を与えることにした。カドルーには一〇〇〇のナーガ（蛇）、ヴィナターにはカドルーの子供たちより一層強い力をもった二人の息子である。彼女らは森で苦行を行なったのち、カドルーは一〇〇〇個の、ヴィナターは二個の卵を産み、つぼの中に入れて育てた。五〇〇年ののち、つぼが割れてカドルーは一〇〇〇人の息子を得た。ヴィナターは苛立って一つのつぼを開けると、中から半ば成長した子供が出て来た。この子がアルナであった。さらに五〇〇年すぎたとき、別の卵が割れて完全に発育した子供が出て来た。彼がガルダであった。アルナは未発達の身体で生れたことから母親ヴィナターを憎み、彼女がカドルーの奴隷となって五〇〇年過し、その後にガルダによって救出されるよう呪いをかけた。その後でアルナは天に昇った。このため、ヴィナターはガドルーの奴隷とならなければならなかった（『マハーバーラタ』初編）。→ヴィナター、カドルー

アルブダ Arbuda 『リグ・ヴェーダ』において、インドラ神に敵対する邪悪な蛇の名。アルブダは同じくインドラ神の大敵であるヴリトラと同族で、インドラ神に殺される（八・三二、一〇・六七）。

アルンダティー Arundhatī 聖仙ヴァシシュタの妻。プラーナの神話によれば、アルンダティーは前世での名前をサンディヤーといい、ブラフマー神から生れた娘であった。彼女は生れ出た瞬間に美しい肢体をもった娘となり、その美しさは父親のブラフマー神さえも魅了するほどであった。すべての神々から好色の目で見られた彼女は恥ずかしく思い、「私は生れるとすぐに大人の身体をもつ女となった。父や兄弟たちでさえも私を欲情の目で見ている。私もまた、彼らに欲情を感じる。この罪の償いに自分の身体を火で焼いてしまおう。」と決心した。

彼女はチャンドラバーガー河の水源であるチャンドラバーガ山に行き、苦行を始めた。これを知ったブラフマー神は彼女がかわいそうになり、ヴァシシュタを彼女のもとに遣わした。彼はバラモンの少年の姿をして彼女に近づき、苦行の仕方を教えた。彼が帰ったのち、さらに彼女がヴィシュヌ神を祈念して激しい苦行を実践していると、ガルダ鳥に乗ったヴィシュヌ神が現われ、何を求めて苦行をしているのかと尋ねた。それに対して彼女は次のように答えた。「ヴィシュヌ神よ、人々はこの世に生れ出た瞬間に性的な関心をもつべきではありません。成長して一人前になったときにのみ、性的欲望をもつべきです。三界の人々は私が

純潔であることを知るべきです。一生のあいだに、私は自分の夫と定められた人以外のものを情欲をもって見ることはありません。性的な情欲をもって私を見るものはその男性の機能を失い、男女両性をそなえたものとなりますように」。ヴィシュヌ神は彼女の願いをかなえた。人々が幼児期、少年期をすぎて成年となってから性的な欲望をもつようになるのはこの時以来だという。

ヴィシュヌ神は彼女に言った。「汝が火の中で身を焼くということは予め定められた運命である。プリヤヴラタの息子のメーダーティティがチャンドラバーガー河の流域でジョーティシュトーマ祭を行なっている。一二年間にわたるきびしい苦行がいま終わろうとしている。汝は彼に姿を見られないようにして、その祭祀の火の中に身を投じなさい。そうすれば私の恩恵によって、汝はメーダーティティの娘として火の中から生れ出ることができよう。さあ、来世で自分の夫となるべき人のことだけを考えて、火の中に身を投げなさい」。サンディヤー（アルンダティー）は言われた通りにチャンドラバーガー河の岸辺に行き、メーダーティティの祭火の中に身を投げ入れた。神々の力によって、その祭祀の終りに一人の女児が生れ出た。メーダーティティは彼女を抱き上げ、アルンダティーと名づけた（あるプラーナでは、アルンダティーをプラジャーパティ・カルダマとデーヴァフーティの娘とする）。

アルンダティーはメーダーティティの草庵で成長した。彼女の遊び場であったチャンドラバーガー河の沐浴所は、今日、アルンダティーティールタとして知られている。彼女が五歳になった時、メーダーティティはブラフマー神の勧めによって、彼女の教育を太陽神スーリヤの妻サーヴィトリーとバフラーにゆだねた。アルンダティーはマーナサ湖の岸辺で、サーヴィトリー、ガーヤトリー、バフラー、サラスヴァティー、ドルパダーなどの天界の女たちと過し、教育されながら成長した。そのような時、アルンダティーはたまたまヴァシシュタと出会い、恋に落ちた。両親と親類のものも兄弟たちもこれを知って喜び、サーヴィトリーも彼女の背を軽くたたいてヴァシシュタの妻となることを祝福した。ヴァシシュタとアルンダティーとの結婚式はすべての神々の出席のもとで行なわれ、ここに三世にわたるカップルが誕生するのである。

ある時、きびしい暑さのために地上が荒れはててしまったことがあった。ヴァシシュタをはじめとする七人の聖仙たちはアルンダティー一人を森の中に残して、果物などを集めるためヒマーラヤ山に行ってしまった。残されたアルンダティーが一人で修行していると、バラモンの姿をしたシヴァ神が現われ、彼女に施し物を求めた。彼女が「ここ

には棗の実以外に何も食べるものはありません」と答えると、その棗の実を煮るようにとのことであった。言われた通りに彼女は棗の実の入ったつぼをかまどにかけ、そこに坐ってバラモンの教えを聞き始めた。このようにして、飢えも渇きも感じることなく、彼女はバラモンの教えに耳を傾けながら一二年間を過した。七人の聖仙たちがヒマーラヤから帰って来た時、シヴァ神は本当の姿を現わして言った。「聖仙たちよ、ここに坐っている女性は汝らがヒマーラヤで行なった以上の修行を実践した。すばらしい女性よ、汝の望むものは何か」。彼女の望みは、この一二年間坐ってバラモンの教えを聞いて過した場所がバダラパチャナ（棗の実を煮たところ）という名で呼ばれる聖地となるようにとのことであった。シヴァ神はこれを認め、現在でも同名の聖地となっている。→ヴァシシュタ

アンガ　Aṅga　ビハール州東部にあった国の名。その首都はチャンパー、あるいはチャンパー・プリーで、ガンジス河の岸辺にある現在のバガルプルの近くとされる。

アンガダ　Aṅgada　インドラ神の子バーリとその妻ターラーとのあいだに生れた（『マハーバーラタ』森林編）。ラーマの妻シーターを探索するために猿王スグリーヴァによってランカーに派遣された猿族に属する（『ラーマーヤナ』森林編）。彼はマドゥの森に入った猿たちのうちの首長で、ラーマとラーヴァナとの戦いにおいては、魔王の息子インドラジットと戦った（同、戦闘編）。

アンギラス　Aṅgiras　『リグ・ヴェーダ』の多くの讃歌の作者とされる聖者。七大聖者の一人。プラジャーパティ（人類の祖先）の一人ともいわれる。アンギラスはもともと太古の火供を行なう僧職の名であり、同時にアタルヴァンと同じように「呪文および呪詞」を意味していた（アタルヴァンが「神聖な幸運をもたらす呪文」であるのに対して、アンギラスは「敵対的な呪文、黒い呪文」の意）。のちには、霊感にもとづく立法者、天文学上の古典の作者ともされるようになった。

プラーナでは、アンギラスはブラフマーの意から生れた六人の聖者たち（すなわち、マリーチ、アンギラス、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ）の一人といわれる（『マハーバーラタ』初編）。また、アンギラスは世界を創造するための一六のプラジャーパティ（生類の主、人類の祖、すなわちカルダマ、ヴィクリータ、シェーシャ、サンシュラヤ、スターヌ、マリーチ、アトリ、クラトゥ、プラスティヤ、アンギラス、プラチェータス、プラハ、ダクシャ、ヴィヴァスヴァット、アリシュタネーミ、カシュヤパ）の一人とされる（『ラーマーヤナ』森林編）。彼にはシュバー、スムリティ、シュラッダー、デーヴァセーナー、ヴァ

スダーなどの妻があり、ブリハトキールティ、ブリハトジヨーティ、ブリハドブラフマー、ブリハドマナス、ブリハドマントラ、ブリハドバーサ、ブリハスパティなどの息子と、バーヌマティー、ラーガー、シニーヴァーリー、アルチシュマティー、ハヴィシュマティーなどの娘たちが生れた（『マハーバーラタ』森林編）。

プラーナにはアンギラスについての多くの物語が記されているので、そのうちの二、三をあげておく。

㈠アンギラスの失敗。昔、シューラセーナ国にチトラケートゥという名の王がいた。この王は王位を継がせる子供が生れないので悲しんでいた。ある時、この王の宮殿に来たアンギラスは、このことを聞いて王を慰め、きっと子供が生れるであろうと王に告げた。これを聞いて王とその妻クリタディユティーは非常に喜んだが、王の他の妻たちは王の心がクリタディユティーに向けられていることを嫉妬し、やがてクリタディユティーから生れてきた子供に毒を盛って殺してしまった。嘆き悲しむ王と妃のところにアンギラスがナーラダ仙を伴ってやって来て慰め、死んだ子供をよみがえらせることを約束した。アンギラスは死んだ子供の霊を呼び出し、チトラケートゥ王の息子となるよう頼んだ。しかし、その霊はこの世に生れてくる前の多くの生涯においてたくさんの両親があったので、チトラケートゥの子供となることはできない、と言って消えてしまった。このようにしてアンギラスはチトラケートゥの子をよみがえらせることに失敗した（『バーガヴァタ・プラーナ』六・一四）。

㈡アンギラスがスダルシャナに呪いをかけて蛇にした話。半神族ヴィディヤーダラのスダルシャナ（「ハンサムな男」の意）が美女たちを連れて旅をするうちに、たまたまアンギラスそのほかの隠者たちに出会ったことがあった。彼はアンギラスをからかってドゥルバーガ（「不幸な人」の意）と呼んだ。これに腹を立てたアンギラスはスダルシャナに呪いをかけ、彼を大きな蛇の姿に変えてしまい、ドバーパラユガ期にヴィシュヌがクリシュナとして出現したときに元の姿にもどしてやろうと約束した。その日からスダルシャナは蛇の姿でカーリンディー河の岸に住んでいた。クリシュナがゴーパー（羊飼い女）との愛の遊戯にふけっていたのは、このような時であった。ある夜、一匹の蛇がクリシュナの育ての親ナンダにかみついた。牛飼いたちはこの蛇を火のついた木で打ちすえたが無駄であった。そこで、クリシュナがそこに来て蛇を打つと、蛇はただちにスダルシャナの姿となり、クリシュナに一礼して天にもどって行った（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇・三四）。

㈢アンギラスがアタルヴァ・アンギラスと呼ばれるようになった理由。かつて、インドラ神は悪魔ヴリトラ・アスラを殺したのちに、アムリタサラスという湖に行き、その湖に浮ぶ蓮の中に隠れたことがあった。この時、マヌの息子であるナフシャがインドラにとってかわって天界の主になろうとした。そこでアガスティヤはナフシャに呪いをかけて蛇の姿に変えたうえ地上に追放してしまった。インドラが再び天界にもどった時、多くの神々が喜んで彼を迎えた。アンギラスもその一人で、アタルヴァ・ヴェーダの讃歌を唱えて熱烈な敬意を表わした。インドラ神は大いに喜び、アンギラスに対して、「汝はこれより、アタルヴァ・アンギラスという名で知られるようにしてやろう」と約束した。かくして、アンギラスはアタルヴァ・アンギラスとも呼ばれるのであるという（『マハーバーラタ』戦争準備編）。

↓アタルヴァン

アンシャ　Aṃśa　『リグ・ヴェーダ』のアーディティヤ神群の中の一神で、「配当の神」「分配の神」。この神は神々や王に属する犠牲の品物を人格化したものとみられている。プラーナではマリーチ一族の聖者とされる。ブラフマーの子の六兄弟（マリーチ、アンギラス、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ）の一人であるマリーチには、カシュヤパという名の息子があった。カシュヤパはダクシャの一三人の娘たちと結婚し、その一三人の中で最年長のアディティは一二人の息子、すなわち、ダートリ、アリヤマン、ミトラ、シャクラ、ヴァルナ、アンシャ、バガ、ヴィヴァスヴァット、プーシャン、サヴィトリ、トヴァシュトリ、ヴィシュヌを生んだという（『マハーバーラタ』初編）。

↓マリーチ

アンダカ　Andhaka　「盲目の者」の意で、ダイティヤ（魔族）ヒラヌヤークシャの里子。彼はものを見ることはできたが、盲者のように歩いた。これは精神的に盲目であることを表わしているという。アンダカは天界から神聖なパーリジャータの木を奪おうとしたので、シヴァ神によって殺された。

他の神話によれば、シヴァ神はアンダカとその眷族を殺そうとして多数の母神（mātṛkā）を創ったが、彼女らはこれに失敗したので、シヴァ神はヴィシュヌに助けを求めた。ヴィシュヌはただちにそこに現われ、女神シュシュカ・レーヴァティーをつくり出した。彼女はアンダカの血を飲み干し、ついにシヴァ神はアンダカを殺すことができた（『マツヤ・プラーナ』）。

また、別の神話では、アンダカはシヴァ神の子で、ヒラニヤークシャの里子として育てられたといわれる。ある時、シヴァ神が苦行をしていると、彼の娘がふざけて彼の目を手で閉じた。すると突然、あたりはまっ暗になり、その暗

黒の中から雷のような大音響とともに一人のラークシャサ（悪魔）が生れ出た。彼は暗闇のなかから生れたことによってアンダカ（暗黒）と名づけられた。ちょうどその時、ヒラニヤークシャが息子の生れることを願って苦行を行なっていた。シヴァ神は彼の前に現われ、アンダカを里子として彼に与えて、次のように約束した。「もし、アンダカが世間の憎しみを受けたり、母を求めたり、バラモンを殺したりした場合には、私自身で彼を焼き殺してしまおう」。このように言ったのち、シヴァ神は姿を消した。ある時、アンダカはシヴァ神の妻パールヴァティーを見て恋心をつのらせ、彼の取り巻きのものたちに「シヴァの妻パールヴァティーを自分のところに連れて来てくれる者こそ私の真の友人だ。いや、私の父だ。」と言った。アンダカのこうした熱に浮かされたような言葉を聞いて、プラフラーダは彼に近づき、パールヴァティーこそ彼の本当の母であることを納得させようとした。しかし、アンダカはおさまらなかった。そこで他人の妻を盗むことは最大の罪悪であると言い聞かせたが、アンダカはこの言葉にも耳をかさず、シャムバラ・アスラにパールヴァティーを連れて来させようとした。これを知ったシヴァ神は、賭博をして、もしアンダカが勝ったなら、パールヴァティーを彼のところに連れて行こうと言ってやった。立腹したアンダカはシヴァ神との闘いを始めたが、たちまち打ち破られ、実の父シヴァ神の許しを請わねばならなかった。パールヴァティーを本当の母と認め、心から懇願したのでついにシヴァ神も彼を許し、アンダカをアスラの身から救いあげたという（『ヴァーマナ・プラーナ』・六三）。→ヒラニヤークシャ

イクシュヴァーク　Ikṣvāku　日種族（スーリヤヴァンシャ）の祖。人類の祖ヴァイヴァスヴァタ・マヌの子。伝説によれば、彼はマヌがくしゃみをした時、その鼻の孔から生れたとも、またぐらから生れたともいわれる。彼の都はアヨーディヤーで、彼はこの地方を第二の世界周期の初めころに支配していたという。イクシュヴァーク王とその一族は西北インドから来た人々であり、スキタイ、あるいはフンの系統を引くものであるとも、あるいはイクシュという名称からオクサス Oxus（イクシュ、あるいはヴァンクシュ Vankṣu）河地方のモンゴリア系の民族に属するとも推定されている。伝説上、彼には一〇〇人の王子たちがあったといい、そのうちヴィククシ、ニミ、ダンダの三人が重要である。長男のヴィククシは父のあとをついでアヨーディヤーの王となり、次男のニミは別の王朝を建てて、この系統からジャナカ王が出た。ダンダはイクシュヴァーク王の三男で、ゴーダーヴァリー河とナルマダー河のあいだに小さな王国をつくったという。

イーシャ　Īśa　「支配者・主」の意で、一般的にはシヴァ神のこと。

イーシャーナ　Īśāna　「支配者」の意で、『リグ・ヴェーダ』ではルドラ神の別名（二・三三）として用いられ、のちにはシヴァ神を意味するようになった。

イダー　Iḍā　供犠祭の食物、神酒を神格化した女神。『リグ・ヴェーダ』においては、供犠における最初の祭祀であるプラヤージャと最後のアヌヤージャとのあいだに捧げられた供物・神酒を意味した。

『シャタパタ・ブラーフマナ』の伝説では、イダーはマヌが子孫をもうけようとして行なった供犠祭の供物から生れたといわれ、マヌは彼女によって子孫を得たといわれる（一・八・一）。

プラーナでは、イダーはヴァイヴァスヴァタ・マヌの娘で、ブダと結婚してプルーラヴァスを産んだといわれる。ヴァイヴァスヴァタ・マヌは男子の生れることを願って、ミトラとヴァルナ両神に犠牲をささげたが、供犠僧が祭祀のしかたを間違えたため、生れてきたのは娘のイダー（あるいはイラー）であった。両神の好意により、この娘は男子に変えられ、スディユムナと名づけられた。しかし、シヴァ神の呪いによって、スディユムナは再び女性に変えられ、イラーとなってブダと結婚し、プルーラヴァスを産んだ。そののち、ヴィシュヌ神の恩恵によって、さらに男性スディユムナとなり、三人の息子の父親となったといわれる（『バーガヴァタ・プラーナ』）。→プルーラヴァス

イダーヴィダー　Iḍāviḍā　あるいはイラーヴィラー。聖仙トリナビンドゥとアプサラスのアラムブシャーとのあいだに生れた娘で、ヴィシュラヴァの妻となって、富の神クベーラを産んだ（『バーガヴァタ・プラーナ』四・一）。あるいはプラスティヤの妻となって、ヴィシュラヴァを産んだともいわれる。

イラー　Ilā　『リグ・ヴェーダ』においてはサラスヴァティー、マヒーとともに、歓喜を与える三女神の一人。「家畜の群の母」（五・四一）ともいわれる。プラーナ文献では、イラーはヴィダーともいわれ、さまざまな物語が語られている。→ヴィダー

インドラ　Indra　『リグ・ヴェーダ』の中でももっとも多くの讃歌（全体の約四分の一）を捧げられている武勇神、英雄神、あるいは軍神。仏教では帝釈天と呼ばれる。その起源は古くインド・イラン共同時代にまでさかのぼり、西暦前一四世紀の中ごろ、小アジアを支配したヒッタイト王スピルリウマ（前一三八〇—一三四六）とミタニ王マティワザとのあいだに結ばれた条約の中に、ミトラ、ヴァルナ、ナーサティヤ（アシュヴィン双神）の名とともにIndarあ



インドラ神

るいは Indara という名で記されている（辻直四郎『インド文明の曙』二八ページ以下）。これらの古い起源をもつ神々のうちで、ヴァルナが真実・道徳を司るものとして畏敬されたのに対して、インドラは武勇の方面を代表するものとなった（ただし、古代イランの神話においては、インドラは悪魔の列に入れられた）。『リグ・ヴェーダ』の神話では、インドラは雷神としての性格が最も強く表わされている。頭髪や髭をはじめ全身すべて茶褐色で、暴風神マルトの群を従えて二頭の馬ハリのひく戦車に乗って空中を駆けめぐる。神酒ソーマを好んで飲み、ヴァジュラ（金剛杵＝電撃）を投げつけて悪魔たちを殺害し、アーリヤ人を保護する。インドラに退治される悪魔は多数にのぼるが、最も有名なのはヴリトラ（もと「障害物」の意味）とヴァラであり、このことによって、インドラは「ヴリトラを殺す者」Vṛtra-han、「ヴリトラの敵」Vṛtra-ari、「ヴァラを殺すもの」Vala-bhid, Vala-han とも呼ばれる。『リグ・ヴェーダ』におけるインドラは、悪魔や強敵を屈服させて人々を守り、彼の信者には寛大な態度をとるものとして描かれている一方、暁紅神ウシャスの車を壊したり、太陽神スーリヤの車輪を奪い取ったり、暴飲暴食をしたりする面をもっている。

　インドラの出生については次のような記述がある（『リグ・ヴェーダ』四・一八）。

　インドラの母は「千ヵ月また多年のあいだ」彼を胎内に宿していたが、生れたのち、インドラを神々の嫉妬から守るために棄てた。彼の父も敵意をもっており、彼は神々の同情をすべて失い、困苦のうちに放浪する時代を過ごさなければならなかった。この時、ヴィシュヌ神が彼に友情を示し、鷲がソーマ酒をもたらして、やがてインドラが武勇神として活躍する舞台が開かれる。

　「われ今宣らん、インドラの武勲（の数々）を、ヴァジュラ（電撃）手に持つ（神）が、最初にたてしところ、

彼はアヒ（「蛇」＝ヴリトラ）を殺し、水を穿ちいだし、山々の脾腹を切り裂けり（一・三二・一）。彼は山にわだかまるアヒを殺せり。トゥヴァシュトリ（工巧神）は彼のために鳴りひびくヴァジュラを造れり。鳴きつつ（仔牛のもとに赴く）乳牛のごとく、水は流れて、速かに海に向かって落下せり（二）。彼は牡牛のごと振舞いてソーマ（神酒）を選べり。彼はトリカドゥルカ（地名？）においてソーマを飲めり。寛裕なる（神）は飛道具としてヴァジュラを執りたり。彼は蛇族の初生児なるもの（アヒ）を殺せり（三）。インドラよ、汝が蛇族の初生児を殺せしとき、しかして幻力に富む者（悪魔たち）の幻力を挫折せしめたるとき、そのとき太陽・天界・暁紅を出現せしめ、爾後汝は実に敵対者を見出いださざりき(四)。」

（辻直四郎訳）。

　プラーナ文献では、一般に、インドラの家系はヴィシュヌに始まるとされ、ブラフマーの長子マリーチの子カシュヤパとダクシャの長女アディティとのあいだに生れたといわれる。カシュヤパとアディティとのあいだには一二人の息子、すなわちダートリ、アリヤマン、ミトラ、インドラ、ヴァルナ、アンシャ、バガ、ヴィヴァスヴァット、プーシャン、サヴィトリ、トヴァシュトリ、ヴィシュヌがあって、アーディティヤ（アディティから生れたものたち）と呼ばれているが、このほかにも二一人の息子がおり、インドラはそれら三三人のうちの長子であったとされる（『マハーバーラタ』初編）。インドラは神々の支配者となり、アイラーヴァタという名の象とウッチャイヒシュラヴァという名の馬に乗り、ヴァジュラを武器として悪魔たちと闘った（『アグニ・プラーナ』・五一、『マハーバーラタ』初編）。

　〔プラーナ文献に説かれるインドラの物語〕

　㈠「インドラとガルダ」　インドラの父カシュヤパは他の妻ヴィナターとのあいだにガルダ（霊鳥）、アルナの二人の息子、別の妻カドルーとのあいだに多数のナーガ（蛇）をもうけた。ところが、カドルーとその子供たちはヴィナターを子供たちとともに捕えて召使いにしてしまい、もし天界からアムリタ（「不死・甘露」の意。神々とアスラが大海をかきまわしたとき、ミルクの海から生れた美味で高値な食物）を持って来たら解放してやろうと約束していた。ある時、カドルーは自分を子供（ナーガ）たちとともに、大海の中にある島ナーガーラヤ（「蛇の家」の意）に連れて行くようガルダに命じた。そこでガルダは彼らを肩の上に乗せ、空高く飛んだところ、太陽の強い熱によってナーガたちは死んだようになってしまった。困惑したカドルーはインドラに祈って救いを求めた。インドラが雨を降らせて大気を涼しくし、彼らを救ってやったので、カドルーたち

は大海の中の美しい島に着くことができた(『マハーバーラタ』初編)。

ガルダは天界からアムリタを持ち帰って自由となろうと決心し、天上に飛び上がってそれを手に入れた。断りもなしにアムリタを持ち去ろうとしたガルダに腹を立てたインドラは、得意の武器ヴァジュラで攻撃を加えたが、ガルダはその美しく強力な翼をひろげてこれを防ぎ、全く傷つくことはなかった。不思議に思ったインドラは、それがガルダのスパルナ(「美しい翼」の意。ガルダの別名にもなっている)と呼ばれる翼のためであると知ると、かえって満足し、ついに天界からアムリタを持ち去ることを許した(同、初編)。

(二)「インドラとアルジュナ」 パーンドゥ王の妻クンティーは聖仙ドゥルヴァーサスから子供を授かるための五つのマントラ(呪文)を教えられていた。結婚前に太陽を観想しながら第一のマントラを唱えるとカルナが生れた。結婚後、三つのマントラにより、ダルマデーヴァによってユディシュティラが生れ、ヴァーユによってビーマが、インドラによってアルジュナが生れた。そこで、パーンドゥの第三王子アルジュナは「インドラの子」とも呼ばれる(『マハーバーラタ』初編)。

アルジュナは森林で隠棲中、シヴァ神を礼拝するために聖なる山カイラーサに登った。その途中、インドラが彼の前に姿を現わして彼に敬意を表した(同、森林編)。

(三)「インドラとヴリトラ・アスラとの闘い」 インドラのもっとも有名な手柄は悪魔ヴリトラ・アスラを殺したことである。ヴリトラ・アスラの指揮のもとに、カーラケーヤやラークシャサなどの悪魔たちが神々を悩ませたことがあった。激しい闘いが行なわれ、インドラはヴリトラ軍からの雨のような矢によって半死半生の状態になった。それを見たヴァシシュタは、彼の神聖な力によって直ちにインドラをよみがえらせた。通常の手段でヴリトラを殺すことが不可能であると考えた神々は、インドラの指導のもとに、ヴィシュヌ神に対して救いを求めた。ヴィシュヌ神から、ヴリトラを殺すにはダディーチャという聖仙の骨を用いるしかないと教えられた彼らは、ダディーチャ仙のところに行って事情を説明し、助けを求め了承を得た。この聖仙の身体から必要な骨を取り出したインドラは、ヴァジュラとともに聖仙の骨を用いて、ついにヴリトラを殺すことができた(同、森林編)。

(四)「インドラとチャヴァナ」 インドラはアシュヴィニーデーヴァたちに神酒ソーマを飲むことを許さなかった。悲しんだ彼らはインドラの世界を去ろうとして森の中を通った時、盲目の聖者チャヴァナの妻スカニヤーと出会った。

インドラ

彼女の余りの美しさに心を奪われた彼らは、盲目の聖者の妻でいるよりも自分たちの妻となることを彼女に勧めた。しかし彼女はこれをきっぱりと断わったため、彼女の貞節さにうたれた彼らはチャヴァナに視力を与え、彼を美しい眼をもった若者に変えてやった。このことの返礼として、チャヴァナは彼らがソーマ酒を飲むことができるように許可を取ってやることを約束し、供犠を行なったところ、インドラをはじめアシュヴィニーデーヴァたちもそれに参加した。ここでもインドラは前からの主張を曲げなかったが、チャヴァナのねばり強い説得により、ついにアシュヴィニーデーヴァたちがソーマ酒を飲むことを認めた(同、森林編)。

(五)「インドラとクル王」 『マハーバーラタ』の主題となったクル族の大戦(バーラタ戦争)の起こるずっと以前、クルという名の王がクルクシェートラ(クル族の土地)を治めていた。たまたまその土地にやって来たインドラは、王がここで死んだものたちを天に昇らせるための祭祀を行なっているのを見て、天界にもどった。インドラからこのことを聞いた他の神々は、すべての人々が天界に昇ってしまったなら、神々の受けとる供物が減ってしまうと考えて、インドラに対してクル王に恩恵を与えるよう忠告した。これを聞き入れたインドラは地上にもどって、この地で次のようにして死んだものは天界に迎えようと約束した。すなわち、①断食によって死んだもの、②勇敢に戦って戦死したもの、③前生においては人間であったが、この世に動物として生れたもの、である。その時からクルクシェートラは重要な土地となった(同、シャリヤ編)。

(六)「インドラの集会堂」 パーンドゥ族の都インドラプラスタでパーンドゥ族のための集会堂を建てようとした時に、ナーラダ仙が天上のインドラの集会堂は次のようであると教えた。

インドラは光り輝く集会堂をもっているが、それは高さ一五〇ヨージャナ(一ヨージャナは約七~八キロメートルであるから、約一〇五〇~一二〇〇メートル)、幅一〇〇ヨージャナ(約七〇〇~八〇〇キロメートル)で、階層をなした美しい建物と神聖な木で満たされ、光り輝いている。インドラはその神聖な光の中に坐り、その傍に神妃シャチーデーヴィーがひかえている。彼は一点の汚れもない衣をつけ、首環をまいている。彼の囲りには、マルト神群の神々や他の神々、聖仙たちが光の輪につつまれて立っている。パラーシャラ、パルヴァタ、サーヴァルニ、ディールガタマス、ヤージュニャヴァルキヤ、ウッダーラカ、シュヴェータケートゥ、パーンディアなどの有名な聖者たちもインドラの集会のメンバーである。このようにして、インド

ラの集会堂は、最も美しく、最も盛大なものである（同、集会編）。

(七)「インドラと雌牛カーマデーヌ」　ある時、インドラは雌牛のスラビ、すなわちカーマデーヌがインドラの世界で鳴いているのを見て、そのわけを尋ねた。彼女は「インドラよ、私の子供の家畜たちが、農夫のくび木の下で苦しがってうめき声をあげています。私はそれを見ると胸がつぶれそうになるのです。」と答えた。インドラはカーマデーヌの涙に心をうたれて、激しい雨を降らせた。その結果、田や畑を耕すことはできなくなり、農夫は仕事を止めざるを得なくなった。このようにして、雌牛カーマデーヌの涙の結果としてインドラは世界中の家畜たちに休息を与えたのであった（同、森林編）。

(八)「インドラとシビ王」　ある時、インドラとアグニは慈悲深いことで名高いシビ王を試そうとした。インドラはワシの姿に、アグニは鳩の姿となり、アグニの鳩がシビ王のひざの上に止まると、インドラのワシがそれをつかまえようとした。鳩がシビ王に助けを求めると、シビ王はこころよくそれを承知した。ワシが鳩は自分のえじきであるから返すようにと言うと、シビ王は鳩を助ける代わりに、その鳩の肉の重さだけ自分の肉をワシに与えようと申し出た。そこで、鳩が天びんの片方の皿の上に置かれ、もう一方の皿の上にはシビ王の身体から切り取られた肉片が積まれていった。しかし、どれほど王の肉片を積みあげても、鳩の肉と等しい重さにはならなかった。この段階で、インドラとアグニは真実の姿を現わし、シビ王の自分の身を犠牲にしてまでも鳩を救おうとする心を褒めたたえ、以前にも増した繁栄を約束した（同、森林編）。

なお、この物語は仏教経典の中で全く同じように語られている（『アヴァダーナシャタカ』、『賢愚経』、『菩薩本行経』、『六度集経』、『大荘厳論経』など）。

(九)「インドラが傘を奪われた物語」　ある時、悪魔ナラカースラが天界に侵入して神々と闘い、インドラの傘とその母アディティのイヤリングを奪ったことがあった。悲しみ嘆いた末、インドラはクリシュナに泣きつき、傘とイヤリングを奪い返してくれるよう頼み込んだ。クリシュナはサティヤバーマーをともない、霊鳥ガルダに乗ってナラカースラの住むプラーグジョーティシャに行き、かの悪魔を打ち倒してインドラの傘とアディティのイヤリングを奪い返して天界にもどった。インドラとアディティは奪われたものがもどって来たので大いに喜んだ。

ところで、プラーグジョーティシャからの帰途、クリシュナはサティヤバーマーの求めに応じて、彼女のためにパーリジャータの木の小枝を切ってやった。このことがイン

ドラを立腹させ、クリシュナとインドラをはじめとする神々の闘いが始まったが、インドラは敗北し、クリシュナはパーリジャータの木を持ち、サティヤバーマーを連れて彼の住む都ドゥヴァーラカーへと帰って行った（『バーガヴァタ・プラーナ』第一〇編）。

(十)「インドラと悪魔ナムチ」　ラークシャサ（悪魔）のナムチは、インドラと闘ったとき、太陽の光の中に隠れてしまった。インドラは友人のふりをして彼に近づき、出てくれば決して殺さないからと約束した。これを信じてナムチが姿を現わしたところ、うす暗がり時の海の波から集めた泡によってナムチの首を切り落してしまった。ところが、切られた首が「お前は約束を破って友人を殺した」といいながら彼につきまとって離れなかったので、インドラはブラフマー神に助けを求めた。ブラフマー神は、彼にショーナプニヤという沐浴場で木浴し、罪を浄めるようにと忠告したので、インドラはその言いつけに従ってサラスヴァティー河で沐浴し、汚れのない身となった（『マハーバーラタ』シャリヤ編）。

(十一)「インドラとガウタマ」　『マハーバーラタ』には、インドラが死んだバラモンをよみがえらせた物語が記されている。ガウタマという名の一人のバラモンが、自分の家を捨てて、ダスユ（非アーリヤ系の原住民）の村に住み、ダスユ族の妻を娶り、その風習に従って生活していた。その時、たまたまそこに通りかかった他のバラモンがこれを見て嘲笑ったので、彼は翌朝その村を出て他の場所に住家を探した。長く歩いたあと、ガウタマは疲れて一本のニヤグローダの木の下で眠りについた。その木の上にはナーディージャンガという名の鳥の王が住んでいた。鳥の王はガウタマとすぐに親しくなり、ガンジス河から魚をとって来て彼に与え、自分の翼で彼をあおいだ。ある日、ガウタマは、自分は貧しいバラモンで、いくらかの財産を手に入れたいと思っていると鳥の王に言った。この国に、鳥の王の友で多くの財産をもっているヴィルーパークシャというラークシャサ（悪魔）がいた。鳥の王はガウタマをこのラークシャサのところに行かせ、いくらかの財産を与えるようにと懇請した。友人ナーディージャンガの願いを入れてヴィルーパークシャはガウタマに沢山の金を与えたので、彼はその金を頭の上に乗せ喜び勇んでニヤグローダの木の根本に帰って来た。親切な鳥の王ナーディージャンガは帰って来た友人を手厚くもてなし、夜は彼の傍で寝た。しかし、この時、ガウタマの心に鳥の肉を食いたいという邪悪な欲望がおこり、彼はついに眠っている鳥を殺してしまった。友人の死を知ったヴィルーパークシャは立腹してガウタマを殺害し、その肉をダスユたちに食わせた。ヴィルーパーク

シャは目に涙を一ぱいにためて薪を積みあげ、ナーディージャンガの屍体を火葬にした。その時、ブラフマー神に命じられた天の牝牛スラビは、天界の牛乳を出してナーディージャンガをよみがえらせた。たまたま、そこへやって来たインドラはヴィルーパークシャからこの話を聞いて、ナーディージャンガはブラフマー神の呪いの結果として死んだのであり、彼自身もブラフマーの集会に招かれたのに出席を拒否してこの神を怒らせたことがあると語った。よみがえった鳥の王ナーディージャンガは崇高な心の持主だったので、ガウタマにも生命を与えるようインドラに懇願した。インドラは鳥の王の心情に感じ入り、ガウタマに再び生命を与えて天界にもどった（『マハーバーラタ』静寂編）。

〔仏教におけるインドラ〕

仏教においては因陀羅と音写され、また釈迦提桓因陀羅（Śakra-devānām indra. 諸天のうちの王、神々の主の意味）とも音訳し、帝釈天・天帝釈・天主帝釈・天帝などと訳される。仏教神話における宇宙の中心、スメール山（須弥山）の頂上にある忉利天の善見城に住む神である。梵天とともに仏教を守る主神、十二天の随一として東方を守護する。

〔インドラの別名〕マヘーンドラ（偉大なインドラ）、シャクラ（帝、帝王）、マガヴァーン（惜しみなく与えるもの、気前のよいもの）、ヴリトラハン（ヴリトラを殺すもの）、ヴァジュラパーニ（ヴァジュラを手にするもの）、メーガヴァーハナ（雲に乗るもの）、パーカシャーサナ（悪魔パーカをこらしめるもの）、シャタクラトゥ（百の犠牲を行なうもの）、デーヴァパティ（神々の主）、スラーディパ（神々の主たるもの）、ディヴァスパティ（天空の主）、マルトヴァーン（風の王）、スヴァルガパティ（天界の主）、ジシュヌ（勝れたもの）、プランダラ（都市を破壊するもの）、ウルーカ（ふくろう）、ウグラダヌヴァン（恐ろしい弓をもつもの）。なお、インドラの住む天はスヴァルガ、その都はアマラーヴァティー、宮殿はヴァイジャヤンタ、その庭はナンダナ、カンダサーラ、パールシュヤ、彼の乗る象はアイラーヴァタ、馬はウッチャイヒシュラヴァ、その御者はマータリ、彼の引く弓はシャクラダヌス、剣はパランジャと呼ばれる。→ヴリトラ、ガルダ、カーマデーヌ

インドラジット Indrajit ランカーの魔王ラーヴァナの子メーガナーダ（「雲の咆哮」、すなわち「雷鳴」の意）のこと。インドラを破ったことがあるのでインドラジット（インドラに打ち勝った者）といわれる。ラーヴァナが天界でインドラの軍勢と闘った時、父の魔王とともに最も勇敢に闘ったのがメーガナーダであった。彼はシヴァ神から授けられた怪力でインドラ軍を打ち破り、インドラを捕え

てランカーに連行した。ブラフマーを首長とする神々はインドラを解放するように要求し、メーガナーダにインドラジットの名を与えた。しかし、メーガナーダは「不死」の恩恵を与えてくれなければ解放しないと言い張った。ブラフマーは初めはこれを認めようとしなかったが、メーガナーダが強く要求したため、ついにこれを認めた。『ウッタラ・ラーマーヤナ』には、メーガナーダをシヴァ神の子とする次のような物語がある。

かつてアプサラスの女マドゥラーがカイラーサ山のシヴァ神のもとに行ったことがあった。その時、シヴァの神妃パールヴァティーは外出中だったので、マドゥラーはシヴァ神を誘惑してたちまち懐妊した。パールヴァティーがもどって来て彼女の留守のあいだに起こった出来事を知って腹を立て、マドゥラーに呪いをかけて古井戸のなかの蛙にしてしまった。蛙にされたマドゥラーはひたすら許しを求めたので、哀れに思ったシヴァ神は、一二年ののち彼女が美しい乙女に変り、マヤの娘となって偉大な王と結婚することができるようにしてやろうと約束した。こうして一二年経ったとき、マドゥラーは美しい少女に生れ変った。シヴァ神はこの少女を自分の宮殿に連れ帰り、マンドーダリーと名づけ、自分の娘として育てた。成長したマンドーダリーはランカーの王ラーヴァナの妻となったが、この時、一二年前のシヴァ神の精子が活動をはじめ、やがて男の子が生れた。ラーヴァナはこの生れて来た子にメーガナーダという名を与えた。彼が怪力の持主であるのはシヴァ神の子であるからだという。このような怪力をもつインドラジットがどうして殺されたかについては次のような物語がある。

ランカーでの戦闘において、ラーマとラーヴァナ、インドラジットとラーマの弟ラクシュマナとのあいだに死闘が続けられた。通常の方法で勝利することはできないと知ったインドラジットは、一計を案じて偽物のシーターを作り出し、これを殺してみせた。シーターが本当に死んだものと思ったラクシュマナと猿王ハヌマーンはその軍隊を引きあげ、そのことを聞いたラーマも意気消沈した。他方、インドラジットはニクムビラーというところで、ラーマに勝つための祭祀を始めた。しかし、ラーヴァナの兄弟であるヴィビーシャナがラーマに、この祭祀を妨げて完成させなければインドラジットを殺すことができるというブラフマー神の言葉を伝えたので、ラーマとラクシュマナは直ちにニクムビラーに行き、インドラジットに戦いをいどんだ。インドラジットはついに祭祀の座より立って闘わなければならないことになり、その結果、ラクシュマナに殺された（『ラーマーヤナ』戦闘編）。→ラーヴァナ、ラクシュマナ

ナラ王とその妻ダマヤンティーの子供（『マハーバーラタ』森林編）。

インドラセーナ　Indrasena　『ナラ王物語』の主人公

インドラーニー　Indrāṇī　インドラ神の妻で、シャチーともアインドリーともいわれる。また、プローマーの娘であることからパウローミーと呼ばれることもある。インドラーニーの名は『リグ・ヴェーダ』の中に記されており（一〇・八六など）、『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』では大勢の女神のなかで彼女がとりわけ美しく官能的だったので、インドラがその妻に選んだと記している（二・四・二・七）。叙事詩ではパンチャーラの王女ドラウパディー、すなわちパーンチャーリーがインドラーニーの部分的な化身であるといわれる（『マハーバーラタ』初編）。



インドラーニー

インドラプラスタ　Indraprastha　「インドラ神の住居」の意で、『マハーバーラタ』に登場するクル族に属するパーンダヴァの首都。現在のデリーに近いインドラパットがその跡であるといわれる。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、クル族の王ドリタラーシュトラに命じられてパーンドゥ王の五王子のうち長子ユディシュティラ（ダルマプトラ）は兄弟たちともにカーンダヴァプラスタの森に行った。そして、この森の中にクリシュナや他の聖者たちの力をかりてインドラの世界（インドラローカ）のように美しい都インドラプラスタを建てたという（集会編）。

ヴァイヴァスヴァタ　Vaivasvata　「太陽神ヴィヴァスヴァット Vivasvat の子」の意で、マヌの別名。ヴァイヴァスヴァタ・マヌといわれることもある。『シャタパタ・ブラーフマナ』の神話では、ヴァイヴァスヴァタ・マヌは大洪水が引いたあと、犠牲の祭祀を行ない、供物を水の中に投げ込んだ。すると、水中より美しい女性イダーが生れたという（一・八）。プラーナによれば、大洪水のあと生き残ったヴァイヴァスヴァタ・マヌとその妻シュラッダーと

のあいだには多くの子供が生れ、そのなかで主なものの名はアシュヴィニークマーラ、レーヴァタ、スディユムナ、イクシュヴァーク、ヌリガ、シャリヤーティ、ディシュタ、ドリシュタ、ナリシュヤンタなどであるといわれる。↓マヌ

ヴァイカルッタナ　Vaikarttana　クンティー（あるいはプリター）とスーリヤ（太陽）とのあいだの子であるカルナの別名。太陽の別名ヴィカルタナに由来する名（『マハーバーラタ』）。↓カルナ

ヴァイシャムパーヤナ　Vaiśampāyana　黒ヤジュル・ヴェーダの『タイッティリーヤ・サンヒター』を説いたと伝えられる古聖仙。プラーナの神話ではヴィヤーサの弟子で、師ヴィヤーサの作った『マハーバーラタ』をジャナメージャヤ王に語った人といわれる（『マハーバーラタ』初編）。

ヴァイシャーリー　Vaiśālī　ブッダの時代に繁栄したリッチャヴィー国の首都。ビハール州パトナの北約二〇キロのところにあり、伝説上の創建者はトリナビンドゥの息子のヴァイシャラ。ブッダの布教活動の中心地の一つであり、第二結集（第二回目の仏教聖典の編纂会議）の舞台となったところでもある。仏典の中では商業都市として記され、大乗経典『維摩経』の主人公である維摩（ヴィマラキールティ）は、ヴァイシャーリーの商業資本家であった。

ジャイナ教徒にとっても開祖マハーヴィーラの生誕の地として重要な聖地である。歴史的にはリッチャヴィー族はマガダ国王アジャータシャトルによって征服されたが、五世紀のグプタ王朝まで都市として栄えた。

ヴァイシュヴァーナラ　Vaiśvānara　火神アグニの別名。「すべての人々に共通するもの」「普遍的なもの」の意。『リグ・ヴェーダ』では、アグニ・ヴァイシュヴァーナラの名のもとに一〇数篇の讃歌が捧げられており、もともとアグニの一つの様相であったものが独立の神格のように扱われている。↓アグニ

ヴァイシュラヴァナ　Vaiśravaṇa　クヴェーラの別名。「ヴィシュラヴァスの子」の意で、仏教では毘沙門天あるいは多聞天といわれる。↓クヴェーラ

ヴァイディヤナータ　Vaidyanātha　シヴァ神の別名で「医王」の意。シヴァ神の十二大リンガのうちの第六番目。

ヴァイナテーヤ　Vainateya　「ヴィナター（カシュヤパの妻）の子」の意で、ヴィシュヌ神の乗る聖鳥ガルダの別名の一つ。

ヴァイラージャ　Vairāja　七つの祖霊（ヴァイラージャ、アグニシュヴァーッタ、ソーマパー、ガールハパティヤ、エーカシュリンガ、チャトゥルヴェーダ、カラ）の一

（『マハーバーラタ』集会編）。

ヴァーカー　Vākā　巨人マーリヤヴァーンの娘。ヴィシュラヴァスと結婚して、三人の息子、トリシラス、ドゥーシャナ、ヴィディユッジフヴァと一人の娘アヌパーリカーを産んだ（『ブラフマーンダ・プラーナ』三、八）。

ヴァーサヴァダッター　Vāsavadattā　スヴァンドゥの伝奇小説『ヴァーサヴァダッター』の女主人公。ウッジャイニーの王女である彼女と、カンダルパケートゥとの恋愛を中心に、物言うオウム、魔法の馬、呪詛による石像への変身などのテーマがこの作品の内容となっている。

ヴァシシュタ　Vasiṣṭha　名高いヴェーダの聖仙。『リグ・ヴェーダ』の讃歌の作者と伝えられる聖仙たちの一人。七大聖仙、あるいは十プラジャーパティの一人ともいわれる。『リグ・ヴェーダ』によれば、ヴァシシュタはヴァルナとミトラの女神ウルヴァシーへの愛から生れたといわれる（七・三三）。ヴェーダ以後の神話においては、彼のライヴァルであるヴィシュヴァーミトラとの争いがさまざまな形で伝えられている。

まず『シャタパタ・ブラーフマナ』によれば、十王の戦いがあった時、ヴァシシュタはトリツス王スダースの帝師となり、前の帝師ヴィシュヴァーミトラは即座に解雇された。そしてヴィシュヴァーミトラが敵軍に加わったことにより両仙の対立が始まったという。『マハーバーラタ』の伝説では、彼はスダース王の師ではなくてその息子サウダーサの師とされる。ヴァシシュタに敵対するヴィシュヴァーミトラはなんとかして彼の地位を奪い返そうと考えていた。ヴァシシュタには一〇〇人の息子があり、そのうちの長男をシャクトリといった。ある時、彼は路上でカルマーシャパーダという名の王に出会い、道のわきに寄って王を通すように命じられた。しかし、彼は、たとえ王であってもバラモンに道を譲るべきであると礼儀正しく答えたところ、腹を立てた王は持っていたむちで彼を打ちすえた。そこで、シャクトリはこの王に食人鬼となるよう呪いをかけようとした。姿を隠してその場にいたヴィシュヴァーミトラは、一人の食人鬼ラークシャサに命じて、王の中に入らせた。このようにして食人鬼となった王の最初のえじきは、皮肉にもシャクトリその人であった。ヴァシシュタの子供たちは次々にこの食人鬼に食われ、ついに一〇〇人とも食い尽くされてしまった。悲嘆にくれたヴァシシュタは生きる望みを失い、さまざまな方法で自殺しようとした。メール山の頂上から身を投げたが、彼の落ちた岩は綿のように柔かであった。また、燃える森の中に走りこんだが、まったく熱気を感ずることもなく、首に重い石を結びつけて海の中に身を投じたが、波が彼を岸に運んで死ぬことができなか

った。両手をひもで結んで雨で増水した河に飛び込むと、河の流れが彼の手の結び目を解いた（vipāśa）。これ以来、この河はヴィパーシャー（解き放したもの）と呼ばれるようになった（現インダス河上流の五支流のうちの一つベアズ河がこれに当るという）。次にワニのいる河に身を投げたところ、河の水は一〇〇の方向に流れ出てしまった。このことによって、この河はシャタ・ドル（一〇〇の支流をもって流れるもの）と呼ばれるようになった（ヒマーラヤ山脈中にあるマナサロワラ湖から流れ出してインダス河の五支流の一つとなるサトレジ河がこれに当るという）。このようにして、何度も自殺しようとして果せないままヴァシシュタは庵にもどり、森の中で食人鬼にとりつかれたカルマーシャパーダ王に出会った。食人鬼の王はさっそく彼を食おうとしたが、ヴァシシュタはこの王にとりついた鬼を払い落して一二年にわたる苦しみから救い出し、彼の王国に帰らせた。（『マハーバーラタ』初編）。

プラーナの神話では、ヴァシシュタが三度生れ変わった物語がよく知られている。まず最初の出生はブラフマー神のプラーナ（呼吸・生命）から生れたといわれる場合で、このときには同時にナーラダが右の親指から、ダクシャがひざから、ブリグが皮膚から、クラトゥが手から生れたという。この第一の生涯において、彼はアルンダティー（あるいはウールジャーともいわれる）と結婚し、七人の子供、すなわちチトラケートゥ、プローチス、ヴィラチャ、ミトラ、ウルバナ、ヴァスブリディヤーナ、ディユマーンをもうけた。彼らはいずれも、すぐれた聖仙となった。ダクシャの供犠祭で多くの神々が死に、ヴァシシュタも神々とともに死ぬと、その妻アルンダティーも夫のあとを追った。こうして、ヴァシシュタとアルンダティーの二人は天空に昇り、二つの星となったという。

ダクシャの供犠祭で死んだヴァシシュタは、ブラフマー神への犠牲の火の中から再びこの世に生れた。この第二の生涯でのヴァシシュタの妻は、アルンダティーの生れ変わりであるアクシャマーラーである。この第二の生涯はイクシュヴァーク王朝のニミ王の呪いによって終わりをつげる。第三の生涯はミトラ・ヴァルナの子としてつぼの中から生れることによって始まる。この生涯ではヴァシシュタはアガスティヤの兄弟で、その妻はナーラダの妹のアルンダティーである。

プラーナの神話ではこれらの第二と第三の生涯において、ヴィシュヴァーミトラとの争いなど、多くのエピソードが語られる。ヴァシシュタとヴィシュヴァーミトラとの生涯にわたる争いの原因と結末について、プラーナ諸文献は次のように語っている。

㈠ヴィシュヴァーミトラは、その臣下のものたちの幸福に心を配る王であった。ある時、王は従者たちを連れて狩に出た。疲れたのでヴァシシュタの草庵に行くと、ヴァシシュタの大歓迎を受けた。ヴァシシュタはヴィシュヴァーミトラの一行が沐浴をしているあいだに食事の用意をしておくという。王の一行がすばやく沐浴をすませて草庵にもどると、何千人分というほどの宴会の準備ができていた。驚いたヴィシュヴァーミトラがそのわけを尋ねると、彼の草庵にはどのような望みもかなえてくれるカーマデーヌという牝牛がいて、この牝牛に頼んで宴会の準備をしてもらったという。これを聞いたヴィシュヴァーミトラはこの牝牛が欲しくなり、何倍もの普通の牝牛と交換しようと申し出たがヴァシシュタは同意しなかった。王はこの王国のなかにある最上のものはすべて王に属するべきだと主張したが聞き入れられず、ついに力づくで奪い取ろうとした。このようにして両者の争いが始まった。ヴァシシュタの心を理解して牝牛カーマデーヌは角をふり立て、尾を立てて恐ろしい形相で立ち上った。カーマデーヌの肢体のそれぞれから、何千という兵士がとび出して激しい戦闘が起こった。さしものヴィシュヴァーミトラの大軍勢もうち破られ、ヴィシュヴァーミトラの放った矢もヴァシシュタの身体に触れたとたんに花に変わってしまった。こうして、ついに王はバラモン聖仙ヴァシシュタの苦行で身につけた法力を知り、自分の敗北を認めた。ヴィシュヴァーミトラの心の奥深くにヴァシシュタに対する憎しみが植えつけられたのはこの時であった。彼は王国を捨てて南方の森の中に入り、きびしい苦行の生活を始めた。長い修行ののちに、彼は偉大な法力を身につけ、ヴァシシュタとの対立はさらに激化していくことになった（『ラーマーヤナ』少年編）。

㈡次の対立は、日種族（スーリヤヴァンシャ）のトリシャンク王の行為に関して起こった。トリシャンク王は現世の肉体をもったままで天に昇ることを望んでいた。ヴァシシュタがその妨害をしたのに対して、ヴィシュヴァーミトラはトリシャンク王の昇天を助けようとし、そのための祭祀を行なった。その結果、トリシャンク王の身体は次第に上に昇り始めた。しかし天界の主インドラ神は王が肉体をもったままで天界に入るのを認めなかった。そこで、ついにヴィシュヴァーミトラは苦行で得た力によって、天界と地界とのあいだに人工的な天界を作りあげ、そこにトリシャンク王を昇らせた。こうして両者の対立は増々強まった。

㈢ヴァルナ神の恩恵によって、ハリシュチャンドラにローヒタという名の男子が生れた。ハリシュチャンドラはヴァルナ神に生れた子供を犠牲に捧げることを約束していたが、このことを知った息子は宮殿を抜け出してしまった。

困惑しているハリシュチャンドラにヴァシシュタは子供を買ってヴァルナ神に捧げればよいと智慧を授けた。こうして犠牲に捧げるためのバラモンの一少年シュナハシェーパが買い入れられたが、ヴィシュヴァーミトラはこのことをも妨害し、ハリシュチャンドラはヴィシュヴァーミトラの落し穴にはまって王国も家族もそのほかのすべてのものも失ったという。

㈣ヴァシシュタはヴィシュヴァーミトラがハリシュチャンドラに対して行なった悪意に満ちた行為に腹を立てていた。たまたま両者が森の中で出会った時、ヴァシシュタは隠者の身なりをしたヴィシュヴァーミトラをののしって言った。「極悪のヴィシュヴァーミトラめ。どうして、あの正直者のハリシュチャンドラをひどい目に会わせたのだ。お前は瞑想しているようなふりをして魚をだまして取って食うコウノトリと同じだ。お前は本当のコウノトリになってしまえ」。このような呪いをかけられたヴィシュヴァーミトラは「俺がコウノトリでいるあいだ、お前はカワセミとなれ」という呪いの言葉をヴァシシュタにあびせかけた。このようにして互いの呪いによってコウノトリとカワセミになった二人はマーナサ湖の岸辺に行き、木の枝に巣を作って住んでいたが、二羽はつつき合い、互いに血を流しあいながら長いあいだそこに住んでいた。彼らの姿は花を一杯につけたでいごの木のようであった。ある時、ヴァシシュタの父で慈悲の心の持主であるブラフマーが彼らの悲惨なありさまを見て哀れに思い、彼らを呪いから解き放してやったという（『デーヴィー・バーガヴァタ』六）。

㈤ヴィシュヴァーミトラはサラスヴァティー河の女神を呼んでヴァシシュタを押し流してしまうよう依頼した。ヴィシュヴァーミトラに呪いをかけられるのを恐れた女神はこれに同意し、ヴァシシュタが苦行している流域を河の水で一杯にして、彼を下流に押し流した。しかし、女神はヴィシュヴァーミトラの言いなりになってヴァシシュタを流れの中につき放すことを好まなかったので、ヴァシシュタはかろうじて難を逃れることができた。これを見たヴィシュヴァーミトラは立腹して「サラスヴァティー河が血の河となるように」という呪いをかけた。そこでサラスヴァティー河の水は血の色に変わった。神々は困惑してこの河の岸辺に集まった。それらの神々の前で両者はついに和解した。それ以来、サラスヴァティー河の岸辺にあるこの場所は、ヴァシシュタ－パヴァーハ（ヴァシシュタを運んだところ）と呼ばれる聖地となった（『マハーバーラタ』シャリヤ編）。

〔別名〕アーパヴァ、アルンダティーパティ（アルンダティーの夫）、ブラフマルシ（聖仙）、デーヴァルシ（神仙）、

ハイラニヤガルバ(ブラフマンの子供)、マイトラーヴァルナ(ミトラとヴァルナの子孫)など。↓ヴィシュヴァーミトラ、アルンダティー

ヴァジュラ　Vajra　㈠インドラ神の武器の名。金剛杵、電撃。天界の鍛治屋トヴァシュトリが作ったもので、定期的に研ぐ必要があったという。アブローッタ（空から生れたもの）、バフダーラ（多くに引き裂くもの）、ビディラ、チダカ（引き裂くもの）など、多くの別名で呼ばれる。㈡アニルッダの息子の名。彼の母はアニルッダの妻スバドラーとも、ダイティヤの王女ウーシャーともいわれる。クリシュナは死の前に、彼にインドラプラスタの王となるよう命じたといわれる。

ヴァジュラナーバ　Vajranābha　㈠ラーマの系統の王の名。㈡アスラの名。その娘プラバーヴァティーはクリシュナの息子プラディユムナと結婚した。㈢マトゥラーを支配した王の名。㈣クリシュナのもつ武器チャクラ（円盤）の名。『マハーバーラタ』によれば、アグニ神がインドラ神と闘って、カーンダヴァの森を焼こうとした時、クリシュナがアグニを助けるためにアグニから与えられたものという。

ヴァージン　Vājin　「迅速な、元気のよい、強い」の意味で、駿馬の別名として用いられる。また、「英雄的な、男性的な、強力な」という意味で戦士や王の最高の徳性を表わす。『リグ・ヴェーダ』では太陽神スーリヤ、サヴィトリあるいは太陽神としてのヴィシュヌを表わしている。天界の馬ダディクラーの別名とされることもある（四・三九）。

ヴァス　Vasu　㈠『リグ・ヴェーダ』の神群の名。自然現象を神格化した八神の総称で、アーパス(水)、ドルヴァ(北極星)、ソーマ(月)、ダラ(地)、アニラ(風)、アナラ(火)、プラバーサ(暁)、プラティユーシャ(光)の神々をいう。㈡カーニヤクブジャ王クシャとその妻ヴァイダルビーとのあいだに生れた男子。クシャには四人の子があり、クシャームバはカウシャームビーの都市を建設し、クシャナーバはマホーダヤプラを、アスールタラジャスはダルマーラニヤを、ヴァスはギリヴラジャの都を建てたといわれる(『ラーマーヤナ』少年編)。

㈢パラシュラーマの兄弟。ジャマダグニとその妻レーヌカーとのあいだにヴァス、ルマヌヴァット、スシェーナ、ヴィシュヴァーヴァス、パラシュラーマの五人の息子があったという（『ブラフマーンダ・プラーナ』五八）。

㈣クリミ王朝の有力な王の名(『マハーバーラタ』努力編)。

㈤バラモンの聖仙名(『マハーバーラタ』集会編)。

ヴァースキ　Vāsuki　パーターラという地下の世界に住むナーガ（蛇）の王。プラジャーパティ・カシュヤパとその妻カドルーとのあいだに生れた。昔、インドラ神をはじめとする神々が力を失い、悪魔たちに天界が荒らされた時、神は不死の霊水を求めて悪魔たちと和睦したうえで乳海を攪拌したことがあった。その時、神々と悪魔たちはマンダラ山を攪拌棒とし、蛇王ヴァースキをそれに巻きつけて、神々は尻尾の方を、悪魔たちは頭の方を持って引っぱり、乳海をかきまわしたといわれる。叙事詩やプラーナには、ヴァースキが蛇族の安全と保護のために聖仙ジャラトカールに自分の妹を妻として与えたこと、七ナーガの一として大地を支えていること、ヴァーユと力比べをした結果、トリクータ山がメール山よりくずれ落ちて南海に沈んだことなど、多くの物語が語られている。

（別名）ナーガラート（蛇王）、ナーガラージャ、ナーゲーンドラ、サルパラージャ（いずれも「蛇王」の意）、パンナガ（這うもの、蛇）、パンナラート（蛇王）。↓カドルー

ヴァスデーヴァ　Vasudeva　クリシュナの父。ヤーダヴァ族のシューラと、ボージャの王女マーリシャーとのあいだに生れ、マトゥラー王カンサの大臣となった。カンサ王のいとこのデーヴァキーと結婚したが、カンサ王はナーラダ仙からデーヴァキーの息子によって殺されるという予言をうけていたので、デーヴァキーから生れた子供を次々と殺していった。こうして六番目の子供までカンサ王によって殺されるのであるが、ヴィシュヌ神の化身である第七子バララーマと第八子クリシュナは両親のはからいで難を逃れた。ヴァスデーヴァが生れる時、彼が神聖なクリシュナの父となる人であるということを神々が知って、天界の太鼓を高らかに打ち鳴らして祝ったという。このことから、彼はアーナカドゥンドゥビ(大太鼓)ともいわれ、またドゥンドゥ（同）などとも呼ばれる。

ヴァースデーヴァ　Vāsudeva　「ヴァスデーヴァの子」という意味で、クリシュナのこと。

ヴァーストーシュ・パティ　Vāstoṣ-pati　『リグ・ヴェーダ』に出てくる住居の守護神。「住居の主」の意味で、それぞれの人の住居にあって、病気を治し、家畜を守り、人々に繁栄を与える。ソーマと同一視されることもある。

「ヴァーストーシュ・パティよ、われらを歓迎せよ。われらのためいみじき入家を許すものたれ、病患なきものたれ。われらの汝に懇請するところ、そを（すべて）われにかなえよ。われらが二足のもの（人間）に幸福あれ、われらが四足のもの（家畜）に幸福あれ（七・五四・一）。ヴァーストーシュ・パティよ、われらのため寿命を延ばすものたれ、牝牛・馬もて家産を殖すものたれ、インドゥ（ソーマ）よ。われら願わくは、汝の友情において、

老ゆるなからんことを。父の息子におけるがごとく、われらが〔願いを〕かなえよ（二）。」（辻直四郎訳）。

ヴァーターピ　Vātāpi　㈠南インドの原住民の王で、兄弟のイルヴァラとともに、アガスティヤ仙を殺そうと計った（『マハーバーラタ』森林編）。

㈡ヴィプラチッティとシンヒカーとのあいだに生れたラークシャサ（羅刹）の名前。ヴァーターピは、雄羊の姿となって祭祀の犠牲として捧げられたのちにバラモンたちによって食べられたが、イルヴァラが彼を呼ぶとバラモンの胃を破って外に飛び出した。聖仙アガスティヤに対しても同じ手を使おうとしたが、アガスティヤはこれを察して早くも雄羊の肉を消化してしまい、ヴァーターピとイルヴァラのたくらみは失敗したという。→アガスティヤ

ヴァーチュ　Vāc　「言葉」を表わす『リグ・ヴェーダ』の女神。言葉の霊力を神格化したもので、あらゆるところに遍在し、すべてのものを担うものとして、讃歌の中では、ほとんど宇宙の根本原理のように讃えられている。

「われ（ヴァーチュ）は、ルドラ神群（マルト神群）・ヴァス神群と共に行く、われはアーディティヤ神群とまた一切神群（特別の神群の名）と共に。われはミトラとヴァルナとの両神を担う、われはインドラとアグニとを、われはアシュヴィン双神を（一〇、一二五・一）。われは力あふるるソーマ（神酒）を担う、われはトゥヴァシュトリ（工巧神）を、またプーシャン（道祖神）、バガ（幸運の神）を。われは供物を捧ぐる者に財貨を授く、いみじく讃誦し、ソーマを搾る祭祀者に（二）。われは財宝を集むる支配者なり。賢明にして、崇拝すべき者の中の第一人者なり。神々はかかるわれを、多くのところに配分したり、あまたの居所をもち、あまたの〔賜物〕を授与するわれを（三）。」（辻直四郎訳）。

ヴァーチュ女神は、のちには河の女神サラスヴァティーと同一視され、学問・学芸の女神となった。仏教に入っては大弁天・弁天・妙音天などと訳され、音楽・弁才・財福・智慧の徳のある天女として信仰されるようになった。

ヴァーツヤーヤナ　Vātsyāyana　古代インドの性典『カーマ・スートラ』の作者とされる聖仙。五世紀の人とも八世紀の人ともいわれる。厳格な苦行者であり、『カーマ・スートラ』は彼の個人的な経験なしに書かれたという。

ヴァーハナ　Vāhana　「乗りもの」の意で、神々が乗っている鳥や動物のこと。とくにヴェーダ以後の神話において、神々の力や性格を表わすものとして盛んに用いられるようになった。また、神々との関係から神聖なものとされ、崇拝を受けている。ブラフマー神はハンサ（鵞鳥）に乗り、ヴィシヌ神はガルダ鳥に、シヴァ神は雄牛ナンディ



虎に乗るドゥルガー女神

ーに、インドラ神は象に、ヤマ神は水牛に、軍神カールッティケーヤは孔雀に、カーマデーヴァは海の怪獣マカラ、あるいはオウムに、アグニ神は雄羊に、ヴァルナ神は魚に、ガネーシャはネズミに、ヴァーユはかもしかに、シャニははげたかに、ドゥルガー女神は虎に乗っている。

ヴァプシュマット　Vapuṣmat　ヴィダルバ国の王サンクランダナの子。ディシュタ王国の王ダマが、ダシャールナ王チャールヴァルマンの娘スマナーをひそかに連れ去ったことが原因となって、ヴァプシュマットとダマは敵対することになった。彼は報復の機をうかがい、ついにダマの父ナリシュヤンタを殺した。ダマの母もこのあとを追って火の中に身を投げて死んだので、悲しみと怒りに激したダマはヴァプシュマットを激しく攻撃し、彼を殺害したうえ、その血を両親の霊に捧げたという（『マールカンデーヤ・プラーナ』一三三）。

ヴァーマデーヴァ　Vāmadeva　㈠『リグ・ヴェーダ』第四編の大部分の讃歌の作者と伝えられる聖仙。ヴァーマデーヴァは生れる前に、「私を通常の道を通って生れさせないでくれ。真正面ではなくわき腹から生れさせてくれ。」と言ったという（四・一八）。『リグ・ヴェーダ』の註釈者サーヤナは「聖仙ヴァーマデーヴァは胎内にいるあいだに普通の方法で生れることは嫌だと思い、母親のわき腹からこの世に出ようとした。これを知った母親は神々の母アディティに祈り、助けを求めたので、アディティはヴァーマデーヴァをいさめるために息子であるインドラとともにそこにやって来た」と註釈している。

㈡『マハーバーラタ』の聖仙。彼はヴァーミヤという名の俊足の馬を持っていたといわれ、この馬をめぐって次のような物語が語られている。パリークシット王はマンドゥーカの王女スショーバナーと結婚し、シャラ、ダラ、バラ

という三人の子をもうけ、彼らが成人に達すると長男のシャラに位を譲って森に入った。ある時、新たに王となったシャラが狩のために森に入り、鹿を追ったがどうしても追いつくことができなかった。「鹿に追いつくことのできる足をもつ馬がどこかにいないか」と御者に聞くと、ヴァーマデーヴァの草庵にいるとのこと、さっそくヴァーマデーヴァのところに行き、狩がすんだらすぐ返すという条件で馬を借り出した。狩が終って都に帰ってからその馬を見ると、気性といい、精悍な様子といい、非のうちどころのない馬なので王は返すのが惜しくなった。ヴァーマデーヴァは弟子を遣わして返還を求めたが、王はこの使者を追い返した。ヴァーマデーヴァが自分で王のところに行って返すよう求めると、「バラモン聖者にはこのような馬は必要ない」との返事、ついに両者の争いが始まった。両者の争いの最中、どう猛な巨人たちがやって来て、三叉の鉾でシャラ王を突き刺し、殺してしまったという(『マハーバーラタ』森林編・一九二)。

(三)マヌとシャタルーパーとのあいだの七人の子供のうちの一人。彼はシヴァ神の化身であり、五つの顔があって手には三叉の鉾を持って、ブリハスパティの妻ターラーがチャンドラに連れ去られたときには、チャンドラと激しく闘った(『マツヤ・プラーナ』四・一三)。単にシヴァ神の別名としてもつかわれる。

ヴァーマナ Vāmana ヴィシュヌ神の第五番目の化身で、「倭人(こびと)」の意。宇宙の第二期、すなわちトレーター・ユガの時、悪魔バリがインドラの都アマラーヴァティーを占領し、天界・地上・地下の三界を支配したことがあった。神々の母アディティがヴィシュヌ神に祈ったところ、ヴィシュヌ神は彼女の願いを聞き入れてヴァーマナ(倭人)の姿となってアディティとその夫カシュヤパとの息子として生れ、悪魔バリの祭場に行った。バリはこの倭人の来たことを喜び、望むものはなんでも与えようと約束した。倭人は、自分が三歩で歩けるだけのところをくれるようにと願い、聞き入れられた。バリの師であるウシャス(シュクラ)



ヴァーマナ(倭人)

はこの倭人が実はヴィシュヌ神であることに気づき、要求を聞き入れないように勧めたが、バリはいったん約束したことを破ることはできないといって、ウシャスの忠告を斥けた。そのとたんにヴァーマナは巨大な姿となり、第一歩で全地上を踏み、第二歩で天界を踏みしめ、三歩で三界を神々の手に取り戻した(『バーガヴァタ・プラーナ』八・一五―)。ヴィシュヌ神が全世界を三歩で歩くということはすでに『リグ・ヴェーダ』の讃歌にうたわれているところであり(一・二二・一六―一八)、東から出て中天に達し、やがて西の地平に沈む太陽を神格化したヴィシュヌは、ブラーフマナを経て叙事詩・プラーナに至り、第五の化身ヴァーマナとして説かれるようになったのである。

ヴィシュヌ神がヴァーマナとしてその姿を現わした理由について、もう一つの物語が語られている。聖者カシュヤパとその妻ダヌとのあいだに、ドゥンドゥという名のアスラが生れた。彼はきびしい苦行を行なって、「インドラやその他の神々によって決して殺されることがないように」とブラフマー神に祈った。ドゥンドゥの熱心さに心を動かされたブラフマー神はこの望みをかなえてやった。第四のカリ・ユガ期の初めの時、誰にも敗れることのない力を得たドゥンドゥは天界に攻め入り、インドラ神との戦いに勝って天上にアスラの王国をうち立てた。アスラの王ヒラニヤカシプも彼の支配下に入った。敗北して悲しみにうたれた神々はブラフマー神の世界に行き、そこに住みついた。これを知ったドゥンドゥは神々をブラフマーの世界からも追い払おうとし、その方法をアスラの師であるシュクラに問うと、馬祀祭を行なうことによってブラフマー天を支配できるとのこと。彼はさっそくプラーチーナ・ティールタという聖地で馬祀祭を始めた。このことを知った神々はおそれをなしてブラフマー天を離れ、ヴィシュヌ神の世界へ行って助けを求めた。ヴィシュヌ神は彼らを助けるために倭人の姿となって、デーヴィカージャラという河に飛び込み、木片のように浮いていた。たまたま、ドゥンドゥがこれを見つけて水の中から引きあげ、どうして水に落ちていたかと尋ねた。ヴィシュヌの化身である倭人は「ヴァルナの家系にプラバーサというバラモンがあり、彼に二人の息子が生れましたが、私はその弟の方でガティバーサというものです。父の死後、財産を分配しようとすると、不法にも兄はそれを一人占めにしようとし、私がそれはまちがいだというと、怒って私の髪の毛をつかんで水の中に投げ込んでしまいました。私は泳げないので、一年間水に浮いたり沈んだりしていました。そこをあなたに助けられたのです。」と答えた。そこに居合せた人々は彼に同情して、ドゥンドゥに財産や召使たちをこの少年に与えるよう頼んだ。する

と倭人は恐れ入った様子で、「私は財産も何もいりません。ただ三歩で歩けるだけの場所をいただければ充分です」と言った。ドゥンドゥはこれをためらうことなく承知した。そのとたん、倭人は月のように大きくなり、最初の二歩で全世界を踏みしめた。三歩目でドゥンドゥの上を踏みつけたところ、そこに三〇〇〇ヨージャナ（一ヨージャナは約七～八キロメートル）の深さの穴ができた。スメール山のような姿となった倭人（実はヴィシュヌ神）はアスラのドゥンドゥをつかまえ、強大な力でかれをその深い穴に投げこみ、塵芥を雨のように降らせて穴を埋めた。こうしてインドラをはじめとする神々は、倭人となったヴィシュヌ神の助けによって、再び天界に住むことができるようになったという（『パドマ・プラーナ』七八）。↓ヴィシュヌ、バリ

ヴァーユ　Vāyu　『リグ・ヴェーダ』の風神。自然現象としての風を神格化したもの。同様な風神としてヴァータがあるが、ヴァーユの方がよりいっそう自然現象としての風に強く結びついた神格である。ヴァータが雨神パルジャニヤと結びついているのに対して、ヴァーユはインドラとの関係が深い。ヴァーユは多数の馬の引く車に乗り、インドラを御者としていることもある。インドラと同じように、神酒ソーマを飲み、敵を追い払い、名声・子孫・家畜・財宝を人々に与える。『リグ・ヴェーダ』の「プルシャ（原人）の歌」（一〇・九〇・一三）ではヴァーユは生気prāṇaより生れたといわれる。


風神ヴァーユ

「速やかに走る駿馬は、ヴァーユよ、汝をここに、快適（の飲料）に向かって運び来たれ、（汝が）最初に飲まんがために、ソーマ（神酒）を最初に飲まんがために。識別力あるスーヌリター（「寛裕」）は、汝の意に従いて直ぐ立て。駕獣の牽く車に乗りて来たれ、授与せんがために、賜物を授与せんがために（一・一三四・一）。ヴァーユは二頭の赤き（馬）を繋ぐ、ヴァーユは二頭の赤らめる（馬）を。ヴァーユは二頭の駿足を車に（繋ぐ）、轅に（繋ぎて）御せんがために。二頭の最上（の馬）を、轅に（繋ぎて）御せんがために。プランディ（「豊饒」）を目覚ませ、恋人（男性）が眠る（愛人を目覚ます）ごとく。天地両界を目覚ませ、晩紅を輝かしめよ。名声のために晩紅を目覚ませ（三）。」（『リグ・ヴェーダ』、辻直四郎訳）。

のちには、ヴァーユはインドラ、ヴァフニ（アグニ）、ヤマ、ニルリッティ、ヴァルナ、クヴェーラ、シヴァとともに八つの方角を守る神々のうちに加えられて、北西を守護することになった。プラーナでは次のような物語が語られている。

(一)ヴァーユはヴァースキという名のナーガ（蛇）と力比べをして争ったことがあった。その結果として、ヒマーラヤ山の峰の一つであるトリクータパルヴァタは南の海のなかに倒れ込み、そのうえにランカー（スリーランカー）の町が作られた。

(二)昔、バンヤン（ニヤグローダ）の木がヒマーラヤの山の上に生い繁っていた。これは、すべての方角に枝を延ばし、しっかり根をはった巨大な木であった。その枝々には鳥が巣を作り、根元には動物たちが住みついていた。そのため、バンヤンの木は次第に尊大になっていった。ある時、聖仙ナーラダがこの木を見て「何と立派なバンヤンの木だろう。嵐が来ても小枝一本動かさないとは。」と言ってほめたたえた。図にのったバンヤンの木は、「嵐なんぞ、俺の召使いさ。」と答えた。ナーラダからこのことを聞いたヴァーユは、腹を立ててバンヤンの木に向かって言った。「お前は悪い木だ。それなら教えてやろう。昔、ブラフマー神が世界を創造しているとき、お前の上でしばらく休んだことがあった。私がお前に近づいたとき、お前の枝を動かさないのはそのためだ。私がお前を恐れているからではないのだ。私はお前がナーラダの前で私をけなしたのを知っている。それほど強いのなら、やって来て私と闘え。」。バンヤンの木はこの挑戦を受け入れたので、ヴァーユは次の日、嵐となってバンヤンの木を襲った。その結果、バンヤンの木は枝も花も実もすべてを吹きとばされてしまい、裸にされてしまった。こうしてバンヤンの木の尊大さはヴァーユによって否定されたのであった。この物語は、ビーマが、敵を助けることはただ思いあがらせるだけだということを示すために、ユディシュティラに語ったものである（『マハーバーラタ』静寂編）。

(三)インドラ神が山々の翼を切り取ってしまった時、ヴァーユはマイナーカ山を海の中に隠して救った（『ラーマーヤナ』華美編）。

ヴァーユの像は白い旗を手に持ち、鹿に乗った姿で表わされる（『アグニ・プラーナ』・五一）。ヴァーユは神々の使者であるともいわれ、プラディユムナがシャールヴァを殺そうとしたとき、神々の使者としてプラディユムナのもとに行ったといわれる（『マハーバーラタ』森林編・一九）。

別名をアニラ（風）、マールト（風）、スパルシャ（触れ

るもの）、ガンダヴァハ（香を運ぶもの）という。→パリジャニヤ、ニヤグローダ

ヴァラ　Vala　あるいはバラ。『リグ・ヴェーダ』では「洞窟」の意味で水を隠匿する悪魔。アーリヤ族から敵視され、ダスユ・アスラ・ダイティヤ・ダーナヴァと呼ばれる。非アーリヤ系の部族の一つパニ族のリーダーといわれる。

ヴァーラキリヤ　Vālakhilya　あるいはバーラキリヤ。

㈠『リグ・ヴェーダ』の本集の中に「補遺」として挿入されたもので、第八巻の終りの部分の一一（あるいは七、八）の讃歌の群をいう。

㈡七聖仙の一人クラトゥとその妻サンタティとのあいだに生れた（あるいはブラフマーの身体より生れた）六万人の親指大の聖仙の群をいう。彼らはすべて親指の大きさしかなかったが、太陽のように輝き、すべての感覚を制御した聖者であった（『ヴィシュヌ・プラーナ』一・一〇）。

ある時、聖仙カシュヤパが息子の生れることを願って祭祀を行なったことがあった。祭祀の火を燃やす薪を運ぶ仕事がインドラをはじめとする神々やヴァーラキリヤたちに任された。インドラが太い丸太を運んでいた時、ヴァーラキリヤたちは木の切れ端を運んでいた。このさまを見たインドラは腹をかかえて笑ったので、立腹したヴァーラキリヤたちは別のインドラを創り出そうとして苦行を始めた。これを知ったインドラは、あわててカシュヤパ仙のところに行き一部始終を話し、助けを求めた。カシュヤパ仙はヴァーラキリヤたちのところに出向き、彼らをなだめた。ちょうどその時、カシュヤパ仙の妻ヴィナターが子供の生れることを願って祭祀を行なっていた。そこでカシュヤパ仙は、ヴァーラキリヤの苦行が無益とならないように、ヴィナターにインドラを打ち負かすほどの力を持った子供が生れるであろうと予言した。その結果生れて来たのがガルダ鳥であったという（『マハーバーラタ』初編）。

ガルダが不死の霊水アムリタを求めて天界に昇り、バンヤンの木の枝に止ると、その枝が折れた。そのバンヤンの木の枝には、六万人のヴァーラキリヤたちが頭を下にしてぶら下ったまま苦行をしていた。これを知ったガルダは、彼らを怒らせ、呪いをかけられることを恐れて、その枝をくちばしでくわえたまま、あちこち飛びまわっていた。ついに、カシュヤパ仙の忠告によって、彼は小さな聖仙たちに何の害を与えることもなく、その枝をガンダマーダナ山の上に置くことができた（同、三〇）。

ヴァーラーナシー　Vārāṇasī　古代名をカーシーといい、七大聖都の一つ。古くはカーシー族の国都として栄え、コーサラ国、マガダ国、マウリヤ王朝の時代にはそれぞれ

の国の支配下にあり、またカナウジ王国にも組み込まれて栄えた。その間、多くの文人・芸術家や宗教家を輩出し、学芸・宗教の都として重要な地位を占めてきた。一二世紀イスラム教徒クトゥブッディーン・アイバクによって掠奪と破壊を受けて以来、イスラム教徒の支配下にあり、一八世紀初頭にムガル帝国の勢力が弱まった時、再びヒンドゥー教徒の町としてよみがえった。現在の寺院、沐浴場の大部分のものはこのとき以降に造られたものといわれる。このヒンドゥーの聖都を特色づけるものは、ヴィシュヴァナート寺院（シヴァ神を祀る）、ドゥルガー寺院（シヴァの神妃ドゥルガーを祀る。通称モンキー・テンプル）などのヒンドゥー寺院と、ガンジス河西岸にあるガートと呼ばれる沐浴場である。これらのガートは、ダシャーシュヴァメーダ・ガート、ハリシュチャンドラ・ガート、ケーダール・ガート、ハヌマーン・ガート、プラヤーガ・ガート、パーンデーヤ・ガート、ラージャー・ガードなど、数十に及んでいる。下流にあるマニカルニカー・ガートは市の火葬場で、ここで焼かれた遺骨や灰は聖なる河ガンジスに流される。

ヴァラーハ　Varāha　「野猪」の意で、ヴィシュヌ神の第三の化身。野猪は『シャタパタ・ブラーフマナ』（一四・一）では、大地を支えるものであり、これがプラジャーパティであると述べられている。これが叙事詩やプラーナに受け継がれて、大地がヒラニヤークシャという悪魔によって水底深く奪い去られたとき、ヴィシュヌ神が野猪となって牙の上に大地を支え、人類を救うと説かれるようになった。この野猪の伝説はブラーフマナに起源をもつものではあるが、非アーリヤ系の原住民の「聖なる豚」の崇拝を通して発展したともいわれる。プラーナではヴィシュヌ神が野猪となって世界を救済しなければならなかった理由について、次のように記している。

偉大なヴィシュヌ神の門番にジャヤとヴィジャヤという二人の男があり、この二人はヴィシュヌのところにやって来た有名な聖者サナカに礼を尽くさなかった。立腹したサナカ仙はこの二人に呪いをかけ、アスラにしてしまった。



ヴィシュヌの化身・ヴァラーハ（野猪）

そこで、この二人は聖仙カシュヤパとその妻ディティとのあいだに、ヒラニヤークシャ、ヒラニヤカシプというアスラとして生れた。この二人の生れからして不吉なものであった。ある時、カシュヤパ仙が夕べの祭りをしていると、彼の妻ディティは突然、欲情の心をおこして夫に抱きついた。この瞬間に身籠ったディティは、二人のアスラの子を産んだ。二人が生れ出ると、世界は暗闇につつまれ、不吉な前兆が現われ、神々はおののき震えた。兄のヒラニヤークシャは成長すると神々と争い始めた。争いが激しくなると、彼は大地を手でつかみ上げ、水の中に投げ入れた。こうして大地は長いあいだ深い水底にあった。神々はヴィシュヌ神のところに行き、大地を取り戻してくれるよう祈った。

ちょうどその時、ブラフマー神の息子のスヴァヤムブヴァ・マヌが父とともに暮していた。自分によく仕えてくれることに満足したブラフマー神は、わが子スヴァヤムブヴァに「わが子よ、汝はデーヴィー（女神）に信愛を捧げよ。そうすれば汝の望みはかなえられ、デーヴィーの力によって名高いプラジャーパティ（創物主）となるであろう。」と教えた。言われたとおりにスヴァヤムブヴァは女神に信愛を捧げ苦行を行なった。これに満足した女神ジャガダムバー（「世界の母」の意）は彼の前に姿を現わし、どのような恩恵を欲するかと尋ねた。彼の願いは、妨げられることなく創造することを許して欲しいということであった。女神からこの許可を得たスヴァヤムブヴァ・マヌは父ブラフマー神のところに行き、一人静かに静慮に入って創造できるような場所を指示してくれるよう頼んだ。しかし、大地は水の底深く沈んでいて、そのような場所はどこにもなかった。ブラフマーはマヌやその他の聖仙たちを連れてヴィシュヌ神のところに行き、祈りを捧げた。すると、ブラフマーの鼻の穴から呼息とともに小さい野猪がとび出した。それはたちまち象のような大きさとなり、ついに山のような姿となった。神々しい姿の野猪は世界中に響きわたるようなうなり声をあげ、ジャナローカやサティヤローカの人々はこれがヴィシュヌ神の化身であることをすぐに理解した。野猪は勢いよく水の中に飛び込み、大地を探し当てて大地を牙の上に乗せて支えた。邪悪なヒラニヤークシャが邪魔しようとすると、ヴィシュヌ神はナンダカという棍棒で悪魔を打ち殺し、大地を持って水面に現われ、水の上に固定させた。このようにして、ブラフマーは水の上に蓮華のように浮んでいる大地の中に、マヌが創造を行なうための場所を見つけることができたという（『バーガヴァタ・プラーナ』三、『デーヴィー・バーガヴァタ』八―九、『アグニ・プラーナ』五、『パドマ・プラーナ』ブーミ編・九一）。↓ヴィシュヌ、ヒラニヤークシャ

ヴァーリン Vālin ラーマを救けてその妻シーターを救い出した猿王スグリーヴァの兄。ラーマはダンダカの森に住んでいた時、ランカーの羅刹の王ラーヴァナに妻を奪い去られ、ランカーに向う途中でスグリーヴァに出会った。スグリーヴァはヴァーリンに支配権を奪われ国から追放されていたので、自分が兄を討つのにラーマが協力するという条件でラーマに力を貸した。ヴァーリンはラーマの助力を得たスグリーヴァに攻撃され、殺された（『ラーマーヤナ』キシュキンダー編）。↓スグリーヴァ

ヴァールクシー Vārkṣī 聖仙カンドゥの娘で、徳高く、一〇人のプラチェータス（賢者）の妻となったという（『マハーバーラタ』初編）。

ヴァールシュネーヤ Vārṣṇeya ㈠「ヴリシュニの子孫」の意味で、クリシュナの別名。㈡ナラ王の御者の名。ナラ王が賭博に負けて、妻ダマヤンティーとともに森に入ったのち、その子インドラセーナと娘インドラセーナーをクンディナプラの都へ連れて行ったのはヴァールシュネーヤであった。こののち、彼はアヨーディヤーへ行ってリトゥパルナ王の御者となり、ナラ王を見つけ出すのに大活躍をする。

ヴァルナ Varṇa 「色」の意で、ブラーフマナ（司祭階級、バラモン族）、クシャトリヤ（王族）、ヴァイシュヤ（庶民）、シュードラ（隷民）の四つのカーストを意味する。伝説上は、『リグ・ヴェーダ』のプルシャスークタ（プルシャ讃歌）において、プルシャの口からバラモンが生れ、両腕からはクシャトリヤが、両ももからはヴァイシュヤが、両足からはシュードラが生れたといわれる（一〇・九〇・一二）。

ヴァルナ Varuṇa 『リグ・ヴェーダ』の司法神。ヴァルナが護持するリタ（天則）とヴラタ（掟）によって、大自然・祭祀・人倫の秩序が保たれている。アーディティヤ神群のうちの最高神で、『リグ・ヴェーダ』の神格のなかで最も重要なものの一つ。その起源は古く、ミトラとともにミタニ・ヒッタイト条約文（紀元前一四世紀中頃、ミタニ王マティワザとヒッタイト王スピルリウマとの間で結ばれたもの）の中にすでに現われている。ヴァルナは、インドラが代表的なデーヴァであるのに対して、アスラの代表的存在とされる。ヴァルナはしばしばミトラとならべられて讃歌を捧げられ、ヴァルナの神性は『アヴェスター』聖典の最高神アフラ・マズダーに対応し、ミトラはミスラに対応するとされる。

ヴァルナは最高の王者としてすべてのものの上に君臨し、探偵を放ち、人間の行為をきびしく監視し司法神として罰を加える。そのきびしさの故に人々に恐れられているヴァ



七羽の白鳥に乗るヴァルナ神

ルナ神は、反面において温情を示して、悔悟したものを許し、多くの医薬をつかい死を遠ざけて人間の生命を守る存在でもある。ヴァルナと水との関係ははじめから密接であったが、後世その関係はますます強められ、ついには水の神、海上の神となり、仏教に取り入れられて水天となった。

プラーナの神話では、ヴァルナは司法神としての性格を失い、世界を守護する八神の一つとして西方を守護する役割を与えられているだけである。『マハーバーラタ』の伝承でも、ヴァルナはプラジャーパティ・カシュヤパの妻アディティの一二人の子供の一人とされる（『マハーバーラタ』初編）。水との関係も同様である。クリタ・ユガ期の時、神々がヴァルナに近づいて言った。「あなたは水の王者とならなければなりません。ちょうどインドラが我々を支配しているように。あなたは海の真中に住むことができる。世界中のすべての河とその夫である大海もあなたに従うでしょう。あなたは月とともに満ち、欠けるでしょう」。ヴァルナがこの要請にこたえたので、神々はヴァルナを水の王者とした（『マハーバーラタ』シャリヤ編）。また、ヴァルナが西方の守護神となったいきさつについては次のように説かれている。ある時、ヴァイシュラヴァナがブラフマー神の前で苦行を行なった。ブラフマー神が彼の前に姿を現わすと、ヴァイシュラヴァナはブラフマー神に自分を世界の四方を守る守護神の一人に加えていただきたいと願い出た。それに対してブラフマー神は「私はすでにインドラとヴァルナとヤマを守護神として選んだ。いま、第四の守護神を誰にしようかと考えていたところだ。今日から、インドラを東方の、ヤマを南方の、ヴァルナを西方の、ヴァイシュラヴァナを北方の守護神としよう。」とこたえ、姿を消した。この時から、ヴァルナの西方を守護する役割が決定されたという（『ウッタラ・ラーマーヤナ』）。

叙事詩によれば、ヴァルナには数人の妻と子供たちがあった。妻のなかでも有力なものはガウリー、ヴァルナーニーなどであり、子供のなかにはスシェーナ、ヴァンディン、ヴァシシュタ、娘のヴァールニーがあった。ダクシャの犠牲祭で死んだプラジャーパティ・ブリグはヴァルナの妻の一人チャールシャニーの子として生れた。司祭シュクラの

娘デーヴィー・ジェーシュターも彼の妻の一人で、バラ、スラーなどを産んだ。また、ヴァルナの精液がヴァルミーカの上に注がれ、それより偉大な聖仙ヴァールミーキが生れた。そのほか、ヴァルナの子とされるのは、ダクシャサーヴァルニ、プシュカラなどがある（『マハーバーラタ』戦争準備編、初編、『ラーマーヤナ』少年編）。

〔別名〕アディティプトラ（アディティの息子）、アーディティヤ（同）、アムブパ（水の王）、アムブパティ（同）、アムブラート（同）、アムブヴィーシャ（同）、アパームパティ（同）、ウダカパティ（同）、ヴァーリパ（同）、ジャラーディパ（同）、ジャレーシュヴァラ（同）、サリララージャ、サリレーシャ（同）、ゴーパティ（同）、ローカパーラ（世界の守護者）。→ミトラ

ヴァールミーキ Vālmīki　叙事詩『ラーマーヤナ』の作者と伝えられる聖仙。古来、インドにおいては『ヴェーダ』が神の作った天啓聖典（シュルティ）とみなされていたのに対して、叙事詩は人間の作った最初の作品とされるので、その作者であるヴァールミーキは「最初の詩人」Ādikaviといわれる。『ラーマーヤナ』はシュローカという韻律で書かれているところから、この韻律の作者もヴァールミーキであるといわれ、後代のインドのすべての詩人たちによって賞讃を受けている。ヴァールミーキは『ラーマーヤナ』の第一編と第七編において、敬虔な森の行者として現われており、この叙事詩が現在のような形になった時、すでに伝説上の人物とされていたことが知られる。

叙事詩の伝説によれば、ヴァールミーキはヴァルナの第一〇番目の子供で、もとはこのような名ではなかった。彼は若い頃悪人の仲間に入り、妻子を養うために旅人から金品を奪って生活していた。ある時、たまたまそこを通りかかった七人の聖仙たちを、彼はいつもの通りに捕まえた。すると聖仙たちは、彼が略奪によって犯している罪を家族の者たちも一緒に負担しているのかどうか、と彼に尋ねた。思いもかけない問いに驚いた彼は、家に帰って妻や子供たちに同じことを聞いた。ところが妻も子供たちも罪を分担する意志はないとのこと。この瞬間に彼の心は変わり、急いで聖仙たちのところに戻ると、礼を尽くして教えを請うた。聖仙たちは彼の発心を認めてヴェーダの知識を与えた。彼は一本の木の下に座って「ラーマ、ラーマ」と唱え、何年も何年も修行を続け、白蟻が彼の上に巣を築いたのも知らなかった。何年か経った後、七人の聖仙が通りかかり、その蟻づかを壊し、彼を連れ出した。このように、ヴァルミーカ（蟻づか）から出て来たことによってヴァールミーキと呼ばれることになった。ヴァールミーキはタマサー河の岸辺に草庵を建て、弟子たちとともにそこに住んだ。彼

がラーマの物語を作ったのはこの場所であるという。ヴァールミーキがここで『ラーマーヤナ』をシュローカ調で書くようになった事情には、『ラーマーヤナ』少年編で次のように語られている。

「さて、ナーラダのこの言葉を聞いて、言葉巧みで真理よりなる偉大な聖者（ヴァールミーキ）は、弟子とともにかの（ナーラダ仙）を礼拝した。そこで、天の聖者ナーラダはかの（ヴァールミーキ）によって正しい仕方で礼拝をうけ、いとまごいをし、お別れの挨拶をうけて天に戻った。かの（ナーラダ仙）が天の世界に行ってしまうと、すぐにかの聖仙はガンジス河からそれほど離れていないタマサー河の岸辺に行った。そして、かの偉大な聖者はタマサー河の岸辺に着いてから、近くにある清浄な聖地を見て弟子に言った。『バラドヴァージャよ、汚れのない聖なる場所を見よ。あたかも正しい人の心のように、清浄な水はここちよいものだ。愛児よ、水のつぼをおろしなさい。私の樹皮の上着をもって来なさい。このタマサー河の最高の聖地で、私は沐浴しよう』。偉大なヴァールミーキにこのように言われて、バラドヴァージャは師に忠実に、かの聖者の樹皮の上着を持って来た。彼は弟子の手から樹皮の上着を受け取ると、感官を調え、あらゆるところからこの広大な森を見て、その中に入って行った。すると、その近くで、尊者ヴァールミーキは、かわいい声をした一対のクラウンチャ鳥（たいしゃくしぎ）が絶え間なく睦み合っているのを見た。しかし、邪悪な目的をもった猟師がその睦み合っている中から雄鳥を、かの聖者が見ているにもかかわらず殺してしまった。肢体を血まみれにして地面に倒され殺されている雄鳥を見て、妻の鳥はかなしみの声をあげた。このように猟師に打ち落とされたこの鳥を見て、正しい心をもつ聖者はかわいそうに思った。そこで、慈悲の心から、ヴァールミーキは『これはよくないことだ』と考えて、嘆き悲しんでいる鳥を慰めて次のように言った。『猟師よ、汝は永遠に安住を得ることなかれ。なぜなら、汝はクラウンチャ鳥が睦みあっている中から、愛欲に酔っている一羽を殺したからだ』。彼がこのように思い、語った時、心の中に次のような思いが起った。『この鳥に対する悲しみにうたれていても、私はいったい何を語ってやったらよいのだろうか』。偉大な智慧をもち、英知をもつものは熟慮を重ねたうえ、決心した。そこで、かの偉大な聖者は弟子に対して次のように言った。『同じ音節をもつ、四つの句で組み立てられていて、リュートの音楽にものせられるような、シュローカ調の詩を作ろう。悲しみにうちひしがれている私には、これ以外のものはない』。そこで弟子のバーラドヴァージャは喜んでかの聖者の無上のことばを理解し、聖者もそれに満足した。かの聖者は法典に定められている通りに、その聖なる場所で沐浴をしてから、その同じことを考えながら庵に帰った。（中略）すると、そこに世界の創造者、自存者、四つの顔をもち、偉大な輝きをもつブラフマー神が、この偉大な聖者を見ようとして現われた。かのブラフマー神を見て、ただびっくりしたヴァールミーキは、すぐに立ち上って言葉もなく、うやうやしく合掌したままでいた。（中略）すると、ブラフマー神はほほえみながら、かの偉大な聖者に言った。『汝はこのシュローカの詩を作った。しかし、そこに汝の意図があるのではない。おお、バラモンよ、汝のこの妙なる詩句の声は、まさに私の意志によって生れたものだ。勝れた聖者よ、汝はラーマの全生涯を語れ、汝がナーラダ仙から聞いた通りに、この世において敬虔な心をもち、すぐれた徳性と智慧をもち、賢名なラーマの生涯を語れ。（中略）大地において山々や河がある限り、諸世界の中でラーマーヤナの物語は流布し続けるであろう。そして、汝が語ったラーマの物語が流布し続ける限り、汝は私の創造した世界の中で、天上にでも地上にでも住むであろう。』と言って、尊敬すべきブラフマー神は、その同じところで姿を消した。そこで、聖者ヴァールミーキは弟子とともに感激した。すると彼のすべての弟子たちは再びこのシュローカの詩を歌い、喜んで繰り返し、さらに感激を深めた。偉大な聖者の歌った同じ音節をもつ、四つの句で組み立てられているもの、それを繰り返し歌うことによって、悲しみはシュローカの詩となっていった。かの心の清らかなヴァールミーキに、次のような思いが生れた。『私はラーマの行状記（Rāmāyaṇa）のすべてを、このようなシュローカで語ろう』。そこで、令名高く、すぐれた智慧をもつ聖者は、勝れた意味をもち、心を楽しませる同じ音節をもつ幾百というシュローカで、かの偉大なラーマの物語を作った。」（『ラーマーヤナ』少年編・二・一―四一）。→ラーマーヤナ

ヴィヴァスヴァット　Vivasvat　『リグ・ヴェーダ』の神格で、ヤマの父。「輝くもの」の意で、太陽神スーリヤの別名。『アヴェスター』聖典の神格ヴィヴァフヴァントに相当する。『リグ・ヴェーダ』では最初の祭祀者とされる。

プラーナの神話においては、ヴィヴァスヴァットは聖者カシュヤパとその妻アディティとのあいだに生れた一二人のアーディティヤのうちの一人といわれる。成長したのち、ヴィシュヴァカルマンの娘サンジュニャーと結婚し、最初に生れた子供が日種族（スーリヤヴァンシャ）の祖となったヴァイヴァスヴァタ・マヌであった。次に生れたのがヤマとヤミーであった。サンジュニャーは太陽神である夫の発揮する強い光に耐えられず、待女のチャーヤー（「影」の意味）を変装させて替玉にしたうえで父ヴィシュヴァカル

マンの家にもどった。しかし、ヴィシュヴァカルマンはこれを喜ばなかったので、彼女は雌馬に姿を変えてウッタラクル（北クル州）の牧場へ行った。他方、ヴィヴァスヴァットはチャーヤーを本当の妻と信じてベッドを共にし、サーヴァルニ、シャニ（あるいはシャナイシュチャラ）という二人の息子とタパティーという娘をもうけた。ところがチャーヤーは自分の産んだ子供たちだけを可愛がったのでサンジュニャーの子供たちは悲しい毎日を送っていた。ある時、ヤマが我慢し切れなくなって、足をあげてチャーヤーを蹴ろうとしたことがあった。立腹したチャーヤーは「ヤマの足が折れるように」と呪いをかけた。あわれなヤマは父のところに行き、「父よ、母はサーヴァルニとシャニだけを愛しています。確かに私は足を上げましたが、私の足は母の頭に触れてはいないはずです。私の行為は無知によるところですのでお許し下さい。私をあわれと思って、足が折れないようにして下さい。」と訴えた。ヴィヴァスヴァットは、彼の足が折れることはないが、呪いをかけられたのであるから虫に喰われることはあるだろうと答えた。このことがあってから、ヴィヴァスヴァットは彼女が本当の妻サンジュニャーではないことを知り、ヴィシュヴァカルマンのところに行って助けを求めた。技術の神であるヴィシュヴァカルマンは自分で作った旋盤でヴィヴァスヴァットのまぶし過ぎる光を削りとった。この作業で、さらに美しくなったヴィヴァスヴァットは妻サンジュニャーに近づいたが、彼女も他人と見間違うばかりであった。（『ヴァーマナ・プラーナ』・二一、『バヴィシュヤ・プラーナ』・四七、『マハーバーラタ』初編）。→スーリヤ、サンジュニャー

ヴィヴィンダヤ　Vivindhaya　『マハーバーラタ』に出てくるアスラの名。ルクミニーの息子のチャールデーシュナと戦って殺された（森林編）。

ヴィカルナ　Vikarna　『マハーバーラタ』の英雄。盲目の王ドリタラーシュトラとガーンダーリーとのあいだに生れた一〇〇人の王子の一人。ドゥリヨーダナ、ドゥッシャーサナの弟にあたる。一一人の偉大な勇士の一人に数えられ、パンチャーラ王ドルパダと戦ったのは彼だけだったという。ドルパダの娘ドラウパディーの自選式（夫を選ぶ儀式）に参加して、パーンドゥの五王子に敗れた（初編）。バーラタの大戦争でパーンドゥ側の勇士シュルタソーマ、サハデーヴァ、アビマニユ、ガトートカチャ、ナクラ、シカンディンと戦い、ナクラに破れ、ついにビーマセーナに殺された（ドローナ編）。

ヴィククシ　Vikukṣi　日種族（スーリヤヴァンシャ）のイクシュヴァーク王の子。シャシャーダ（兎を食べたもの）ともいわれる。彼は父王から祭の供物に捧げる肉を探

して来るように命じられたが、疲れと飢えに迫られて兎の肉を食べたため、ヴァシシュタ仙からすべての食物を汚したものと宣言された。

ヴィクラマーディティヤ　Vikramāditya　「強力な力を持つ太陽」の意で、古代インド史の上でこの称号を持つ王は多数あるが、その最初の王はウッジャイニーを統治していた王であり、この王がシャカ族に勝利した記念の年号といわれるのがヴィクラマ紀元、すなわちサンヴァット紀元である（西暦前五八年を紀元とする）。

ヴィシュヴァカルマン　Viśvakarman　『リグ・ヴェーダ』の神格で、「一切物の創造者」の意。天地創造の力を神格化したものであり、最高の創造者であるとともに宇宙的な知識と智慧をあらわしている。彼は、讃歌のなかでは、しばしば「建築者」「建造者」として讃えられている。

「これら一切の世界（万有）を供物として捧げつつ、ホートリ祭官として坐したる者、聖仙にしてわれらの父（ヴィシュヴァ・カルマン）、彼は祈願によって財貨を欲しつつ、最初のもの（太初の創造物）を蔽いかくして、後代の（創造物の）中に入れたり（一〇・八一・一）。拠所はそも何なりしや、支点はそもいずれのものなりしや、そはいかにありしや、それよりして、一切を観るヴィシュヴァ・カルマンが、その威力により、地を生み（創造し）、天を出現せしめたるものは（二）。一切方に眼をもち、また一切方に顔をもち、一切方に腕をもち、また一切方に足をもつ者、独一の神は、天地を生みしとき（創造したとき）、両腕をもって、翼をもって（煽ぎて）鍛接せり（三）。」

（辻直四郎訳）。

プラーナ文献ではヴィシュヴァカルマンはプラバーサとその妻ヴァラストリーとのあいだの子供で、さまざまな工芸の発明者、神々の建築家、あらゆるたぐいの装飾品の製作者、彫刻家であり、神々の天空を駆る車の作り手であるといわれる（『ヴィシュヌ・プラーナ』一・一五）。

ヴィシュヴァカルマンの子供については、プラーナ文献にはさまざまな説があるが、五人の息子と四人の娘の名をあげることが多い。五人の息子とは、神の化身である巨大な猿ナラ（『ラーマーヤナ』少年編）、およびアジャイカパート、アヒルブドニヤ、トヴァシュトリ、ルドラである（『ヴィシュヌ・プラーナ』一・一五）。四人の娘とはサンジュニャー、チトラーンガダー、スルーパー、バルヒシュマティーで、このうち長姉のサンジュニャーは太陽神と結婚し、マヌ、ヤマ、ヤミーを産んだ（『ヴィシュヌ・プラーナ』三・二）。スルーパーとバルヒシュマティーの二人は、プリヤヴラタの妻となり、スルーパーはアグニードラ、イドマジフヴァ、ヤジュニャバーフ、マハーヴィーラ、ルクマシュク

ラ、グリタプリシュタ、サヴァナ、メーダーティティ、ヴィーティホートラ、カヴィの一〇人の息子と、最後に娘ウールジャスヴァティーを産んだ（『デーヴィー・バーガヴァタ・プラーナ』八）。ヴィシュヴァカルマンの四番目の娘チトラーンガダーは、他の妻グリターチーとのあいだに出来た娘である。

このほか、ヴィシュヴァカルマンについては、叙事詩において、ヤマ神の宮殿を建てたこと（『マハーバーラタ』集会編）、ヴァルナの宮殿を建てたこと、空を駆ける車プシュカラを製作したこと（同、森林編）、ヴィジャヤという少年を作ってインドラに与えたこと（同、カルナ編）、ランカー島をつくり出したこと（『ウッタラ・ラーマーヤナ』）など、さまざまな物語が語られている。

ヴィシュヴァデーヴァ　Viśvadeva　あるいはヴィシュヴァーデーヴァ。「すべての神々」の意で、一般的に一〇のクラスに分けられる。㈠ヴァス、㈡サティヤ、㈢クラトゥ、㈣ダクシャ、㈤カーラ、㈥カーマ、㈦ドリティ、㈧クル、㈨プルーラヴァス、㈩マードラヴァスの一〇の群で、これにローチャカとドゥリ（あるいはドヴァニ）の二つが加えられることもある。

ヴィシュヴァーミトラ　Viśvāmitra　ヴェーダの聖仙の一人で、『リグ・ヴェーダ』第三巻の作者と伝えられる。バラタ族のスダース王の司祭官（プローヒタ、帝師）で、インダス河の二支流ヴィパーシュ（ベアス河）とシュトゥドリー（サトレジ河）との対話が記されている（『リグ・ヴェーダ』三・三三）。叙事詩ではヴィシュヴァーミトラ仙とヴァシシュタ仙との対立の物語が語られているが、スダース王がヴィシュヴァーミトラの代わりにヴァシシュタ仙を司祭官に任命したことと関係があるともいわれる。

『マハーバーラタ』（初編）によれば、カーニヤクブジャ（カナウジ）にヴィシュヴァーミトラという名のクシャトリヤ（王族階級）の王があり、ある日、たまたまヴァシシュタ仙の隠棲処に入って、望みのものは何でも出すといわれる如意牛ナンディニーを見て、これをゆずってくれるよう聖仙に頼んだ。ヴァシシュタ仙が祭祀に必要であるからという理由でこれを拒否すると、彼はクシャトリヤの特質である武力を行使してこの牝牛を奪おうとした。ヴァシシュタ仙はこれに対してバラモンの力は忍耐であるとして、牝牛にとどまるよう言っただけであったが、これを聞いた牝牛は怒りで眼を赤くして大声で吼え、ヴィシュヴァーミトラの軍にたち向かった。牝牛はその尾からパフラヴァ族を、尿からヤヴァ族を、口の泡からプンドラ族、キラータ族、ドラミダ族、シンハラ族、バルバラ族、ダラダ族、ムレーッチャ族を作り出してヴィシュヴァーミトラの兵士た

ちを蹴散らした。ヴィシュヴァーミトラはバラモンの力の大きいことを眼の前に見てクシャトリヤであることに不満を感じ、王国を捨てて激しい苦行を行ない、ついにバラモンの位に達したという。ヴィシュヴァーミトラの激しい苦行は神々を驚かせ、神々の首長のインドラは天女メーナカーを派遣して彼の苦行を妨げさせた。彼は天女の魅力に負けて長い間同棲したので苦行の果報は消失したが、神々の妨害だと知ったヴィシュヴァーミトラは再び苦行を開始した（『ラーマーヤナ』一・六三）。→メーナカー

ヴィシュヴァールーパ　Viśvārūpa　「あらゆる形態をもつもの、普遍的なもの、全智全能者」の意で、ヴィシュヌ神の別名。

ヴィシュヴェーシュヴァラ　Viśveśvara　「すべてのものの主」の意で、シヴァ神の別名。

ヴィシュヌ　Viṣṇu　シヴァ神と並んでヒンドゥー教の最高神。とくにヴィシュヌ派にとっては最も神聖なる神。ヴィシュヌはviś（広がる、行きわたる、遍満する）という動詞の語根からつくられた語で、『リグ・ヴェーダ』においては太陽の光り輝く作用を神格化した神であった。『リグ・ヴェーダ』に述べられるヴィシュヌは天・空・地を三歩で闊歩するといわれるが、他の神々にぬきん出た存在ではなく、彼の勢力が増大するのはブラーフマナ文献においてである。この文献の中ではヴェーダの主要神はすでに勢力を失い、宇宙創造の力を持つプラジャーパティが最高神とされ、ルドラ（のちのシヴァ神）とヴィシュヌが主要神とみなされるようになった。

ヴィシュヌ神が名実ともに最高神とされ熱烈な信仰の対象とされるのは叙事詩・プラーナの時代である。叙事詩においては、ヴィシュヌは、ナーラーヤナ、ヴァースデーヴァ（すなわちクリシュナ）と同一の神格として説かれ、これらを通して最高神としての地位を確立していくのである。叙事詩やプラーナではしばしばナーラーヤナとヴィシュヌの両者を区別しないで扱っており、『マハーバーラタ』第一二篇「ナーラーヤニーヤ」においてはヴィシュヌをバガヴァッド・ナーラーヤナとして信仰すべきことを説き、その



ヴィシュヌ神



クールマ（亀）としての化身

信仰者の「白い鳥」と呼ばれる浄土について述べている。

このうち、とくに重要なのはヴィシュヌとクリシュナとの同一視で、マトゥラー地方のヤーダヴァ族に属するヴリシュニ族のクリシュナ信仰がヴィシュヌ信仰のなかにとり入れられ、インド全土に広められたということである。このヴィシュヌとクリシュナとが同一視されるプロセスにおいては、バラモンの側からは当時の新興勢力であったクリシュナ・バーガヴァタ信仰をみずからの領域に取り入れようとする作用が行なわれ、クリシュナをバガヴァットとして信仰する人々の側からも、みずからの立場を正統化しようとする動きが起こったと推定されている。このようにして、ヴィシュヌ信仰はクリシュナ伝説を通して民衆のあいだに広まっていった（↓クリシュナ）。



ヌリシンハ（人獅子）としての化身



パラシュラーマ

さらに、ヴィシュヌ神の信仰を一般に普及する依りどころとなったのはアヴァターラ（権化・化身）の思想である。化身の意義は『バガヴァッド・ギーター』（四・八）に「もろもろの善を行なうものたちを守るために、悪を行なうものたちを滅ぼすために、正義（ダルマ）を打ち立てるために、私はそれぞれの世界期（ユガ）に出現する」と説かれるように、正義・道徳（ダルマ）がおとろえ、不正義・不道徳（アダルマ）が興るたびに、ヴィシュヌがこの世にあらわれてダルマを興すというところにある。

このような基本思想の上に、古来の神々や民間の信仰のなかにあらわれる神話的な動物や人物が加えられ、それぞれの場合に応じてヴィシュヌ神が姿をあらわすという形が出来あがったのである。化身の数は、最も多い場合は二二種があげられる。『バーガヴァタ・プラーナ』（一・三）に説かれるのがこの例で、クマーラ、シュカ、ナラダ、ナラ＝ナーラーヤナ、カピラ、ダッタトレーヤ、ヤジュニャ、リシャヴァ、プリトゥ、マツヤ、クールマ、ダヌヴァンタリ、モーヒニー、ナラシンハ、ヴァーマナ、パラシュラーマ、ヴィヤーサ、ラーマ、バララーマ、クリシュナ、ブッダ、カルキの二二種の化身をあげている。しかし、一般的には一〇の化身（ダシャ・アヴァターラ）がよく知られている。



ラーマとしての化身



ブッダとしての化身

㈠マツヤ（魚）。ヴィシュヌが魚としてこの世に姿をあらわし、大洪水の時に賢者マヌを救うという物語で、この物語の起源はブラーフマナの洪水伝説にある。プラーナの伝説によれば、世界が帰滅する時期、ヴァイヴァスヴァタ・マヌが祖霊へ水を奉納しようとすると、手の中の水に一尾の魚があらわれ、大きな魚に食べられないよう彼に救いを求めた。マヌはその魚を壺に入れて飼ううちに次第に大きくなり、池に、次には湖に放したが、さらに大きくなったので海に放してやった。巨大になった魚は、七日後に起こる大洪水を予言し、その時に船を準備し、あらゆる種子と七人の聖者を船に乗せるようにと言って姿を消した。七日後、予言通りに世界が洪水におそわれると、ヴィシュヌが大きな角のある魚になって現われ、角に船を縛りつけてマヌを救ったといわれる。



カルキとしての化身

(二)クールマ(亀)。ヴィシュヌの亀の姿としての化身。この化身もプラジャーパティが亀の姿で世界創造を行なったというブラーフマナ(『シャタパタ・ブラーフマナ』七・五・一)の神話に起源をもっている。プラーナの神話によれば、神々と魔神たちが力を合わせて乳海をかきまわし、不死の霊水アムリタをとり出そうとした時、ヴィシュヌ神は亀の姿となってこの作業を助けた。ヴィシュヌ神はまずあらゆる種類の植物と種子とを集め、乳海の中に投げ入れたうえ、マンダラ山をかきまわす棒とし、ナーガ(蛇)のヴァースキを巻きつけてかき回し、ヴィシュヌ自身も亀の姿となって大海の底にもぐり、その背中にマンダラ山を背負って回転の受軸となった。彼らが乳の海をかきまわすと、はじめに聖なる牛スラビが、次に酒の女神ヴァルニー、天界の聖樹パーリジャータ、天女アプサラス、月神ソーマ、ついで、蓮華の上に腰をおろしたラクシュミーが現われた。最後に神々の侍医ダヌヴァンタリがアムリタを入れた壺を手にして現われたという。

(三)ヴァラーハ(野猪)。大地が魔神によって水底深く奪い去られた時、ヴィシュヌ神が野猪となって牙の上に大地を支え、人類を救ったという物語にもとづいている。→ヴァラーハ

(四)ヌリシンハ(人獅子)。ライオンの頭を持ち、人間の身体で、悪魔ヒラニヤカシプを退治するヴィシュヌをあらわす。『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、この魔神の息子プラフラーダはヴィシュヌ神を熱心に信仰し、ヴィシュヌの偉大さを父に説き、彼らがいる広間の柱の中にもこの神が遍在すると語ると、父ヒラニヤカシプは腹を立ててその柱を蹴った。すると突然、ライオンの首と人間の身体をしたヴィシュヌが現われ、ヒラニヤカシプを八つ裂きにしてしまったという。→ヒラニヤカシプ

(五)ヴァーマナ(倭人(こびと))。宇宙の第二期トレーター期に、ヴィローチャナの息子のバリは苦行によって神々をしのぐ力を身につけ、三界を支配したことがあった。母神アディティの願いによってヴィシュヌ神は彼女の息子として生れ、バラモンの少年僧となってバリの宮殿に行き、バリを讃美してから、自分の願いをかなえてくれるように頼んだ。バリは少年僧の姿が小さいので安心して何でも申し出るように言うと、小年僧は三歩で歩けるだけの土地を要求した。バリがそれを許すと、少年僧に姿を変えていたヴィシュヌは突然巨大な姿となって全宇宙を二歩でまたぎ、第三歩でバリの頭を押さえ、彼を地界に押し込めてしまった。こうして三界はインドラを首長とする神々の手にもどったという。→ヴァーマナ

(六)パラシュラーマ(斧を持つラーマ)。かつてクシャトリヤ族が力をもち、世界を制圧したことがあり、ヴィシュヌは神々・バラモン・人類を守るため、ブリグ族のレーヌカーとジャマダグニの第五子として生れた。そのころカールタヴィーリヤという王があり、狩に出かけた時、ジャマダグニに出会い、食事に招待された。その時、王は望みのものは何でも与える聖牛サバラによって客人をもてなした。しかし、カールタヴィーリヤはその聖牛たちが欲しくなり、それを望んだが拒否され、ついにはジャマダグニを殺してしまった。これを知ったラーマは斧をふるってカールタヴィーリヤを殺し、父の仇をとった。このパラシュラーマとしての化身は、バラモン族とクシャトリヤ族の絶えることのない闘争を反映しているといわれる。

(七)ラーマ。叙事詩『ラーマヤナ』の英雄。この叙事詩においては、ラーマがヴィシュヌの化身であることが、その出生の物語を通して明らかにされる。アヨーディヤーのダシャラタ王には跡継ぎの息子がなかったので、子供の誕生を願ってアシュヴァメーダ(馬祀祭)を行なった。この時、天界では魔王ラーヴァナが地上で悪事を行なっていることが問題となっていたので、ブラフマー神の恩恵で不死身となっていたラーヴァナを殺すために、ヴィシュヌがダシャラタ王の息子のラーマとしてこの世に生れることになったという。→ラーマ

(八)クリシュナ。→クリシュナ

(九)ブッダ(仏陀)。仏教の創始者仏陀がヴィシュヌの第九番目の化身とされることについては、『バーガヴァタ・プラーナ』(一・三・二四)『アグニ・プラーナ』(一六)では次のように説明している。「昔、神々とアスラとの闘いがあり、神々はアスラに敗れた。神々は〝お助けください、お助けください〟と言って、イーシュヴァラ(自在)神に庇護を求めた。そこで、彼はシュッドーダナ(浄飯)王の子としてこの世に生れた。彼は悪魔ダイティヤたちをたぶらかせ、ヴェーダの宗教を捨てさせたので、彼らは仏教徒となり、他の人々にもヴェーダを捨てさせた。彼は阿羅漢となり、他の人々をも阿羅漢とした。このようにして、人々はヴェーダの宗教を捨てパーシャンディン(ヴェーダを尊重しない異端の者)となった。人々は地獄に落ちるにふさわしい行為を行ない、非法(アダルマ)をも認めた。そこで、カリ・ユガの終わりの時には、すべてのカーストの混乱が起こった。道徳を捨てたダスユたちがはびこり、宗教の仮面をかぶって宗教ではないものを説き、王をよそおったムレッチャ(野蛮人)が人間を食らった。この時、ヴィシュヌはヴィシュヌヤシャの息子カルキとして出現して野蛮人を滅ぼし、カーストと四つのアーシュラマ(生活階梯)を確立させ、人々を真の宗教に導いたうえ、カルキ・ハリの姿

を捨てて天にもどった。その後にクリタ・ユガが前のとおりに起こり、やがてカーストとアーシュラマが確立する」。

㈢カルキ。最後の化身カルキは、ニシュカランカともいい、カリ・ユガ期の終わりに出現し、悪・不道徳・不法を滅ぼし、ダルマを復興し、サティヤ期の法に従うといわれる。

ヴィシュヌの妻はラクシュミー、あるいはシュリーといわれ、ヴァイクンタ天を住居とし、霊鳥ガルダを乗り物としている。彼は四本の腕を持ち、第一の手はホラ貝パーンチャジャニヤを、第二の手には円盤スダルシャナ、あるいはヴァジュラナーバを、第三の手には棍棒カウモーダキーを、第四の手には蓮華を持っている。彼はシャールンガという弓と、ナンダカと呼ばれる剣で武装している。彼の胸の上にはシュリーヴァッサと呼ばれる巻き毛と宝石カウストゥバがあり、手首にはスヤマンタカ宝がある。ヴィシュヌは妻ラクシュミーとともに蓮華の上に坐っている姿、蓮華の上に横たわっている姿であらわされ、ナーガ（蛇）のシェーシャの上に横たわっている姿、巨大な鳥ガルダに乗る姿で表現される。

〔別名〕ヴィシュヌの別名は無数にあるが、次のものが比較的多く用いられる。アチユタ(不死のもの)、アナンタ(無限のもの)、アナンタシャヤナ(ナーガのアナンタの上で眠るもの)、チャトゥルブジャ(四つの武器を持つもの)、ゴーヴィンダ、ゴーパーラ(牧童)、ジャラシャーイン(水の上で眠るもの)、ジャナールダナ(崇拝するもの)、ケーシャヴァ(毛深いもの、輝くもの)、ラクシュミーパティ(ラクシュミーの夫)、マドゥスーダナ(マドゥを殺す者)、マーダヴァ(マドゥの子孫)、ムクンダ(解き放つもの)、ムラーリ(ムラの敵)、ナーラーヤナ(水の中で動くもの)、パンチャーユダ(五つの武器で武装するもの)、パドマナーバ(蓮華の臍)、ピータームバラ(黄色い衣を着ているもの)、プルショーッタマ(人間の中の最上のもの)、シャールンギン、シャールンギパーニ(シャールンギ弓を手に持つもの)、ヴァールシュネーヤ(ヴリシュニの子孫)、ヴァイクンタナータ(ヴァイクンタ天の主)、ヤジュネーシャ(供犠祭の主)など。

ヴィシュラヴァス　Viśravas　プラジャーパティ・プラスティヤの子で、『マハーバーラタ』の記述によれば、プラスティヤの生れ変わりともいわれる。彼は聖仙バラドヴァージャの娘イダーヴィダー(あるいはイラーヴィラー)とのあいだに富の神クヴェーラをもうけ、ラークシャサのスマーリンの娘のラークシャシー・ニカシャー(あるいはカイカシー)とのあいだにランカー島の魔王となったラーヴァナ、クムバカルナ、ヴィビーシャナ、および娘のシュールパナカーをもうけた。

ヴィダートリ　Vidhātṛ　「創造者」の意で、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、あるいはヴィシュヴァカルマン神の別名。

ヴィータハヴィヤ　Vītahavya　ハイハヤの王の名。彼の息子たちがカーシー王ディヴォーダーサを攻め、その家族を皆殺しにしたが、その後に生れたプラタルダナという王子はハイハヤを攻撃し、ヴィータハヴィヤはブリグ仙に助けを求めた。そこで彼はブリグ仙の言葉によって苦行者となり、ヴェーダを語る人となった。その息子のグリッツァマダも名高い聖仙となったという。

ヴィダルバ　Vidarbha　アンドラプラデーシュ州のワルダ河の谷間にあった古代の国名。その首都はクンディナプラといい、現在のアマラーヴァティーの東約二五キロのところと推定されている。

ヴィチトラヴィーリヤ　Vicitravīrya　大叙事詩『マハーバーラタ』の物語の初めの部分に登場するクル族の王シャーンタヌの子として生れた。母の名はサティヤヴァティー。ガンガー女神の子ビーシュマにかわって王位を継いだチトラーンガダが同名のガンダルヴァと争って殺されたのち、王位を継いだ。ビーシュマの助けでカーシー王の娘アムビカー、及びアムバーリカーと結婚したが、子をもうけないまま死んだ。王国を継ぐものがなくなることを恐れたサティヤヴァティーは、庶子のヴィヤーサを呼び寄せ、アムビカー、及びアムバーリカーと結婚させ、それぞれドリタラーシュトラ、パーンドゥという子が生れた。この両者の子孫によってクル族を二分する大戦争が引き起こされるのである(『マハーバーラタ』初編)。↓シャーンタヌ、サティヤヴァティー、ビーシュマ、アムビカー、アムバーリカー。

ヴィディヤーダラ　Vidyādhara　(女性形はヴィディヤーダリー)。「知識を持つもの」の意で、地上と天上との中間に住む下級の神格をいう。一般に彼らは人間に恩恵を与える存在と考えられている。彼らはインドラから生れたのであるが、自身の王をもち、空中に住んでいる。

〔別名〕カーマルーピン(意のままに姿をあらわすもの)、ケーチャラ、ナバシュチャラ(空中に活動するもの)など。

ヴィデーハ　Videha　ミティラーを首都とする古代の国名。現在の北ビハールにあったと推定されている。『マハーバーラタ』によれば、ビーマセーナが東方の諸国に遠征したとき、この国をも征服したという(集会編)。シーターの生れた国ともいわれ、また、バーラタ戦争においてはヴィデーハの軍勢はアルジュナを攻撃し(『マハーバーラタ』ビーシュマ編)、カルナはヴィデーハのジャナカ王の王子を倒し(同、ドローナ編)、この王国はカルナの領土とされた(同、

カルナ編)。

ヴィドゥラ　Vidura　『マハーバーラタ』の物語に登場するクル族の勇士。聖仙などのうちで最も広い知識を持ち、誰よりも深い智慧をそなえ、比類のない正義感をもつといわれる人。聖仙ヴィヤーサとカーシー王の娘アムビカー・アムバーリカー姉妹の侍女とのあいだに生まれ、クル族の王ドリタラーシュトラとパーンドゥの異母兄弟。

　ドリタラーシュトラ、パーンドゥ、ヴィドゥラの兄弟はクル族の都ハスティナープラで一緒に育てられ、ヴェーダ、諸論書、歴史などの学問とともに弓術や剣術などの武芸を授けられた。中でもヴィドゥラが身につけたのは、武術よりも「正義」のなんであるかということであり、こののちヴィドゥラは正義にもとづいて一生を送った(『マハーバーラータ』初編)。三人の兄弟はそろって成長したが、ヴィドゥラだけは母親がシュードラ（隷民階級）出身の侍女だったので、王となる資格は認められなかった。クル族の目付役的な存在であるビーシュマはバラモンとシュードラの女性とのあいだに生れた一少女を育てあげて彼の妻とした。ヴィドゥラはこの時代の最上の賢人として名高く、正義・公正を何よりも愛する人として知られていたが、心情的にはカウラヴァとパーンダヴァのうちで後者を好ましく思っていた。それはカウラヴァ側が奸計をめぐらせて相手をおとしいれようとしていたのに対して、パーンダヴァの側は常に正義にもとづいて行動していたからである。ドリタラーシュトラに長男ドゥリヨーダナが生れた時、多くの不吉な兆が現われた。ヴィドゥラはこの子がクル族にとってよくない存在となることを知って、この子を棄ててしまうよう忠告したこともあった(同、初編)。ユディシュティラをはじめとするパーンダヴァ側の人々が森に追放されたときも、ヴィドゥラはドリタラーシュトラ王に彼らを追放から解除し、和解するように勧告した。これに対してドリタラーシュトラ王は、彼がいつもパーンダヴァに味方していると言って激怒し、彼を宮殿から追放した。ヴィドゥラはパーンダヴァの住むカーミヤカの森に去ったが、老王ドリタラーシュトラはまもなく自分の粗暴を悔い、よき忠告者である弟を呼びもどした(同、森林編)。ドリタラーシュトラ王の子供たちとパーンドゥ王の五王子たちとのあいだに激しい戦いが始まった時、彼らを和解させることができなかったヴィドゥラは、どちらの陣営にも参加せず巡礼に旅立った。彼はプラバーサクシェートラというところで戦争の終ったことを知り、ヤムナー河の流域へ行く途中、ヤーダヴァ族のウッダヴァからクリシュナの死を聞いた。この大戦によってカウラヴァ軍は全滅し、パーンダヴァが新しい国造りを始めると、ヴィドゥラはそれを助けながら老王ド

リタラーシュトラの傍にいて老王の傷ついた心を慰めた。ドリタラーシュトラが妻ガーンダーリーとともに森に隠棲した時、パーンドゥの妻クンティーもこれに従い、ヴィドゥラも行動をともにし、その森で世を去った(同、アーシュラマ編)。クル族で最も正義を愛した人であったヴィドゥラは死後、天界に昇り、ダルマデーヴァ（正義の神）としてそこにとどまったという（同、昇天編）。→ヴィヤーサ

ヴィナター　Vinatā　ダクシャの娘で、カドルーの妹。カシュヤパの妻の一人で、聖鳥ガルダの母。タールクシュヤ、あるいはガルダの妻といわれることもある(『バーガヴアタ・プラーナ』)。

ヴィバーンダカ　Vibhāṇḍaka　カシュヤパ仙の息子の苦行者。カシュヤパ仙と牝鹿とのあいだに生まれたリシュヤシュリンガとともに、父の草庵に住んでいたという。

ヴィビーシャナ　Vibhīṣana　「恐ろしいもの」の意で、ランカーの羅刹ラーヴァナの弟。ヴィビーシャナは兄弟のクムバカルナとともに長兄ラーヴァナの指導のもとにきびしい苦行を行なった結果、ブラフマー神よりそれぞれ恩恵を与えられた。ヴィビーシャナが与えられた恩恵とは、どんな場合にも決して価値のない行為は行なわず、常に正しく生きるということであった。彼ら兄弟は協力してランカーを支配していたクヴェーラを破り、ラーヴァナがランカーの支配者となった。しかし、妹の羅刹女シュールパナカーにそそのかされたラーヴァナがラーマの妻シーターを奪ってランカーに連れて来ると、兄の行為が正義に反すると責め、シーターを返還するよう提案した。ラーヴァナは立腹して叱責したので、ヴィビーシャナは兄を見捨て、他の四人の羅刹とともに海を渡ってラーマの軍に加わった。彼はラーマがランカーに渡るのを助け、ラーヴァナが打ち破られたのち、ラーマの助力によってランカーの王位についた(『ラーマーヤナ』戦闘編)。→ラーヴァナ

ヴィプラチッティ　Vipracitti　カシュヤパ仙とダヌとのあいだに生れたダーナヴァの首長。

ヴィヤーサ　Vyāsa　『マハーバーラタ』の作者と伝えられる聖仙。クリシュナ・ドヴァイパーヤナともいわれる。ヴィヤーサは「編者」の意味で、ヴェーダ・ヴィヤーサ(ヴェーダの編者)と呼ばれるように、ヴェーダの編者ともプラーナの編者ともいわれる。『マハーバーラタ』ではヴィヤーサを叙事詩に登場する英雄たちと同時代の人物として、その詳しい伝説を語っている。

　ヴィヤーサの父パラーシャラ仙は、魚としてこの世に生れ漁師に養育されたサティヤヴァティーの美しさにひかれて結婚を申し込んだ。彼女はパラーシャラのために一人の男子を産んだのちに再び処女となるという条件で彼の申し

こみを諒承した。やがてヤムナー河の中の島のうえで一人の男子が生れた。この子はドヴァイパーヤナ（島で生れた者）と名づけられ、成長すると苦行に励んで偉大な聖仙ヴィヤーサとなった。

母のサティヤヴァティーは処女を回復したのちクル王のシャーンタヌの妻となり、チトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤという二人の男の子を産んだ。チトラーンガダは早く亡くなり、ヴィチトラヴィーリヤはアムビカーとアムバーリカーという妻を迎えたが子をなさないままに死んだので、種族の断絶することを恐れたサティヤヴァティーはドヴァイパーヤナを呼び寄せ、ニヨーガ婚によって二人の未亡人とのあいだに子孫をもうけさせようとした。

彼は母と別れるときに母が必要とすることは何でも行なうと約束していたので、直ちに言われたとおりにした。彼は大聖者であったが、顔色はまっ黒で醜く、悪臭を発していたのでアムビカーは彼がそばに近づくと見ることが出来ずに眼を閉じた。このような交わりによってアムビカーから生れた子供は盲目であった。これがクル族の王となったドリタラーシュトラである。他方、アムバーリカーはドヴァイパーヤナがそばによるとまっ青になったので、二人のあいだに生れた男子はパーンドゥ（青いもの）と名づけられた。彼は再びアムビカーに近づいたが、彼女は待女を代りにドヴァイパーヤナのもとに行かせ、このあいだに生れたのがヴィドゥラで、この子は誰にたいしても分けへだてをしない賢人となった。このようにして生れたドリタラーシュトラとパーンドゥの子たちが中心となってクル族を二分する大戦争が始められるのである。

ドヴァイパーヤナ、すなわちヴィヤーサは、三人の息子が死んだのち、自分の作った『マハーバーラタ』をはじめて人々の前で発表し、これをその弟子ヴァイシャムパーヤナに伝えたという。↓サティヤヴァティー

ヴィヤーフリティ　Vyāhṛti　「言葉」の意で、七つの世界の神秘的な名をあらわす。すなわち、ブル、ブヴァル、スヴァル、マハル、ジャナル、タパル、サティヤをいう。このうち、ブール、ブヴァル、スヴァルの三つは、それぞれ『リグ・ヴェーダ』『ヤジュル・ヴェーダ』『サーマ・ヴェーダ』にもとづくものとされ、偉大な言葉といわれて、バラモンが祈りを捧げる時、オームという聖語のあとで唱える習わしがある。

ヴィラータ　Virāṭa　パーンダヴァがカウラヴァのドゥリヨーダナ王によって追放された時、自分の宮殿に彼らをかくまったマツヤ王（『マハーバーラタ』ヴィラータ編）。最初の妻スラターはコーサラ国の王女で、シュヴェータを産んだ。彼女が世を去るとヴィラータはケーカヤ王スータ

の娘スデーシュナーを妻に迎え、彼女とのあいだにシャンカ、ウッタラという二人の息子、一人娘ウッタラーをもうけた。

ユディシュティラをはじめとするパーンダヴァがカウラヴァとの賭博に負けた時、一三年間追放されることとなり、流浪の末、マツヤ国のヴィラータの宮廷に行き、名を隠して滞在した。ユディシュティラは著名な賭博師だと自称してヴィラータ王の相手役・相談役となり、ビーマは料理人、アルジュナはブリハンナラーという女性名を名のり、宦官であると自称して王女ウッタラーの舞踏師に、ナクラは調馬師、サハデーヴァは家畜監督、ドラウパディーは侍女となってこの宮廷に住みついた。マツヤ国と敵対関係にあるカウラヴァが攻め込んで多くの牡牛を奪った時、アルジュナはドゥリヨーダナ、カルナ、ビーシュマと戦ってこれを破った。その日から三日の後、追放一三年目が終わり、パーンダヴァは自分たちの本当の姿を現わした。ヴィラータは非常に喜んで、自分の娘ウッタラーをアルジュナの妻にしようと申し込んだが、アルジュナは彼女を自分の息子のアビマニユの妻として受けた（『マハーバーラタ』ヴィラータ編）。バーラタ戦争が始まると、ヴィラータはパーンダヴァ軍の七司令官の一人に任じられ、カウラヴァのバガダッタ、ビーシュマなどと戦い、軍師ドローナと戦って破れた（カルナ編）。

（別名）マツヤパティ（マツヤ王）、マツヤラート（同）、マツヤラージャ（同）など。↓パーンダヴァ

ヴィラーダ　Virādha　ダンダカの森に棲み、人肉を食う恐ろしいラークシャサ（羅刹）。山のように巨大で、激しい苦行の結果、ブラフマー神から不死身の身体をもらった。しかし、アヨーディヤーの都を追放されたラーマが妻のシーター、弟のラクシュマナとともにダンダカの森に住んでいた時、森の行者の願いによってラーマは羅刹たちを退治することを約束し、最初に殺されたのがこのヴィラーダであった（『ラーマーヤナ』森林編）。

ヴィーラバドラ　Vīrabhadra　シヴァ神の激怒した恐ろしい形相、あるいはシヴァ神の激怒より生れた子ともいわれる。『ヴァーユ・プラーナ』によれば、一〇〇〇の頭と一〇〇〇の眼があるという。

ヴィルーダカ　Virūḍhaka　世界の南の方角を守護するヤクシャの名。仏教では増長天と訳し、四天王の一人。須弥山の第四層に住み、同じく南方を守護する。鬼神の首長で、神王形として甲冑を着け大刀を持った姿であらわされる。

ヴィルーパ　Virūpa　ヴェーダの聖仙プリヤメーダの息子であるアトリとアンギラスの兄弟で（『リグ・ヴェーダ』

一・四五・三)、讃歌のいくつかが彼に帰せられている。

ヴィルーパークシャ　Virūpākṣa　「種々の眼をしたもの」「ぶかっこうな眼をもつもの」の意で、(一)パーターラ(下界)から大地を持ち上げたという象の中の一頭。
(二)ランカーの魔王ラーヴァナの側に立って、ラーマと闘った羅刹(ラークシャサ)の名(『ウッタラ・ラーマーヤナ』)。
(三)プラジャーパティ・カシュヤパとその妻ダヌとのあいだに生れた札付きの三三人のダーナヴァ(悪魔)の一人。
(四)ナラカ・アスラの従者であるアスラの名。
(五)仏教では広目天と訳し、四天王の一人。須弥山の中腹西方にいて浄天眼をもって観察して守護するといわれる。

ヴィローチャナ　Virocana　(一)「輝くもの」の意で、太陽神スーリヤの別名。(二)プラフラーダの子でダーナヴァの一人、悪魔バリの父。

ヴィンディヤ　Vindhya　マディヤプラデーシュとデカン地方とのあいだに延びてインド亜大陸を二分している山脈の名。ヴィンディヤ山脈も神格化され、伝説によればこの神は自分よりはるかに高いヒマーラヤ山をうらやみ、太陽にスメール山の周りを回るように自分の周りをめぐってほしいと頼み、これが聞き入れられないと、その頭を高くして太陽の輝きが地上にとどかないようにした。そこで神々はヴィンディヤ山の指導者である聖仙アガスティヤに助けを求め、アガスティヤ仙はヴィンディヤ山の背を曲げさせたので、ついにこの山はヒマーラヤ山を超えることができなかったという。

ヴィンディヤヴァーシニー　Vindhyavāsinī　「ヴィンディヤ山に住む女神」の意で、シヴァの神妃カーリーの別名。カーリーはヴィンディヤ山と関係深い部族の女神であり、そこで人身供犠をともなって信仰されていたと推定されている。↓カーリー

ヴィンディヤーヴァリー　Vindhyāvalī　アスラの王バリの妻。

ヴェーガヴァット　Vegavat　「早いもの」の意で、クリシュナの子の名、あるいは、クリシュナに対立して戦ったダーナヴァの名。

ヴェーダヴァティー　Vedavatī　『ラーマーヤナ』の物語に登場する王族の聖者であるクシャドヴァジャの美しい娘。父の死後も、ミティラー国のヒマーラヤに近いところにあるアーシュラマ(修行道場)で、鹿の皮を着、髪を束ね、苦行者の姿をして修行を続けた。古代インドの伝説の中では数少ない女の行者である。

ヴェーダマートリ　Vedamātṛ　「ヴェーダの母」の意で、太陽神サヴィトリに捧げられたヴェーダの詩句ガーヤトリーのこと。

ヴェーナ　Vena　スヴァヤムブヴァの子孫であるアンガの子として生れたニシャーダ(ヴィンディヤ山中に住む原住民と推定されている)の王。プラーナ文献によれば、彼は王位についたとき、ヴェーダに定められている祭祀は無意味であり、自分に対して以外に犠牲祭を行なったり供物を捧げたりしてはならないと宣言した。聖者たちは王にその誤りを正すよう求めたが、王が頑として彼らの言うことを聞き入れないので聖者たちは怒って彼を殺してしまった。この王には王国を治めるべき子がなかったので、聖者たちはヴェーナ王の屍体の左手(あるいは大腿とする文献もある)をこすると、そこから黒こげの丸太のような平たい顔をした背の極端に低い人物が生れ出た。聖者たちはこの醜い小人にニシーダ(「坐れ」の意)と言うと、その通りにしたので彼はニシャーダと呼ばれるようになった。次に聖者たちが屍体の右手をこすると、山のように大きな堂々とした男子が生れた。彼は弓と矢をもち、掌に輪と旗の印をもっていたので、神々は彼を大地の王とした(『ヴァーマナ・プラーナ』四七)。↓ニシャーダ

ウグラ　Ugra　「恐ろしいもの」の意で、シヴァ神の四つの恐しい側面をあらわす呼び名の一つ。残りの三つの呼び名はルドラ、シャルヴァ、アシャニで、それらに対応する穏和(サウミヤ)な面をバヴァ、パシュパティ、マハーデーヴァ、イーシャーナという。↓シヴァ

ウグラジット　Ugrajit　天界の水の精女アプサラスの名『アタルヴァ・ヴェーダ』一一・六・一一八)。

ウグラセーナ　Ugrasena　(一)ヴリシュニ族に属するマトゥラーの王。悪王カンサの父。クリシュナの父ヴァスデーヴァはウグラセーナ王の大臣であったが、邪悪な心をもつ王子カンサは成人すると父王を捕えてとじこめ、自分自身が王となった(『マハーバーラタ』集会編)。しかし、クリシュナがこの悪王を殺し、ウグラセーナは王位を回復した。
(二)パーンドゥ王の五王子のうちのアルジュナの孫に当るパリークシットの子。ジャヤメージャヤ王の兄弟(初編)。
(三)カシュヤパ仙とその妻ムニとのあいだに生れた人(初編)。
(四)ドリタラーシュトラ王の百人の王子の中の一人。チトラセーナともいわれる。

ウグラムパシュヤー　Ugrampaśyā　天界の水の精女アプサラスの名(『アタルヴァ・ヴェーダ』一一・六・一一八)。

ウーシャー　Ūṣā　(一)バーナというアスラの娘で、アニルッダの妻。
(二)聖仙の娘の名。シャーリヤ王がヴィダルバ王サティヤラタを破ったとき、後宮の女たちは森に逃れた。そのうち

の身籠っていた女が子を産んだのち水を飲もうとして河に入り、ワニに飲み込まれた。その残された子を育てたのがウーシャーである。

ウシャス　Uṣas　『リグ・ヴェーダ』の暁紅の女神。独立の讃歌二〇篇をもち、『リグ・ヴェーダ』の女神の中でも目立った存在である。ウシャスは「輝く」を意味する語根 uṣ より出た名称で、ラテン語のアウローラ（曙光・曙の女神、英語のオーロラ）と同一の語源である。曙の光を神格化したものであり、毎朝、太陽に先立って空に現われ、暗黒を追い払い、人間や動物を目覚めさせ、祭祀を始めさせる女神である。ウシャスは若い女性として表現され、美しく着飾った踊り子であり、赤い馬、あるいは牛の引く車に乗っている。天の娘、夜の女神ラートリーの姉妹であり、太陽神スーリヤの恋人、あるいは妻といわれる。スーリヤはウシャスのあとを追い、スーリヤが激しく抱きしめると、暁紅の女神はたちまち消滅するのであるが、次の朝彼女は再び現われてくる。

「よきものを伴いて、我らがために、ウシャスよ、輝き渡れ、天の娘よ、高き光彩を伴いて、輝く（女神）よ、富を伴いて、女神よ、賜に満ちて（一・四八・一）。馬に富み・牡牛に富み、一切の財宝をかち得る（ウシャス）は、輝かさんがために多くのものを作る。我に向かいて恩恵を誘発せよ、ウシャスよ。寛裕なる人々の恵与心を激励せよ（二）。実にここにウシャスは来たる、うら若き美女の如く、享楽を授けつつ。足ある族を目覚ましめつつ進み、翼あるものを飛び立たしむ（五）。」（辻直四郎訳）。

→スーリヤ

ウシャナス・カーヴィヤ　Uśanas Kāvya　『リグ・ヴェーダ』の聖者。カヴィの息子で、四つの讃歌の作者といわれる。叙事詩では、ダイティヤ、アスラ、ラークシャサとしてあらわされる非アーリヤ系の王国の最高の王ヤヤーティの帝師ウシャナス・シュクラと混同されている。

ウタティヤ　Utathya　→ウチャティヤ

ウダヤナ　Udayana　月種族（チャンドラヴァンシャ）に属するヴァツァの王。カウシャームビーの都に住み、ウッジャイニーの王女ヴァーサヴァダッターとの恋物語は、劇作家バーサの作品『スヴァプナ・ヴァーサヴァダッター』、『プラティジュニャーヤウガンダラーヤナ』（あるいは『ヴァツァラージャ・チャリタ』）にあらわされた。→ヴァーサヴァダッター

ウチャティヤ　Ucathya　アンギラス族に属するヴェーダの聖者。ママターとのあいだにディールガタマスをもうけた。盲目であったが、『リグ・ヴェーダ』の讃歌を作ったという。ヴェーダ以後の伝説ではウタティヤと混同される。

ウッジャイニー　Ujjayinī　ヴィクラマーディティヤ王の都であったところで、現在のマディヤ・パーラト地方にあるウッジャインがこれに当る。ヒンドゥー教の七大聖都の一つ。紀元前六世紀ころの記録にもその名があり、アヴァンティ国の首都であった。四、五世紀のインド古典文学の最高峰といわれるカーリダーサ、六世紀の天文学者ヴァラーハミヒラはウッジャイニーの出身である。

ウッダヴァ　Uddhava　パヴァナヴィヤーディとも呼ばれ、クリシュナの友人、相談役。あるいはヴァスデーヴァの兄弟デーヴァバーガの子、したがってクリシュナの従弟ともいわれる。

ウッターナパーダ　Uttānapāda　マヌとその妻シャタルーパーとのあいだに生れた。『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、ウッターナパーダには美しく高慢なスルチと貧しく優しいスニーティ（あるいはスヌリター）という二人の妻があり、前者はウッタマを産み、スニーティはドルヴァ（北極星）を産んだ。あるいは、彼の妻はスヌリターだけで、ドルヴァ、キールティマーン、アユシュマーン、ヴァスの四子を産んだともいう。→ドルヴァ

ウッタマウジャス　Uttamaujas　バーラタ戦争でパーンダヴァ側に立って戦ったパンチャーラ出身の勇士。彼はパーンダヴァの第三王子アルジュナの戦車の右の車を守ってクリタヴァルマン、ドゥリヨーダナなどと戦い、カルナの子のスシェーナを殺した（『マハーバーラタ』カルナ編）。戦争終結の前夜、パーンダヴァの陣営で睡眠中にアシュヴァッターマンに殺された（睡眠編）。→アシュヴァッターマン

ウッタラ　Uttara　マツヤ王ヴィラータの子で、バラタ戦争ではパーンダヴァ側について最初の日にヴィーラバーフ、シャリヤと戦って倒された（『マハーバーラタ』ビーシュマ編）。戦場で勇敢に戦って死んだ彼は天界に昇った（昇天編）。

ウッダーラカ・アールニ　Uddālaka Āruṇi　クルパンチャーラ国のバラモンで、父アルナと同様に最もすぐれたヴェーダ学者の一人。『ブリハド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』の哲学者の一人。ヤージュニャヴァルキヤ仙の師（『ブリハド』六・三・七）。彼の息子シュヴェータケートゥ・アールネーヤがパンチャーラ族の集会に出席し、国王プラヴァーハナ・ジャイヴァリに「生類がこの世を去って逝く先はどこか」「生類が再びこの世にもどって来る道すじはどのようなものか」ということを問われたとき、答えることができず、悄然として父のもとに帰ってありのままに父に告げた。ウッダーラカもそれは自分の未だ知らない問題であると言って王のも



王の面前で対論するバラモンたち

とに行き、その教えを説き明かすことを求めた。これに対してジャイバリ王が説いたのは五火・二道の教えであった（『チャーンドーギヤ』五・三―一〇）。シュヴェータケートゥは父の命によって一二歳のとき師のところに入門し、二四歳のときヴェーダ全篇の学習を終わって得意満面で父のもとに帰って来た。その時、ウッダーラカは息子に「それさえ学べば、未だ聞かないことも聞いたことになり、未だ考えたことのないものも考えたことになり、未だ知らないことも知ったことになるような学問を修めて来たか、どうか」をたずねた。息子が否と言ったとき、彼が説いたのが「太初において、ただ実有（サット）のみがあり、それより火（テージャス）、水（アーパス）、食物（アンナ）が生じた」という説であったという（『チャーンドーギヤ』六・一―）。

ウッタラクル　Uttarakuru　ヒンドゥー教の宇宙観においては、人間の住む世界をジャムブドヴィーパといい、このジャムブドヴィーパは東西にのびる山脈によって七つの国に分けられている。そのうちの最北のシュリンガヴァットの山の北をウッタラクルという。↓ジャムブドヴィーパ

ウッチャイヒシュラヴァ　Ucchaiḥśrava　インドラ神の白馬。神々とアスラが乳海を攪拌したときに生れ出たもので、神々の食物を食べる馬の中の王であるといわれる。

ウドゥムバラ　Uḍumbara　仏典では優曇華といい、学名ではFicus glomerata, Roxb.クワ科に属し、和名を「フサナリイチヂク」という。その花は三〇〇〇年に一度開くとも、理想の帝王である転輪聖王が出現したときに咲くとも、花なくして実を結ぶともいわれる。仏教では、仏陀の出世に会いがたいことの譬喩として用いられ、過去七仏のうちのコーナーガマナ仏（拘那含仏）がこの樹の下で成道したと伝えられる。

ウパスンダ　Upasunda　スンダの兄弟ニスンダの子と

して生れたダイティヤ（魔族）の一人。

ウペーンドラ　Upendra　「インドラの弟」という意味で、インドラ神がクリシュナに与えた名。インドラ神はクリシュナの力が益々強大となっていくことをねたんで大洪水を引き起こし、ゴーヴァルダナ山やその麓で草を喰む牛や牧童たちを亡ぼしてしまおうとした。これを知ったクリシュナはゴーヴァルダナ山を持ち上げて牛も牧童たちも助かった。そこでインドラ神はクリシュナをなだめるため、ウペーンドラという名を与えた（『ヴァーユ・プラーナ』五・一二）。

ウマー　Umā　シヴァの神妃（デーヴィー・シャクティ）。多くの神妃の中で、パールヴァティーとウマーは優美さ・穏和さをあらわしている。ウマーは『ケーナ・ウパニシャッド』（三・一二）においては「最も美しいヒマーラヤの娘」と呼ばれて、アグニ、インドラ、ヴァーユなどよりも高い地位に置かれ、『ラーマーヤナ』ではラクシュミー女神、ガンガー女神と並んで崇拝される。『マハーバーラタ』の付録とされる『ハリヴァンシャ』ではウマーという名の由来について次のような物語を記している。ヒマーラヤ山の神ヒマヴァットとその妻メーナーとのあいだに、アパルナー、エーカパルナー、エーカパータラーという三人の娘があった。三人は女ながらも激しい苦行を行ない、エーカパルナーは一日に一枚の木の葉（エーカ・パルナ）を食べるだけ、エーカパータラーはパータラの木の葉だけを食べて修行に励んだ。長女のアパルナーは一枚の葉も食べることなく修行に打ち込んでいたので、心配した母のメーナーが、「おお、お止めなさい（ウマー）」と言ったので、ウマーと呼ばれるようになり、その修行の結果としてマハーデーヴィー（大女神）となったという。↓アパルナー

ウマーパティ　Umāpati　「ウマーの夫」の意で、シヴァ神の別名。

ウラガ　Uraga　パーターラ（下界）に住むといわれる蛇。通常、人間の顔をもつものとして表現される。叙事詩の伝説によれば、カシュヤパ仙の妻クローダヴァシャーに一〇人の娘が生れ、その中のカドルーからウラガが生れ、スラサーからはナーガ（蛇）が生れたという。

ウラナ　Uraṇa　『リグ・ヴェーダ』において、インドラの敵とされる小悪魔の一人。九九の腕をもっていたという（二・一四）。

ヴリコーダラ　Vṛkodara　「狼のような腹をしたもの」の意で、パーンドゥ王の五王子中の第二子ビーマの別名。彼はあくことのない食欲の故にこのようにいわれる。

ヴリシュニ　Vṛṣṇi　西北インドを支配していたヤーダヴァ族の王ビーマ・サートヴァタの四子中の末子で、この

ヴリシュニの系統がヴリシュニ族といわれる。この系統からヴァスデーヴァ、その子にクリシュナ、バララーマ、クル族のパーンドゥ王と結婚したプリター（あるいはクンティー）が出た。クル族が二分されたバーラタ戦争においては、ヴリシュニ族のあるものたちと他のヤーダヴァ族のものたちはカウラヴァ側についたが、ヴァスデーヴァの子供たちはプリターとの関係からパーンダヴァ側について戦った。大戦後数年で、ヴリシュニ族とヤーダヴァ族は同族争いのために滅亡した。サンカルシャナ、ヴァスデーヴァ、プラディユムナ、サームバ、アニルッダは、ヴリシュニ族の五勇士といわれる。→ヤーダヴァ

ヴリトラ Vṛtra 『リグ・ヴェーダ』以来の蛇形の魔神。水をせきとめ、干ばつや悪天候を引き起こすもの。もと「障碍」の意味で、天地を覆い隠すものともいわれる。『リグ・ヴェーダ』においては、ヴリトラは常にインドラの敵として描かれ、インドラの武器ヴァジュラ（金剛杵）によって打ち倒される。彼が山中にとじこめておいた水がインドラによって解放され、その水がヴリトラの屍体を乗り越えて流れ下っていくさまはしばしば描かれている（一・三二）。インドラとヴリトラとの闘いの神話はある自然現象を表わしており、インドラは雷雨の神であり、ヴリトラが水を閉じ込めている山とは雲であると解釈されている。また、ヴリトラは雲や干ばつの鬼神ではなくて冬の巨人であって、冬の巨人の力が太陽神としてのインドラによって破壊されるのであるともいわれる（ヒレブラント A.Hillebrandt の意見によれば、インドラが解放する水とは豪雨ではなく、冬のあいだは涸渇していて、太陽の熱が強まってヒマーラヤ山系の山々の大雪を溶かして満たされる西北インドの河流であるという）。いずれにせよ、インドラとヴリトラとの闘いは、アーリヤ族が北インドに勢力を伸ばす際の侵入者と原住民との関係を背景に成立した神話とみられている。

プラーナ文献には、ヴリトラの出生について二つの物語が記されている。一つはカシュヤパが創り出したというものと、他はトヴァシュトリの子とするものである。

プラジャーパティ・カシュヤパはその妻ダヌとのあいだにヒラニヤカシプという子をもうけたが、ヴィシュヌ神は神々に求められてこの子を殺した。ダヌが嘆き悲しんだため、カシュヤパは別の子ヴァラを産ませた。しかし、この息子もインドラに殺されてしまったので、怒ったカシュヤパは神に犠牲を捧げて「インドラを殺すことのできる息子をお与えください」と祈った。この願いは聞き入れられて、たちまち黄色の目とまっ黒な皮膚をした巨人が祭祀の火の中から生れ出た。この悪鬼はかもしかの皮を身にまとい、手には剣をもち、大きく開けた口からは巨大な牙が突き出

ていた。彼は雷のような声で「聖者よ、私は何をしたらよいのか」と叫んだ。カシュヤパはこの巨人にインドラを殺すことを命じた。この巨人こそヴリトラであった（『パドマ・プラーナ』ブーミ編）。

第二の物語は、プラジャーパティ・トヴァシュトリがインドラを殺すためにヴリトラを創ったというものである。インドラとトヴァシュトリは、もともと仲が悪く、敵同士であった。彼はインドラを倒すためにトリシラス（「三つの頭をもつもの」の意）、別名ヴィシュヴァルーパ（あらゆる形をもつもの）という名の息子をもうけた。トリシラスは一つの頭でスラー酒を飲み、第二の頭でソーマ酒を飲み、最後の頭で食物を食べたという。トリシラスはバラモンであったが、その母がアスラ（魔族）だったため、アスラたちに好意をもった。インドラはトリシラスの態度ふるまいを知り、それが非難されるべきものであることを知り、彼の力を恐れてトリシラスの三つの頭を切り落としてしまった。すると、スラー酒を飲んでいた頭はカラピンガ鳥となり、ソーマ酒を飲んでいた頭はカラピンジャラ鳥に、食物を食べていた頭はティッティリ鳥（やまうずらの一種）となったという。

息子が殺されたのを知ったトヴァシュトリは腹を立て、祭火を燃やして呪文を唱えた。この祭祀は八日間続き、八日目の夜、光り輝く男性の鬼神があらわれてトヴァシュトリに尋ねた。「父よ、私の名は何というのです。私は何をしたらよいのですか。あなたは何を悲しんでいるのですか。」さらに彼は海を干上がらせ、山々を砕き、太陽や月を守るなど、トヴァシュトリのためになることは何でもする準備ができていると言ったので、喜んだトヴァシュトリは火の中から生れ出た息子にヴリトラという名を与え、インドラを倒すように命令した（『デーヴィー・バーガヴァタ』六編）。

ヴリトラの武勇と力を知って恐ろしくなったインドラは、彼を殺すための方法を考えた末、ヴリトラと協定を結ぼうとして七人の聖者を使者として送った。七人の聖者たちはヴリトラのもとに行き、インドラの占める地位の半分を与えることを条件に講和することを申し出た。ヴリトラはこの条件で講和することを承知し、インドラの宮殿で両者は抱きあって永遠の友情を誓ったのではあるが、もちろんインドラは本気でそうしたのではなく、ヴリトラを亡きものにする機会を窺っていたのである。ある時、インドラは一計をめぐらし、美女ラムバーをヴリトラのもとに行かせ、彼女の魅力でヴリトラを骨抜きにした上で殺そうとした。ラムバーは命令に従ってナンダナの森へ行き、ヴリトラを待った。たまたまそこにやって来たヴリトラは、ラムバーが甘美な声で歌い、魅惑的に踊るのを見て、たちまち彼女

のとりこになってしまった。ヴリトラは彼女に近づいて名を尋ね、彼の妻となるよう申し入れた。ラムバーは、ヴリトラが何事でも彼女の言う通りにするという条件で、彼の申し込みを受け入れた。ヴリトラは喜んでこの条件をのみ、二人はナンダナの森で楽しい時を過ごした。しばらくしてから、ラムバーはスラー酒を飲むよう彼に勧めた。スラー酒を飲むことはバラモンには禁じられていたが、彼はラムバーとの約束にしたがってこの酒を飲みほした。するとたちまち、意識を失った。この時を待っていたインドラはすばやくヴリトラに近寄り、彼の武器ヴァジュラをふるってヴリトラをうち殺した。このようにして、インドラは仇敵ヴリトラを倒したのでヴリトラハン（ヴリトラを殺すもの）の別名を与えられたが、同時にバラモンを殺した罪を犯すことにもなった（『パドマ・プラーナ』ブーミ編）。

『マハーバーラタ』では、インドラとヴリトラとのいつ終わるかも知れない激しい闘いに人々は恐れおののいたが、ある時、ヴリトラが大きく口を開いた瞬間をとらえて、インドラがその口の中にヴァジュラを打ち込み、彼を倒した物語がしるされている（森林編、戦争準備編、静寂編）。

〔別名〕『マハーバーラタ』では、ヴリトラの別名として、アスラ、アスラシュレーシュタ（アスラ中の最上のもの）、アスレーンドラ（アスラの王）、ダイティヤ（ディティの子、悪魔）、ダイティヤパティ（ダイティヤの王）、ダイティエーンドラ（同上）、ダーナヴァ（悪魔）、ダーナヴェーンドラ（ダーナヴァの王）、ディティジャ（ディティの子）、スラーリ（神々の敵）、トヴァーシュトラ（トヴァシュトリの子）、ヴィシュヴァートマン（一切のものの中心）などとも呼ばれる。→インドラ

ヴリトラハン　Vṛtrahan　「悪魔ヴリトラを殺す者」の意味で、インドラ神の別名。

ウールヴァ　Ūrva　聖仙リチーカの父で、ジャマダグニの祖父。

ウルヴァシー　Urvaśī　天上の水の精女アプサラスの一人。『リグ・ヴェーダ』（一〇・九五）にプルーラヴァス王との恋愛の対話が記され、『シャタパタ・ブラーフマナ』（一一・五）にも再録されている。→プルーラヴァス

ウルーカ　Ulūka　㈠「ふくろう」の意で、この鳥は古くから不幸（ナイルリタ）の先ぶれをするものと見られていた（『リグ・ヴェーダ』一〇・一六五）。そこで、王がラージャスーヤ祭や馬祀祭を行なう時、王を災害から守るために、不幸・災害の女神ニルリティに供物の一つとしてこの鳥が捧げられた。

㈡ウルーカ国の王。キタヴァの子。バーラタ戦争においては、カウラヴァ側に味方してパーンダヴァと戦った。

㈢カナーダともいい、ヴァイシェーシカ学派の伝説上の開祖。『ヴァイシェーシカ・スートラ』の作者。

ウルーピー　Ulūpī　ナーガ（蛇）の王カウラヴィヤの娘である蛇女。パーンドゥの五王子の一人、アルジュナは一三年間の追放のあいだに、ガンジス河で沐浴し、祖霊に供養して岸に上がろうとした時、ウルーピーによってナーガ（蛇）の国に引き込まれて結婚を迫られ、一夜を共にしたことがあった。その結果、イラーヴァットが生れたという。→アルジュナ

ウールミラー　Ūrmilā　ヴィデーハ王ジャナカの娘、ラーマの妻となったシーターの妹。ラーマの弟ラクシュマナの妻となって、アンガダとチャンドラケートゥを産んだ。

エーカーシュタカー　Ekāṣṭakā　「満月のあとの第八日」の意で、インドラの妻シャチーとして神格化されたもの。子供たちに健康と長命とが与えられるようにと祈りが捧げられる女神。『アタルヴァ・ヴェーダ』では、エーカーシュタカーはプラジャーパティの娘で、きびしい苦行（タパス）を行なった女神とされ、インドラとソーマの母とされる。

エーカダンシュトラ　Ekadaṃṣṭra　エーカダンタともいい、「一本の牙を持つもの」の意で、ガネーシャの別名の一つ。

エーカチャクラ　EKacakra　プラジャーパティ・カシュヤパとその妻ダヌとのあいだに生れた悪魔。悪魔シャムバラ、ヴィプラチッティ、ナムチ、プローマン、ヴィシュルタ、ドゥルジャナ、アヤシラス、アシュヴァシラス、ケートゥ、ヴリシャパルヴァン、アシュヴァグリーヴァ、ヴィルーパークシャ、ニクムバ、カパタ、エーカパートは彼の兄弟である（『マハーバーラタ』初編）。

エーカチャクラー　Ekacakrā　『マハーバーラタ』に述べられるキーチャカ国にある町の名。パーンドゥ王の五王子たちは国外に追放された時、聖仙ヴィヤーサのすすめにより、この町にしばらく住んだといわれる。

エーカパーダ　Ekapāda　「一本足のもの」の意で、シヴァ神の別名。あるいは一一ルドラの別名。

エーカパルナー　Ekaparṇā　エーカパータラー、アパルナーとともに、ヒマヴァットとその妻メーナーとのあいだの娘。彼女らはきびしい苦行を行ない、エーカパルナーは毎日一枚（エーカ）の草の葉（パルナ）しか食べず、エーカパータラーは一枚の草の葉（パータラ）を食べるだけで、アパルナーにいたっては一枚の草の葉も食べなかった（ア・パルナ）。→アパルナー

エーカラヴィヤ　Ekalavya　シャトルグナの弟として生れたが、幼いころ棄てられ、非アーリヤ系のニシャーダ

族のものに育てられ、成長してその王となった。一夜、クリシュナの都ドヴァーラカーの攻撃を助けて、クリシュナによって岩に投げつけられて死んだ。

エータシャ　Etaśa　㈠聖仙の名。祭祀を行なっている時、その邪魔をした自分の子供たちに呪いをかけた程のきびしさをもった聖者として知られる。
㈡太陽神スーリヤの車をひく馬の一つの名（『リグ・ヴェーダ』一・一八・一二二）。

エームーシャ　Emūṣa　海の下から大地をもち上げたという野猪の名（『シャタパタ・ブラーフマナ』一・一六六）。まっ黒で、一〇〇本の腕をもつものとして描かれ、ヴィシュヌの化身（アヴァターラ）としての野猪の原型と見られている。

オーシャディプラスタ　Oṣadhiprastha　「薬草のあるところ」の意で、カーリダーサの詩『クマーラサムバヴァ』にあらわれるヒマーラヤ山中の町の名。

カ　行

カイケーイー　Kaikeyī　イクシュヴァークの系統を引くアヨーディヤー王ダシャラタの三人の妻の一人。ダシャラタ王には三人の妻があったが、長いあいだ息子ができなかったので、アシュヴァメーダ（馬祀祭）を行なったところ、カウサリヤーからはヴィシュヌ神の生れ変わりであるラーマが、カイケーイーからはバラタが、もう一人の妻スミトラーからはラクシュマナとシャトルグナが生れた（『ラーマーヤナ』アヨーディヤー編）。ダシャラタ王は四人の息子のうちで長子のラーマを愛し、王位継承者に定めた。しかし、せむしの侍女にそそのかされたカイケーイーは、彼女自身の産んだ王子バラタを王位につかせようとし、王がかつて彼女に二つの望みをかなえる約束をしていたのを思い出して、ラーマを一四年間のあいだ追放すること、バラタを王位継承者とすることを王に要求した。この約束については次のような物語がある。昔、神々とアスラたちが戦ったとき、ダシャラタはカイケーイーを伴って天上に昇り、インドラを助けてアスラと戦った。戦車を縦横に走らせて戦ううちに彼の乗る戦車の車輪のボルトが抜けたが、カイケーイーはボルトの穴に自分の親指をさしこんで事なきをえた。これを知ったダシャラタは感謝のしるしとして彼女に二つの望みをかなえてやることを約束し、彼女はこの約束をこの日まで保留していたのである。ラーマは母のカウサリヤーや弟のラクシュマナが引き止めるのを振り切って、シーターとともに宮殿を出る。こうして『ラーマーヤナ』の物語が始まるのである。→ダシャラタ、バラタ

カイケーヤ　Kaikeya　「ケーカヤの子孫」の意で、クル族を二分したバーラタ戦争で、パーンダヴァ側と同盟した部族の名、および、その王の名。カイケーヤ王はクリシュナの義兄弟で、その五人の息子もすべて父に従ってカウラヴァ軍と戦った。

カイタバ　Kaiṭabha　マドゥとともに語られる悪魔（アスラ、ダイティヤ、あるいはダーナヴァ）で、『マハーバーラタ』やプラーナ文献によれば、この世の終りの時期にヴィシュヌ神が眠っている時、その耳から生れ出た。カイタバとマドゥの目的は、ヴィシュヌ神のへそから生えた蓮華の上に横たわっているブラフマー神を殺すことであったが、これを知ったヴィシュヌ神は二人の悪魔を自分の手で殺した。そのため、ヴィシュヌ神はカイタバジット（カイタバに勝った者）、マドゥスーダナ（マドゥを殺す者）という名

を与えられた。『マールカンデーヤ・プラーナ』ではカイタバを殺したのはウマーであるとされ、ウマーはカイタバーと呼ばれている。また、ヴィシュヌが巨大なカイタバ・マドゥの二人のアスラを殺したとき、海の上は彼らの肉と骨髄で一杯となった。このうちの骨髄（メーダス）が一つの塊となって大地ができたので、大地はメーディニーと呼ばれるようになったという。また、『マハーバーラタ』の他の伝説によれば、馬の頭をしたヴィシュヌ神の化身であるハヤシールシャが、ヴェーダを盗んで海の底に隠した二人のアスラを殺したという。

カイラーサ　Kailāsa　ヒマーラヤ山脈中のマナサロワラ湖の北方にある山。カイラーサは「水晶」、あるいは「氷」の意味で、ヒンドゥー教の聖地の一つ。ヒンドゥー神話では世界の中心にあるメール山の南側にあるとされる峰で、その頂上になつめの木があり、その根元からガンジス河が流れ出ているという。この山には神々の宮殿があり、とくにシヴァとクベーラがここを住居としている。このため、クヴェーラはカイラーサ・ナータとも呼ばれる。ヒマーラヤ山脈中のカイラーサ山は、チベットではティ・セ Ti-se（あるいは Ti-rtse）といい、仏教・ポン教ともに聖地としている。とくにポン教 Bon-po ではカイラーサ山・マナサロワラ湖を含む地方一帯をシャンシュン地方と呼び、聖地とした。ティ・セは「シャンシュンのポンの山」、「魂の住む山」ともいわれ、ポン教の教祖シェン・ラブ Gshen-rab が天から降り立ったところであるとされている。パラソルのような天球の下に、八枚の花弁を持った蓮華のような大地の上にそそり立っていると表現され、また「宇宙のへそ」であるともいわれる。↓ジャムブドヴィーパ、シヴァ、クヴェーラ



カイラーサ山頂で憩う
シヴァとパールヴァティー

カーヴィヤ・ウシャナス　Kāvya Uśanas　ウシャナス・カーヴィヤ（カヴィの子ウシャナス）ともいわれ、ヴェーダの聖仙、予言者。彼はたぐい稀な智慧を持つ聖者と

して知られ、智慧をあらわすソーマが彼に関連して説かれている（『リグ・ヴェーダ』九・九七）。彼はアグニ（火神）を供犠を司るホートリ祭官にしたとも、インドラの友人であるともいわれる。叙事詩においては、彼は月種族（チャンドラヴァンシャ）のヤヤーティ王の帝師であるウシャナスと同一視される。

カウサリヤー　Kausalyā　㈠イクシュヴァークの子孫でコーサラの都アヨーディヤーの王ダシャラタの三人の妻のうちの一人。ラーマの母。『ラーマーヤナ』によれば、ダシャラタ王には息子がなかったので、後継者を求めてアシュヴァメーダ（馬祀祭）を行なった。この時、天上の神々は魔神ラーヴァナに悩まされていて、ヴィシュヌ神に地上に生まれかわってラーヴァナを殺して欲しいと要請し、ヴィシュヌは神々の要望に応えてダシャラタの息子として生まれようと約束した。そこで供儀祭が終って、ダシャラタ王の三人の妻に四人の子供が生れることになり、カウサリヤーから生れたのがヴィシュヌ神の生れかわりであるラーマであったという。

㈡カーシー王の妃でアムバー、アムバーリカー、アムビカー三人娘をもうけた（『マハーバーラタ』初編）。

㈢ミティラーの王ジャナカの妃。↓ダシャラタ、ラーマ

カウシーカ　Kauśīka　『マハーバーラタ』の説話に出てくるバラモン。信心深い猟師ダルマヴィヤーダについて哲学・道徳を学び、徳のある生活をすることが人間をバラモンにするとの教えを受けた（森林編）。

カウシキー　Kauśikī　㈠祖霊の世界へ流れて行くといわれる聖なる河。サティヤヴァティーと同一視される。『ラーマーヤナ』によれば、サティヤヴァティーが死後、この河になったという。

㈡シヴァ神の妻パールヴァティーの身体から生れた女神（『マールカンデーヤ・プラーナ』八五・四〇）。

カウシャームビー　Kauśāmbī　ヴァツァ国の首都。ガンジス河とヤムナー河の合流点の近くにあったと推定されている。伝説によれば、ブラフマーの息子のクシャには、クシャームバ、クシャナーバ、アスールタラジャス、ヴァスという四人の息子があり、それらの四人が父の命によってそれぞれ都を建てた。このうち、クシャームバの建てた都がカウシャームビーであるという（『ラーマーヤナ』少年編）。

ガウタマ　Gautama　㈠「ゴータマの息子」の意味で、シャラドヴァット仙の名。アハリヤーの夫。

㈡ニヤーヤ学派の開祖。

ガウタミー　Gautamī　㈠シヴァの神妃ドゥルガーの別名。

(二)強大な力をもつ羅刹女の名。

ガウパーヤナ Gaupāyana 「ゴーパの子孫たち」の意で、『リグ・ヴェーダ』の四つの讃歌の作者とされる四人の聖仙のこと。その中の一人、スバンドゥは、一たび殺されたが奇跡的によみがえった話が伝えられている。

カウモーダキー Kaumodakī 不思議な力をもつクリシュナの矛。クリシュナがインドラ神と戦い、カーンダヴァの森を焼いた時、アグニ神によって与えられたもの。

カウラヴァ Kaurava 「クルの子孫たち」の意味で、クル族の王ドリタラーシュトラの息子であるドゥリヨーダナを総領とする百王子たち、およびバーラタ戦争において彼らに味方する人々をいう。クル族を二分するバーラタ戦争では北インドの諸国はカウラヴァ側と、パーンドゥ王の五王子たちを中心とするパーンダヴァ側とに分れて参戦した。たとえば、ガンダーラ王シャクニはカウラヴァに、パンチャーラの王ドゥルパダとその子ドリシュタディユムナなどはパーンダヴァ側に味方した。↓ドリタラーシュトラ、パーンダヴァ

カウンディニヤ Kaundinya 古聖者で文法家。シヴァ神を怒らせ、ヴィシュヌ神によって救われたので、ヴィシュヌグプタ(ヴィシュヌに守られた者)といわれる。

カクシーヴァット Kakṣīvat ヴェーダの聖仙。アシュヴィン双神と関連して語られている。ディールガタマスとウシジの息子で、『リグ・ヴェーダ』のいくつかの讃歌の作者といわれる。彼は、クシャトリヤのパジュラ族の出身であることからパジュリヤともいわれる。

カサー Khasā カシュヤパ仙の妻でダクシャの娘。ヤクシャとラークシャサ(羅刹)の母。

カーシー Kāśī ヴァーラーナシー(ベナレス)の古代名。インドの七大聖都の一つ。紀元前六世紀のころから栄え、学問・宗教の中心地となり、ヒンドゥー教徒の巡礼の地となった。とくにシヴァ派の信者にとっては、カーシーナータ(カーシーの主)としてのシヴァ神の聖地である。

ガジェーンドラ Gajendra 象の王。この象王は前生においてインドラディユムナと呼ばれるパーンダヴァの王であり、熱心なヴィシュヌの信者であったが、アガスティヤ仙の呪いによって象の姿となった。彼は妻の象と遊んでいる時、水中に住む怪物に捕えられたが、ヴィシュヌ神に祈るとたちまち救われた。↓インドラ

ガジャクールマーシン Gajakūrmāśin 「象と亀を食うもの」の意で、聖鳥ガルダが象と亀を爪でつかみ取った時につけられたガルダの別名。もと象と亀は人間の兄弟であったが、仲が悪く互いに呪いをかけあって動物の姿となり、湖に住んでもなお争っていた。そこでガルダはこれらの動物をつかんでニヤグローダ(バンヤン樹)木の上に運んだところ、その重みでバンヤンの枝が折れ始めた。その枝の下でヴァーラキリヤ仙が修行をしているのを知ったガルダは、亀と象を乗せたまま、そのバンヤンの枝をくちばしでくわえて空中へ飛び立ち、ヴァーラキリヤ仙は何も知らずに修行を続けた。このことがあってから聖仙たちはこの鳥にガルダ(重荷を負うもの)という名をつけたといわれる。↓ガルダ

カシュヤパ Kaśyapa ブラフマー神の意から生れたマリーチの子である聖仙(あるいは、ブラフマーの子といわれることもある)。プラジャーパティ(造物主)のなかの首長。叙事詩・プラーナの伝説によれば、カシュヤパ仙には二一人の妻があり、そのうちのアディティ、ディティ、ダヌ、カーラカー、ダナーユス、シンヒカー、ムニ、クローダー、プラヴァー、アリシュター、ヴィナター、カピラー、カドルーの一三人はダクシャの娘である(『マハーバーラタ』初編。『ヴィシュヌ・プラーナ』一では、アディティ、ディティ、ダヌ、アリシュター、スラサー、スラビ、カサー、ヴィナター、タームラー、クローダヴァシャー、イラー、カドルー、ムニの名をあげている)。カシュヤパ仙の妻たちのうち、第一の妻アディティからはダートリ、アリヤマン、ミトラ、インドラ(シャクラ)、ヴァルナ、アンシャ、バガ、ヴィヴァスヴァット、プーシャン、サヴィトリ、トヴァシュトリ、ヴィシュヌのアーディティヤ神群と呼ばれる一二人の息子が生れ、第二の妻ディティからはヒラニヤカシプ、ヒラニヤークシャという名のダイティヤ(魔神)が、他の妻ダーヌ(あるいはダヌ)からはヴィプラチッティ、シャムバラ、ナムチ、プローマンなど一〇〇人のダーナヴァ(魔神)が、シンヒカーからは太陽と月の敵であるラーフ、スチャンドラ、チャンドラハルトリなどが、ダナーユスからはヴィクシャラ、バラ、ヴィーラ、ヴリトラのアスラたちが、ヴィナターからは聖鳥ガルダ、アルナ、アールニ、ヴァールニが、カドルーからはシェーシャ、ヴァースキ、タクシャカなどのナーガ(蛇)が、プラーヴァーからはガンダルヴァたちとアラムブシャー、ラムバー、スバーフなど多くのアプサラスたちが、それぞれ生れた。このようにして、神々、魔族、人間、動物などは、すべてカシュヤパ仙とその妻たちの子孫であるという(『マハーバーラタ』初編、『ヴィシュヌ・プラーナ』一、『アグニ・プラーナ』一八など)。↓アディティ、アーディティヤ、ヴィナター、カドルー

ガダ Gada ハリ、すなわちヴィシュヌ神に殺された悪魔の名。技術を司る神ヴィシュヴァカルマンはこの悪魔の骨から棍棒の武器を作り、ヴィシュヌに捧げた(『アグニ・

プラーナ』㈠)。

ガダー　Gadā　木や鉄で作った矛、あるいは棍棒。古代インドの戦争で好んで用いられた武器で、ビーマのような強大な力をもつ勇士しかこれを扱うことはできなかった。ビーマのガダーは、その力と地位にふさわしく巨大で金でおおったものであったという。この武器は世界を守るものとしてしばしば神格化され、モーダキー、シカリーなどと呼ばれる。

ガダーデーヴィー　Gadādevī　ヴィシュヌ神のもつ矛、あるいは棍棒(ガダー)を女性の神格としてあらわしたもの。

カダムバ　Kadamba　クリシュナ神と関係が深い聖樹。



クリシュナと関係深いカダムバの樹

学名 Anthocephalus cadamba, Miq.、和名クビナガタマバナノキ。もとインドラ天の木であったが、クリシュナがインドラから奪い取ってこの地上に植えたと伝えられる。クリシュナのお気に入りの木で、しばしばこの木の下でフルートを吹く姿で表現される。クリシュナがルクミニーと結婚したのもカダムバの木の多いマドゥヴァナと呼ばれる森の中であったという。また、戦争の勝利を願う王たちによっても崇拝される。

カチャ　Kaca　ブリハスパティの子。『マハーバーラタ』の伝説によれば、カチャはアスラの聖仙シュクラ、あるいはウシャナスの弟子となって、死人を生き返らせることのできる力をもつ秘密の呪文を得ようとした。これを知られるのを妨げようとしたアスラたちはカチャを殺したが、彼に恋心をいだいたシュクラの娘デーヴァヤーニーの哀願によって生き返ることができた。二度目に殺された時も同様にして生命を与えられ、三度目は屍体を焼かれてその灰はシュクラの飲む酒と混ぜられたが、この時もデーヴァヤーニーは恋人を生き返らせるよう父に頼み込んだ。愛娘の強い願いをしりぞけるわけにはいかず、シュクラが秘密の呪文を唱えると、驚いたことには彼の腹の中からカチャの声がした。今度はシュクラが自分自身を救わなければならず、その呪文を弟子たちに教え、自分の腹を切り開いた。そこで腹の中から出て来たカチャは師から教わった呪文を唱え、師の生命をよみがえらせた。このようにして生き返らせられたのにもかかわらず、彼はデーヴァヤーニーの結婚の申し出を拒否した。怒った彼女がその秘密の呪文を効力のないものにしてしまったので、腹を立てたカチャは反対にデーヴァヤーニーに呪いをかけ、バラモンではなくてクシャトリヤの妻となるようにしてしまったという。↓デーヴァヤーニー

ガーディ　Gādhi　カウシャームビー(ヤムナー河の岸辺にある現在のコーサン)の建設者クシャームバの息子(『ラーマーヤナ』)。『ヴィシュヌ・プラーナ』(四・七)によれば、クシャームバ王はインドラ神に等しい力をもつ子供が生れることを願ってきびしい苦行を始めた。インドラ神は自分と同じ力をもつ者が生れることを恐れて、自分自身がクシャームバの子として生れることにし、これがガーディであるという。系譜上は、ガーディはジャマダグニの父、パラシュラーマの祖父。

カトヴァーンガ　Khaṭvāṅga　㈠月種族(チャンドラヴァンシャ)に属する聖なる王で、ディリーパとも呼ばれる。『バーガヴァタ・プラーナ』(八)ではカルマーシャパーダの孫とし、『マハーバーラタ』ではバラタ族の一六人の著名な王の一人に数えている(ドローナ編)。↓ディリーパ

㈡パーンシュラともいう。シヴァ神の武器の一つで、上部に頭がい骨を付けた棍棒。

ガトートカチャ　Ghaṭotkaca　クル族の王パーンドゥの第二王子ビーマと羅刹のヒディムバの妹ヒディムバーとのあいだに生れた子。バーラタ戦争においてはパーンダヴァのために勇敢に戦った。パーンダヴァの長子ユディシュティラはドリタラーシュトラ王から王位を譲られたが、カウラヴァのドゥリヨーダナは口実をもうけてパーンダヴァをヴァーラナーヴァタに追放した。しかも彼らを漆の家に住まわせて火を付け、焼き殺そうとした。危うく難を逃れたパーンダヴァはガンジス河の対岸の森をさまよい、ニヤグローダ樹の下で眠った。ここに羅刹のヒディムバというものが住んでおり、パーンダヴァを食おうとしたが、その妹ヒディムバーはビーマに恋し、兄のヒディムバが殺されたのちも意志を変えなかったので、ユディシュティラは男子が生れるまでという約束でビーマとヒディムバーの結婚を認めた。こうして生れたのがガトートカチャである(『マハーバーラタ』初編)。成長したガトートカチャと母ヒディムバーがパーンダヴァと別れる時、パーンドゥ王の未亡人クンティー(五王子の母)は彼に「あなたはパーンダヴァの長子であるから、いつも彼らを助けなければなりません」と語り、彼もそれを承知した。森の中をさまようち、パーンダヴァは疲労で動けなくなった。そこでビーマがガトートカチャのことを思い出して呼び出すと、直ちにガトー

トカチャが大勢のラークシャサたちを引き連れて姿を現わした。彼自身は、五王子共通の妻ドラウパディーを肩にのせ、ラークシャサたちはパーンダヴァの他のものを背負って空を飛び、ナーラーヤナが苦行をしているパドリカーシュラマに着いた（森林編）。バーラタの大戦においては、パーンダヴァに味方したガトートカチャは初日にアラムブシャ、ドゥリョーダナと戦い、のちにカウラヴァの勇士カルナに殺された（ドローナ編）。

〔別名〕バイマセーニ（ビーマセーナの子）、ビーマセーナスタ（ビーマセーナの子）、ビーマスタ（ビーマの子）、ハイディムバ（ヒディムバーの子）、ラークシャサーディパティ（羅刹王）、ラークシャサプンガヴァ（同）、ラークシェーシュヴァラ（同）など。→ヒディムバー

カドルー　Kadrū　「赤褐色」の意で、ダクシャの娘、地上のナーガ（蛇類）の母。カシュヤパ仙の妻の一人。一〇〇〇匹の多頭の蛇の母であり、シェーシャ、ヴァースキなどの蛇王は彼女から生れた。

ガナデーヴァター　Gaṇadevatā　「神々の群」の意で、通常、九つの群に分けられる。

㈠アーディティヤ、㈡ヴィシュヴァデーヴァ、㈢ヴァス、㈣トゥシタ、㈤アーバースヴァラ、㈥アニラ、㈦マハーラージカ、㈧サーディヤ、㈨ルドラ。

ガナパティ　Gaṇapati　「群衆の主」の意で、ブラフマナスパティの別名。あるいはガネーシャの別名。→ガネーシャ

カーニヤクブジャ　Kānyakubja　インド、ウッタラプラデーシュ州ファルカーバード地方にある小都市カナウジの古代名。カーニヤクブジャは「せむしの娘」の意味で、『ラーマーヤナ』に記されているクシャナーバ王の一〇〇人の娘の伝説に由来する。

七世紀にこの地を訪れた中国僧・玄奘は曲女城（きょくにょじょう）と訳した。かつては、アヨーディヤーにつぐ大都市で、ギリシャ資料にもカノギュザという名で記録されている。七世紀にはハルシャ王の都となって北インドの政治・経済・文化の中心地となった。つづいて八世紀にはヤショーヴァルマン王の都として栄え、八三六年にはプラティハーラ朝ボージャ一世の都となり、一一世紀初めのころイスラム教を奉ずるガズニー朝マフムードに滅ぼされた。

カニヤークマーリー　Kanyākumārī　「処女」の意で、シヴァ神の妻ドゥルガーの別名。

カヌヴァ　Kaṇva　ヴェーダの聖仙。この聖仙の名は『リグ・ヴェーダ』中に約六〇回述べられており、ヌリシャドの子といわれ（一〇・三一・一一）、ナールシャド（一・一一七）とも呼ばれている。『リグ・ヴェーダ』の第一巻の

約五〇の讃歌、および第八巻の大部分はカヌヴァによって書かれたと伝えられる。彼にはメーダーティティという息子があり、第一巻のいくつかの讃歌の作者とされる。プラーナの伝説ではカヌヴァはシャクンタラーの育ての親で、マーリニー河の岸辺に多くの弟子たちと一緒に住んでいたといわれる。

ガネーシャ　Gaṇeśa　象頭をした智慧と好運の神。シヴァとその神妃パールヴァティーとのあいだに生れた子。ガネーシャはガナ（群衆）のイーシャ（主）という意味で、ガナパティとも呼ばれる。ガネーシャは人間の身体をもち、牙が一本だけの象の頭をもち、太った腹をつき出し、蛇の帯をしめた姿であらわされる。ガネーシャが象頭をしていることについてはさまざまな物語が語られている。『ブラフマヴァイヴァルタ・プラーナ』（ガナパティ章）によると次のようにいわれる。



智慧と好運の神・ガネーシャ

ガネーシャはあるとき母のパールヴァティーの水浴の番を命じられていたが、そこに入ろうとした父シヴァ神をもしりぞけた。激怒したシヴァはガネーシャの首を切り落とした。パールヴァティーが息子の死を嘆き悲しんだので、シヴァは妻を慰めるために息子を生き返らせることを約束し、最初にそこを通りかかった象の頭をつけてしまったという。

また、別の伝説によれば、シヴァの神妃パールヴァティーは夫とともに猿の姿となって森の中で睦み合っているうち身籠った。するとシヴァは妻の子宮の中から自分の精子を取り出して風神ヴァーユに与えた。ヴァーユはそれをアンジャナーの胎内に入れると、たちまち身籠ってハヌマーンが生れた。シヴァが象の姿となるとパールヴァティーも雌の象となって男の子を産み、ガナパティと名づけたという（『ウッタラ・ラーマヤナ』）。彼が一本の牙しか持っていないことについても、次のような物語が伝えられている（『パ

ドマ・プラーナ』)。
ある時、パラシュラーマがカイラーサ山にシヴァ神を訪ねたが、シヴァは眠っている最中だった。父であるシヴァ神を守っていたガネーシャは、パラシュラーマがそこに入るのを拒否した。たちまち二人の間に口論が始まり、闘いとなって、ガーネーシャは二本の牙でパラシュラーマをおさえつけて苦しめたが、立ち直ったパラシュラーマは斧を投げつけた。この斧は実は父のシヴァ神が与えた武器であり、これに気づいたガネーシャは投げつけられた斧を一本の牙でうやうやしく受けとめ、その牙は断ち切られたという。

現在のヒンドゥー教徒の信仰においては、ガネーシャはすべての富をもたらすものであり、智慧を授け、人間を互いに愛させる幸福の神である。現在でもインドにおいては、商売を始めるときには必ずガネーシャを祀って「シュリー・ガネーシャ」と唱え、教育上の習慣にもとづいて、書物の第一ページの最初に「ナモーガネーシャーヤ」（ガネーシャに敬礼する）という帰依文を置くのが普通である。

仏教に入ったガネーシャは大聖歓喜天（だいしょうかんぎてん）、聖天と訳され、九八〇〇の諸大鬼王を伴って三千世界を守護する守護神とされるようになり、密教においては金剛曼荼羅の外院に位置づけられている。一般には、二神が抱き合っている姿の双神像が財宝・和合の神として信仰されている。

カパーリン　Kapālin　「頭がい骨で飾っている者」の意で、シヴァ神の別名。同様な意味で、シヴァの神妃ドゥルガーはカパーリニーと呼ばれる。

カバンダ　Kabandha　㈠『アタルヴァ・ヴェーダ』の最古の聖者スマントゥの弟子。

㈡『ラーマーヤナ』（森林編）に現われるダンダカの森の怪物の一人、巨大な羅刹（ラークシャサ）。シュリー女神の子として生まれ、山のように巨大で、頭あるいは首がなく、腹の中央に無数の歯をつけた口があり、長い腕と胸のところに大きな眼を持つという異様な姿をしている。彼はもともと天上の精ガンダルヴァであったが、インドラ神と争ったために、インドラの電撃に打たれて頭が身体の中にめりこんでしまったともいわれる。また、ある聖仙の呪いのためにこのような姿となったともいわれる。ダンダカの森でアヨーディヤーの王子ラーマ、ラクシュマナ兄弟と戦い、瀕死の重傷を負ったとき、彼はラーマに自分の身体を火で焼いてくれるようにたのみ、この願いが実行されると彼は火の中から出て来てもとのガンダルヴァの姿にもどった。このようにして呪いを解いてもらった返礼として、彼はラーマに、ラーヴァナに奪い去られた妻シーターをとり返すためには猿王スグリーヴァと連合するようにと勧告した。

カピドヴァジャ　Kapidhvaja　「猿の旗印を持つ者」の意で、パーンドゥ王の五王子の中のアルジュナの別名。カピケータナ「猿の印を持つ者」ともいう。

カホーダ　Kahoda　カホーダカともいい、バラモンの聖仙。苦行者アシュターヴァクラの父。『マハーバーラタ』の伝説によれば、カホーダは師である哲人ウッダーラカの娘と結婚したが、修行に全力を打ち込んでいたために妻をかえりみる暇がなかったので子供が生まれそうもなかった。すると、この二人のあいだに生まれる因縁になっていて、まだ生まれて来ない息子は、父が妻を近づけないことを非難した。腹を立てたカホーダはこの子に呪いをかけたので、八つの（アシュタ）曲った肢体（ヴァクラ）を持った子、アシュターヴァクラが生まれた。ある時、ミティラー王ジャナカの面前での討論会で、カホーダはヴァーンディーナと論争して破れ、その罰として河の中に投げ入れられた。その子アシュターヴァクラはきびしい修行を行なって法力を身につけ、同じ聖者と論争して勝ち、父親カホーダを救い出したという。→アシュターヴァクラ

カーマ　Kāma　あるいはカーマデーヴァ。愛の神。カーマは「欲望・意欲」の意で、一般には「愛欲」を意味する。『リグ・ヴェーダ』（一〇・一二九）では、唯一者による宇宙の創造を説くうちで、「かの唯一者のうちに、最初にカーマ（意欲）が現われた」といい、また、幸福の追求、欲望の充足（九・一一三）の意味にも用いている。後世において神格化されて愛の神・エロスの神とされるようになり、さまざまな神話がつくられた。ブラーフマナ文献では、カーマはアートマ・ブー（自分自身で生れたもの）、アジャ（生れないもの）ともいわれ、また、ダルマを父とし、シュラッダーを母として生れたともいわれる。プラーナでは、彼の妻は愛情と性愛の歓びを表わすラティ、あるいはレーヴァーで、息子の名はアニルッダ、娘の名はトリシュナーであったとする。彼の従者はヴァサンタ（季節）で、愛のシーズンを表わしている。

ある時、シヴァ神が精神を集中し妻をかえりみることな



オウムに乗って愛の矢を放つ
カーマ神

く修行をしていると、愛の神カーマはシヴァ神の心をその妻パールヴァティーに向けさせようとして愛の矢を射かけたが、シヴァ神は第三の目から発する閃光によってカーマを灰にしてしまった。しかし、カーマの妻ラティの切なる願いにより、肉体をもたない真の愛情をあらわす存在としてのカーマを、彼女のもとに返してやったという。このことから、カーマはアナンガ（肢体のないもの）とも呼ばれる。彼は美しい青年の姿で表現され、さとうきびで作った弓に一列になった蜜蜂のつるを張り、先に花を飾った矢を持っている。彼に従う従者たちは天上の精女アプサラスであるといわれる。カーマはその出生・性格などから多くの別名を持っている。

（別名）アビルーパ（美しい姿をしたもの）、ダルパカ、ディーパカ（たきつけるもの、興奮させるもの）、ガダイトヌ、グリドゥ、グリッツァ（好色のもの、元気なもの）、カマナ、カル（欲望あるもの）、カンダルパ（ブラフマー神をたきつけるもの）、カラーケーリ（愉快なもの）、マーラ（殺りく者）、マドゥディーパ（蜜の灯）、ムヒラ（まどわすもの）、ルーパーストラ（美の武器を持つもの）、シャマーンタカ（平和をこわすもの）、サンサーラグル（輪廻の世界の師）、スマラ（記憶）、シュリンガーラヨーニ（愛の根源）、ティタ（火）、クスマーユダ（花で武装したもの）、プシュパダヌス（弓を花で飾っているもの）、プシュパシャラ（矢を花で飾っているもの）など。

カーミヤカ Kāmyaka パーンドゥ王の五王子が追放されたとき、しばらく滞在した森の名。サラスヴァティー河の岸辺にあるという。

カームピリヤ Kāmpilya パーンチャーラ国のドルパダ王の都の名。この都でドルパダの娘ドラウパディーの自選式（スヴァヤムヴァラ）が行なわれたという。現ドアーブのカームピラに比定されている。

カームボージャ Kāmboja アヨーディヤーのサガラ王の諸部族のうちの一つ。西北インドに住む部族とされる。

ガヤー Gayā ビハール州のラージギル（古代名ラージャグリハ）の南にあるヒンドゥー教の聖地。七大聖都の一つ。また、苦行者の集まるヴァーラーナシー、得度剃髪の中心地アラーハーバード、祖先祭の中心地ガヤーを三大聖都とする場合もある。この町の名はガヤという名のアスラ（ガヤースラ）の物語にもとづいている。

昔、ガヤースラはヴィシュヌ神を厚くうやまい、三〇〇〇年のあいだ苦行を行ない、強力な力を身につけ、神々をしのぐほどになった。神々はヴィシュヌ神に懇請してこのアスラの苦行を止めさせようとした。そこでヴィシュヌ神はガヤに苦行を止めるならば望むものは何でも与えようと

言うと、ガヤは自分の身体をかつてあったすべてのもの、これからあるであろうすべてのものよりも清浄なものにしてくれるなら苦行を止めようと答えた。ヴィシュヌ神はこの条件を認めざるを得なかった。アスラの身体が清浄になり、永遠の存在のようになると、人々がそれを見、それに触れてブラフマー天の不死の世界に入ろうとして群がって来た。神々への祭祀は忘れ去られ、ヤマの世界に入るものはなくなった。神々は再びガヤの身体を犠牲に捧げることをヴィシュヌに求めた。

ガヤはヴィシュヌの求めに従い、コーラハラ山に登ってその上に身を投げ出した。しかし、ガヤースラの身が動いているのを見てブラフマーはヤマに地獄のダルマシラー（正義の石）を持って来させて巨大なガヤの身体の頭の上に置き、ブラフマー神、神々はともに彼の身体の上に乗って重みを加えたが、彼の身体はまだ動きを止めなかった。ヴィシュヌ神が棍棒でその石をたたき割ると初めてその動きが止んだ。しかし、ガヤはまだ生きていて、この地を自分の名に因んだ名で呼ぶように願い、また、この地で祖先を供養するものは祖霊をブラフマーの不死の世界に昇らせ、その人自身も功徳を得るようにしてほしいと祈ったという（『ヴァーユ・プラーナ』ガヤー・マーハートミヤ）。

この神話にもとづいて、祖霊を供養しようとする信者が毎年二〇～三〇万人この地を訪れるといわれる。このガヤーの近くに、ブッダがさとりを開いた地ボードガヤー（ブッダガヤー）があり、仏教徒の聖地となっている。

ガーヤトリー Gāyatrī ヴェーダの韻律の一つで、八綴一行を三つ重ねた詩形をいう。ガーヤトリー調で書かれた太陽神サヴィトリに捧げられる讃歌が最も神聖なものとされ、天に昇ろうと欲するものは、この讃歌を一〇〇〇回唱えるべきであるといわれる。また、村の外でこのガーヤトリーを一日三〇〇〇回くり返し唱える再生族の者は、いかなる罪を犯そうとも一月でその罪から解き放たれるともいわれる。

ガーヤトリーは神格化されて、創造神ブラフマーの妻で四ヴェーダの母であるとされる。

カラ Khara ランカーの魔王ラーヴァナの弟。アヨーディヤーの王子ラーマが父の宮殿から追放されてダンダカの森に住んでいた時、ラーヴァナ、カラ兄弟の妹のシュールパナカーがラーマを恋して結婚を申し込んだが拒否され、更にはラーマの弟ラクシュマナにもしりぞけられた。腹を立てたシュールパナカーがラーマの妻シーターを飲み込もうとしたが、ラクシュマナによって耳と鼻を切り取られ、命からがら逃げ帰って兄のカラに訴えた。カラはまず一四人の羅刹、次いで一万四〇〇〇人の羅刹の軍勢をもってラ

ーマを攻めたが失敗した（『ラーマーヤナ』森林編）。↓シュールパナカー

カーラ　Kāla　「時間」の意で、死の神ヤマの別名。時間は古く『ヴェーダ』時代には万物の根源・支配者であるといわれたが、『ヴィシュヌ』『バーガヴァタ』『パドマ』などのプラーナでは、ブラフマー神が時間の形で存在していたと説き、第一原因としての時間を認めていない。↓ヤマ

カーラカー　Kālakā　聖仙カシュヤパの妻の一人。『ラーマーヤナ』と『マハーバーラタ』ではダクシャの娘とされるが、『ヴィシュヌ・プラーナ』ではダーナヴァ、ヴァイシュヴァーナラの娘といわれる。

カーラケーヤ　Kālakeya　あるいはカーラカンジャともいい、ブラフマーの孫に当る聖仙カシュヤパとその妻カーラカー（あるいはカーリカー）とのあいだに生れたアスラたちのこと。その数は六万ともいわれる。

カーラネーミ　Kālanemi　㈠『ラーマーヤナ』では、ランカーの羅刹王ラーヴァナの伯父。ラーヴァナは彼に、ラーマと同盟を結んでいる猿の王ハヌマーンを殺そうと約束した。そこで、カーラネーミは隠者の風をしてハヌマーンを食事に招いた。ハヌマーンはこれを辞退して沐浴のために河に行った。水の中に入るや否やワニに足をとらえられたが、彼はそれを殺した。すると、そのワニの体から美しいアプサラス（天界の水の精女）が現われた。彼女は、ハヌマーンによって救い出されるまでワニの姿でいるようダクシャに呪いをかけられていたのである。彼女は救出されたお礼に、ハヌマーンにカーラネーミが殺意をもっていることを伝えた。そこでハヌマーンは自分の小屋に帰ってカーラネーミをとらえ空中に放り投げると、ランカーのラーヴァナの前に落ちたという。

㈡プラーナ文献では、ヒラニヤカシプの孫にしてヴィローチャナの子である強大な力を持つアスラの名。彼はヴィシュヌによって殺されたが、マトゥラーの王カンサとして生れ変わり、クリシュナ（＝ヴィシュヌ）によって殺されたといわれる。

カーラヤヴァナ　Kālayavana　「黒いヤヴァナ」の意で、ヤヴァナ（パーリ語ではヨーナ）は一般にギリシャ人（イオニア Ionia に由来する言葉）を表わす。紀元前四世紀にマケドニアのアレキサンドロスが西アジアを統一してインド西北部に侵入して以来、さまざまなギリシャ・イラン系の諸王朝が成立した。ヤヴァナ・ローカ（ギリシャ人の世界）という時にはこれらのギリシャ・イラン系の諸国を指しているが、同時にヤヴァナは「見知らぬ人」「野蛮人」「敵」の意味にも用いられる。

『ヴィシュヌ・プラーナ』『ハリヴァンシャ』によれば、

カーラヤヴァナはガルガという名のバラモンの子として生れた強大な力を持つアスラの名である。ガルガはクリシュナの属するヤーダヴァ族に特に恨みを持っていたといわれ、このことからカーラヤヴァナがクリシュナのヤーダヴァ王国に敵対するものであることが知られる。

カラーリー　Karālī　「恐ろしい女」の意で、ヴェーダにおいては火神アグニの七つの舌（火炎）の一つ（他の六つの名はカーリー、マノージャヴァー、スローヒター、スドゥームラヴァルナ、スプリンギニー、ヴィシュヴァルーピー）をいい、後にはシヴァ神の妻の一人の名とされた。

カーリー　Kālī　シヴァの神妃（デーヴィー、シャクティ）。カーリーは「時間」と「黒色」の二つの意味をもつカーラ kāla の女性形で、「時の女神」とも、「黒色の女神」ともいわれる。カーリー女神はヴェーダ文献には姿をあらわさず、神話として語られるのは叙事詩やプラーナの時代になってからであり、とくに『デーヴィーマーハートミヤ（女神の偉大であること）』において、彼女の出生、出生にもとづく基本的な性格が明らかにされる（五—一三章）。

昔、魔神のシュムバとニシュムバ兄弟が力をもって神々の世界をも支配しようとしたことがあり、神々は大女神に助けを求めた。大女神はシヴァの神妃ドゥルガー（パールヴァティー）の姿をとって現われ、魔神の手下のチャンダとムンダと戦った。チャンダとムンダが近づいて来るのを見ると、女神は怒りの声をあげ、怒りのためにその顔はまっ黒になった。その時、ドゥルガーの顔から、同様に恐ろしい顔をしたカーリーが現われた。カーリーは剣と縄を武器とし、頭蓋骨を先につけた棒を持ち、肩には頭蓋骨の環をかけ、虎の皮を身につけ、口を大きく開き、目を血ばしらせて魔神たちに攻めかかり、チャンダとムンダの首を切り取ってドゥルガーに差し出した。次に女神と戦ったのは魔神ラクタビージャで、この魔神が女神に傷つけられて血



怒りの形相をしたカーリー女神

を流すと、その血から次々に魔神が現われた。その時、カーリーは血から生れた魔神たちを大きな口で飲み込み、ラクタビージャの傷口からその血を飲みつくし、ついに魔神を殺した。このように、カーリーは大女神の怒りから生れたものであり、好戦的で、血を最も好み、破壊や殺戮を喜ぶ女神である。

今日では、カーリー女神はドゥルガーに仕える存在ではなく、ドゥルガー以上の力をもった女神として崇拝され、とくに、ベンガル地方ではヒンドゥー教の諸神のうちで最も力のある神となっている。一般に、カーリー女神は右手に血のついた剣を、第二の右手には三叉戟を持ち、第一の左手は切り取った生首を、第二の左手で生首から流れ落ちる血を受ける頭蓋骨を持ち、首には人頭をつないだ環がかけられている姿で表現される。このような姿で表現される女神の性格も『デーヴィーマーハートミヤ』に説かれるものが現在もそのままに伝えられているといわれる。カルカッタの南にあるカーリーガートは四臂をもつ上半身だけの異様な姿のカーリー女神を祀り、かつてはドゥルガープージャーの三日間に七、八〇〇頭の山羊が首をはねられ、血の犠牲にささげられたといわれる。

カーリヤ　Kāliya　ヤムナー河に住むナーガ（蛇）族の王。『マハーバーラタ』の伝説によれば、カシュヤパとその妻カドルーとのあいだに、シェーシャ、アイラーヴァタ、タクシャカ、カールコータカ、カーリヤ、マニナーガ、プラナーガなどのナーガ（蛇）が生れ、彼らより地上のさまざまなナーガが生れたという（初編）。

カシュヤパ仙の多くの妻のうち、ヴィナターからはガルダ鳥が、カドルーからはナーガが生れた。ある時、ヴィナターとカドルーは賭博を行ない、ヴィナターが敗れて、カドルーの奴隷となった。そこでガルダは天界から不死の霊水アムリタを持って来て、それによって母ヴィナターを買



水中に棲む蛇カーリヤを殺そうとするクリシュナ

いもどした。これ以来、ガルダとナーガは敵対関係となり、ガルダはナーガ（蛇）を見つける度ごとに殺して食った。弱り果てたナーガは、ガルダに捧げ物をし、そのかわりにガルダはナーガに害を与えないということで、一応の合意に達したのであるが、両者の対立は長く続いた。

千の頭を持つといわれる蛇王カーリヤは岸辺の木や草が枯れるほどの強力な毒を水中に流した。ある時、牧人ナンダのもとで養育されていたクリシュナが牧童たちとともにこのカーリヤの棲む河に来ると、牧童たちがこの河の水を飲み、ナーガ（蛇）の毒に当って倒れた。怒ったクリシュナはすぐに水の中に飛び込み、彼に嚙みつこうとして突進して来たカーリヤを踏みつけた。カーリヤはすぐにそれがクリシュナであると気づき、一族のものと一緒に彼に帰順した。そこでクリシュナは、カーリヤをラマナカの島へ行かせてそこに棲まわせ、カーリヤの上につけられたクリシュナの足跡を見せればガルダが害を与えないように保証してやったという（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇）。↓クリシュナ、ガルダ

カリ・ユガ　Kali-yuga　↓ユガ

ガルガ　Garga　最古の天文学書の著者とされる聖仙。『ヴィシュヌ・プラーナ』では、ガルガよりシナ（あるいはシニ）が生れ、彼よりガールギヤとシャイナが生れたという。『バーガヴァタ・プラーナ』によれば、ガルガよりシナが生れ、彼よりガールギヤが生れてクシャトリヤからバラモンになったという。ガルガはクリシュナとヤーダヴァ族の師と説かれることもある。

カルキ　Kalki　ヴィシュヌ神の第一〇番目の化身。↓ヴィシュヌ

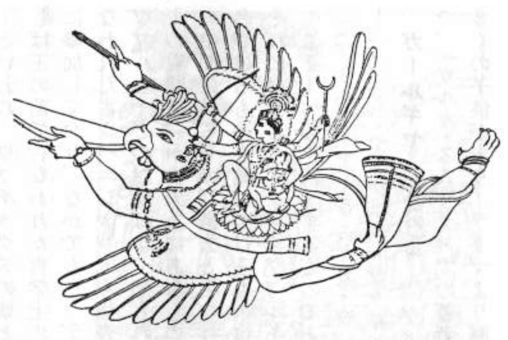
ガールギー　Gārgī　ガールギー・ヴァーチャクナヴィーといわれ、ヴァチャクヌの娘とされる女性哲学者。しばしば王の前で行なわれた哲学上の、あるいは文学上の論争に参加しており、なかでもヴィデーハ王ジャナカの前で行なわれた古ウパニシャッドの代表的な哲学者ヤージュニャヴァルキヤとの対論はよく知られている。この時のガールギーの質問は「かの天上にあるもの、地下にあるもの、天地の中間にあるもの、過去と名づけ、現在と名づけ、未来と名づけるものを結びつけるものは何か」ということであり、それに対するヤージュニャヴァルキヤの答えは「不滅なるものこそすべてを統一するものである」ということであった（『ブリハド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』三・八・一―一二）。↓ヤージュニャヴァルキヤ

ガールギヤ　Gārgya　(一)ヴィシュヴァーミトラの息子で、『ガルガ・スムリティ』の著者といわれる祭官。彼には多くの子供があり、ラーマより厖大な牛の群を与えられて

豊かになった（『ラーマーヤナ』アヨーディヤー編）。ヴェーダの伝説によれば、まずヴィヤーサがヴェーダ聖典をヴェーダミトラ、サウラビ、シャーカルヤに伝え、シャーカルヤがヴァーツヤーヤナ、マウドガリヤ、シャーリ、アーディシシラ、ゴーカリ、ヤートゥカルナに教え、ヤートゥカルナが語源解釈学（ニルクタ）をバーシュカラ、クラウンチャ、ヴァイターラ、ヴィーラジャに教え、バーシュカラが他のヴェーダの補助学（ヴェーダーンガ）を一つにまとめて『バーラキリヤシャーカー』を作り、これをバーラーイニ、ガールギヤ、サンサーラに伝えたという（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇）。『マハーバーラタ』にはガールギヤの教えといわれるものがあり、それは、(1)客人をもてなすべきこと、(2)肉を食べてはならないこと、(3)牛とバラモンを傷つけてはならないこと、(4)身心を清浄にして祭祀を行なうべきこと、である（教訓編・一二七）。

㈡ガールギヤ・バーラーキともいわれ、ヴェーダに通じ、その語源学を扱った文法家・哲学者のバラモンであるが、クシャトリヤの王から教えをうけたと伝えられる。

ガルダ　Garuḍa　ヴィシュヌ神の乗り物の聖鳥。身体は人間の姿で、頭とくちばし、翼と爪だけは鷲の形、顔は白色、翼は赤色、身体は黄金に輝いている。ブラフマー神の子、あるいは孫カシュヤパ仙の妻の一人ヴィナターから生れた。ガルダがヴィシュヌ神の乗り物になった由来は次のようである。ガルダが生れたとき、彼の母はナーガ（蛇）族に支配されていた。その理由を母にたずねると、かつて蛇族と賭をして負けたためにこのような境遇に落ちたとのこと。ガルダは自分たち母子を自由にしてくれるよう蛇たちに求めると、天界にある不死の霊水アムリタを持って来れば自由の身にしてやると彼らは答えた。そこでガルダは天界へ昇り、神々や蛇たちを打ち負かしてアムリタを手に入れた。帰ろうとするガルダの前にヴィシュヌ神が現われ、激しい戦いが行なわれたが勝負はつかず、ヴィシュヌ神は「アムリタを与え、高い座につかせる代わりに、私を運ぶ乗り物となれ」という条件を出し、ガルダはこれを受けてヴィシュヌの乗り物になったという（『マハーバーラタ』初編）。



ヴィシュヌとラクシュミーを背にする聖鳥ガルダ

〔別名〕ヴァイナテーヤ（ヴィナターの子）、スパルナ、ガルトマーン（鳥の王）、ダクシャーヤ、シャールマリン、タールクシュヤ、ヴィナーヤカ、シターナナ（白い顔をしたもの）、ラクタパクシャ（赤い翼をもつもの）、シュヴェータローヒタ（白色と赤色のもの）、スヴァルナカーヤ（黄金色の身体をしたもの）、ガガネーシュヴァラ（空の王）、カゲーシュヴァラ（鳥の王）、ナーガーンタカ、パンナガーシャナ（ナーガを殺すもの）、サルパーラーティ（蛇の敵）、タラシュヴィン（速いもの）、ラサーヤナ（水銀のように動くもの）、カーマチャーリン（のぞみ通りに動くもの）、カーマーユス（欲するままに生きるもの）、ヴィシュヌラタ（ヴィシュヌ神の車）、アムリターハラナ、スダーハラ（アムリタを盗むもの）、スレーンドラジット（インドラを滅ぼすもの）など。→アルナ、ヴィナター

カールタヴィーリヤ　Kārtavīrya　ハイハヤの王クリタヴィーリヤの子という意味で、パーンダヴァの英雄アルジュナのこと。

カルダマ　Kardama　ブラフマー神の子のプラジャーパティ（造物主）の一人。彼がサラスヴァティー河の岸できびしい苦行を一万年のあいだ続けると、ついにヴィシュヌ神が彼の前に現われて祝福を与えたという。カルダマは、また、ブラフマーの子のプラハの三人の息子のうちの一人といわれ、マヌの娘デーヴァフーティと結婚したともいわれる。

カールッティケーヤ　Kārttikeya　「クリッティカー（すばる、プレアデス星団）と結びついているもの」の意で、軍神スカンダのこと。クマーラ、スブラフマニヤと同じ。カールッティケーヤは、戦争に最も適するカールッティカ月（一〇〜一一月）と関係しており、軍神として古くから信奉され、クシャーナ王朝のフヴィシュカ王の貨幣に



孔雀に乗る軍神カールッティケーヤ

も彫られている。叙事詩の伝説においては、彼はシヴァ神、あるいはルドラの子であるとされる。シヴァ神が精液を火（アグニ）に注ぎ、それがガンガー女神に受け入れられ、その結果としてカールッティケーヤが生れた。そこで彼はアグニブー（アグニより生れたもの）、ガンガージャ（ガンガー女神より生れたもの）ともいわれる。彼はクリッティカー（すばる星団）によって育てられたので六つの頭を持ち（すばる座は六星。ギリシャ神話ではアトラスの七人の娘がオリオンに追われて星になったが、その中の一人は恥じて姿を現わさないので六星であるという）、カールッティケーヤと呼ばれる。彼の父はアグニといわれることもあり、母はガンガー女神ともパールヴァティーともいわれる。彼は片手に弓を持ち、他方の手に矢を持ち、パラヴァーニという孔雀に乗った姿で表わされる。その妻の名をクマーリー、あるいはセーナー（「軍隊」の意）という。

〔別名〕マハーセーナ（偉大な戦士）、セーナーパティ（軍勢の指導者）、グハ（神秘的な者）、シャクティダラ（槍を持つ者）、ガンガープトラ（ガンガー女神の息子）、ターラカジット（ターラカの征服者）、ドヴァーダシャカラ（一二の手を持つ者）、ドヴァーダシャークシャ（一二の眼を持つ者）など。→ガンガー

カルナ　Karṇa　パーンドゥの五王子を産んだクンティー（プリター）の最初の子供。バーラタの大戦争では兄弟の側につかずカウラヴァ側に味方し、アンガ国の王となった。彼は絶対に傷つけられない生れながら身につけた甲冑と耳環とを持っていたという。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、クル族の王パーンドゥの妻となったクンティーは、クンティボージャの宮殿で育てられた。その宮殿にドゥルヴァーサスという聖者が訪れたことがあり、信心深いクンティーはこの聖者によく仕えたので、満足した聖者は彼女に子供を授かりたいと思った時に唱えれば必ず望みがかなえられるマントラ（呪文、秘密の言葉）を生涯のあいだ五回まで使ってもよいとの条件つきで与えた。若くて好奇心に満ちていた彼女はさっそく試してみたくなり、太陽を心に念じながらこのマントラを唱えた。するとすぐに太陽の中から光り輝くスーリヤ神が青年の姿をして現われた。未婚の彼女は驚き狼狽した。スーリヤ神は彼女を抱きしめ、子供が生れても彼女の処女性は失われることはないだろうと言って姿を消した。間もなく男の子が生れたが、クンティーはこの子を箱に入れてアシュヴァー河に流した。この箱は水に流されてヤムナー河に入り、ついにガンジス河に入って、スータ国のチャンパープリーに着いた。カウラヴァと同盟しているスータ族のアディラタが河に水浴に行ってこの箱を見つけ、その中

にいた男の子を家に連れて帰った。子供のなかったアディラタの妻ラーダーはヴァスシェーナと名づけ自分の子として育てた。この子が後にカルナとして知られるようになるのである（森林編）。

このようにして、カルナはアンガ国で育てられた。やがてアディラタは彼をハスティナープラに遊学させてドローナに就いて弓術を習わせ、クリパとパラシュラーマからも武術、学芸を学ばせた（森林編）。ドローナのもとでの武術の学習が終った時、弟子たちの学習の結果を発表する日が定められた。すべての弟子たちが最高の弓術を見せようとした中で、アルジュナが超人的な技を示して居合わせた人々をどよめかせた。しかし、それ以上にカルナの技は見事であった。これを見たアルジュナは青ざめた。その時、彼らの師のクリパが立ち上って、「カルナに王族の血を引くものと技を競う権利があるのだろうか」と異議を申し立てた。すると、ドリタラーシュトラ王の長子ドゥリヨーダナが立ち上って、「カルナが王子でないというだけで競走ができないのなら、解決の方法は簡単だ。私はカルナをアンガ国の王位につけよう。」と言った。このようにしてカルナはドゥリヨーダナをはじめとするカウラヴァの人々の支持によってアンガ王となった（初編）。

クルクシェートラにおいてクル族を二分する戦争が始められる直前、ユディシュティラ、アルジュナ、ビーマの母であるクンティーはガンジス河の岸辺に行き、カルナと会った。彼女はカルナに、本当は彼が彼女の最初の子供であること、ユディシュティラ、アルジュナ、ビーマは兄弟であることを告白し、太陽神スーリヤもそこに現われてそのことを証明した。彼女は、兄弟であるパーンダヴァの側に立つよう説得したが、彼は自分を子供の頃から育ててくれたドゥリヨーダナを裏切ることは決して出来ないとクンティーの申し出をきっぱりとことわった。しかし、戦場においては、アルジュナ以外のパーンドゥの四王子を傷つけ倒すことはしないと約束した（戦争準備編）。

クル族の大戦争が起こると、カウラヴァ側に立ったカルナは、ケーカヤ、アルジュナ、ビーマ、ドリシュタディユムナなどと戦い、インドラ神から与えられた武器シャクティでガトートカチャなどのパーンダヴァの勇士たちを倒した（ドローナ編）。師のドローナが戦死した時には悲しみのあまり戦場を離れたが、師のあとを継いでカウラヴァ軍の総司令官となった。青年時代からのライヴァルであるアルジュナと激しく闘い、カルナの蛇の形をした矢によってアルジュナの美しい帽子が地上に落ちたことがあったが、彼がアルジュナと闘っている最中、彼の戦車の輪が土中に沈みこみ、ついにアルジュナの手にかかって戦死した（カル

ナ編)。これは、カルナがドローナのもとで弓術の修行をしていたころ、一人のバラモンの牛をそれと知らずに射て、殺してしまったことがあり、その時にそのバラモンから「汝は敵と対峙するとき、汝の戦車の輪は土中に沈みこみ、汝は敵に首を切られるであろう」という呪いをうけていたからである(静寂編)。

カルナにはチトラセーナ、サティヤセーナ、スシェーナという三人の息子があり、三人ともバーラタの大戦で戦死した(シャリヤ編・一〇)。死後、カルナは天に昇り、父スーリヤと一体となったという(昇天編)。

〔別名〕アーディラティ(アディラタの子)、アーディティヤタナヤ(太陽の子)、アーディティヤナンダナ(同)、アンガラージャ(アンガ王)、アンゲーシュヴァラ(同)、アルカプトラ(太陽の子)、クンティースタ(クンティーの子)、クルードヴァハ(クル族の子孫)、クルプリタナーパティ(クル族の総司令官)、クルヨーダ(クル族の戦士)、ラーダースタ(ラーダーの子)、ラーデーヤ(同)、スーリヤジャ(太陽の子)、スータスタ(御者アディラタの子)など。→クンティー

カルパタル　Kalpataru　カルパドルマ、カルパヴリクシャ(カルパの木)ともいい、インドラ天の庭ナンダナヴァナにある樹といわれる。漢訳仏典では劫波樹という。この樹はマニ宝のように、人間の望みを充たすものといわれ、財産や繁栄、好運のシンボルとされる。

カルマーシャパーダ　Kalmāṣapāda　日種族(スーリヤヴァンシャ)であるイクシュヴァークの子孫スダーサの子。『マハーバーラタ』の伝説によれば、森の中で狩をしている時シャクトリ仙と出会ったが、彼が道を譲らなかったのでムチで打ちすえた。シャクトリ仙は怒ってカルマーシャパーダに、食人鬼となるよう呪いをかけた。これを聞いたのがヴァシシュタ仙のライヴァルのヴィシュヴァーミトラで、カルマーシャパーダ王が人肉を食う羅刹(ラークシャサ)にとりつかれるようにもくろんだ。しかし、食人鬼となったカルマーシャパーダの最初の犠牲者となったのはシャクトリ自身であり、ヴァシシュタ仙の一〇〇人の息子もすべて彼のえじきとなった。こうしてカルマーシャパーダは食人鬼として一二年間をすごし、ヴァシシュタ仙の恩恵によって元の姿にもどることができたという。

ガンガー　Gaṅgā　聖なる河ガンジス河を神格化した女神。インドにおいては古くから、サラスヴァティー河、ガンガーとその支流のヤムナー河が、あらゆる河川の中で最も神聖な三大聖河として崇拝されている。『リグ・ヴェーダ』のなかで最も多くの讃歌を捧げられているのはサラスヴァティー河で、ガンジス河は二つの詩節にその名を記されて



ガンガー女神

いるだけであり、インド・アーリヤ族がガンジス河中流域に進出するにつれて、ガンガーは神聖な河とされ、有力な女神として神格化されるようになった。叙事詩やプラーナ文献によれば、ガンガーはヴィシュヌ神の足の指先から流れ出て天界の諸国を流れる河であったが、聖なる王バギーラタによって地上を流れるようになったという。

昔、アヨーディヤーにサガラという王があり、馬祀祭(アシュヴァメーダ)を行なおうとして犠牲の馬を妻スマティとのあいだに生れた六万人の子供たちに守らせていたが、彼らが油断している隙にその馬は下界に連れ去られてしまった。ただちに連れ去られた馬を探し出すように父親に命じられた子供たちが深い穴を掘って下界をのぞいたところ、そこで草を食べている馬とその傍で修行しているカピラ仙の姿が見えた。カピラ仙を馬盗人と思った彼らは、武器をとってカピラ仙に打ちかかった。修行を妨げられたカピラ仙は大いに腹を立て、身から火を発して六万人の子供たちをすべて焼き殺してしまった。

彼らの遺灰は地中深く埋もれたままだったので、彼らの霊も地下にとじこめられて浮かばれずにいた。この遺灰を見つけたのはアンシュマットで、彼はサガラの六万人の子供たちが天界に生れ変われるようカピラ仙に祈った。するとカピラ仙はアンシュマットの子孫によって天の河を地上に導き、その水によって遺灰を清めれば彼らの霊が浮かばれるであろうと語った。

アンシュマットは馬祀祭をすませたサガラのところに行き、彼の息子たちが掘った深く大きい割れ目にサーガラ(「海」の意)という名をつけた。このサガラ王の子孫に当るのがバギーラタ王で、先祖の霊を天界に導くために厳しい苦行に励んだ結果、ついにブラフマー神からガンガーを地上に降下させてよいという許可を得た。しかし、ガンガーが地上に降下する時の衝撃が余りに激しく、地上が混乱する恐れがあるので、その流れを受けとめる者が必要であった。その役目を果たすものはシヴァ神しかいないため、バギー

ラタは苦行を行ないながらシヴァ神に祈った。シヴァ神はこの願いを聞きとどけ、天界から流れ落ちて来るガンガーをその頭髪で受けとめた。シヴァ神はこのため、ガンガーダラ（ガンガーを支えるもの）とも呼ばれる。シヴァ神が受けとめたガンガーの流れは七つの河（サプタ・シンダヴァ）となって流れた。犠牲を行なっているジャフヌ仙の土地を水びたしにし、怒った同仙がこの水を飲み尽してしまったために中断されたことがあったが、再び同仙の耳から水が流れ出したともいわれる。

ニューデリーの北方約二五〇キロ、ガンガーの岸辺にある聖地ハルドワール（「ヴィシュヌ神への門・入口」の意。ここはまたガンガードワール、すなわち「ガンガーの門」ともいわれる）では、ヴァイシャーカー月（四～五月）のガンガーが最初に地上に降下したとされる日に、これを祝う多くの巡礼者が集まる（現在、ハルドワールの沐浴場には、天から流れ落ちるガンガーを頭髪で受けとめたシヴァ神の図が描かれている）。

このようにして古くからガンガーの水は神聖で、あらゆる罪を清めるものと信じられ、ヒンドゥー教徒にとって、この河の水で身を清めることはあらゆる宗教的儀式のなかでもっとも神聖なものとなっている。

ガンガーにはグーマティー川（Gūmatī古代名 Gomatī）、ゴーグラ川、ガンダキー川、ソン川、コシ川などの支流があり、それぞれの支流に沿って聖地がある。ヒマラヤ山中のガンガーの水源の近くには、ガンゴートリー、バドリーナート（シャンカラの道場があったといわれる）があり、それより南下してガンガーが最初にインド平原に出るところにリシケーシュ、ハルドワール、ガンガーとヤムナー河の合流点にアラーハーバード、さらに下ってヴァーラーナシー、パトナなどの聖都があり、それぞれにガートと呼ばれる沐浴場があって多くの巡礼者を集めている。また、ガンガーは河口近くのサーガル島のところで下界に流れ込むと信じられており、この島も巡礼地となっている。

女神としてのガンガーはヒマヴァット（ヒマーラヤ山）の娘、シヴァ神の妻パールヴァティーの妹といわれる。ある時、ヴァスと呼ばれる八人の悪鬼たちが、修行しているヴァシシュタ仙の頭の上を飛ぶという非礼を犯したため、人間として生れなければならない運命と定められた。そこで、彼らはガンガー女神のもとに行き、彼らが地上で人間として生れるための母となってくれるように頼んだ。女神は、それに対して、自分の本当の子供が生れた時、八人が一つずつ合計八つの力を彼女の子に与えるという条件で、彼らの申し出を承知した。その約束を果たすために、ガンガー女神は地上で自分の伴侶となるにふさわしい男性を探さ

なければならなかった。彼女が最初に出会った男性はバラタの子孫のプラティーパ王であった。女神はプラティーパ王の右のももの上に坐って彼女の夫となってくれるように頼んだ。それに対して、プラティーパ王は右のももは自分の娘か息子の嫁の坐る場所であり、妻となるものは左のももの上に坐るものだと教えた。そこで、女神は現在のガルムクテーシュヴラ近くのガンガーの土手の上を歩いていたプラティーパの息子シャーンタヌの前に姿を現わした。シャーンタヌはガンガー女神の美しい姿を見てたちまち彼女を恋するようになり、結婚を申し入れた。彼女は自分がすることは何であっても決して咎めないということを条件にしてシャーンタヌの申し出を受け入れた。やがて二人の間に七人の子供が生れたが、彼女は生れた子供を次々にガンガーの流れの中に投げ込み、天国へ送ってしまった。シャーンタヌ王はそれを知ってもじっと我慢をしていたが、八番目の子供が投げ込まれようとした時、たまりかねて彼女をなじった。彼女は夫が約束を破ったことを理由に八番目の子供を連れてシャーンタヌ王の宮殿から身を隠した。この子はのちにビーシュマという名で知られるようになり、『マハーバーラタ』の中で展開されるクル族の大戦争において一族の長老として重要な働きをすることになるのである。

〔別名〕バドラソーマ（神聖な飲みもの）、バーギーラティー（バギーラタ王が地上にもたらしたもの）、デーヴァブーティ（天に生れたもの）、ハラシェーカラー（シヴァ神の頭髪）、カーパガー（天より流れ来たもの）、マンダーキニー（静かに流れるもの）、ガーンディニー（つねに歌っているもの）など。→サガラ、シヴァ、バギーラタ、ビーシュマ

ガンガーダラ　Gaṅgādhara　「ガンジス河を支える者」の意で、シヴァ神の別名。もと天上を流れる河であったガンジス河がバギーラタ王によってこの地上に降下した時、シヴァ神がその激しい流れを受けとめたという伝説にもとづく。→ガンガー

ガンガードヴァーラ　Gaṅgādvāra　「ガンジス河の門」の意で、ヒマーラヤ山中より流れ出たガンガー（ガンジス河）が初めてインド平原に出る所を指し、現在のウッタラプラデーシュ州のハルドワールをいう。→ハルドワール

ガンゴートリー　Gaṅgotrī　正確なサンスクリットではガンゴーットリーといい、「ガンジス河が流れ出るところ」「ガンジス河が地上に現われるところ」の意味で、ガンジス河の源流バギーラティー川の水源ゴームカ（「牛の口」の意）から二〇キロ下流にある聖地。かつては上流のガンゴートリー氷河がここまでのびていて、この地点から川が始まったことによって、このように名づけられたといわれる。天上を流れる河であったガンジス河を地上へ流れ下らせる

ために、数千年にわたってバギーラタが苦行を行なったという伝説にもとづいて、現在でも多くの修行者が集まる聖地となっている。

カンサ Kaṃsa マトゥラーを治めていた悪王。ウグラセーナの息子で、マガダ王ジャラーサンダの二人の娘と結婚。カンサは聖仙ナーラダから、ヴァスデーヴァの夫人であるデーヴァキーの第八子によって殺されるであろうと予言されていたので、デーヴァキーに子供が生れるとただちに殺させた。第六番目の子供までは次々に殺させたが、第七番目の子バララーマは睡眠の女神ニドラーによって生れる前にデーヴァキーの胎内からヴァスデーヴァのもう一人の夫人ローヒニーの胎内に移しかえられて助かった。第八番目に生れたクリシュナも生れるとすぐに父によって牧人ナンダとその妻ヤショーダーとのあいだに生れた女児とすりかえられて助かった。成長したクリシュナは数々の英雄的行為を行ない、評判となったので、カンサ王はバララーマとクリシュナをマトゥラーに呼び寄せ、二人を最強の力士と戦わせて殺してしまおうとした。ところがクリシュナは、カンサ王が放った象の牙をもぎとってそれで象を打ち殺し、また、王が差し向けた力士をも投げ殺した。カンサ王はこの二人とすべての牧人を国外に追放しようとしたが、かえってクリシュナによって殺された（『ハリヴァンシャ』ヴィシュヌ編）。→クリシュナ

カーンダヴァ Khāṇḍava クル族の国クルクシェートラにある森の名で、パーンダヴァの英雄クリシュナとアルジュナの協力によって火の神アグニが焼き払った。

昔、シュヴェータキンという王があり、一〇〇年のあいだ神々に犠牲を捧げることを誓い、カーンダヴァの森の中で供犠祭を始めた。この祭祀を行なうバラモン僧たちは祭火の煙によって目が見えなくなり、一時中断されたりはしたが、聖者ドゥルヴァーサスの指導のもとに祭祀は続けられた。その結果、長いあいだ祭祀の供物を食べ続けなければならなかった火神アグニは腹をこわして顔色は青白くなり、身体はやせ細ってしまい、ついに耐えられなくなってブラフマー神に救けを求めた。ブラフマー神は、カーンダヴァの森には神々に敵対するものが棲んでおり、彼らの肉を食うことによってアグニの病気が治ることを明らかにした。そこで、彼はカーンダヴァの森を焼き、食べ尽そうとして森に近づいた。ところで、このカーンダヴァの森には、インドラ神の友人である蛇のタクシャカが家族のものとともに棲んでいた。インドラは何としてでもこの友人を救おうとして、アグニが森に火をつけようとするたびに大雨を降らせた。アグニは七度、火をつけようとしたが無駄であった。アグニは再びブラフマー神に救けを求めると、天上

のナラ・ナーラーヤナが地上に生れ変わってクリシュナとアルジュナになっており、目的を達するためには彼らの助力を得るようにと教えられた。そこでアグニはバラモンの姿となり、ヤムナー河で沐浴をしていたクリシュナとアルジュナに近づき、一部始終を語り、二人にカーンダヴァの森を焼く協力を依頼した。二人はアグニと協力してカーンダヴァの森を焼くことを約束したが、森の住人たちと戦うための武器を持っていなかった。そこで、アグニが水の神ヴァルナに祈ると、ヴァルナはただちに彼の願いを聞き入れ、アルジュナにはチャンドラダヌス（あるいはガーンディーヴァ）という名弓と、決して矢が尽きることのない矢筒、および猿の旗印をつけた戦車を与えた。同様にクリシュナには円盤の武器を与え、さらにアルジュナには戦車を引くために首の周りに金の鎖を巻いた四頭の白馬を与えた。こうして、クリシュナはアルジュナの戦車の御者となり、カーンダヴァの森に攻め入った。インドラ神は友人たちを救けようとして厚い雲を森の上に拡げ、雨を降らせた。アルジュナはこれに対してガーンディーヴァから矢を続けざまに射ち、傘のように森をおおってアグニを助けた。両者のあいだに激しい戦いが行なわれ、インドラ自身も愛象アイラーヴァタに乗って戦場に現われ、カーラ、クヴェーラ、スカンダなどの神々、アスラなどの悪魔たちもこれを助けたが、ついにクリシュナとアルジュナの協力を得たアグニ神が勝利し、ここにカーンダヴァの森は焼き払われることになるのである。

このカーンダヴァの森が焼かれたことに関して多くの物語が伝えられているが、その中の一つに次のような話がある。この森の中に、マンダパーラという名の隠者が小屋を建て苦行をしていた。長い間修行したのちに世を去って祖霊の世界に行ったが、積んだ苦行に相応する高い位には達することができなかった。神々にその理由を尋ねると、彼が子供をもうけなかったためであるというので、彼は再び地上に戻った。そして、カーンダヴァの森でジャリターという一羽の鳥と巡り会い、結婚してジャリターリ、サーリスリッカ、スタムバミトラ、ドローナという四人の息子をもうけた。こののち、彼はジャリターと四人の子供（四羽の小鳥）のもとを離れ、他の女性ラピターの後を追った。四羽の小鳥は羽も生えそろっていないのにアグニによる森の焼き打ちに合わなければならなかった。母鳥は四羽の小鳥を翼の下にかかえて火に焼かれる決心をするが、小鳥たちに説得されてついに自分だけ森を飛び去った。残された子供たちのことを知ったマンダパーラはアグニに彼らを救うよう頼み込み、彼らの生命は救われたという（『マハーバーラタ』初編）。→アグニ、アルジュナ、クリシュナ

ガンダマーダナ　Gandhamādana　㈠「芳香によって酔わせるもの」の意で、世界の中心にあるスメール山を含むイラーヴリタの山と森の名。

㈡『ラーマーヤナ』において、ラーマと同盟した猿軍の将軍の名。彼はラーヴァナの子インドラジットによって殺されたが、猿の勇士ハヌマーンがカイラーサ山からもって来た妙薬によってよみがえった。

ガンダーラ　Gandhāra　インド西北辺境地方の古い地名。現在のパキスタン北部のペシャワール県にほぼ相当する。古代の都市プシュカラーヴァティー(現チャールサッダ)、プルシャプラ(クシャーナ王朝の都市、現ペシャワール)を中心とする地域で、叙事詩においてはバーラタ族の勢力の及ぶところとされ、強大な支配力をもつ王スバラが治めていたと記されている。同王の娘ガーンダーリーは、盲目の王ドリタラーシュトラの妃となり、ドゥリヨーダナ以下の百王子を産んだ(『マハーバーラタ』初編)。

ガーンダーリー　Gāndhārī　ガンダーラ王スバラの娘で、クル族の盲目の王ドリタラーシュトラの妻。ドゥリヨーダナをはじめとする百王子の母。『マハーバーラタ』の伝説によれば、ガーンダーリーは子供の時からシヴァ神の熱烈な信者であった。彼女の信心に満足したシヴァ神は彼女に一〇〇人の王子が生れることを約束した。これを知ったクル族の古老ビーシュマは彼女をクル族の王ドリタラーシュトラの妻に迎えたいと思い、ガンダーラ王スバラのもとに使者を送ってこのことを申し入れた。スバラ王はドリタラーシュトラが生れながらの盲目であることを知っていたが、ビーシュマの申し出を承認した。そこで、ガーンダーリーの弟シャクニは彼女を連れてクル族の都ハスティナープラに行き、ドリタラーシュトラとガーンダーリーの婚儀は整った。ガーンダーリーは父王の命にためらうことなく従い、盲目の夫と心を一つにするために自分の目をショールでかたく縛り、夫に仕えた(『マハーバーラタ』初編)。

ある時、ドリタラーシュトラの父である聖仙ヴィヤーサが、飢えと渇きに疲れきって動けなくなってしまったことがあった。すると、そこにガンダーリーが現われ、食物と水を捧げて厚くもてなした。喜んだヴィヤーサは彼女に祝福を与え、一〇〇人の子供が生れるようにと言うと、彼女はすぐに妊娠した。しかし、夫ドリタラーシュトラの弟であるパーンドゥの妻クンティーには男子が生れたのに対し、二年経っても胎内の子は出て来ようとしなかった。悲嘆にくれたガーンダーリーが秘かに腹を強く打つと、大きな肉塊が出て来た。そこにヴィヤーサ仙が現われ、その塊りを一〇〇個に切り、それぞれをバター油(グリタ)のつぼに入れるよう勧めた。彼女がためらっていると、ヴィヤーサ

自身が肉塊を切り始めた。彼女が女の子も一人欲しいと言うと、ヴィヤーサは肉塊を一〇一個に切り、一〇一個のつぼに入れた。しばらくすると、一〇一個のつぼがひとりでに割れ、一〇〇人の男の子と一人の女の子が生れ出た(同、初編)。

やがて、ガーンダーリーの産んだ一〇〇人の王子と、パーンドゥ王のユディシュティラをはじめとする五王子たちのあいだにクル族を二分する大戦争が起こり、クル族は大きな打撃を受けることになった。クルクシェートラで行なわれたこの大惨劇ののち、うちひしがれたドリタラーシュトラとガーンダーリーはパーンドゥ王の夫人クンティーとともに、余生を過すために森の中に入った。パーンドゥにしたがった人々もともにガンジス河近くの隠棲所に集まって来た。ドリタラーシュトラはそこに小屋を建ててガーンダーリー、クンティーとともに住んだ。このようにして六年経ったある日のこと、パーンドゥ軍の総指令官であったユディシュティラは夢で母クンティーを見て、一目母親に会おうとしてガンジス河の岸辺の森へ行った。一行には聖仙ヴィヤーサも加わっていた。ガーンダーリーとクンティーはヴィヤーサに、クルの大戦で死んだ息子たちや親類のものたちにもう一度会わせてくれるよう頼んだ。ヴィヤーサは彼らにガンジス河の水で沐浴するように言った。ガーンダーリーやクンティーたちが言われた通り沐浴をして立ちあがると、ガンジス河の岸辺に、カルナ・ドゥリヨーダナなどの偉大な戦士たちが立っているのが見えた。ヴィヤーサの法力によって、目の見えない老王ドリタラーシュトラにもそれらが見えた。なつかしい戦士たちの姿はすぐに消え、パーンドゥの人々はハスティナープラに帰って行った。その二日後、この森に火事が起こり、そこに住んでいたドリタラーシュトラ、ガーンダーリー、クンティーはその火につつまれて他界したのであった(同、アーシュラマ編)。残されたユディシュティラは死後の供養をおこない、ドリタラーシュトラとガーンダーリーの魂はクベーラ世界へ昇ったという(同、昇天編)。

〔別名〕ガーンダーララージャドゥヒター(ガンダーラ王の娘)、サウバレーイー(スバラ王の娘)、サウバリー(同)、スバラジャー(スバラから生れた娘)、スバラープトリー(同)、スバラートマジャー(同)。→ドゥリヨーダナ、ドリタラーシュトラ

ガンダルヴァ　Gandharva　空中や水中に住むといわれる神格(正しくは半神的・精霊的存在)。天界の水の精女アプサラスの配偶者。仏教経典では乾闥婆(けんだつば)、健達婆、乾達婆などと音写され、尋香(じんこう)、尋香行、香行などと訳される。『アタルヴァ・ヴェーダ』では六三三三のガンダルヴァがいる



ガンダルヴァ

とされる。太陽を神格化したものといわれ、また、虹、月、ソーマ酒、雲の神格化ともいわれる。『リグ・ヴェーダ』に記されるガンダルヴァは天上あるいは大気中に住み、神酒ソーマを守護し（一・二二、九・一一三など）、その両親とされる天地両界に光を与える（九・八五）。太陽とも深い関係にあり、「黄金の翼をもつ鳥、ヴァルナの使者」（一〇・一二三）といわれる。水との結びつきも強く、水に注がれたソーマ酒は「水中のガンダルヴァ」と呼ばれる。ガンダルヴァと天界の水の精女アプサラスとの結合は結婚・多産の象徴であり、未婚の女性はソーマ、アグニとともにガンダルヴァに属するものといわれ、新婦は結婚前にソーマ、ガンダルヴァ、アグニの妻となるという神話（一〇・八五）を背景に、ガンダルヴァは処女の保護者として結婚式とも深い関係をもつようになった。ガンダルヴァとアプサラスは、また、狂気を引き起こすものともいわれ、それを治療するための供犠が捧げられる。この祭祀において捧げられる火を燃すための木は、ガンダルヴァとアプサラスがその上に住むといわれるニヤグローダ、ウドゥムバラ、アシュヴァッタ、プラクシャの木であるとされる（『タイッティリーヤ・サンヒター』一・二）。

『リグ・ヴェーダ』では、ガンダルヴァの姿を明確に描いていないが、『アタルヴァ・ヴェーダ』では強い香りを持った毛深い半動物的な存在として記している。時には、両肩に翼を持った人間の上半身と鳥のような下半身を持つものとして表わされることもある。

のちにはガンダルヴァは天上の楽師といわれ（『マハーバーラタ』初編）、その出生についてはブラフマーから生れたとも、カシュヤパとその妻アリシュターとのあいだに生れたともいわれる。『ヴィシュヌ・プラーナ』（四・二）ではガンダルヴァがナーガと闘った話を伝えている。

下界に六〇〇〇万のマウネーヤ（ムニ、すなわちカシュヤパの子供たちという意味）と呼ばれるガンダルヴァたちがあり、蛇神ナーガたちを攻め、彼らの領国や財宝を奪ったことがあった。ガンダルヴァたちによってすべてを奪われたナーガの首長は、神々の主ヴィシュヌに助けを求めた。そこでヴィシュヌ神は、ユヴァナーシュヴァの子マーンダートリの息子であるプルクツァという人物のなかに化現してナーガたちを助けようと約束した。ナーガたちは彼らの妹ナルマダーをプルクツァのところに行かせ、彼を下界に迎え、ついにガンダルヴァに打ち勝つことができた。ガンダルヴァたちを攻め亡ぼしたのち、ナーガたちはナルマダーに蛇にかまれたときにその毒を消すための次のような呪文を与えた。「朝な夕なに、ナルマダーに帰命する。おおナルマダーよ、汝に帰命する。蛇の毒から守りたまえ。」。この言葉を朝と夕に繰り返すものは誰でも決して蛇にかまれることはないといわれる。ナーガたちはプルクツァにナルマダーを妻として与え、その子孫は栄えた。

仏教においては八部衆の一神に数えられ、帝釈天の雅楽を司る神とされる。乾闥婆神は常に地上の宝山中に住んでいるが、時々忉利天に昇って諸天のために音楽を演奏するとも、また、東方持国天に従って東方を守護するともいわれる。『大宝積経』乾闥婆授記品では三億六〇〇〇万のガンダルヴァが世尊を供養して悟りの証言を得たといい、種々の経典に多くのガンダルヴァの名が記されている。『法華経』観世音菩薩普門品では、観世音菩薩が三三の姿となって教えを説くうちの一つとされる。密教では主として小児に危害を加えるとされる一五鬼神を捕縛し、胎児や小児の息災を守る役割が与えられている。乾闥婆を中心に一五鬼神と一五童子をめぐらした曼荼羅を童子曼荼羅といい、小児の無病息災の法に用いられる。仏教における乾闥婆の像は奈良興福寺にあるものがよく知られている。↓アプサラス

カーンチー　Kāñcī　あるいはカーンチープラ。マドラスの南約二八キロにあるヒンドゥー教の聖地。現在はカーンチープラムと呼ばれる。インド七大聖都の一つ。パッラヴァ朝に建立されたカイラーサ・ナータ寺院、ヴァイクンタ・ベルマール寺院などがある。

ガーンディーヴァ　Gāṇḍīva　パーンドゥ王の第三王子アルジュナが持っている弓の名称。ブラフマー神が作ってソーマ神に与え、ソーマ神がヴァルナ神に、ヴァルナ神がアグニ神に、アグニ神がアルジュナに与えたものといわれる。『マハーバーラタ』の伝説によれば、アルジュナはアグニがカーンダヴァの森を燃やす時、インドラ神が雨を降らせて邪魔しようとしたら、その雨から森を守るようにいわれ、これを承知した。しかし、火神アグニはアルジュナがインドラに立ち向うための有効な武器を持っていないのを知って、三つの武具を与えた。それはガーンディーヴァ弓と、決して矢の尽きることのない矢筒と、猿の印があり四頭の白馬に引かれた戦車である。カーンダヴァの森を焼

く時には、アルジュナはこのガーンディーヴァによってインドラに立ち向い、森を守った。アルジュナはこの弓をよこせと言うものがあれば、そのものの頭を切り落してやろうと固く心に誓っていた(カルナ編)。バーラタ戦争において、アルジュナはこの弓を使って激しく戦い、勝ち抜いた。戦争が終ってパーンダヴァのユディシュティラがクル族の王となったが、やがて彼らは世俗世界に関心を失い、パリークシットに王位を譲って最後の旅に出た。彼らが赤い水の海の岸辺についた時、アグニ神が彼らの前に現われ「パーンダヴァたちよ、私はアグニ神である。アルジュナはもはやガーンディーヴァを必要としないであろう。私はそれをヴァルナから得て汝に与えた。いま、すみやかに返却せよ。私はそれをヴァルナに返そう。」と語った。この声を聞くや否やアルジュナはガーンディーヴァ弓を矢筒もろとも水中に投じた。アグニ神はたちまち姿を消し、彼らは神々の国への旅を続けた(旅立編)。→アルジュナ、カーンダヴァ

ガーンディニー　Gāndinī　(一)カーシー王の娘。彼女は一二年間母親の胎内にあり、父親が胎外に出てくれるよう願むと、三年のあいだバラモンに毎日牛を一頭づつ供養してくれるようにいい、これが実行された時はじめて生れ出た。シュヴァパルカの妻となり、アクルーラを産んだが、バラモンを一生のあいだ供養しつづけた。

(二)ガンジス河の別名。

カンドゥ　Kaṇḍu　インドラ神によって天上から送られた精女プラムローチャーによって、長くきびしい修行を妨げられた聖者。彼はこの精女とともに数百年間を過したが、一日のように感じた。しかし、最後に彼女と別れてヴィシュヌのもとに行ったという。プラムローチャーとのあいだにマーリシャーをもうけた。→プラムローチャー

キシュキンダー　Kiṣkindhā　二大叙事詩に述べられている南インドの猿の王国。現在のマイソールにあったともいわれる。『ラーマーヤナ』によれば、キシュキンダー王国の最初の王はリクシャラージャといい、インドラとスーリヤによってバーリンとスグリーヴァという二人の王子を得たが、父王の死後この二人のあいだに争いが起こり、スグリーヴァは国外に追放された。ラーヴァナに奪い去られたシーターを取り戻すために、ラーマがラクシュマナとともにキシュキンダーに到着したのはこのような時であった。ラーマとスグリーヴァは互いに助け合うことを約束し、ラーマの助けでスグリーヴァは兄バーリンを討ってキシュキンダーの支配権を取り戻したのち、バーリンの息子のアンガダを王位継承者と定めた(キシュキンダー編)。→スグリーヴァ、バーリン

キーチャカ　Kīcaka　マツヤ王ヴィラータの義兄弟。スータの王ケーカヤの子。彼には一〇五人のウパキーチャカと呼ばれる弟と一人の妹スデーシュナーがあり、この妹とマツヤ王ヴィラータが結婚したのを機にマツヤ国に住み、ヴィラータ軍の軍師となって、トリガルタの王スシャルマンを破ったこともある。クル族の王パーンドゥの五王子と彼らの共通の妻ドラウパディーが追放されて、ヴィラータの宮殿で名をかくして、ユディシュティラは賭博師として王の相手役、ビーマは料理人、アルジュナは女性名ブリハンナラーと名のって王女の舞踏師、ドラウパディーは侍女となって王妃につかえたことがあった。この時、宮殿にいたキーチャカはマーリニーと名を変えて王妃の侍女となっているドラウパディーを一目見るなり恋心をいだき、彼女に言い寄った。しかし、彼女はその申し出を拒否したので妹の王妃スデーシュナーに相談したところ、月のない夜、キーチャカのところに侍女をさし向けようと約束した。ドラウパディーが王妃に命じられていやいやながらキーチャカのところへ食物を運んで行くと、彼はやにわに彼女を抱きしめようとしたが、あやうく逃れて床の上に倒れた。そこに彼女の安全を見守っているラークシャサが現われ、キーチャカを倒して彼女は難をのがれた。このことを涙ながらにビーマに語ると、彼は、次の夜、キーチャカを誘い出すよう彼女に頼んだ。キーチャカはドラウパディーの誘いを信じて舞踏場に来ると、暗い中で彼女が横たわっているのが分ったので抱きしめてキスしようとした。しかし、それはドラウパディーではなくビーマで、ビーマの鉄のような手でひっとらえられ、押しつぶされて絶命した。キーチャカの一〇五人の弟たちは兄の屍体を火葬場に運び、兄とともに侍女(実はドラウパディー)を一緒に焼こうとした。彼女の悲痛な叫び声を聞きつけて、またもビーマが現われ、一〇五人のキーチャカの弟たちを残らず殺し、彼女を救い出した(『マハーバーラタ』ヴィラータ編)。→ドラウパディー、ビーマ

キムプルシャ　Kimpuruṣa　「いかなる人か」というほどの意味で、ジャングルに住む部族か、ジャングルの精のようなものを指す不明確な言葉。動物のような性格と姿をもつものとして描かれている。後にはキンナラと混同された。

ギリーシャ　Girīśa　「山の主」の意味で、シヴァ神の別名。

ギリジャー　Girijā　アドリジャーともいい、「山で生れた女」の意味で、ヒマーラヤ山の神格化であるヒマヴァットの娘としてのパールヴァティーの別名。

キルミーラ　Kirmīra　巨大な羅刹の名。彼はパーンド

ゥの五王子が宮殿から追放され、カーミヤカの森に入ろうとしたときに彼らを妨害し、ビーマを食ってしまうとおどかしたが、かえってビーマのために骨を砕かれて殺された。

キンダマ　Kindama　『マハーバーラタ』初編に出て来る大聖仙。森の中で鹿の姿をして妻と交わっていたところを、狩に来たクル族の王パーンドゥに射られた。この時、聖仙は「私は矢に当って死んで行くが、もし、汝がその妻の身体に触れたら、たちどころに死ぬように」との呪いの言葉を残して倒れた。パーンドゥ王は長いあいだこの呪いを恐れて妻の身体に触れなかったが、ある時、妻の一人マードリーの魅力に耐えかねてその身体を抱きしめ、生命を失った。→パーンドゥ、マードリー

キンナラ　Kiṃnara　人間の身体と馬の頭、あるいは馬の身体と人間の頭をもった神話的な存在。カイラーサ山の上にあるクヴェーラの天国に住む楽士・合唱隊員としてガンダルヴァとともに天上の音楽を奏でる者といわれる。彼らはヤクシャとともに、ブラフマー神のつま先から生れたとも、カシュヤパ仙の息子たちともいわれ、アシュヴァムカ（馬の顔をした者）とも呼ばれる。仏教経典では緊那羅、緊拏羅などと音訳され、歌神、歌楽神、音楽神などと訳される。八部衆の一。大乗経典においては竜（ナーガ）や阿修羅（アスラ）とともに仏陀の説法を聞く聴衆として描かれ、密教では倶毘羅（クヴェーラ）の眷属とされる。


キンナラ

クヴァラーシュヴァ　Kuvalāśva　あるいはクヴァラヤーシュヴァともいい、日種族（スーリヤヴァンシャ）の王子。『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば二万一〇〇〇人の息子がいたといい、『ハリヴァンシャ』では一〇〇人という。それらの息子たちとともに、彼は砂の海に棲み、信心深い聖者ウッタンカの修行を妨げていた巨大なアスラ、ドゥンドゥを攻め、これを殺したので、ドゥンドゥマーラ（ドゥンドゥを殺す者）と呼ばれる。しかし、彼の子供たちは三人を残して悪鬼の吐き出す火の息で焼き殺された。

クヴァラヤーピーダ　Kuvalayāpīda　巨大な象、あるいは象の姿をした悪魔。マトゥラーの悪王カンサに飼われており、命じられてヴァスデーヴァの息子バララーマとクリシュナを踏みつぶそうとしたが失敗し、殺された。

クヴェーラ　Kuvera　クベーラともいい、富の神。太鼓腹をつき出したみにくい姿で財布と棍棒を手にし、富と財産を司る神として、ガネーシャと並んでインドの民衆の人気を得ている神。ヴェーダにおいては邪悪な存在の首長とされ、ヤクシャ、グヒヤカ、ラークシャサ（羅刹）のリーダー。九つの宝物の守護者といわれ、地中に隠された鉱石や貴石は時々クヴェーラによって人々の前に示される。このことから、彼は宝石の中（ラトナ・ガルバ）に住む財宝の主（ダナ・パティ）と呼ばれる。『ラーマーヤナ』やその他のプラーナによれば、彼は非アーリヤの予言者プラスティヤとバラドヴァージャの娘イダーヴィダーの子とされる。あるいは、バラドヴァージャの子のヴィシュラヴァスの子ともいわれ、この父方の名をとってヴァイシュラヴァスとも呼ばれる。『マハーバーラタ』では、クヴェーラの母は非アーリヤ人のムラの娘バドラーという女性であるとしている。彼の住居はヒマーラヤのアラーカで、ヤクシー、チャールヴィー、あるいはカウヴェーリーを妻としている。ラーヴァナの兄弟分として南インドとランカー島を領有していたともいわれる。また、彼は数千年間苦行を続けて、ついにブラフマー神から不死と護世神の地位と富、およびプシュパカという空中を自由に動きまわることのできる乗り物を与えられ、ついに財宝の主と呼ばれるようになったともいわれる。『マハーバーラタ』には、シュクラがシヴァ神の友人であるクヴェーラの財宝を盗んだためにシヴァ神に飲み込まれてしまい、シヴァの神妃ウマーの取りなしによって助けられたという話があり、叙事詩の時代にはすでに「財宝の主」としての地位が確立していたことが知られる。クヴェーラは、また、古くから北方を守護する護世神（ローカパーラ）とされ、仏典においてもドリタラーシュトラ（持国天）、ヴィルーダカ（増上天）、ヴィルーパークシャ（広目天）、ヴァイシュラヴァナ（多聞天、あるいは毘沙門天）即ちクヴェーラの四天王がそれぞれ東・南・西・北を守護すると説かれる。叙事詩ではヴィシュラヴァスの子であるところからヴァイシュラヴァナというとされるが、仏典では須弥山の第四層にあってつねに仏の道場を守り、その説法を聞いているからヴァイシュラヴァナ（多聞天）であるといわれる。密教では胎蔵界曼荼羅の外金剛部院の北門に位置づけられ、一般には宝塔を手にした武人の姿をしている。日本においては、多聞天（毘沙門天）は四天王、あるいは十二天の一つとしてだけではなく、一般民衆の信

仰としては福徳をさずける七福神の一つに数えられている。
—〔別名〕クタヌ（よくない身体をもつもの、みにくい身体のもの）、ダナパティ（財宝の主）、イッチャーヴァス（望みどおりの財産をもつもの）、ヤクシャラージャ（ヤクシャの王）、マユラージャ（キンナラの王）、ラークシャセーンドラ（羅刹の王）、ラージャラージャ（王中の王）、ナララージャ、パウラスティヤ（プラスティヤの子）、アイダヴィダ（イダーヴィダーの子）、イーシャサキ（シヴァ神の友人）など。

クシェートラ・パティ Kṣetrapati 『リグ・ヴェーダ』に出てくる耕地の守護神。「土地・耕地の主」の意味で、農業・耕地・植物・家畜などを守護する（七・三五、一〇、六六など）。クシェートラスヤ・パティ、クシュートラーナーム・パティと表現されることもある。

「クシェートラ・パティにより、われらは、盟友によってのごとく、牝牛・馬を養育するも（耕地・飼料）をかち得。彼はわれらに等しき者に憐愍を垂れんことを（四・五七・一）。クシュートラパティよ、蜜に満つる水波を、われらのもとに搾りいだせ（雨として）、乳牛が乳を（いだす）ごとく、蜜を滴し・グリタのごとくいと清らかなる（水波を）。天則の主たち（神々）はわれらに憐愍を垂れんことを（二）。」（辻直四郎訳）。

クシェーマカ Kṣemaka ㈠ニラミタ、あるいはニミの子で、月種族の最後の王。
㈡カシュヤパ仙とその妻カドルーとのあいだに生れたナーガ（蛇）の名。

クシカ Kuśika ヴィシュヴァーミトラの父王、あるいはヴィシュヴァーミトラの父ガーディが出たクシカ族の最後の王といわれる。

クシャ Kuśa ㈠ラーマとシーターとのあいだに生れた双生児の一人。ラーマはランカーの羅刹ラーヴァナに奪われたシーターを取り戻したが、ラーヴァナのもとに囚われていたシーターをそのまま受け入れることはこの国の女性に道徳的に悪影響を与えるのではないかと人々が恐れているという話を聞き、彼女をガンジス河の対岸に棄てさせた。森の中のヴァールミーキ仙の草庵にたどりついたシーターは、そこでクシャとラヴァの男の双生児を産んだ。成長した二人はヴァールミーキの弟子となり、ラーマが行なったアシュヴァメーダ（馬祀祭）に参加した。ヴァールミーキはクシャとラヴァの二人に自分の作った『ラーマーヤナ』を朗詠させた（叙事詩の詩節をリュートに合わせて朗詠する職業的な弾唱詩人のことをクシーラヴァといい、クシャとラヴァという名は、このクシーラヴァの語源解釈の一つとみられている）。ラーマはこの二人がシーターの子である

ことにすぐ気づいた。ラーマの死後、クシャとラヴァはそれぞれ南北のコーサラの王となり、クシャはヴィンディヤ山脈地方にクシャスタリー、あるいはクシャーヴァティーの都を建てた（『ラーマーヤナ』終末編）。↓シーター
㈡インドの草の中で最も神聖視される草。通常ダルバといわれ、『リグ・ヴェーダ』ではその神聖な性格のために、この草を守護するようサラスヴァティー、イラー、バーラティーの三女神が懇請されている（二・三）。

クジャー Kujā 「大地から生れた女」「大地の娘」の意で、シヴァ神の妻ドゥルガー、あるいはラーマの妻シーターの別名。↓ドゥルガー、シーター

クシャーヴァティー Kuśāvatī 南コーサラ国の首都。ラーマの子のクシャによってヴィンディヤ山脈中に建てられたという（『ラーマーヤナ』終末編）。

クシャスタリー Kuśasthalī ㈠ラーマの子クシャの建てた南コーサラ国の都。ヴィンディヤ山脈中にあったとされる。クシャーヴァティーとも呼ばれる。
㈡ライヴァタ王によって建てられ、ドヴァーラカーと同一視される都市。アーナルタ王国の都であったといわれる。

クシャドヴァジャ Kuśadhvaja ミティラーの王ジャナカの弟。したがってアヨーディヤーの王子ラーマの伯父に当る。彼の二人の娘、マーンダヴィーとシュルタキールティは、それぞれジャナカ王の王子バラタとシャトルグナと結婚した。

クシャナダーチャラ Kṣaṇadācara 「夜うごめくもの」の意で、邪悪な幽鬼のたぐいのことをいう。

クジャムバー Kujambhā ブリハスパティの妻ターラーの軍勢を指揮したアスラ。彼の戦車は、悪魔の印のマスクをつけた馬に引かせていたという（『マツヤ・プラーナ』一四七・二八）。

クスマーユダ Kusumāyudha 「花の弓を持つ者」の意で、愛の神カーマデーヴァの別名。↓カーマ

グダーケーシャ Guḍākeśa 「髪の毛を房にしている者」の意で、パーンドゥの五王子のうちのアルジュナの別名。↓アルジュナ

クツァ Kutsa ヴェーダの聖仙。彼はインドラ神に迫害をうけていたが、悪魔シュシュナに攻められた時、インドラ神が彼を助けて自分の天国の宮殿に連れて行ったところ、二人が余りにもよく似ているため、インドラの妻シャチーはどちらが自分の夫か分からなかったと伝えられる。

グハ Guha ㈠「秘密」の意で、スカンダの別名。
㈡ニシャーダ族の王でラーマの友人。
㈢シヴァ神、およびヴィシュヌ神の別名。↓シヴァ、ヴィシュヌ

クマーラ Kumāra ㈠「少年」「若人」の意で、軍神スカンダの別名。クマーラは火神アグニの第九番目の姿とも（『シャタパタ・ブラーフマナ』六・一）、アグニの子供ともいわれる（『ヴァーユ・プラーナ』一・一五）。彼はインドラの娘デーヴァセーナーと結婚し、ヴィシュヌによって雄鶏と孔雀を、サラスヴァティーによってリュートと山羊を、シヴァ神によって雄羊を与えられたという（『ブラフマ・プラーナ』三・三）。

㈡クル族を二分したバーラタ戦争の時に、パーンダヴァ側についた王。ドローナによって倒された（『マハーバーラタ』戦争準備編）。

㈢複数形（Kumārāḥ）の時は、ブラフマー神の意より生れた四人、ないし五人の子供達をあらわす。すなわち、サナトクマーラ、サナンダ、サナカ、サナータナ、および五人とする場合はリブを加える。彼らは永遠に少年の姿をし、年を取らず、清浄であるという。

クムドヴァティー Kumudvatī 『ラグヴァンシャ』に記されているナーガ（蛇）の王女。ラーマの息子クシャと結婚した。

クムバカルナ Kumbhakarṇa ランカー島のラークシャサ（羅刹）の名。ヴィシュラヴァスとその妻の羅刹女ケーシニーとのあいだに生れた。ラーヴァナの兄弟。彼は神々や人間に災いをもたらした罰として六ヵ月間眠って一日だけ目を覚ますという生活を送らされていた。ラーマとその妻シーターを奪ったラーヴァナ王との戦いが始まると、ラーヴァナは眠っている弟を苦心して目覚めさせ、戦いに参加させた。クムバカルナはラーマ軍を迎え撃ち、猿王スグリーヴァを巨大な石で打って捕え、ランカーへ連れて来て再び戦場へもどった時、ラーマと会い、短い戦いの後ラーマに首をはねられた（『ラーマーヤナ』戦闘編）。→ラーヴァナ

クラウンチャ krauñca ㈠ヒマーラヤ山脈の東部の峠の名。パラシュラーマによってその矢でカイラーサ山から南部へ通ずるために開かれたといわれる。『ヴァーユ・プラーナ』によれば、インドラとカールッティケーヤとが力比べをして争った時、カールッティケーヤがやりを投げつけてできたという。

㈡乳海に囲まれた七つの州（島）の一つ。

㈢だいしゃくしぎの名。

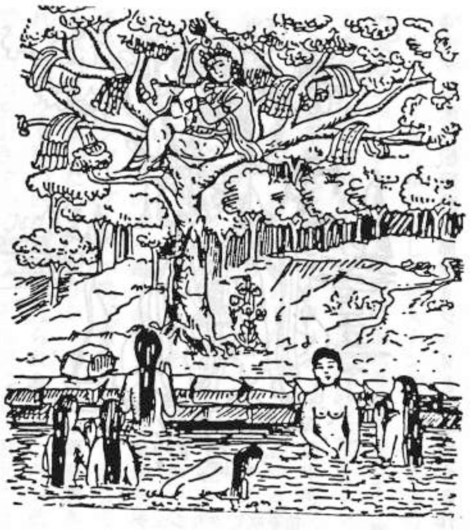
クラトゥ Kratu プラジャーパティの一人、あるいは、ブラフマーの意より生れた聖者たちの一人。『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、彼の妻サンタティは親指ほどの大きさのヴァーラキリヤと呼ばれる六万人の聖仙を生んだといわれる。

クラパルヴァタ Kulaparvata 南インドの七つの主な山脈のこと。マヘーンドラ、マラヤ、サヒヤ、シュクティマット、リクシャ、ヴィンディヤ、パーリパートラで、マヘーンドラはオリッサ山脈、マラヤは西ガーツ山脈南部のマラバル山、サフヤは西ガーツ山脈の北部、シュクティマットは不明、リクシャはゴンドワーナ山脈、ヴィンディヤはこの場合は現在のヴィンディヤ山脈の東部、パーリパートラはヴィンディヤ山脈の北および西部に比定されている。

クリシャーヌ Kṛśānu 「弓の射手」の意で、ガンダルヴァの名。時にはルドラと同一視され、天の酒ソーマを守護する。クリシャーヌは『アヴェスター』の神格ガンダレワ・ケレサニに対応する神格と見られている。

クリシュナ Kṛṣṇa ヒンドゥー教の主神ヴィシュヌの第八番目の化身。「黒い神」の意で、ヴィシュヌの化身のうちで最も重要であるとともに、ヒンドゥー教の諸神中で最も民衆に親しまれている神格。

〔起源〕クリシュナの名は『リグ・ヴェーダ』や『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』にも見えるが、ヒンドゥー教の神格としてのクリシュナとの関係は明らかではない。『マハーバーラタ』では、マトゥラー地方を本拠地とするヤーダヴァ族に属するヴリシュニ族の英雄として現われており、バラタ族の大戦争に参加してアルジュナをはじめとする五王子軍に味方するとともに、ヴィシュヌの化身として神格化されている。クリシュナは、一般には実在した人物と見られ、この実在の人物が神格化されてヴィシュヌ神の化身とされる過程は次のように推定されている。クリシュナは前七世紀以前マトゥラー地方のヴリシュニ族の一員として生れた。父をヴァスデーヴァ、母をデーヴァキーといった。ゴーラ・アーンギラサ仙の教えにより宗教的な



牧女たちの衣類を盗むクリシュナ

自覚に達したのち、ヴリシュニ族のあいだに太陽神の崇拝を中心とする新しい宗教を広めた。その神をバガヴァットといい、主としてクシャトリヤ（王侯武人階級）のために説かれた実践倫理を強調する通俗宗教であったといわれる。生前からヤーダヴァ族の宗教的指導者として半ば神として尊敬を受けていたクリシュナは、その父の名に因んでヴァースデーヴァとも呼ばれ、やがて彼自身が説いた神バガヴァットと同一視されるようになった（ヴァースデーヴァを父の名をとったクリシュナの異名であるとする説には異説があり、それによれば西インドでは古くから崇拝されていたヴァースデーヴァと呼ばれる地方神があり、それがクリシュナと同一視されるという過程を経た上で、クリシュナの名とされるようになったという）。クリシュナをバガヴァット（至上者）として信仰する人々は、やがて実践道徳と神への絶対的信仰（バクティ、誠信・信愛）を深めていくとともに、当時のインド諸思想、中でもサーンキヤ・ヨーガ思想を取り入れて教義内容を整え、民間に勢力を広げ、叙事詩の時代までにヴェーダ以来の太陽神であるヴィシュヌとバガヴァットと呼ばれるクリシュナ・ヴァースデーヴァとが同一視されるようになった。この同一化の過程においては、バラモンの側からは新興勢力であったクリシュナ・バーガヴァタ信仰を正統派の領域に取り入れようとしてヴェーダ以来の伝統的な神ヴィシュヌと同一視する作用がはたらき、他方、クリシュナをバガヴァットとしてあがめる側からも、みずからの立場を正統化するために正統派のヴィシュヌと同一視するはたらきがあったといわれる。このような過程を経て、もとヤーダヴァ族に発したバーガヴァタ派はヒンドゥー教のなかに取り入れられた。ヒンドゥー教の第一の聖典とされる『バガヴァッド・ギーター』はクリシュナ＝ヴィシュヌをバガヴァットとして崇拝するこの派の聖典として編まれたものであり、これが『マハーバーラタ』の中に編入され、現在まで伝えられることになったと見られている。


笛を吹くクリシュナ

〔クリシュナ伝説〕クリシュナとヴィシュヌが一体視され、これに種々の民間の要素が吸収されてクリシュナ伝説が形成された。ヴィシュヌ信仰が全インドに広まったのは、クリシュナ伝説を媒介としてである。クリシュナ伝説が現在のインドの一般民衆に親しまれているような形にまとめられたのは『マハーバーラタ』の附録である『ハリヴァンシャ』やプラーナ文献のなかにおいてであり、なかでもバーガヴァタ派の信者に大きな影響を与えている『バーガヴァタ・プラーナ』第一〇巻では、クリシュナの生涯がより興味深く描かれている。そのあらすじを要約すれば以下のとおりである。

クリシュナはヤーダヴァ族のヴァスデーヴァとデーヴァキーとのあいだに生れた。デーヴァキーとヴァスデーヴァが結婚した時、マトゥラーを支配していた悪王カンサ（マトゥラーの国王ウグラセーナの妻が森に出かけてはぐれてしまった時、魔神が彼女を懐妊させて生れたのがカンサで、生れるや残虐性を発揮し、父を斥けて王位についてからは悪政の限りをつくした）は、彼らの八番目の子供に殺されるとナーラダ仙から予言された。カンサ王はこれを聞いてデーヴァキーを殺そうとして剣を抜くが、彼女が生れて来る子供を王に渡すと約束したので思い留まった。カンサは彼らのあいだに生れた子供を次々に殺すが、第七番目の子バララーマと第八子クリシュナは助けられた。ヴィシュヌの化身であるバララーマは、生れる直前に女神ニドラーによってデーヴァキーの胎内からヴァスデーヴァのもう一人の妻ローヒニーの胎内に移されたからである。次に生れた第八子は、真夜中にまっ黒な皮膚をして生れたのでクリシュナ（黒い者）と名づけられた。父ヴァスデーヴァは門番が眠っている隙に生れたばかりのクリシュナを連れ出し、マトゥラーから抜け出して牧人ナンダのところに行き、その妻ヤショーダーとのあいだに生れた女の子とすり替えた。この牧人ナンダのもとでクリシュナは兄バララーマとともに楽しい幼年時代を過した。クリシュナの幼年時代については、彼が怪力の持ち主であったこと、あらゆる悪戯を好んだことが語られている。ある時、クリシュナがナンダの車の下で寝かされていた時、乳を欲しがって泣き叫んだのであるが、母ヤショーダーはすぐそこに来なかった。怒ったクリシュナはその車を蹴りあげて人々を驚かせた。また、ある時、ヤショーダーの牛乳と凝乳の器をこわしてバターを食べてしまったので、クリシュナは体に縄を巻きつけられ、大きな木製の臼に縛りつけられた。ところが彼は怪力でこの臼を引きずって歩き、それが二本の樹木にひっかか

って、その樹を引き抜いてしまった。このことから、彼はダーモーダラ（腹に綱を巻いた者）とも呼ばれる。また、ある時は、牧女たちが沐浴をしているあいだに彼女らの衣服を盗み、裸の少女たちがそれを取りに来るまで木に登っていたこともあった。成人したクリシュナについては蛇王カーリヤなどの魔神を退治する武勇伝が数多く語られている。

また、インドラ神に悪戯をしかけた話もよく知られている。ある時、牛飼いたちが雨を降らす神を祀ろうとしているのを見て、クリシュナは彼らに雨の神よりも牛を養ってくれる山を信仰することを勧めた。牛飼たちがクリシュナの勧めによってゴーヴァルダナ（「牛を殖す者」の意）山に供物を捧げると、山の頂きに神として姿を現わし、「自分は山である。牛飼いたちの捧げた多くの供物を受けよう」と言った。自分に対する信仰を奪われたインドラは大いに怒り、大雨を降らせて彼らを皆殺しにしようとしたが、クリシュナは自分の小指でゴーヴァルダナ山を七日のあいだ頭上にもちあげ、その下に牧人たちを入れて守った。そこで、彼はゴーヴァルダナダラ（ゴーヴァルダナ山を持ち上げている者）の異名をとった。インドラもついに彼の偉大さを認めて、彼にウペーンドラ（インドラの次に生れたもの・インドラの弟）の名を与えた。

成人したクリシュナは非常にハンサムだったので、いつも多くの牧女たちにとり囲まれ、笛を吹いたり踊りたわむれたりした。クリシュナと牛飼いの女たちの恋愛については多くの物語が語られているが、牧女たちの中でクリシュナの最もお気に入りだったのはアーヤナゴーシャの妻ラーダーであった。この間にも、悪王カンサはクリシュナを殺そうとして牡牛の姿をしたアリシュタ、馬の姿をしたケーシンなどの魔神を遣わすが、かえってクリシュナに殺害される。これによって、クリシュナはケーシャヴァ（ケーシンを殺す者）という異名を与えられた。カンサ王は一計を案じてマトゥラーで賭博の会を開き、ここにクリシュナ兄弟を呼び寄せて殺害しようとするが、反対にカンサ王はクリシュナ兄弟によって殺された。クリシュナはそのままマトゥラーにとどまって武術を学んだのち、地獄におもむいてカンサ王に殺された六人の兄弟を連れ戻し、母親の乳を飲ませてから、彼らを天に昇らせる。この間、マガダ王ジャラーサンダを亡ぼしたが、西北インドのカーラ・ヤヴァナと呼ばれるギリシャ人勢力の圧迫をうけ、マトゥラーを捨ててグジャラート地方にドヴァーラカーという町を建ててそこに住んだ。彼はこの町でヴィダルバ国のビーシュマカ王の娘ルクミニー、ジャームバヴァット王の娘ジャームバヴァティー、サトラージタの娘サティヤバーマーなどと

結婚した。また一万六〇〇〇人の妻をもって一八万人の子供をもうけたともいわれる。最後に彼は一猟師によって鹿と見誤られ、アキレスのように唯一つ持っている急所であるかかとを射られて死に、ドヴァーラカーの町は海に呑み込まれてしまい、実にさまざまな出来事に充ちたクリシュナ伝説の幕が閉じられる。→ヴァスデーヴァ、ゴーピー、バガヴァッドギーター、ハリヴァンシャ

グリタ Ghṛta 液状にしたバターで、現代のインド語ではギー Ghi（英語では Ghee）といい、代表的な栄養であり、かつては普通の供物として神に捧げられた。『リグ・ヴェーダ』ではグリタを神格化し、これに三種の様相、すなわち㈠本来のグリタ、㈡神酒ソーマ、㈢詩的な霊感と詩人の言葉の三つがあるとして讃美する（四・五八）。ヴェーダの祭式において捧げられるグリタは、世界と個人の創造の過程、豊かさなどを表わすといわれ、薬用にも用いられた。神々がつぼに入れたグリタ（ギー）を犠牲の火の上に置いたところ、ギーの中から野猪が生れ出た。野猪が太っているのはこのためだという。

クリタヴァルマン Kṛtavarman ヴリシュニ族の王で、ヴリシュニ族の七勇士（クリシュナ、チャールデークシュナ、シャイネーヤ、チャクラデーヴァ、プラディユムナ、サームバ）の一人。バーラタの大戦ではカウラヴァ側に組してパーンダヴァ軍と戦い、その第一八日目、カウラヴァ軍で生き残ったのは彼とクリパ、アシュヴァッターマンの三人だけであったが、最後にヤーダヴァ族の人々によって殺された。

クリタヴィーリヤ Kṛtavīrya ハイハヤ族の王ダナカの息子で、アルジュナの父。アルジュナは父方の姓によってカールタヴィーリヤと呼ばれる。プラーナ文献では、クリタヴィーリヤはブリグたちの保護者で、全世界を力と正義で支配し、一万回の供犠を行なった偉大な王といわれる。

グリターチー Ghṛtācī 天界の水の女精であるアプサラスの名。この女精には地上の多くの聖者たちや人間との恋愛物語が伝えられている。彼女はプルの子孫であるラウドラーシュヴァ、あるいはクシャナーバとのあいだに一〇人の子供をもうけたといわれる。『ブラフマ・ヴァイヴァルタ・プラーナ』では、ヴィシュヴァカルマン仙と交わって、一つのカーストのもととなったといわれ、『ハリヴァンシャ』ではラウドラーシュヴァとのあいだに一〇人の息子と一〇人の娘を生んだといわれる。また他の伝説では、クシャナーバによって一〇〇人の娘の母となったともいう。

クリタ・ユガ Kṛta-yuga →ユガ

グリッツァマダ Gṛtsamada 『リグ・ヴェーダ』の聖仙。讃歌の作者の一人。アーンギラサ族のシュナホート

ラの子として生れたが、彼らに敵対するアスラ族に捕われ、インドラによって救い出されて以来、ブリグの一族のシュナカに育てられたといわれる。インドラ神との結びつきを示すいくつかの伝説があり、その一つによれば、彼はきびしい修行によってインドラのように巨大で強大な力を持つものとなったので、ダイティヤたちは彼をインドラと見まちがえ、攻めかかろうとした。修行で得た法力によってこのことを知ったグリッツァマダは、インドラ神の恐ろしい姿を彼らに示して見せた（『リグ・ヴェーダ』二・一二）。これを見たダイティヤたちは恐ろしさの余り体が動かなくなり、インドラにやすやすと殺された。インドラ神は非常に喜び、グリッツァマダとその子孫が永久に栄えるよう約束をした。

クリパ　Kṛpa　㈠インドラ神によって救われた王子（『リグ・ヴェーダ』八・三）。

㈡聖仙シャラドヴァットとアプサラスのウルヴァシーとのあいだに生れ、クル族の王シャーンタヌの養子として育てられた。クリパー（あるいはクリピー）の兄で、ガウタマともシャーラドヴァタとも呼ばれる。バーラタ戦争においてはカウラヴァ側について戦い、最後に生き残った三人の中の一人となった（三人とは彼のほかに、クリタヴァルマン、アシュヴァッターマン）。

クリパー　Kṛpā　あるいはクリピーともいい、シャラドヴァット仙の子として生れ、兄のクリパとともにシャーンタヌ王に育てられた。プラーナによれば、シャラドヴァット仙の修行を妨げようとしてインドラ神が天から送った精女とのあいだに生れたのがこの兄妹で、クシャ草の上に産みつけられていたのをシャーンタヌ王が慈悲の心（クリパー）から拾いあげて育てたので、クリパ、クリパーと呼ばれるようになったという（『ヴァーユ・プラーナ』九九・二〇四）。彼女は後にクル族の軍師ドローナの妻となり、武勇で知られたアシュヴァッターマンの母となった。↓ドローナ

クルクシェートラ　Kurukṣetra　「クル族の土地」の意で、バラタ族の大戦争が行なわれたところ。現在のデリーの近くとされる。『マハーバーラタ』によれば、クルクシェートラの首都をハスティナープラといい、この国の人々は勇気をもって知られ、死後はヤマの国に行くことなく、そのまま天界に昇るといわれる（シャリヤ編）。

クールマ　Kūrma　ヴィシュヌの一〇の化身のうちの一つで「亀」としての化身。↓ヴィシュヌ

クローダヴァサー　Krodhavasā　あるいは単にクローダーともいい、ダクシャの大勢の娘の一人、カシュヤパの妻の一人。さまざまな類の悪鬼的存在（ブータ）の母とい

われる。

クンティー　Kuntī　ヤーダヴァ族の王シューラセーナの娘で、クル族の王パーンドゥの妻。ユディシュティラ、アルジュナ、ビーマの母。『マハーバーラタ』の物語の中で最も気高い女性。クリシュナの父ヴァスデーヴァは彼女の兄に当る。彼女はもとプリターという名であったが、一族の中のクンティボージャの養女としてその宮殿で育てられたので、クンティーと呼ばれるようになった（『マハーバーラタ』初編）。

クンティボージャの王宮にドゥルヴァーサスという仙人が住んでいた。クンティーはこの仙人によく奉仕したので、仙人は喜び、彼女の誠信を試そうとして「自分が水浴をしている間に食事の用意をして貰いたい」と言いつけた。彼が急いで水浴して帰って来た時、クンティーは料理した食物を入れた器を彼の前に持って来た。その器は煮えた食物のために熱くなっていたので、食事のあいだ彼女がそれを持っていることができないと考えて、仙人は彼女の背中に眼を注いだ。クンティーは仙人の意中を知って器を自分の背中にのせた。仙人は心ゆくまでそれを食べることができたが、彼女の背中は灼けただれ火傷を負った。しかし、彼女は少しも姿勢をくずさなかったので仙人は感じ入って彼女に恩恵を与えた（『カターサリットサーガラ』ウダヤナ王行状記・八）。

それは子供を欲しい時に唱えるマントラ（呪文）で、いかなる神でもこのマントラを唱えながら呼び出せば、一生のうちで五回まで望みがかなえられるというものであった。仙人がその場を去るとクンティーはさっそく試してみたくなり、マントラを唱えて太陽神を呼び出した。すると太陽神スーリヤがバラモンの青年の姿をして彼女の前に現われた。本気で子供を望んだわけでもなく、しかも未婚のクンティーはあわてたが、スーリヤは彼女にマントラを口にした以上子供を産まねばならないこと、しかし彼女の処女性は失われないことを告げて姿を消した。やがて彼女は密かに男子を産んだが、この子を箱の中に入れアシュヴァー河に流した。この子はアディラタという年老いた御者に拾い上げられ、のちにカルナという名で知られるようになった（『マハーバーラタ』初編）。

クンティーの自選式（夫を選ぶ行事）が行なわれた時、彼女は多くの男たちの中からクル族の王パーンドゥを夫に選んだ。パーンドゥはその後迎えたもう一人の妻マードリーとともにハスティナープラの都で幸せに過した。ある時、パーンドゥが二人の妻を連れて狩りに出たところ、森の中で二頭の鹿が交尾しているのを見てその中の一頭を射た。ところが、それは鹿の姿をしたキンダマという聖仙であっ

た。怒った聖仙はパーンドゥに「汝は汝の妻に触れたならば直ちに死ぬように」という呪いを与えて息を引き取った。悲嘆にくれたパーンドゥは家を棄てて遊行者になろうとしたが、妻たちに引き止められ、妻を連れてシャタシュリンガへ行き、苦行を始めた。

しばらく後、パーンドゥは妻たちにクル族の高貴な王と通じて王子を産むように頼んだが妻たちは同意しなかった。この時、クンティーはかつてドゥルヴァーサス仙から授けられたマントラのあることを夫に告白し、夫の同意を得て三度それを唱えた。こうして、クンティーはユディシュティラ、アルジュナ、ビーマを生んだ。最後のマントラはマードリーのために唱えられ、彼女からはナクラ、サハデーヴァが生れた。以上の五人は「パーンドゥの五王子」といわれ、クル族を二分する大戦争ののち、国を支配することになる。

五人の子供と二人の妻とに囲まれて幸福に酔いしれたパーンドゥは戒めを忘れ、マードリーを抱きしめた瞬間に、キンダマ仙の呪いによって倒れた。彼の遺骸は火葬にされ、二人の妻も夫の後を追って火に身を投げようとしたが、聖者たちや親族のものたちから二人のうちどちらかが残って子供たちの面倒を見るようにさとされ、クンティーだけが残り、五人の子供たちを連れてハスティナープラに帰った（初編）。

五人の王子がパーンドゥの兄ドリタラーシュトラの王宮に引きとられ、一〇〇人の王子たちと一緒に育てられるようになった時、クンティーもこの王宮にあって辛苦をともにした。カウラヴァとパーンダヴァが対立し、戦争が始まろうとした時、クンティーも最初の子供であるカルナを説得するなど和平工作につとめたが成功せず、ついに大戦争が始められ双方の勇士・若者が多く戦死した。クンティーはユディシュティラ王の宮殿で日を送っていたが、老王ドリタラーシュトラがその妻ガーンダーリーとともに森に隠退した後を追い、森の火事にあって世を去った（アーシュラマ編）。クンティー、マードリー、パーンドゥの三人はともに死後天に昇ったという（昇天編）。→ドゥルヴァーサス、パーンドゥ

クンティボージャ　Kuntibhoja　ヤーダヴァ族の王。クリシュナの父であるヴァスデーヴァの父親。したがってクリシュナには祖父に当る。クル族の王パーンドゥの妻となってユディシュトラ、ビーマ、アルジュナの三王子を産んだクンティーはクンティボージャの宮殿で育てられた。彼はバーラタの大戦争ではパーンダヴァ側に立ち、その初日に息子たちとともにヴィンダ、アヌヴィンダと戦った（『マハーバーラタ』ビーシュマ編、ドローナ編）。

ケーシー　Keśī　あるいはケーシンともいい、『マハーバーラタ』ではインドラと戦って敗れたダイティヤと記され、『ヴァーユ・プラーナ』（五・一六）では、馬の姿をしてクリシュナと戦い、クリシュナによってあごを二つに引き裂かれたダイティヤといわれる。クリシュナは、この行為によってケーシャヴァとも呼ばれる。

ケーシニー　Keśinī　㈠シヴァの神妃ドゥルガーの別名。㈡ヴィシュラヴァナの妻でランカーの羅刹王ラーヴァナ、クンバカルナ兄弟の母。

ケーシャヴァ　Keśava　「長い髪の毛を持つ者」の意で、ヴィシュヌ＝クリシュナの別名。クリシュナがダイティヤのケーシンを殺したことによってこのように呼ばれ、髪（ケーシャ）と結びついていることによってもこのように呼ばれる。→クリシュナ

ケーダールナート　Kedārnāth　サンスクリット語ではケーダーラナータといい、シヴァ神、およびシヴァ神の十二リンガの一つの名称で、同時にケーダーラナータとしてのシヴァ神を祀るヒマーラヤの聖地の名。ウッタラカンドと呼ばれるヒマーラヤ地方の、ガンジス河の支流アラカナンダー河へ流れ込むマーンダーキニー河の水源近くにある聖地。

ケーダーレーシャ　Kedāreśa　ケーダーラナータともいい、シヴァ神の別名、あるいは円錐形をしたリンガとしてのシヴァ神。十二大リンガの一つ。

ゴーヴァルダナ　Govardhana　ブリンダーヴァナにある山脈の名で、クリシュナがインドラに打ち勝ったところとして知られる。クリシュナは、このゴーヴァルダナ山脈一帯で、インドラ信仰にかわるヴィシュヌ＝クリシュナの信仰と儀礼を土地の牧童や牧女たちに広めたためにインドラ神の怒りを買い、インドラ神は大雨を降らせてこの土地を押し流そうとした。その時、クリシュナはゴーヴァルダナ山をそこに住む人々とともに小指で持ち上げ、インドラ



ゴーヴァルダナ山を小指で持ち上げるクリシュナ

の降らした大雨をしのいだ。このことがあってから、クリシュナはゴーヴァルダナダラ（ゴーヴァルダナ山を支えた人）と呼ばれるようになった。この神話は、この地方において信仰されていたヴィシュヌ＝クリシュナ信仰がインドラ神を中心とするヴェーダの伝統的な信仰に打ち勝ったことを示すと見られている。→クリシュナ

ゴーヴァルダナダラ　Govardhanadhara　「ゴーヴァルダナ山を支えた者」の意で、クリシュナの別名。→ゴーヴァルダナ

ゴーヴィンダ　Govinda　「牛を護る者」の意で、クリシュナの別名。→クリシュナ

ゴーカルナ　Gokarṇa　「牛の耳」の意で、シヴァ神の聖地の一つ。マンガロールの近くの西海岸にある。ここでヤマ神が苦行を行ない、守護神の一つとなり、また祖霊の世界の主となったと伝えられる（『マツヤ・プラーナ』二・一八）。

コーサラ　Kosala　現在のウッタラプラデーシュ州北東部にあった古王国。アヨーディヤーを首部とし、古代の北インドで最初に勢力をもち、諸国を従えた国。『ラーマーヤナ』の物語の舞台となったところで、ダシャラタ王とその子のラーマを讃える記述の中に、コーサラ国とその首都アヨーディヤーの繁栄のさまが語られている。歴史的には紀元前六世紀、当時の一六大国の一つであったカーシーなどを征服し、プラーセーナジット王のとき、最大となった。同王は熱心な仏教信者であったので、もう一つの都シュラーヴァスティーはブッダの説法の場となった。ヴィダールカ王が後をつぐと、ブッダの出たシャカ族を攻め滅ぼしたりしたが、マガダ王アジャータシャトルと争って破れ、この国は滅んだ。叙事詩やプラーナ、仏典などではアヨーディヤー、シュラーヴァスティー、サーケタという三大都市を持つ国とされる。

また、同じくコーサラという名をもちいている国に、マハーナディー川の上流とゴーダーヴァリー川の支流のヴァローダ川上流一帯を支配した王国があり、北インドのコーサラ国に対して南コーサラと呼ばれている。この王国は四世紀にグプタ王朝のサムドラグプタに征服された。

コータヴィー　Koṭavī　あるいはコータリー、コーッタヴィー。「裸の女」の意で、女性の悪魔。ダイティヤたちの守護女神で、悪鬼バーナの母。クリシュナが得意の円盤スダルシャナを投げつけてバーナを殺そうとした時、彼女は裸でクリシュナの前に現われ邪魔しようとしたが、クリシュナは円盤を投げてバーナの腕を切り落したという（『ヴァーユ・プラーナ』五・三三）。南インドでとくに厚い崇拝を受け、時にはシヴァの神妃ドゥルガーと同一視されることもある。

ゴータマ　Gotama　㈠ヴェーダの聖仙。ラフーガナの子で、『リグ・ヴェーダ』の讃歌（一・九二）の作者。㈡ニヤーヤ学派の祖。㈢仏教の開祖シャーキャムニが出たゴートラ（種姓）の名。

ゴーパティリシャバ　Gopatiṛṣabha　「牛飼いの主」の意で、シヴァ神のこと。あるいはクリシュナに殺された悪魔の名（『マハーバーラタ』）。→シヴァ

ゴーパーラ　Gopāla　「牛を護る者」の意で、ヴリンダーヴァナで牧童たちと一緒に暮していた時代の若いクリシュナに与えられた名。→クリシュナ

ゴーピー　Gopī　「牛飼いの女」の意で、クリシュナがヴリンダーヴァナで牧童たちのあいだで暮していた時の女友達のことをいう。青年時代のクリシュナは非常にハンサムだったので、ヤムナー河の岸辺で常に多くの女たちに囲まれて歌い踊りたわむれながら毎日を送ったといわれ、このありさまは多くの文学作品・絵画のモチーフとされている。→クリシュナ

ゴーマンタ　Gomanta　西ガート山脈中にある山の名。『ハリヴァンシャ』によれば、この山中でクリシュナはジャラーサンダを倒したという。

ゴーラカナータ　Gorakhanātha　あるいはゴーラクシャナータ。八五〇～九〇〇年ころ、あるいは、一〇世紀から一二世紀のあいだに活躍したと推定されるナータ派の行者（ヨーギン）。ゴーラクナーティン、あるいはカームパターヨーギンと呼ばれるシヴァ派の系統に属する諸派の一つの開祖であるといわれ、ハタヨーガの創始者であるともいわれる。北インド、ネパールで名を知られた行者で、北インド、ネパール、チベットにおいて歌や民間伝承のかたちで彼についてのさまざまな伝説が形成された。インドの伝説では、彼はシヴァ神の化身であり、マツエーンドラナート、あるいはミンナートの弟子であったという。『ターラナータの仏教史』では、彼をもと仏教徒でシッダ（成就者）の一人であるとしている。ネパール人の信仰の中では、このゴーラカナータと観世音菩薩の化身とされるマツエーンドラナータ（マチェンドラナート）とが習合し、さまざまな伝説がつくられた。ゴーラカナータには多くの神秘的な行為とヨーガによる法力があったといわれ、その中には雨を降らせない法だとか、死者をよみがえらせる法、自分の寿命を無限に引き延ばせる法、数時間のうちにニヤグローダの木を種から実がなるまでに成長させる法などがある。

サ　行

サヴァルナー　Savarṇā　太陽神スーリヤの妻。あるいは大洋の娘でプラーチーナバルヒの妻ともいわれる(『ヴィシュヌ・プラーナ』)。

サーヴァルナ　Sāvarṇa　太陽神スーリヤとのその妻チャーヤーとのあいだに生れた第八番目のマヌ(人間)。また、サーヴァルニともいわれる。↓マヌ

サヴィトリ　Savitṛ　『リグ・ヴェーダ』の激励の神。サヴィトリの名は「激励・鼓舞」を意味する動詞語根 sū から出たものであり、一切の存在を激励・鼓舞し、前進させる神である。この神は一切の存在を光でおおい、刺激を与える太陽の活動の一面を神格化したものであり、具体的な太陽を表わすスーリヤ神とも深い関係をもっている。スーリヤとサヴィトリは別個に見られる時もあるが、同じものとして扱われることもある。サヴィトリに属するものはすべて金色に輝いており、彼は輝く馬に引かれた金色の馬車に乗っている。金色の両手をさしのべて金色の光で全世界を照らしながら全存在に刺激を与えて活動をうながすとともに、夜の太陽としては夕暮に一切のものを休息に導くのである。サヴィトリは『リグ・ヴェーダ』においては、一〇篇ないし一一篇の独立した讃歌を捧げられている。

「暗き空間を通過し、神界をも人間をも憩いに導きつつ、黄金の車によって、サヴィトリ神は来たる、万物を見守りつつ(一・三五・二)。真珠もて蔽(おお)われ・一切の色相をもち・軛(くびき)の栓(せん)の黄金なる・高き車に、崇拝すべきサヴィトリは乗れり、暗き空間を〔通過すべく〕、強き力を身にまといつつ(四)。黄金の手をもち、万民を支配するサヴィトリは、天地両界のあいだを進む。彼は病患を駆逐し、太陽を導く。彼は暗黒を通過して天界に達す(夕暮の到来)(九)。」(辻直四郎訳)。↓スーリヤ

サーヴィトリー　Sāvitrī　㈠ヴェーダの神聖な詩句。ガーヤトリーともいわれる。↓ガーヤトリー

㈡プラフマー神の娘で、世界最初の女性シャタルーパーの別名。

㈢『マハーバーラタ』の中の物語「サーヴィトリーの物語」のヒロイン。アシュヴァパティの娘で、サティヤヴァットの妻。サーヴィトリーは、森林に追放されたシャールヴァ国の盲目の王ディユマットセーナの息子であるサティヤヴァットを夫に選んだ。ナーラダ仙がこの王子は一年ののちに死ぬ運命にあることを告げたので、父王は彼女の意を曲げさせようとしたが、彼女は聞き入れず、サティヤヴァットと結婚して森林に入った。しかし、ナーラダの予言の通り、王子はある日森の奥で倒れ、死の神ヤマがその魂を奪い去った。貞淑な妻であるサーヴィトリーは悲嘆にくれ、死の神に心情を訴えたので、ヤマもついに彼女の夫の霊魂を返し、生命をよみがえらせた。また、ディユマットセーナ王の目も開き、サーヴィトリーは夫とともに幸福に暮らした(『マハーバーラタ』森林編)。サーヴィトリーの貞節は女性の模範とされている。↓サティヤヴァット

サウバ　Saubha　『ヤジュル・ヴェーダ』に述べられる空中の都市。この町はハリシュチャンドラに属するもので、ときどき一般の人々にも見られるという。カプラ(空の町)、プラティマールガカ、トランガとも呼ばれる。

サウバリ　Saubhari　信心深い聖仙。彼は一二年間にわたる苦行の結果、年老い、やせおとろえていたが、子孫を残そうと思い、マーンダートリ王のところに行って、五〇人の王女の中の一人を妻にしたいと申し入れた。王はサウバリ仙の姿を見て王女を妻として与える気にはならなかったが、もし王女の中の一人でも同意すれば認めようという条件で彼を王宮の中に入れた。するとサウバリ仙は若いハンサムな青年に姿を変えて王女たちの前に現われたので、王女たちは一人残らずこの青年に恋心を抱いた。彼女らを困らせないために、彼は五〇人の王女すべてを妻にしたと伝えられる(『ヴァーユ・プラーナ』四・二)。↓マーンダートリ

サガラ　Sagara　日種族(スーリヤヴァンシャ)に属するアヨーディヤーの王。サガラはカシュヤパ仙の娘スマティとヴィダルバ王の娘ケーシニーの二人と結婚した。妻たちに子が生れなかったので、彼がアウルヴァ仙に祈ると、アウルヴァ仙は、一方は一人だけの子を産み、他方には六万人の子供が生れるよう約束した。そこでケーシニーからは一人の息子が生れ、スマティには六万人の息子が生れた。この子供たちはカピラ仙の怒りにふれて焼き殺されたが、その遺灰を清めるために天界を流れていたガンガーがサガラ王の子孫のバギーラタ王によって、この地上に導かれたという。↓ガンガー、バギーラタ

サーディヤ　Sādhya　下位の神格、あるいは半神的存在のグループの名。ヴェーダにおいて行なわれた儀礼・祈りを神格化したもので、神々とともに、あるいは天と地の中間に住むと見られていた。その数は一二とも七ともいわれ、プラーナでは彼らをダルマとダクシャの娘サーディヤーとの子であるとする。

サティヤヴァット　Satyavat　シャールヴァ国の盲目の王ディユマットセーナの息子で、サーヴィトリーの夫。

サティヤヴァットは余命わずかに一年という運命のもとにあったが、サーヴィトリーはサティヤヴァットと結婚した。死後、彼女の熱烈な夫への愛と貞節さに感じたヤマ神によって生命をよみがえらされた。→サーヴィトリー

サティヤヴァティー Satyavatī (一)アプサラス(天界の水の精女)であるアドリカーの娘で、聖仙パラーシャラとのあいだに生れたヴィヤーサは大叙事詩『マハーバーラタ』の伝説上の作者。彼女はシャーンタヌ王とも結婚し、チトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤとをもうけた。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、彼女はもともと呪いにより魚となってガンジス河のなかに住んでいた。ある時、ウパリチャラ・ヴァスという名の王の精液が流れ来たのを飲みこんで身籠った。一人の漁師がこの身籠った魚を捕えて腹を割くと、その中から男女二人の赤子が出て来た。漁師は二人の子供を王のもとに連れて行き、男の子はのちにマツヤ王となった。女の子は魚の臭いがしたのでマツヤガンディー(魚の臭いのする女)と名づけられた。漁師はマツヤガンディーを自分の小屋に連れて帰り、自分の娘として育てた。彼女は暗い顔色をしていたのでカーリー(黒色の女)とも呼ばれた。このようにして、この少女はカーリーともマツヤガンディーとも呼ばれ、のちにサティヤヴァティーとも呼ばれることになるのである。

さて、漁師はガンジス河の渡し守を生業(なりわい)としており、少女も父の仕事を手伝っていた。この少女が美しく成長したころ、たまたま聖仙パラーシャラが河を渡ろうとし、彼女を見そめた。パラーシャラは渡河の途中で、人工的な霧を作り出し、その中でマツヤガンディーを妻とした。その瞬間から、彼女はカストゥーリーガンディー(じゃ香の香りのする女性)と呼ばれるようになった。彼女は妊娠し、ただちに男の子を産んだ。パラーシャラは彼女の処女性が永遠に失われないようにと祝福を与えたのち彼女から去って行った。彼女から生れた男の子はクリシュナ・ドヴァイパーヤナと名づけられてただちに成長し、やがてヴィヤーサとして知られるようになった。彼は母が彼のことを思い出した時にはただちに母の前に現われるという約束をした上で、修行のために森の中に入っていった。

マツヤガンディー(サティヤヴァティー)は相変らず父親の手伝いをしていたが、ある時、月種族の王シャーンタヌが狩のために森の中に入り、森いっぱいに広がっている彼女の身体から発する麝(じゃ)香の香をかいだ。王は森を歩きまわるうちに、この香が漁師の小屋にいるサティヤヴァティーから出てくるのをつきとめ、一目見るなり、彼女を恋するようになった。彼女は生れてくる子供を王位につけることを条件に結婚を了承した。王には最初の妻ガンガーとの

あいだに生れた王子ビーシュマがあったが、ビーシュマは事情を察して自分から王位を継ぐ権利を捨て、父の望みをかなえてやった。このようにしてシャーンタヌと結婚したサティヤヴァティーにはチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤの二子が生れた。チトラーンガダは幼くして死に、ヴィチトラヴィーリヤだけが成長し、カーシー王の娘アムビカーおよびアムバーリカーの二人と結婚した。しかし、ヴィチトラヴィーリヤも子供のないままで死んだので、種族が断絶することを恐れたサティヤヴァティーはパラーシャラとの子であるヴィヤーサを呼び出して、アムビカーとアムバーリカーの二人と無理やりに結婚させた。このニヨーガ婚によって、アムビカーから盲目のドリタラーシュトラ、アムバーリカーからパーンドゥが生れ、のちにこれら両者の子孫が対立して、クル族を二分する大戦争が始まることになるのである。(『マハーバーラタ』初編)。→ビーシュマ、シャーンタヌ、ヴィヤーサ、アムビカー

(二)カーニヤクブジャ王ガーディの娘で、バーガヴァタ派の僧リチーカの妻。

サティヤヴラタ Satyavrata (一)第七番目のマヌ(人間)、ヴァイヴァスヴァタの別名。

(二)アヨーディヤーの三王の一人で、サティヤヴラタ・トリシャンクと呼ばれる。凋落したアヨーディヤーの王国を昔日の繁栄にもどそうと努力した。ある落度によって、ヴァシシュタ仙の進言もあり、父親から追放されたサティヤヴラタは森の中でチャンダーラのような生活をしていたが、災難に見舞われたヴィシュヴァーミトラの家庭を救った。そこへもどって来たヴィシュヴァーミトラは彼に対する感謝の気持と、ヴァシシュタ仙に対する反感を表わすために、サティヤヴラタにアヨーディヤーの王位につかせた。こうして王統を継続することができ、この王統からラーマが出ることになった。

サーティヤキ Sātiyaki ヤーダヴァ族のヴリシュニ王朝の勇士で、クリシュナの友人の一人。またの名をユユダーナともいい、シニの子として生れた。パーンダヴァのユディシュティラ王の宮殿の一員となり、バーラタ戦争ではクリタヴァルマン、ビーシュマ、ドゥリヨーダナ、アシュヴァッターマンなどのカウラヴァ軍の勇士と戦い(『マハーバーラタ』ビーシュマ編)、ドリシュタディユムナがドローナに殺されそうになったところを救い(ドローナ編)、戦いが終ってからはハスティナープラで行なわれたユディシュティラ王の馬祀祭に参加した(馬祀祭編)。

(別名)シニパウトラ(シニの息子)、シャイネーヤ、(同)、シャイネーヤナンダナ、(同)、マーダヴァ(マドゥの子孫)、マーダヴァシンハ(マーダヴァ族のライオン)、ヴァールシ

ュネーヤ(ヴリシュニの子孫)、ヴリシュニクロードヴァハ(ヴリシュニ族の最上の人)、ヤドゥータマ(ヤドゥ族の最上の人)など。

サティヤドリティ Satyadhṛti シャラドヴァットの子、ガウタマ仙の孫。『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、彼と天上の水の精女ウルヴァシーとのあいだに生れたのがクリパとクリピーであるという。

サティヤバーマー Satyabhāmā 「真実の輝きをもつ女性」の意で、ヤーダヴァ族の王サトラージタの娘。クリシュナの妻の一人。彼女には、バーヌ、スバーヌ、スヴァルバーヌ、プラバーヌ、バーヌマット、チャンドラバーヌ、ブリハドバーヌ、アティバーヌ、シュリーバーヌ、プラティバーヌの一〇人の息子があった。彼女は夫とともに天界に昇り、夫にインドラ神の妻シャチーに属する神聖な木パーリジャータ樹を盗ませた(『ヴァーマナ・プラーナ』五・三〇)。→サトラージット

サティヤ・ユガ Satya-yuga →ユガ

サトラージット Satrājit あるいはサトラージタ。ヤーダヴァ族の王。ニグナの息子で、クリシュナの主要な八人の妻の一人であるサティヤバーマーの父。太陽神アーディティヤを崇拝した結果、光り輝く身体とスヤマンタカという宝石を与えられた。ある時、彼はその宝石をなくしてしまったが、クリシュナがそれを見つけて彼に返した。サトラージットはその返礼に自分の娘サティヤバーマーを妻としてクリシュナに与えた。サティヤバーマーには多くの求婚者があり、その中の一人シャタダヌヴァンは彼女を失ったくやしさのためにサトラージットを殺し、宝石スヤマンタカを奪い去った。しかし、彼は最後にはクリシュナに殺され、宝石はとりもどされた。

サナツジャータ Sanatsujāta 「永遠に美しいもの」の意で、ブラフマー神の意(こころ)から生れた息子の一人。

サハスラークシャ Sahasrākṣa 「一千の眼を持つ者」の意で、インドラの別名。

サハデーヴァ Sahadeva クル族の王パーンドゥの五王子のうちの末子。母はマードリー。『マハーバーラタ』の伝説によれば、盲目の兄ドリタラーシュトラにかわって王位についたパーンドゥは、呪いによって自分の妻に触れたとたんに生命を落とす定めにあった。そこで、王の第一夫人であるクンティーは、かつてドゥルヴァーサスという仙人によく仕え、その返礼として子供を産みたい時に唱えれば必ず望みがかなえられるマントラ(真言)を授かっていたので、このマントラを唱え神々を呼び出してユディシュティラ、ビーマ、アルジュナの三子を産んだ。次に、第二夫人マードリーのためにマントラを唱えてアシュヴィン双

神を呼び出すと、マードリーからはナクラとサハデーヴァの双生児が生れた。パーンドゥ王がマードリーの美しさに魅せられて思わず彼女を抱きしめ、呪いによって死んだ時、マードリーは夫の火葬の火の中に身を投げてそのあとを追った。残されたナクラとサハデーヴァはクンティーが引き取り、三人の兄たちとともにハスティナープラのドリタラーシュトラ王の宮殿で育てられた。カウラヴァとパーンダヴァの諸王子のなかでサハディーヴァはきわだって美しく、また武術の師ドローナの弟子のなかではナクラとともに剣術にすぐれていた。パーンダヴァが迫害を受けていた時も、クル族の大戦でもつねに長兄ユディシュティラに従順であった。サハデーヴァには五王子共通の妻ドラウパディーとのあいだにシュルタセーナ、マドラ王ディユティマーンの娘とのあいだにスホートラという子があった(初編)。

〔別名〕アーシュヴィネーヤ(アシュヴィン双神の子)、アシュヴィニースタ(同)、マードリープトラ(マードリーの子)、マードレーヤ(同)、ナクラーヌジャ(ナクラの次に生れたもの)、タントリパーラ(タンティの保護者)、ヤマプトラ(ヤマの子)など。→マードリー

サプタヴァドリ Saptavadhri 『リグ・ヴェーダ』の聖者。ある詩節には、彼が木のわなに手をつっこんで困っている時、アシュヴィン双神によって救われたと記している(五・七八・五―六)。

サプタシンダヴァ Saptasindhava 「七つの河」の意で、古くはガンガー(ガンジス)、ヤムナー、サラスヴァティー(サルスティ)、ストゥドリ(サトレジ)、パルシュニ、コルドヴリダー、アールジーキーヤー(ヴィパーサー)の七河をいい、『マハーバーラタ』では、ヴァスヴォーカサーラー、ナリニー、パーヴァニー、ガンガー、シーター、シンドゥ、ジャムブーナディーの七つを、また、ガンガー、ヤムナー、プラクシャガー、ラタスター、サラユー、ゴーマティー、ガンダキー河をあげている。『ラーマーヤナ』では天上の河であったガンガーがバギーラタ王によって地上に導かれ、シヴァ神がこれをうけてその額から流れ落ちる七つの流れとし、ナリニー、ハラーディニー、パーヴァニーの三河が東に流れ、チャクシュ、シーター、シンドゥの三河が西に、バギーラティーと呼ばれるガンジス河自身が南に向って流れているとしている。

サプタマートリカー Saptamātṛkā 「七母神」の意味で、ブラフマーニー、マヘーシュヴァリー、カウマーリー、ヴァイシュナーヴィー、ヴァーラーヒー、マーヘーンドリー、チャームンダーの七女神をいう。ブラフマーニーはブラフマーの妻で、黄色い身体をして白鳥に乗り、マヘーシュヴァリーはシヴァ神の妻でシヴァと同じように牛に

乗っており、処女神カウマーリーはクマーラのパートナーで孔雀に乗っている。ヴァイシュナーヴィーはヴィシュヌの妻で青色の身体でガルダ鳥に乗っている。ヴァーラーヒーはヴィシュヌのアヴァターラ（化身）としてのヴァラーハ（野猪）の妻で、夫と同様に野猪の顔をし、黒色の身体で水牛に乗っている。マーヘーンドリーはインドラーニーともいわれ、インドラの妻として金色の身体で象に乗り、チャームンダーはヤマの妻で、骨ばかりの身体をしてバンヤンの樹の下に住み、死体の上に坐り、その乗物はフクロウである。七母神はチャンディーを助けて戦うとされるが、その源流は古代の母神崇拝であるとされ、乳児を抱いた柔和な母としての彫像が多い。

サプタルシ　Saptarṣi　七聖仙→リシ

サーヤナ　Sāyana　『リグ・ヴェーダ』の註釈家。普通、尊称をつけてサーヤナーチャーリヤという。一四世紀後半、ヴィジャヤナガル王ハリハラ二世の大臣だったという。

サーラスヴァタ　Sārasvata　サラスヴァティー河を神格化したサラスヴァティー女神の息子として生れた聖仙。ある時、大旱魃が起こったが、母サラスヴァティーは魚を食べさせて息子を養った。他のバラモンたちが飢えに迫られてヴェーダの知識を失い、ヴェーダそのものも散逸した時、サーラスヴァタだけが一人ヴェーダの知識を保っていたという。

サラスヴァティー　Sarasvatī　ブラフマー神の妻。学問、智慧、弁説、音楽の女神。語源的にはサラス saras（水）にヴァティー（vatī、所有をあらわすヴァット vat の女性形）を加えたもので、「水をもつもの」「優美なもの」の意味であり、『リグ・ヴェーダ』においては河の名であった。『リグ・ヴェーダ』に記される二五の河の中でサラスヴァティーは最もよく知られたものであり、「最高の母、河の中の最上者、女神中の最上の女神」（二・四一）ともいわれる。河の女神としてのサラスヴァティーは作物を実らせて富をもたらし、水の浄化作用が重視されて川岸で行なわれる祭式の保護者として崇拝されるようになった。ブラーフマナ文献ではヴァーチュ vāc（言葉）と同一視され、後世には学問、智慧、弁説、音楽をはじめとする芸術の女神とされるようになった。サンスクリット語とそれを書きあらわすデーヴァナーガリー文字の作者ともいわれる。プラーナ文献では、ブラフマー神の三人の妻、サラスヴァティーとサーヴィトリーとガーヤトリーについて記しているが、『マツヤ・プラーナ』では、これらの三人は同一人物であるとしている。

ブラフマーは自分自身の光輝から一人の女性をつくり出



サラスヴァティー女神

した。この女性がシャタルーパー、サーヴィトリー、ガーヤトリー、ブラーフマニーなどという名で知られるようになった。ブラフマーは自分がつくり出したこの素晴しい娘を見て夢中になった。それに気づいたサラスヴァティーが父親のまなざしを避けるために右の方に遠ざかると、ブラフマーの体からもう一つの顔が現われ、彼女が左の方に回り、父の背後に隠れると、さらに二つの顔が現われ、彼女が空中に飛び上がると第五の顔が現われた。もはや逃れられないと分り、彼女はブラフマーと結婚した。彼らは仲むつまじく一〇〇年を過し、人類の祖となったマヌを産んだ。マヌはスヴァヤムブヴァともヴィラートとも呼ばれた。

サラスヴァティーは左手に本、右手に数珠を持つ姿や、さらに多くの腕があって、縄やヴィーナ（琵琶）を持つ姿で表わされる。一般には、蓮華の花の上に坐り、二本の腕でヴィーナを弾く姿のものが家庭内に置かれていることが多い。

仏教では大弁天、弁才天、妙音天、美音天、弁天、大弁才功徳天と訳され、音楽、弁才、財福、智慧の徳がある天女形で吉祥天とともに信仰されている。密教では胎蔵界曼荼羅外金剛部院に琵琶をひく図がある。

〔別名〕バーラティー、ブラーフミー、プートカーリー、シャーラダー、ヴァーギーシュヴァリー、マハーヴィディヤー、カーマデーヌ、ヴィージャガルバ、ダネーシュヴァリーなど。

サラニユー　Saranyū　トヴァシュトリの娘。彼女の双児の兄弟はトリシラス。父親によってヴィヴァスヴァットの妻とされたが、結婚式がすむと人間としての姿を消した（『リグ・ヴェーダ』一〇・一七）。『ブリハドデーヴァーター』（六・一六二―七・七）によれば、ヴィヴァスヴァットとのあいだにヤマとヤミーの双生児をもうけた後に、彼女は自分によく似た女性をつくり、双生児の世話をまかせて

姿を隠した。ヴィヴァスヴァットはそれと知らずに、この代理の女性とのあいだにマヌをもうけた。サラニユーは雌馬となって草を食んでいたが、これを知ったヴィヴァスヴァットは種馬に姿を変え彼女に近づいた。彼女を見出した興奮で彼の精液が草の上にこぼれると、雌馬となったサラニユーはそれをただ鼻でかいだだけで身籠り、ナーサティヤとダスラが生れた。↓ヴィヴァスヴァット

サラマー　Saramā　㈠インドラの使者の役をした雌犬の名。死者の道を守る、ヤマの国の四つ目をした二匹の番犬の母（『アタルヴァ・ヴェーダ』四・二〇、一八・二）。この犬は悪魔パニに盗まれた牛を奪い返して来たといわれる。サラマーは暁紅神ウシャスをあらわし、盗まれた牛は夜に奪い去られた太陽の光をあらわすと見られている。

㈡ランカーの魔王ラーヴァナの弟であるヴィビーシャナの妻。ラーマの妻シーターにつきそい、彼女がラーヴァナに捕われていたときにも親切に遇した。

㈢『バーガヴァタ・プラーナ』では、サラマーはダクシャの娘の一人で、野性の動物の母といわれる。

サーラメーヤ　Sārameya　インドラの使者の役割を果した雌犬サラマーの二匹の子。これらの犬は、それぞれ四つの目を持ち、死者がヤマ神のもとに行く道の番犬であり、ギリシャ神話のヘルメスに比較される。↓サラマー

サルミシュター　Sarmiṣṭā　ダーナヴァのヴリシャパルヴァンの娘。ヤヤーティ王の第二の妻、プルの母親。

サンジャヤ　Saṃjaya,Sañjaya　クル族の王ドリタラーシュトラの大臣、戦車の御者。バーラタ戦争が起こる前にはカウラヴァ側の大使としてパーンダヴァに行った。聖仙ヴィヤーサによって、傷つけられることのない者とされ、バーラタ戦争の戦場で起こったすべての経過を見て、老いた盲目の王ドリタラーシュトラに戦いの日々の報告をする役割を与えられた。『マハーバーラタ』の第六編「ビーシュマ編」以下の戦いの描写は目撃者としてのサンジャヤの口から述べられた形式をとっている。↓ドリタラーシュトラ

サンジュニャー　Sañjñā,Saṃjñā　太陽神スーリヤの妻。『マハーバーラタ』（初編）ではトヴァシュトリの娘とするが、『ヴィシュヌ・プラーナ』（三・二）などのプラーナではヴィシュヴァカルマンの娘とする。夫とのあいだにマヌ（ヴァイヴァスヴァタ）、ヤマの二人の息子と一人の娘ヤミーとをもうけた。しかし、夫スーリヤの光があまりにも強すぎて耐えられなくなり、彼女は自分の代理をつとめるチャーヤー（「影」の意）という女性をつくり出したのち、森の中の隠れ家へ入った。チャーヤーはサンジュニャーと非常によく似ていたので、スーリヤは代理とは知らずに彼女にシャナイシュチャラ（あるいはシャニ）、別のマヌ（サーヴァルニ）、タパティー（タパティー河の神格化）の三人の子を産ませた。何事なく時が過ぎたが、チャーヤーが激しくヤマを非難しているのを見て、スーリヤは真実を知り、森の中でサンジュニャーが雌馬となって草を食んでいるのを見るや自分も種馬となって彼女と交わり、アシュヴィン双神とレーヴァタが生れた（『マハーバーラタ』教訓編）。スーリヤはサンジュニャーをともなって天にもどったが、ヴィシュヴァカルマンは娘が再び夫のもとを離れないように太陽（スーリヤ）の光をけずり取り、それでヴィシュヌの円盤、シヴァ神の三つ叉の鉾、カールッティケーヤの槍などの神々の武器を作った。また、その余りでコナーラクの太陽寺院を造ったといわれる（『ヴィシュヌ・プラーナ』三・二、『ハリヴァンシャ』四一、『バヴィシュヤ・プラーナ』四・七）。↓スーリヤ、ヴィシュヴァカルマン

サンディヤー　Sandhyā　「日没後の薄明り」の意で、ブラフマー神の娘、シヴァ神の妻。『シヴァ・プラーナ』によれば、ブラフマーは娘のサンディヤーに暴力をふるったので、彼女が雌鹿の姿となって逃げると、ブラフマーも雄鹿に姿を変え追いかけた。シヴァ神はこれを見て矢を射かけ鹿の首を落とすと、ブラフマーは態度を改めシヴァ神を崇拝した。そこで矢は天空の第六星座に、雄鹿の首は第五のムリガシラス（鹿の頭）星座にとどまっているといわれる。

サンパーティ　Sampāti　ダシャラタ王の友人としてラーマを助けたハゲ鷹ジャターユスの弟。ヴィシュヌ神の乗る聖鳥ガルダの子。あるいは、アルナとシュエーニーの子ともいわれる。猿の英雄ハヌマーンがラーマを助けて南方へと軍を進めるうちサンパーティに出会った。サンパーティはハヌマーンに、自分は昔、兄と競争して太陽まで昇ろうとしたが、翼が焼けてしまったので仕方なくヴィンディヤ山をさまよっているうちに、ランカーの羅刹ラーヴァナがラーマより奪ったシーターをランカーに連れていくのを見たと言い、ランカーの位置を教えた（『ラーマーヤナ』キシュキンダー編）。↓ジャターユス

シヴァ　Śiva　ヒンドゥー教の三大神の一つ。ヴィシュヌと並んでヒンドゥー教徒によって熱烈な信仰の対象とされる神。シヴァはもともと「吉祥」の意味で、『リグ・ヴェーダ』においては暴風神ルドラの尊称として使われた形容詞であった。シヴァ神はこのようなシヴァという言葉によって形容されるルドラ神に起源をもつと見られている。ルドラは、『リグ・ヴェーダ』においては、つねに強烈無比の破壊力をもつものとして表現され、マルト神群の父と呼ばれる（二・三三）。自然現象としての暴風雨は、雷光・雷鳴を伴って樹木や家屋を破壊し、人間を死にいたらしめる。



シヴァ神

ルドラのこのような性格は、のちのシヴァ神の一つの性格を形成している。

他方、ルドラは医療の恩恵を施すものとされ(二・三三)、賢明で寛容な神として称讃される。ルドラは、『アタルヴァ・ヴェーダ』(一・二)ではバヴァ、シャルヴァ、パシュパティ、ウグラ、マハーデーヴァ、イーシャーナ、ブータパティと呼ばれ、シヴァ神の種々の性格が暗示されている。

ルドラのシヴァ神としての神名が明確になるのはブラーフマナ文献においてであり、さらにこのシヴァがヒンドゥー教の主神となって行く過程にはインドの土着的なさまざまな要素が影響しているといわれる。ヒンドゥー教の主神としてのシヴァは、文献的には二大叙事詩、プラーナにおいてであり、『リグ・ヴェーダ』以来の恐怖と恩恵の二面のうえに、土着的な要素が加えられて一般民衆の信仰をあつめることになった。ヴィシュヌ神がその時々の必要に応じてさまざまな化身を現わすのに対して、シヴァの種々の性格は多くの別名で表わされる。一般の民衆は、それぞれの名によってシヴァ神を恐れ、あるいは親しみ、尊崇したのである。シヴァは暴風神ルドラに起源をもつところから、その破壊力、恐怖を与えるものという性格がまず重視され、けものの皮を身にまとっているところから「皮の衣服を身につけたもの」(クリッティ・ヴァーサス)といわれ、槍・弓・斧・三つ叉の戟を武器として悪魔を滅ぼし、その城塞を破壊する。シヴァは世界期の終末に「万物を破壊するもの」(ハラ)であり、死をつかさどる「時」(カーラ)である。恐ろしい形相で「蛇を首飾りとするもの」(ナーガクンダラ)とも「髑髏を首にかけるもの」(ムンダマーラー)とも、墓地に住んで死体を焼いた灰を身に塗っているともいわれる。シヴァは「恐ろしい殺戮者」(バイラヴァ)であり、「悪魔の王」(ブーテーシュヴァラ)である。しかし、ヒンドゥー教の考え方によれば、世界は創造・持続・破壊を繰り返すものであり、その意味で破壊は再生につながり、シヴァは生殖・生産・再生をつかさどる「偉大な神」(マハーデーヴァ)、「家畜の主」(パシュパティ)、「恩恵を与えるもの」(シャンカラ)と呼ばれ、このような生殖・生産を司る面はとくにリンガ(男性性器)の形で崇拝される。このほか「五つの顔をもつもの」(パンチャーナナ)、「青いのどをもつもの」(ニーラカンタ)、「三つの眼をもつもの」(トリローチャナ)ともいわれ、ヒマーラヤのカイラーサ山で激しい苦行を行なう「偉大な苦行者」(マハータパス)、天から流れ落ちるガンジス河を頭で支える「ガンジス河を支えるもの」(ガンガーダラ)、「踊りの主」(ナタラージャ)などといわれ、『リンガ・プラーナ』(九八・二七―一五八)では一一一六の別名をあげている。それぞれの別名(異名)はシヴァの性格をあらわすとともに、それぞれの神話にもとづくものであり、それらのシヴァ神話のうちの重要なもの、よく知られているもののみをとりあげてみよう。

㈠リンガの中から現われたシヴァ。世界周期の終わりの時、ヴィシュヌ神が水底で眠っているところへブラフマー神が現われ、自分は世界の創造者であるといい、ヴィシュヌに「汝は誰か」とたずねると、ヴィシュヌも「自分は世界の創造者である」と答えたので、争いとなった。その時、突然、彼らの前に火炎を放った巨大なリンガが現われた。ブラフマーとヴィシュヌがその偉大さを認め、讃歌を唱えると、それに満足して千手千足で三つの眼をもつシヴァ神が巨大なリンガの中から現われた(『リンガ・プラーナ』一七など)。シヴァ神のリンガはヒンドゥー教寺院の本尊として祀られるだけではなく、このようにリンガの中から現われるシヴァを表現した彫象もある。



苦行者の姿をしたシヴァ神

㈡ヒマーラヤ山中で苦行するシヴァ。シヴァ神の最初の妻はダークシャーヤニー、別名サティーといったが、彼女は父親がシヴァ神を尊崇しなかったために焼身自殺し、妻を失ったシヴァはヒマーラヤ山にこもって苦行に専心した。ヒマヴァットの娘パールヴァティーとして再生したサティーは苦行するシヴァ神にひたすら仕えていた。この時、魔神ターラカが神々を苦しめていて、神々はこの魔神を倒すことのできるのはシヴァにさずかる子供だけであることを知り、シヴァが苦行を止めてパールヴァティを妻として子供をもうける気になるようにと、愛の神カーマデーヴァを彼のもとにつかわした。カーマはシヴァに対して愛の矢を放とうとしたが、苦行を妨害された彼は立腹して第三の眼から火炎を放ち、カーマ



サティーの屍体を肩にするシヴァ神

を焼き殺してしまった。そのち、シヴァはパールヴァティーと結婚し、クマーラ、あるいはスブラフマニヤという息子をもうけ、この子はターラカを殺し、神々の世界に平和がおとずれた（『リンガ・プラーナ』一〇一）。

㈢ガンジス河の降下を頭で受けとめるシヴァ。サガラ王の六万人の息子の遺灰を浄めるために、その孫にあたるバギーラタ王が天上のガンジス河を地上に降下させたとき、シヴァはその激しい流れを髪の毛を広げて受けとめた。↓ガンガー、バギーラタ

㈣恩恵を授けるシヴァ。シヴァ神が多くの者に恩恵を授ける話があり、恩恵を受けた者はシンハヴァクトラ、ルクミー、バーナ、スダクシナ、サールヴァ、ヴリカースラ、ラティデーヴィー、インドラジット、ブリグ、ガーンダーリー、プラバンジャナ、シュヴェータキン、ジャラーサンダ、バーナ・アスラ、マンカラ、サガラ、バギーラタ、アムバー、ヴィシュヌ、スカンダなど。

㈤魔神を退治するシヴァ。シヴァ神が魔神を退治する物語で、シヴァによって、ジャランダラ、アンダカなど多くの魔神が退治された。

㈥踊るシヴァ。シヴァはナタラージャ（踊りの主）、ナテーシャ（踊りの神）ともいわれ、シヴァ神の本来的にもっている狂暴さ、破壊の力、それを経ておこなわれる再生・創造という両極端の性格も最もよくあらわしているのがナタラージャであるといわれる。『ナーティヤ・シャーストラ』（四）によれば、シヴァ神は夕暮れに一〇八種の舞踊を行



シヴァ神，パールヴァティー女神と彼らの息子カールッティケーヤ



愛の神カーマを眼の光で焼き殺すシヴァ神

なったという。ナタラージャとしてのシヴァの神像はインド各地で見られる。

㈦シヴァ神の遊戯（シヴァリーラー）。プラーナ文献では、シヴァ神の遊戯として六四種の行為をあげている。これはシヴァ神についてのさまざまな物語の内容を六四種に整理したものと見られる。(1)デーヴェーンドラを罪から救ったこと。(2)インドラの乗り物である象のアイラーヴァタを罪から救ったこと。(9)彼の妻を喜ばせるために七つの海を近くまで持って来たこと。(11)ウグラという名の息子をつくり出したこと。(16)マハルシ（偉大な聖仙）にヴェーダを教えたこと。(22)遊行者ブッダが送った象を殺したこと。(24)さまざまな舞踊を踊ったこと。(28)遊行者ブッダが送った蛇の毒を抜いてしまったこと。(31)パーンディヤ王に決して空にならない財布を与えたこと。(37)チョーラ王を破ったこと。(47)カンジャリータ鳥にムリティユンジャヤのマントラを教え、カラスの攻撃から救ったこと。(56)北方のハーラースヤを訪れたこと。(64)マドゥラに証拠として木やシヴァリンガを与えたこと（『ハーラースヤマーハートミヤ』四）。

『デーヴィー・バーガヴァタ』（八―九）ではシヴァ神の妻としてガンガーとパールヴァティーの名をあげ、パールヴァティーの別名としてウマー、カーティヤーヤニー、ガウリー、カーリー、ハイマヴァティー、イーシュヴァリー、

シヴァー、バヴァーニー、ルドラーニー、シャルヴァーニー、サルヴァマンガラー、アパルナー、ドゥルガー、ムリダーニー、チャンディカー、アムビカー、アーリヤー、ダークシャーヤニー、ギリジャー、メーナカートマジャー、チャームンダー、カルナモーティー、チャルチカー、バイラヴィーを記している。シヴァ神はマハーメール山の頂上に住んでいる。メール山頂には中央にブラフマー神の都マノーヴァティー、その東側にインドラ神のアマラーヴァティー、南東の方角にはアグニ神のテージョーヴァティー、南にはヤマ神のサンヤマニー、南西にはニルリティのクリシュナーンジャナー、西にはヴァルナ神のシュラッダーヴァティー、北西にはヴァーユ神のガンダヴァティー、北方にはクヴェーラのマホーダヤーがあり、その北東にはシヴァ神の都ヤショーヴァティーがあるといわれる。シヴァとその妻パールヴァティーとのあいだにはスブラフマニヤとガナパティ（あるいはガネーシャ）という二人の息子が生れた（↓ガーネシャ）。

シヴァはカパルダと呼ばれる、編んではあるがもつれている髪の毛をしていて、そのことによってカパルディンと呼ばれる。しばしばその髪の毛は苦行者のような巻髪の形をしていて、三日月と三つ叉の戟が飾ってあり、ときにはその髪の毛の中にブラフマーの第五の頭、ガンガー女神も見られる。彼は額に第三の火の眼を持っており、このことからトリネートラ（三つの眼をもつ者）、アグニローチャナ（火の眼をもつ者）とも呼ばれる。すべてを破壊し滅ぼすものとしてのシヴァは、つねにカトヴァーンガと呼ばれる棍棒（シューラ）を手にしている。もう一つの棍棒の名をピナーカということから、彼はピナーカパーニ（ピナーカを手にするもの）とも呼ばれる。彼は二本、四本、八本、あるいは一〇本の腕をもつ姿で表現される。彼とその乗り物の雄牛ナンディンは共に白色で表現され、この白色は悪を滅ぼすための正義を表わすといわれる。シヴァは虎の皮を身にまとい、蛇が首飾りや腕輪として使われている。

プラーナはこのことに関して次のような物語を記している。ある時、聖者の妻たちがシヴァ神に讃歌を捧げ、これに満足したシヴァ神が乞食の身なりで彼らの前に現われたことがあった。立腹した聖者たちはその乞食を殺した。そして彼らが掘った穴の中から虎が現われると、シヴァ神は虎を殺し、皮をはいで身につけた。虎についで鹿が現われると、シヴァはそれを左手に持った。次に穴の中から赤熱した鉄の棒が現われると、彼はそれを武器として手に持った。最後に蛇が現われると、シヴァはそれを身に巻きつけた。蛇（ナーガ）を耳環にしていることによって、彼はナーガクンダラとも呼ばれる。

〔別名〕アジャ（不生）、アムビカーパティ、アナンタ、バフルーパ（多くの形をもつ者）、マヘーシュヴァラ（大神）、ギリーシャ（山の主）、シューラパーニ（棍棒を手にした者）、ドゥルヴァ、カタヴァーンガダーリン、マハーヨーギン（偉大な修行者）、マヒシャグナ（悪魔マヒシャを殺す者）、ヨーゲーシュヴァラ、サルヴァヨーゲーシュヴァラ（一切の修行者の主）、ウマーパティ（ウマーの夫）など、叙事詩やプラーナでは殆んど無教といってもよいほどの別名があげられている。

ジヴァーラームキー Jvālāmukhī 「火の口をもつもの」の意で、火山のこと。あるいは、地下の火が出てくる場所のこと。伝説によれば、シヴァ神の妻サティーがこれを作り出し、そこに身を投げたところという。

シヴィ Śivi あるいはシビ。ガンダーラに近いウシーナラ国の王の子。『ハリヴァンシャ』に記される王統譜ではパンジャーブの諸族は多くウシーナラの系統であるといわれる。シビ王の信心と我が身を犠牲にして供養する宗教的な態度は多くの伝説に語られている。『マハーバーラタ』の中でマールカンデーヤ仙が語る伝説によれば、ある時、鷹の姿をしたインドラに追われた一羽の鳩がシビ王のところに逃げ込んで保護を求めた。インドラ神は鳩を渡さないのであれば、その鳩と同じ重さの王自身の肉をよこすように要求した。シビ王はためらうことなく自分のももの肉を切り取って秤にかけたが、鳩の方が重かったので更に自分の肉を切り取った。しかし、なかなか鳩の重さと等しくならないので、ついには自分の身体全体を鳩のかわりにインドラ神に与えてしまった。

ヴィシュヌ派の伝説によれば、また、ある時、ヴィシュヌ神はシビ王の信心を試そうとしてバラモンの姿をして王の前に現われ、王の息子ヴリハドガルバを犠牲祭の供物として捧げるよう求めた。シビ王は言われた通りに自分の息子を殺してヴィシュヌ神に捧げた。ヴィシュヌ神は王の厚い信心と献身をよしとし、王子の生命をよみがえらせた。

このシビ王の物語は仏教経典にも取り入れられ、『増一阿含経』（二四・二）を経て『ジャータカ』（本生経、四九九）などで仏陀の前生物語の一つとされた。この場合、シビ王は前生のボーディサッタ（菩薩）であり、我が身を犠牲にして一羽の鳩を救ったという功徳によって今生で仏陀となったとされる。↓インドラ

シェーシャ Śeṣa あるいはシェーシャナーガ。ナーガ（蛇）族の王。パーターラと呼ばれる下界の主。一〇〇〇の頭をもち、世界創造のあい間にヴィシュヌを上に乗せて眠らせる。彼は世界を支えるものとも、七つのパーターラ（地獄）を持ち上げるものともいわれ、彼があくびをす

ると地上に地震が起こる。カルパ（世界周期）の終わりの時は、彼は有毒な火を吐き出してすべてのものを滅し尽くす。神々が乳海を攪拌してアムリタ（不死の霊水）を取り出そうとした時、シェーシャ（あるいはヴァースキ、この両者は一般には同一視される）を縄とし、マンダラ山を軸として作業を行なった。彼は、アナンタ（無限なるもの）と呼ばれ、永遠の生命のシンボルとされる。プラーナ文献ではシェーシャはカシュヤパ仙とその妻カドルーの子であるといわれ、また、バララーマの化身ともいわれる。彼の頭被（コブラのからかさ状の頸部）はマニドヴィーパ（マニ宝の島）、彼の宮殿はマニビーッティ（マニ宝の壁で囲まれたところ）、あるいはマニマンダパと呼ばれる。

シカンディン　Śikhaṇḍin　パンチャーラ王ドルパダの息子。カーシー王の娘アムバーの生れ変わりとされ、シカンディーあるいはシカンディニーという女性として生れたのであるが、ヤクシャと性を交換して男性となったともいわれる。カーシー王の娘アムバーは自分を不幸に落とし入れたクル族の長老ビーシュマを怨み、彼への復讐を誓って世を去ったが、ヴィシュヌ神から来世はパンチャーラ王の子として生れ、ビーシュマに対する怨みを晴らすことができるという恩恵を与えられていたため、ドルパダの子として生れた。シカンディンはドリタラーシュトラの子の百王子たちやパーンドゥ王の子である五王子とともに、クル族の軍師ドローナのもとで武術を習い、クル族の大戦争（バーラタ戦争）ではパーンダヴァ側に立って戦った。戦いにおいて老雄ビーシュマにはシカンディンと戦う意志はなく、これを知ったパーンダヴァは、シカンディンをビーシュマに対抗させ、アルジュナが彼のうしろに隠れてビーシュマに矢を放ち、四方八方から襲いかかってこの老雄を倒した。戦争もパーンダヴァ軍優勢のうちに終りに近づき、わずかに三人だけ生き残ったカウラヴァの勇士たちの中で、ドローナの子アシュヴァッターマンは、ふくろうが眠っている鳥を皆殺しにしているのを見てヒントを得て、夜中にパーンダヴァの陣地に侵入し、ドリシュタディユムナをはじめドラウパディーの五人の息子をも殺した。シカンディンもこの時に殺された（『マハーバーラタ』夜間襲撃編）。

〔別名〕ビーシュマハントリ（ビーシュマを殺す者）、ドラウパデーヤ（ドルパダの子）、ドルパダートマジャ（同）など。→アムバー、ビーシュマ

シシュパーラ　Śiśupāla　チェーディ国の王。クリシュナの父ヴァスデーヴァの妹シュルタデーヴァーとチェーディ王ダマゴーシャとのあいだの子。したがってクリシュナにとっては甥にあたるが、シシュパーラの妻となることになっていたヴィダルバ国王の娘ルクミニーをクリシュナが奪って妻にしたため、両者は敵対関係にあった。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、シシュパーラは生れた時、三つの目と四本の手を持っていたので、この醜く恐ろしい姿を見て両親はこの子を棄ててしまおうとした。その時、「この子は成長して強大な力を持つ者となるであろう。彼を殺すことのできる人は唯一人で、その人はすでにこの世に生れてきている。シシュパーラがその人を見た時、第三の眼はなくなり、その人のひざに坐れば二本の手はなくなるであろう。」という声が聞えた。このことを聞きつけて近隣の多くの王たちがやって来た。父のダマゴーシャが自分のひざの上に乗せたが、シシュパーラの身体には何の変化も起こらなかった。ある日、クリシュナとバラバドラがこの子を見にやって来た。母親がシシュパーラをクリシュナのひざのうえに坐らせると、三番目の眼と二本の手はたちまち消えうせた。母親は涙を流してこの子を殺さないで欲しいとクリシュナに頼むと、彼はシシュパーラが罪を犯しても一〇〇たびは許してやろうと約束した。しかし、パーンダヴァの長子ユディシュティラ王が世界の王となる即位式を行なった時、招かれた諸国の王たちに名誉の贈物が分ち与えられることになり、ビーシュマの提案によって第一の贈物はクリシュナに与えられることになったが、シシュパーラはこれに反対した。そのために激しい争いが起こり、シシュパーラはついにクリシュナによって倒された（集会編）。→ルクミニー

シーター　Sītā　ヴィデーハの王ジャナカの娘でラーマの妻。「田のあぜ」の意で、『ヴェーダ』においては、農業と実りを支配する女神として讃歌を捧げられていた。『ラーマーヤナ』では、ジャナカ王が田を耕している時に田のあぜから生れて来た女の子がシーターで、王の娘として育てられたと記されている。このことから、シーターはアヨーニジャー（母胎から生れたのではない女性）とも呼ばれる。プラーナ文献では、シーターはヴィシュヌ神の妻の一人ラクシュミーの化身ともいわれる。

シーターを自分の娘として育てた王は、彼女が美しく成長すると、自分のもつ強弓を引くことのできたものにシーターを与えるという布告を出した。多くの王子たちがやって来てそれを試みたが誰も引くことができなかった。そこへアヨーディヤーのダシャラタ王の王子ラーマが来てその弓を引くと、弓は雷鳴とともにまっ二つに折れてしまった。王は喜んでその娘をラーマに与えた。こうしてシーターはラーマの唯一人の妻として幸福に暮らしていたが、ダシャラタ王の妻カイケーイーの奸計によってラーマが一四年間の追放に処せられた時、彼女も夫に従って宮殿を出た（『ラーマーヤナ』アヨーディヤー編）。



シーターの自選式で武技を競うラーマ

彼らがダンダカの森に住んでいた時、妹のシュールパナカーにそそのかされたランカーの魔王ラーヴァナはこの森に攻め込み、鬼神マリーチャの助けでシーターをその夫から引き離し、奪い取ってランカーに連れ去った。シーターがラーヴァナに連れ去られるのを見て、木々も山々も嘆き悲しみ、「もし、ラーヴァナがラーマの妻シーターを奪い去るならば、もはや正義は存しない。真実は存しない。罪のない者は存しない。」(三・五二・三四〜九)と訴えた。ラーヴァナはランカーの自分の後宮にシーターを入れ、自分の富や力を示して彼の妻となるよう説得した。しかし、シーターは断固としてこれをしりぞけ、貞節を守った。ラーヴァナは、もし彼女が一二ヵ月のあいだに自分の言うことをきかないならば、その時は料理人に彼女の骨を砕かせて食ってしまうとおどかし、シーターを岩窟に連れて行き、羅刹女に厳重に監視させた(森林編)。

ランカーに捕えられているシーターのところに最初にラーマが救い出しに来ることを伝えたのは猿の勇士ハヌマーンであった。やがて侵攻して来たラーマの軍勢と羅刹たちとのあいだに激しい戦いが行なわれ、ついにラーヴァナは死に、シーターは救出された。しかしラーマは、すべての猿と羅刹たちの前で他の男性の膝に坐り、他の男性の好色の目で見られた妻をもはや自分の妻として受け入れることは出来ないとして彼女を離婚した。シーターはラーマの不当な嫌疑に愁嘆の言葉を述べ、ラクシュマナに薪を積み上げてもらって燃えさかる火の中に身を投げ入れた。その時、火の神アグニが現われ、火の中からシーターを抱きおこし、シーターがラーヴァナの宮殿にあっても常に純潔で無垢であったことを証明した(戦闘編)。

『ラーマーヤナ』の終末編(後世の付加と推定されている)では、さらにシーターがラーマに疑われる物語を語っている。この物語によれば、アヨーディヤーにもどったラーマは、一たび誘拐されてラーヴァナの後宮にあったシーターを彼が受け入れたのは国中の女性の道徳によくない影響を与えるのではないかという人々の噂を耳にした。つね



シーター、火の中に身を投げて潔白を証明した後に、ラーマと再会する。

に模範的な王であることを望むラーマは、弟のラクシュマナにシーターを森の中に棄てさせた。森の中をさまようちに、彼女は聖仙ヴァールミーキの小屋にたどりつき、ここでしばらく過ごすうちにクシャとラヴァという男の双生児を産んだ。二人の子は成長すると詩聖ヴァールミーキの弟子となり、ラーマが催した馬祀祭の時に師の作った『ラーマーヤナ』を朗詠した。ラーマはクシャとラヴァがシーターの子であることに気づいた。ヴァールミーキは、シーターは純潔であり、クシャ・ラヴァの双生児はラーマの本当の子であると宣言したが、ラーマはまだ満足せず、シーター自身で誓言することを望んだ。シーターがこれに対して、「地上の女神よ、もし私がラーマ以外のいかなる男性にも心を寄せなかったことが真実なら、御身の腕を開きたまえ」と言うと、母なる地神がそこに現われ、シーターを抱くとそのまま地中深くに消え去った。ラーマがシーターを返してくれるよう祈っても無駄であった。まもなくラーマは国の支配権をクシャとラヴァに譲り、天上に昇った。

〔別名〕ブーミジャー(大地から生れた女)、ダラニスター、パールティヴィー(大地の娘)。↓ラーマ、ラーヴァナ

シータラー　Sītalā　天然痘の女神。シータラーとは「寒い、震える」という意味で、天然痘にかかって高熱におかされる状態を表わしている。この女神は、現在でもベンガ

ル地方で崇拝されており、南インドのタミル人はマーリヤンマイ（死の母）という。

シッダ **Siddha** ㈠大地と太陽との間の空間に住むといわれる半神的存在。八万八〇〇〇を数えるといわれる。㈡修行によって八つのシッディ（超人的な能力）を獲得し、精神的な完成に達した行者（ヨーギン）の名称。歴史的には、生死を越えて永遠の生命を求めた古代のムニ（聖者）やリシ（聖仙）を継承している。真のシッダは生きている間に解脱し、その身体は永遠にヤマ神の支配をうけず、人々に教えを説き続けるといわれる。偉大な聖仙アガスティヤは何百年のあいだ元気で活動を続け、現在でも神殿の中にいて、そこからシッダたちの教化活動を見守っていると信じられている。超人的能力を持つとされるシッダはマハーシッダと呼ばれ、呪術師として扱われることもある。シヴァ教徒のあいだでは、シヴァ神は最高のシッダ（アーディナータ）であり、すべてのシッダはこの最高神としてのシッダの化身であるとされる。

シニーヴァーリー **Sinīvālī** 新月を人格化した月の女神。新月が昇って目に見えない状態を表わすという。また月の他の三つの状態からクフー、アヌマティ、ラーカーの三女神が立てられ、四女神とも出産をつかさどる。

シャイビヤ **Śaibya** シビ国の王。バーラタ戦争においては、シャイビヤとカーシー王はパーンダヴァの側に立ち、パンチャーラ王ドルパダの子ドリシュタディユムナの軍を助けた（『マハーバーラタ』ビーシュマ編）。

シャウナカ **Śaunaka** シュナカの子で、グリッツァマダの孫に当る聖者。『ブリハド・デーヴァター』の作者、『アタルヴァ・ヴェーダ』の師といわれ、その弟子にアシュヴァラーヤナがいる。

ジャガッドガウリー **Jagadgaurī** 「世界で最も輝かしい女性」の意で、シヴァの神妃パールヴァティーの別名。→パールヴァティー

ジャガッドダーリー **Jagaddhārī** あるいはジャガッドダートリー。「世界を支える者」の意で、シヴァの神妃パールヴァティー、あるいはサラスヴァティーの別名。→パールヴァティー、サラスヴァティー

シャーカリヤ **Śākalya** 『ヴェーダ』の作者の一人。文法家。ヤースカの前の時代の人。別名はヴェーダミトラ、デーヴァミトラ。

ジャガンナータ **Jagannātha** 「世界の主」の意で、ヴィシュヌ神＝クリシュナのこと。ジャガンナータとしてのクリシュナはとくにベンガル地方で崇拝され、オリッサ州プリーのジャガンナート寺がその信仰の中心となっている。四大聖地の一つであるプリーはジャガンナート寺を中

心に成立しており、この寺院には木製のジャガンナータの像、彼の兄弟のバララーマ、妹のスバドラー像が安置され、一二年ごとにこれらの三像は新しく作り変えられる。毎年、アーシャーダ月（六〜七月）にはラタ・ヤートラ（山車の祭）があり、三台の山車に三神像を乗せて二キロ離れたグンディチャ・バリへ数千人の信者が引いて行く行事が行なわれる。→クリシュナ

ジャガンマートリ **Jaganmātṛ** 「世界の母」の意で、シヴァの神妃ドゥルガー、あるいはヴィシュヌの神妃ラクシュミーの別名。→ドゥルガー、ラクシュミー

シャークタ **Śākta** シャクティ（性力）崇拝の儀礼、およびシャクティを崇拝する一派をいう。シャクティ派。シヴァの神妃ドゥルガーの崇拝によって興ったシャクティの信仰は六、七世紀より民衆のあいだに広まり、八〇〇年以後にこの派の聖典である『タントラ』がつくられ、シャクティの理論化が行なわれた。この派の礼拝儀式には、神殿における女神礼拝、五Ｍによる輪坐礼拝などがある。五Ｍの輪坐礼拝とは、チャクラプージャーと呼ばれるもので、同数の男女が夜中ひそかに集まって輪になって坐り、五Ｍ字の作法によって礼拝する。五Ｍとは、マディヤ madya（酒）、マーンサ māṃsa（肉）、マツヤ matsya（魚）、ムドラー mudrā（印契）、マイトゥナ maithuna（性交）であり、深夜に集まった男女はこの五Ｍであらわされる供物をささげて女神を礼拝し、酒を飲み、肉や魚を食べ、カーストの上下の区別もなく、近親の関係もすべて無視して入り乱れて性交を行なう。この派にとってマイトゥナ（性交）は重大な意味をもっており、ただのリンガ（男性性器）とヨーニ（女性性器）の合一ではなくて、シャクティとの合一であるとされる。人はこのようにして解脱に導かれるのであり、その状態は男性神と女性神の抱合（具体的にはシヴァとパールヴァティー）であらわされる、と説かれる。このような儀礼をさらに徹底したのが左道シャクティ派（ヴァーマーチャーラ）で、ベンガル、アッサム地方で流行した。この派の寺院ではカルカッタのカーリーガート寺院がもっともよく知られている。このような左道シャクティ派を批判したのが右道シャクティ派（ダクシナチャーラ）であり、グジャラート地方や南インドのこの派に属する寺院では女神を祀りながらも家畜を犠牲にしてささげることは現在でも禁止されている。

シャクティ **Śakti** ㈠「神聖な力・エネルギー」をあらわし、女性として神格化された。具体的にはシヴァ神の妻ドゥルガー、ウマー、パールヴァティーなどのデーヴィー（神妃）を指し、このドゥルガーの崇拝にもとづいてシャクティ（性力）の信仰が盛んになった。六、七世紀ころ

より輪坐礼拝などの礼拝形式を整え、次第に一派をなすようになった。

㈡戦士の戦闘能力を増大させる力をもつ槍、あるいは投げ槍。『マハーバーラタ』（森林編）では、一〇〇個の鈴をつけた偉大な力をもつ武器マハーシャクティについて述べている。

㈢あるいはシャクトリともいい、ヴァシシュタ仙の長子として生れた聖仙。彼はカルマーシャパダ王にむちで打たれたのを怨みに思い、この王に人肉を食う羅刹にとりつかれるよう呪いをかけたが、かえって自分がこの食人鬼のえじきとなったという。

シャクニ Śakuni ガンダーラ王スバラの子で、クル族の王ドリタラーシュトラの妻ガーンダーリーの弟。カウラヴァ軍の総司令官ドゥリヨーダナの叔父にあたる。ドリタラーシュトラ王が、弟であるパーンドゥの子ユディシュティラを王位につけた時、ユディシュティラを追い落して甥のドゥリヨーダナを王位につけるためにさまざまな手段を講じた。ユディシュティラをさいころ賭博にさそい、黄金や宝石、国土・都城・男女の奴隷などだけではなく、ユディシュティラ自身をも賭けさせたうえで打ち負かし、その全部をとりあげて、ついにユディシュティラを森の中に去らせたのもシャクニである（『マハーバーラタ』集会編）。シャクニは甥のドゥリヨーダナのために終始味方し、バーラタの大戦争ではパーンドゥ側のアルジュナ、ビーマと戦って敗れ、ついにサハデーヴァに殺された（同、シャリヤ編）。

〔別名〕ガーンダーラパティ（ガンダーラの主）、ガーンダーララージャ（ガンダーラ王）、ガーンダーララージャプトラ（ガンダーラ王の子）、ガーンダーララージャスタ（同）、キタヴァ（賭博をする人、ギャンブラー）、サウバラ、サウバラカ、サウバレーヤ、スバラジャ、スバラプトラ（いずれも「スバラ王の子」の意）。→ドゥリヨーダナ

シャクラ Śakra 「強大な力を持つ者」の意で、多くの神々の名称として用いられ、とくに力・強さ・恐れのないことの神格化としてのインドラ神の別名として用いられる。

シャクラーニー Śakrāṇī インドラ神の妻。インドラーニーと同じ。

シャシー Śaśī シャシン「兎を持つ者」の意で、月をあらわす。

ジャージャリ Jājali 『マハーバーラタ』に出て来るバラモン。きびしい苦行によって超人的な能力を得たことを自慢に思い、自分が世界中で最もすぐれた人間であると考えた。その時、天から声が聞こえ、彼より勝れた者にヴ

ァイシュヤ階級に属する商人トゥラーダーラがあるとのこと。ジャージャリはただちにこの商人のところに行って学んだといわれる。

ジャータヴェーダ Jātaveda アグニ（火）に対するヴェーダの共通したあだ名。「すべてを知る者」「知恵を持つ者」の意味で、一般に、㈠すべての存在を知るもの、㈡あらゆる存在を所有するもの、㈢すべての存在に知られているもの、㈣ヴェーダを所有すること、すなわち豊かさ、㈤ヴェーダを所有すること、すなわち知恵の意味に解されている。

ジャタースラ Jaṭāsura パーンダヴァの勇士たちの持つ武器を奪おうとした羅刹（ラークシャサ）。のちにビーマに殺された（『マハーバーラタ』森林編）。

シャタダヌ Śatadhanu 女性としての最高の美徳をそなえたシャイビヤーを妻に持つ王。ある時、シャタダヌ王は妻とともに近くの河で沐浴をすませてくつろいでいると、そこに王の友人のジャイナ教徒が近づいて来た。ジャイナ教徒などの異教徒と交わることは厳重に禁止されていたのにもかかわらず、彼に敬意を表わすためにシャタダヌは会話をかわした。シャイビヤーは黙って太陽を見つめたままであった。ほどなくシャタダヌは死に、貞節な妻シャイビヤーは火に身を投じて夫に殉じた。宗教上の掟を破ったシャタダヌは初め犬に生れ変わり、次いでジャッカル、狼、はげたか、烏、孔雀に生れた変わった。これに対して、落度のなかったシャイビヤーはカーシー王の娘として生れ変わった。夫を選ぶように父王に勧められても、彼女は夫、ジャッカルなどに生れ変わった夫を認め、いつかは再び夫婦として暮したいと願っていた。やがてその望みがかなえられ、シャタダヌはもとの威厳をもった姿をもって生れ、カーシー王の死後その跡を継いだ（『ヴァーユ・プラーナ』三・一八）。

シャタダヌヴァン Śatadhanvan シャタダヌス「百の弓を持つ者」の意で、ヤーダヴァ族の一人。彼はフリディカの息子で、クリシュナの妻サティヤバーマーの父であるサトラージットを殺し、彼自身はクリシュナの円盤で首を切られて死んだ。

シャタニーカ Śatānīka ㈠クル族の王パーンドゥの第四子ナクラとパーンダヴァ五王子共通の妻ドゥラパディーとのあいだの子。彼が生れた時、シャタニーカという有名な聖仙がおり、その名を取ってナクラが我が子につけたものという。バーラタ戦争においては、ジャヤセーナ、ドゥシュカルナなどと戦い、アシュヴァッターマンに殺された。ナクラプトラ（ナクラの子）、ナークリ（同）などともいわれる。

㈡マツヤ王ヴィラータの兄弟。カウラヴァ軍とトリガルタによってヴィラータ王の牛が奪われた時、アルジュナの援助を得て彼らと戦い、バーラタ戦争の時にはパーンダヴァに味方してカウラヴァ軍のシャリヤを殺した。

㈢クル王朝の著名な聖仙。

ジャターユス　Jaṭāyus　ヴィシュヌ神の乗り物である聖鳥ガルダの子といわれるハゲ鷹。アルナから生れたともいわれ、アヨーディヤーの王ダシャラタの友人。ラーマが妻シーターとダンダカの森に住んでいた時、ランカーの羅刹ラーヴァナがシーターを奪おうとした。その時ジャターユスはシーターを助けようとしてラーヴァナと戦い、一度はその戦車を打ち砕くが、力尽きてラーヴァナに倒された（『ラーマーヤナ』森林編）。



ラーヴァナと戦うジャターユス

シャタルーパー　Śatarūpā　「一〇〇の形をもつ女」の意で、ブラフマー神の娘。世界最初の女性。最初の男性マヌの母（他の伝説ではブラフマー神が自分自身を男性と女性に二分し、そこからマヌが生れたとする）。彼女はサーヴィトリーともいわれる。↓サーヴィトリー

シャトルグナ　Śatrughna　アヨーディヤーの王ダシャラタとその妻スミトラーとのあいだの子。シャトルグナは「敵を亡ぼすもの」の意。『ラーマーヤナ』によればコーサラ国のアヨーディヤーを治めていたダシャラタ王には三人の妻があったが、長いあいだ息子に恵まれなかったのでアシュヴァメーダ（馬祀）祭を行なったところ、カウサリヤーからはラーマ（実はヴィシュヌ神の生れ変わり）が、カイケーイーからはバラタが、スミトラーからはラクシュマナとシャトルグナの二人の息子が生れた。↓ダシャラタ

ジャナカ　Janaka　㈠日種族（スーリヤヴァンシャ）に属するミティラーの王。彼の先代の王ニミは後継者なくして死んだので、聖者たちは相談のうえニミの屍体を摩擦して一人の王子をつくり出した。産み親なくして生じたので、ジャナカ（生れたもの）と名づけられた。この最初のジャナカより二〇代あとに出たのがシーターの父のジャナカであるといわれる。

㈡ヴィデーハの王で、ラーマの妻となったシーターの父。彼が子孫の生れることを願って祭祀を行なうために地面を

掘ると、田のあぜ（シーター）から一人の女児が生れた。この女児はその出生に因んでシーターと名づけられ、このことからジャナカ王はシーラドヴァジャ（鋤を旗印にする者）と呼ばれる。彼の宮殿には司祭僧のヤージュニャヴァルキヤがおり、王とヤージュニャヴァルキヤ両者の対論は伝統にとらわれない自由なものであった。その内容は『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』（三・一～四・二・一）に記されているが、彼らは思想的に自由な立場に立ち、その哲学的・宗教的に自由な空気が、仏教やジャイナ教を成立させる要件となったと評価されている。↓シーター

ジャナメージャヤ　Janamejaya　パリークシットの子で『バガヴァド・ギーター』の主人公アルジュナの子孫に当たる偉大な王。父パリークシットが蛇（ナーガ）に噛まれて死んだ時、彼はナーガの供犠祭を行ない、タクシャシラーのナーガ国の人々を征服した。このことによって、彼はサルパサットリン（蛇を供犠に捧げたもの）ともいわれる。

ジャナールダナ　Janārdana　「興奮させるもの、ふるい立たせるもの」の意で、ヴィシュヌ（＝クリシュナ）の別名。↓クリシュナ

シャニ　Śani　土星。不吉な星座。その乗物は不吉な鳥であるとされる。太陽神スーリヤとチャーヤーとのあいだに生れたといわれるが、バララーマとレーヴァティーの子孫ともいわれる。彼はアーラ、コーナ、クローダとも呼ばれ、父方の名よりシャウラといわれる。不吉な星であることから、クルーラドリシュ、クルーラローチャナ（邪悪な目をした者）といわれ、また、マンダ（ゆっくり動く者）、パンググ（不具の者）、シャナイシュチャラ（ゆっくりと動く者）、サプタルチー（七つの光を持つ者）、アシタ（暗い者）とも言われる。

シャバラ　Śabara　「まだら色の者」の意で、ヤマ神の二匹の四つ目をもつ犬の名。インドラ神の飼う雌犬サラマーの子孫で、死者が死の神ヤマの国へと行く道の番犬。

ジャーバーリ　Jābāli　アヨーディヤーの王ダシャラタの司祭。懐疑論的、あるいは唯物論的な見解を持った思想家。ダシャラタ王の死後、彼は王子ラーマに、伝統的な儀式はただ民衆をだますものにすぎないなどと、ローカーヤタ（唯物論）と共通する論議を用いて、王位継承の権利を主張するようすすめたが、あくまで伝統的な立場に立とうとするラーマはこのすすめを拒否した。

ジャフヌ　Jahnu　㈠『リーグ・ヴェーダ』の聖仙。

㈡プラーナでは、プルーラヴァスの子孫の聖者とされている。天の河であったガンガーがバギーラタ王によってこの地上に流れ下った時、ジャフヌは苦行をしていた土地が

水びたしになったのに立腹し、その流れを飲み込んでしまったが、やがて彼の耳から流れ出すことを許した。このことによって、ガンガー河、ガンガー女神はジャフナヴィー（ジャフヌの娘）とも呼ばれる。

ジャマダグニ　Jamadagni　ヴィシュヴァーミトラの友人の一人とされるヴェーダの聖仙。プラーナの伝説では七大聖仙の一人とされ、ブリグの子孫のリチーカとカーニヤークブジャの王ガーディの娘であるサティヤヴァティーとのあいだに生れたという。この伝説では、ジャマダグニはプラセーナジット王の娘レーヌカーと結婚して五人の息子をもうけたが、その中の末子パラシュラーマが有名になったとしている。ジャマダグニの妻レーヌカーは夫とともにきびしい修行を行ない高い精神的境地に到達していたが、ある時、五人の子供が外へ働きに出ているあいだに沐浴をしようとして河に行き、そこで隣国の王子夫妻が仲よくたわむれているのを見た。これを知った夫のジャマダグニ仙は、彼女が邪悪な心をいだいたことに立腹し、四人の子供が帰って来ると彼らの母を殺すように命じた。四人の息子たちが余りの恐しさに震えていると、父はますます怒りをつのらせて、彼らに呪いをかけて白痴にしてしまった。そこへ末子のパラシュラーマが帰って来て、同じことを命じられた。彼は父の命ずるままに母の首を斧で切り落した。父は従順なパラシュラーマに怒りを和らげて、望みのものを与えようといったところ、彼は母親が再びこの世で生れられること、四人の兄たちがもとのようになること、自分自身の長命と戦場で誰にも敗けない強さをと願い、かなえられた（『マハーバーラタ』森林編）。

シャームバ　Sāmba　サームバともいい、クリシュナとその妻ジャームバヴァティーとのあいだに生れた子。クリシュナの妻の一人ジャームバヴァティーは、同じくクリシュナの妻であるルクミニーなどに子供ができたのに自分には生れないことを悲しんで夫にこのことを訴えた。そこでクリシュナが六ヵ月のあいだ苦行を行なうと、シヴァ神の恩恵によって一子が授けられた。これがシャームバである。彼は成長すると、ドゥリヨーダナ王の美しい娘ラクシャナーの自選式（婿選びの行事）のことを聞きつけ、諸国の王子たちの前でラクシャナーを力づくで奪い取った。ドゥリヨーダナは彼を捕えたが、このことを聞いたクリシュナとバラバドララーマは、ヤーダヴァ族の都ドヴァーラカーからハスティナープラへ来て交渉の結果、シャームバを救い出し、花嫁ともどもドヴァーラカーに帰って行った。シャームバとラクシャナーとのあいだには一〇人の子が生れた（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇）。彼はパーンダヴァの

勇士アルジュナのもとで弓を習い、ユディシュティラ王の宮殿の一員となった（『マハーバーラタ』集会編）。バーラタ戦争ののち、ユディシュティラが即位式を行なった時、シャームバもクリシュナとともにハスティナープラに来てこの式に参加した（馬祀祭編）。↓ユディシュティラ、クリシュナ

ジャムバ　Jambha　悪魔（鬼）の名。神々と戦ってインドラ神に殺された者（このことによって、インドラはジャムバベーディン「ジャムバを殺す者」といわれる）、あるいはアルジュナと戦ってクリシュナに殺された者の名。時にはダイティヤ、ダーナヴァと同一視される。

ジャームバヴァット　Jāmbavat　ラーマを助けてランカーの羅刹王ラーヴァナと戦った熊の王。『ラーマーヤナ』の伝説によれば、ジャームバヴァットは不死の霊水アムリタの原料となる薬草を求めて地上を二一回旅したという。

かつて太陽神スーリヤからサトラージットに与えられたという天界の宝石スヤマンタカがあり、サトラージットはこれをクリシュナに奪われることを恐れて弟のプラセーナに与えた。この宝石には、これを持つ人が善人であればその人を守り、悪人であれば滅ぼすという力があり、プラセーナは良くない心の持ち主であったので一頭のライオンに殺された。このライオンは熊王ジャームバヴァットに殺され、スヤマンタカ宝は熊王の持つところとなった。これを知ったクリシュナは宝石を自分のものとしようと思って熊王の穴の中に入り、激しい戦いが始まった。クリシュナの従者たちは穴の外で七、八日待ったが主人が出て来ないので、国に帰ってクリシュナの葬儀を行なった。穴の中では戦いが続いており二一日目に熊王は降伏し、クリシュナに宝石と彼の娘ジャームバヴァティーを与えた。ラーマのランカー侵攻に当たっては、彼は熊の軍勢とともに常にラーマを助け、大功績をあげた。

シャムバラ　Śambara　㈠アスラの王。神々とアスラとの戦争において重要な働きをしたアスラの指導者。強大な力をもってその勢力は神々をしのぐ程であったが最後にシヴァに殺された。『リグ・ヴェーダ』においては、シャムバラはダスユス（悪魔）の王で、一〇〇の都市を支配し、それらの都市にはアシュヴァマイー、アーヤシー、シャタブジーなどの要塞があったという（一・八）。

㈡ヒラニヤークシャの子として生れたアスラの名。シャクニ、ドヴィムールダー、シャンク、アーリヤの兄弟。彼は魔法を自在にあやつったが、クリシュナの子のプラディユムナによって殺された。

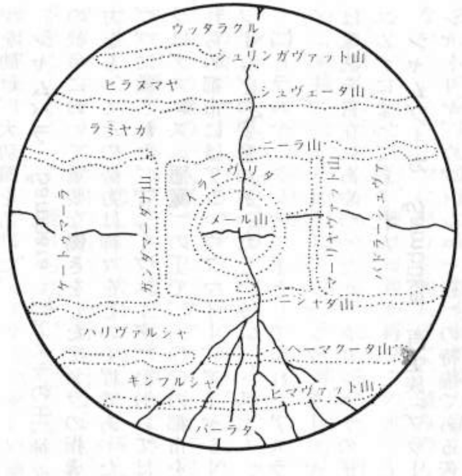
シャムブーカ　Śambūka　再生族（ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシュヤ族）の特権である苦行を行なっ

たためにラーマに殺されたシュードラ階級に属する行者(『ラーマーヤナ』終末編、『ラグヴァンシャ』)。

ジャムブドヴィーパ　Jambudvīpa　プラーナの世界観によれば、空間の中心部分に、下から順にブール、ブヴァス、スヴァル、マハル、ジャナス、タパス、サティヤムという七つの世界が層となって存在する。このうち、地上にあるブールは七つの洲と七つの海より成り、その中心部分にあるのが人間の住むジャムブドヴィーパ(閻浮提洲)である。

この洲を囲んでラヴァノーダ海があり、その外側にプラクシャドヴィーパ洲、その外側にイクシュラソーダ海、その外側にシャールマリドヴィーパ洲、順次にスローダ海、クシャドヴィーパ洲、ダディマンドーダカ海、シャーカドヴィーパ洲、クシャローダ海、プシュカラドヴィーパ洲、スヴァードゥーダカ海がある(『ヴィシュヌ・プラーナ』二・二・五—六)。

ジャムブドヴィーパの中心にメールと呼ばれる黄金の山がある(仏教の世界観では、スメール山が世界の中心で、ジャムブドヴィーパはこのスメールをとり囲む四つの洲のうちの南にある洲とされる)。このジャムブドヴィーパ洲は東西にのびる山脈によって七つの国に分けられる。中心にあるメール山を囲む国がイラーヴリタで、南はニシャダ山、北はニーラ山、東はマーリヤヴァット山、西はガンダマーダナ山によって区切られている。東にはマーリヤヴァット山をへだててバドラーシュヴァ国、西にガンダマーダナ山をへだててケートゥマーラ国、南にはニシャダ山とヘーマクータ山との間にハリヴァルシャ国、ヘーマクータ山とヒマヴァット山の間にキンプルシャ国、ヒマヴァット山の南にバーラタ国、北方にはニーラ山とシュヴェータ山の中間にラミヤカ国、その北にヒラヌマヤ国、シュリンガヴァ



ジャムブドヴィーパの図

ット山の北にウッタラクル国がある。

この洲の中心にあるメール山の周囲にはマンドラ、ヴィプラ、メールマンダラ、スパールシュヴァの四つの山があり、それぞれの山頂にはカダムバ、ピッパラ、ジャムブー、ヴァタという大樹があり、ジャムブドヴィーパという名もこの木の名から出たという(同、二・二・一八)。

プラーナの神話によれば、このメール山の頂上の中央にブラフマーの都があり、その周囲には八大守護神がそれぞれの都をかまえている。東方はインドラ神のアマラーヴァティー城、東南はアグニ神のテージョーヴァティー城、南方はヤマ神のサンヤマニー城、西南はヴィルーパクシャ神のクリシュナーンガナー城、北方はソーマ神あるいはクヴェーラ神のマホーダヤ城、東北はイーシャーナ神のヤショーヴァティー城がある。

ジャヤドラタ　Jayadratha　シンドゥ国の王で、クル族のドリタラーシュトラ王の唯一人の娘ドゥフシャラーの夫。クル族の大戦争(バーラタ戦争)ではカウラヴァ側に立った。ジャヤドラタは初めからパーンドゥ側と敵対していたが、この原因はパンチャーラの王女ドラウパディーの自選式に出席した時に彼女を得られなかったところにあるともいわれる(『マハーバーラタ』初編)。

パーンドゥ王の五王子がドリタラーシュトラの王子ドゥリヨーダナによって追放をうけ、各地を放浪した末にカーミヤカの森で隠棲していた時のこと、五王子は森の中の小屋に五人の共通の妻ドラウパディーを唯一人残して狩に出たことがあった。その間に、かねてよりドラウパディーに思いを寄せていたジャヤドラタはトリガルタ王のコーティカースヤを使者に立てて自分の思いをドラウパディーに伝えさせた。彼女がこれを拒否すると、彼は自分で小屋の中に入り、誘惑しようとした。彼女はあくまでも彼の意に従わなかったので、ジャヤドラタは彼女を力ずくで戦車の中に連れ込み、その場を離れようとした。ちょうどその時、帰って来た五王子はジャヤドラタに追いすがって彼を捕え、存分にこらしめた上、ビーマは彼の頭髪を五本残して剃り上げてしまい、ユディシュティラの前に引き出した。ユディシュティラはドラウパディーとともに彼の非をさとした上で彼を解き放してやった(『マハーバーラタ』森林編)。

バーラタ大戦争が行なわれ、アルジュナとジャヤドラタとのあいだに激しい戦いが始まったとき、クリシュナが近づいて来てアルジュナに言った。「ジャヤドラタが生れた時、天から、この子の首を地上に落とすものはその首をこなごなに砕かれるであろうという声が聞えた。だから弓で彼の首が彼の父親のものの上に落ちるように射るとよい」。クリシュナの勧めにしたがって、アルジュナは弓で彼の首を父

親のもの上に射落とすと、たちまち父親の首も落とされ、こなごなに砕かれた（『マハーバーラタ』ドローナ編）。

（別名）サインダヴァカ（シンドゥ王の子）、サインダヴァ（同）、シンドゥパティ（シンドゥ王）、シンドゥラージャ（同）など。

ジャヤンティー Jayantī インドラ神の娘。ジャヤニー、デーヴァセーナー、ターヴィーシーとも呼ばれる。

シャーラ Śāla あるいはサーラともいい、ブッダがクシナガラのシャーラ樹林で入滅したということから仏教徒の聖樹。学名は Shorea robusta、和名はサラソウジュ。仏典では沙羅樹と音写する。ヒンドゥーの神話では、シヴァの神妃ドゥルガーが宿る樹の一つといわれる。



シャーラ樹

ジャラー Jarā マガダ王ジャラーサンダを作り出した羅刹女（ラークシャシー）。この巨大な羅刹女の絵を家に置いて礼拝していれば他の悪鬼たちが出没することは絶対ないと信じられている。マガダ王のブリハドラタは宮殿にジャラーの像を置き礼拝していたので、ジャラーはこの王に報いる機会を待っていた。王はカーシー王の双生児の娘と結婚したが、子供が出来なかったので、ガウタマ仙の息子のカクシーヴァーン（あるいはチャンダカウシカ）という隠者に依頼して王位を継ぐ息子が生れるよう祈ってもらった。隠者がマンゴーの木の下に坐って祈ると、実が彼のもも の上に落ちた。隠者は祈りによってこの実の中に神聖な力をよび入れ、王に与えた。王はこの実を二つに割って二人の妻に与えると、彼女らはたちまち妊娠した。しかし、月満ちて生れ出たのは、それぞれ半分の身体しかない子供であった。驚いて生れた子供をそこに置いたまま妻たちが逃げ去ると羅刹女ジャラーがそこに現われ、子供の半分づつの身体を一つにつなぎ合せ、一人前の身体としてブリハドラタ王の前に置いた。この子は、このことからジャラーサンダ（ジャラーが結び合せて出来たもの）と呼ばれるようになった（『マハーバーラタ』集会編、ドローナ編）。

ジャラーサンダ Jarāsandha ㈠マガダ国の王。羅刹女のジャラーによって結合されつくられたのでこのように言われる。マトゥラー王カンサの二人の妻アスティとプラープティはジャラーサンダの娘。クリシュナがカンサを殺した時、その妻であるジャラーサンダの二人の娘は父のもとへ帰り、嘆き悲しんだ。これを見て怒ったジャラーサンダはクリシュナを攻めたが、バララーマに捕えられ殺されそうになったが命は助けられた（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇）。ジャラーサンダとクリシュナとの戦いは長期間続けられ、両軍の激突は一八回にも及んだ。クリシュナはジャラーサンダを殺すには一対一の決闘しかないと思い、パーンドゥの五王子の中のアルジュナとビーマを連れ、バラモンの姿に身を変えてクル族の国を発ちマガダ国の首都であるギリヴラジャに着いた。彼らはジャラーサンダの宮殿の客人として厚いもてなしをうけた。しかし、彼らは何を聞かれても沈黙したままであった。さらに訳をたずねられたので、バラモンの姿をしたクリシュナは、他の二人は沈黙の誓いを守っており夜中でなければ口を開かないと答えた。この言葉を信じたジャラーサンダが夜中に客人の部屋に入った時、クリシュナは三人の真実の名を明し、三人のうち一人と決闘するよう申し入れた。彼はビーマを決闘の相手として選び、闘いののち殺されたという（『マハーバーラタ』集会編）。

（別名）バールハドラタ（ブリハドラタの子）、マーガダ（マガダ王）、マガダーディパ（同）、ジャラープトラ（ジャラーの子）。

㈡クル族の王ドリタラーシュトラの一〇〇人の王子の中の一人。

ジャラシャーイン Jalaśāyin 「水の上に眠っている者」の意で、ヴィシュヌ神の別名。雨期に、あるいは世界が水没した時、ヴィシュヌ神が水の上の蛇の寝椅子で眠るという信仰にもとづいている。ネパールの首都カトマンドゥの北方約八キロのブダニルカンタには、水中に眠るヴィシュヌ像がある。

シャラバ Śarabha ㈠ジャヤメージャヤの蛇の供犠祭で焼かれたナーガ（蛇）の名（『マハーバーラタ』初編）。

㈡カシュヤパ仙とその妻ダヌとのあいだに生れた札つきのダイティヤの名。

㈢チェーディ王ドリシュタケートゥの兄弟。彼はパーンダヴァ側に味方した。

㈣シャクニの兄弟で、バーラタ戦争においてビーマに殺された。

シャラバンガ Śarabhaṅga ラーマとシーターがダンダカの森の中で訪ねた隠者。ラーマが訪ねた時、隠者は自分の願いがかなえられたら最高天に昇ることができようと言い、火を焼やしてその中に身を投じた。すると彼の身体は燃え尽きたが、その火の中から美しい青年があらわれ、その姿のままでシャラバンガは天に昇ったという。

ジャリター Jaritā シャールンギカーと呼ばれる種類

の雌鳥の名。『マハーバーラタ』の伝説によれば、聖仙マンダパーラは子供がなかったので、鳥の姿となって結婚し、四人の息子をもうけたうえで、彼女を棄て去った。やがてカーンダヴァの森の大火災が起こると、彼女は子供たちを守るために激しい苦行をはじめた。こうして救われた子供の名はジャリターリ、サーリシュリクタ、スタムバミトラ、ドローナであり、彼らはみなヴェーダに通達した聖仙になったという。

シャリヤ　Śalya　マドラ王の子として生れ、マドラ王国、あるいはバールヒーカ王国を支配した。姉のマードリーはクル族のパーンドゥ王の第二の妻としてナクラとサハデーヴァの二王子を産んだが、シャリヤはクル族の大戦争（バーラタ戦争）においては敵対するカウラヴァ側に味方した。彼は甥に当たるアルジュナやビーマと激しく戦い、とくにパーンドゥ軍の総大将であるユディシュティラとは五たび戦い、ついにユディシュティラによって殺された（『マハーバーラタ』シャリヤ編）。

〔別名〕バールヒーカプンガヴァ（バールヒーカの王）、マドラーディパティ（マドラ王）、マドラジャナーディパ（同）、マードラカ（同）、マドララート（同）など。

シャンカラ　Śaṅkara　「めでたいもの」の意で、創造の主、あるいはシヴァの別名。↓シヴァ

シャーンター　Śāntā　ダシャラタの娘で、アンガ王ローマパーダに育てられた。成長してリシュヤシュリンガと結婚。

シャーンタヌ　Śāntanu　クル・パンチャーラの王プラティーパの後継者。母の名をスナンダーといい、兄はデーヴァーピ、弟はバールヒーカといった（『マハーバーラタ』初編）。彼は人間の姿となったガンジス河の女神ガンガーを妻として（この間の事情については「プラティーパ」の項参照）、その間にビーシュマが生れ、彼を王位継承者とした。ビーシュマが成長したころ、シャーンタヌ王は美しいサティヤヴァティーを見そめ、妻となってくれるよう頼んだ。しかし、サティヤヴァティーの父は、娘から生れる男子に王位を継がせるならば娘を彼に与えてもよいと言った。シャーンタヌは愛人を断念する気にもならず、また他方、ビーシュマを愛していたので苦悩していた。父のこの苦しみを知ったビーシュマは自分から王位継承者となることを辞退し、さらに自分の子が生れないために独身の誓いを立てた。このようにして、シャーンタヌはサティヤヴァティーと結婚し、二人の息子チトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤが生れた。

シュヴェータケートゥ　Śvetaketu　聖仙。『マハーバーラタ』によれば、彼は結婚している女性が他の男たち、

とくにバラモンと交わるという行為を中止させる掟を定めた聖者であるという。

シュシュナ　Śuṣṇa　『リグ・ヴェーダ』においてインドラ神に退治される一本の角をもったアスラの名（一・一二）。彼はダーナヴァともいわれ、神酒を盗んで口にくわえていたが、インドラ神は彼を蜜の塊に変え、ついでワシの姿になったうえで、その神酒を奪い返したという。

シュバーンギー　Śubhāṅgī　「美しい肢体をもつ女」という意味で、愛の神カーマの妻ラティの別名。あるいは、クヴェーラの妻ヤクシーの別名。↓ヤクシー

シュムバ　ニシュムバ　Śumbha, Niśumbha　ともに「殺りく者」の意で、アスラの兄弟。『マールカンデーヤ・プラーナ』（八五一九〇）の伝説によれば、彼らは富裕なアスラで、金銀・財宝・ありとあらゆる地上の富を持っていた。ある時、シュムバの召使いであるチャンダとムンダが、ガンジス河に沐浴にやって来たアムビカー（実はシヴァの神妃ドゥルガー）を見て、この最高の女性を手に入れるよう主人にすすめた。シュムバはただちにアムビカーのところに行き結婚を迫った。するとアムビカー（すなわちドゥルガー）は、戦いにおいて自分に打ち勝った者、世界の中で自分の力に勝る者だけが自分の夫となる資格があると言った。そこで激しい闘いが始まり、ドゥルガーはさまざまな姿を示してアスラの軍勢と闘い、ついにニシュムバを殺した。しかし、シュムバは強力でなおも激しく攻めるので、彼女はブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ、インドラに助けを求め、シュムバを殺すことができたという。

シュヤーヴァーシュヴァ　Śyāvāśva　ヴェーダの聖仙。彼が聖仙（リシ）となったことについては次のような物語がある。シュヤーヴァーシュヴァの父アルチャナーナスはラタヴィーティの娘を見て息子の嫁にと申し入れた。王は賛成したが、王妃は聖仙とでなければ結婚させることはできないと答えた。そこでシュヤーヴァーシュヴァはきびしい修行を始め、施物を求めた。彼はタランタの妻シャシーヤシーに懇願して家畜や宝物を布施してもらい、マルト神群に讃歌を捧げ、ついに聖仙の位を与えられ、ラタヴィーティ王のところに行ってその娘を妻とする許可を得た。

シュヤーマー　Śyāmā　「黒色をした女」の意で、シヴァの神妃の名。タントリストによって崇拝されるドゥルガーの一つ。↓ドゥルガー

シュヤーラ　Śyāla　「義兄弟」の意で、ヤーダヴァ族の王子。ガールギヤ仙と相談して、クリシュナとヤーダヴァ族の敵であるカーラヤヴァナの父となったことで知られる。

シューラ　Śūra　マトゥラーでシューラセーナを支配し

たヤーダヴァ族の王。ヴァスデーヴァとクンティーの父、したがってクリシュナの祖父に当る。

シュラーヴァスティー　Śrāvastī　コーサラ国の都市。現在のオードの北方九三キロ、ゴーンダ駅の西方、サヘート・マヘートに遺跡がある。ブッダの説法の地として仏教徒の聖地とされる。

シュラッダー　Śraddhā　(一)「信仰」の意で、『リグ・ヴェーダ』において神格化された女神。崇拝するものに堅い信仰心を与えるよう懇願されている(『リグ・ヴェーダ』一〇・一五一)

(二)聖者ダクシャの娘で、ダルマ神の妻、愛の神カーマデーヴァの母。

シュラッダーデーヴァ　Śraddhādeva　マヌの別名。『マハーバーラタ』ではシュラーッダデーヴァといわれる。

シュリー　Śrī　繁栄・栄誉・幸運の女神。吉祥天女。古くはラクシュミーとともに太陽神アーディティヤの二人の妻とされたが、後世、この二人の女神は同一の女神とされるようになった。かつて神々とアスラたちとで乳海を攪拌してアムリタ(不老長生の霊水)を求めた時、シュリーは太陽と月に次いで大海の中から白衣をまとって現われた。その美しい姿を見てヴィシュヌ神はただちに自分の妻とした(『マハーバーラタ』初編)。シュリーは神々と人間が望ましいと思うことのすべてを体現しているといわれる。また食物・肥料・土壌・米の耕作などと関係していて、彼女が死んだあと、そのへそから稲が育ったと伝えられる。→ラクシュミー

シュリンガギリ　Śringagiri　マイソールの西ガート山脈のはずれにある山で、ここにシャンカラ派の総本山がある。シュリンガードリともいい、現代名はシュリンゲーリという。シャンカラの学堂は北にバドリカーシュラマ、東にジャガンナータ、南にシュリンゲーリ、西にドヴァーラカーの諸学堂があるが、その中でシュリンゲーリが最も重要であるといわれる。

シュルタキールティ　Śrutakīrti　クル族のパーンドゥ王の五人の王子の一人であるアルジュナと五王子共通の妻ドラウパディーとのあいだの子。バーラタ戦争ではジャツセーナと戦ったが、ドローナの息子アシュヴァッターマンに殺された。

シュルタセーナ　Śrutasena　(一)クル族の王パーンドゥの第五子サハデーヴァと五王子共通の妻ドラウパディーとのあいだの子。シュルタカルマンとも呼ばれる。バーラタ戦争においては、カウラヴァ軍のスダルシャナ、チトラセーナなどと戦い、アシュヴァッターマンに殺された。

(二)ジャヤメージャヤ王の兄弟。

(三)ガルダに殺されたアスラの名。

シュールパナカー　Śūrpanakhā　「扇のような爪を持つ女」の意で、ランカーの魔王ラーヴァナの妹に当たる羅刹女。ラーマがアヨーディヤーのダシャラタ王の宮殿から追放されてダンダカの森に住んでいた時、この森にいたシュールパナカーはラーマを慕って結婚を迫った。シーターという愛妻のあるラーマがこれを受け入れるはずがなく、彼は未婚の弟ラクシュマナを自分の代わりにと推薦した。しかし、ラクシュマナも嘲笑してこの女鬼をしりぞけた。これに腹を立てたシュールパナカーがシーターを飲みくだそうとすると、ラクシュマナは彼女の耳と鼻を切り落した。兄ラーヴァナのもとに逃げ戻った彼女は、兄にシーターの美しさを語り、彼女をわがものにするようそそのかした。ラーヴァナは妹の言葉に心を動かされ、黄金の車で空を飛び、ダンダカの森にやって来てシーターを奪い去った(『ラーマーヤナ』森林編)。こうしてシュールパナカーの行動によって、ラーマとラーヴァナの激しい戦いが始まることになった。→ラーマ、ラクシュマナ

シーラドヴァジャ　Sīradhvaja　ヴィデーハ王ジャナカの別名。「すきを旗印としているもの」の意。→ジャナカ

シンドゥ　Sindhu　「河」の意で、とくにインダス河。のちにインダス河流域のシンドゥ地方をあらわすようになり、その複数形はシンドゥ地方の住民をあらわすことになった。このようなシンドゥという語からギリシャ語のヒンドイ Hindoi あるいはインドイ Indoi、ペルシャ語のヒンド Hind を経て、インドという言葉が成立した。

シンハヴァーヒニー　Siṃhavāhinī　あるいはシンハヴァーハナー。「ライオンに乗る女」の意で、シヴァの神妃ドゥルガーの別名。→ドゥルガー

シンヒカー　Siṃhikā　(一)ダクシャの娘、カシュヤパ仙の妻。あるいは、カシュヤパの娘で、ヴィプラチッティの妻ともいわれる。

(二)ラーマを助けた猿の勇士ハヌマーンを飲み込もうとした羅刹女。ハヌマーンはいったん彼女に飲み込まれたうえで、彼女の腹を引き裂いて外に飛び出した。

スヴァダー　Svadhā　「供物」の意で、ダクシャとプラスーティの娘、あるいはアグニの娘といわれる。祖霊ピトリと関連づけられ、カヴィの妻として表わされる。

スヴァヤムブー　Svayambhū　「自分自身で存在するもの」の意で、創造原理・創造者、とくに創造神としてのブラフマー神を表わす。次いで、ヴィシュヌ神、シヴァ神を表わし、後期の仏教においては本初仏（アーディ・ブッダ）をこのように言う。

ネパールのカトマンドゥにあるスヴァヤムブナート寺院

は、仏教寺院ではあるが、カトマンドゥ盆地干拓伝説において表わされるスヴァヤムブーはヒンドゥー教と仏教との入り交じった性格を示している。

スヴァルガ　Svarga　「天界」の意で、とくにインドラ天、インドラ神の楽園のこと。メール山の上にあるとされ、この天にはあらゆる罪を浄め、神聖な姿となったものが入ることができるという。

スカムバ　Skambha　「支えるもの・柱」の意で、『リグ・ヴェーダ』においては天と地をつなぐ柱といわれ（八・四一）、『アタルヴァ・ヴェーダ』においては創造を支える中心となる支柱といわれる（一〇・七—八）。

スカンダ　Skanda　「攻撃する者」の意で、戦争の神、軍神。マハーセーナ、サナトクマーラ、グハなどさまざまな名で呼ばれ、南インドではブラフマニヤ、スブラフマニヤと呼ばれる。北インドでは五世紀ころスカンダ＝カールッティケーヤの信仰が盛んになった。古代タミールの山の神ムルガンもスカンダと同一視される。彼はまた、グラハ（つかむもの、とらえるもの）ともいわれ、病気・災難の原因になるものとも見られ、子供の病気の原因となる犬に似た悪魔の首長とされ、さらに健康を奪う者というところから盗人の神といわれる。そこで、盗人はスカンダプトラ（スカンダの息子）と呼ばれるという。スカンダはシヴァ信仰と結びついた神話では、シヴァとパールヴァティーの子とされ、その従者もシヴァの従者と共通している。乗り物は雄鶏。↓カールッティケーヤ

スグリーヴァ　Sugrīva　キシュキンダー国の猿の王。スグリーヴァが兄のバーリンに国を追われた時、ランカーの羅刹ラーヴァナに奪われた妻シーターを取り戻そうとするラーマが通りかかり、スグリーヴァと相互に助け合うという協定を結んだ。そこで、彼はラーマの助けによってバーリンを打ち、キシュキンダー国を取り戻したのち、バーリンの息子アンガダを太子とした（『ラーマーヤナ』キシュキンダー編）。↓バーリン


ラーマを助けた猿の王スグリーヴァ

スシェーナ　Suṣena　㈠クリシュナとルクミニーとの子。

㈡ラーマの軍勢の中にいた医者。彼は死者をよみがえらせることができたといわれる。

スシャルマン　Suśarman　トリガルタ地方の王。クル族のカウラヴァの長ドゥリヨーダナを招いてマツヤ王のヴィラータを攻めさせ、ヴィラータ王の牝牛を奪い、同王を捕えたが、パーンダヴァのユディシュティラ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァに打ち破られた（『マハーバーラタ』ヴィラータ編）。またバーラタ戦争ではカウラヴァ側につき、初日にチェーキターナと一騎打ちをし（ビーシュマ編）、さらにアルジュナ、ビーマ、ドリシュタディユムナと戦い、最後にアルジュナによって殺された（シャリヤ編）。トライガルタ、トリガルタが、彼の別名として用いられる。

スダース　Sudās　『リグ・ヴェーダ』においてしばしば犠牲を行なった王として記されており、その王宮にはヴァシシュタ仙とヴィシュヴァーミトラ仙がいたという。

スタソーマ　Sutasoma　クル族の王パーンドゥの第二子ビーマの子。母親は五王子共通の妻ドラウパディー。スタソーマ（月の息子）という名は、ソーマ神（月神）の恵みによって生れたことによるという。バーラタ戦争においては、カウラヴァ軍のヴィカルナ、シャクニと戦ったが、クル族の軍師ドローナの息子アシュヴァッターマンの夜襲にあって戦死した。

スターヌ　Sthānu　「しっかりと立っているもの」の意で、シヴァ神の別名。シヴァ神が世界の終末の時まで、どっしりと樹の幹のように苦行を続けたことによって、このように言われる。

スダルシャナ　Sudarśana　ヴィシュヌ神の持っている円盤形の武器。ヴィシュヌ神の限りない心の力と思考の早さを象徴している。『リグ・ヴェーダ』（一・一六四・二）に「七は一輪の車を装備す。七つの名ある一頭の馬（これを）牽く。車輪は三個の轂を有し、老ゆることなく、冒さるることなし、そこにこれら一切万物は乗る」（辻直四郎訳）と記されている輪（チャクラ）がこの円盤の起源であると見られ、それが後に鋭い刃をもった飛び道具としてのチャクラとなった。他の神々の武器と同じように、スダルシャナは人格化され、円い眼をして腹をつき出した小人（チャクラプルシャ）の頭の上にヴィシュヌ神が左手をのせている像が作られている。

スダルマー　Sudharmā　インドラの広間の名。クリシュナはヤドゥ族の集会のために、インドラに命じてこの広間をウグラセーナに譲り渡させた。しかし、クリシュナの

死後、再びインドラ天にもどした。

スチャール Sucāru クリシュナとその妻ルクミニーとのあいだの息子。

スティークシャナ Sutīkṣaṇa ダンダカの森に住んでいて、ラーマとシーターの訪問を受けた聖仙(『ラーマーヤナ』森林編)。

スディユムナ Sudyumna ヴァイヴァスヴァタ・マヌの子。生れた時には女性でイラーと名づけられたが、後に男性に変り、スディユムナと呼ばれた。しかし、シヴァ神の呪によって彼は再び女性イラーとされ、ブダ(水星)と結婚してプルーラヴァスを産んだ。その後、ヴィシュヌの恩恵によって男性スディユムナにもどり、三人の息子の父となった。この物語は月種族(チャンドラヴァンシャ)の起源に関する伝説の一つと見られている。

スデーシャナー Sudeśanā (一)ヴィラータ王の妻。国外に追放されたパーンドゥ王の王子たちはマツヤ国のヴィラータ王の宮廷に行き、名を隠してこの王に仕え、五王子共通の妻ドラウパディーは王妃スデーシャナーの侍女となった。彼女はパーンダヴァたちをよく保護した(『マハーバーラタ』森林編)。

(二)猿の王国キシュキンダーの猿王バーリンの妻(『ラーマーヤナ』)。

ストゥナー Sthuṇā あるいはストゥナーカルナ。パンチャーラ王ドルパダの娘シカンディニー(カーシー国王の娘アムバーの生れ変わり)と性を交換したヤクシャ(『マハーバーラタ』戦争準備編)。

スナハシェーパ Sunaḥśepha 日種族(スーリヤヴァンシャ)のイクシュヴァーク族の王ハリシュチャンドラの物語に出てくる貧しい聖者アジーガルタの第二子。ハリシュチャンドラ王には多くの妻があったが子供が生れなかったのでヴァルナ神に子供の生れることを祈り、もしその願いが聞き入れられるなら生れてくる子を犠牲に捧げようと誓った。(『アイタレーヤ・ブラーフマナ』七・一三—一八)。願いが聞き入れられて息子ローヒタが生れたが、父王はその子を犠牲に捧げることをあとに延ばした。息子が成長すると、父王は初めてヴァルナに対するその誓いを語り、ローヒタは三年のあいだ森に逃れて暮らした。息子が隠れている間、ハリシュチャンドラ王は子供が生れない妻たちとともに惨めな気持で生活を送っていた。ある日、彼は隠者アジーガルタに出会い、もしローヒタの代わりとして彼の長男をヴァルナ神に捧げてくれるなら一〇〇頭の牛を布施しようと提案した。最初、隠者はその申し出を拒否していたが、二男のスナハシェーパならばよいと答えたので、スナハシェーパは供犠の柱にしばりつけられてしまった。し

かし、貧しい隠者がもっと沢山の牛の群をよこすようにと要求しているあいだに、スナハシェーパがヴィシュヴァーミトラに祈ると、アシュヴィン双神とアグニ神が助けに来てくれるようヴァルナに祈りを捧げよ、と指示された。彼が言われたとおりにすると、ただちに縄が解け、しかも、そのことによってハリシュチャンドラ王のヴァルナへの誓いも充たされたと認められることとなった。→ローヒタ

スナーマン Sunāman シューラセーナの王。ウグラセーナの子で、マトゥラーの悪王カンサの兄弟。カンサ王がクリシュナと戦った時、スナーマンは救援にかけつけたが、バララーマに殺された。

スバドラー Subhadrā ヤーダヴァのヴァスデーヴァとその妻デーヴァキーとのあいだに生れた娘。パーンドゥの五王子の一人アルジュナの妻となり、アビマニユを生んだ。

　アルジュナは兄弟五人に共通の妻ドラウパディーを迎えたのち、この一人の妻をめぐる兄弟間の約束を自ら破って一二年間の追放生活に入ったことがあった。この間、彼は各地の霊場を巡拝し、さまざまな冒険を経験したのち、ヤーダヴァ族のクリシュナに会い、その都ドヴァーラカーに行き、クリシュナの美しい妹スバドラーを見染めた。クリシュナにどのようにして彼女を獲得したらよいかを尋ねると、武族のしきたりによって力で彼女を奪い去るがよいとのことであった。そこでアルジュナは、ユディシュティラに相談の上、ライヴァタカ山を散歩して帰る途中のスバドラーを捕え戦車に乗せてインドラプラスタに連れて行った。ドヴァーラカーでは兄のバララーマが、アルジュナは客人としての掟を破ったと怒ったが、弟のクリシュナになだめられ、結局、アルジュナを呼び返して和解し、二人は結婚した。アルジュナとスバドラーはドヴァーラカーで一年を過したのち、追放の残りの年月を霊地プシュカラで過し、インドラプラスタに帰った。ドラウパディーはアルジュナがスバドラーを妻としたことを批難したが、スバドラーがドラウパディーに侍女として仕えることで和解した(『マハーバーラタ』初編)。バーラタの大戦争で一子アビマニユが戦死したことを聞くと、彼女はクリシュナの前に泣き伏し(ドローナ編)、クリシュナとともにドヴァーラカーに帰った(馬祀祭編)。→アルジュナ

スバーフ Subāhu (一)クル族の大王ドリタラーシュトラの息子で、チェーディの王。

(二)シャトルグナの息子で、マトゥラーの王。

スバラ Subala (一)ガンダーラの王で、その娘ガーンダーリーはクル族の盲目の王ドリタラーシュトラと結婚してドゥリヨーダナ以下の百王子の母となった。ガーンダーリ

ーとドリタラーシュトラの結婚に当たっては、王の盲目であることが問題となったが、スバラは自己の名声を考えて、これを許した（『マハーバーラタ』初編）。その息子にシャクニ、アチャラ、ヴリクシャがある。

(二)ランカー島の山の名。猿の英雄ハヌマーンがその上を飛んだ。↓ガーンダーリー

スパールシュヴァ Supārśva 『ラーマーヤナ』に出て来る伝説上の島の名。サンパーティの子でハゲ鷹の王ジャタ－ユスの甥。

スブラフマニヤ Subrahmaṇya 軍神スカンダ、カールッティケーヤと同一視される南インドのドラヴィダ系の軍神。タミール語ではムルガン（神聖な子供）と呼ばれ、その他クマーラ、マハーセーナ、グハなど多くの名で呼ばれている。

スミトラー Sumitrā ダシャラタ王の三人の妻のうちの一人。ダシャラタ王が息子を得ようとしてアシュヴァメーダ（馬祀祭）を行なった結果、カウサリヤーからはヴィシュヌ神の生れかわりであるラーマが、カイケーイーからはバラタが、スミトラーからはラクシュマナとシャトルグナの二人の息子が生れた（『ラーマーヤナ』アヨーディヤー編）。↓ダシャラタ

スヨーダナ Suyodhana 「よく闘う人」の意で、クル族のカウラヴァの首長ドゥリヨーダナの別名。

スラー Surā 「興奮させる水」の意で、スラー酒。大洋を攪拌した時に生れた女神スラーデーヴィーの名。スラー酒の功徳はソーマ酒のそれに匹敵するといわれるが、間違った飲みかたをすると人間を迷わせるものとなる（『リグ・ヴェーダ』七、八六）。

スラー酒を飲むことはラージャスーヤ祭において重要な意味をもつ。しかし、『マヌ法典』には「スラー酒は良い穀物の汚れた残滓（マラ）であり、また罪は垢穢（マラ）といわれる。故にブラーフマナ族クシャトリヤ族及びヴァイシュヤ族はスラー酒を飲んではならぬ」（一一・九四、中野義照訳）と規定され、スラー酒には糖蜜から蒸溜されたもの・米粉から蒸溜されたもの・マドゥーカ花から蒸溜されたものの三種があることをあげ、酒精飲料や肉とともにヤクシャ鬼・ラークシャサ鬼・ピシャーチャ鬼の食物であって、ブラーフマナ族は決してこれらを飲食してはならないとしている（一一・九五－九六）。女神としてのスラーはヴァルナ神の妻（あるいは娘）ヴァールニーと同一視される。

スーラ Sūra ヤーダヴァ族の王。ヴァスデーヴァとプリターー（のちにクンティーと呼ばれる）の父、クリシュナの祖父に当る。

スラビ Surabhi 神々とアスラたちが乳海を攪拌した

時に生れ出た牝牛。ヴァシシュタ仙に属し、願いをかなえる力を持つ。別名はカーマデーヌ、カーマドゥフ、シャヴァラー。

スーリヤ Sūrya 『リグ・ヴェーダ』以来の太陽神。語源的にはスル sur あるいはスヴァル svar（輝く）より派生したもので、最も具体的に天空に輝く太陽を神格化したものである。『リグ・ヴェーダ』の讃歌の中で描写されるスーリヤはほとんど天空の太陽の様相そのものであり、サヴィトリとも呼ばれる。

スーリヤはミトラとヴァルナの眼（あるいはアグニの眼）と呼ばれ（一・一一五）、すべてのものに仰ぎ見られるものであり、またすべてを見渡して人間の行為を監視する眼そのものである（一・五〇、六・五一など）。スーリヤによって人々はその目的を遂げ、その仕事をなしうるのであり（七・六三）、彼こそすべての動物や無生物の守護者である（一・一一五）。その父親は天神ディヤウスであるとも（一〇・三七）、また、原人プルシャから生れたともいわれる（一〇・九〇）。太陽スーリヤの道はヴァルナによって準備され、七頭の栗毛の馬の引く車に乗ってその道を進む（一・五〇）。また、時には空飛ぶ鳥にもたとえられ、天空の宝石とも呼ばれている。

ヴェーダにおいては天空に存在する太陽の性格が強いのに対して、プラーナ文献の中ではさまざまなスーリヤ神話が形成された。プラーナにおいては、スーリヤはプラジャーパティ・カシュヤパとその妻アディティとのあいだに生れた子であり、三つの眼、四本の腕を持った赤色をした人間として描かれ、二本の手には蓮華を持ち、三番目の手で人々に祝福を授け、四番目の手によって崇拝する人々を救済するといわれる。

『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、スーリヤの乗る車は巨大なものであり、九〇〇〇ヨージャナ（一ヨージャナ



太陽神スーリヤ

は約七～八キロメートル）の長さがあり、三つの中心部分と五本のタイヤと六本のスポークをもった「時」の車輪が、不滅の「年」に固定されている。この車は七頭の馬に引かれており、これらの馬はヴェーダの七つの韻律、すなわちガーヤトリー、ブリハティー、ウシュニク、ジャガティー、トリシュトゥブ、アヌシュトゥブ、パンクティを表わしている。スーリヤの車の軸は四万五五〇〇ヨージャナの長さをもっている。このスーリヤの車には、一年のそれぞれの月に応じて一二人のアーディティヤたち、隠者たち、天の楽師ガンダルヴァたち、ヤクシャたち、天の精女アプサラスたち、蛇、巨人たちが順番で乗って天空を巡っている。

まず、チャイトラ月（太陽暦・三～四月）にはアーディティヤのうちのダートリ、アプサラスたちのうちではクラトゥシュタラー、隠者のうちのプラスティヤ、蛇のうちのヴァースキ、ヤクシャのうちのラタブリト、巨人のヘーティ、ガンダルヴァのうちのトゥムブルが当番として乗っている。ヴァイシャーカ月（四～五月）にはアーディティヤのアリヤマン、隠者のプラハ、ヤクシャのラタウジャス、アプサラスのプンジカスタラー、巨人のプラヘーティ、ガンダルヴァのナーラダが乗る。ジェーシュタ月（五～六月）には、同じようにしてアーディティヤのミトラ、隠者のアトリ、蛇のタクシャカ、巨人のパウルシェーヤ、アプサラスのメーナカー、ガンダルヴァのハーラー、ヤクシャのラタスヴァナが、アーシャーダ月（六～七月）にはアーディティヤのヴァルナ、隠者のヴァシシュタ、蛇のナーガ、アプサラスのサハジャニャー、ガンダルヴァのフーフー、巨人のラタ、ヤクシャのチトララタが、シュラーヴァナ月（七～八月）には、アーディティヤのインドラ、ガンダルヴァのヴィシュヴァーヴァス、ヤクシャのスロータス、蛇のエーラープトラ、隠者のアンギラス、アプサラスのプラムローチャー、巨人のサルピーが乗っている。以下、各月の当番は次の通り。

バードラパダ月（八～九月）――アーディティヤのヴィヴァスヴァット、ガンダルヴァのウグラセーナ、隠者のブリグ、ヤクシャのアープーラナ、アプサラスのアヌムローチャー、蛇のシャンカパーラ、巨人のヴィヤーグラ。アシュヴィニー月（九～一〇月）――アーディティヤのプーシャン、ガンダルヴァのヴァスルチ、巨人ヴァータ、隠者ガウタマ、蛇のダナンジャヤ、ヤクシャのスシェーナ、アプサラスのグリターチー。カールッティカ月（一〇～一一月）――ガンダルヴァのヴィシュヴァーヴァス、隠者バラドヴァージャ、アーディティヤのパリジャニャ、蛇のアイラーヴァタ、アプサラスのヴィシュヴァーチー、ヤクシャのセーナジット、巨人のアーパ。マールガシールシャ月（一一

～一二月）――アーディティヤのアンシャ、隠者のカシュヤパ、ヤクシャのタールクシュヤ、蛇のマハーパドマ、アプサラスのウルヴァシー、ガンダルヴァのチトラセーナ、巨人のヴィディユット。パウシャ月（一二～一月）――隠者のクラトゥ、アーディティヤのバガ、ガンダルヴァのウールナーユ、巨人のスプールジャ、蛇のカルコータカ、ヤクシャのアリシュタネーミ、アプサラスのプールヴァチッティ。マーガ月（一～二月）――アーディティヤのトヴァシュトリ、隠者のジャマダグニ、蛇のカムバラ、アプサラスのティローッタマ、巨人のブラフモーペータ、ヤクシャのリタジット、ガンダルヴァのドリタラーシュトラ。パールグナ月（二～三月）――アーディティヤのヴィシュヌ、蛇のアシュヴァタラ、アプサラスのラムバー、ガンダルヴァのスヴァルチャス、ヤクシャのサティヤジット、隠者のヴィシュヴァーミトラ、巨人のヤジニョーペータ。

これらのものがそれぞれの月に太陽神スーリヤのもとにいて、隠者たちはスーリヤをほめたたえ、ガンダルヴァたちは歌い、アプサラスたちは踊り、巨人たちは守護し、蛇たちはスーリヤの乗る車の馬を用意し、ヤクシャたちは馬のくつわ・たずななどをととのえ、アーディティヤたちはスーリヤの周りに立ち、暑さや寒さ、雨や風を支配しているとされる（『ヴィシュヌ・プラーナ』二・八）。

スーリヤはヴィシュヴァカルマンの娘サンジュニャーと結婚した。サンジュニャーはマヌ、ヤマ、ヤミーの三人の子を産んだが、夫である太陽スーリヤの発する熱気に耐えられなくなって、侍女であるチャーヤー（「影」の意）を身代わりにして、自分は森に隠れた。スーリヤはチャーヤーを本当の妻と思い込み、彼女とのあいだにシャナイシュチャラ、マヌ（サンジュニャーの子とは別）、タパティーをもうけた。ある時、サンジュニャーの子のヤマと言い争ったチャーヤーはヤマに呪いの言葉をあびせかけ、このことによって、彼女がヤマの本当の母ではないことをスーリヤに知られてしまった。サンジュニャーが荒野でさまよっているのを知ったスーリヤは彼女を探し求め、苦行によって得た眼によって彼女が雌馬となっているのを見た。そこで彼は雄馬に身を変えて妻のもとに行き、アシュヴィン双神、レーヴァンタの三人の子をもうけ、彼女を家に連れて帰った。巧みな工芸神であるサンジュニャーの父ヴィシュヴァカルマンはスーリヤの発光体を旋盤の上に置き、その輝きの八分の一を削り取った。そして、それらの光の破片でヴィシュヌ神の円盤、シヴァ神の三叉の鉾、軍神カールッティケーヤの槍、その他の神々の武器を作りあげたという（『ヴィシュヌ・プラーナ』三・二）。

『マハーバーラタ』にはスーリヤについての物語

が記されているが、地上に落ちている穀粒を集めて生活することによって一人のバラモンが太陽の領域に達したという、次のような話がある（静寂編）。

ガンジス河の岸辺に、マハーパドマという名の一人のバラモンがいた。ヴェーダを学びながらあちこち歩いているうち一人の隠者に巡り会い、パドマナーバという名のナーガ（蛇）のところに行くように教えられた。パドマナーバは太陽スーリヤの車を支えている蛇であった。マハーパドマがやっとパドマナーバの住処を探し当てた時、ナーガは外出中でその妻がいただけであった。彼はガンジス河の岸辺で食事もとらずに待ち続け、ついにパドマナーバに巡り会うことができた。彼はナーガに、神と合一するためにはどうしたらよいかを尋ねたところ、ナーガはウンチャヴリッティ（落ちている穀粒を拾い集めて生きる苦行者の生活）によって神と一つになることができると答えた。そこで、ナーガに教えられたとおりのウンチャヴリッティを行なうことによって、彼はスーリヤの天に昇ったという。

（別名）太陽の名称は『マハーバーラタ』（森林編）によれば一〇八あるというが、主なものをあげれば次のようである。サヴィトリ（刺激を与える者）、ヴィヴァスヴァット（輝く者）、バースカラ（光を作る者）、ディナカラ（日を作る者）、アルハパティ（日の主）、ローカチャクシュス（世界の眼）、カルマサークシー（人間の行為を監視する者）、グラハラージャ（星宿の王）、ガバスティマット（光線を持つ者）、サハスラキラナ（千の光線を持つ者）、ヴィカルッタナ（ヴィシュヴァカルマンによって光を取り去られた者）、マールタンダ（ムリタンダの子孫）、プラバーカラ（光を作る者）、ヴィバーカラ（輝きを作る者）、サプターシュヴァ（七頭の馬で引く車に乗る者）、ハリダシュヴァ（神聖な馬を有する者）、チトラバーヌ（光りかがやく者）、ローカバンドゥ（世界の友人）。

インドにおいては、古代から現代にいたるまで太陽崇拝が盛んに行なわれ、無数のスーリヤ像が作られ、全国いたるところにこれを祀る太陽寺院が建てられた。たとえば北インドではマトゥラーが古代のインドの太陽崇拝の中心地であったし、ウッタラプラデーシュ州のインドールは古名をインドラプラといい、グプタ王朝のスカンダグプタ（446 A.D.）の刻文に表わされる太陽信仰の中心地であった。ハルシャヴァルダナ王の時代にはカーニヤクブジャも太陽崇拝の中心地であった。中央インドのマディヤプラデーシュではビラサー、バゲーラカンダが、また、グプタ時代にはウッジャイニーが、東インドのビハール州ではパトナ（古代のパータリプトラ）、チャンパーラナ地方にあるラウリヤー・ナンダガルフ、ムザッファルプル地方のバサーリフ（古

代のヴァイシャーリー）、ガヤー地方のゴーヴィンダプルなどが太陽崇拝の中心となっていた。オリッサだけではなく東インド最大の太陽崇拝の中心地はプリーの西北約三〇キロメートルのところにあるコナールカ（あるいはコナラク）であり、ここにはオリッサのガンガー王朝の王ナラシンハデーヴァ一世（C. 1238-1264 A. D.）によって建てられた壮大な太陽寺院がある。南インドの多くのヒンドゥー教寺院のなかにも、スーリヤ、アーディティヤが祀られている（以上、L. P. Pandey: Sun Worship in Ancient India. p. 191 ff. による）。

ムガル朝のアクバール帝はイスラム教徒であったが、支配権を確立したのちに、従者たちに一日四回、朝・昼・晩・深夜に太陽を拝むように命じた。彼は太陽についてのサンスクリットの名称を一〇〇一個あつめ、毎日うやうやしい態度で太陽に向かい、それを唱えたという（E. O. Martin: The Gods of India. p. 38）。現在、完全な形で残されている太陽寺院の数は少ないが、信心深いヒンドゥー教徒は、朝太陽が昇る時、東の方向に向って片足で立ち、太陽に対してヴェーダの讃歌を唱え、祈りを捧げるという。↓サンジュニャー、チャーヤー

スーリヤヴァンシャ Sūryavaṃśa 日種族、太陽の種族。太陽神スーリヤを祖とするクシャトリヤの王イクシュヴァークによって開かれた王統、種族。同王の長男でアヨーディヤーを支配したヴィククシと、その弟でミティラーを治めたニミの系統とに分かれて発展した。仏教の開祖ブッダやジャイナ教の開祖マハーヴィーラもスーリヤヴァンシャの出身であるとされ、ラージプートの諸王もこの系統であるとされる。チャンドラヴァンシャ（月種族）の対。

スーリヤカーンタ Sūryakānta 「太陽の石」の意で、太陽の光線からできた石、日長石。触れると冷たいが、太陽の熱を放つといわれる。チャンドラカーンタ（ムーン・ストーン）の対。

スーリヤバーヌ Sūryabhānu 富の神クベーラの門番の名。ランカーの魔王ラーヴァナに殺された。

セートゥバンダ Setubandha 「ラーマの橋」の意で、インド亜大陸の南端にあるラーメーシュヴァラム島からスリーランカーの西北端のタライマンナルのあいだの砂州のこと。サムドラールとも呼ばれ、地図の上ではアダムス・ブリッジと呼ばれる。

ソーマ Soma ソーマはヴェーダの祭式で最も重要な供物とされる神酒の名であり、その原料である植物の名であるとともに、それを神格化した神名でもある。のちには月の神とされた。ソーマはゾロアスター教の経典『アヴェスター』に説かれるハオマと一致し、その起源はインド・

イラン共同時代にさかのぼる。『リグ・ヴェーダ』では鷲がソーマ草を天界からもって来たといわれるが（五・四五、九・六八、一〇・一四四）、この植物は山地に生える灌木の一種で、インド・アーリヤ族がインド西北部に侵入したのち、早くから実物は手に入らなくなり、代用品が用いられていたと推定されている。このソーマ草を石でたたき、圧搾して樹液をおし出し、それをパヴィトラと呼ばれる羊毛で作った濾化器で繊維などの不純物を取り除き、木槽の中で水や牛乳を混ぜて発酵させた飲料がソーマ酒である。パヴィトラによる樹液の浄化は、ソーマそのものの浄化のプロセスとみなされ、このことからソーマ神はソーマ・パヴァマーナ（自身を浄めるソーマ）と呼ばれることになった。

　ソーマ草はつる草の一種とする説やシロバナサルコステンマとする説などがあるが確定はされていない。この酒は一種の興奮飲料であり、飲む者を興奮させ、その精神を高揚させる効果があった。ソーマ酒はマドラ（蜜）ともアムリタ（強壮・不死のための飲料、甘露）とも呼ばれ、神々とともに長寿を願う人々に愛用された。インドラ神が悪竜ヴリトラなどと闘う時、ソーマ酒を飲んで英気を養った話はよく知られている。ソーマ酒は人間に活力を与え、身心を強壮にし、戦士に勇気を与えるとともに、病気を治し寿命を延ばして子孫を繁栄させるものと信じられていた。ヴェーダの祭式の中で、浄化した神酒ソーマを祭火に注ぎ、残ったものを祭官のバラモンをはじめとする人々が飲む儀式をソーマ祭といい、最も重要なものとされていた。



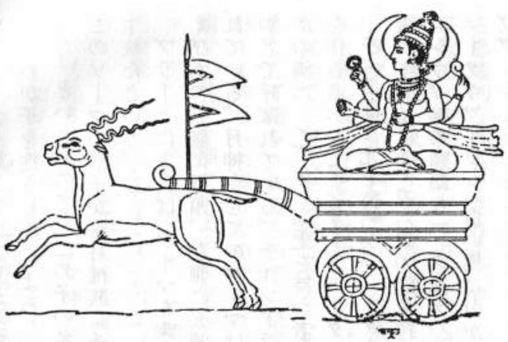
ソーマ草

　『リグ・ヴェーダ』では第九巻一一四の讃歌のすべてがソーマに捧げられ、その他の巻でもソーマに言及する讃歌は少なくない。神格化したソーマは「王者ソーマ」と呼ばれ、牡牛・水牛・駿馬などの別名を与えられ、また鳥とも草木の首長ともいわれる。ソーマはインドラ、プーシャン、ルドラとともに現われてその職能を分けあっている。一般に人間には好意的であり、恩恵に富む神格である。その住処は天上であり、このことから植物としてのソーマの起源も天上にあるとされるのである。

　『リグ・ヴェーダ』末期以後、ソーマは月の神とされるようになった。これは主として月をソーマの容器と考えたためである（辻直四郎『インド文明の曙』六九ページ）。

　プラーナの神話においてはソーマは星宿やバラモンや

植物を支配する神格である。『ヴィシュヌ・プラーナ』（四・六）によれば、ソーマはブラフマー神の子であるアトリの子であった。彼は、ラージャスーヤの祭祀を行なったのち、授けられた栄光と強大な支配権に酔いしれてしまい、傲慢となり、欲望をまる出しにして神々の指導者ブリハスパティの妻ターラーを誘拐した。ブリハスパティは妻を探し求めたが無駄であった。ブラフマー神がソーマにターラーを夫のもとへ返すように命じたのであるが、これも聞き入れられなかった。ついに戦争が始まった。



月神（チャンドラ）としてのソーマ

ブリハスパスティに敵意をもっていたウシャナスがソーマの側についたのを始めとして、ジャムバ、クジャムバ、およびすべてのダイティヤ（魔神）たちがソーマの味方をしたのに対し、インドラを始めとする神々はブリハスパティの側について、激しい闘いが行なわれた。これはターラーの救出のために行なわれたものだったので、「ターラーのための闘い」と呼ばれる。たまりかねたターラーはブラフマー神に救助を求めたので、ブラフマー神はウシャナスなどの魔神たちに争いを止めるように命じ、ソーマに強制してターラーを夫のもとに返させた。

　しかしターラーが戻って来た時、ブリハスパティは彼女が妊娠しているのに気づき、お腹の子が生れるまで彼女を家に入れなかった。彼女は夫の意志に従って外で男の子を産み、長いムンジャ草の木立の中に置いた。生れた瞬間からこの子の美しさは神々の目をくらますほどだったので、その美しさに引かれてブリハスパティもソーマもともに自分の子であると主張した。神々は言い争いを解決しようとして、ターラーに誰の子であるかを尋ねた。しかし彼女が恥しがって答えないでいると、この子は苛立って母親に「あなたは不道徳な女だ。もしあなたが、すぐに私の父が誰だか明かさないのなら、呪いをかけよう」と言った。そこでブラフマー神が再び仲に入って子供をなだめ、ターラーに「この子の父はブリハスパティかソーマか」と尋ねた。顔を赤らめたターラーは、ついにソーマの子であることを告

白した。光り輝く表情をした星宿の王ソーマは有頂天になってわが子を抱きしめ、「よろしい、息子よ、おまえは賢い子だ」といったので、この子の名はブダ（賢者）となった。このソーマの息子から月種族（チャンドラヴァンシャ）が生れたという。

プラーナによれば、ソーマを乗せる車は三つの輪を持ち、くび木の右側に五頭、左側に五頭の計一〇頭の白馬に引かれている。月神としてのソーマは、次のようにさまざまな別名で呼ばれている。チャンドラ（月）、インドゥ（ソーマ酒の滴）、シャシン（兎を持つ者＝月）、ニシャーカラ（夜を作る者）、ナクシャトラナータ（星宿の王）、シータマリーチ（清涼な光を持つ者）、シターンシュ（白い光りを持つ者）、ムリガーンカ（鹿の印を持つ者）、シヴァシューカラ（シヴァ神の頭飾り）、クムダパティ（蓮華の王）、シュヴェータヴァージン（白い馬に引かれている者）。↓ターラー、ブダ

ソーマナータ　Somanātha　「月の主」の意で、グジャラートのソームナート・パタンにあるシヴァ神のリンガの名。ガズニー朝のムハムードによって破壊されたと伝えられる。

タ　行

ダイティヤ　Daitya　ディティの子孫である巨人族。ヴェーダ以後の文献に現われる存在で、通常は神々に対立する悪魔的な存在とされる。ダーナヴァ、アスラとともに、宗教的・政治的にアーリヤ人の侵入に抵抗したインドの先住の種族を象徴すると見られている。

ダクシナー　Dakṣiṇā　司祭者のバラモンに贈られる牡牛・馬・黄金などの財物のこと。報酬・布施。一定の規則に従って、祭式を有効にするために欠くことのできない要素として贈与されるもので、祭官に与えるダクシナーはそのまま神々への捧げものであり、それを布施する人は財宝・繁栄・長寿を神々によって与えられるとされた。『リグ・ヴェーダ』の詩人はダクシナーの功徳をしばしば説き、「布施の讃歌」（ダクシナー・ストゥティ）と呼ばれる讃歌を作った（一・一二五）。このような意味で強調されるダクシナーが神格化されダクシナー女神となり、災難から人々を守るために祈りが捧げられる。

ダクシナーグニ　Dakṣiṇāgni　「南の火」という意で、祖霊を祀る祭式の三火の中の一つ。南の方角に住む祖霊のための祭火、あるいは屍体を火葬にする火。このことから、この火は「屍体を食う火」ともいわれる（『リグ・ヴェーダ』一〇・一六）。

ダクシナーパティ　Dakṣiṇāpati　「南方の主」の意で、ヤマ神の別名。

ダクシナームールティ　Dakṣiṇāmūrti　「南の像」、あるいは「南面」の意味で、学問・音楽の師であり、人々を最高実在ブラフマンとの合一に導く最高の苦行者としてのシヴァ神、特にシヴァ神のめでたい面を表わす。↓シヴァ

タクシャ　Takṣa　あるいはタクシャカ。㈠バラタの息子で、ラーマチャンドラの甥。ガンダーラ地方を治めた王で、おそらくタクシャシラー（タキシーラー）の建設者であろうといわれる。

㈡カシュヤパ仙の妻の一人で蛇族（ナーガ）の母といわれるカドルーから生れた蛇族の王の一人。

ダクシャ　Dakṣa　ブラフマー神の息子で、アーディティヤ神群の一人。『リグ・ヴェーダ』（一〇・七二・一―四）では、「ダクシャはアディティから生れ、アディティはダクシャの子である」という記述があり、註釈者はこの矛盾を神々の特質として、あるいは両者が同一の起源の神であることを表わすと解している。『シャタパタ・ブラーフマナ』



ダクシャ

では、ダクシャはプラジャーパティ（造物主）と同一視され、『マハーバーラタ』では彼はブラフマー神の右の親指より生れ、その妻は左の親指より生れたとされる。プラーナ文献では、彼は人類の始祖マヌの孫娘にあたるプラスーティと結婚して二四人、五〇人あるいは六〇人の娘をもうけたといわれる。『マハーバーラタ』の伝説によれば、彼は自分の娘の中の一〇人をダルマ神に、一三人をカシュヤパに与え、カシュヤパの妻となった娘たちからさまざまな神々、人間、鳥、蛇、そのほかの生物が生れ出たという。また、二七人の娘たちは月神ソーマの妻となり、彼女らは二七宿となった。ダクシャの娘の一人サティーはシヴァ神と結婚したが、夫と父との争いの結果、自ら火の上に身を投げて死んだ。『ハリヴァンシャ』によれば、ダクシャはヴィシュヌ神の化身とされ、多くの生類を創造した。ダクシャに関係する物語のうちで最もよく知られたものは、ダクシャの行なう供犠祭がシヴァ神によって妨害されたというものである。プラーナ文献によれば、ダクシャはヴィシュヌ神にたいする祭祀を行ない、そこに多くの神々が集まったが、シヴァ神は招かれなかった。神々は共謀して彼から祭祀の供物を取り上げようとたくらんでいたからである。これを知ったシヴァ神の妻ウマー（実は父と夫との不和のために自殺したサティーの生まれ変わり）は、事の次第を夫に告げ、今こそ力の見せどころであるとあおり立てた。そこでシヴァ神はヴィーラバドラという恐ろしい姿をした存在を造り出し、何百何千という半神的存在をつくり出してダクシャを攻めさせ、彼の祭祀を混乱に陥れてしまった。ダクシャは恐れおののき、シヴァに和解を申し入れたという。

↓アーディティヤ、カシュヤパ

タクシャシラー　Takṣaśilā　西北インドの古代都市名。ギリシャ語でタキシーラといい、現パキスタンの西パンジャーブ州と西北辺境州とにまたがって多くの遺跡が発掘されている。紀元前三二六年にはギリシャのアレクサンドロス大王が侵入して西方の文化をはじめて伝え、マウリヤ王朝の時代にはアショーカ王が太子のときこの地方の太守となったと伝えられ、さらにサカ、バクトリア、パルティアなどの諸族が侵入して東西文化の交流する場となった。仏教文化が栄え、西隣のガンダーラ地方とともに仏教美術が盛んに行なわれた。タクシャシラーという地名に関しては、「月光王本生話」と呼ばれる仏教徒の説話にその由来が語られている。『賢愚経』や『六度集経』によれば、昔、チャンドラプラバ（月光）という王があり、善政をしき、布施行を実践していた。このことを聞いた一人のバラモンがこの王のところに来て、王の頭を布施してくれるよう申し出た。王はこれまで九九九回の布施行を行なったので、この布施を行なえば一〇〇〇回の布施行を完成することになる、といってバラモンに自分の頭を切って施した。この王こそ前生におけるブッダその人であったという。この本生話から、タクシャシラーをタクシャ takṣa（切断）・シラー śirā（頭）というように解釈して、「チャンドラプラバ王が頭を切断して布施した町」とするのである。現在、タキシーラの中心部から八キロのところにあるサルダという岩山の上にバーラの塔というストゥーパがあり、ここが月光王捨身供養の本縁の地であるといわれる。

ダークシャーヤニー　Dākṣāyaṇī　ダクシャの娘としてのアディティの名。

ダーサ　Dāsa　あるいはダスユ。『リグ・ヴェーダ』においで神々の敵とされる悪魔的存在。インド・パンジャーブ地方に侵入したインド・アーリヤ人が、彼らに対立したインド西北部の先住民をこのように名づけたと推定される。ヴェーダの記述によれば、彼らは皮膚の色が黒く、鼻が低く、別種の言葉を話し、異なる信仰をもつものとされ、これらの先住民との戦いは多く神話化された。先住民たちは砦や柵に拠って外敵に抵抗したが、戦車に乗り、新鋭の武器を使用したインド・アーリヤ人にかなうべきもなく、殺され、あるいは追われ、多くは降伏して奴隷的な存在におとされた。先住民、あるいは悪魔の征服者としての功績はインド・アーリアの軍神インドラのものとされ、彼はプランダラ（「砦の破壊者」の意）と呼ばれた。

ダシャラタ　Daśaratha　スーリヤヴァンシャ（日種族）のイクシュヴァークの子孫で、コーサラ国の都アヨーディヤーの王。

『ラーマーヤナ』によれば、ダシャラタ王には長いあいだ息子がなかったので、聖者リシュヤシュリンガを招いて馬祀祭（アシュヴァメーダ）を催した。ちょうどその時、天上の神々は鬼神ラーヴァナに悩まされており、神々はヴィシュヌ神に人間に生れ変わってラーヴァナを殺して欲しいと懇願していた。ヴィシュヌ神はそれに対して、徳の高いダシャラタ王の子として地上に生れることを約束した。そこで、馬祠祭が終るとダシャラタ王の三人の妻から四人

の息子が生れた。まずカウサリヤーからはヴィシュヌ神の生れ変わりであるラーマが、カイケーイーからはバラタが、スミトラーからはラクシュマナとシャトルグナが生れた(『ラーマーヤナ』アヨーディヤー編)。ダシャラタ王は、このうち長子のラーマを愛し、王位継承者に定めたが、カイケーイーはこれを知って、ラーマを一四年のあいだ追放し、自分の息子バラタを太子とするように要請した。王はかねてよりカイケーイーに二つの願いごとをかなえてやると約束していたので、父に約束を破らせないために、ラーマは妻のシーターを連れて宮殿を出る決心をした。忠実な弟のラクシュマナも長兄に従って宮殿を出てしまうと、ダシャラタ王は悲しみに耐え切れず、カウサリヤー、スミトラー、カイケーイーにみとられて死出の旅路につくのである。

以上、『ラーマーヤナ』の最初に出てくる物語であるが、「戦闘編」においても、ラーマがシーターをラーヴァナの手から救い出し、シーターの貞潔が証明された時、ラーマとラクシュマナの前にダシャラタが姿を現わして祝福を与えたのちに消え去ったという記述がある。→ラーマ、カイケーイー

ダスユ Dasyu あるいはダーサ。ヴェーダにおいては、神々や人間の敵とされる邪悪な存在、悪魔とみなされる。インド・アーリヤ族に属さない西北インドの先住民を表わす。彼らは黒色の皮膚(ダーサ・ヴァルナ)をもち、醜い姿をした野蛮人として表わされる。→ダーサ

ダッタートレーヤ Dattātreya アトリとその妻アナスーヤーの子として生れたバラモン。ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ、とりわけヴィシュヌ神の化身として扱われる。彼には三人の息子、ソーマ、ダッタ、ドゥルヴァーサスがあり、彼らも神の化身といわれる。

ダディクラー Dadhikrā ダディクラーヴァンともいい、『リグ・ヴェーダ』(四・三八)に述べられる神聖な馬。ミトラとヴァルナがプール族に与えた名馬。

ダディヤンチュ Dadhyañc あるいはダディーチャ。ヴェーダの聖仙。火を司どる祭官アタルヴァンの子(『リグ・ヴェーダ』一・八〇)。ブラーフマナの神話によれば、インドラは彼に最高の知識(ヴェーダの学)を教え、もしそれを他にもらしたら彼は首を失うと警告した。しかし、その秘密の教えを聞かせるようアシュヴィン双神にせがまれて、ついに彼はそれを彼らに教えた。アシュヴィン双神はインドラの怒りを恐れてダディヤンチュの首と馬の首をつけ代えておいたので、インドラが彼の首を切り落すと、ただちに元の首とすげかえたという(『シャタパタ・ブラーフマナ』一四・一)。また、他の伝説によれば、インドラは彼の骨から武器ヴァジュラを作り、それによって悪魔ヴリトラを打

ち殺したともいわれ(『リグ・ヴェーダ』一・八四)、彼は三界の利益のために自ら死んでその骨を人々のために役立てたともいわれる(『マハーバーラタ』森林編)。

ダートリ Dhātṛ あるいはダータル。「創造者、支える者」の意で、生命の創造、健康の保持、生産、病気治療などを司どる神格。アーディティヤ神群の一神格としてのダートリは、太陽・月・天・大地・大気・光の創造者としての宇宙論的な役割をもっている(『リグ・ヴェーダ』一〇・一九〇)。ダートリは富・不死・雨などを望む時に祈りが捧げられる。

ダーナヴァ Dānava 「ダヌの息子たち」の意で、ディティの娘の一人ダヌとカシュヤパ仙とのあいだに生れた巨人たち。ヴェーダ以後の文献ではダイティヤと同じような姿をした巨人として描かれ、神々に敵対するものとされる。インド・アーリヤ族のインド侵入に対して政治的・文化的に抵抗した先住民をあらわすと見られている。

ダナダ Dhanada 「富を与える者」の意で、富の神クヴェーラの別名。

ダナパティ Dhanapati 「富の主」の意で、クヴェーラの別名。ダネーシュヴァラも同意。

ダナンジャヤ Dhanaṃjaya 「富を勝ちとった者」の意で、パーンドゥ王の五王子の一人アルジュナの別名。また、蛇族の母カドルーの一〇〇〇匹の蛇の中の多くの頭を持つ強力な蛇の名。

ダヌヴァンタリ Dhanvantari ㈠ヴェーダの一神格。㈡乳海を攪拌した時に生れ出た神々の医師。彼は医学アーユル・ヴェーダの開創者といわれ、スダーパーニ(神酒を手で運ぶ者)、アムリタ(不死)とも呼ばれる。㈢ヴィクラマ王の宮廷の「九つの宝」の一つといわれた医者の名。

タヌーナパート Tanūnapāt 「彼自身の子、自分で生れたもの」の意で、アグニ(火)の別名(『リグ・ヴェーダ』アープリー讃歌一・一四二、三・四など)。木片を摩擦させて火をおこす場合、火が木そのものの中に内在していると考え、このように言ったのである。

タパス Tapas 「熱」「力」「苦行」の意で、古代インドの宗教的生活において重要な役割を果した観念、宗教的行為。タパスは、それが信仰と知識を結びつけるものとされるところから、力の根源、およびそれを得るための手段、修行をさしている。元来は出家修行者、聖仙の専門的な修行方法であったが、神話・説話においてはクシャトリヤの王が子供の生れることを願う場合などに行なうことも多い。

ダマヤンティー Damayantī ヴィダルバ国王ビーマの娘で、ニシャダ国王ナラの妻。『マハーバーラタ』の挿

話（森林編）である『ナラ王物語』のヒロイン。賭博に敗けたナラ王は全財産と国土を失い、ダマヤンティーとともに森をさまよい、ついに眠っている妻を見捨てた。ダマヤンティーは夫を求めて森をさまよい、さまざまな危難に遭うが、チェーディ国の王妃に救われてその侍女となり、やがて父ビーマ王のもとに帰って夫を探し続けた。ナラがみにくい侏儒の姿に変えられたうえ、アヨーディヤー王リトゥパルナの御者となっていること知ったダマヤンティーは、いつわって婿選びの自選式を行なうとリトゥパルナ王に知らせたので、王は御者とともにこの式に参加しようとし、ここでダマヤンティーは夫ナラと再会する。ダマヤンティーの誠心によってナラはもとの姿にもどり、賭博で失った国土を取りもどし、ダマヤンティーとともに幸福な晩年を送った。→ナライシャダ

ダムボードバヴァ Dambhodbhava 『マハーバーラタ』の説話のなかで、高慢を戒める話の主人公として語られる王。自分が世界で一番強いとおごりたかぶっていた彼は、一バラモンからガンダナ山の麓で修行しているナラとナーラーヤナにはかなうまいと言われ、二人に戦いをいどんだ。ナラとナーラーヤナは彼に思い止まらせようとしたが聞きいれないので、ナラは一にぎりの麦わらを取ってそれを矢として投げると、高慢な王の耳や口や眼につきささり、ついにナラの足もとにひざまづいて許しを願ったという。

ダーモーダラ Dāmodara 「腹に縄をまかれた者」の意で、クリシュナの別名。クリシュナはヴァスデーヴァとデーヴァキーの子として生れたが、マトゥラーの悪王カンサによって殺されるのを防ぐために牧人ナンダとその妻ヤショーダーのもとで育てられた。幼いクリシュナは悪戯を好み、ある時ヤショーダーの牛乳と凝乳の器をこわし、バターを食べてしまったので、罰として体に縄を巻きつけられ大きな器に縛りつけられた。しかし、クリシュナは怪力でこの器を引きずって歩き、それが木にひっかかってその木を引き抜いてしまった。このことから、クリシュナはダーモーダラと呼ばれるようになった。→クリシュナ

ターラー Tārā あるいはターラカー。「星」の意で、神々の師ブリハスパティの妻。

　プラーナの神話によれば、自分の持つ力に驕った月神ソーマはブリハスパティの妻を奪い取った。妻を返してくれるようにとのブリハスパティの再三の要求をソーマが拒否したので、神々はブリハスパティに味方し、ダイティヤ、ダーナヴァなどの悪魔たちはソーマの側について戦争が始まった。この「ターラカー戦争」といわれる闘いは激しく、大地はその中心部まで震動して救いを求めた。そこでブラフマー神が仲に入って争いを止めさせ、ターラーは夫のもとに返された。ブリハスパティはターラーが身籠ったのを知った時、子供が生れたら棄ててしまおうと思ったが、生れ出た子供が美しく力強い男児だったので、ブリハスパティもソーマもともに自分の子供だと主張した。この争いを仲裁するため、ブラフマー神はターラーに本当のことを言うように命じたが、彼女は答えを拒否した。しかし、この態度に腹を立てた子供が、「本当のことを言うように」と母ターラーに言ったので、ついにターラーはこの子の父がソーマであることを告白した。喜んだソーマはこの子を抱きしめ、「でかしたぞ、お前は本当に賢しい子だ」と言ったので、この子はブダ（知慧）と名づけられた。



ターラー

　また、タントラの女神としてのターラーは一〇のマハーヴィディヤー（十大女神）の第二にあげられてカーリー女神の化身とされ、密教ではターラーは楽身としての仏の配偶神とされる。胎蔵界曼荼羅においては観音院の一尊として多羅菩薩（瞳子、妙目精）と呼ばれ、蓮華部の部母として多羅観音とも呼ばれる。→ソーマ、ブリハスパティ

ターラカ Tāraka 激しい苦行を行ない、神々を驚かせたダイティヤの王。彼を亡すためスカンダが生れたという。

ターラカー Tārakā 悪魔スンダあるいはヤクシャのスケートゥの娘として生れたダイティヤ女。マリーチャの母。彼女はアガスティヤ仙の怒りにふれて羅刹女とされ、ガンジス河のサルジュ河との合流点の反対側にある森の中に住み、そのあたり一帯を荒しまわっていた。そこで、ヴィシュヴァーミトラは、ラーマチャンドラにこの羅刹女を殺すように命じた。ラーマチャンドラは女を殺す気にはならなかったので、彼女から邪悪な力をもぎ取ろうとし、彼女の二本の腕を切り取り、ラーマの弟ラクシュマナも彼女の耳と鼻をそぎ落した。しかし、彼女は邪術の力によって彼らに石つぶての雨を降らせて攻撃したので、ラーマとラクシュマナは止むを得ず彼女を射殺した（『ラーマーヤナ』森林編）。

ターラケートゥ Tālaketu 「ターラ葉を旗印とする者」の意で、ビーシュマの通称、あるいはバラデーヴァの

別名。

ターラジャンガ Tālajaṅgha ハイハヤ族のアヴァンティ王ジャヤドヴァジャの息子。ハイハヤ族のターラジャンガの系統の祖。

タールクシュヤ Tārkṣya 『リグ・ヴェーダ』(一〇・一七八)に讃歌を捧げられている神馬。プラーナの時代にはヴィシュヌの乗り物ガルダ鳥の別名の一つとなった。

ダルマプトラ Dharmaputra 「ダルマ(正義・道徳)の子」の意で、パーンドゥ王の五王子の中の長子ユディシュティラの別名。母クンティーがドゥルヴァーサス仙より与えられたマントラ(呪文)によってダルマデーヴァに祈りをささげ、生れた子であるのでこのようにいう。→ユディシュティラ

ダルマラージャ Dharmarāja 「法の王」の意で、死者の国の王ヤマの別名。ヤマ神が法の体現者であることからいう。また、パーンドゥの五王子の長子ユディシュティラのこと。

ダルマーラニヤ Dharmāraṇya 「ダルマ(正義)の森、聖なる森」の意で、マディヤプラデーシュにある森の名、あるいは『ラーマーヤナ』に述べられる町の名で、この町はクシャの子のアムールタラジャスによってつくられたという。

ダンダ Daṇḍa 「棒・むち」あるいは「王権」の意で、力と主権を表わし、このダンダがカーリーの手にあるときには時間の冷酷な力を象徴し、力と破壊の双方を表わしている。さらに、ダンダは刑罰を意味した。

ダンダヴァクトラ Daṇḍavaktra カルーシャのダーナヴァの王。ヴリッダシャルマの子。クリシュナの反対の側に立ち、のちにクリシュナに殺害された。

ダンダカ Daṇḍaka ゴーダーヴァリー河とナルマダー河の中間にあったとされる広大な森の名。ラーマとその妻シーターがアヨーディヤーの宮廷から追放されて隠れ住んだのはこの森であり、この森の中でシーターはランカーの魔王ラーヴァナに奪い去られた。『ラーマーヤナ』の主要な舞台の一つ。

ダンダダラ Daṇḍadhara 「むちを持つ者」の意で、死者の国の王ヤマの別名。

タンドゥ Taṇḍu シヴァの眷族の一人で、すぐれた音楽師、舞踊の創始者。彼が創始した舞踊はターンダヴァといわれる。

チェーキターナ Cekitāna ヴリシュニ族の弓の名手。パーンダヴァ側と同盟を結び、ユディシュティラの即位式にも出席。バーラタ戦争においてはカウラヴァ軍のスシャルマン、チトラセーナなどと戦い、ドゥリヨーダナ王によ

って殺された(『マハーバーラタ』シャリヤ編)。

チェーディ Cedi プラーナに述べられる国名で、現在のチャンダイルとボグレーカンドに当たるとされる。その首都はシュクティマティーで、この国を治めた王たちの中では、ダマゴーシャ、シシュパーラ(バーラタ戦争ではパーンダヴァに味方した)の名が知られている。

チトラクータ Citrakūṭa 「輝く峰」の意で、『ラーマーヤナ』の作者といわれる聖仙ヴァールミーキの隠棲処。ラーマとシーターとがここに身を寄せていたといわれる。現在のマディヤプラデーシュ洲のバンダの東南約三二キロのところにあるチトラクートがこれに比定されている。

チトラセーナ Citrasena (一)クル族の王ドリタラーシュトラの一〇〇人の王子の中の一人。常に長兄ドゥリヨーダナに従い、バーラタ戦争の時にはビーマセーナ、スシャルマン、サーティヤキ、シャターニーカなどと戦い、パーンダヴァの第二子ビーマに殺された。(ドローナ編)。
(二)ユディシュティラ王のあとを継いでクル族の王位についたパリークシット王の子(初編)。
(三)カルナの子。バーラタ戦争においてはパーンダヴァのナクラに殺された(シャリヤ編)。
(四)アビサーラ国の王で、バーラタ戦争ではカウラヴァ側に立って戦い、シュルタカルマンに殺された(カルナ編)。
(五)トリガルタの王スシャルマンの兄弟。バーラタ戦争ではカウラヴァ軍に加わった(カルナ編)。
(六)ガンダルヴァ王の名前。パーンダヴァが二度目の賭博に敗けて、ドヴァイタの森の中に一二年間暮した時、このことを知ったカウラヴァ王のドゥリヨーダナが彼らの悲惨なありさまを見ようとしてこの森に入り、パーンダヴァの隠棲しているところに近寄ろうとするとガンダルヴァたちに遮られた。激しい戦いののち、ドゥリヨーダナはガンダルヴァ王チトラセーナの捕虜となり、かえってパーンダヴァのユディシュティラの助けをかりて救い出された(森林編)。そののち、このガンダルヴァはユディシュティラに味方するようになった。

チトラーンガダ Citrāṅgada 『マハーバーラタ』の物語に登場するクル族の王シャーンタヌとサティヤヴァティーとの子。シャーンタヌ王とガンガー女神とのあいだに生れたビーシュマにかわって王位を継いだが、同名のガンダルヴァと三年間争った末殺された。そこでビーシュマは彼の弟ヴィチトラヴィーリヤを王位につけた。→ビーシュマ、サティヤヴァティー、シャーンタヌ

チトラーンガダー Citrāṅgadā マニプラのチトラヴァーハナ王の娘で、パーンダヴァの第三子アルジュナが一二年間の追放をされた時の妻。アルジュナは追放の期

間中、さまざまなところを放浪し、マニプラ国に来た時、マドゥーカの花のように美しいチトラーンガダーを見初めた。しかし彼女は選定女（プトリカー。「息子の代りの娘」の意で、その娘から生れた男子は夫には属さず、娘の父に属し、その家の相続人となる。ある人に男子がない時、娘をプトリカーに選定することによって、その娘から生れた男子に遺産を相続し、祖霊供養を行なわせることができる）であったので、男子が生れた場合にはチトラヴァーハナ王の相続者とするということを条件に、アルジュナは彼女と結婚し、三年間マニプラで過した（『マハーバーラタ』初編、馬祀祭編）。→アルジュナ

チャイトララタ　Caitraratha　宇宙の中心のメール山の峰の一つであるマンダラ山の上にあるクヴェーラの森。ガンダルヴァのチトララタによってつくられたので、このように呼ばれる。

チヤヴァナ　Cyavana　あるいはチヤヴァーナ。アシュヴィン双神によって若返らせられた聖者。チヤヴァナの若返りの話はすでに『リグ・ヴェーダ』に語られており、『ブラーフマナ』を経て『マハーバーラタ』の説話に伝えられている。

この伝説によれば、ブリグの息子として生れたチヤヴァナは、ある池のほとりできびしい苦行を行ない、あまりにも長いあいだ柱のように立っていたので、その上に土塊が積み上げられて蟻塚のように見えた。ある時、シャリヤーティ王が大勢のお伴を連れてこの池のほとりに来たが、王の娘スカニヤーは蟻塚の上に乗って遊ぶうちに行者の両眼が螢のように見えたのでいたずら心から二つの光るものを棘で突き刺し、その結果行者の両眼はつぶされた。怒ったチヤヴァナはシャリヤーティ王の軍勢の兵士たちの大小便をつまらせてしまった。王がその原因を探るとそれが王女スカニヤーの行為によることがわかったので、チヤヴァナのところに行って詫びると、王女を妻として与えるよう求められた。王はためらわずにスカニヤーをチヤヴァナに与えた。

スカニヤーは老いた夫に献身的に仕えたが、ある時、沐浴をすませて裸のままでいる彼女をアシュヴィン双神が見かけ、若く美しい女性が年老いた人を夫としているのはよくないからアシュヴィン双神のうちの一人を夫とするように説得した。しかし、貞節な彼女がチヤヴァナだけを愛していると答えると、双神は「自分たちは神々の医師である。あなたの夫も若返らせよう。その上で、彼と自分たち二人のあいだからあなたの夫を選びなさい」と提案した。スカニヤーは夫と相談の上この提案に同意し、アシュヴィンは老チヤヴァナを水の中に入れ、自分たちも水の中に沈み、やがて彼ら三人は同じようにまばゆいばかりの美しさで水の中から出て来た。王女は三人をよく調べてから間違いなくチヤヴァナを選んだ。

若さと美しさを再び与えられたチヤヴァナは大いに喜んで、アシュヴィン双神に神酒ソーマを飲む資格を与えることを約束した。しかし、インドラ神は人間のあいだで医師として働いているアシュヴィン双神に神酒を飲む資格を与えることには同意しなかった。チヤヴァナはインドラのこのような意向を無視してアシュヴィン双神のために供養を続けると、腹を立てたインドラは武器ヴァジュラ(金剛杵)を彼に投げつけようとした。それをも無視してチヤヴァナがアシュヴィン双神のためにソーマ酒の器をとると、インドラはついにヴァジュラを放った。そのためにチヤヴァナの腕はしびれたが、インドラを倒すために火中に供物を投げ入れて苦行を続けると、その苦行の力によってマダ(「酩酊者」の意）という巨大なアスラが現われ、大きな口でインドラを飲み込もうとした。その恐しい姿を見てインドラはチヤヴァナ仙に許しを乞い、アシュヴィン双神が神酒を飲むことを認めた。そこでチヤヴァナは、マダをスラー酒と女とさいころと狩との四つの悪徳に分けたうえ、ソーマ酒で双神を満足させ、愛妻スカニヤーとともに幸せに暮した（『マハーバーラタ』森林編）。

チャクラヴァルティン　Cakravartin　「世界の支配者」の意で、仏教経典では転輪聖王といわれる理想の帝王。チャクラは「輪」で、ヴァルティンは「動かすもの、転ずるもの」の意で、チャクラヴァルティンは、チャクラと呼ばれる領土を支配する者を表わす。古代インドのとくに仏教徒やジャイナ教徒においては全世界を統治する理想の帝王とされ、大乗経典でこの観念が発展させられた。この王は、ふつう七つの宝と四つの徳をもって世界を支配するとされる。『ヴァーユ・プラーナ』（一・一三）によれば、チャクラヴァルティンはヴィシュヌのチャクラ（輪）を掌に持って生れ、その身体には三二の大きなしるし、無数の第二義的なしるしを持っているといわれる。

チャムパ　Campa　プリトゥラークシャサの子。ヤヤーティの子孫で、チャムパーの都の創立者といわれる。

チャムパー　Campā　あるいはチャムパーヴァティー。チャムパマーリニー、チャムパープリーともいい、古代インドのアンガ国の都。現在のビハール州バーガルプルの近くのチャムパーナガルとチャムパープルの両村にその遺跡がある。古代にはマーリニーと呼ばれていたが、この都が花環のようにチャムパカの木に囲まれていたことによってこのような名がつけられたという。また、この都にはチャムパカの木が沢山植えられていて花盛りにはその香りが

遠くまで匂うところからチャムパーといわれるとも、チャムパによって創立されたからこのように名づけられたともいわれる。

チャームンダー　Cāmuṇḍā　あるいはチャームンディー。非アーリヤ族起源の女神。ドゥルガー女神の恐ろしい面を表わす姿の一つ。七母神の一つ。ドゥルガーがチャンダとムンダというアスラを殺したことによってこのようにいわれる。→ドゥルガー

チャーヤー　Chāyā　「影」の意で、太陽神スーリヤの侍女の名。ヴィシュヴァカルマンの娘でスーリヤの妻であるサンジュニャーは夫の光があまりにも強いのに耐え切れず、侍女のチャーヤーを自分と同じ姿にして森の中に逃れた。夫のスーリヤはそれと知らず、チャーヤーを妻と思って彼女とのあいだにシャニ（土曜）、サーヴァルニの二男、娘タパティー（タプティー河）をもうけた。シャニの母としてシャニプラスー（シャニを産んだ女）といわれる。ある時、彼女はサンジュニャーの産んだ子ヤマをけとばしたので、本当の母でないことを見破られたという。→スーリヤ

チャールヴァーカ　Cārvāka　㈠クル族の王ドゥリヨーダナの友人の羅刹の名。カウラヴァ軍の大王ユディシュティラがバーラタ戦争勝利ののちにハスティナープラに帰った時、彼はバラモンの姿をしてユディシュティラ王に近づいたが見破られ、殺された。

㈡仏陀時代に活躍した古代インドの唯物論者たち。ローカーヤタ派ともいい、仏教・ジャイナ教とともにインドの非正統派の思想家。その思想を表わす著作『バールハスパティ・スートラ』（紀元前六〇〇年頃）は現存しないが、ジャイナ教や原始仏教経典に断片的に示されている。『サルヴァダルシャナ・サングラハ』（全哲学綱要）などの正統派の哲学書では、ヴェーダーンタ学派を最高位にすえ、チャールヴァーカを最下位に置いている。

チャールヴィー　Cārvī　「すばらしい女」の意で、クヴェーラの妻バドラーの別名。

チャールマティー　Cārumatī　クリシュナとその妻ルクミニーの娘。

チャンダー　Caṇḍā　あるいはチャンディー、チャンディカー。「恐ろしい女」の意で、シヴァの神妃ドゥルガーの別名。ドゥルガーがマヒシャと呼ばれるアスラを殺したことによる。この事件はベンガルではドゥルガープージャー祭として祝われる。→ドゥルガー

チャンドラ　Candra　月、および月の神。ソーマと同じ。

チャンドラヴァンシャ　Candravaṃśa　月種族。日種族（スーリヤヴァンシャ）の対。アトリ仙を祖とする王統

で、ソーマ、ブダ、プルーラヴァス、アーユを経てナフシャ、ヤヤーティの系統とカーシの王統に分かれ、ヤヤーティのもとで長男ヤドゥの系統ヤーダヴァと、末子プルの系統のパウラヴァとに分かれた。ヤーダヴァの系統からはヴァスデーヴァ、クリシュナ、バララーマが出た。『マハーバーラタ』のバーラタ戦争で活躍するのは主としてチャンドラヴァンシャの勇士たちである。

チャンドラカーンタ　Candrakānta　「月の石」（ムーンストーン）の意で、月の光によって作られたといわれる貴石。それ自身の光で溶けるともいわれる。

チャンドラケートゥ　Candraketu　㈠ラクシュマナの息子。㈡チャコーラ国の王。

チャンドラムカ　Candramukha　バクラの木に住むといわれるヤクシャの名。

チンナマスタカー　Cinnamastakā　「首を切られた女」の意で、首のない姿で表わされるシヴァの神妃ドゥルガーのこと。

ディヴォーダーサ　Divodāsa　㈠『リグ・ヴェーダ』に記される信心深い王。彼のためにインドラ神は、アスラの住む石の城一〇〇を破壊したといわれる。

㈡アハリヤーの双生児のバラモンで、アティティグヴァとも呼ばれる。ヴェーダに記されるトリッス族の王。

㈢カーシー王の名。ビーマラタの子で、プラタルダナの父。

ディグガジャ　Diggaja　「方角の象」の意で、八つの方角を守る八頭の象。すなわち、アイラーヴァタ、プンダリーカ、ヴァーマナ、クムダ、アンジャナ、プシュパダンタ、サルヴァバウマ、スプラティーカのことをいう。

ティミン、ティミンギラ　Timin, Timiṅgila　ティミンは伝説上の魚。ティミンギラは「ティミン魚を呑みこむもの」の意で、ティミンよりいっそう大きな魚。さらにそれを呑みこむ魚がティミン・ギラ・ギラといわれる。

ディヤーヴァープリティヴィー　Dyāvāpṛthivī　「天と地」（ディヤウス・プリティヴィー）の意で、『リグ・ヴェーダ』の天神と地神をいい、ふつうディヤーヴァープリティヴィーという両数のかたちで表現される。神々の両親。財産・成功・雨・食物・力などを与えるものとして祈りを捧げられた。ディヤウスは「天」、「日」を表わし、種々な神の父といわれ、アスラ、牡牛ともいわれる。これに対して地神プリティヴィーは母であり、牝牛であるといわれる。両神とも老いることなく、常に美しく、一切の存在の親としてあらゆるものを保護し、豊富な栄養を生み、限りない恩恵を与える。これら天地両神はアーリヤ民族の神々の中でも最も古い層に属している。とくに、ディヤウスは古代

ギリシャのゼウス、古代ローマのジュピター、北欧神話のティールと同じように、もともと天空を神格化したもので、その起源はインド・ヨーロッパ語族の分化以前にさかのぼる。しかし、ディヤウスは暁紅の女神ウシャスを始めとする多くの神々の父といわれながらも、ギリシャのゼウスのように神界の王座を占めたことはなく、ヴェーダ以後はさらに勢力を失った（北欧神話のティールは天空神としての性格を失って勇気の神、戦争の神として尊崇されるようになり、オーディン、トルに次ぐ地位を占めるようになった）。プリティヴィーは、ディアウスがかつての重要性を失ってからも大地の母神としてあがめられた。

「実にこれら天地両神は万物に幸いし、天則を守り、空界の詩宗（太陽）を維持す。麗しきもの生む・神聖なるこの両界のあいだを、清浄なる神太陽は、規範に従って進む（一・一六〇・一）。広く拡がり、偉大にして尽くることなき父と母と（天地）は、万物を保護す。天地両界はいと奔放なり、美しき婦女のごとく、父（なる神）が色美しき形をもって彼らを装いたれば（二）。両神（天地）の子、車を御し・浄化力ありて賢名なるもの（おそらく太陽）は、その奇しき力もて万物を清む。彼は斑ある乳牛（地）と善き種子ある牡牛（天）とより、常にその（牡牛の）精液（雨）と（牝牛の）乳（栄養）とをしぼる（三）。」（辻直四郎訳）

プリティヴィー（地神）に捧げられた讃歌は、『リグ・ヴェーダ』においては、次の一編だけである（五・八四）。

「実にかくの如く、汝は山々の重圧を担う、プリティヴィーよ、直路に富む（女神）よ、その威力により、威力ある（女神）よ、大地を活気あらしむる汝は（一）。讃頌は汝に向かいて、揺らめく（女神）よ、夜な夜なに響く、勝利の賞を目指して嘶く（牡馬）を（送り出だすが）ごとく、豊饒をもたらす種子（雨水）を放出する（汝に向かいて）、白く輝く（女神よ）（二）。その汝は、（みずから）堅固にして、勇力により大樹を地上に保持す、汝のために雲の電光（ひらめき）、天の雨水の降り来たるとき（三）。」（辻直四郎訳）。

大地は山岳を担い、樹木を支え、人間に豊饒をもたらすものとして、ヒンドゥー教の神話にも現われ、さらには母神の信仰にもつながるといわれる。次にあげるのは、地上に豊饒を与えることに因んで、プリティヴィーという名称の由来を説明する物語である（『ヴィシュヌ・プラーナ』一・一三）。

昔、邪悪と不信心なことで有名なヴェーナという名の王がいた。聖者たちは彼の神々をないがしろにする不信心な態度に耐えきれなくなって、彼を殺してしまった。しかし、

そうすることによって、もっとも悪い事態が起こった。王のいない国で悪人どもが暴虐の限りを尽くすようになったのである。聖者たちは、どんな悪王であっても、ないよりはましだと思い、死体となったヴェーナ王の大腿をこすった。すると、そこからまっ黒な身体の倭人が生れ出た。彼は生れ出るとただちに、「私は何をすればよいのですか」と尋ねたので、聖者たちは「ニシーダ（″坐れ″の意味）と言った。これよりこの倭人の子孫たちをニシャーダというようになったという。さて、すべての罪悪をこの黒い倭人の身体の中に移してしまったので、ヴェーナの死体は清らかなものとなった。そこで、その右腕をこすると、一人の美しく輝く王子が生れ出て来た。彼はプリトゥと名づけられ、父王の国を統治した。

このプリトゥが国を治めている時、恐ろしい飢饉が起こった。その時、大地の神プリティヴィーは、まだ地上の収獲を産み出していなかったので、この世の人々はたちまち困窮してしまった。そこでプリトゥは「プリティヴィーを殺して収穫を産み出させよう」と言った。これを聞いたプリティヴィーは牝牛の姿をして逃げまわり、プリトゥは彼女をついにブラフマー神の世界まで追いつめた。観念した女神は、プリトゥに「女性を殺すことによってどんな罪を犯すことになるのか知らないのですか」と言うと、プリトゥは「有害な存在を殺すことによって、多くの幸福が得られるなら、殺すことによって罪にはなりません」と答えた。そこで、止むを得ず、女神は、古くなって彼女が破壊させてしまった野菜や穀物を彼女のミルクによって蘇生させることを約束した。女神はプリトゥに、人々の利益のために、乳のしぼれるような乳牛を連れてくることと、すべての植物の種を播くことができるように地面を平らにすることを頼んだ。プリトゥは女神の要求の通りに乳牛を与え、地面を平らにした。これ以前には耕作もなく牧場もなく通商のための道もなかった。つまり、プリトゥの治世において始めて、これらすべてのもの、すなわち文化が生じたのである。地面を平らにして彼は人々を住まわせた。彼はスヴァヤムブヴァ・マヌを乳牛として、その乳を女神に飲ませ、それから人々の利益のためにそれを自分に受けた。それによって、いま人々が食べて暮らしているあらゆる種類の穀物や野菜が生れたのである。このようにプリトゥは大地の女神に生命を与えたことによって彼女の父となった。大地の女神のプリティヴィーという名は、プリトゥという父の名をとったものである。

ディヤウス Dyaus 『リグ・ヴェーダ』の天神。「光る」という動詞を語源とした、天空とその輝きを神格化した神で、プリティヴィー（地）とともにアーリヤ民族の神々

のうちで最古のもの。通常、ディヤーヴァープリティヴィー（ディヤウスとプリティヴィーの二神、天地両神）という両数のかたちで表現され、これら二神によって多くの神が産み出される。ディヤウスは種々な神の父であることからディヤウス・ピター（父なる天神）とも呼ばれる。↓ディヤーヴァープリティヴィー

ディリーパ Dilīpa　カトヴァーンガともいい、日種族のイクシュヴァークの系統を引く王。アンシュマットの子で、ラグの父、ラーマの曽祖父に当る。カーリダーサの『ラグ・ヴァンシャ』によれば、ディリーパには子供がなく、その原因をヴァシシュタ仙に聞いたところ、それはディリーパが「幸運と繁栄の牛」であるスラビに敬意を払わなかったからであり、子孫をのぞむならば、スラビの娘の子牛ナンディニーをよく世話すればよいとのことであった。そこで言われた通りにすると、ディリーパ王の妻スダクシナーはすぐに身籠り、ラグが生れ、この子孫は繁栄したという。↓スラビ

ディールガタマス Dīrghatamas　「長い暗黒」の意で、『リグ・ヴェーダ』（一・一四〇―一六四）の作者とされる盲目の聖仙。母方の姓からマーマテーヤ（ママターの子）、とも父方からアウチャティヤ（ウチャティヤの子）ともいわれる。彼は盲目に生れたが、アグニ神の信仰によって光をとりもどしたといわれる（『リグ・ヴェーダ』三・一二八）。また、『ブリハドデーヴァター』（四・一一―一五）によれば、ディールガタマスの目が見えなかったのは、彼が母の胎内にいるあいだに、母ママターに拒絶された腹いせからブリハスパティが呪いをかけたためであり、神々によって視力を回復したといわれる。プラーナでは、彼はカクシーヴァット、ダヌヴァンタリの父とされ、また、バリの妻スデーシャナーとのあいだに、アンガ、バンガ、カリンガ、プンドラ、スフマの五人の子をもうけたという。

ティールタ Tīrtha　巡礼者の訪れる聖地、および神殿のこと。河の岸辺にあることが多い。人々は聖地の聖なる河で身を浄め、その水を飲み、すべての罪を払い浄めるのであり、ヒンドゥー教徒の信仰生活においてきわめて重要な意味をもっている。

ティールタンカラ Tīrthaṅkara　ジャイナ教の聖者のことで、開祖マハーヴィーラは第二四番目の聖者とされる。(1)リシャバ、(2)アジタ、(3)サムバヴァ、(4)アビナンダナ、(5)スマティ、(6)パドマプラブ、(7)スパルシュヴァ、(8)チャンドラプラバ、(9)プシュパダンタ、(10)シターラ、(11)スレーヤームサ、(12)ヴァスプージャ、(13)ヴィマラ、(14)アナンタ、(15)ダルマ、(16)ターンティ、(17)クントゥ、(18)アラ、(19)マッリ、(20)ムニスヴラタ、(21)ナミ、(22)ネーミ、(23)パールシュヴァ、

(24)マハーヴィーラ、あるいはヴァルダマーナ。

ティローッタマー Tilottamā　天界の水の精アプサラスの名。彼女はもとバラモンの女性であったが、時ならぬときに沐浴をするという非礼をおかしたためにアプサラスとして生れる運命におかれた。ティローッタマーはトヴァシュトリ、ジャマダグニ、ドリタラーシュトラなどとともに、マーガ月（六～七月）のあいだの太陽の七守護神とされる（『ヴァーユ・プラーナ』二・一〇）。シヴァ神はこのアプサラスを恋し、彼女の美しい顔をいつも見ていられるように自分の顔を四つにしたともいわれる。

デーヴァ Deva　神、天。古代インドの神的存在の総称。デーヴァという言葉は「輝く」を意味するサンスクリットの語根（div）から派生したもので、もともと「輝くもの」「輝かしいもの」を意味し、天を表わす語と同じ起源をもっている。ラテン語のデウス、ギリシャ語のテオス、ゼンド・アヴェスタのダイヴァと語源的に対応する。

『リグ・ヴェーダ』のデーヴァは大自然の構成要素、および自然現象を神格化した自然神（天地両神、太陽神、暁紅神、暴風神、雨神、火神など）、特殊の活動や職能を象徴する神格（工巧神、創造神など）、抽象的な観念の神格化（意志を表わすダクシャ、信念を意味するシュラッダーなど）であり、一般に天上に住むと信じられていた。

これに対して、アスラは神々の敵といわれ、悪魔の通称として用いられる。アスラは語源の上からはゾロアスター教の最高神アフラ・マズダーのアフラに相当して「生気・活力」も意味していたと見られているが、恐るべき呪力を持つものとして魔神の列に加えられた。ゾロアスター教においてはダイヴァ（すなわち、古代インドのデーヴァ）の地位は下落し、アフラ（すなわち、インドのアスラ）が最高神とされたのである。

一般に、デーヴァの性格は厳格な絶対的唯一神というよりも人間を理想化したものといった傾向が強く、この傾向はプラーナ時代の神観になって、さらに明らかとなる。神々と人間・聖仙との交流は、叙事詩の神話・伝説においては日常的なことであり、神々と聖仙・人間の区別がつけにくいこともある。仏教においては、デーヴァは天と訳され、天に住む神々（諸王）とともに、神々の住処、すなわち天そのものを示すのがふつうである。

デーヴァキー Devakī　ヤーダヴァ族のデーヴァカの娘で、ヴァスデーヴァの妻、クリシュナの母。マトゥラーの王カンサのいとこ。前世においてはダクシャの娘でカシュヤパの妻であったともいわれる（『アグニ・プラーナ』二）。

彼女はカンサ王の大臣ヴァスデーヴァと結婚したが、二人のあいだに生れた子供は六人までカンサ王によって殺さ



クリシュナに授乳するデーヴァキー

れた。カンサ王は父王ウグラセーナを殺して王位についたが、いつかデーヴァキーの子供の一人に殺されるという予言におびやかされていたために、デーヴァキーから生れる子供を次々に殺していったのである。彼女から生れた第七番目の子バララーマはヴィシュヌ神の化身で、生れる直前にヴァスデーヴァのもう一人の妻ローヒニーの胎内に移されたために救われた。次に生れた第八子は真夜中にまっ黒な皮膚をして生れたのでクリシュナ（色の黒い者）と名づけられた。この子が生れるとすぐに父ヴァスデーヴァは門番の眠っている隙に連れ出して牧人ナンダのところに行き、その妻ヤショーダーとのあいだに生れた女の子とすり替えた。こうしてデーヴァキーの子供のうち、バララーマとクリシュナだけが死をまぬがれるのであるが、成人したクリシュナはマトゥラーで武術を学んだのちにカンサ王を殺し、地獄に行ってカンサ王に殺された六人の兄たちを連れもどし、母親の乳を飲ませてから彼らを天に昇らせたという。

→ヴァスデーヴァ、クリシュナ

デーヴァヤーニー Devayānī　ダイティヤ族の師僧シュクラの娘。彼女は父の弟子で、ブリハスパティの息子カチャを恋したが、拒否されたのを恨んで彼に呪いをかけたところ、反対にカチャから呪いをかけられ、バラモン出身の彼女がクシャトリヤの男と結婚しなければならない運命とされた。

彼女にはダイティヤ王の娘でサルミシュターという友人があった。ある日二人が沐浴している間に、風神ヴァーユがいたずら心をおこして二人の娘の衣類をとりかえておいた。衣類を身に着けてしまってからそれに気づいたデーヴァヤーニーはサルミシュターを激しく責め、水のない井戸に突き落とした。サルミシュターはヤヤーティ王によって救われ、父親のもとに連れもどされた。シュクラは娘が熱心にせがむので、サルミシュターの父であるダイティヤ族

の王に謝罪を求めた。ダイティヤ王はこの要求を入れ、デーヴァヤーニーが結婚したときは娘を侍女としてさし出すことに同意した。

デーヴァヤーニーはクシャトリヤの王ヤヤーティと結婚し、サルミシュターはその侍女となった。やがてヤヤーティ王はサルミシュターを愛するようになってしまい、彼女は男の子を産んだ。この時、身籠っていたデーヴァヤーニーは、これを知って激怒し、夫のもとを離れて父シュクラのところに帰り、そこで二人の息子ヤドゥとトゥルヴァシュを産んだ。

父のシュクラは娘に同情し、ヤヤーティに年老いて病弱になるよう呪いをかけ、のちに、ヤヤーティの息子ならば誰でも父親にかわってその呪いを引きうけることができるように変更した。ヤドゥをはじめとする息子たちは皆それを断わったが、サルミシュターの末子のプルは進んでその呪いを自分の身に引き受け、一千年のあいだ父親の罪をあがなった。その結果、プルは父の王統を継ぐことになり、パーンダヴァとカウラヴァの祖となった。

デーヴァラ Devala　『リグ・ヴェーダ』の讃歌の作者とされる聖仙。

デーヴァラータ Devarāta　㈠日種族（スーリヤヴァンシャ）の宮廷の聖仙。㈡シュナハシェーパの別名。

デーヴァルシ Devarṣi　デーヴァ（天・神）とリシ（聖仙）の結合した語で、神々の領域に属する聖仙。地上で修行を完成し、その結果として神々の世界にのぼった聖者。ナーラダ、パルヴァタ、ナラ、ナーラーヤナなど。

デーヴィー Devī　一般に「神」を意味するデーヴァという語の女性形で、「女神」を意味し、ヴェーダ神話では暁紅神ウシャス、地神プリティヴィー、河神サラスヴァティー、夜の女神ラートリー、森の女神アラニヤーニーなどをあらわす。プラーナの神話においては、とくにシヴァ神の



神々の崇拝を受けるドゥルガー女神

神妃としての女神を意味している。デーヴィーは宇宙のエネルギー、性力を意味するシャクティと結びついてマハーデーヴィーといわれる。具体的にはシヴァの神妃のパールヴァティー、ドゥルガー、ウマー、ガウリー、ジャガンマーターなどをいう。→シャクティ

デーヌカ　Dhenuka　ロバの姿をした巨人のラークシャサの名。彼はカーリー（あるいはターラー）の森に住んでいて、人々はこの巨人の噂を聞いてこの森を通ろうとはしなかった。そこで、クリシュナは兄のバララーマとともにその森に行き、激しく戦った末にうち倒した。また、他の物語ではバララーマとクリシュナが牧童たちと牛を見守っている時、一人のアスラが牝牛の姿をして群の中に入って来た。バララーマとクリシュナは直ちにそれがデーヌカであると見抜き、打ち殺したという（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇）。

トヴァシュトリ　Tvaṣṭṛ　『リグ・ヴェーダ』の工巧(くぎょう)神、技術・技工の神。この神名は「働く、作る、発明する」という意味をもつ動詞トヴァクシュに由来すると推定され、ギリシャ神話の鍛冶(かじ)の神ヘーパイストス、エジプト神話のプタハ、バビロニア神話のムンムなどに相当する神格である。トヴァシュトリの名は、『リグ・ヴェーダ』の中で六五回現われ、独立の讃歌こそないが、さまざまなものを作り出す神格として重要な働きをもっている。彼は美しくしなやかな腕と手を持ち（六・四七）、種々なものを精巧に作りあげる工人・技能者であり（一・八五、三・五四）、インドラの武器ヴァジュラ（雷電）をつくり（五・三一）、神々の盃を作り（一・一六一）、ブラフマナスパティの鉄の斧をとがらせた（一〇・五三）。トヴァシュトリはまた、天地あらゆるものを飾りつけ（一〇・一一〇）、胎内の子供を発育させ、人間や動物の形を作り出した（一・一八八など）。このことから、彼はガルバパティ（胎の主）とも呼ばれる。また、彼の娘サラニユーが太陽神ヴィヴァスヴァットの妻となり最初の人間ヤマとヤミーを産んだことによって、トヴァシュトリは人類の祖ともいわれる（一〇・一七）。彼の息子は三つの頭を持ったトリシラス（または名をヴィシュヴァルーパ）である。

プラーナ文献では、トヴァシュトリの出生についていくつかの説があげられている。すなわち、ヴィシュヴァカルマン（一切を作ったもの）の五人の子供アヒルブドニヤ、トヴァシュトリ、アジャイカパート、ルドラとして記され（『ヴィシュヌ・プラーナ』一五・一）、カシュヤパの妻スラビがマハーデーヴァの恩恵によって得た五人の子供アジャ、エーカパート、アヒルブッドニヤ、トヴァシュトリ、ルドラの一人とされ（『アグニ・プラーナ』一八）、また聖

仙カシュヤパとアディティとのあいだに生れた子供とされることもある（『マハーバーラタ』初編）。

カーンダヴァの森が焼かれた時、彼はインドラの側に立ち、巨大な山の塊を投げつけてアルジュナとクリシュナを苦しめたといわれる（同、初編）。一般にプラーナ文献では、トヴァシュトリは工匠ヴィシュヴァカルマンと同一視され、時にはプラジャーパティとも同一視されている。

ドヴァーラカー　Dvārakā　あるいはドヴァーラヴァティー。「多くの門を持つ町」の意で、ヤーダヴァ族のクリシュナの王国の首都。ヤーダヴァ族はジャラーサンダ王と敵対していたので、その攻撃からヤーダヴァ族を守るためにクリシュナのもとに結束し、ドヴァーラカーと呼ばれる堅固な都市を築いた。この都は別名をクシャスタリーといい、ライヴァタカなどの美しい山々が要塞のようにその周りに立ち並び、神々さえもこの都には容易に入ることはできなかったという（『マハーバーラタ』集会編）。

ドヴァーラカーにはクリシュナ、バララーマなどのヤーダヴァ族の指導者の集まる議会があり、宮殿は太陽と月のように輝いていた。ナンダナ、ミシュラカ、チャイトララタ、ヴァイブラージャという四つの美しい公園があった。ライヴァタ山は都の東の塁壁となり、ヴェーヌマンダ山が北の、スカクシャ山が西の、ラターヴェーシュタ山が南の自然の要塞となっていた。都の東には美しい湖があった。さらに、都には四つの門があり、鉄の輪などが防禦のためにつけられていた。しかし、クリシュナの死後、ドヴァーラカーの都は海に沈んでしまったという（『マハーバーラタ』）。現在この都市はグジャラートの西の海に沈んでいると推定されている。その付近の人々は、現在でもクリシュナの子孫であると称しているという。

ドヴィヴィダ　Dvivida　㈠巨大な猿の姿をしたアスラ。友人のアスラであるナラカが殺されたのを根にもって神々を憎み、聖仙の修行を邪魔し、さまざまな姿をして田畑をふみにじり人々を困らせた。しかし、バラデーヴァの鋤(すき)の刃を盗み、あざ笑ったのでバラデーヴァはついに棍棒を取ってこのアスラを打ち殺した（『ヴァーユ・プラーナ』五・三六）。

㈡ラーマと同盟してラーヴァナと戦った猿の名。

ドヴィーパ　Dvīpa　「島」の意であるが、古代インドの世界観を示す場合にはメール山を中心としてその周囲にある大陸を指す言葉として用いられる。『ヴァーユ・プラーナ』（二・二）によれば、ドヴィーパはジャムブ、プラクシャ、シャールマリ、クシャ、クラウンチャ、シャーカ、プシュカラの七つであり、それぞれラーヴァナ（塩水）、イクシュ（砂糖の水）、スラー（スラー酒）、サルピス（澄んだ

バター)、ダディ(凝乳)、ドゥグダ(牛乳)、ジャラ(水)の七海に囲まれている。

『マハーバーラタ』では、バドラーシュヴァ、ケートゥマーラー、ジャムブドヴィーパ、ウッタラクルの四つのドヴィーパ(洲)をあげ、このうち人間の住むジャムブドヴィーパをバーラタ、キムプルシャ、あるいはキンナラ、ハリヴァルシャ、イラーヴリタ、ラミヤカ、ヒラヌマヤ、ウッタラクル、バドラーシュヴァ、ケートゥマーラの九つのヴァルシャ(国)に分ける。

さらに『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、このうちのインドを表わすバーラタ・ヴァルシャは、インドラドヴィーパ、カシェールマット、タームラヴァルナ、ガバスティマット、ナーガドヴィーパ、サウミヤ、ガーンダルヴァ、ヴァールナ、クマーリカーの九つに区別される。

仏教の世界観ではスメール山(須弥山)の北にウッタラクル(北倶盧洲)、東にプールヴァヴィデーハ(東勝身洲)、南にジャムブドヴィーパ(南閻浮洲、贍部洲)、西にアヴァラゴーダーニーヤ(西牛貨洲)という四つのドヴィーパがあるとされる。

ドゥーシャナ **Dūṣaṇa** ランカーの魔王ラーヴァナの将軍の一人としてラーマの軍勢と闘ってラーマに殺された羅刹の名。彼はラーヴァナの兄弟のカラと混同されることもある。

ドゥシュマンタ **Duṣmanta** ドゥシュヤンタともいい、月種族のプルの子孫の王。シャクンタラーの夫で、バラタの父。ドゥシュマンタとシャクンタラーの恋愛、別離などは、カーリダーサの作品『アビジュニャーナ・シャクンタラー』の中で劇的に語られている。

ドゥッシャーサナ **Duśśāsana** クル族の王ドリタラーシュトラの百王子の一人。クル族の大戦争では長兄のドゥリヨーダナに付いてパーンダヴァの戦士であるナクラ、アルジュナ、サーティヤキ、サハデーヴァ、ビーマなどと戦い、ついにビーマとの棍棒戦に破れて戦死した(カルナ編)。↓ドゥリヨーダナ

ドゥフシャーサナ **Duḥśāsana** ドゥッシャーサナと同じ。↓ドゥッシャーサナ

ドゥーマヴァルナ **Dhūmavarṇa** 「煙色のもの」の意で、蛇族の王。『ハリヴァンシャ』の伝説によれば、ヤヤーティ王の五人の息子の一人でヤーダヴァ王朝の創始者であるヤドゥは、海に遊びに行った時、蛇王ドゥーマヴァルナに捕えられ蛇の都に連れて行かれた。ヤドゥはそこでドゥーマヴァルナの娘たちと結婚し、彼らから七つの家系が始まったという。この神話は、アーリヤ、ドラヴィダ、トラニア諸族の混血した種族の発生を示していると見られて

いる。

トゥムブル **Tumburu** ヴィラーダとも呼ばれ、天上の楽師ガンダルヴァの指導者の名。カラーヴァティーという魔法のリュートを持っていた。

トゥラシー **Tulasī** ヴィシュヌ派教徒に最も神聖視されている聖樹。学名はOcimum sanctum(聖なるメボウキ)で、インド全土に分布している。ヒンドゥー教徒はこの樹をヴィシュヌ神そのものとして尊重し、この樹の根元を毎朝水と牛の糞で清め、真夏には水の入った容器を樹にかけ、樹が枯れてしまったときには川に流してしまう。

トゥラシー樹がヴィシュヌ派教徒に崇拝されるようになった由来については、トゥラシーという女性の物語がよく知られている。昔、トゥラシーという名の女性があり、ヴィシュヌ神の妻となろうとし、きびしい苦行を行なった。ヴィシュヌ神の妻ラクシュミーはこれを知って激怒し、彼女に呪いをかけて樹に変えた。ヴィシュヌ神は不憫に思って、シャーリグラーマという石に姿を変え、つねにトゥラシー樹の傍らにいて彼女を慰めつづけたといわれる。

ドゥリヨーダナ **Duryodhana** クル族の王ドリタラーシュトラの百王子の長子。カウラヴァの総帥としてクル族の大戦争を行ない、ユディシュティラを総指令官とするパーンダヴァに敗退した。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、盲目に生れたドリタラーシュトラ王はガンダーラ王スバラの娘ガーンダーリーを妻に迎えた。ガーンダーリーは、たまたまハスティナープラの都を訪れた聖者ヴィヤーサの飢えと渇きを充分に満たしてやったうえ誠意をもって彼に仕えた。喜んだ聖仙



トゥラシー樹



古代インドの戦士

は彼女にドリタラーシュトラ王とのあいだに一〇〇人の王子が生れるだろうという祝福を与えた。すると間もなく彼女は身籠ったが、二年経っても子供が生れる気配はなかった。苛立った彼女は自分の腹を強く打つと、肉塊が生れて来た。そこにヴィヤーサが現われ、肉塊を一〇〇個に分けて一〇〇個のつぼに入れた。やがてそのつぼが自然に割れて一〇〇人の男子が生れ出た。続いて、一〇一個目のつぼから女子が生れた。この一〇〇人の男子の長子がドゥリヨーダナである。

ドゥリヨーダナは生れた時にろばのような声で泣き、ジャッカルが吼えるとか、鳥や鷲が啼くとか、嵐が起こるとか、さまざまな不吉な兆が現われた。ドリタラーシュトラはバラモン、ビーシュマ、ヴィドゥラなどの一族の中の賢者を呼び集めて、現在の王であるパーンドゥが死んだ後、このドゥリヨーダナが王位につくことができるかどうかを尋ねた。するとその時、再び天地が暗くなり、ジャッカルが吼えるなどの凶兆が起こった。これを見て、ヴィドゥラをはじめとする人々は、ドゥリヨーダナが成長したとき国を滅ぼすことになるだろうと予言し、直ちにこの子を棄てるように忠告した。しかし、親として生れたばかりの子を棄てるのは忍びないことであり、ドリタラーシュトラはこの忠告に従わなかった（初編）。

パーンドゥ王が世を去ると、その兄である盲目の王ドリタラーシュトラが王位に就き、弟パーンドゥの子供たちを引きとり、ドゥリヨーダナは従兄弟たちと一緒にハスティナープラの宮殿で成長した。武術の師ドローナのもとで、彼はパーンドゥの王子であるユディシュティラ、アルジュナ、サハデーヴァなどと技を競いあった。ドゥリヨーダナとビーマは棍棒術で他に並ぶもののない技を身につけたが、パーンドゥの五王子とは何かと対立する傾向があった。しかし、パーンドゥ王の未亡人であるクンティーの最初の子（太陽神スーリヤとの間に生れた子）カルナだけは常にカウラヴァ側を支持していた。一年経つと、ドリタラーシュトラはカウラヴァ、パーンダヴァ双方の王子の中で、勇気やそのほかの徳において最もすぐれたユディシュティラを王位継承者に定めた。パーンダヴァ側の力が強くなることを恐れたドゥリヨーダナは弟のドゥッシャーサナ、カルナ、母方の叔父シャクニと相談し、父王ドリタラーシュトラを説得した上で、ある口実をもうけてパーンダヴァをヴァーラナーヴァタに追放した。さらにドゥリヨーダナは建築師を雇ってうるしなどの燃えやすい材料で家を作り、そこにパーンダヴァの人々を住まわせ、彼らが眠っている間に火を放って焼き殺そうと計画した。しかし、賢者ヴィドゥラがひそかにこの奸計をユディシュティラに伝えたので、パ

ーンダヴァはあやうく焼死をまぬがれ、森に遁れた。その後、クル族の長老ビーシュマは、パーンダヴァに国の半分を譲って仲よく暮らすようにとの提案をし、ドリタラーシュトラはこれを認めた。

パーンダヴァはカーンダヴァプラスタに移り、インドラプラスタ（現在のデリー附近）の都を建設した。やがてパーンダヴァはマガダ国をはじめ近隣の諸国を従え、ユディシュティラは世界の王となるための即位式の大犠牲祭を行なった。この式のためにユディシュティラの宮殿に来たドゥリヨーダナは、水晶の地面を池と勘違いして沐浴するため着物を脱いだり、人工の池を地面と間違えてはまりこんだり、さまざまな災難に出会った。ビーマやアルジュナはそんな彼をあざわらい、侮辱した。ドゥリヨーダナは自殺を考えたが、伯父のシャクニはさいころ賭博の会を開いてユディシュティラを招き、彼からすべてのものを取り上げようと提案した。

ドリタラーシュトラ老王の承認を得ると、賭博の会が開かれ、ユディシュティラは黄金・宝石・象・戦争・領国のすべてを賭けて負けた。シャクニは賭博の天才であった。ユディシュティラはさらに家族を賭け、自分自身も賭け、最後に最愛の妻ドラウパディーをも賭けて負けた。勝ち誇ったドゥリヨーダナはドラウパディーの眼の前で、左の太ももを露出するという非礼をおかし、パーンダヴァに恥辱を加えようとした。怒ったビーマは「汝の太ももを棍棒で砕かない限り、私は祖霊の世界へ入るまい」と誓った。その時、ドリタラーシュトラの宮殿でまた不吉な兆があったので、老王はドゥリヨーダナに、すべてを返還し和解するよう勧告し、一応この事件は終わった。

しかし、ドゥリヨーダナはシャクニと相談して再度さいころ賭博の会を催した。この賭博は、勝負に負けたものが一二年間森に追放され、一三年目は人に知られず、一四年目になって初めて帰還を許されるというものであった。この時もユディシュティラはシャクニに負け、パーンダヴァは一三年の追放生活に入らなければならなかった（集会編）。

カウラヴァとパーンダヴァの対立が深まって、クルクシェートラを戦場として戦争が始まった。一八日の間続いた大戦争で、両軍の勇士たちは次々に戦死し、とくにカウラヴァの軍隊は絶滅し尽くされた。一人逃れたドゥリヨーダナにビーマが戦いをいどみ、棍棒をもって互いに打ちあったが結末がつかなかった。パーンドゥの王子アルジュナは、かつてドラウパディーが辱められた時、ビーマがドゥリヨーダナの太ももを打ち砕いてやると言った言葉を思い出し、ビーマの目の前で自分の太ももを打ってみせた。ビーマはすぐそのしぐさの意味に気づき、飛び込んで来たドゥリヨ

ーダナの太ももを打ち砕いた。死ぬ直前、ドゥリヨーダナはドローナの子であるアシュヴァッターマンをカウラヴァの総指揮官に任命したが、もうすでに一兵も残されていなかった。

〔別名〕アージャミーダ(アジャミーダの子孫)、バーラタ(バラタの子孫)、バーラタシャールドゥーラ(バラタ族の最上の人)、バーラタシュレーシュタ(同)、バーラターグリヤ(同)、ドリタラーシュトラジャ(ドリタラーシュトラの子)、ガーンダーリープトラ(ガーンダーリーの子)、カウラヴェーンドラ(カウラヴァの王)、クルクラダーマ(クル族の光栄)、クルラージャ(クル族の王)、クルシンハ(同)、クルーッタマ(同)、スヨーダナ(よく闘う者)など。

ドゥルヴァーサス Durvāsas 怒りっぽいので有名な聖者。アトリとその妻アナスーヤーとのあいだの子であるとも、シヴァ神の子とも伝えられる。彼の出生については次のような三つの物語がよく知られている。

㈠ある時、ブラフマー神とシヴァ神とのあいだに争いが起こり、怒りにたけり狂ったシヴァ神の姿を見て、その妻パールヴァティーは驚きのあまりこの夫と一緒に暮すことはできないと思った。これを知ってシヴァ神は、怒り易い性格を誰かに譲り渡してしまおうと決心した。ちょうどその時、一つの事件が起こった。夫への貞節で名高いシーラヴァティーが、癩病にかかっている夫ウグラシュラヴァスを彼の望みによって売春宿に連れて行こうとしていた時、その非道を許すことのできないアヌナーンダヴィヤ仙はウグラシュラヴァスに翌日の朝太陽が昇る前にその首が落ちるよう呪いをかけた。夫に対してあくまでも貞節なシーラヴァティーは、これを知って、翌朝太陽が出ないようにと反対に呪いをかけたため、翌朝太陽は昇らず、あらゆるところで混乱が起こった。ヴィシュヌ、ブラフマー、シヴァの三神をはじめとする神々はアトリ仙の妻アナスーヤーに依頼してシーラヴァティーの呪いを撤回してもらい、ことなきを得た。このことに満足した三神はアヌスーヤーに何でも望みをかなえてやるように言うと、彼女は三神のそれぞれが自分の子供として分身を現わしてくれるよう申し出た。そこでブラフマー神はチャンドラとして生れ、ヴィシュヌ神はダッタートレーヤとしてアナスーヤーから生れた。シヴァ神はドゥルヴァーサスとして生れると同時に、怒りっぽい性格をも彼に譲り渡してしまった。ドゥルヴァーサスが怒り易い性格をもっているのはこのためであるという(『ブラフマーンダ・プラーナ』四四)。

㈡ある時、シヴァ神はブラフマー神との闘いに敗れ、ヒマーラヤ山中で苦行をしているナーラーヤナたちに救いを求めたことがあった。シヴァ神が苦境を訴えると、聖仙ナ

ーラーヤナはとがった棒で自分の手のひらをつき刺すように命じた。シヴァ神が言われたとおりにすると、ナーラーヤナの手のひらから三本の血の流れが現われた。一本は星の世界に流れ入り、一本はシヴァ神の脳天に入り、最後の流れからはドゥルヴァーサスが生れ出た。この奇跡を見たブラフマー神は、驚いてただちに軍を引いた(『ヴァーマナ・プラーナ』二)。

㈢シヴァ神がトリプラスと闘った時、怒りにまかせてトリプラスに矢を射た。するとその矢はトリプラスを射殺してから一人の子供の姿となってシヴァ神の足の上にもどって来た。この子はドゥルヴァーサスと名づけられた(『マハーバーラタ』教訓編)。また、クル族の王パーンドゥの妻クンティーがクンティボージャ王の宮殿にいた時、ドゥルヴァーサス仙が彼女に子供を望んだ際に唱える五つのマントラ(呪文)を与えたという話はよく知られている。→クンティー

トゥルヴァシャ Turvaśa ㈠ヴェーダの中にしるされるトゥルヴァシャを支配した種族名。『リグ・ヴェーダ』の讃歌の作者の一人とされる。

㈡あるいはトゥルヴァシュ。ヤヤーティ王とその妻であるウシャナス・シュクラの娘デーヴァヤーニーとのあいだに生れた。彼は父王ヤヤーティにかけられた呪いを代って負うことを拒否したため、父の領国のうちの南東の一部を継いだにすぎなかったが、後に彼の系統は彼の兄弟プルの系統と混り合った。

ドゥルガー Durgā 「近づき難い女神」の意で、シヴァの神妃(デーヴィー、シャクティ)。カーリーとともに、シヴァの暗黒面をあらわしている。「ヴィンディヤ山に住む女神」(ヴィンディヤヴァーシニー)といわれるように、もとヴィンディヤ山の住民に崇拝されていた処女神であり、悪魔を殺したり、酒や肉、獣類の犠牲を好む女神とされていたが、『マハーバーラタ』では、困難から人を救い、とくに広野で迷ったり大海で難破した人々を救う女神として崇



アスラを殺すドゥルガー

拝される。
ドゥルガーに関する最もよく知られた物語は「水牛の姿をしたマヒシャという名の魔神（アスラ）を殺す話」である。『デーヴィー・マーハートミヤ』（二一四）によれば、昔、神々とアスラ（魔神）とが戦ったとき、マヒシャのひきいるアスラたちが神々を破ったことがあった。インドラをはじめとする古い神々は天界を追われ、シヴァ神とヴィシュヌ神とに助けを求めた。ヴィシュヌ、シヴァ両神は激怒して口から光を発し、ブラフマー神も同様に光を放った。インドラ、ヴァルナなどの神々の身体からも光が放たれ、それらの光が集まって燃える山のようになり、その中から一人の女神（ドゥルガー）が現われ出た。神々は喜んで、シヴァは彼の武器である三叉戟からもう一つの三叉戟をとり出して彼女に与え、クリシュナは自分の武器の円盤の中から別の円盤を取り出して与え、ヴァルナは法螺貝を、アグニは槍を、インドラは雷と鈴を、ブラフマーは水瓶を、ヒマヴァットは乗り物としてライオンを、その他の者もそれぞれ魔神を倒すに必要なものを彼女に与えた。神々から武器と賞讃の言葉を与えられた女神は、全世界をおおうような光を発してアスラの王マヒシャに攻めかかった。水牛の姿をしたマヒシャは、ライオン、人間、象などに姿を変えて戦い、再び水牛の姿となり、その口から人間の姿を半分出したときに女神によって殺されたといわれる。このことから、ドゥルガーはマヒシャースラマルディニー（マヒシャ・アスラを殺すもの）と呼ばれるのである。

また、ドゥルガーはシュムバ、ニシュムバの兄弟のアスラを倒すために、㈠ドゥルガー自身、㈡ダシャブジャー（一〇の武器を持つ者）、㈢シンハヴァーヒニー（ライオンの上に坐る者）、㈣マヒシャマルディニー、㈤ジャガッドマートリー（世界の母）、㈥カーリー、㈦ムクタケーシー（髪の毛を解いている者）、㈧ターラー、㈨チンナマスタカー（首を切られた者）、㈩ジャガドガウリーという一〇の姿をとるといわれる。

ドゥルガーは活動的なさまざまな像で表現され、とくにアスラを殺すマヒシャースラマルディニーが多く、女神が牛の尾をつかみ、一方の足で牛の背を踏みつけ、シヴァから与えられた三叉戟で牛を刺している姿が最も一般的である。同様の形ではあるが、ドゥルガーの三叉戟に刺しつらぬかれているものが牛ではなくて人間の頭をもつものである場合がある。これは魔神ニシュムバを殺す姿であり、この女神はニシュムバスーダニー（ニシュムバを殺すもの）と呼ばれる。

アーシュヴィン月（九～一〇月）に行なわれるナヴァラートラ祭は、ドゥルガー・プージャーとも呼ばれ、インド

最大の行事といわれる。この祭は一日から一〇日までにわたって行なわれ、とくにベンガル地方で盛んな祭である。月例祭の八日とドゥルガーがマヒシャースラに打ち勝った記念日の一〇日が重視される。

ドゥールジャティ　Dhūrjati　「重いもつれた錠をもつ者」の意で、ルドラ、あるいはシヴァの別名。→シヴァ

トゥンダ　Tuṇḍa　ナフシャによって殺された悪魔の名。彼にはヴィトゥンダという息子があったが、バガヴァティー（ドゥルガーのこと）によって殺された。

ドゥンドゥ　Dhundhu　マドゥの子で、地震や火山の噴火を起こさせ、ウッタンカ仙の修行を妨げたアスラの名。クヴァラヤーシュヴァ王に攻められた時、彼は砂の海の下にもぐって隠れたが見つけ出されて殺され、彼の二万一〇〇〇人の息子たちも三人を残して殺された。このため、クヴァラヤーシュヴァ王はドゥンドゥマーラ（ドゥンドゥを殺した人）と呼ばれるようになった。

トーサラカ　Tosalaka　マトゥラーの悪王カンサの闘技場においてクリシュナに殺された闘士の名。

ドラウパディー　Draupadī　パンチャーラ王ドルパダの娘で、パーンチャーリー（パンチャーラ王の娘）ともクリシュナー（黒い皮膚の女）、ヤージュニャセーニー（祭祀によって生れたもの）とも呼ばれる。クル族の王パーンドゥの五王子の妻で、ユディシュティラ、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァとのあいだに、それぞれプラティヴィンディヤ、スタソーマ、シュルタキールティ、シャターニーカ、シュルタセーナという男子をもうけた。

パンチャーラの王ドルパダは年少のころドローナとともに武術を学び友情を誓い合った仲であったが、帰国して王位に就いたドルパダのところに貧しい生活をしていたドローナが訪ねて来た時、彼はドローナに侮辱を加えたうえ追い帰した。このことを忘れることのできなかったドローナは、ハスティナープラでクル族の王子たちの武芸の師となり、王子たちがドルパダに立ち向かえる力がつくと、パンチャーラに攻め込ませてドルパダを捕え、その国の半分を奪った。

このようなドローナの行為に対する報復を考えたドルパダは、ガンジス河の岸辺に住むヤージャとウパヤージャという二人のバラモンを訪ね、ドローナを打ち倒すことのできる子供が生れるよう犠牲祭を行なって欲しいと頼んだ。ヤージャが祭火に供物を捧げると、頭に冠をつけ、手には剣と弓を持った男の子が火の中から生れた。その時、天から「この子はドローナを殺すであろう」という声があり、バラモンはこの子をドリシュタディユムナと名づけた。続いて美しく輝く女の子ドラウパディーが生れた。この時も

天から「この少女は神々のために働き、カウラヴァ側に脅威を与えるであろう」という声があった。この子は顔色が黒かったのでクリシュナーと名づけられた（初編）。

ドラウパディーが成長すると父王ドルパダは娘の自選式（夫を選ぶ行事）を開き、そこにクル族をはじめ近隣諸国から多数の王子たちが集まり、武技を競った。その中で見事に標的を射止めたのはパーンダヴァの第三王子アルジュナであった。そこで、ドラウパディーはパーンドゥ家の古いしきたりに従って、五王子共通の妻となった。『マハーバーラタ』の物語の中で行なわれている一妻多夫婚は直接バラモンの伝統の上に立つものではなく、パーンダヴァの特別の家法によるといい、また、この結婚を正当化するための三つの物語をあげている。㈠かつて、ある女性が夫を得られずシヴァ神に祈願した時、「夫をお恵み下さい」と五度叫んだので、シヴァ神は彼女に来世において五人の夫を与えると約束した。この女性が今生でドルパダの娘として生れ変わり、パーンダヴァの五王子と結婚した。㈡パーンダヴァがカウラヴァによって追放され、森のなかの陶土の家に隠棲していた時、五王子が托鉢をして集めた施物を持って帰って来たところ、彼らの母クンティーはそれを見もしないで、いつもの通りに「皆でお食べなさい」と言った。クンティーはそれが一人の美しい女性であることに気づいて狼狽し、後悔したが、五人の王子は母の言葉に真実でないものはないとして、五人の共通の妻とした。㈢インドラ神はシヴァ神に叛いたことがあり、その罰として天上を離れて地上の五ヵ所に再生し、ラクシュミー（またはシュリー「幸運と美の女神」）の化身が彼の妻となることに定められた。パーンダヴァの五人の王子は、実はインドラ一人の生れ変わりであり、ドラウパディーは、ラクシュミーの化身である。したがって、ドラウパディーは実際はただ一人の夫を持ったことになる。

パーンダヴァの五王子は共通の妻とともに幸福にインドラプラスタで暮らしたが、彼らのあいだで嫉妬が起こらないようにするために、天上の賢人ナーラダは、兄弟のうちの誰か一人がドラウパディーと密会しているところを妨げたものは一二年のあいだ追放され、禁欲の生活をしなければならないよう定めた。アルジュナは家畜を盗まれたバラモンを助けるため、武器を取りにやむを得ずユディシュティラとドラウパディーのいる部屋に入り、定めにしたがって森に退いたことがあった。

ユディシュティラは即位式を行なって世界の王となり、よく国を治めたが、カウラヴァの長子ドゥリヨーダナは叔父のシャクニと相談してさいころ賭博の会を催し、ユディシュティラを招いて全領土を取り上げようとした。シャク

ニは賭博の天才だったので、果してユディシュティラは黄金・宝石・戦車・全領土を賭けて負けた。彼はついには自分自身を賭けて負け、最後に最愛の妻ドラウパディーを賭けて彼女を失った。ドゥリヨーダナはドラウパディーを奴隷女として部屋の掃除をさせるよう命じた。そこでドゥリヨーダナの弟ドゥッシャーサナが婦人部屋に飛び込み、彼女の頭髪をつかんで集会所に引きずって来た。ドゥッシャーサナはカルナのさしずでドラウパディーの衣服をはぎ取ろうとしたが、彼女はヴィシュヌ神の化身であるクリシュナの助けによって一枚の着物をはぎ取られるたびに一枚の着物を着せられていた。パーンダヴァの第二子ビーマがドゥリヨーダナたちに対する呪いの言葉を吐いたのはこの時である。ドゥリヨーダナはさらにドラウパディーを侮辱したが、父王ドリタラーシュトラは彼女を慰め、彼女に望みはないかと尋ねた。すると、彼女は夫ユディシュティラの自由を望み、二つ目に他の四人のパーンダヴァの王子を自由にしてくれるように望み、三つ目の願いを許された時、もはやこれ以上の望みはないと言い切った。

一八日間にわたるクル族を二分した大戦争が終わり、パーンダヴァが勝利した時、ドラウパディーもハスティナープラに入った。ユディシュティラが馬祀祭を行ない王位についた後は、彼女はハスティナープラで五王子の母クンティー、ドリタラーシュトラ王とその妻ガーンダーリーによく仕え、彼らが余生を過すために森に入った時に彼女も彼らに従いたいと願ったが許されなかった。諸国からすぐれた聖仙がハスティナープラに集まり、それらの中にはドラウパディーをマハー・ラクシュミーその人であると見たものもあった（アーシュラマ編）。

ユディシュティラはやがて王位をパリークシットに譲り、四人の弟たちと最後の旅に出た。彼女もこの一行に加わり、ヒマーラヤ山を過ぎ、神々の山メール山に到着した時、彼女がまず倒れた。続いて四人が倒れ、死後彼らは罪を浄めた後、天に昇って神々の座に加えられたという（昇天編）。

（別名）パールシャティー（プリシュタの孫娘）、サイリンドリー（ヴィラータ王の侍女。パーンダヴァが追放され、ヴィラータ王の宮殿で身分を隠して過していた時、ドラウパディーは王の侍女となっていたため）、パンチャミー（五人の夫を持つ者）、ニティヤヤウヴァニー（常に若い女性）など。→ユディシュティラ、アルジュナ、ビーマ、ドルパダ

トラサダスユ Trasadasyu 『リグ・ヴェーダ』の讃歌の作者の一人とされる聖仙。注釈者サーヤナによれば、彼はプルクツァの子で、プルクツァが牢獄にあった時、その妃が王位を継ぐべき後継者の生れることを七人の聖仙に願ったところ、インドラとヴァルナに祈るようとのことだ

ったので、言われた通りにし、その結果生れたのがトラサダスユであったという。

トリヴィクラマ Trivikrama 『リグ・ヴェーダ』における太陽神としてのヴィシュヌの名。世界を三歩で歩くということによる名。この神話はプラーナに説かれるヴィシュヌ神の一〇化身（アヴァターラ）のうちのヴァーマナ（倭人（こびと））の物語に直接受け継がれている。↓ヴァーマナ

トリヴェーニー Triveṇī 「三つの組ひも」の意味で、ガンジス河とヤムナー河の合流点プラヤーガの別名。現在のアラーハーバード。ヒンドゥー教では河の合流点は神聖な場所とされるが、その中でもガンジスとヤムナーとの合流点であるプラヤーガは最も神聖視される。そこにサラスヴァティー河が地下のトンネルによって合流していると考えられていることによって、このように言われる。

トリガルタ Trigarta 古代の北インドにあった王国の名で「三つの砦を持つ国」の意。『マハーバーラタ』には、パーンダヴァの五王子が国外へ追放され、諸国を流浪したとき、トリガルタ国を通り（初編）、五王子の一人ナクラはトリガルタの王スラタを殺し、バーラタの戦争ではトリガルタの王スシャルマンがカウラヴァ側に立ったこと（ヴィラータ編）などが記されている。

トリクータ Trikūṭa 「三つの峰」の意で、ランカーの都がその上に建てられたと伝えられる山。あるいはインドの宇宙観においてその中心であるメール山から南に走る山脈の名。

トリジャーター Trijātā ラーマの妻シーターがランカー島に連れて来られた時、彼女の友人となって慰めた優しい心をもつ羅刹女。ダルマジュニャーとも呼ばれる。

ドリシュタケートゥ Dhṛṣṭaketu ㈠チェーディ王シシュパーラの息子。ヒラニヤカシプの子アヌフラーダの生れ変わりといわれ（『マハーバーラタ』初編）、カレーヌマティーという妹があった。父王亡きあとチェーディ王となり、パーンダヴァに臣従した。クル族の戦争においては、ドリシュタケートゥは一アクシャウヒニーの軍隊（二万一八七〇頭の象、二万一八七〇輛の戦車、六万五六一〇頭の馬、一〇万九三五〇人の歩兵より成る部隊）をもって参加し（戦争準備編）、パーンダヴァ軍の七司令官の一人に任命された。クリパ、アムバシュタ、ドローナと闘い、最後にドローナによって殺された（ドローナ編）。死後、天にのぼってヴィシュヴァデーヴァとなったという。

〔別名〕チャイディヤ（チェーディ王の子）、チェーディジャ（同）、チェーディパティ（チェーディ王）、チェーディプンガヴァ（同）、チェーディラート（同）、シャイシュパーリ（シシュパーラ王の子）、シシュパーラートマジャ（同）

など。

㈡パンチャーラのドルパダ王の子ドリシュタディユムナの子（『アグニ・プラーナ』二七八）。

㈢ヤヤーティの王。

ドリシュタディユムナ Dhṛṣṭadyumna パンチャーラ王ドルパダの長子で、クル族の王パーンドゥの五王子の共通の妻ドラウパディー（パーンチャーリー）の兄。パーンダヴァと同盟を結んでクルクシェートラの戦争ではカウラヴァと戦った。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、ドルパダとクル族の軍師ドローナは若い頃、アグニヴェーシャという聖仙のもとで武芸を学び友情を誓い合った仲であったが、パンチャーラに帰って王位に就いたドルパダのもとに、結婚して子供が生れてもミルク代もないドローナが訪ねて行った時、ドルパダは彼を友人として認めず、すげなく追い払った。これを怨みに思ったドローナはハスティナープラに行ってクル族の軍師となり、カウラヴァとパーンダヴァの諸王子に武術を教授し、彼らを使ってドルパダを捕えた上、彼を侮辱し、その領土の半分を取り上げた。

このドローナの仕打ちに報復しようとしたドルパダは自分自身の力でドローナにうち勝つ自信がなかったので、ドローナに立ち向かう力のある子供が生れるよう願って犠牲の祭りを行なった。その結果、祭祀の火の中から一人の男子と一人の女子が生れた。それがドリシュタディユムナと、のちにパーンドゥの五王子の妻となったドラウパディー（パーンチャーリー）であった。彼が生れた時、天から「この子はきっと、パンチャーラ国の恐れを除くであろう。ドローナを必ず殺すであろう」という声がした。ドルパダにドローナに立ち向うための子ドリシュタディユムナの生れたことはすぐに知れ渡ったが、心の広いドローナはこの知らせを気にとめず、かえって彼に武術を教授した。

叙事詩において次に彼が姿をあらわすのはドラウパディーの自選式（婿選びの行事）の時であり、この行事における条件などを集まった諸国の王子の前で発表した。この結果、ドラウパディーはアルジュナを夫として選び、しきたりに従ってパーンドゥ五王子の共通の妻となった。

カウラヴァとパーンダヴァが対立し、クルクシェートラを戦場として戦争が始まると、ドリシュタディユムナはパーンダヴァ軍の総司令官に任命された（初編、集会編、森林編など）。開戦当日、彼は早くも武術の師ドローナと対戦し、いく度も戦ったが結着がつかなかった。ドローナの弱点を知っているビーマとユディシュティラが、偽って彼の息子アシュヴァッターマンが死んだというと、これを信じたドローナは悲しみの余りに武器を投げ出し、深い静慮に

入った。そこにドリシュタディユムナが近寄ってその首をはねた（ドローナ編）。父親を殺されたアシュヴァッターマンは報復を誓い、ふくろうが眠っている子鳥を襲って皆殺しにしたことにヒントを得て、夜間、寝静まっているパーンダヴァの陣営に侵入し、眠っているドリシュタディユムナを足げにして目覚めさせたうえ彼を絞め殺した（夜間襲撃編）。死後、ドリシュタディユムナの霊は天に昇り火神と一体になったという（昇天編）。

〔別名〕ドラウパダ（ドルパダの子）、ドローナハントリ（ドローナを殺した人）、パーンチャーラ（パンチャーラの支配者）、パーンチャーリヤ（同）、パーンチャーラプトラ（パンチャーラ王の子）、パーンチャーララージャ（パンチャーラ王）、ヤジュニャセーナースタ（ヤジュニャセーナーの子）など。→ドルパダ、ドローナ

トリシラス　Triśiras　「三つの頭を持つもの」の意で、㈠『リグ・ヴェーダ』では、トヴァシュトリの息子。ヴィシュヴァルーパとも呼ばれる。㈡富の神クヴェーラの別名。㈢ヴィシュヌが殺したアスラの名。㈣ランカーの魔王ラーヴァナの子、あるいは友人で、ラーマに殺された。㈤三つの頭をもつ悪魔として人格化された熱病。三つの頭とは熱・寒さ・汗を表わす。

トリタ　Trita　トリタ・アープティヤともいい、『リグ・ヴェーダ』に現われる小神格の一つ。通常はインドラと関係して語られる。『アヴェスター』の神格ハオマの儀式に姿を現わすスリタ（Thrita）に対応すると見られる。トリタの敵はトヴァシュトリの息子、三つの頭を持つトリシラスである（『リグ・ヴェーダ』一〇・八）。

ドリタラーシュトラ　Dhṛtarāṣṭra　クル族の盲目の王。ヴィヤーサの子として生れ、パーンドゥ、ヴィドゥラは腹違いの兄弟である。盲目であったため弟のパーンドゥが王位を継いだが、夭折したため、ドリタラーシュトラがそのあとを継ぎ、パーンドゥの長男ユディシュティラが成長すると王位を譲った。このことから、ドリタラーシュトラの子供の百王子とパーンドゥの子供の五王子を中心としてクル族を二分する大戦争が起こった。クル族が二つの陣営に分かれた時、ドリタラーシュトラ自身は一応はカウラヴァの立場に立ったが、常にパーンダヴァの五王子に同情を寄せ、パーンダヴァの勝利で大戦が終った時、ユディシュティラの宮殿に迎えられた。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、月種族にシャーンタヌという王があり、最初の妻ガンガー（ガンジス河の女神）は八人の子供を産んだが七人までガンジス河に投げこんでしまい、八番目のビーシュマを残して姿を消した。次にシャーンタヌは漁師の娘サティヤヴァティーと結婚し、

チトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤが生れた。はじめチトラーンガダが王位を継いだが、同名の悪鬼に殺されたため、ヴィチトラヴィーリヤが王位についた。彼はカーシー王の娘アムビカーおよびアムバーリカーと結婚したが、子供が生れないままで世を去った。家系が断絶することを恐れたサティヤヴァティーはビーシュマにヴィチトラヴィーリヤの未亡人たちと通じて後継者を産んでくれるように頼んだが、生涯独身の誓いを立てているビーシュマはこれを断った。サティヤヴァティーはあきらめることなく、庶子のヴィヤーサを呼び出して同じことを命じた。サティヤヴァティーに命じられていやいやながらヴィヤーサに近づいたアムビカーは目を閉じたままでヴィヤーサのベッドに入ったので、彼女からは盲目の子供が生れた。これがドリタラーシュトラである。次の夜、ヴィヤーサのベッドに近づいたアムバーリカーは、彼の無骨な姿を見て血の気を失いまっ青になったままで交わった。このため、生れて来た子供は青色で、パーンドゥ（青色）と名づけられた。次の夜、彼女らの侍女がヴィヤーサと床をともにしたが、このとき彼女の心は喜びに充ちあふれていたので、侍女から生れたヴィドゥラは心広く、智慧に富む人となった（『マハーバーラタ』初編）。このようにして生れたドリタラーシュトラはパーンドゥ、ヴィドゥラとともに成長した。ドリタラーシュトラは長兄であったが盲目であるため、弟のパーンドゥをクル族の王とした。

ドリタラーシュトラが成人した時、叔父のビーシュマはガンダーラ王スバラに美しく聡明な娘ガーンダーリーがいることを聞き、使者を送ってドリタラーシュトラの妻にしたいと申し入れた。彼女はシヴァ神から将来一〇〇人の子供が授けられるだろうと予言されていた。スバラ王は盲目の王に娘を与えることを快く思わなかったが、月種族（チャンドラヴァンシャ）の有力な王国と同盟を結ぶことの利益を考えて同意した。ガーンダーリーは父の命に従い、盲目の王に仕えるために布で目を縛ってハスティナープラに来て、ドリタラーシュトラの妻となった。

ある時、ガーンダーリーは飢えと渇きに疲れ切ったヴィヤーサを厚くもてなしたところ、この聖仙は非常に喜び、彼女に一〇〇人の子供が生れるようにと祝福を与えた。彼女はたちまち妊娠したが、二年経っても子供が生れなかった。彼女が自分の腹を強く打つと、肉塊が出て来た。そこへヴィヤーサがやって来て、その塊りを一〇〇個に切り始めた。ガーンダーリーが娘も一人欲しいと言うと、ヴィヤーサは肉塊を一〇〇と一個に切り、それぞれ油のつぼに入れ蓋をしめた。やがてつぼは自然に割れて、一〇〇人の男子と一人の女子が生れ出た。一〇〇人の男子は「百王子」

と呼ばれるようになり、ドゥッシャラーと名づけられた娘は成長して、シンドゥ王ジャヤドラタの妻となった(初編)。

弟のパーンドゥ王が早く世を去ったので、やむをえずドリタラーシュトラが政治を行ない、ユディシュティラをはじめとするパーンドゥ王の子供たちと、ドゥリヨーダナをはじめとするドリタラーシュトラの子供たちは一緒に育てられ、学問や武芸を習った。パーンドゥの子供たちは武芸においても学問においてもすぐれており、中でも勇気と徳にすぐれたユディシュティラを、ドリタラーシュトラはクル家の長子として王位継承者と定めた。百王子の側はこれを快く思わず、さまざまな謀りごとをめぐらせて、パーンドゥの王子たちに挑戦した。とくに百王子のうちの長子ドゥリヨーダナは叔父シャクニと謀ってユディシュティラを賭博の会に誘い、財産も領国もすべて奪い取ったうえで森の中に追放した。やがて勢力をもりかえしたパーンダヴァとドリタラーシュトラの子供たちを中心とするカウラヴァはさらに対立を深め、ついにクル族は二大陣営に分かれて争うことになった。これはドリタラーシュトラの意に反することであり、老王はこれを心から悲しんだ(初編、集会編、森林編、戦争準備編)。

クル族の大戦争はパーンダヴァの勝利に終わったが、彼らは老王ドリタラーシュトラを尊敬し、ユディシュティラは老王を自分の宮廷にむかえて彼らは心から協調して暮らした。しかし、パーンドゥの二番目の王子ビーマとの対立があって、一五年ののち、ドリタラーシュトラはガーンダーリーとともに森に隠退し、故パーンドゥ王の妻クンティーもこれにしたがった。聖仙ヴィヤーサもここに来て、彼らの「クルの大戦争で死んだ人々の姿を一目でも見たい」という希望により、パーンダヴァ、カウラヴァ双方の死者たちの霊を呼び出した。盲目のドリタラーシュトラにも、ガンジス河の岸辺に立つクル族のなつかしい人々の姿が見えた。こののちもドリタラーシュトラはガーンダーリー、クンティーとともに森の中で修行に専念し、森の火事に焼かれて世を去った。親族のものたちは彼らの遺骨を拾ってガンジス河に流した。こうしてドリタラーシュトラ、ガーンダーリー、クンティーの三人の魂はクヴェーラ天に昇ったという(アーシュラマ編、昇天編)。

(別名)アムビカースタ(アムビカーの子)、アームビケーヤ(同)、バーラタ(バラタの子孫)、バラタシャールドゥーラ(バラタの獅子)、バラタルシャバ(バラタの雄牛)、バラタサッタマ(バラタの最上の人)、カウラヴァラージャ(クル族の王)、カウラヴェーンドラ(同)、クルナンダナ(同)、クルラージャ(同)、プラジュニャーチャクシュス(知慧の眼をもつ者)など。→アムビカー、ガーンダーリ

ー、サティヤヴァティー

トリナーヴァルタ Triṇāvartha つむじ風の姿となって小児クリシュナを連れ去ったが、かえって彼に殺された悪魔。

トリパーダ Tripāda 「三つの足を持つもの」の意で、熱病の名。三つの足とは熱、悪寒、発汗という過程を示す。

トリプラ Tripura 「三つの町」の意味で、㈠『ハリ・ヴァンシャ』によれば、この町は空中にあり、神々との戦いの時に焼き払われたという。㈡悪魔バーナの名。彼がシヴァ、ブラフマー、ヴィシュヌの三つの町から布施を受けたことによる。

トリムールティ Trimūrti 「三神一体」の意で、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三神の一体説、あるいは三神が一体となった神像。一般にブラフマー神が宇宙の創造を司り、ヴィシュヌ神がそれを維持し、シヴァ神がそれを破壊して再生をもたらすといわれる。ブラフマーはラジャス(情熱の特性、激質)の体現者、シヴァはタマス(暗黒の特性)の体現者、ヴィシュヌはサットヴァ(純質、慈悲と善の特性)の体現者であって、それによって世界を維持するともいわれる。これらの三神は、あたかもヴェーダが三にして一つであるように、三神であって一体であるという。

トリヤムバカ Tryambaka 「三つの目を持つもの」「三人の妻、あるいは三人の妹を持つもの」の意で、㈠シヴァの別名。㈡ルドラの一人の名。㈢シヴァの一二大リンガの一つ。

トリローチャナ Trilocana あるいはトリネートラ、「三つの目を持つもの」の意で、シヴァの別名。『マハーバーラタ』の伝説によれば、シヴァ神の第三の目は、彼がヒマーラヤで長いあいだ修行したのちに、彼の妻パールヴァティーがいたずら半分に夫の目のあいだに手を置くと、シヴァの額から炎のような輝きをもって現われ出たという。

ドルヴァ Dhruva 「固定したもの、動かないもの」の意で、天空において動くことのない星、北極星、あるいは北極星を神格化した神。ヒンドゥー教徒の結婚式では、夫婦の固い結びつきを象徴する神として祀られる。『ヴィシュヌ・プラーナ』の伝説によれば、スヴァヤムブヴァ・マヌにはプリヤヴラタとウッターナパーダという二人の息子があり、その中のウッターナパーダには高慢なスルチと優しいスニーティ(あるいはスヌリタ)という二人の妻があった。スルチからはウッタマが、スニーティからはドルヴァが生れたが、スルチはドルヴァを冷く扱い、自分の息子のウッタマだけが王位を継ぐのだと宣言した。スニーティもドルヴァもこれに従い、ドルヴァはクシャトリヤである

にもかかわらず聖者の仲間に入り、厳しい修行を行なった。インドラをも驚かすほどの修行ぶりに感じたヴィシュヌ神は彼を天空に昇らせ、北極星とした。彼は父の名に因んでアウッターナパーディといわれ、またグラハーダーラ（宿星の軸）とも呼ばれる。

ドルパダ　Drupada　ヤジュニャセーナとも呼ばれるパンチャーラ王、パーンドゥ五王子の共通の妻ドラウパディーの父。バーラタの大戦争ではパーンドゥの側に立って戦った。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、ドルパダは年少の時、バラドヴァージャのもとで学問・武芸を学んだ。その仲間に、後にクル族の軍師・弓の達人となったドローナがいて、二人は親友となった。ドローナとの友情を誓ったドルパダは自分が王位についた時には王国の富を彼の自由にしてよいと約束した。

教育の期間が終わってドルパダが帰国すると、それまで王位についていた父王プリシャタが死に、彼はパンチャーラ国の王となった（『マハーバーラタ』初編）。それから間もなく、ドローナは結婚してアシュヴァッターマンという子が生れたが、貧しかったのでミルクを買うことができなかった。困り果てたドローナはパンチャーラ国のドルパダ王のところへ行ったが、彼はドローナを友人として認めようとしなかった。ドルパダは富める者と貧しい者、学問のある者と無知なものとの間に真の友情があるはずがないと言ってドローナを追い帰した。この辱めに怒ったドローナは復讐を心に誓い、ドルパダに立ちむかうことのできる弟子を求めて旅に出た。

ついに彼はハスティナープラで、クル族のパーンダヴァとカウラヴァ双方の弓術・武術の師となることができた。彼はクル族の長老ビーシュマに、自分に対するドルパダの仕打ちについて語り、弟子たちにパンチャーラ国に行ってドルパダを捕え、ここに連れて来るように命じた。ドローナの武術の弟子であるクル族の若い勇士たち、ドゥリヨーダナ、カルナ、ユユツなどがパンチャーラへ攻め込んだがドルパダの敵ではなく、次にアルジュナを中心としてナクラ、サハデーヴァなどのパーンダヴァの勇士たちが戦った末、ドルパダを捕えてドローナの前に連れて来た。ドローナはドルパダに「私は汝の国を亡ぼした。汝は私の慈悲で今ここに生きている。かつての友情は真の友情ではなかったのかどうか」と詰問した。ドルパダは自分の非を認め謝罪したので許され、パンチャーラ国は南北に二分されて、ウッタラ（北）パンチャーラはドルパダのものに、ダクシナ（南）パンチャーラはドローナのものとなった。

このようにしてドルパダは王国の半分を失ったが、いつ

までもこれを恨みに思い、ドローナに立ち向かうことのできる力をもった男子の生れることを願い、ガンジス河の岸に住む隠者ヤージャ、ウパヤージャの兄弟に請願した。隠者は初めは彼の願いを受け付けなかったが、その根気に負けて子供を得るための祭祀を行ない、ドルパダにはドリシュタディユムナという名の男子と、クリシュナー（パーンチャーリー「パンチャーラ王の娘」、ドラウパディー「ドルパダの娘」ともいわれる）という女子が生れた。

パーンチャーリーが成長すると、ドルパダ王は彼女のために自選式（婿選びの行事）を催した。カウラヴァ、パーンダヴァ双方の若者が集まったが、王が掲げさせた標的を射抜いたのはパーンダヴァの五王子のうちのアルジュナであった。ドルパダは前々から自分の娘を勇名高いパーンドゥの王子アルジュナと結婚させたいと思っていたので非常に喜んだ。しかし、パーンドゥの長子ユディシュティラから、ドラウパディーは五人兄弟の共通の妻でなければならないと告げられた時、驚き不愉快にもなったが、それがパーンドゥ家の古い風習であると知って、五人との結婚を認めた。

クル族を二分した大戦争が始まった時、ドルパダはパーンドゥ側の七指令官の一人に任じられ（戦争準備編）、軍師ドローナやその息子アシュヴァッターマンと戦ったが、ついにドローナのために戦死した（ドローナ編）。大戦が終わり、ヴィヤーサが戦死した両軍の勇士の霊をガンジス河の水の上に呼び出したとき、ドルパダの姿もその中に見えた（アーシュラマ編）。ドルパダは死後、天界に昇り、神々の群に入ったという（昇天編）。

（別名）パーンチャーラ（パンチャーラ王）、パーンチャーリヤ（同）、パーンチャーララージャ（同）、パールシャタ（プリシュタの子）、プリシュタートマジャ（同）、ヤジュニャセーナなど。↓ドローナ、ドラウパディー

ドルヒユ　Druhyu　月種族の王ヤヤーティとその妻サルミシュターとの子。父ヤヤーティ王の呪いを五人の息子のうちの誰かが引き受けなければならなかった時、末子のヤドゥがそれを自分の身に引き受け、ドルヒユたち兄四人は拒否した。そのためヤドゥが王位を継ぐことになった。

トレーター・ユガ　Tretā-yuga　↓ユガ

ドローナ　Droṇa　ガンジス河の岸辺に住むバラドヴァージャの子で、クル族の軍師。クル族の大戦争ではカウラヴァ側に立ったが、パーンダヴァ側の人々からも尊敬をうけている英雄である。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、彼の父バラドヴァージャはガンジス河の岸辺に住んでいたが、ある日河に水浴に行くと、天女が水浴をしているのが見えた。彼に気づくと天女は急いでその場を去ろうとしたが、彼女の衣服の

端が草にからまって脱げてしまい、彼女の光り輝く裸身が白日のもとにさらされた。これを見たバラドヴァージャは思わず精液を木の器のなかにもらすと、たちまちその器の中から男の子が生れた。そこでこの子はドローナ（「木の器」の意味）と名づけられた（『マハーバーラタ』初編）。

　ドローナは父とアグニヴェーシャという隠者からさまざまな武術、なかでも弓術を習った。その仲間にパンチャーラの王子ドルパダがあり、二人は無二の親友となった。教育の期間がすぎるとドルパダは帰国して父のあとを継ぎパンチャーラ王となった。ドローナはシャラドヴァットの娘クリピーと結婚して一子アシュヴァッターマンを得た。

　ドローナはパラシュラーマから弓術の奥義を授かり弓の達人となったが、相変らず貧乏で、子供に飲ませるミルク代もなかった。彼はかつての友人でパンチャーラの王位についているドルパダのところへ行って助けを求めたが、ドルパダは彼を友人とは認めず、宮殿から追い出した。かつて友情を誓い合った友人の冷い仕打ちに復讐を誓ったドローナは、弓術の弟子を求めてクル族の都ハスティナープラに行き、クル族の長老ビーシュマに認められ、若い王子たちの弓術の師となった（初編）。

　弓術の指導を始めるにあたって、彼はカウラヴァ、パーンダヴァ双方の青年たちの前で、教育が終ったら、師である自分のために一つの返礼をして貰いたい、それはパンチャーラの王ドルパダの首に縄をつけてここに連れて来ることだ、と述べた。皆、おしだまってしまった中で、パーンドゥの王子アルジュナがすすんでそうすることを誓ったので他のものも同意した。多数の弟子の中で熱意と上達においてアルジュナが群を抜いており、ドローナはこの勝れた弟子をこよなく愛したので、自分の息子のアシュヴァッターマンとアルジュナに奥義を授けた。彼の弟子たちの中で、弓術ではアルジュナに並ぶものはなく、ドゥリヨーダナとビーマは棒術にすぐれ、ナクラとサハデーヴァは剣術の、ユディシュティラは戦車による戦闘の第一人者であった。

　すべての教育が終わった時、ドローナは弟子たちに最初の約束を果すよう命じた。ドゥリヨーダナとカルナが直ちにパンチャーラ国に急行しドルパダに戦いを挑んだが、かえって打ち敗かされた。そのあと、アルジュナが攻め入り、ドルパダの軍勢を破ったうえ、ドルパダの首を縄で縛ってドローナの前に連れて来た。ドルパダはようやく自分の非礼を認め謝罪したので、ドローナは彼の命を助け、パンチャーラ王国を二分して、ウッタラ（北）パンチャーラをドルパダに返し、ダクシナ（南）パンチャーラを自分のものとすることでこの事件に結着をつけた。

　それから一年経った時、パーンドゥ王の長子ユディシュティラがクル族の王位継承者に定められ、このことにドゥリヨーダナをはじめとするドリタラーシュトラの王子たちが反対し、クル族が二分される空気がかもし出された。この時、ドローナは、パーンドゥの王子アルジュナを王の集会の席に呼び出し、「おお、アルジュナよ、汝は一族のものたちの前で誓わねばならない。若し、戦いが始まって汝と私とが対立するようなことがあれば、私を自分の師とは思わずに全力をあげて戦うことを。」と命じた。アルジュナは師ドローナの命に従ってそのように誓言した。クル族の大戦争が起こった時、アルジュナは師であるドローナと戦ったのであるが、良心の呵責がなかったのはこのように誓言していたからである（初編）。

　ドローナはクル族が二つに分れて同族戦争に入ることには同意せず、何とかしてこの事態を避けようとし、老王ドリタラーシュトラにも忠告していた。しかし、いざ戦争が始まると、心ではパーンダヴァ側の勝利を望みながらも、自分自身は反対のカウラヴァ軍についた。戦いの始まる前にパーンドゥの長子ユディシュティラが祝福をうけにドローナのもとへ行ったところ、大いに喜んだドローナは彼を励まし、戦いでは、師である自分と対戦したとしても遠慮することはないといい、さらに自分がダルパ草の上に横たわった時、または気に入らない言葉を聞いた時には手に持った武器を投げ棄ててしまうという弱点まで彼に教えた。

　いざクル族の大戦が始まると、ドローナはパーンダヴァ軍の勇士アルジュナをはじめ、ドリシュタディユムナ、ヴィヤーグラダッタ、ドリシュタケートゥ、サハデーヴァ、ビーマセーナなどと戦って彼らを倒し、あるいは戦死させた。昔からのライヴァルであるドルパダもその孫ヴィラータも彼の手にかかって戦死した。しかし、彼の愛する息子アシュヴァッターマンが戦死したというビーマとユディシュティラによる嘘の知らせを聞いて信じ、悲しみに戦意を失ったドローナは、武器を投げすてて深い静慮に入り、その魂はブラフマンの世界に昇った（ドローナ編）。魂のない抜けがらの身体は坐禅をした姿のままであったが、そこに近づいたドリシュタディユムナがその首を切り落した（ドローナ編）。戦いが終わって、ヴィヤーサがガンジス河の水面に戦死した両軍の勇士たちの霊を呼び出した時、ドローナの姿もその中にあった（アーシュラマ編）。

　〔別名〕アーチャーリヤムキヤ（最上の師）、バーラドヴァージャ（バラドヴァージャの子）、バラターチャーリヤ（バラタ族の師）、ショーナーシュヴァ（くり毛の馬）、ルクマラタ（金色の戦車に乗るもの）など。→ドルパダ、アシュヴァッターマン

ナ　行

ナイミシャ　Naimiṣa　ナイミシャーラニヤともいい、ゴーマティー河の近くの森の名。この森の中で、サウティによって『マハーバーラタ』が唱えられたと伝えられる。

ナヴァグラハ　Navagraha　「九つの惑星」の意で、伝統的にはスーリヤ（太陽）、ソーマ（月）、ブダ（水星）、シュクラ（金星）、マンガラ、あるいはアンガーラカ（火星）、ブリハスパティ（木星）、シャニ（土星）、ラーフ、ケートゥの九星をいい、天文学上でも重要視され、人間の生活に大きな影響をもつとされた。このなかで、シャニ、ラーフ、ケートゥの三星は不吉な星とされ、南インドにおいてはこれらの三星は鳥や蛙とともに子供たちの病気を引き起こすものと信じられている。そこで、南インドのシヴァ寺院ではこれらの三星を神格化して祀る習わしがある。

ナヴァパトリカー　Navapatrikā　「九つの植物」の意で、ベンガル地方でシヴァの神妃ドゥルガーの秋の祭礼に用いられる九つの植物、ラムバ（おおばこ）、カチヴィー（アルム）、ハリドラー（うこん）、ジャヤンティー（大麦）、ベール（リンゴ）、ダーディマ（ざくろ）、アショーカ（無憂樹）、マーナ、ダーニヤ（稲）をいう。それぞれの植物が、ドゥルガー女神の九つの姿、すなわち、ブラフマーニー、カーリカー、ドゥルガー、カールッティキー、シヴァー、ラクタダンティカー、ショーカラヒター、チャームンダー、ラクシュミーによって支配されているといわれる。

ナヴァラトナ　Navaratna　「九つの宝」の意で、真珠・ルビー・トパーズ・ダイヤモンド・エメラルド・ラピスラズリ・サンゴ・サファイヤ、および現在は不明の宝石ゴーメーダ gomeda の九宝より成るお守り。九宝は九星に関係しているとされ、それぞれの石を身につけることによって特定の不幸をまぬがれるといわれる。



ナーガ（蛇）

ナーガ　Nāga　「蛇」の意で、神話の上では人間の顔をし、蛇の尾とコブラの首を持つ半神的な存在。下界パーターラに住まわせるために聖仙カシュヤパの妻カドルーが産んだという。母親の名からカードラヴェーヤとも呼ばれる。強烈な毒と神秘的な習性とによってインド全土で畏怖

され、崇拝される。また一年ごとに脱皮することから不死のシンボルとされる。蛇族のなかで有力なものは、マハーナーガ（大蛇）、ナーガラージャ（蛇王）と呼ばれる。また蛇王ヴァースキの妹マナサーのように、蛇の毒から保護してくれる女神として神格化され、崇拝されるものもあり、アルジュナと結婚したとされるウルーピーのように、人間と通婚した雌蛇もある。『マハーバーラタ』（初編）には、パリークシット王を殺害したタクシャカという名のナーガの物語がある。一般に神話・伝説上のナーガたちは人間に対して友好的であり、世界の終わりのとき眠るヴィシュヌ神を背に乗せて大海に浮んだり、神々とアスラが乳海を攪拌した時その攪拌棒となったりして重要な働きをしている。

ナーガパーシャ　Nāgapāśa　「蛇の縄」の意で、ヴィシュヴァジットともいい、ヴァルナの武器の名。魔法の縄で、もとナーガによって用いられていたが、のちにインド・アーリヤ族によって使用されるようになったといわれる。

ナガラ　Nagara　「都市」の意で、宗教的には七つの聖都といわれるものがある。(1)アヨーディヤー、(2)マトゥラー、(3)ガーヤー（ガヤー）、(4)カーシー（ヴァーラーナシー）、(5)カーンチー、(6)アヴァンティー、あるいはアヴァンティカー（ウッジャイニー）、(7)ドヴァーラカー、あるいはドヴァーラーヴァティー。

ナーガローカ　Nāgaloka　「蛇の世界」の意で、地下の世界。パーターラともいわれる。

ナーガーンタカ　Nāgāntaka　「蛇を殺すもの」の意で、ナーガの敵ガルダ鳥の別名。

ナクシャトラ　Nakṣatra　「星」「星座」の意で、とくに月の軌道を二七、あるいは二八区分したもの。古代インドの暦法は月を基準にしており、二七星はそのまま日をあらわしている。これらの二七、あるいは二八の星（星座）は、プラーナによれば、ダクシャの娘であり、月神チャンドラと結婚したといわれる。それぞれの星（したがってその星のあらわす日）には吉凶があり、それぞれの星（日）に一定の供物をバラモンに施すことによって功徳が得られるとされ、この布施行をナクシャトラ・ヨーガという。(1)アシュヴィニー（吉）。(2)バラニー（凶）。(3)クリッティカー（すばる星、大凶）。(4)ローヒニー（吉）。(5)ムリガシラス（吉）。(6)アードラー（凶）。(7)プナルヴァス（吉）。(8)プシュヤ（かに座の星雲、吉）。(9)アーシュレーシャー（凶）。(10)マガー（吉）。(11)プールヴァパルグニー（どちらでもない）。(12)ウッタラパルグニー（どちらでもない）。(13)ハスタ（吉）。(14)チトラー（凶）。(15)スヴァーティー（吉）。(16)ヴィシャーカー（凶）。(17)アヌラーダー（吉）。(18)ジェーシュター（凶）。(19)ムーラー（大凶）。(20)プールヴァーシャーダー（どちらで

もない）。(21)ウッタラーシャーダー（吉）。(22)シュラヴァナ（吉）。(23)シュラヴィシュター、あるいはダニシュター（凶）。(24)シャタビシャク（凶）。(25)プールヴァプローシュタパダ（どちらでもない）。(26)ウッタラプローシュタパダ（どちらでもない）。(27)レーヴァティー（吉）。

ナクラ　Nakula　クル族の王パーンドゥの五王子の第四子。パーンドゥにはクンティー、マードリーの二人の妻があったが、キンダマ仙の呪いによって妻に触れたとたんに生命を落とす定めに置かれていた。そこで、ドゥルヴァーサスという聖仙から子供が欲しい時にとなえると必ず望みがかなうマントラ（呪文）を授かっていたクンティーは、このマントラを唱えてユディシュティラ、ビーマ、アルジュナの三子を産み、マードリーのためにアシュヴィン双神を念じてマントラを唱えると、マードリーからはナクラ、サハデーヴァの双生児が生れた。パーンドゥ王が死んだ時、マードリーはその火葬の火の中に身を投げて夫のあとを追ったため、ナクラとサハデーヴァはクンティーが世話することになり、ハスティナープラのドリタラーシュトラ王の宮殿でカウラヴァの百王子などと一緒に育てられた。ドローナについて武術を習った諸王子のうちで、ナクラとサハデーヴァは剣術において最もすぐれていた。ナクラは武器を扱うことに巧みであったのでアティラティン（戦車戦の勇士）と呼ばれた（『マハーバーラタ』初編）。彼は五王子共通の妻ドラウパディーとのあいだにシャターニーカという子をもうけ、別の妻であるチェーディ王の娘カレーヌマティーとのあいだにもニラミトラという子があった（初編）。

クル族の大戦争が起こった時には、パーンダヴァの戦士としてユディシュティラを助け、開戦第一日目にドゥッシャーサナと戦い、その他カウラヴァ軍のシャリヤ、シャクニ、ヴィカルナ、ドゥリヨーダナ、カルナの子のチトラセーナ、サティヤセーナ、スシェーナなどとも戦い、あるいは傷つけ、あるいは倒した。大戦後はユディシュティラの政治をたすけ、彼が王位をパリークシットに譲って森に入った時にも彼に従い、天国への途中で倒れた。→ユディシュティラ

ナーサティヤ　Nāsatya　アシュヴィン双神のうちの一神の名。→アシュヴィン

ナーシク　Nāsik　ボンベイの北東一八五キロにある聖地。ゴーダーヴァリー川の岸辺にあり、デカンのヴァーラーナシーとも呼ばれる。『ラーマーヤナ』の主人公ラーマが、妻シーターとともにアヨーディヤーから追放されて長いあいだ住んでいた地であるといわれ、シーターがひそんでいたという洞穴がある。

ナタラージャ　Naṭarāja　ナテーシュヴァラ、ナテーシャとも呼ばれ、「舞踊の王」の意で、「踊るシヴァ」を指す。舞踊は古くから宗教儀礼と結びつき、舞踊を演じることによって作物の実りや戦勝が得られると信じられており、シヴァ神と舞踊との結びつきも、このような古代社会の舞踊そのものの意味から理解されるべきであろう。古代インドの戯曲論『ナーティヤ・シャーストラ』（第四章）ではシヴァが夕暮れに一〇八種の舞踊を演じたといい、なかでもヒマーラヤ山中で夕暮れに行なった舞踊、ターンダヴァの舞踊、宇宙の中心にあるチダムバラムの黄金でできた広間で行なわれたナダンタの舞踊が重要であるとされる。

ナタラージャとしてのシヴァ神は六世紀ころからヒンドゥー教寺院や窟院の壁面に浮彫りとして彫り始められ、一〇～一二世紀ころには南インドを中心にブロンズ像が作られた。シヴァ神が踊ったという一〇八種の舞踊は、南インドの聖地チダムバラムにあるナタラージャー寺院の装飾門ゴープラムに浮彫りにされている。→シヴァ



踊るシヴァ神

ナチケータス　Naciketas　『カタ・ウパニシャッド』において、ヤマ神に哲学を聞くバラモンの少年。父ヴァージャシュラヴァスによって供養のため死神ヤマに捧げられた時、ナチケータスは恐れることなく、「死んだ人について、いま、この疑問があります。ある人々は『彼は（死後も）存在する』といい、ある人々は『彼は存在しない』といいます。私はあなたに教えられて、それを知りたいと思います」（『カタ・ウパニシャッド』一・一・二〇）と、ヤマ神に生死の問題を質問した。ヤマはこの難問に答えることを避け、その代わりに一〇〇歳の長寿、象や宝石、美しい天女を求めることをすすめた。ナチケータスはそれが人間にとって刹那の喜びであることを知っており、なおも問いに答えるようヤマに迫ったので、ヤマもついに少年の願いを聞き入れ、生死を越えたアートマン説を教え示した。少年はこのようにしてヤマから永遠の真理を聞き、父親のもとに帰った。

ナフシャ　Nahuṣa　プルーラヴァスの長子アーユスの子で、月種族（チャンドラヴァンシャ）の聖なる王ヤヤー

ティの父。プラーナによるとナフシャには六人の息子があり、そのうちの一人がヤヤーティであり、ヤヤーティの長子ヤドゥがクリシュナの先祖となり、末子のプルがパウラヴァとカウラヴァの先祖となった。『マハーバーラタ』では初編でナフシャに言及し、彼が非常な努力をしてインドラの位にまでのぼったこと、聖者たちの呪いによって天界より落ちて蛇として生れ変わったこと、ナフシャのたっての願いによりアガスティヤ仙が彼をもとの姿に戻してやったことが記され、またあるところでは蛇とされたナフシャを救ったのはパーンドゥ王の五王子の長子ユディシュティラであるとも説かれている。

ナムチ　Namuci　カシュヤパ仙とダイティヤのダヌの子である悪魔の名。ナムチの伝説は『リグ・ヴェーダ』に最初に現われ、『マハーバーラタ』やその他のプラーナで発展させられた。『ヴァーユ・プラーナ』によれば、ヴィプラチッティとダイティヤの王ヒラニヤカシプの娘シンヒカーとのあいだの息子とされる。かつてインドラは悪魔ダーナヴァたちと戦い、ナムチを除いたすべてのダーナヴァを殺したが、ナムチに捕えられ、夜および昼のあいだに、棒や弓で、あるいは濡れたもの・乾いたものを使ってナムチを殺さないという約束をさせられたうえ釈放された。ナムチはこの約束につけこんでインドラ神から不死の神酒ソーマを奪った。インドラ神はアシュヴィン双神とサラスヴァティー女神に再び力を与えるよう祈ったところ、神々は濡れたものでもない乾いたものでもない水の泡を武器雷電（ヴァジュラ）として使うようにインドラに与え、インドラはこのヴァジュラによって、夜でもなく昼でもないたそがれの時にナムチの首を切り落した。

ナラカ　Naraka　アスラの名前。ナラカースラともいう。プラーナの伝説によれば、ある時、ヒラニヤークシャというアスラが海の上を歩きながら波を棍棒でたたいて興に入っていた。この音に驚かされた水の神ヴァルナはヴィシュヌ神に一部始終を訴えたので、ヴィシュヌ神は彼を殺そうとした。するとヒラニヤークシャは牙で大地を持ち上げ、下界に逃れた。大地の女神ブーミはこのアスラの牙に触れたとたんに身籠り、強大な力を持った子供を産んだ。これがナラカであり、ブーミは不浄な存在から生れた子供を不憫に思い、ヴィシュヌ神に助けを求めたところ、ヴィシュヌ神は彼に無敵の武器ナーラーヤナーストラを与えた（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇）。ある時ナラカは、神酒アムリタの源泉であり、不幸を除く力のあるアディティの耳環を盗んだ。神々の求めに応じてクリシュナはナラカを殺し、この秘宝を取り戻した。また、他の伝説によれば、ナラカはヴァルナの天の傘を盗んだり、インドラの乗物である象

アイラーヴァタを要求したりしたが、クリシュナが殺したという（『ヴァーユ・プラーナ』五）。→ヒラニヤークシャ

ナーラダ　Nārada　『リグ・ヴェーダ』の讃歌のいくつかの作者とされる聖者。『アタルヴァ・ヴェーダ』にもその名が見え（五・一九、一二・四）、プラジャーパティの一人とも、七大聖者の一人ともいわれる。ナーラダの出生については多くの物語が伝えられ、カーンヴァ族の出身とも、ブラフマー神の額から生れたとも、カシュヤパ仙の子ともいわれる。プラーナでは、最初はブラフマーの子として生れ、次にブラフマーの呪いによってウパバルハナという名のガンダルヴァとして生れ、続いてドルミラ王の子として生れてナーラダと名づけられ、再びブラフマーの子ナーラダとして生れ、猿（カピ）として一生を終わる。さらにもう一度、ブラフマーの子として生れ、ダクシャによって呪いをかけられ、次いでダクシャの息子、そして虫として生れる、と説かれる。『マハーバーラタ』の伝説によれば、ナーラダはダクシャの地上に生類を増やそうとする計画の裏をかく行為をしたため、ダクシャ女の胎中より生れ変わるよう呪いをかけられた。そのために彼はブラフマーとダクシャの娘の一人とのあいだに生れることになった。そこで彼はブラーフマ、デーヴァ・ブラフマーと呼ばれる。ナーラダはブリグ、ドゥルヴァーサスなどの聖者と同様に呪いをかける力をもつ聖者で、ある時、父のブラフマーがナーラダに女性として一生を終わるように呪いをかけたところ、反対にブラフマー神が自分自身の娘に恋心をいだくよう呪いをかけたことがあった。ナーラダは後世の伝説ではクリシュナとの関連が強調され、マトゥラーの悪王カンサがクリシュナの手にかかって殺されると予言したのも彼であるし、クリシュナの属するヤーダヴァ族の滅亡も彼の呪いによるという。

ナーラダはまた、詩の作者、諸王の相談役、神々と人間とのあいだの媒介者ともいわれ、また、人類に危機を与えるいたずら者としても知られる。天上の音楽師ガンダルヴァの長として音楽を守護し、リュート（ヴィーナ）の発明者ともいわれる。いくつかの音楽に関する書物やダルマスートラ（法典）の著者ともされる。

〔別名〕デーヴァルシ（天の聖者）、パラメーシュティジャ（最上の人より生れたもの）、パラメーシュティプトラ（最高の人・ブラフマーの子）など。

ナラ・ナイシャダ　Nala Naiṣadha　ニシャダの王で、ダマヤンティーの夫。『マハーバーラタ』（森林編）に収められた『ナラ王物語』の中心人物。ナラ王は徳高く容姿もすぐれ、ヴィダルヴァ国のビーマ王の美しい王女ダマヤンティーを妻として幸福に暮らしていたが、悪魔カリの呪い

によってプシュカラとのさいころ賭博に破れ、全財産と王国を失ってしまう。半裸の姿でダマヤンティーとともに森をさまよい、ついには眠っている妻をも見捨てる。彼は森の中で蛇王の力によって醜い侏儒の姿に変えられ、やがてアヨーディヤーの王リトゥパルナの御者となったが、最後はダマヤンティーの誠心によって元の姿にもどり、失った国土をとりもどしたうえ、妻とともに幸福な晩年を送った。この物語は、『マハーバーラタ』の中で賭博によって国を失ったパーンダヴァのユディシュティラ王を慰めるために、聖仙ブリハド・アシュヴァによって語られたとされるもので、叙事詩中で最も美しい物語として広く普及し、これにもとづいて多くの作品が作られた。→ダマヤンティー

ナラ・ナーラーヤナ Naranārāyaṇa ナラとナーラーヤナで、二人の古聖仙の名。ダルマ（正義）とアヒンサー（不害）の子で、クリシュナ、あるいはクリシュナおよびアルジュナと同一視されることもある。『ヴァーマナ・プラーナ』の伝説によれば、ナラ、ナーラーヤナ仙の修行が余りにも激しいので神々は驚き、恐怖を感じたので、インドラ神は美しい天界の水の精女アプサラスを彼らのところに遣わして彼らを誘惑させ、修行を妨げさせようとした。しかし、ナーラーヤナが一本の花を自分のももの上に置くと、そこから美しいアプサラスが生れ出た。その美しさは天界のアプサラスのそれをはるかにしのぐほどであった。ナーラーヤナは彼女を天上から来た精女とともに天界のインドラのもとに送り届けた。彼女は聖仙のもも（ウール）から生れたことによってウルヴァシーと呼ばれるようになった。→ウルヴァシー

ナーラーヤナ Nārāyaṇa 創物主ブラフマーの別名。あるいはヴィシュヌ神の別名。ナーラーヤナの名はブラフマナにおいて現われるが、その意味については諸説がある。ナーラーヤナのうちのナラは種族の名とも、人間の意ともいわれ、そのアヤナ（帰依するところ）であるからナーラーヤナと呼ばれ（『マハーバーラタ』戦争準備編）、また「人間の永遠なる眠りの場所」の意といわれることもある。プラーナでは一般に、ナーラーヤナを「宇宙の水の上を住居とする者」と解釈し、世界の終わりの時に海の上に浮かぶシェーシャという巨大なナーガ（蛇）



水の上で眠るナーラーヤナ

の上で休息している創造者として、彼はやがて目ざめて世界を再創造すると説いている。叙事詩ではナーラーヤナはヴァースデーヴァ（ヴァスデーヴァの子、すなわちクリシュナ）と同一視され、ヴィシュヌ神をバガヴァッド・ナーラーヤナとして信仰すべきことが強調される（『マハーバーラタ』静寂編）。→ヴィシュヌ

ナンダ Nanda ㈠クリシュナを生れたばかりの時から養育した牧人。ヤーダヴァ族のヴァスデーヴァは妻デーヴァキーとのあいだに八人の子供をもうけたが、父ウグラセーナを殺して王位についたマトゥラーの王カンサによって六子まで殺され、第七子バララーマはヴァスデーヴァのもう一人の妻ローヒニーの胎内に移されて救われ、第八子クリシュナは生れた直後に父によってマトゥラーから連れ出されて牧人ナンダとその妻ヤショーダーによって育てられ成長した。

㈡クル族のドリタラーシュトラ王の子の一人。バーラタ戦争において、ビーマセーナによって殺された（『マハーバーラタ』カルナ編）。→クリシュナ

㈢ヴィシュヌ神の別名（『マハーバーラタ』教訓編）。

㈣ナンダ王朝の創始者であるマハーパドマのこと。プラーナ文献によると、マガダ国ではシシュナーガ王朝、ナンダ王朝と続いていった。

ナンディーシャ Nandīśa 「ナンディンの主」の意で、シヴァ神の別名。

ナンディン Nandin 「幸せなもの」の意で、ナンディー（ナンディンという語の主格形）とも呼ばれる。シヴァ神の乗り物（ヴァーハナ）である牡牛の名。『ヴァーユ・プラーナ』によれば、この牡牛はカシュヤパ仙と牝牛スラビの子とされる。ヒンドゥー教のシヴァ神を祀る寺院の前には、牡牛ナンディンの像が常に置かれている。

（別名）ナーディデーハ、ターンダヴァターリカ。



聖牛ナンディンに乗るシヴァ神

ニヴァータカヴァチャ Nivātakavaca プラフラーダの子孫のダイティヤたちのことをいい、『マハーバーラタ』によれば、彼らの数は三〇〇〇万で、海底に住み、パーン

ドゥの五王子の一人アルジュナによって殺されたという。

ニカシャー　Nikaṣā　ランカーのラークシャサ（羅刹）であるラーヴァナの母の羅刹女。

ニクムバ　Nikumbha　㈠強力なラークシャサの名。ランカーの魔王クムバカルナの子で、ラーマの妻シーターを奪ったラーヴァナの弟。ラーマとラーヴァナとの戦闘において、ラーマに味方する猿王ハヌマーンによって殺された（『ラーマーヤナ』戦闘編）。

㈡ラークシャサの王。プラフラーダの第三子（『マハーバーラタ』初編）。

㈢シャトプラの王であるアスラの名。彼はヴィシュヌ神以外のいかなる者によっても殺されることがないという恩恵をブラフマー神より与えられ、強大な力とさまざまなものに姿を変える力をもっていたが、クリシュナ（＝ヴィシュヌ）によって殺された。

ニクムビラー　Nikumbhilā　ランカーのラークシャサ（羅刹）の守護女神。この女神の祭祀においては、木々が備えられ、飲酒、舞踊が行なわれ、人身供犠も行なわれたという。

ニシャダ　Niṣada　古代インドの世界観において、世界の中心であるスメール山の南、あるいは東にあるとされる山脈の名。

ニシャーダ　Niṣāda　ヴィンディヤ山脈中に住む山岳種族の名。インドアーリヤ系に属さない原住民で、伝説上はスヴァヤンブヴァの子孫のヴェーナより出たものといわれる。あるいは、バラモンの父とシュードラの母とのあいだに生れたカーストとも見られている。

ニディ　Nidhi　「宝石」の意で、富の神クヴェーラに属する八つの宝石、パドマ、マハーパドマ、マカラ、カッチャパ、ムクンダ、ナンダカ、ニーラ、シャンカをいう。ニディは、また、ニダーナ、ニカラ、シューヴァディとも呼ばれる。

ニドラー　Nidrā　眠りを神格化した女神。神々とアスラが乳海を攪拌した時に生まれた。世界の終りの時、ニドラーは水の上で眠っているヴィシュヌ神の中に入り込んでいて、ブラフマー神の指示によってその身体を離れると、ヴィシュヌ神は目を覚まし、再び世界の創造を始めるという（『マールカンデーヤ・プラーナ』八一）。

ニミ　Nimi　スーリヤヴァンシャ（日種族）の祖イクシュヴァークの子で、ミティラー王朝の創始者とされる。ニミは自分の望むままに祭祀を行なうことをヴァシシュタ仙に求めたが、この聖仙はすぐに返事をしなかった。ニミは我慢し切れずに他の聖者たちの助力を求めた。これを聞いたヴァシシュタ仙はニミに呪いをかけ、ニミの身体と心を

分離させてしまった。しかし、ニミの行なおうとした祭祀は他の聖仙たちによって行なわれ、それが完了して天の神々が供物を受け取りに来た時、聖仙たちは神々にニミを元の姿にもどすよう要請した。神々は了承したのであるが、ニミは再び肉体の束縛という苦しみを受けたくないとしてこれを拒否した（『ヴァーユ・プラーナ』四・五）。

ニーム　Nīm　ニムバ Nimba が原語で、学名は Azadirachta indica（インドセンダン）。樹皮、花、葉ともに苦く、種子からニーム油という油を取り、リューマチなどの外用薬として使う。この葉は、とくに邪悪な霊を払うために効果があると信じられている。この木の葉を焼く煙は人にとりついている悪霊を払い、また、悪霊が室内に入りこむのを防ぐとされる。ニームの樹の崇拝のうち、最も有名なものはニール・プージャーと呼ばれるベンガル地方の祭礼で、毎年チャイラトラ月の二九日（四月中旬）に行なわれる。また、オリッサではジャガンナート（ヴィシュヌ＝クリシュナ）やバララーマ、スバドラーなどの神像が、まったく欠点のない無疵のニーム樹で作られる。



悪霊を払うのに効力があるといわれるニーム樹

ニヤグローダ　Nyagrodha　ニグローダ、ニゴーダなどともいい、ヒンドゥー教徒・仏教徒ともに聖樹として崇拝される樹。バンヤンの樹。学名は Ficus bengalensis, Linn.、和名はバンヤンジュ。ベンガルボダイジュとも呼ばれる。中高木で横に枝を張り、気根がたれ下っており、クリシュナは少年時代、この樹を隠れ家としていたという。

ニーラ　Nīla　「青」の意。㈠古代インドの宇宙観における宇宙の中心、スメール山の南にある山脈の名。㈡ラーマと同盟してランカーの魔王ラーヴァナを攻撃した猿。㈢バーラタ戦争でアシュヴァッターマンに殺されたカウラヴァ軍の兵士。

ニーラカンタ　Nīlakaṇṭha　「青いのどを持つ者」の意で、シヴァ神の別名。→シヴァ

ニルリティ　Nirṛti　「死」の意で、死を神格化した女神。ルドラの一人であるアダルマの妻とも娘ともいわれる。

ヌリシンハ Nṛsiṃha　ヴィシュヌの化身の一つ。人獅子。→ヴィシュヌ

ハ　行

ハイハヤ Haihaya　月種族（チャンドラヴァンシャ）に属するヤーティ王の長男ヤドゥの系統をヤーダヴァといい、ハイハヤはその傍系の王、ハイハヤ王の系統。

ハイマヴァティー Haimavatī　「雪山の娘」の意で、『ケーナ・ウパニシャッド』（三・二五）では「雪山の娘ウマー」と述べ、後にシヴァの神妃パールヴァティーの別名といわれるようになった。→ウマー

バイラヴァ Bhairava　「恐ろしい者」という意味で、シヴァ神の別名。シヴァ神には、ウグラあるいはゴーラと呼ばれるシヴァの恐ろしい面を表わす八つの形態、即ちアシターンガ（黒い肢体を持つ者）、サンハーラ（破壊）、ルル（犬）、カーラ（黒）、クローダ（怒り）、タームラチューダー（赤い冠毛を持つ者）、チャンドラチューダー（月の冠毛を持つ者）、マハーン（偉大な者）がある。また、バイラヴァは五つの顔をもつシヴァ神の南面の顔を表わす。ダクシャの供犠祭の時、愛妻サティーを失ったシヴァ神は、妻の屍体を肩にかついであてもなく地上をさまよっていた。シヴァ神を慰めるために、ヴィシュヌ神はサティーの屍体をチャクラと呼ばれる武器で切りきざんで撒きちらした。そのばらばらにされた屍体が落ちた場所は神聖なところとなり、シャクティピータと呼ばれるようになって、それぞれがバイラヴァの形をしたシヴァ神に守護されているといわれる。バイラヴァはしばしば犬を伴い、あるいは犬に乗った姿で表わされ、そのためシュヴァーシュヴァ（その馬が犬であるもの）ともいわれる。→シヴァ



恐ろしい形相のバイラヴァ

バヴァ Bhava　「存在」の意で、ルドラ、あるいはシヴァの八つの力を表わす形の一つ（他の七つは、シャルヴァ、ルドラ、パシュパティ、ウグラ、マハーン、ビーマ、

イシャーナ)。バヴァは家畜と人間の主、天と地の所有者、信奉者をジャッカルから守るもの（ジャッカルは不吉なしるしとされる）、他の諸の邪悪なものから人々を守護するものといわれる。→シヴァ

パヴァナ Pavana 「清める者」の意で、風、あるいは風神ヴァーユのことをいう。「生命の主」ともいわれ、プラーナ（呼吸）を意味する語としても用いられる。

バカ Baka あるいはヴァカともいい、エーカチャクラーの町の近くに住む強大な力をもった羅刹で、町の住人から一定期間に車いっぱいの米と二頭の水牛と一人の人間を貢ぎ物としてさし出させていた。パーンダヴァの五王子がカウラヴァのドゥリヨーダナ王によって追放されて、その母クンティーとともにエーカチャクラーの町に来た時、この話を聞き、五王子のうちのビーマはバカを殺した（『マハーバーラタ』初編）。

バガ Bhaga 幸運の神。『リグ・ヴェーダ』ではアーディティヤ神群（アディティの子供たち）中の一神格で、「分配、幸運」を司る。インド・イラン共同時代に起源をもつ古い神格であり、『アヴェスター』のバガに対応する。『リグ・ヴェーダ』では一編の独立讃歌があり（七・四一・四）、「しかしてわれら願わくは、正にいま幸運に富む者ならんことを。朝にまた真昼時に、はた太陽の昇るときに、寛裕なる神（バガ）よ、われら願わくは、神々の好意の中にあらんことを。」（辻直四郎訳）というように、寛容の神・幸運の神といわれる。プラーナの神話においては、バガはアーディティヤ十二神のうちの一神とされ、妻シッディとのあいだに三人の息子マヒマン、ヴィブ、プラブと三人の娘スヴラター、ヴァラーローハー、アーシースをもうけたといわれる。カーンダヴァの森が燃えた時にはインドラの側につき、アルジュナ、クリシュナと闘った（『マハーバーラタ』初編）。

バガヴァット Bhagavat 尊称として用いられる言葉で、一般にヴェーダの神々や聖仙、クリシュナ、シヴァ、ヴィシュヌを表わす尊称。仏教では仏陀の尊称として用いられ世尊と訳される。叙事詩やプラーナではとくにクリシュナ＝ヴィシュヌを指している。『マハーバーラタ』によれば、クリシュナはマトゥラー地方にヴリシュニ族の一員として生れ、太陽神の崇拝を説いてその神をバガヴァットといったが、やがて、クリシュナ自身がそのバガヴァットと同一視され、ヴィシュヌの化身として神格化されて最高神ナーラーヤナと同一神とされるようになった。このようにクリシュナ＝ヴィシュヌをバガヴァットとして崇拝する人々をバーガヴァタ派といい、このバーガヴァタ派の聖典として編まれたのが『バガヴァッド・ギーター』である。→クリシュナ

バガヴァッド・ギーター Bhagavad-gītā ヒンドゥー教徒が最高の聖典とするサンスクリット宗教詩。もとバーガヴァタ派の人々によって編まれたものが、『マハーバーラタ』のビーシュマ編第二五章から第四二章にとり入れられ、一般に流布している形では全一八章七〇〇の詩句より成る。クル族の聖地クル・クシェートラで同族が相争う大戦が今まさに始まろうとするとき、パーンドゥ王の第三王子アルジュナは同族が殺し合うことの罪悪を考えて意気消沈する。「クリシュナよ、いま私の一族が戦おうとして、ともに対峙しているのを見て、私の肢体はくずれおち、口は涸れ、身には戦慄が起こり、髪の毛は逆立ちます。ガーンディーヴァ弓は手からすべりおち、皮膚も一面にほてっています。そして、私は立ち上がることもできず、私の心はさまよっているかのようです。また、私は不吉の前兆を見ます。クリシュナよ、戦いの中で自分の親族を殺してもよいことは何もありません。クリシュナよ、私は勝利を望まないし、王国も快楽も望みません。私たちにとって、王国が何になるのですか。クリシュナよ、享楽や生命が何になるのですか（一・二八—三二）。もし、戦いの中で、武器を手にしたドリタラーシュトラの一族のものが、武器を持たず無抵抗の私を殺そうとも、それは私の望むところです（一・四六）」と言って、アルジュナは武器を投げ捨てて戦車の上につっ伏してしまう。これに対して、御者となっているクリシュナは「プリターの子よ、女々しい心をいだくな。そうすることは汝にふさわしくない。いやしい臆病な心を捨てて立ち上れ。敵を圧迫するものよ！（二・三）」と言ってアルジュナを励まし、ダルマ（正義・本務）のためには敢然と戦わなければならないことを説いて決意をうながす。そして、アルジュナの問うままに、クリシュナは哲学・信仰、解脱などの問題を説き、やがて自らのヴィシュヌ神としての神体をあらわしてアルジュナの迷いを払拭してダルマを実行させる。このようなクリシュナとアルジュナの信仰・解脱などに関する対話が、ギーター一編の内容となっている。結果をかえりみない行為こそ真実の実践であり、解脱への道であるが、この解脱への道を行為だけに限らず知の道、信愛の道をも合わせ説くところに、ギーターがインドのさまざまな階級の人々に受け入れられる秘密がある。

このように『バガヴァッド・ギーター』はサーンキヤ、ヨーガ、ヴェーダーンタ哲学を折衷した世界観の上にヴィシュヌ神への絶対的信仰を置き、これを行動の原理としたのであり、バーガヴァタ派の聖典としてだけではなく、ウパニシャッド、『ブラフマスートラ』とともにインド正統派の哲学を代表するヴェーダーンタ派の三大依処の一つとさ

れるようになった。シャンカラ、アビナヴァグプタ、ラーマーヌジャ、マドゥスーダナ、マドヴァなどの哲学者たちはそれぞれの思想的立場からギーターに註釈を書き、さまざまなインドの近代語にも訳され、全インドのヒンドゥー教徒の愛読する宗教詩とされている。

ギーターの教えのうちで、とくに行為による解脱への道（カルマ・ヨーガ）、すなわち利害得失を考えずに無私の心をもって自分の本務をつくすことが解脱への道であるという主張は、今なお人々の生き方のよりどころとなっており、ヴィノバ・バブー、ローカーマニヤ・ティラク、マハートマー・ガーンディなどのインド独立運動の闘士たちが、みなギーターを行動の原理としたことはよく知られている。

バガヴァティー　Bhagavatī　ヴァガヴァット Bhagavat の女性形で、ラクシュミー女神、あるいはドゥルガー女神をあらわす。

パーカシャーサナ　Pākaśāsana　インドラの別名、あるいはインドラの子孫としてのアルジュナの別名。→アルジュナ

バギーラタ　Bhagīratha　スーリヤヴァンシャ（日種族）に属するアヨーディヤー王サガラの子孫の聖王。カピラ仙の怒りにふれて焼き殺されたサガラ王の六万人の子供たちの遺灰を清めるため、天上を流れていたガンガー河を長くきびしい苦行の末、地上に降下させるのに成功した王として知られる。→ガンガー、サガラ

バギーラティー　Bhagīrathī　ガンガー（ガンジス河）、およびそれを神格化したガンガー女神の別名。ガンジス河は天上を流れる河であったが、バギーラタ王の願いによって地上を流れるようになったというので、このように呼ばれる。現在は、ガンジス河の実際の源流であるヒマーラヤ山中のゴームカから、もう一つの支流アラカナンダー河との合流点であるデーヴァプラヤーガまでのあいだの流れをいう。この合流点より下流が、現在はガンガー（ガンジス河）と呼ばれる。

パーシャンダ　Pāṣaṇḍa　「異端」の意で、とくにインド正統派から見た非正統派の宗教であるジャイナ教、仏教、唯物論者チャールヴァーカの徒を指すが、一般的にはシャーキヤ族やヴリッジ（ヴァッジ）族、その他の仏教とジャイナ教が発生した北東インドの人々を意味した。

パシュ　Paśu　家畜・羊・山羊などの総称で、とくに祭祀において供犠として捧げられる牛・馬・人間・羊・山羊を表わす。この供犠の動物はテキストによって異なり、ラクダ、ラバ、ロバが加えられることもある。

パシュパティ　Paśupatī　「動物の主」「家畜の主」の意で、ヴェーダの神格ルドラ、そのヒンドゥー教における

後身であるシヴァ神の別名。インダス文明の遺跡モヘンジョダロの出土品の中には、酒を飲み、動物にとりまかれた像があり、これがシヴァのパシュパティとしての原型と見られている。→シヴァ、リンガ

ハスティナープラ　Hastināpura　月種族（チャンドラヴァンシャ）の最初のバラタ王ハスティンによって建てられたのでハスティナープラ（ハスティンによる町）という。デリーの北東約三六キロのところにあったとされ、この町の大部分は古い時代にガンジス河の水流によって流し去られたと伝えられる（『ヴィシュヌ・プラーナ』四・二一）。バーラタ族の大戦争においては、パーンダヴァ側がインドラプラスタを本拠にしたのに対して、カウラヴァ側がハスティナープラに拠った。

パーターラ　Pātāla　プラーナの世界観における七つの下界の総称、あるいはその一つの名称。プラーナの世界観によれば、この空間の中心部分に七つの世界が層となって存在し、その下に七つの下界がある。『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、七つの下界とは(1)アタラ、(2)ヴィタラ、(3)ニタラ、(4)ガバスティマット、(5)マハータラ、(6)スタラ、(7)パーターラの七つである。『パドマ・プラーナ』によれば、(1)アタラはマハーマーヤが支配し、(2)ヴィタラはハータケーシュヴァラと呼ばれるシヴァ神が支配し、(3)スタラは悪魔バリが支配し、(4)タラータラはマーヤが支配し、(5)マハータラは蛇が支配し、(6)ラサータラはダイティヤとダーナヴァが支配し、(7)パーターラはナーガ（蛇）族の王ヴァースキが支配する国で、最も下にあるとされる。→ヴァースキ

バダリー　Badarī　ガンジス河の源流の一つ、アラカナンダー河の水源に近いところにあるヒマーラヤ山中の聖地。とくにヴィシュヌ神がナラ＝ナーラーヤナの形で信仰されている。現在のバドリーナート。

パータリプトラ　Pāṭaliputra　プシュパプラ、クスマプラ（花の都）ともいい、マウリヤ王朝の首都。現在のパトナー（ビハール州の州都）で、クムラーハール地区およびブランディーバーグ地区に遺跡がある。漢訳仏典では華子城、華氏城などと訳し、マガダ国王アジャータシャトル王（阿闍世王）が北方ヴァイシャーリーのリッチャヴィ族を征服した後、ソーン川がガンジス河に合流する付近のパータリ村に城塞を築き、その子（あるいは孫）ウダーインがラージャグリハ（王舎城）より遷都したのが始まりといわれる。その後、マウリヤ王朝の祖チャンドラグプタもここを都とし、アショーカ王もこの地から各地に法勅を発した。その繁栄の様子は、シリア王セレウコス一世の使節としてマウリア王朝の宮廷を訪れたギリシャ人メガステネ

ースの記録にとどめられている。シュンガ王朝もグプタ王朝も中期までこの地を都とした。仏教の伝説では、アショーカ王のもとで第三回の仏典結集(けつじゅう)が行なわれた地とされる。

パドマ Padma 一般には蓮華(れんげ)といわれ、ヒンドゥー・仏教両教徒にとって聖花とされる。学名は Nymphaca alba, Linn.、和名オオスイレン。ヒンドゥーの神話では、ヴィシュヌとその神妃ラクシュミーともにパドマと関係が深く、ハスの上に立つヴィシュヌ、ハスの華を手に持つラクシュミーの像などに表現されている。仏教においては、蓮華は泥水のなかで咲きながらもその汚泥に染まらずに清らかであるところから、一切の世間のなかにあって汚れのない菩薩の心にたとえられ、仏教のシンボルともいうべき植物と見られている。

パドマー Padmā パドマーヴァティーともいい、ヴィシュヌの神妃ラクシュミーの別名。→ラクシュミー

バーナ Bāṇa ダイティヤの王バリの長子。一〇〇〇本の腕を持ち、シヴァの友人でヴィシュヌの敵。バーナは娘のウシャーがクリシュナの孫アニルッダを恋するようになった時、魔法によってアニルッダを捕えた。クリシュナ、バララーマ、プラディユムナが救出にかけつけ、バーナを助けるシヴァ、軍神スカンダとのあいだに激しい戦いが起こり、シヴァはクリシュナに倒され、スカンダは傷つき、バーナの一〇〇〇本の腕はクリシュナの円盤によって切り落とされた。そこでシヴァは和睦を申し入れてバーナの生命を救い、クリシュナもこれを認めた。

パニ Paṇi 『リグ・ヴェーダ』に説かれる天界の悪魔。牛を盗んで隠すものといわれるが、彼らが盗んだ牛はインドラの犬サラマーによって発見された。

バーヌマティー Bhānumatī ヤーダヴァ族の指導者バーヌの娘。クリシュナがそのとりまきとともにピンダーラカというヤーダヴァ族の聖地へ来た時、ヤーダヴァ族の祭礼が行なわれていた。その時、ニクムバという悪魔がバーヌマティーを奪い去った。これは、彼女がライヴァタの庭でドゥルヴァーサス仙に敬意を表わさなかったことによって、彼に呪いをかけられたためであった。この呪いの期間が過ぎたのちに、ドゥルヴァーサス仙は彼女がパーンドゥの五王子の一人サハデーヴァに救い出され、その妻となるようにした。このことによって、彼女はナーラダ仙とクリシュナの前でサハデーヴァと結婚した(『マハーバーラタ』)。→ドゥルヴァーサス

ハヌマーン Hanumān 「顎骨を持つ者」の意味で、ラーマを助けてランカーの羅刹王ラーヴァナからシーターを救出するのに協力した猿の勇士。原語はハヌマットで、普通はこの語の主格の形でハヌマーン、あるいはハヌーマ

ーンと呼ばれている。風の神パヴァナと、前に猿のケーサリンの妻であったアプサラスのアンジャナーとのあいだに生れた。ハヌマーンは超人的な力を持っていて、インドからランカーまで一またぎに渡ることができ、木々を根こそぎにしたり、ヒマーラヤの峰々を持ち去ることもできた。『ラーマーヤナ』によれば、彼の姿は山のように巨大で、背丈は塔のように高く、彼の顔は輝くルビーのように紅く、



猿の英雄ハヌマーン

彼の尾は限りなく長く、大岩に坐って咆える声は雷のようであり、ごうごうと音を立てて空中を飛ぶ。アヨーディヤーのダシャラタ王の王子ラーマが追放されてダンダカの森に住んでいた時、ラーヴァナの妹シュールパナカーの申し出を拒否したのがきっかけで、妻シーターをラーヴァナに奪われたラーマは、猿の王国キシュキンダーで猿王ヴァーリンを助け、この猿王の助けを得てランカーに侵攻することになった。猿軍とともに南方に進んだラーマ軍は眼の前に波立つ海を見てどうして渡ろうかとまどった。この時、ヴァーリンの顧問で最も遠くまで飛ぶことのできるハヌマーンはマヘーンドラ山に登って海を飛び越え、ランカーに渡って四日のあいだラーヴァナの都を偵察し、無憂樹(アショーカ)園でシーターに会ってラーマの友人であることを告げ、再び海を渡ってラーマのもとに戻った(『ラーマーヤナ』華美編)。猿の勇士ナラによって架けられた橋を渡ったラーマ軍はラーヴァナの息子のインドラジットと戦い、ラーマと弟のラクシュマナは瀕死の重傷を負わせられた。この時、ハヌマーンは夜間カイラーサ山に飛んで行き四種の薬草を取ろうとした。しかし、薬草は隠されていたので、彼は山頂を全部戦場にもって来ると、その薬草の芳香によって、ラーマ、ラクシュマナをはじめとするすべての勇士たちの傷がたちどころに治った。そこで、ハヌマーンは山頂を再びもとの

場所に戻した。戦いが続くうちに彼はインドラジットに捕えられ尾に火をつけられたが、かえって火のついた尾でランカーの町に火をつけて、損害を受けたのはラーヴァナの軍勢であった。さらに激しい戦闘が行なわれ、ついにラーマはラーヴァナを倒し、ハヌマーンを伴ってアヨーディヤーに帰還した(戦闘編)。ハヌマーンの偉業は老若男女、すべてのインド人に親しまれ、この猿王を祀ったハヌマーン・ガルヒなどの寺院が建てられ、彼の生誕を祝うハヌマーン・ジャヤンティ(チャイトラ月、三〜四月)が盛大に行なわれる。

〔別名〕マルトプトラ(風神の子)、マールティ(同)、アーンジャネーヤ(アーンジャーの子)、ラジャタディユティ(輝ける者)、ランカーダーヒン(ランカーを燃やした者)など。→ラーマ

バブルーヴァーハナ　Babhrūvāhana　パーンドゥの五王子の一人アルジュナの息子。彼は母方の祖父に当るマニプラの王の養子として育てられた。ある時、アルジュナがアシュヴァメーダ(馬祀祭)のための馬をともなってマニプラに行くと、バブルーヴァーハナとのあいだに激しい戦いが起こり、息子は矢で父アルジュナを殺した。彼はこの父殺しの行為を悔いて自殺しようとしたところ、継母であるナーガ族の王女ウルーピーはこれをおしとどめ、魔法の薬を与えた。この薬によってアルジュナは息を吹きかえし、ハスティナープラにもどった。

ハヤグリーヴァ　Hayagrīva　「馬の首をした者」の意で、世界の終わりの時、ブラフマーの眠っている間に口からすべり落ちたヴェーダを盗みとった悪魔ダイティヤの名。彼は魚の化身となったヴィシュヌに殺された。他の伝説によれば、二人のダイティヤに奪われたヴェーダをとりもどすために、ヴィシュヌ自身がハヤグリーヴァの姿となったという。

ハヤシラス　Hayaśiras　「馬の頭をした者」の意で、ハヤグリーヴァの姿をしたヴィシュヌのこと。ハヤシールシャともいう。

パーラカーピヤ　Pālakāpiya　医学に関する著作を著した聖仙。彼はダヌヴァンタリの化身といわれる。

パラーシャラ　Parāśara　(一)大叙事詩『マハーバーラタ』の伝説上の作者とされるヴィヤーサの父である聖仙。父はヴァシシュタ仙の子で、母の名はアドリシュヤンティーという。アドリシュヤンティーが彼を身籠っていた時、ヴァシシュタ仙は悪鬼(ラークシャサ)カルマーシャパーダに食われてしまったが、彼は一二年のあいだ母の胎内にいたのち無事に生れ出た。父の死を知ったパラーシャラはすべてのラークシャサを殺そうとし、そのための祭祀を行なった。その祭火

のなかで何千というラークシャサが焼き殺された。罪のないラークシャたちが殺されるのをかわいそうに思った祖父ヴァシシュタは、パラーシャラに怒りをしずめるようすすめ、祭火を消させた。ある時、彼はアプサラス(天界の水の女精)のアドリカーの娘サティヤヴァティーを見初め、結婚して一子ヴィヤーサをもうけた。(『マハーバーラタ』初編)→サティヤヴァティー。

(二)『リグ・ヴェーダ』(一・六五—七五、九・九七)の作者と伝えられる聖仙。

パラシュラーマ　Paraśurāma　ヴィシュヌの化身の一つ。斧を持つラーマ。→ヴィシュヌ

バラタ　Bharata　(一)北インドを中心に広く四方を統治していたといわれる伝説上の王。バラタ族の祖先。古代のインド人はインドのことをバーラタ、あるいはバーラタヴァルシャ(バラタの領土)と呼んだ。バーラタはバラタ王を祖先とする一族の名称でもあり、『リグ・ヴェーダ』以来、アーリヤ人の一族とみられている。バラタ王はインドの二大種族のうちの月種族に属するといわれ、ドゥシュヤンタとシャクンタラーの子であるとされる。バラタより九代の子孫がクルで、クルより一四代の子孫がシャーンタヌであり、シャーンタヌの系統からドリタラーシュトラ、パーンドゥの兄弟が生れ、彼らの子供達がカウラヴァとパーンダヴァに分かれて、バラタ族の大戦争が始められることになるのである。

(二)アヨーディヤーの王ダシャラタとその妻カイケーイーとのあいだに生れた。『ラーマーヤナ』によれば、ダシャラタ王には三人の妻があったが、長いあいだ息子がなかったので、アシュヴァメーダ(馬祀祭)を行なったところ、カウサリヤーからはヴィシュヌ神の化身であるラーマが、カイケーイーからはバラタが、もう一人の妻スミトラーからはラクシュマナとシャトルグナが生れた。王はラーマを王位継承者に定めたが、侍女にそそのかされたカイケーイーは、かつて王が彼女に二つの願い事をかなえてやると約束していたことを思い出して、ラーマを一四年のあいだ追放すること、自分の息子のバラタを太子とすることを王に要求した。これを知ったラーマは父に約束を破らせることはできないと言って、母カウサリヤー、弟ラクシュマナの引き止めるのを振り切って宮殿を出た。忠実な弟ラクシュマナも兄に従ったので、悲嘆にくれたダシャラタ王は生きる気力を失って世を去った。そこでバラタは母カイケーイーや顧問官たちに王位につくよう要請されたが、彼はこれを受けず、支配権は兄ラーマのものであるから連れもどしに行くといい、シーターとともにチトラクータ山に滞在している兄のもとに行き、アヨーディヤーに帰って王位につく

よう求めた。しかし、ラーマは、カイケーイーに少しも恨みを持ってはいないこと、父の命じたことには従わなければならないことを説き、バラタに王位につくことを勧め、王位の象徴である靴を与えた。バラタはこれをアヨーディヤーに持ち帰り、ラーマの靴を王の代わりとして王座の上に安置し、自分はナンディグラーマに住んでラーマの代わりとして国の政治を行なった（アヨーディヤー編）。

㈢『ナーティヤ・シャーストラ』（楽・舞・ドラマのテキスト）の著者とされる聖者。

バーラタヴァルシャ　Bhāratavarṣa　「バラタ国」の意味で古代のインドをさす。九つの地域（カンダ）すなわち、インドラドヴィーパ、カシェールマット、タームラヴァルナ、ガバスティマット、ナーガドヴィーパ、サウミヤ、ガーンダルヴァ、ヴァールナ、および名称不明の地域（クマーリカーと呼ばれることもある）に分かれる。

バラデーヴァ　Baladeva　ヴァスデーヴァの子。アルジュナの妻スバドラーの兄に当る。→バララーマ

バラドヴァージャ　Bharadvāja　『リグ・ヴェーダ』の多くの讃歌の作者とされる聖仙。聖仙ブリハスパティとウタティヤ仙の妻ママターとのあいだに生れた私生児で、ウタティヤの嫡子のディールガタマスによって母親の胎内から蹴り出された時、ブリハスパティがママターに「バラ・ドヴァー・ジャム」（「二度生れた者を連れて行け」あるいは「二人の父親の子を大事に育てよ」）といったので、バラドヴァージャと名づけられたといわれる。バラドヴァージャは三度生れかわり、ついに不死となった。激しい苦行の結果、インドラをしのぐ程の力を獲得したため、その力がさらに増大するのを妨げようとしてインドラは美しい天界の水の精女グリターチーを彼の修行しているところにさし向けた。彼女はかの聖仙の目の前で衣類を脱ぎ、裸になって沐浴した。バラドヴァージャは精女の美しい裸身を見て、つい手おけ（ドローナ）の中に精液をもらし、男の子が生れた。この子はドローナと名づけられ、成長して軍師となった。バラドヴァージャはダンダカの森に隠棲するようになるまでは、カーシーの王ディヴォーダーサの家の司祭僧であった。『マハーバーラタ』では、彼はハルドワールに住む聖仙とし、『ラーマーヤナ』ではラーマとシーターが追放されている間に訪れたプラヤーガの隠者としている。ドローナ、その子のヤヴァクリータ、彼の娘シュルターヴァティーなどは、バーラドヴァージャ（バラドヴァージャの子孫）と呼ばれる。→ドローナ

ハラーユダ　Halāyudha　「鋤(すき)の刃を武器とするもの」の意で、クリシュナの兄バララーマの別名。

バララーマ　Balarāma　「強大な力を持つラーマ」の

意で、ヴァスデーヴァの第七子、クリシュナの兄。バラ、バラデーヴァ、バラバドラ、ハラーユダ、ラーンガリン、ムサリーなどとも呼ばれる。クリシュナがヴィシュヌ神そのものとされるのに対して、バララーマはヴィシュヌの第七番目の化身（アヴァターラ）とされる。

プラーナの伝説によれば、マトゥラーの悪王カンサの暴虐に耐えかねた人々は地神に救いを求め、地神はインドラに、インドラはブラフマー神に、ブラフマー神はシヴァ神に、シヴァ神はヴィシュヌ神に訴えたので、ヴィシュヌ神は白黒二本の髪を抜き取り、白髪がバララーマに、黒髪がクリシュナに変わってカンサを倒すであろうと約束した。カンサ王は神々からヴァスデーヴァの妻デーヴァキーの第八番目の子供によって殺されるであろうと予言されていたので、彼女から生れる子供を次々に殺していったが、第七番目の子は睡眠の女神ニドラーによって生れる前にヴァスデーヴァの別の妻ローヒニーの胎内に移されたので救われた。この子はバララーマと名づけられた。第八番目の子は両親のはからいで牛飼いのナンダの妻ヤショーダーの娘と交換されて殺害をまぬがれた。これがクリシュナである。



バララーマ

このようにしてバララーマはクリシュナと一緒に育てられ、しばしばクリシュナの悪戯を手助けした。彼は怪力で巨大なアスラ、デーヌカを殺し、そのほかさまざまなアスラたちと戦った。クリシュナがマトゥラーに帰った時、彼も行動をともにし、クリシュナを助けて、ついに悪王カンサを殺した。

ある時、バララーマは酒に酔って、ヤムナー河に対して、沐浴したいから自分の方に来るようにと要求したことがあった。この要求が聞き入れられないことがわかると、ヤムナー河の中にすきの刃を投げ入れ、水を引っかきまわしたので、たまらなくなったヤムナー河は人間の姿となって彼の許しを求めた。そこで、バララーマはヤムナービッド（ヤムナー河を引き裂くもの）、カーリンディーカルシャナ（ヤムナー河をかきさらうもの）と呼ばれるようになった。

パーンダヴァとカウラヴァが対立し、クリシュナの息子シャームバがカウラヴァの王ドゥリヨーダナによってハス

ティナープラで捕らわれの身となった時、バララーマは甥の身がらの釈放を要求し、これが聞き入れられないとわかると、城壁をすきの刃で破り、ついにシャームバを釈放させた。彼は唯一人の妻レーヴァティーを愛し、彼女とのあいだに二人の息子ニシャタとウルムカをもうけた。彼のお気に入りの武器はケータカ、あるいはサウナンダと呼ばれる鋤の刃（ハラ）と棍棒（ムサラ）であったことから、彼はハーラ、ハラーユダ（鋤の刃で戦う人）、ハラブリット、ラーンガリン、サンカルシャナ（鋤を持つ者）、ムサリー（棍棒を持つ者）、ターラ葉を印とするところからターラドヴァジャなどとも呼ばれる。→ヴィシュヌ、カンサ、クリシュナ

バリ　Bali　善良で誇り高いダイティヤの王。ヒラニヤカシプの孫のヴィローチャナの子。彼の妻はヴィンディヤーヴァリー。バリは熱心に神に仕え、きびしい苦行を行なった結果、その力はインドラをしのいで三界を支配するようになり、神々を恐怖におとしいれた。神々はヴィシュヌ神に保護を求めたので、ヴィシュヌはヴァーマナ（倭人）の姿となってバリの前に現われ（ヴィシュヌの第五の化身）、三歩で歩けるだけの土地をくれるように請うと、バリは倭人の姿を見てすぐにそれを認めた。するとたちまちヴィシュヌは巨大な姿となって二歩で天と地とをとりもどし、もう一歩で全世界を支配しようとしたが、バリの親切さと自身の孫のプラフラーダ（バリの祖父）の徳行に免じてバリに地下の世界パーターラを与えた。彼はまたマハーバリとも呼ばれる。→ヴァーマナ

ハリヴァンシャ　Harivaṃśa　『マハーバーラタ』の付録で、一万六三七四の詩句よりなる著作。ハリはクリシュナの別名、ヴァンシャは「系譜」で、ハリヴァンシャは「クリシュナ＝ヴィシュヌの系譜」の意味。クリシュナ＝ヴィシュヌ神についての伝説・神話・讃歌などを集成したヴィシュヌ信仰の聖典。㈠クリシュナの系譜の章、㈡ヴィシュヌの章、㈢未来についての予言の章の三章からなり、実質上のプラーナ文献であるところから『ハリヴァンシャ・プラーナ』とも呼ばれる。第一章ではプラーナ文献的な手法で、世界開闢の説話、人類最初の王であるプリトゥの話、太陽神を起原とするイクシュヴァーク王の系譜などが語られる。第二章はヴィシュヌが人間として姿を現わしたクリシュナについてその伝説を扱っている。ここでは人間クリシュナの誕生・少年期・英雄的な行為・恋愛の冒険などが詳しく語られ、この書の中心となっている。悪王カンサがマトゥラーの都を治めていたところ、クリシュナは、ヴァスデーヴァとデーヴァキーのあいだに第八番目の子として生れ、カンサに殺される運命をようやく逃れて牧人ナンダ



牧女（ゴーピー）たちと遊ぶクリシュナ

とその妻ヤショーダーのもとで成長する。成長してからのクリシュナは種々の魔神を退治し、牧女たちと恋愛し、ラーダーやルクミニーと結婚する。これらのクリシュナ伝説は『ヴィシュヌ・プラーナ』や『バーガヴァタ・プラーナ』のそれと大すじにおいて共通しており、クリシュナ＝ヴィシュヌ信仰を広めるのに役立った。第三章はクリシュナとルクミニーとの息子のプラディユムナの物語を扱い、プラディユムナとアスラのヴァジュラナーバの娘プラバーヴァティーとの結婚の物語、アスラの女性マーヤーヴァティーとの恋愛物語について語っている。

パリークシット　Parīkṣit　月種族（チャンドラ・ヴァンシャ）に属するクル族の王。パーンドゥの五王子の一人アルジュナの子アビマニユとマツヤ王ヴィラータの娘ウッタラーとのあいだに生れた。彼の出生に関しては次のような話がある。

アビマニユの妻ウッタラーが身籠ったのは、パーンダヴァとカウラヴァとの戦いがクルクシェートラの地で始められたその日であった。両軍とも勇敢に戦ったが、パーンダヴァ軍の勢が強く、カウラヴァ軍のうち最後に残ったのはクリパ、クリタヴァルマン、アシュヴァッターマンの三人だけとなった。復讐の念にもえたアシュヴァッターマンは夜中にパーンダヴァの陣地にしのび込み、眠っているドリ

シュタディユムナをはじめとする勇士たちを虐殺した。これに気づいたアルジュナとのあいだにブラフマシラスという武器の投げあいが始まり、アシュヴァッターマンの投げた武器がウッタラーの腹部を直撃した。クリシュナはこのアシュヴァッターマンの非道な行為を激しく非難し、彼に呪いをかけ、三〇〇〇年のあいだ住所を定めずにただ一人で一切の人々に嫌われながら、すべての病気を背負いこんで血とうみと悪臭を発散させながらさまよわねばならないようにした。

これより前、パーンダヴァの人々が流浪ののち、ウパプラヴィヤという村に滞在していた時、一人のバラモンがウッタラーに近づいて「やがて生れる男の子は母胎の中にいる間に試練（パリークシャー「試練、吟味」の意）をうけ、パリークシットと名づけられ、王位について六〇年間国を治めるであろう」と予言したことがあった（『マハーバーラタ』夜間襲撃編）。

バーラタ戦争が終わり、パーンドゥ王の長子ユディシュティラが世界の王となるための馬祀祭を行ない、近隣の諸王が集まっている時、ウッタラーは死児を産んだ。嘆き悲しむ彼女のまわりに王たちが集まり、クリシュナにこの子の生命を呼びもどして欲しいと請願した。クリシュナはこの願いを聞き入れ、この男の子に生命を与えたうえ、かつてのバラモンの予言を思い出してパリークシットと名づけた（初編）。パリークシットはマードラヴァティーと結婚してジャヤメージャヤ、シュルタセーナ、ウグラセーナ、ビーマセーナをもうけた（初編）。ユディシュティラの後をうけて王位についたパリークシットは予言されたとおり六〇年のあいだ王位にあって善政をしいた。

パリークシットの死については次のような話がある。王位についたパリークシットは、ある日狩に出て一匹の鹿を追って森の奥深く入りこんだ。すると一人の聖者が禅定に入っていた。パリークシット王が鹿のことを尋ねたが、深い禅定に入っていた聖者はそれに全く気がつかなかった。立腹したパリークシットは死んだコブラを聖者の首に巻きつけて王宮に帰った。この聖者にガヴィジャータという息子があり、他の聖者の子から「お前の父親はシヴァ神と同じだ。両方とも蛇を首に巻いている。だが、お前の父親は死んだ蛇だ」と告げられた。父の修行しているところへ行くとその通りだったので、ショックを受けたガヴィジャータは「父の首に死んだコブラを巻きつけたものは七日のあいだにタクシャカというコブラに嚙まれて死ぬように」という呪いの言葉をはいた。彼はこの言葉を述べた後に、それがパリークシット王のしわざであることを知った。王もこのことを伝え聞いたが、この呪いから逃れる方法が何

かあるだろうと思っていた（『バーガヴァタ・プラーナ』一二）。

王は大臣とコブラから逃れる方法について相談し、堅固な建物を作り、扉をしっかり閉めて守りを固め、ヴィシャヴァイディヤ（蛇に嚙まれた時に治療に当る専門の医者）に待機させた。こうして六日間は何事も起こらなかった。七日目に、王に呼ばれたヴィシャヴァイディヤのカシュヤパ仙が王宮に向かっている途中、これもバラモンの姿に変装したコブラのタクシャカと出会った。タクシャカはカシュヤパの目的を知って、「カシュヤパよ、私の毒にかなうものは誰もいない。嘘だと思ったら試してみようか」と言うやいなや、道端のバンヤンの木（ニヤグローダ）に嚙みついた。するとたちまち、その猛毒のためにその木は燃え上り灰となった。カシュヤパは笑いながらヴィシャハーリという呪文を唱えると、水がふき出して猛火は消え、木はたちまち元の姿にもどった。驚いたタクシャカはカシュヤパに王からもらう以上の謝礼をやるともちかけて彼を家に帰らせてしまった。そこで王宮に近づいてみると門はしっかりと固められ入り込むすき間もなかった。彼は一計を案じて親類のコブラを呼びよせ、バラモンの姿に変えさせ、王への贈物として新鮮な果物を用意させたうえ、自分は一匹の虫となってその果物の中に入りこんだ。バラモンによって献上された果物は王の前に運ばれ、それと知らずに王が手に取った時、タクシャカは果物の中から現われて王に嚙みつき、ついにその毒で王を倒したという（『デーヴィーバーガヴァタ』二）。

（別名）アビマニユスタ（アビマニユの子供）、バーラタシュレーシュタ（バラタ族の最上の人）、クルシュレーシュタ（クル族の最上の人）、クルナンダナ（クル族の王）、クルラージャ（同）、クルヴァルダナ（同）など。→アルジュナ、ウッタラー

パーリジャータ Pārijāta 天上の五華の一つ。学名を Erythrina indica, Lam. といい、和名はデイコ。樹高一五〜一八メートルにもなるマメ科の落葉喬木。ヒンドゥーの神話では、この木は神々とアスラが乳海を攪拌したときに生れ、インドラ神が天界に植えたものとされる。この木はそれ以来インドラ天で成育し、インドラの妻シャチーの誇りであったが、クリシュナの妻の一人サティヤバーマーは夫にこの木を取って来るようにすすめた。クリシュナはインドラ神と激しく戦って打ち負かし、自分の国ドヴァーラカーに持ち返って植えた。しかし、クリシュナの死後、ドヴァーラカーが海底に沈んだ時、この聖樹はインドラ天にもどされたという。パーリジャータは仏典でも五天華の一つ曼陀羅華と呼ばれて、極楽世界をはじめ、ガンジス河の砂の数に等しいといわれる仏国を飾る樹とされる。菩薩や

如来の修行や悟りを祝う慶祝花として、マンジュシャゲ、センダン、沈水などの抹香とともに天から降り注ぐという記述が大乗経典に多く見られる。

ハリシュチャンドラ　Hariścandra　トレーター期の日種族第二八代の王。トリシャンク王の子で、彼の信心深さと公正さはさまざまな伝説の中に語られている。『アイタレーヤ・ブラーフマナ』では、彼が自分の子供の代わりに犠牲としてシュナハシェーパを購入した話が伝えられる。『マハーバーラタ』では、彼はラージャスーヤの祭りを行なったためにインドラ天に昇ったという話を記している。『パドマ・プラーナ』『マールカンデーヤ・プラーナ』によれば、ハリシュチャンドラはヴィシュヴァーミトラの要求に応じて自分の王国を布施し、次いで妻子を布施し、ついに自分自身をヴィシュヴァーミトラに与えた。神々は哀れみをたれて、ハリシュチャンドラとその眷族を天界に昇らせたという。→シュナハシェーパ

ハリタ　Harita　あるいはハーリータ。日種族のイクシュヴァークの子孫のユヴァナーシュヴァ王の子。その子供たちはハーリタアンギラスと呼ばれる。

ハリハラ　Harihara　ハリはヴィシュヌ、ハラはシヴァを指し、ハリハラはこの両神が一体となった形。神像では、左側がヴィシュヌ神で右側がシヴァ神の場合が普通である。



ハリハラ

この形はヴィシュヌ派とシヴァ派の信仰・儀礼が結合して成立したが、神話的には乳海攪拌神話にもとづいている。神々とアスラたちが協力して乳海を攪拌した時、ヴィシュヌ神は美しく魅力的な女神モーヒニーに姿を変えた。シヴァ神はモーヒニーを一目見ると恋におち、彼女を抱いた。その結果、生れた子がハリハラであるという。

ハリヤシュヴァ　Haryaśva　ブラフマーの子ダクシャが地上に人々を増そうとする目的で産み出した五〇〇〇人の子供の総称。

バーリン　Bālin　バーリーともいい、猿の王国キシュキンダーの猿王。弟のスグリーヴァから王国とその妻を奪っ

たが、ラーマと同盟を結んだスグリーヴァ軍に攻められラーマに殺された（『ラーマーヤナ』キシュキンダー編）。バーリンはインドラの子で、その母の髪の毛（バーラ）から生れたので、バーリンという名となったといわれる。彼の妻の名はターラーで、アンガダ、ターラの二人の息子があり、バーリンの死後王位を継いだスグリーヴァの王位継承者となった。→スグリーヴァ

パールヴァティー　Pārvatī　「山の娘」あるいは「山に住む女神」の意で、シヴァの神妃。シヴァの神妃の名は後世になると数百にもなるといわれるが、その中でも最もよく知られているのがパールヴァティーとウマーである。シヴァの神妃は、一般に美・穏和、激しさと恐ろしさ、という二面を持っており、パールヴァティーとウマーは前者の性格を代表している。



シヴァ神とパールヴァティー女神

プラーナの伝説によれば、シヴァ神の第三の眼はパールヴァティーのいたずらによって出現したという。シヴァ神が山の中で精神統一して修行している時、彼女はいたずらのつもりで夫の背後から両手で彼の眼をふさいだ。すると宇宙の生命は活動を止め、太陽は輝きを失って世界は恐怖におちいった。しかし、その時、シヴァの額に焔のように輝く眼が出現し、暗黒は去り世界は再び光をとりもどした。シヴァ神の修行は限りなくつづき、夫のそばで辛抱強く礼拝を続けていたパールヴァティーは、修行にうちこんで彼女の存在に気づきもしない夫に我慢ができなくなる。そこで、神々はシヴァ神を修行にうちこんでいる状態から我に帰らせようとして、愛の季節である春のある日に愛の神カーマデーヴァを派遣した。パールヴァティーが礼拝をするために夫に近づいたときをねらって、カーマデーヴァはキューピッドの弓を引きしぼって愛の矢を放とうとした瞬間、それに気づいたシヴァ神は額に出現した第三の眼の烈しい

閃光でカーマを焼き殺した。カーマの妻で快楽の女神ラティが焼き殺された夫にとりすがって泣いていると、天から「シヴァがパールヴァティーを妻として受け入れた時、シヴァは汝の夫の魂に肉体を返すであろう」という声が聞こえた。いつまでも続くシヴァ神の修行にあきあきしたパールヴァティーは隠遁者の生活に入ったが、ある日、若いバラモン僧が訪ねて来て彼女を俗世界に連れもどそうとした。彼女がこれを拒絶すると、バラモン僧は自分はシヴァ神であると打ち明け、パールヴァティーの愛を求めた。彼女はカーマ神の肉体をその妻ラティにもどすという条件でシヴァの申し出を承諾した。こうしてシヴァとパールヴァティーはヒマーラヤのカイラーサ山に行き、愛の生活を送ったという。

シヴァ神がパールヴァティーを熱愛したという話は数多くあり、『バーガヴァタ・プラーナ』(九・一一)によれば、パールヴァティーが裸で夫のひざの上に乗っていた時、ある聖者が突然そこに入って来て彼女を驚ろかせたことがあった。シヴァ神は彼女を慰めるため、これからは予告なしに侵入したものは女の姿となってしまうだろう、と宣言したという。彼女とシヴァ神とのあいだに生れた子がガネーシャとスカンダである(ガネーシャが象の頭をしていることについてもパールヴァティにまつわる話があるが、このことについてはガネーシャの項参照)。

パールヴァティーの彫像は、シヴァ神の横に立つか、そのひざの上に坐っているものが多く、単身の立像あるいは坐像もある。手には何も持たず乳房をあらわにしたものが多く、たとえば、カジュラーホーのデーヴィー・ジャグダンバー寺院(西部群)にはシヴァ神が寄りそうパールヴァティーの乳房を左手で下から包みこんでいる彫像がある。

パールグナ Phālguna ヒンドゥー暦の第一二月(二ー三月)。この月の第一二日はクリシュナの日である。また、満月の日をパールグニー・パウルナマーシーといい、ホーリー祭が行なわれる。

パルジャニヤ Parjanya 『リグ・ヴェーダ』の雨神。雷鳴・電光・疾風を伴う降雨の現象を神格化したもの。暴風雨の神マルト神群、風の神ヴァーユとも深い関係をもち、インドラ神とも共通した面をもっている。雨が地上の植物を育て人間に恵みをもたらす点から、パルジャニヤは人間・家畜の増殖を司どり、生物・無生物両界の支配者といわれる。『リグ・ヴェーダ』にはパルジャニヤに捧げられた独立の讃歌が三篇ある。

「彼は樹木を裂き倒し、また羅刹を殺す。一切万物は大いなる武器(電光)もつ(神)を恐る。罪なき者すら、牡牛の力ある(神)より逃亡す、パルジャニアが雷鳴をとどろか

せて悪行者を殺すとき(五・八三・二)。戦車を御する者のごとく、鞭もて馬を打ちつつ彼は雨の使者(雨雲)を現わす。獅子の(叫びにまごう)雷鳴は遠方より起こる、パルジャニアが雨雲をつくるとき(三)。風吹き起こり、電光ひらめく。草木は芽ばえ、天は(水に)あふる。栄養(の液)は一切万物のために生ず、パルジャニアが種子をもって大地を育むとき(四)。」(辻直四郎訳)。

後になると、パルジャニヤは家を建てている間に崇拝されるべき神といわれ、また、降雨によって起こる災害を防ぐためには、パルジャニヤ、太陽、月の神を礼拝すべきであるともいわれる(『アグニ・プラーナ』二六三)。

パールタ Pārtha 「プリティーの子供」の意味で、ヤーダヴァ王の娘プリター(クンティー)とパーンドゥ王とのあいだに生れたユディシュティラ、ビーマ、アルジュナの三人をいい、とくにアルジュナのことをいう。→アルジュナ

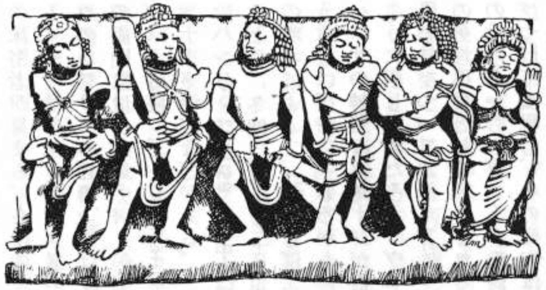
ハルドワール Hardvāra ガンジス河がシワーリク丘陵を出て平地を流れはじめたところにあるヒンドゥー教徒の聖地。インド七大聖都の一つ。この町の名はヴィシュヌ信者であればハリドヴァーラ(ヴィシュヌへの門)と呼び、シヴァ信者であればハラドヴァーラ(シヴァ神への門)と呼ぶ。一二年に一度のヒンドゥー教の大祭であるクンブ・メーラ祭(大沐浴祭)が行なわれる四聖地の一つ。天上の河であったガンジス河が地上に流れ下る因縁として語られるサガラ王の六万人の王子たちがカピラ仙に焼き殺されたのは、この地であったと伝えられる(→バギーラタ)。年間を通して巡礼者が訪れるが、とくにヴァイシャーカ月(四~五月)の第一日は沐浴に最も利益のある日とされ、多数の沐浴者が集まる。右岸のガート(沐浴場)にはハリ・カー・チャラン(ヴィシュヌの足跡)があり、市内から一キロのシワリクの丘の上にはマナサー・デーヴィー寺院、市の周囲にはチャンディー・デーヴィー寺院、マーヤーデーヴィー寺院、アンジャーニー・デーヴィー寺院、ゴーラクシャナータ寺院などがある。

ハンサ Haṃsa (一)中央アジア諸国の湖に棲息する鳥のことで、冬期にはインド全土に渡る。鵞鳥。ヨーロッパの学者によって、しばしば「白鳥」と訳されるが、鵞鳥という言葉は同時に「おろかもの」「まぬけ」を意味するので、ハンサの神聖なイメージが白鳥に近いことから故意にこのように訳したのだろう。ヴェーダにおいては、ハンサは太陽と結びついており(『リグ・ヴェーダ』四・四〇)、豊饒の男性原理として表わされる。その飛び方の高貴さと純白の羽毛の色から、ヴェーダの詩人はハンサを神聖なものと結びつけて表現し、その傾向はウパニシャッドにも引き継が

れて、ハンサはアートマンや生命原理プラーナを象徴するとされるようになった(『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』四、三・一一―一二、『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』六・一五、『マイトリ・ウパニシャッド』六・八)。また、ハンサの優美な飛び方はブラフマンに到達しようとするヒンドゥーの行者たちの宗教的な行為を象徴するとも見られ、ヒンドゥー教神話ではブラフマー神の乗物となった。さらにブラフマーの神妃の純潔さと結びついて、この女神のことをハンサーディルーダー(ハンサに乗る女神)ということもある。

(二)『マハーバーラタ』に記されているジャラーサンダの友人の二兄弟戦士の一人。ハンサという名の別の王がバラーマに殺されたと聞くと、兄弟のディムバカは彼なしに生きられないと思って自殺し、これを聞いた本物のハンサはヤムナー河に身を投げたという。

パーンダヴァ　Pāṇḍava　「パーンドゥの息子たち」の意で、クル族の王パーンドゥの五人の息子たち(ユディシュティラ、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァ)の総称。父パーンドゥ王の死後、五王子は叔父に当るドリタラーシュトラの宮殿で同王の子の百王子とともに過したが、五王子の長兄ユディシュティラが王位を継ぐものとして指命されたことに端を発して五王子と百王子とのあいだに対立が起こった。この対立はついにクル族を二分する大戦争に発展した。この戦争はクル族を二分しただけではなく、北インドの諸国のほとんどを巻きこむことになった。この場合、パーンドゥの五王子側に味方するものを含めてパーンダヴァという。これに対して、ドリタラーシュトラ王のドゥリヨーダナをはじめとする王子たち、およびバーラタ戦争において彼らに味方する人々をカウラヴァという。



パーンドゥの五王子と共通の妻ドラウパディー

パンチャーヴァティー　Pañcāvatī　ゴーダーヴァリー河の水源近くの森の中の地名。ラーマが追放の身をここで過したといわれる。現在のナーシクがそれであり、この地名はここでラーマの弟のラクシュマナが魔王ラーヴァナの妹のシュールパナカーの鼻(ナーシカ)を切り取ったこと

に由来するという。

パンチャヴリクシャ　Pañcavṛkṣa　「五本の木」の意で、天上の五木、すなわちマンダーラ、パーリジャータ、サンターナ、カルパヴリクシャ、ハリチャンドラの五木をいう。仏教では五天華といわれるものがあり、一般に、曼陀羅華(デイコの花)、摩訶曼陀羅華(大デイコの花)、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、蓮華(ハス、スイレンの花)をいう。

パンチャジャナ　Pañcajana　クリシュナに殺された悪魔の名。彼は貝がら(シャンカ)の形で海の底に棲んでいた。この悪魔の骨でヴィシュヌのほら貝(パーンチャジャニヤ)が作られた。

パーンチャジャニヤ　Pāñcajanya　ヴィシュヌ神のほら貝の名。海に棲む悪魔パンチャジャナの貝、あるいは骨から作られたもので、その響きは悪魔たちをおびやかし、神々を勇気づけ、不正なものを絶滅するといわれる。クリシュナの印としても用いられている。

パンチャーナナ　Pañcānana　「五つの顔を持つ者」の意で、シヴァ神の別名。五つの顔とは、サディヨージャータ、ヴァーマデーヴァ、アゴーラ、タトプルシャ、サダーシヴァで、それぞれ世界の構成要素としての地・水・火・風・空を表わす。あるいは、マハーデーヴァ、バイラヴァ、ナンディヴァクトラ、ウマーヴァクトラ、サダーシヴァで、それぞれ東・南・西・北・天頂を表わす。五つの顔はシヴァ神のさまざまな側面を象徴しており、サディヨージャータはシヴァの世界創造の機能を表わし、ヴァーマデーヴァは世界の維持、アゴーラは一意専注の状態、タトプルシャは輪廻の暗黒、サダーシヴァは解脱への過程を表わす。『マハーナーラーヤナ・ウパニシャッド』(一〇)では、パンチャーナナを定義して「それらは、全体として世界を支配し、専注し、産み出す力を表わし、一つを行なうためには必然的に他の行為を伴う」としている。↓シヴァ

パンチャーラ　Pañcāla　古代インドの王国名。ドアーブ地方にあったともカナウジの近くにあったともいわれる。叙事詩では、ガンジス河を境に北パンチャーラと南パンチャーラとに分れていたとし、北パンチャーラを現ローヒルカンド、南パンチャーラをドアーブと推定している。『マハーバーラタ』ではドルパダ王の支配する国とされ、ドルパダ王の娘ドラウパディー(プリター)はパーンドゥ王の五王子の共通の妻となった。

パーンチャーリー　Pāñcālī　パンチャーラ王ドルパダの娘ドラウパディーの別名。

パーンドゥ　Pāṇḍu　クル族の王で、ユディシュティラ、アルジュナ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァ五王子の父。兄のドリタラーシュトラは盲目だったので、かわってクル

族の王位についた。しかしパーンドゥ王は早く世を去ったので、五王子はドリタラーシュトラの宮廷に引きとられ、百王子とともに育てられ、成長すると長兄ユディシュティラが王位を継いだ。このことが主な原因となって、パーンドゥの五王子とドリタラーシュトラの百王子を中心としてクル族が二分され、大戦争が起こることになった。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、チャンドラヴァンシャ（月種族）にシャーンタヌという王があり、漁師の娘サティヤヴァティーとのあいだにチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤが生れた。はじめ前者を王位につけたが同名の悪鬼に殺されたので弟のヴィチトラヴィーリヤがあとを継ぎ、カーシー王の娘アムビカー、アムバーリカーと結婚した。しかし、彼は子供が生れないままに世を去ったので、サティヤヴァティーは家系の断絶することを恐れて、庶子のヴィヤーサを呼び出し、ヴィチトラヴィーリヤの二人の未亡人と結婚して後継王となる子をもうけるように命じた。アムビカーは気のりしないままに目を閉じたままでヴィヤーサと交わったことにより、盲目のドリタラーシュトラが生れた。次の夜、命令によってヴィヤーサに近づいたアムバーリカーはその無骨な姿を見てまっ青になり、そのままの姿でヴィヤーサと交わったため、生れて来た子は青白い色をしていた。そこで、この子はパーンドゥ（青白い色をした者）と名づけられた。同じようにしてアムビカーとアムバーリカーの侍女がヴィヤーサと通じたが、彼女の心は喜びに充ちていた。そこで生れて来た子供ヴィドゥラは心広く学識豊かな人となった（『マハーバーラタ』初編）。

クル族の長老である叔父ビーシュマの勧めにしたがって、パーンドゥはヤーダヴァ王シューラセーナの娘プリターと結婚した。プリターはクンティボージャ王の宮殿で育てられたので、普通クンティーと呼ばれる。クンティーがクンティボージャのもとにいた時、ドゥルヴァーサスという名の聖者がそこにやって来た。彼女はこの聖者を敬い、誠信をもって仕えたので、聖者はこの地を去る時に、子供が欲しいときに唱えれば必ず望みがかなえられる神聖なマントラ（呪文）を彼女に授け、一生のあいだに五回まで唱えることを許した。もし彼女がこのマントラを唱えていずれかの神を呼び出すならば、その神がただちに彼女の前に現われ、その神と同じ威厳と光輝とを持った子供を授けるであろう、というのが聖者の約束であった。ある朝、彼女は美しく輝く太陽を見て、若い人特有の好奇心から、このマントラを唱えて太陽を心に念ずると、ただちに太陽の中から神聖な存在が現われるのが見えた。未婚の彼女は当惑した。すると、その神聖な存在は、若し彼女が子供を産んでも彼女の処女性は失われないだろうと慰めた。やがて彼女は男の子を産んだが、彼女はこの子を箱に入れてアシュヴァー河に流した（この子は、後にカルナとして知られるようになる）。クンティーの自選式（夫を選ぶ行事）が催され、多くの若い王子たちの中から彼女はパーンドゥを選んだ。

ある時、クル族の長老ビーシュマはマドラ国に行き、マドラ王に手厚くもてなされた。王女マードリーの美しさに打たれたビーシュマは彼女をハスティナープラへ連れて帰り、パーンドゥの妻とした。盲目の兄のかわりに王位についたパーンドゥは国をよく治め、二人の妻と仲むつまじく暮らした。強大な軍勢をもってカーシー、ミティラー、スフマ、プンドラの諸王を破り、北インドはすべて彼によって統一された。そこで彼はドリタラーシュトラと相談して、自分のもっているすべてのものを祖母のサティヤヴァティーとビーシュマに与え、二人の妻とともにヒマーラヤの南にある森に入った（『マハーバーラタ』初編）。

この森の中で二頭の鹿が遊びたわむれているのを見、弓でその中の一頭を射たところ、実はその鹿は聖者キンダマが変装したものであった。聖者は死を前にして、パーンドゥに「邪悪なる王よ、若し汝が汝の妻に触れるならば、たちどころに死ぬように」と呪いの言葉を浴びせかけた。これ以後、パーンドゥはクンティーとマードリーに決して触れなかった。呪いをかけた聖者が死んだ時、彼は最初は自殺しようかと思ったが思いとどまり、ヒマーラヤ山に行って修行を始めた。パーンドゥは二人の妻とともに、ナーガシャタードリ、チャイトララタ、カーラクータ、ガンダマーダナ、インドラディユムナ湖などの聖地を訪ね、シャタシュリンガに行って苦行を始めた。しかし、後継者を得られないという暗い気持はどうすることもできなかった。

その時クンティーは、かつて聖者ドゥルヴァーサスから子供を授かるためのマントラ（呪文）を授けられたことを思い出した。喜んだパーンドゥはさっそくマントラをクンティーに唱えてもらった。こうして、三度唱えた結果、クンティーからユディシュティラ、ビーマセーナ、アルジュナの三王子が生れた。最後のマントラはもう一人の妻マードリーのために唱えられ、彼女からはナクラとサハデーヴァが生れた。パーンドゥはシャタシュリンガで、二人の妻と五人の子供とともに幸福に暮らした。

春がやって来て、野には芳香に満ちた花が開き、鳥が啼き、すべてが光に満ちて輝いていたある日、パーンドゥは呪いの言葉を忘れ、愛情でいっぱいになって止めるのも聞かずにマードリーを抱きしめた。その瞬間、彼はかつて自分が射殺した聖者の呪いによってその場に倒れ、死んだ。シャタシュリンガの人々は嘆き悲しみ、パーンドゥの遺骸を法に従って火葬にした。二人の妻は夫の後を追って、そ

の火の中に身を投じようとしたが、クンティーは思いとどまって子供たちの面倒を見ることにし、マードリーはそのまま夫に殉じた（同、初編）。パーンドゥは死後ヤマ天に昇ったという（同、集会編）。

〔別名〕バーラタ（バラタの子孫）、バラタルシャバ（バラタ族の王）、カウラヴァ（クルの子孫）、カウラヴァナンダナ（クル族の王）、クルパティ（同）、ナーガプラーディパ（ナーガプラの王）など。→アムバーリカー、クンティー、サティヤヴァティー

ピシャーチャ　Piśāca　人肉を食らう悪魔的存在。彼らはブラフマーによって創られたとも（『マールカンデーヤ・プラーナ』四八・三七）、クローダー（怒り）より生じたともいわれる。人間にとりつくが、ある種の薬草やマントラ（呪文）で取り除くことができるとされる（『アタルヴァ・ヴェーダ』四・三七）。ピシャーチャは火葬場にブータ、ヴェーターラ、ヤクシャなどとともに集まって、夕暮れに動きまわる。これらの悪鬼たちを見たものは九ヵ月以内に死ぬといわれる。ピシャーチャは思う通りに姿を変え、人間の目には見えなくなるので、あくびをするときは口をおおったり、指を鳴らしたりしないと、容易に口から入りこんでとりついてしまうと考えられている。

ビーシュマ　Bhīṣma　大叙事詩『マハーバーラタ』の全編に登場するクル族の古聖者、英雄。『マハーバーラタ』の伝説によれば、ビーシュマはクル族の王シャーンタヌとガンジス河の女神ガンガーとのあいだの八番目の子供であり、もとデーヴァヴラタという名で、実は八神群の一神ディヤウの生れ変わり、シャーンタヌはマハービシェーカという王の生れ変わりであるという。

　マハービシェーカ王は生前に行なった善行によって死後ヴィシュヌの天界に昇った。ちょうどその時、ブラフマー神の集会の中にガンジス河の女神ガンガーデーヴィーがいた。その厳粛な雰囲気の中で、微風が吹いてガンガー女神の衣の裾をわずかに乱した。その時、マハービシェーカは彼女を盗み見、彼女もまたそれに目で答えた。このことはすぐにブラフマー神に気づかれ、ガンガー女神もマハービシェーカもともに人間に変えられてしまった。しかし、ガンガー女神が熱心に許しを求めたので、ブラフマー神は女神が人間となって八神群を子供として産んだのちに再び天界にもどることを認めた。このようにして、ガンガー女神は人間の姿となって、ガンジス河に近い森の中でガンガーという名の女性として過していた。

　その時、月種族のプラティーパという名の王が、その森の中で子供の生れることを願って苦行を行なっていた。森の中をさまよっていたガンガーは苦行をしているプラティ

ーパ王を見つけ、近寄って彼の右の大腿の上に坐った。彼女はこの王を自分の夫としようとしたのである。しかし、王は『右の大腿は義理の娘の坐る場所であり、したがってあなたは息子の嫁にならねばならない。』と彼女に告げた。しばらくして、プラティーパ王に一人の男子が生れた。彼はシャーンタヌと名づけられ、成長したのちガンジス河近くの森の中でガンガーと出会い恋に落ちた。結婚を申し込むと、ガンガーは彼が自分のすることには絶対に口を出さないこと、もしこの約束を破れば彼のもとを去ること、という条件で同意した。

　こうして二人は結婚し、すぐに最初の子供を身籠った（実は、これから生れてくる子供たちは、天上の八神がヴァシシュタ仙の牛を盗もうとした罪によって人間として生れ変わっているのである）。ガンガーは生れて来た最初の子供をガンジス河に連れて行き、水の中に投げ込んでしまった。彼女の行為を知っても、シャーンタヌは約束にしたがって何も言わなかった。このようにして、生れてくる子供たちを七人まで、彼女は河の中に投げ込み、八番目に生れた子供も同じようにしようとしたが、シャーンタヌはこれを許さなかった。約束を破られたガンガーは立腹し、生れた子を連れてシャーンタヌ王の宮殿を去った。

　彼女はこの子にデーヴァヴラタという名をつけ森の中で育てた。ここで、デーヴァヴラタはガンガーとヴァシシュタ仙から、あらゆる学芸と武術を教え込まれた。こうして三二年経った時、シャーンタヌ王は狩のためにこの森に入り、デーヴァヴラタが立派に成長しているのを見た。彼はガンガー女神に我が子を返してくれるように祈ると、子供を連れて王の前に現われ、子供を手渡したかと思うと、たちまち姿を消した（『マハーバーラタ』初編）。

　父王の宮殿に帰ったデーヴァヴラタは正式に王位を継承する式をあげ、皇太子となった。このような時、父王シャーンタヌはガンジス河に近い森の中に狩りをしに入った。すると森の中には麝香（じゃこう）の香りが立ちこめていた。香のもとを訪ねてさまよううちに漁師の小屋にたどり着き、それが漁師の娘サティヤヴァティーの香りであることが分かった。彼女を一目見て恋に落ちた王は漁師にサティヤヴァティーを妻にしたいと願った。漁師の答えは、娘から生れる子供を王位の継承者にするなら申し出を認めようということであった。すでにデーヴァヴラタという立派な皇太子を立てている以上、漁師の条件をそのまま認めるわけにはいかず、王は苦境におちいった。デーヴァヴラタは国の大臣から父の悩みを聞き出し、父の望みをかなえるために自分自身で王位継承権を棄てることを申し出、そればかりでなく、自分の子孫が増えないように一生独身で過ごす誓い

を立てた。これ以来、彼はビーシュマ（恐るべき人）と呼ばれるようになった。父王は念願かなってサティヤヴァティーと結婚し、息子への感謝の念から、ビーシュマが自分で望むとき以外には死ぬことがないという恩恵を与えた（同、初編）。

シャーンタヌ王はサティヤヴァティーとのあいだにチトラーンガダ、ヴィチトラヴィーリヤの二子をもうけるとすぐに亡くなった。ビーシュマは約束どおりチトラーンガダを王位につけた。クルクシェートラの王国は繁栄したが永くは続かず、チトラーンガダは同名のガンダルヴァの攻撃をうけ、七年間戦ったのち殺された。そこで、ビーシュマはヴィチトラヴィーリヤを王位につけた。

そのころ、カーシー王の三人娘アムバー、アムビカー、アムバーリカーの婿選びの式（自選式）が行なわれた。ビーシュマはヴィチトラヴィーリヤが三人娘の夫となってくれればよいと思って、その式に参加した。三人の娘たちは年老いたビーシュマが参加しているのをいぶかしく思い、また、他の人々も独身の誓いを立てているビーシュマを見ておしとどめようとしたが、老ビーシュマは結婚には八つの形態があることを説き、若い競争者たちを打ち負かした上、カーシー王の三人娘を連れてクル族の都ハスティナープラに帰った。こうして三人娘とヴィチトラヴィーリヤとの結婚の準備万端調った時、三人娘の一人アムバーはすでに自分の心をシャールヴァ王に捧げていることを告白したので、ビーシュマは彼女をカーシーに送り返した。ヴィチトラヴィーリヤはアムビカーとアムバーリカーと結婚し、七年のあいだ国を治め、子供がないままに世を去った。

王国が断絶することを恐れたサティヤヴァティーは、ビーシュマにアムビカー、アムバーリカーと交わって世継ぎをもうけてくれるように頼んだが、彼は独身の誓いを破ることはできないと言ってこれを断わった。サティヤヴァティーはあきらめることなく、庶子のヴィヤーサを呼び出してアムビカーたちと交わらせ、アムビカーからはドリタラーシュトラ、アムバーリカーからはパーンドゥ、彼女らの侍女からはヴィドゥラが生れ、彼らの子孫がクル族を二分する大戦争を行なうことになるのである。

カウラヴァにもパーンダヴァにも大伯父に当るビーシュマは、この戦争では初めの一〇日間、カウラヴァ軍の指揮をとった。ビーシュマとパーンダヴァのアルジュナとは幾度も衝突し、互いに勇敢に戦い、天神も鬼神も驚嘆するほどであった。開戦一〇日目、ビーシュマの周辺で一日中カウラヴァとパーンダヴァの戦闘が行なわれた。ビーシュマはアルジュナをはじめとするパーンダヴァの戦士たちの無数の矢を受け、戦車から落ちた。パーンダヴァ側はいっと

き凱歌をあげたが、このクル族全体の栄誉を担う老雄に敬意を表して一時休戦に入り、カウラヴァもパーンダヴァもいま死のうとしている勇士のまわりに集まった。ビーシュマは最後にカウラヴァの総師ドゥリヨーダナに対して、クルクシェートラに平和をもたらすように警告し、「おお、わが子よ。この戦いは私の死で終わらせよ。パーンダヴァと和解せよ」と語ったが、このことは聞き入れられないまま、ビーシュマは世を去った。『マハーバーラタ』において展開されるクル族の大戦争を軸としたさまざまな出来事において、ビーシュマは常にクル族の長老として主要な役割を果している。

〔別名〕アーパゲーヤ（河の子）、アーパガースタ（同）、バーギーラティープトラ（ガンジス河の子）、バーラタ（バラタの子孫）、ピターマハ（父祖）、バラタルシャバ（バラタ族の聖者）、バラタサッタマ（バラタ族のうちの最上の人）、シャーンタヌプトラ（シャーンタヌの子）、シャーンタヌスタ（シャーンタヌの子）、ガンガースタ（ガンガー女神の子）、ガーンゲーヤ（同）、ジャーフナヴィープトラ（ジャフヌの娘・ガンガーの子）、カウラヴァ（クルの子孫）、カウラヴィヤ（同）、クルクラシュレーシュタ（クル族の最上の者）、クルムキヤ（同）、クルナンダナ（クルの子孫）、ナディージャ（ガンジス河から生れたもの）、サーガラガースタ（同）、サティヤサンダ（約束を守る者）など。→シャーンタヌ、ガンガー

ピターマハ　Pitāmaha　「祖父」の意で、すべての者の父祖としてのブラフマー神の別名。

ピータームバラ　Pītāmbara　「黄色い着衣を身につけた者」の意味で、ヴィシュヌの別名。

ピッパラ　Pippala　→アシュヴァッタ

ヒディムバ　Hiḍimba　パーンドゥ王の五王子がカウラヴァのドゥリヨーダナによって追放され、ガンジス河の対岸の森の中をさまよっているとき、彼らを食おうとしたラークシャサ（羅刹）。パーンダヴァがバンヤンの木（ニヤグローダ）の下で眠っているのを見て食おうと思い、妹のヒディムバーに彼らがどういう人物かを見てくるように言いつけたところ、彼女は第二子ビーマを見て一目で恋してしまった。ヒディムバは妹もろとも五王子を殺してしまおうとしたが、かえってビーマに倒された（『マハーバーラタ』初編）。

ヒディムバー　Hiḍimbā　あるいはヒディムビー。羅刹ヒディムバの妹。パーンドゥ王の五人の王子がドゥリヨーダナによって追放され、ガンジス河の対岸の森をさまよううちに飢え渇いてバンヤンの木の下で眠ったことがあった。この時、附近に住んでいる人食いの巨人ヒディムバが彼ら

を見つけて食おうとし、妹の巨人女ヒディムバーに彼らを見てくるように言いつけた。ヒディムバーは言われたとおり五王子に近づいたが、一人眠らずに兄弟たちを守っている第二王子ビーマを一目見たとたん、熱裂な恋心をいだいた。彼女は美しい人間の女性に姿を変え、ビーマに言い寄った。羅刹ヒディムバは恋に陥ったヒディムバーをも殺そうとしたが、ビーマが激しく立ち向かってついに彼を倒した。それでもなおヒディムバーがビーマとの結婚を望むので、長兄のユディシュティラは、一子の男児が生れるまでビーマが巨人女と一緒に暮らすことを認めた。ビーマは日中はヒディムバーのもとで過し、日没前には常に家に帰るように手配してもらい、二人のあいだにガトートカチャという男児が生れた（『マハーバーラタ』初編）。この子は力の強い羅刹となり、バーラタの大戦争の時にはパーンダヴァに味方して大活躍をした。↓ビーマ、ガトートカチャ

ピトリ　Pitṛ　「父」あるいは「祖先」の意味で、通常つぎのような存在をあらわす。㈠亡くなった祖先の霊。祖霊。この祖霊に対してピンダと呼ばれる米と粉でつくった団子状の供物と水が供えられる。この祖霊の住む世界をピトリローカという。㈡人類の祖先という意味から、伝説上、人類の祖とされる一〇人のプラジャーパティをいう。㈢『マハーバーラタ』の付録の『ハリヴァンシャ』や『ヴァーユ・プラーナ』によれば、最初のピトリは神々の子であったといわれる。

ピトリパティ　Pitṛpati　「死者の霊の主」の意で、死者の国を支配するヤマを表わす。

ビーマ　Bhīma　「恐ろしい者」の意で、ビーマセーナともいう。クル族の王パーンドゥの五王子の第二王子。ヤーダヴァ王の娘クンティーの子。クル族の大戦争ではパーンダヴァ軍の戦士として勇名をはせた。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、パーンドゥ王にはクンティーとマードリーという二人の妻があったが、キンダマ仙の呪いにより、妻に触れるや否や生命を落とすさだめとされていた。彼の妻のうち、クンティーはかつてドゥルヴァーサス仙から、ある神を心に念じて唱えると必ず子供を授けられるというマントラ（呪文）を授けられていたので、ダルマデーヴァ神によって五王子のうちの長子ユディシュティラを得た後、風の神ヴァーユにマントラを捧げ、その結果としてビーマが生れた。そこで彼はヴァーユプトラ（ヴァーユ神の息子）とも呼ばれる。彼が生れた時、天から「この子は強者のうちの最強のものとなるであろう」という声があった（『マハーバーラタ』初編）。

父王パーンドゥが世を去ってから、ユディシュティラをはじめとするパーンドゥの五王子はハスティナープラのドリタラーシュトラ王の宮殿で、カウラヴァの王子たちと一緒に育てられた。この時期、さまざまな遊びや競技でビーマはカウラヴァを傷つけたり打ち負かしたりしたので、カウラヴァ側の憎しみを受け、それは一生のあいだ彼につきまとった。ある時、カウラヴァは彼に毒を飲ませ、意識を失わせたうえで、ガンジス河の流れに投げこんだ。彼は深く深く沈んで行き、ついにナーガローカ（蛇の世界）に着いた。そこで蛇たちに嚙まれた結果、かえって蛇の毒と前の毒が合わさって中和し、彼は元気をとりもどした。アーリヤカという蛇と親しくなり、この友人とともに蛇王ヴァースキのところへ行くと、蛇王は喜んで、飲むと一〇〇〇頭の象の力がそなわるという神酒を彼に与えた。彼はこの神酒を一気に飲みほし、比べるもののない強い力を身につけて母や兄弟のところに帰った。

カウラヴァもパーンドゥの王子たちも一緒にドローナのもとで武術を学び、その教育期間が終わると、競技会が行なわれた。ビーマはカウラヴァの長子ドゥリヨーダナと棍棒術を競ったが、あまりに激烈なのでカルナは二人を引き離そうとしたほどであった。ビーマはその後もさらにバラーマのもとで棍棒術を訓練した。

ドゥリヨーダナのために森に追われたパーンダヴァは飢えと渇きに苦しみながらガンジス河の岸辺の森をさまよっていた。ビーマは母クンティーと四人の兄弟をバンヤン樹（ニヤグローダ）の下で休ませ、水を探しに行ってもどってみると、家族のものは皆深い眠りにおちていた。このバンヤン樹の附近には食人鬼の羅刹ヒディムバが住んでおり、人肉のにおいをかぎつけて高い樹の上から眠っている人々をねらっていた。彼はまずヒディムバーという巨人女を偵察に出したが、ヒディムバーはビーマを一目見るなり、この英雄に恋心をいだき、彼女を受け入れてくれれば彼とその家族を救ってくれるという。ビーマとヒディムバーの問答が続くうちに、いら立った巨人ヒディムバはビーマに決闘をいどみ、恐ろしい格闘の末、ビーマは巨人を倒した。ヒディムバーの強い希望によりユディシュティラは、ビーマが日中は巨人女のもとで過し、日没前に家に帰り、一人の男子が生れるまでその生活を続けるように取り計らった。こうしてヒディムバーは息子を産んだ。この子はガトートカチャと名づけられ、力の強い羅刹となって、パーンダヴァのために身を捧げる戦士となった（初編）。

パーンダヴァは森から森へとさまよって、エーカチャクラーという町へ着き、身分を明かさないままで、あるバラモンの家に寄寓した。するとそのバラモン一家が嘆き悲しんでいるのでわけを聞くと、この町の附近に羅刹の巨人バカが住んでおり、毎年町の人は彼に車いっぱいの米、二匹

の小牛、一人の人間を貢物として贈らねばならず、このたびはこのバラモンの家族がその番になったということであった。クンティーは自分の子供の一人にその役目を実行させようと申し出た。ビーマは母の申し出をただちに実行に移し、巨人バカと大格闘の末、巨人を真っ二つにした。

　パーンドゥの長子ユディシュティラが王位についたが、カウラヴァ側はなんとかしてパーンダヴァの力を殺ごうとして賭博の会を催し、ユディシュティラを招いた。ドゥリヨーダナと賭博の天才シャクニによってそのすべてを取られた。ユディシュティラは金銀・財宝・国土などを賭け、ドゥリヨーダナと賭博の天才シャクニによってそのすべてを取られた。彼はついに自分自身を賭けて負け、最後に五王子の妻ドラウパディーを賭けて破れた。ビーマは兄がドラウパディーを賭けたことをはげしく非難し、カウラヴァ側がドラウパディーを賭博で勝ちとったものとして彼女の身体から衣服をはぎ取ろうとした時、彼は次のような恐ろしい言葉を述べた。「もし、私が戦争で、この邪悪で愚かなバラタ族の無法者の胸をひき裂き、その血を飲まないならば、私は決して祖霊の世界に達することはないであろう。」さらに、ドラウパディーの処置について問答が行なわれている間に、ドゥリヨーダナはドラウパディーの前で自分の太ももを露出するという前代未聞の恥辱を加えた。その時、ビーマは「もし、私が戦争でこのドゥリヨーダナの太ももを棍棒で粉砕しないならば、私は祖霊の世界に入らないであろう。」と言った。ビーマは怒りにもえ、その場でカウラヴァを打ち殺そうとしたが、アルジュナになだめられた(集会編)。クルクシェートラでバラタの子孫たちが二つに分れて同族相殺しあう大戦争を始めた時、ビーマはパーンダヴァ軍の中心的な戦士として活躍し、開戦一八日目(最後の日)、一人生き残ったカウラヴァの英雄ドゥリヨーダナと戦った。両勇士は棍棒をもってあらゆる力をふりしぼって戦ったが結着がつかなかった。その時、クリシュナは、ドラウパディーが辱しめられた際に、ビーマがドゥリヨーダナの太ももを粉砕してやると言ったことをアルジュナに思い出させ、アルジュナは自分の太ももを手で打ってビーマに知らせた。ビーマはこのしぐさの意味にすぐに気づき、ドゥリヨーダナの太ももに棍棒を打ち込んで粉砕した(シャリヤ編)。

　ビーマはパーンダヴァの諸勇士の中でも最強の戦士として、常にユディシュティラに従い、ユディシュティラが王位をパリークシットに譲って最後の旅に出る時も同行した。彼らはヒマーラヤ山に遍歴し、神々の山メールに至ったが、天上にのぼる途中で、まずドラウパディーが倒れ、ついでサハデーヴァが、次にナクラ、アルジュナが倒れ、最後にビーマが倒れた(旅立編)。ビーマにはドラウパディーとのあいだにスタソーマ、カーシー王の娘バランダラーとのあいだにサルヴァガという子があった。

〔別名〕アニラートマジャ(風の神の子)、アルジュナーグラジャ(アルジュナの兄)、アルジュナプールヴァジャ(アルジュナの前に生れた者)、ビーマダヌヴァン(恐るべき誓いをした人)、カウンテーヤ(クンティーの子)、マールタートマジャ(風の神の子)、マールティ(同)、パヴァナートマジャ(同)、ヴァーユプトラ(同)、ヴァーユスタ(同)、パールタ(プリターの子)、ヴリコーダラ(狼の腹をした者)など。↓ドラウパディー、ドゥリヨーダナ

ヒマヴァット　Himavat　「雪を持つもの」の意で、ヒマーラヤ山、あるいはヒマーラヤ山を神格化した神。神話の上からはメーナー、あるいはメーナカーの夫で、ウマーとガンガーの父親。ウマーはシヴァの神妃となり、ガンガーは天上より下界に流れ下ってガンジス河となった。

ヒマーチャラ　Himācala　ヒマードリともいい、ヒマーラヤ山脈の別名。

ヒラニヤカシプ　Hiraṇyakaśipu　「金の衣類を着た者」の意で、ヒラニヤークシャの兄弟のダイティヤの名。彼はシヴァ神から三界を一〇〇万年のあいだ支配することを許されたため、おごり高ぶってヴィシュヌを信仰する息子プラフラーダを殺そうとした。この時、ヴィシュヌはヌリシンハ(人獅子)の姿で現われ(ヴィシュヌの第四の化身)、悪魔ヒラニヤカシプを打ち殺した。↓ヴィシュヌ

ヒラニヤガルバ　Hiraṇyagarbha　「黄金の胎児」の意で、『リグ・ヴェーダ』(一〇・一二一)のヒラニヤガルバ讃歌に説かれる宇宙の創造神。創造神は自身で創り出した原初の水の中にヒラニヤガルバとして現われ、天地を支え、神々に生気を与えて神界・人間界を支配していると説かれる。ブラーフマナではこの原初の水にヒラニヤーンダ(黄金の卵)が出現し、この黄金の卵よりプラジャーパティ(生類の主)が生れ出て一切の創造を行なったという(『シャタパタ・ブラーフマナ』一一・一)。ヒンドゥー教神話においては、創造者の地位はヒラニヤガルバ、プラジャーパティ、ブラフマーより創造原理としてのシャクティに移されている。

ヒラニヤークシャ　Hiraṇyākṣa　「金の目を持つ者」の意で、大地を海底深く奪い去った悪魔ダイティヤ。このとき、ヴィシュヌ神はヴァラーハ(野猪)の姿となって(ヴィシュヌの第三の化身)、ヒラニヤークシャを殺し、牙の上に大地を支え、人類を救済した(『ヴァーユ・プラーナ』一・一五)。↓ヴァラーハ

ピンガラ　Piṅgala　㈠ヴェーダの韻律学の著作を著わした聖者。紀元前二世紀の人とされる。㈡ナーガ(蛇)族の王の名。

ブヴァネーシュヴァラ Bhuvaneśvara 「世界の主」の意で、現在はオリッサ州の州都となっている都市。南へ八キロほどの田園地帯にアショーカ王の摩崖法勅があり、その近くに当時の町シシュパールガルの遺跡がある。この都市はその名の示すようにシヴァ神に因縁の深いところであり、八世紀以後、多くの寺が建てられ、中でもトリブバネーシュヴァラ（三界の主）としてのシヴァ神を祀ったリンガ・ラージャー寺院、ムクテーシュヴァラ寺院などが名高い。

プーシャン Pūṣan 『リグ・ヴェーダ』の栄養の神。「養う」を意味する動詞 puṣ より出た名称で、太陽がすべてのものを生育する力を持っている点を神格化したもの。プーシャンは熱烈・強力であり、一切の主として万物を見渡し、それらを成長させる力を持っている。太陽神スーリヤの使者となり、その娘スーリヤーを妻にする。『リグ・ヴェーダ』においては、太陽のさまざまな面が神格化されているが、プーシャンが他の神々に対して最も特色を示すのは、彼の道祖神的・牧畜神的性格である。彼は牝山羊の引く車に乗り、最上の御者といわれ、人間や家畜を常に監視していて危険から守っている。なくなった家畜や財産を回復し、人間に多くの富を与える。このように、人間の最良の指導者であるとともに、死者を天界の祖霊のもとに導く役割をもっている。

「汝の一つの〔形〕は輝き、汝の他の〔形〕は祭祀にふさわし。汝は天のごとし、相異なる形相もつ・一日の両半分（昼夜）〔を伴うところの〕。実に汝はあらゆる変幻を好む、自律の〔神〕よ。汝の施与は、プーシャンよ、ここに吉祥なれ（六・五八・一）。牝山羊を馬の代りとし、家畜を守り、勝利の賞を沢にもち、詩想を促進し、全世界（全宇宙）の上に安置せられ、しなやかなる突棒（家畜を追う道具）を振り廻しつつ、神プーシャンは万物を見渡して進む（二）。プーシャンは、天の・また地のいみじき縁者なり、液状の供物の主なり、寛裕にして、驚歎すべき栄光を有す。かかる彼を神々はスーリアー（太陽の娘）に与えたり、愛情の創造たる・強力にしていみじく歩む彼を（四）。」（『リグ・ヴェーダ』、辻直四郎訳）。

『リグ・ヴェーダ』においては、恩恵を与えるものとしてうやうやしい態度で接しなければならない存在であったプーシャンも、プラーナ文献ではむしろ滑稽な姿であらわされるようになった。それは、プーシャンには歯がないためである。この話はすでに『タイッティリーヤ・サンヒター』の中で語られている。ある時、ルドラ神（シヴァ神の原形）は祭式に招かれなかったことに腹を立てて、その祭式の供物の中に矢を射込んだ。ところがそれはプーシャン

に捧げられたものであり、彼は供物を矢がささったまま食べてしまったので、歯が一本残らず欠けてしまったという。『マハーバーラタ』（ドローナ編）でも、ルドラによって歯を折られた話が記されている。ルドラは祭祀に招かれなかったことで怒り狂い、ダクシャの祭場にいる神々のところに躍り込んでバガを殴りつけて眼をえぐりとり、足でプーシャンを蹴りつけて、プローダーシャの供物を食べていたプーシャンの歯を折ってしまったという。↓ルドラ

プシュカラ Puṣkara ㈠ナラ王の兄弟で、ナラ王とさいころ賭博をしてその全財産と王国を奪った（『ナラ王物語』）。
㈡「青蓮華」の意で、シヴァ神、クリシュナ神の別名。
㈢現アジメールの近くにある霊湖。パーンダヴァの五王子たちがドゥリヨーダナ王によって追放されたとき一二年のあいだこの湖のほとりに住んだという（『マハーバーラタ』初編）。『パドマ・プラーナ』第一巻はプシュカラ編ともいわれ、この土地がブラフマーに捧げられたものであり、巡礼場にふさわしいものであることが記されている。
㈣プシュカラドヴィーパのことで、ヒンドゥー神話の世界観において、七つの大陸があるといわれるうちの一つ。プラーナによれば、そこは天上の楽園で、そこに住む人は愛憎を離れて一〇〇〇年のあいだ生きるという（『ヴァーユ・プラーナ』二〇一）。

プシュカラーヴァティー Puṣkarāvatī インダス河の近くにあったガンダーラの町の名。

プシュパカ Puṣpaka 白鳥のように速く天を駆けることのできる戦車の名前。ブラフマー神がクヴェーラに与えたものをランカーの羅刹王ラーヴァナが奪い、さらにこれをラーマが奪い取って、とりもどしたシーターとともにこれに乗ってアヨーディヤーの都に帰った（『ラーマーヤナ』戦闘編）。

プシュパダンタ Puṣpadanta ㈠「花の歯を持つ者」の意で、シヴァの従者の一人。彼はシヴァとその神妃パールヴァティーの私語を聞いたことによってシヴァの不興を買い、その罰として人間に生れることになった。このようにして彼は文法家カートヤーヤナの姿になったという。
㈡北西を守護するヴァーユの象の名。

プシュカラドヴィーパ Puṣkaradvīpa ヒンドゥー教の世界観において説かれる洲（大陸）の名。プラーナの世界観においては、七つの世界が層をなして存在しており、その最下にプールという世界があって、その中心に人間の住むジャムブドヴィーパ洲がある。この洲を囲んで七つの洲と七つの海があり、その一番外側にある洲をプシュパドヴィーパという（『ヴィシュヌ・プラーナ』二・二・五―六）。ブラフマー神の王冠を形づくっている蓮の花にちなんで、

この名があるという。

プシュポートカター Puṣpotkaṭā ランカー島の羅刹女。ヴィシュラヴァスの妻で、ラーマと戦って殺されたランカーの羅刹王ラーヴァナとその弟クムバカルナの母（『ラーマーヤナ』）。

ブダ Budha 「賢名な者」の意で、月の神ソーマとその妻ローヒニー、あるいはブリハスパティの妻ターラーとのあいだの子。水星。彼はヴァイヴァシュヴァタの娘イラーと結婚してプルーラヴァスをもうけた。ブダは『リグ・ヴェーダ』の讃歌の作者の一人とされる。↓ターラー

ブータ Bhūta 幽鬼、悪鬼。墓場に出没し、木々に潜み、死体を動かし、人間をあざむいてその肉を食らう邪悪なる精霊をいう。『ヴィシュヌ・プラーナ』では、ブータは創造神が激怒したときに作り出された恐ろしい存在といい、『ヴァーユ・プラーナ』ではブータの母はクローダー（怒り）であり、彼らはシヴァの従者であるという。

プータナー Pūtanā 悪魔バリの娘の女悪魔。彼女は幼いクリシュナを飲みこんで殺そうとしたが、かえってクリシュナに殺された。

ブータパティ Bhūtapati 「悪鬼の主」の意で、ルドラ、シヴァの別名。

ブッダ Buddha 仏教の開祖である仏陀。ヒンドゥーの神話ではヴィシュヌ神の一〇の化身の中の第九とされる。↓ヴィシュヌ

ブーテーシュヴァラ Bhūteśvara 「存在の主」の意で、ヴィシュヌ、ブラフマー、クヴェーラ、クリシュナの別名。「悪鬼の主」の意味で用いられる場合にはシヴァ神を意味する。ブーテーシャと呼ばれることもある。

プラジャーパティ Prajāpati 「創造物の主」の意で、『ヴェーダ』においては、インドラ、サヴィトリ、ソーマ、ヒラニヤガルバなどの神格をいい、『ブラーフマナ』では世界の創造者たるブラフマー神をいう。プラーナ文献ではブラフマー神の心（マナス）から生れた一〇人の聖者たちをいい、彼らから人類が生れたという。一〇のプラジャーパティとは、通常、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァシシュタ、プラチェータス（あるいはダクシャ）、ブリグ、ナーラダである。あるいは七人、八人、一六人、二一人ともいわれる。

プラスーティ Prasūti マヌの娘で、ブラフマーの息子ダクシャの妻。

プラスティヤ Purastya ブラフマーの意（マナス）から生れた息子の一人、あるいはプラジャーパティの一人。彼はクヴェーラ、ラーヴァナ、ヴィシュラヴァの父で、すべての羅刹は彼から生れたという。彼はまた、プラーナ文献

をブラフマー神より授けられ、それをパラーシャラに伝え、こうしてプラーナが人類に知られるようになったという。

プラセーナ Prasena ニグナの息子、サトラージット、あるいはサトラージタの兄弟。彼はスヤマンタカという名の宝石の奪い合いに関係してライオンによって殺された。

プラタルダナ Pratardana カーシー王ディヴォーダーサの子。彼はクヴァラヤという名の立派な馬を持っていたので、クヴァラヤーシュヴァともいわれる（『ヴァーユ・プラーナ』四・八）。ディヴォーダーサはハイハヤ族のヴィータハヴィヤ王に国を奪われ、一族は全滅したが、ブリグによって祭祀を行なった結果、一子プラタルダナが生れ、父の国土をとりもどした。

プラティヴィンディヤ Prativindhya クル族のパーンダヴァの総帥ユディシュティラの子。母親はパーンダヴァの五王子の共通の妻ドラウパディー。プラティヴィンディヤはバーラタ戦争において、初日にカウラヴァのシャクニと戦い、ついでアラグシャ、アシュヴァッターマンなどと戦い、終戦前夜、眠っているところをドローナの息子のアシュヴァッターマンに襲われて殺された。ヤウディシュティリ（ユディシュティラの子）ともいわれる。↓ユディシュティラ

プラティシュターナ Pratiṣṭhāna 月種族（チャンドラヴァンシャ）の初期の都。ガンジス河とヤムナー河の合流地の東側、したがって現在のアラーハーバードの反対側にあったといわれる。

プラティーパ Pratīpa クル族に属する南パンチャーラの王。三人の子を持っていたが、シャーンタヌが王位を継いだ（『マハーバーラタ』初編）。プラーナの伝説によれば、ある時、プラティーパ王がガンジス河の水の中で太陽を礼拝していると、水中より一人の美しい乙女が姿を現わし、王の右の太ももの上に坐った。驚いたプラティーパは言った。「美しい少女よ、あなたは自分のしたことの意味がわかっているのか。なぜ、私の許しもなしに右の太ももの上に坐ったのか。右の太ももに坐るのは私の娘と息子の妻だけだ。あなたは右の太ももの上に坐ったのだから、やがて生れてくる息子の妻にしよう。」このことがあってしばらくたってから、プラティーパ王にシャーンタヌという名の息子が生れた。シャーンタヌが成人すると、王は森に入って修行することを決意し、息子にもし一人の少女が汝に近づいて来たら、理由を聞くことなく妻とするようにと忠告した。森の中で厳しい修行をしたのち、彼は天界に昇った。このシャーンタヌの妻となった少女はガンジス河の女神ガンガーで、彼らのあいだに生れたのがバーラタの戦いで大活躍するビーシュマである（『デーヴィーバーガヴァタ』二）。

→シャーンタヌ、ガンガー

プラディユムナ Pradyumna クリシュナとその妻ルクミニーとのあいだの子。ヤーダヴァ族に属するヴリシュニ族の五人の英雄（サンカルシャナ、ヴァスデーヴァ、サームバ、アニルッダ、プラディユムナ）の一人。プラーナの伝説によれば、愛の神カーマデーヴァの生れ変わりであるといわれる。

昔、カーマデーヴァがその妻ラティデーヴィーと暮していた。一方、ヒマーラヤの娘パールヴァティーはシヴァ神の愛を得ようとつとめていた。それは、神々が邪悪なアスラであるターラカースラを倒すためにシヴァの男子が欲しかったからである。神々はカーマデーヴァを雇ってシヴァ神の心の中に愛の気持を起こさせようとした。インドラ神の命令に従って、カーマデーヴァは深い禅定に入っていたシヴァ神に近づいた。すると修行を妨げられたシヴァ神は立腹して、第三の眼から火を吹き出してカーマデーヴァを焼き殺してしまった。嘆き悲しんだその妻ラティデーヴィーはヒマーラヤ山の麓に行き、マハーデーヴィー女神に祈りを捧げた。すると女神が彼女の前に現われ、「カーマデーヴァはプラディユムナという名で、クリシュナの子として生れ変わり、神々とアスラとの戦いがおこったとき、アスラの王シャムバラを殺すであろう。シャムバラはカーマデーヴァの生れ変わりの男の子を探すであろうから、汝は現在の身を捨ててマーヤーヴァティーとして生れ変わり、シャムバラの妻となりなさい。そうすれば、プラディユムナがシャムバラを殺し、汝を再び妻として受け入れるであろう。」と予言して姿を消した。女神の言うままに、ラティデーヴィーはその身を捨ててアスラの世界に生れ変わり、シャムバラの妻となった。

そのころ、ドヴァーラカーの王クリシュナの妻ルクミニーが子供を欲しがっていた。クリシュナはガルダ鳥に乗ってカイラーサ山に行き、妻のためにシヴァ神に祈りを捧げると、シヴァ神はかつて第三の眼の火によって焼き殺したカーマデーヴァがルクミニーの男子として生れ変わってくるであろうと予言した。シヴァの予言通りにルクミニーからプラディユムナが生れて七日目に、これを知ったアスラ王のシャムバラはこの子を連れ出し、海に投げ込んだ。すると大きな魚が現われ、その子を飲み込んだ。漁師がこの大魚を捕え、シャムバラ王に献上した。シャムバラは妻のマーヤーヴァティーにこの魚を料理することを命じたので、彼女が魚の腹を割くと美しい男の子が出て来た。彼女はこの子を自分の子として育てて行くうちに、この子が美しさ・りりしさにおいてかつての夫カーマデーヴァに似ていることに気づいた。その時ナーラダ仙が姿を現わし、このプ

ラディユムナこそカーマデーヴァの生れ変わりであることを明らかにした。この時から、彼女のプラディユムナへの気持は愛情へと変わり、成長したプラディユムナにシャムバラのもつ魔術の秘密を教えた。やがて機会を見出して、プラディユムナはシャムバラを殺し、ラティデーヴィーの生れかわりであるマーヤーヴァティーを連れ去った。バーナの娘ウシャーと結婚したアニルッダはプラディユムナの子である（『バーガヴァタ・プラーナ』一〇）。

プラーナ Purāṇa 「古い物語」「古伝説」の意で、大叙事詩と並んでヒンドゥー教の聖典とみなされる文献群。ヒンドゥーの神話・伝説の宝庫でもある。古い文献の中では、プラーナはイティハーサ（史詩）と結びつけられており、もともと歴史書として書かれたといわれ、次のような五種の特徴（パンチャ・ラクシャナ）、すなわち五つの主題を持つといわれる。(1)創造（宇宙の創造）、(2)再創造（宇宙の周期的な破壊と創造）、(3)系譜（神々と聖仙の系譜）、(4)マヌの劫期（マヌに始まる人類紀）、(5)王朝の歴史（日種・月種の家系にまで及ぶ新古の王朝の歴史）。現存するプラーナのすべてがこの五主題を含んでいるわけではなく、あるものは一部を省略し、あるいはこれらの五主題のほかに多くの神話・伝説を含み、哲学・宗教・祭礼・習俗・政治・天文・歴史・技芸などのあらゆる分野にわたる内容をもっている。なかでも、とくにヴィシュヌ、シヴァ両神を讃嘆する内容が目立っている。一般にプラーナという場合、次の一八種の文献をあげるのが普通である。

㈠ブラフマ・プラーナ　プラーナの目録の中で、第一番目にあげられているために、アーディ・プラーナ（第一のプラーナ）とも呼ばれる。ガンジス河の霊場を讃美するガウタミーマーハートミヤと呼ばれる第七〇―一七五章は、写本ではしばしば独立のテキストとして扱われる。

㈡パドマ・プラーナ　スリシュティ・カーンダ（創造編）、ブーミ・カーンダ（土地編）、スヴァルガ・カーンダ（天上編）、パーターラ・カーンダ（下界編）、ウッタラ・カーンダ（終末編）の五巻をもつ古いテキストと、六巻のものがある。このプラーナの名称は、ブラフマー神の創造のときに出現するパドマ（蓮華）に因んで名づけられたものであるが、内容的にはヴィシュヌ神の讃美のための神話・伝説が多い。クリヤー・ヨーガ・サーラ（所作によるヨーガの精要）と名づけられる補遺があり、ヴィシュヌ神は信仰に満ちた行、なかでもガンジス河への巡礼とヴィシュヌにささげられた祭礼を行なうことによって礼拝されるべきことを強調している。

㈢ヴィシュヌ・プラーナ　ヴィシュヌ派教徒の最も重視するプラーナ。ヴィシュヌは唯一の神、最高の霊、ブラフ

マーとシヴァの合一した者、世界を創造する者、世界を維持する者としてたたえられる。プラーナの五種のテーマをことごとく具え、他のプラーナに比べて組織的な文献である。全六巻より成り、一二世紀のヴィシュヌ派の哲学者ラーマーヌジャは、ヴェーダーンタ派の根本聖典『ブラフマ・スートラ』を註釈するにあたって、ヴィシュヌを唯一絶対の神とするこのプラーナにしばしばふれている。

(四)ヴァーヤヴァ、またはヴァーユ・プラーナ　「風神ヴァーユによって語られたプラーナ」であるが、このプラーナがシヴァ神に捧げられていることからシヴァ・プラーナともいう。世界の創造、王の系譜などを主題としているが、内容的にはシヴァ神の讃嘆のための神話・伝説が大部分を占めている。

(五)バーガヴァタ・プラーナ　ヴィシュヌ神をバガヴァットという名で崇拝するバーガヴァタ派の信者の根本聖典。現在もヴィシュヌを信仰する人々の生活をインド全土において支配しているといわれる聖典。全プラーナの中で、最も多くの地方語に訳されている。全一二巻、約一万八〇〇〇の詩節から成り、『ヴィシュヌ・プラーナ』と同一の部分もあるが、ヴィシュヌの化身、とくに野猪としての化身が詳しく語られている。全一二巻中、クリシュナの生涯を描いた第一〇巻が最も人気があって広く読まれている。とくにクリシュナと牧女（ゴーピー）との恋愛の描写が大部分を占め、この部分はあらゆるインド人に好まれているという。

(六)ブリハンナーラディーヤ・プラーナ　「ナーラダの大プラーナ」の意で、ナーラダ、またはナーラディーヤ・ウパプラーナと区別して「大」の字をつけて呼ぶ。このプラーナの重要な課題はプラーナ本来の五主題ではなく、ヴィシュヌ崇拝の祭礼と儀礼の描写が大部分を占めている。

(七)マールカンデーヤ・プラーナ　全プラーナ中で最も古いものの一つ。古代の聖仙マールカンデーヤがその弟子のクラウシュトゥキにたいして、世界の創造、劫期、王朝の系譜などプラーナ本来の主題を語る部分が最も古く、また重要であるといわれる。この部分では、インドラ、ブラフマー、アグニ、スーリヤなどのヴェーダの神々がヴィシュヌやシヴァよりも高い地位にあり、多くの讃嘆をうけている。このプラーナではハリシュチャンドラ王の伝説、ヴィパシュチット王の伝説、アナスーヤーの伝説などが含まれ、五、六世紀ころに編纂された『デーヴィー・マーハートミヤ』（女神の偉大さ）が第八一章から九三章に挿入されている。これはシヴァのデーヴィー（神妃）を讃美した内容をもつ独立した文献であり、デーヴィーの名前の一つに因んで「チャンディー」ともいう。『デーヴィー・マーハートミ

ヤ』では女神が誕生し、神々や人間の敵を打ち倒す主題が中心であり、女神ドゥルガーが小牛の姿をした魔神マヒシャースラを殺す話、ドゥルガーがカーリーとともにシュムバ、ニシュムバという兄弟の魔神を殺す話など、女神が美しい姿をしながら凄惨な殺戮を行なうありさまが描かれている。いわば、女神崇拝の根本聖典である。

(八)アグニ・プラーナ　アグニ神がヴァシシュタ仙に伝えたというので、このように呼ばれる。ヴィシュヌの化身を描いているが、リンガとドゥルガーの崇拝を強調しているところからシヴァ派の性格をもっている。しかし、このプラーナの特色は百科辞典的な内容をもつということであり、地理・天文・占星・結婚・葬儀・建築・政治・戦争・法律・音韻など、ありとあらゆる分野を扱っている。

(九)バヴィシュヤ・プラーナ　バヴィシュヤとは「未来」のことで、未来の予言を含むプラーナということ。このプラーナには伝説を扱うところは少なく、バラモン的な祭礼、カーストの義務などを扱うところが大部分を占めている。

(一〇)ブラフマヴァイヴァルタ・プラーナ　南インドではブラフマカイヴァルタ・プラーナといい、四巻より成る。第一巻ブラフマー編はブラフマーの世界創造を扱っているが、実際はクリシュナの創造である。第三巻ガネーシャ編は象頭の神ガネーシャの伝説を扱い、第四巻クリシュナ誕生編はクリシュナの全生涯、その戦いと恋愛を描き、クリシュナと妻ラーダーの讃美を内容としている。

(一一)リンガ・プラーナ　リンガとしてのシヴァの讃嘆を内容とするプラーナ。シヴァ派のプラーナ。

(一二)ヴァラーハ・プラーナ　ヴァラーハ（野猪）に化身したヴィシュヌがプリティヴィー（地母神）に物語ったというところから、このように名づけられた。プラーナ本来の主題よりもヴィシュヌ派教徒の祈禱や儀礼を述べている。

(一三)スカンダ・プラーナ　シヴァ神の息子であるスカンダが語り、そのなかでシヴァ派の教義を宣言したといわれるプラーナ。

(一四)ヴァーマナ・プラーナ　ヴィシュヌ神が小人（ヴァーマナ）となってこの世界を救うということから始まるので、この名がある。ヴィシュヌの化身が語られるが、シヴァ、リンガの崇拝、霊場の讃美などシヴァ派的な要素も少なくない。

(一五)クールマ・プラーナ　神々とアスラたちが乳海を攪拌したとき、亀となってこれを助けたヴィシュヌの物語で始まる。ヴィシュヌを讃美するための物語もあるが、実際にはシヴァ神に関するものが多い。

(一六)マツヤ・プラーナ　地上が大洪水に見舞われた時、ヴィシュヌが魚となって現われ、人類の祖マヌを救う物語で

始まるプラーナ。

(十七)ガルダ・プラーナ　ヴィシュヌがその乗り物である聖鳥ガルダに語り、さらに聖仙カシュヤパに伝えられたというプラーナ。ヴィシュヌ派のもので、ヴィシュヌの礼拝、祭祀、霊場の讃美に重点がおかれている。

(十八)ブラフマーンダ・プラーナ　ブラフマーンダは、ヴァーヤヴィーヤ・ブラフマーンダ（ヴァーユの語ったブラフマンの卵のプラーナ）ということで、そこから宇宙が展開するブラフマンの卵の讃嘆とするといわれるが、実際には信仰の綱要書としての性格を持つ。

これらの一八プラーナに対して、それぞれの補遺とされるプラーナがあり、前者をマハープラーナというのにたいして、ウパプラーナという。その数え方には種々の場合があるが、一般的には次のようなものをいう。(1)アーディティヤ、(2)アーシュチャリヤ、(3)アウシャナサ、(4)バースカラ（あるいはスーリヤ）、(5)デーヴィー、(6)デーヴィーバーガヴァタ、(7)ドゥルヴァーササ、(8)カーリカー、(9)カルキ、(10)カピラ、(11)マヘーシュヴァラ、(12)マーナヴァ、(13)マリーチ、(14)ナンディケーシュヴァラ、(15)ナーラダ、(16)ナラシンハ、(17)パラーシャラ、(18)シャームバ、(19)サナトクマーラ、(20)シヴァダルマ、(21)スーリヤ、(22)スータサムヒター、(23)ウシャナス、(24)ヴァルナ、(25)ヴァーヤ、(26)ヴリハン、(27)ユガ。

プラハ Pulaha　ブラフマーの意（マナス）より生れた一〇人の子供の一人。プラジャーパティの一人に数えられる。

プラバーヴァティー Prabhāvatī　㈠悪魔ヴァジュラナーバの娘で、クリシュナの子であるプラディユムナの妻。㈡アンガの王チトララタの妻。デーヴァシャルマンの妻ルチの長姉。

ブラフマー Brahmā　ヒンドゥー教の三大神の一つ。梵天。他の二神とともに表わされるときには、ブラフマーが世界の創造を司り、ヴィシュヌがそれを維持し、シヴァ神が破壊するといわれる。ブラフマーは古くは非人格的な中性原理としてのブラフマンであり、ヴェーダにおいては神々を讃える言葉（マントラ）やヴェーダ自体、およびそこに内在とすると見られていた神秘的な力をあらわす語としてもちいられた。このようなブラフマンはウパニシャッドの時代になると宇宙の根本原理とされ、同時にヴェーダ以来の伝統にしたがってブラフマンは擬人化され、神格化されて男性神ブラフマーとして崇拝されるようになった（中性原理・男性神ともに原語はブラフマンであるが、主格は中性の場合ブラフマ brahma、男性の場合はブラフマー brahmā であり、とくに男性神であることを明らかにしたい場合には男性主格の形をもちいることが多い。そこで、

本書でもブラフマン神とはしないで、ブラフマー神と表記することにした）。叙事詩においてはブラフマー神は「世界の創造者」「世界の主」として神々の上に立つ最高神とされた。しかし、ヴィシュヌ、シヴァ両神の信仰が盛んになると、宇宙の創造神としての役割は両神がもつことになり、ブラフマーの地位は相対的に下ることになった。叙事詩の中では、ブラフマーはヴィシュヌ神のへそ、あるいはへそより生じた蓮華から生れたと伝え、宇宙の創造はシヴァのリンガが行ない、ブラフマーはそれを讃美し、崇拝するものとして描かれることもある。

叙事詩やプラーナにおいては、ヴィシュヌ、シヴァと同様にブラフマー神に関しても多くの物語が記されている。ブラフマーの出生に関する物語（『デーヴィーバーガヴァタ・プラーナ』一）、ヴァールミーキに『ラーマーヤナ』の物語をつくるようにすすめた話（『ラーマーヤナ』少年編）、ランカーの魔王ラーヴァナに強大な力を与えた話（同）、シヴァ神によって首を切り落とされた話（『デーヴィーバーガヴァタ・プラーナ』五）、ヒマーラヤの神ヒマヴァットの娘たち（クティラー、ラーギニー、パールヴァティー）に呪いをかけた話（『ヴァーマナ・プラーナ』五一）、ブラフマーが河になった話（『パドマ・プラーナ』一三）などである。

ブラフマー神の住居はメール山の頂上の中央にある都マノーヴァティーであるとされ、創造者としてのブラフマーの身体、あるいは意（マナス）からさまざまな神格が生れた。その主なものをあげると、(1)マリーチ、アンギラス、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥの五聖仙がブラフマーの意より生れた（『マハーバーラタ』初編）。(2)ダーターとヴィダーター。彼らはブラフマーのよい息子であったという（『マハーバーラタ』初編）。(3)ルドラ。この息子は生れるとうなり声をあげたのでこのように名づけられたという（『アグニ・プラーナ』二〇）。(4)人類の始祖となったスヴァヤムブヴァ・マヌ（バーガヴァタ・プラーナ』一一）。(5)カンダルパ（『カターサリット・サーガラ』）。(6)マドゥカとゴーリカー（『ウッタラ・ラーマーヤナ』）。ブラフマーの遊びの中から生れた巨人と巨人女。(7)ブリグ（『マハ



四つの顔をもつブラフマー神



ブラフマー神

ーバーラタ』初編）。(8)ジャームバヴァット。ブラフマーの汗から生れた（『カムパ・ラーマーヤナ』）。(9)サナカ、サナンダ、サナータナ、サナトクマーラ（『バーガヴァタ・プラーナ』）。

ブラフマーは、一般に、四つの顔、それぞれ水壺、数珠（あるいは弓）、笏、ヴェーダ聖典を持った四本の手を持ち、白鳥に乗った姿であらわされる。その神妃サラスヴァティーは、智慧・言語・音楽の神で、色が白く、優雅で、楽器ヴィーナを持ち、孔雀に乗っている。ブラフマー神の四つの顔の出現については、彼がつくり出した娘シャタルーパーあるいはサラスヴァティーを自分の妻にしようとした話の中で説明されているが（↓サラスヴァティー）、第五の顔がシヴァ神に切り落とされたことについてはさまざまな物語がある。(1)ある時、ブラフマーはシヴァ神を讃美し満足させたうえ、自分の息子となってくれるように頼んだ。シヴァ神は彼の非礼に腹を立てて、「汝の息子となろう。だが、その時、汝の第五の首を切り落とすだろう」と言ったという。(2)最初、ブラフマーは世界のもろもろの存在とともに、ニーラローヒタと呼ばれるシヴァの化身を創造した。その後の世界創造の時、ブラフマーはニーラローヒタのことをすっかり忘れていたので、ニーラローヒタは立腹して、「汝の第五の頭は間もなく切り落とされよう」と呪いをかけた。(3)ブラフマーに第五の顔が現われると、神々は日に日に輝きを失って行った。これを見たブラフマーは、「自分こそ世界の中で最高の存在だ」と宣言した。これに腹を立てたシヴァ神はブラフマーの第五の首を切断した（『マツヤ・プラーナ』一八三）。(4)ある時、ブラフマーはシヴァの神妃サティーに恋した。これを知ったシヴァはブラフマーを殺そうとしたが、ヴィシュヌ神になだめられた。しかし、どうしてもおさまらないシヴァはブラフマーの第五の首を切り落とした。

〔別名〕アートマブー（自分自身で生れた者）、スラジェーシュタ（あらゆる神々より前に存在する者）、パラメーシュ

ティン（真理の世界に住む者）、ピターマハ（父祖）、ヒラニヤガルバ（黄金の卵を胎内にもつ者）、ローケーシャ（世界の主）、スヴァヤムブー（自分自身で生れた者）、チャトゥラーナナ（四つの顔をもつ者）、ダートリ（あらゆるものを保持する者）、アブジャヨーニ（蓮華より生れた者）、ドルヒナ（アスラを殺す者）、ヴィランチ（創造する者）、カマラーサナ（蓮華の上に坐る者）、スリシュトリ（創造者）、プラジャーパティ（生類の主）、ヴィダートリ（保持者）、ヴィシュヴァスリット（世界の創造者）、ヴィディ（裁く者）、ナービジャヌマー（ヴィシュヌのへそから生れた者）、アンダジャ（卵から生れた者）、ハンサヴァーハナ（白鳥を乗り物とする者）など。

ブラフマサラ　Brahmasara　「ブラフマーの湖」の意で、神聖な沐浴場。この聖地で一昼夜を過す人はブラフマー天に昇ることができるといわれる。この湖がすべての河川の源泉であり、昔、ブラフマー自身もこの湖の岸辺に住んでいたという。

ブラフマーストラ　Brahmāstra　「ブラフマーの飛び道具、武器」の意で、これを投げると必ず敵を倒して再びもとにもどって来る不思議な武器。ブーメランのようなものといわれる。

ブラフマダッタ　Brahmadatta　(一)スーリヤヴァンシャ（日種族）に属するブリハトクシャトラ族出身のカームピリヤプラの王。カウシカ仙の七人の子供の一人ピトリヴァルティの生れ変わりといわれる（『パドマ・プラーナ』三・三）。

(二)チューリ仙とその妻であるガンダルヴァのソーマダーとのあいだに生れたカームピリヤの王。ブラフマダッタ王がカームピリヤを治めていた時、カーニヤクブジャの王クシャナーバに一〇〇人の美しい娘が生れた。成長した一〇〇人の美女たちを風神ヴァーユが見初めて言い寄ったが誰も相手にしなかったので、腹を立てたヴァーユは彼女らに呪いをかけてせむしにしてしまった。悲しんだクシャナーバ王は娘たちをブラフマダッタのところに連れて行くと、彼は天の力で彼女らを元の姿に戻し、彼の妻とした（『ラーマーヤナ』少年編）。

(三)サールヴァの王。二人の妻があったが子供に恵まれなかった。そこでシヴァ神に祈ると、ハンサとディバカの二人の子供が生れた（『マハーバーラタ』）。

(四)カーシーを治めていた王（『カターサリット・サーガラ』）。

ブラフマナスパティ　Brahmaṇaspati　「ブラフマンの主」の意で、ブリハスパティの別名として用いられる。ブラフマンは『ウパニシャッド』において宇宙の根本原理をあらわす語となるが、『リグ・ヴェーダ』では「讃歌・祈

禱に発現する詩的創造力」、「真理を具現する讃歌・祈禱」（辻直四郎『リグ・ヴェーダ讃歌』三一四ページ）を意味し、このことからブラフマナスパティは「祈禱の主」とされる。

ブラフマープラ Brahmāpura 「ブラフマーの町」の意で、ブラフマー天のこと。メール山頂にあり、その周囲を天のガンガーが流れているといわれる。

ブラフマレーカ Brahmarekha 「ブラフマーの線」という意で、ブラフマーは子供が生れて六日目にその額にその子の運命を書きしるすといわれる。

ブラフマーンダ Brahmāṇḍa 「ブラフマーの卵」の意で、二一に区分されているといわれる宇宙のこと。その上から七番目に人間の住む世界があり、その下にパーターラと呼ばれる世界が七層あって、その下に七層の地獄（ナラカ）が存在しているとされる。

プラフラーダ Prahlāda 悪魔（ダイティヤ）ヒラニヤカシプの息子として生れた信心深いダイティヤ。ヒラニヤカシプは神々との戦争に勝ってインドラ神から天上の支配権を奪い取った。しかし、彼の息子のプラフラーダはまだ幼いにもかかわらず熱心にヴィシュヌを崇拝した。立腹したヒラニヤカシプは息子を殺すように命じたが、悪魔たちの武器も象の牙もヴィシュヌを信仰する息子を傷つけることはできなかった。ヒラニヤカシプは止むを得ず息子を師のもとに追いやった。そこで、プラフラーダは熱心にヴィシュヌを信仰し修行して、ついに解脱に達したという。

別の伝説によれば、プラフラーダが父の迫害にあっているとき、ヴィシュヌ神はヌリシンハ（第四の化身である人獅子）の姿となってこの世に現われ、ヒラニヤカシプを殺した。プラフラーダは父の死後、ダイティヤの王となり、パーターラに住んだという。

『パドマ・プラーナ』では、彼は神々の世界に昇り、ついにヴィシュヌ神と一体になったともいう。↓ヒラニヤカシプ

プラヤーガ Prayāga 「供犠祭を行なう場所」の意で、現在のアラーハーバードの古名。この地はガンジス河・ヤムナー両河の合流するところであるが、伝説ではもう一つの聖なる河サラスヴァティーが地下から合流するところからトリヴェーニー（三つの河が組み合ったところ）とも呼ばれる。一六世紀にムガール朝の第三代アクバール帝がここに城を建ててからアラーハーバードと改称された。ガンジス河とヤムナー河が実際に合流する地点はサンガムと呼ばれて市の南東端にあり、ヒンドゥー教徒の最も神聖視するところとなっている。毎年、マーグ・メーラーの祭（一～二月）には二〇～三〇万人の信者が集まるといわれる。

また、ガンジス河の上流、リシケーシュの北七〇キロのところにバギーラティー河とアラカナンダー河の合流地点があり、デーヴァプラヤーガと呼ばれている（これより下流がガンガーと呼ばれる）。その上流のアラカナンダー河とマンダーキニー河が合流する地点をルドラプラヤーガという。

プラランバ Pralamba アスラの名前。クリシュナ、ラーマと戦った巨大な悪鬼で、ラーマに殺された。

プランジャヤ Purañjaya 「都市を征服するもの」の意で、スーリヤヴァンシャ（日種族）の王子、ヴィククシの子の名。『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、かつて神々とアスラたちとのあいだに戦争があったとき、アスラが優勢になったので神々はヴィシュヌ神に救いを求めた。ヴィシュヌは神々に対して、プランジャヤに援助を求めるようにいい、彼の中にヴィシュヌ自身が入り込んでアスラを倒すことを約束した。プランジャヤはこの申し入れを受けいれ、神々の首長であるインドラに牛の姿となるように求め、インドラ神が変身した牛のこぶの上に乗ってアスラたちを倒した。このことによって、彼はカクトスタ（こぶの上にあるもの）とも呼ばれる。

プランディ Purandhi 『リグ・ヴェーダ』の女神。豊かさを象徴する女神。豊かさ・富を表わす『アヴェスター』の女神パーレンディと同一起源とみられている。

プランローチャー Pramlocā 聖仙カンドゥのきびしい修行を妨げるために、インドラ神が天から遣わしたアプサラス（天界の水の精女）。カンドゥ仙は彼女の魅力の虜になり、彼女と数百年をともに過したが彼には一日のように感じられた。しかし、やがて聖仙は修行を怠って、アプサラスに夢中になっていたことに気づき、彼女を追い出した。このときプランローチャーは身籠っており、一人の女の子が彼女の汗の滴として生れ出た。彼女はこの滴を木の葉の上に置いたところ、その滴がやがて凝結して美しいアプサラスのマーリシャーになったという。↓カンドゥ

プリー Purī オリッサ州にある都市で、ジャガンナータ（宇宙の主）としてのヴィシュヌ神の町。バドリナート、ドヴァーラカー、ラーメーシュヴァラムとともに「神の四つの住い」といわれ、四大聖地の一つとされる。ヴィシュヌ＝クリシュナ神が兄のバララーマ、妹のスバドラーとともに祀られている。ジャガンナート寺院はオリッサの寺院中最大のもので、シカラ（寺院の塔の部分）の高さは六〇メートルあり、コナーラクのスーリヤ寺院を黒塔と呼ぶのに対して、この寺院を白塔という。毎年六月下旬にはラタ・ジャートラ（山車の祭）が行なわれ、一六の車輪のある大きな山車三台にクリシュナ、バララーマ、スバドラーの三

神像を乗せて、グンディチャバリ寺院まで引いて行くのがならわしとなっており、このとき数千人の信者が集まるといわれる。

ブリグ Bhṛgu ヴェーダの聖者。一〇人のプラジャーパティ（創造者）の一人。バールガヴァと呼ばれる種族の祖。ジャマダグニ、パラシュラーマはこの系統に属する。

プリシャドラ Pṛṣadra ヴァイヴァスヴァタ・マヌの息子。『ハリ・ヴァンシャ』や『プラーナ』によれば、彼は神々に捧げる牛を不法に殺してしまったために、その罪によってカースト最下位のシュードラ（隷民階級）となった。

ブーリシュラヴァス Bhūriśravas バールヒーカの王子で、カウラヴァ軍と同盟し、『マハーバーラタ』に語られるバーラタ戦争で戦死した。

プリター Pṛthā ヤーダヴァ族の王シューラの娘で、シューラの従兄弟クンティボージャの養女となったのでクンティーともいわれる。クル族の王パーンドゥの妻となって、ユディシュティラ、ビーマ、アルジュナの三王子を産んだ。→クンティー

プリトゥ Pṛthu プリティーともいい、ヴァイシャーリーを都とするヴァッジの支配者ヴェーナの息子。ヒンドゥーの伝説では彼はごう慢で退廃的なクシャトリヤであり、祭祀や聖職者の権威を否定したために殺され、その右腕をこすって生れた子供が後をついだという。伝説ではヴェーダの聖者で農業・医学の祖といわれるプリティーとプリトゥが混同される。

『マツヤ・プラーナ』では、プリトゥはコモリン岬からヒマーラヤ山までの土地を平らにして人の住めるようにしたという。『ヴァーユ・プラーナ』では、彼の妻の名をアルチスといって、五人の息子があり、彼らが成人するとプリトゥは退位して妻とともに森に入り、亡くなった後は妻アルチスが火葬の薪に火をつけ、自分自身もその中に入ったという（四・二三）。

ブリハスパティ Bṛhaspati 「祈禱の主」「称讃の主」の意味で、ブラフマナスパティとも同一視される『リグ・ヴェーダ』の神格（独立の讃歌一二篇がささげられている）。神々の世界の祭官。天界の主としてのインドラ神との関係が強く、これは地上の祭官バラモンと祭主である王との関係を暗示すると見られる。この意味で、ブリハスパティは後世のプローヒタ（王室附き司祭官）、あるいは祭式を総監するブラフマン祭官の原型とされる。このほか、『リグ・ヴェーダ』においてはアグニ（火神）、ソーマ（神酒）、マータリシュヴァン（火をもたらした神）などとも関連して説かれる。

後世の文献では、彼は聖者の一人として扱われ、木星と

も見なされて彼の乗る車ニーティゴーシャは八頭の馬にひかれているという。彼は聖者アンギラスの子であるところからアーンギラサと呼ばれ、神々の師としてアニミシャーチャーリヤ、チャクシャス、イジャ、インドレージャとも呼ばれる。彼の妻はターラーで、ターラーが月神ソーマに奪われたことによってターラカーマヤと呼ばれる大戦争が起こった。ウシャナ、ルドラ、ダイティヤ、ダーナヴァなどがソーマに味方し、インドラをはじめとする神々がブリハスパティを助けて、天界をあげての大戦争の結果、ターラーは夫のもとにもどされることになった。この時ターラーは身籠っており、やがて生れた子供は美しい玉のような男子だったのでソーマもブリハスパティもともに自分の子供であると主張した。彼女はブラフマー神に問いつめられて、ついにこの子がソーマの子であることを告白し、この男子はブダと命名された。ブリハスパティは、また、古代の法典『ブリハスパティ・スムリティ』の編者ともされる。

（別名）ジーヴァ（生命を持つ者）、ディーディヴィス（光り輝く者）、ディシャナ（知をもつ者）、ギーシュパティ（弁舌の主）など。→ソーマ、ターラー

プリヤヴラタ Priyavrata ブラフマー神とシャタルーパーとのあいだに生れた二人の息子の中の一人。あるいは、スヴァヤムブヴァ・マヌの息子。『バーガヴァタ・プラーナ』によれば、プリヤヴラタは太陽の光によって一時に地上の半分しか照らすことができないことを不満に思い、自分自身の光り輝く車に乗って、他の天体と同じように太陽に従って同じ速度で七回めぐり、夜を昼に変えようとした。彼はブラフマー神におしとどめられたが、彼の車の車輪によってできた七本のわだちが七つの海になり、七つの大陸ができたという。『ヴィシュヌ・プラーナ』では彼の妻はカルダナの娘カーミヤーで、一〇人の息子と二人の娘があったが息子たちの中の三人は出家して宗教に専念することになったので、残りの七人に七つの大陸を与えたといわれる。

プル Puru 古代インドの伝説上の二大種族の一つである月種族（チャンドラヴァンシャ）の第六代の王。ヤヤーティとサルミシュターとの間に生れた子供たちの中の末子。プルの系統をパウラヴァといい、この系統からクルが出てカウラヴァと呼ばれるようになった。他方、プルのヤヤーティ王の長兄のヤドゥの子孫たちのことをヤーダヴァという。この系統からはクリシュナが出た。

プルクツァ Purkutsa 月種族の一系統であるパウラヴァの系統をひくマーンダートリの子。ナルマダー河の一帯を支配し、この河と同名の妻とのあいだにトラサダスユをもうけた。

プルシャ Puruṣa 「人間」「男性」の意であるが、『リ

グ・ヴェーダ』の「プルシャ讃歌」(一〇・九〇・一一)では一〇〇〇の頭・目・足をもつ偉大な存在であり、彼によって一切の世界が創造されたといわれる。プルシャの口がブラーフマナとなり、両腕はクシャトリヤ、両腿はヴァイシュヤ、両足はシュードラとなったという(一二)。ウパニシャッドにおいてはプルシャは次第に人格を失って形而上学的な原理とされてアートマンと同一視されるようになり、サーンキヤ哲学では物質的原理プラクリティに対する精神的原理をプルシャというようになった。神話的にはブラフマー神の名称としてもつかわれる。

プルショーッタマ　Puruṣottama　文字通りには「人間の中の最高のもの」の意味であるが、神話的には「崇高な魂を持つもの」としてヴィシュヌ神をさす。

プルーラヴァス　Purūravas　月種族(チャンドラヴァンシャ)の祖先チャンドラの孫。イラー(あるいはイダー)とブダとのあいだに生れた。『リグ・ヴェーダ』(一〇・九五)には、プルーラヴァス王が美しいアプサラス(水の精女)であるウルヴァシーに恋する物語が記されている。

プルーラヴァス王は美しい天界の水の精女ウルヴァシーに恋し、ウルヴァシーは王が裸体で彼女の前に現われないことなどの条件で、王とともに地上に住むことを承知した。ウルヴァシーが王の子を身ごもり、地上での滞在が長びいたので、アプサラスの伴侶であるガンダルヴァたちは謀りごとをめぐらせて彼女を天上に呼びもどそうとし、彼女の寝台のそばから二匹の仔羊を奪った。彼女の叫び声を聞いてプルーラヴァスが裸のままかけつけると、ちょうどその時、ガンダルヴァたちは電光を光らせて王の裸体が彼女に見えるようにした。このようにしてウルヴァシーは王のもとから姿をかくし、王は恋慕の情にたえられず彼女を求めて放浪する。このような人間と天女との恋愛物語はプラーナにも引きつがれている。

『ヴィシュヌ・プラーナ』(四・六)によれば、天上でミトラとヴァルナの怒りを買ったウルヴァシーは地上で人間として暮らすことにした。彼女を一目見たプルーラヴァス王は恋に落ち、結婚を申し入れたところ、㈠ペットとして仔羊を傍らに置くこと、㈡王が裸で彼女の前に現われないこと、㈢澄んだバターだけを彼女の食事とすること、という条件を認めれば王の妻となることを約束した。王はもちろん同意し、二人は幸福に六万一〇〇〇年のあいだ地上で暮らした。彼女の滞在が余りにも長いので、天上のガンダルヴァたちは一計を案じて彼女のペットを奪い、裸のままかけつけた王の姿を彼女に見せて彼女を天上にもどらせた。ウルヴァシーを求めてさまよい歩くうちに、プルーラヴァスは美しい湖で他の精女たちとともに水浴する彼女を見つ

け、自分のもとにもどることを願うと、彼女は一年に一度だけ王のもとに行って一夜をともにし、その時一人の息子を与えることを約束した。ある年の終わりころ、約束どおりウルヴァシーはクルクシェートラの王のもとに行って一夜を過し、最初の子供アーユスを与えた。こうして五年のあいだに五人の息子が生れた。王の心情をあわれに思ったガンダルヴァたちが王の願いを一つ聞きとどけてやるというと、王が求めたのはただウルヴァシーと一緒にいつまでも暮らすということであった。ガンダルヴァたちは彼に供犠の火の器を与え、『ヴェーダ』の教えにしたがってそれを三つに分割し祭祀を行なうようすすめた。王がその祭祀を完全に行なったとき、再び最愛のウルヴァシーと共に過せるようになったという。→ウルヴァシー

プレータ　Preta　「死んだ者」の意で、死んでから祖霊の世界に入って祖霊の一つとなるまでの間の存在をいい、一般的には死体に住み、墓地に出没する邪悪なものをいう。プレータ鬼。『マヌ法典』(一二・五九)では「最下のカーストの女と通ずるものはプレータとなる」といい、同じような存在としてウルカームカ鬼、カタプータナ鬼、マイトラークシャジョーティカ鬼、チャイラーシャカ鬼をあげている(七一—七二)。

プローチャナ　Purocana　クル族の王ドリタラーシュトラの長子ドゥリヨーダナの大臣。パーンドゥ王の五王子とその一族の者を森に追放し、うるしの家を作って住まわせ、火をつけて焼き殺そうという奸計を王の命で実行した。

プローヒタ　Purohita　「前に置かれたもの」「指定されたもの」の意で、王室付の司祭僧のこと。プローヒタの役割は王の前にあって王の相談役となり、呪術的な力によって王を守り、また、王のためにインドラマハ、ニーラージャナなどの祭祀を行なうことであった。

プローマン　Puloman　インドラ神の妻シャチーの父に当るダーナヴァの名。彼は神が娘シャチーを奪うようにとの呪いをかけようとして、インドラによって殺された。

プンダリーカークシャ　Puṇḍarīkākṣa　「蓮華の眼をしたもの」の意で、ヴィシュヌ神の別名の一つ。

ヘーマクータ　Hemakūṭa　「黄金の峰」の意で、ヒマーラヤ山の北方にあるといわれる山脈の名。

ボーガヴァティー　Bhogavatī　下界パーターラにあるナーガ(蛇)族の都。プートカーリーとも呼ばれる。

ボージャ　Bhoja　㈠ヤーダヴァ族の王子。マールワのパルナーシャ川の岸辺のムリッティカヴァティーを支配。㈡ヴィンディヤ山脈に住む部族の名。㈢古代の国名。現在のボージプル、パーガルプルに当る。

ボーディドルマ　Bodhidruma　→アシュヴァッタ

マ　行

マイトレーイー　Maitreyī　ウパニシャッドの哲人ヤージュニャヴァルキヤの妻。ブラフマヴァーディニー（ブラフマンを語る女性、女哲学者）といわれる。ヤージュニャヴァルキヤには二人の妻があったが、カーティヤーヤニーは通常の女性であったのにたいして、マイトレーイーは哲学を学ぶ熱意にもえた女性であり、夫が家住期から林棲期へ移る際に財産の分与をしたいと言った時、財産よりも不死となるための教えを聞くことを希望した。夫のヤージュニャヴァルキヤは大いに喜び「夫が愛しいのは夫への愛のためではなく、アートマンへの愛のために夫が愛しいのである」というアートマンの教えを説いた（『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』二・四・一以下）。↓ヤージュニャヴァルキヤ

マイトレーヤ　Maitreya　㈠パラーシャラの弟子の聖者。㈡仏教では未来仏の名。弥勒。

マイナーカ　Maināka　聖なる山カイラーサの北にあるといわれる山の名。『マハーバーラタ』では、マイナーカ山はヒマーラヤの神ヒマヴァットとその妻メーナカーの子であるといわれる（マイナーカは「メーナカーの子」の意味）。インドラ神が山々のすそを刈り取った時、この山だけがそれをまぬがれたという。

マウネーヤ　Mauneya　「ムニ（聖者）の子」の意で、聖仙カシュヤパの子として生れたガンダルヴァたちの名称。彼らは下界に住み、その数は六〇〇〇万といわれ、同じ世界に住んでいるナーガ（蛇）たちを征服した。ナーガたちの訴えによって、ヴィシュヌ神はプルクツァを下界にやってマウネーヤを殺させた。

マウリヤ　Maurya　マガダ国出身のチャンドラグプタが建てたインド最初の統一国家（前三一七—一八〇年ころ）。パータリプトラを都とし、名宰相カウティリヤ（別名チャーナキヤ。『アルタ・シャーストラ』の著がある）の活躍によって、北インド全体を統治した。ビンドゥサーラがあとを継ぎ、そのあとをうけたアショーカ王のとき南東海岸のカリンガ国を征服して最大の領土となった。アショーカ王は仏教徒となり、仏教を厚く保護して国外に広めたばかりではなく、ジャイナ教やその他の宗教・哲学をも保護した。しかし、アショーカ王の没後、王国は衰退し、紀元前一八〇年ころ、マウリヤ王朝最後の王ブリハドラタは将軍プシュヤミトラによって殺され、王朝は滅びた。

マカ　Makha　アグニ、ルドラ、インドラが殺したといわれる神秘的な存在。マカを殺したことによって、アグニ、ルドラ、インドラはマカハン（マカを殺すもの）と呼ばれる。

マカラ　Makara　クロコダイル、サメ、イルカなどの姿をとるという伝説上の海の動物。神話・伝説上にあらわれるマカラは、神秘的、呪術的な力をもち、河や湖やマカラーヴァーサ（マカラの住む所）と呼ばれる海に住んでいる。そこで、天上や地界の水の神ヴァルナと、ガンジス河の女神ガンガーの乗り物とされる。別名はカンタカ、アシタダンシュトラ（黒い歯をもつもの）、ジャラルーパ（水を形とするもの）。



海の怪獣マカラ

マカーラー　Makārā　女神の名。左道派のタントラで説く五つのMの作法（パンチャマカーラ）、すなわち、マディヤ（酒）、マーンサ（肉）、マツヤ（魚）、ムドラー（印契）、マイトゥナ（性交）を女神として神格化したもの。

マーカンディー　Mākandī　南パンチャーラ国の首都で、ガンジスの岸辺にあったといわれる。

マダ　Mada　「酔わせるもの」の意で、聖者チヤヴァナの怒りから生じた悪魔のこと。

マダヴァー　Madhavā　インドラ神がヴィシュヌ神の邪魔をしようとして送った天界の水の精女アプサラスの名。

マーダヴァ　Mādhava　㈠ヤーダヴァ族の王マドゥの子孫という意味で、クリシュナのこと。クリシュナの兄バララーマも同名で呼ばれることがある。㈡ヴィディヤーラニヤともよばれ、ヴェーダの註釈者サーヤナの兄弟。医術の権威とされる。

マーダヴィー　Mādhavī　あるいはマーダヴィー・デーヴィーともいい、大地の女神。アヨーディヤーの王子ラーマの妻であるシーターがランカーの魔王ラーヴァナにとらわれ、大戦争ののちアヨーディヤーに連れもどされたとき、彼女は夫に純潔を疑われた。この時、彼女はマーダヴィー

女神に、彼女がラーヴァナのいかなる誘惑をも拒否して純潔を守り抜いたことを証明してくれるように頼んだ。↓シーター

マダヤンティー　Madayantī　サウダーサあるいはカルマーシャ王の妻。彼女はヴァシシュタ仙と交わることを許されたが、これはカルマーシャ王のヴァシシュタ仙への好意からとも、子孫を求めての行為であるともいわれる。↓カルマーシャ

マータリシュヴァン　Mātariśvan　『リグ・ヴェーダ』において、アグニ（火）をもたらすものとされる神格（三・九）。もと火をおこす木片アラニを神格化したもので、『アタルヴァ・ヴェーダ』では一切を清浄にする作用をもつ風神とされる（一一・四）。

マタンガ　Mataṅga　チャンダーラ階級の生れであるがバラモンの子として育てられた男の名。彼は自分のことをバラモンであると思っていたが、ある日、仔のロバを荒々しく追い立てていると、親ロバはそういうふるまいは低いカーストのものでなければできないことだと彼に言った。マタンガが立腹して問いつめたところ、彼の母は大酒飲みの女で、父親は理髪屋であるとのことであった。そこでマタンガは激しい苦行を行ない、本当のバラモンになろうとしたが、インドラ神も彼を拒絶した。それでもなお、マタンガは何百年にもわたって苦行をつづけたので、インドラ神も気分を和らげて、彼に鳥のように空を飛ぶことのできる力と、意のままに姿を変えられる力を与えた。

マータンギー　Mātaṅgī　「雌の象」の意で、伝説上の象族の母親の名。

マツヤ　Matsya　「魚」の意で、ヴィシュヌ神の一〇の化身（アヴァターラ）のうちの一つ。↓ヴィシュヌ

マッリカールジュナ　Mallikārjuna　シヴァ神の別名。シヴァ神の十二大リンガの一つ。

マドゥ　Madhu　㈠「蜜」の意味で、古代のインド人はこれを栄養の根本となるものの一つと考え、戦士たちの活力の根源、さまざまな病気の治療に効果あるもの、精神的・肉体的な力の根源、長寿のもとになるものとして尊重した。新生児の口の中に少量の蜜を入れる習慣はこのような伝統的な考え方に由来する。

㈡プラーナの神話では宇宙的な力をあらわす悪魔的存在。マドゥとブラフマー神が宇宙の創造を行ない、ブラフマー神が光をあらわすのにたいしてマドゥは闇をあらわし、両者は互いにライヴァルとしての争いをつづけ、マドゥはついにクリシュナ＝ヴィシュヌによって殺されることになる。

㈢『ヴァーユ・プラーナ』では、マドゥは、ハイハヤ王カールタヴィーリヤの一〇〇人の息子の一人ともいわれ、

また、カールタヴィーリヤの孫の一人であるヴリシュニの息子ともいわれる。

マドゥカシャー　Madhukaśā　「蜜のむち」の意で、『リグ・ヴェーダ』によれば、アシュヴィン双神がこれを使って蜜とソーマ酒とをかきまぜたという（一・一五七）。『アタルヴァ・ヴェーダ』（九・一）では、マドゥカシャーはマルト神群の孫娘、アーディティヤたちの母、ヴァスの娘、不死なるものの中心といわれ、空、大地、海、火、風より生れたとされる。

マドゥスーダナ　Madhusūdana　「マドゥを殺すもの」の意で、クリシュナの別名の一つ。↓クリシュナ

マドゥチャンダス　Madhucandas　ヴィシュヴァーミトラの子供の一人。彼より上に五〇人、下に五〇人の兄弟がいたといわれるが、一般には一〇〇人兄弟といわれる。彼は『リグ・ヴェーダ』の讃歌の作者の一人とも見なされる。

マトゥラー　Mathurā　デリーの南約一六〇キロ、ヤムナー川の岸辺にある古都。インド七大聖都の一つ。クリシュナの生誕の地として巡礼者を集めている。マトゥラー平原は叙事詩やプラーナ文献で説かれるクリシュナ伝説においては、クリシュナが兄のバララーマとともに幼年期を送り、牧女たちとたわむれて日を過した場所でもある。

マードリー　Mādrī　マドラ王の娘で、クル王パーンドゥの第二の妻。パーンドゥ王はハスティナープラ近くの森の中で、鹿の姿となって妻と交わっている聖仙キンダマを射殺し、その呪いによって自分の妻に触れたとき生命を失うと言われていたが、マードリーの魅力に我慢できず、彼女を抱きしめて命を落した。第一夫人クンティーとマードリーとはパーンドゥの遺骸を焼く火に身を投げて死のうとしたが、クンティーは残って子供たちの面倒を見ることになり、マードリーのみが夫に殉じて死んだ（『マハーバーラタ』初編）。↓パーンドゥ

マナサー　Manasā　あるいはマナサーデーヴィーともいい、ナーガ（蛇）王シェーシャの妹で、聖者ジャラトカ



マナサー女神

ールの妻。彼女はジャガドガウリー、ニティヤー（永遠の女性）、パドマーヴァティー（蓮華を持つもの）ともいわれ、蛇の毒を中和する力を持つところからヴィシャハラー（毒を除くもの）とも呼ばれる。

マーナサ Mānasa　マーナササローヴァラともいい、ヒマーラヤ山脈の北部、カイラーサ山の近くにある湖の名。一般にはマナサロワラ湖と呼ばれ、カイラーサ山と共にヒンドゥ教、チベット仏教、ポン教の聖地。とくにポン教の歴史においては、カイラーサ山とマナサロワラ湖を中心とする地方はシャンシュンと呼ばれ、ポン教の発生の地とされる。『ヴァーユ・プラーナ』の伝説によれば、海が天界からメール山頂に流れ下った時、四つの流れとなって山を下り、四つの湖となったという。すなわち、東のアルノーダ湖、西方のシトーダ湖、北方のマハーバドラ湖、南方のマーナサ湖の四つである。ガンジス河がこれらの湖から流れ出るという伝説もある。

マニ Maṇi　マニ宝。お守りとしてもちいる呪術的な力をもった宝石で、それを持つものを守護し、その望みをすべてかなえるといわれる。

マニカルニカー Maṇikarnikā　ヴァーラーナシー（ベナレス）の五つの主要な聖地の一つ。シヴァ神のイヤリングが地上に落ちた所で、ここで死ぬ者はすべての望みをかなえられるといわれる（『マツヤ・プラーナ』一八二・二四）。

マニグリーヴァ Maṇigrīva　クヴェーラの息子の名。彼とその兄弟ナラクヴェーラはナーラダ仙によって呪いをかけられ、二本のアルジュナの木にされてしまった。彼らはクリシュナ神がこの木を根こそぎにするまでそのままの姿でいた（『アグニ・プラーナ』一・一二）。

マニドヴィーパ Maṇidvīpa　「マニ宝の島」の意で、ナーガ（蛇）であるアナンタの頭の覆いの名称。あるいは、シヴァ神の神話においては、不死の霊水アムリタの海中にある宝石の島で、人間のどのような望みもかなえるチンターマニ宝に充ちた島といわれる。

マニバドラ Maṇibhadra　クヴェーラの兄弟であるヤクシャの名。旅行者や商人の守護神として崇拝される。

マニプシュパカ Maṇipuṣpaka　パーンドゥ王の五王子の一人サハデーヴァのもっている法螺貝（ほらがい）の名称。

マニプラ Maṇipura　マニプルともいい、「マニ宝の町」の意で、カリンガの海岸にあったとされる町。パーンドゥ王の五王子の一人であるアルジュナの妻チトラーンガダーの生誕地。アルジュナは各地を巡礼したのちここに来てチトラーンガダーと結婚し、息子バブルヴァーハナをもうけ、三年間滞在した（『マハーバーラタ』初編）。この町をベンガル東部のマニプールに比定する学者もある。

マニマンダパ Maṇimaṇḍapa　「マニ宝の宮殿」の意で、ナーガ（蛇）の王シェーシャ、および南西の方角を守護するナイルリタの住居。

マニユ Manyu　「激怒」の意で、激怒の心が独立した力とみなされ、ヴェーダの軍神インドラと同一神とされる。『リグ・ヴェーダ』では戦勝の神として讃歌がささげられ、軍隊を指揮し、敵を倒す時に、この神が呼び出される。

マヌ Manu　「人間」の意で、人間の始祖。『リグ・ヴェーダ』では、最初の祭祀者ヴィヴァスヴァットの子とされる。『シャタパタ・ブラーフマナ』（一・八）では、大洪水が起こった時、人間の始祖マヌが自分の助けた魚に引かれて北方の山に着き、人間の祖として子孫を増やしたという次のような物語を伝えている。

（マヌと大洪水の物語）ある朝、マヌが水を使っていると一匹の魚が手の中に入って来て、やがて大洪水が起こって人類は全滅するだろうと予言し、自分を飼ってくれたらその時マヌを助けると約束した。言われた通りマヌはその魚を飼うと、魚はたちまち大きくなったので海に放した。魚が予言した年になると大洪水が起こり、マヌが船に乗ると魚が近づいて来たので、その魚に船をつないだ。魚はそのまま船を引いて北の山（ヒマーラヤ）でマヌを降ろした。この場所は「マヌの降り場」と呼ばれる。洪水のために、マヌを除いてすべての人類は滅亡した。水が引いた後、マヌは子孫を欲して讃歌を唱え、苦行を行ない、水中に供物を供えて祭祀を行なった。一年たつと、水中から一人の女が現われた。ミトラとヴァルナの両神がこの女性に出会い、「お前はだれか」とたずねると、彼女は「マヌの娘です」と答えた。二人は自分たちのものとなるように言ったが、彼女は「私は私を産んだものの娘です」と答えてマヌのもとに来た。マヌが同様に「お前はだれか」と問うと、「私はあなたの娘です」と言い、自分はマヌが水中に供えたあらゆる供物によって生れた者であるから、祭祀の時に自分を利用するようにとすすめた。そこでマヌは彼女とともに絶えず讃歌を唱え、苦行を続け、彼女によってマヌの子孫（人間）を生み、人類は再び地上を満たすようになった。

（ヒンドゥー教神話におけるマヌ）プラーナ文献では、一四人のマヌが説かれる。それはプラーナの世界観にもとづいており、まず、ブラフマー神の出生から死までの期間をマハーカルパ（大劫）といい、そのマハーカルパの終わりのブラフマー神の死の時に大洪水が起こって、宇宙は大帰滅（マハープララヤ）を生ずる。ブラフマー神の一日をカルパ（劫）といい、このカルパの終わりにも世界は帰滅する。

カルパは一四期に分けられ、その一つ一つにマヌがいる

ので、一四人のマヌがいるということになるのであり、それぞれのマヌの生存期間をマヌヴァンタラという。一四人のマヌとは、(一)スヴァヤムブヴァ、(二)スヴァーローチシャ、(三)アウッタミ、(四)ターマサ、(五)ライヴァタ、(六)チャークシュシャ、(七)ヴァイヴァスヴァタ、あるいはサティヤヴラタ、(八)サーヴァルナ、(九)ダクシャサーヴァルナ、(十)ブラフマサーヴァルナ、(十一)ダルマサーヴァルナ、(十二)ルドラサーヴァルナ、(十三)ラウチャ、(十四)バウティヤである。この中で第一のマヌは、スヴァヤムブー（即ちブラフマー）の息子であるから、スヴァヤムブヴァ・マヌ（ブラフマーから生れたマヌ）といわれ、第七のマヌはヴィヴァスヴァット（太陽神）の息子であるからヴァイヴァスヴァタ・マヌといわれ、現在の世界の始祖となり、この世界を支配しているのはこの第七のマヌである。この第七のマヌから、イクシュヴァーク、ナバガ（あるいはヌリガ）、ドリシュタ、シャルヤーティ、ナリシュヤンタなどの系統が生れたといわれる。

マヌヴァンタラ　Manvantara　人類の始祖であるマヌとその生存期間をあらわすアンタラの合成語。プラーナによれば、一四人のマヌがおり、それぞれの生存期間をマヌヴァンタラといい、それぞれが天の一二〇〇〇年、人間の年数では四三二万年になるという。→マヌ

マハーカーラ　Mahākāla　(一)「偉大な時間」の意で、時間の主、すなわち死の支配者としてのシヴァ神のこと。シヴァ神は、世界・人間のすべてのものを最後の帰滅に導く時、この姿となる。

(二)シヴァ神の十二のリンガの一つ。→リンガ

(三)ヒンドゥーの天文学ではマハーカーラは太陽と月の結合をあらわす。

マハーカーリー　Mahākālī　マハーカーラの女性形で、シヴァの神妃のこと。→パールヴァティー

マハーセーナ　Mahāsena　「大軍勢の指揮者」の意で、軍神カールッティケーヤの別名。→カールッティケーヤ

マハータパス　Mahātapas　「厳しい苦行を行なう者」の意で、ヴィシュヌあるいはシヴァ神の別名。→シヴァ

マハーデーヴァ　Mahādeva　「偉大な神」の意で、しばしばシヴァ神の別名としてもちいられ、時にはヴィシュヌ神の別名とされる。

マハーデーヴィー　mahādevī　「偉大な女神」の意で、シヴァ神の宇宙創造の力であるシャクティをあらわす。具体的にはパールヴァティー、ドゥルガー、ウマーなどの神妃のこと。『ヴァラーハ・プラーナ』によれば、マハーデーヴィーはブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ三神のそれぞれのシャクティをつくり出すという。すなわち白色のものはブラフマーのシャクティであるサラスヴァティーになり、赤

色はヴィシュヌのシャクティであるラクシュミーに、黒色はシヴァ神のシャクティであるパールヴァティーになるといわれる。

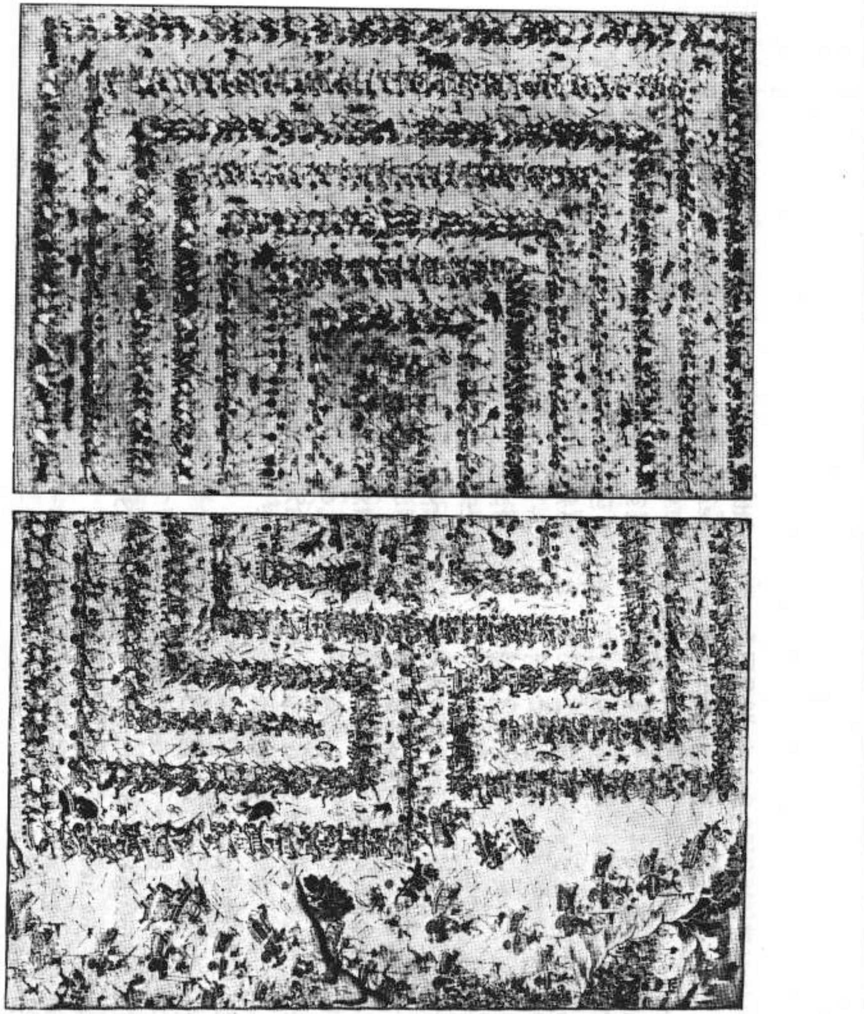
マハーパドマ　Mahāpadma　(一)「大蓮華」の意味で、富と好運をもたらす八つの宝物の一つ。

(二)八寒地獄の一つ。

(三)大地の南の部分を支えている象の名。

マハーバーラタ　Mahābhārata　全一八編、約一〇万の詩句（シュローカ）より成るインドの国民的大叙事詩。『ラーマーヤナ』とともに二大叙事詩と呼ばれる。この叙事詩の作者は伝説上はヴィヤーサとされるが、実際にはクルクシェートラで行なわれたパーンドゥの五王子とクルの百王子の一八日間にわたる大戦争を背景とした史話が語りつがれ、その間多くの民間説話などがとり入れられて修正・増補をくり返しながら紀元後の四世紀ころ、現在のような形となったと推定されている。『マハーバーラタ』とは、「バラタ族の戦争を物語る大史詩」というほどの意味で、(1)初編 Ādiparvan、(2)集会編 Sabhāparvan、(3)森林編 Vanaparvan、(4)ヴィラータ編 Virāṭaparvan、(5)戦争準備編 Udyogaparvan、(6)ビーシュマ編 Bhīṣmaparvan、(7)ドローナ編 Droṇaparvan、(8)カルナ編 Karṇaparvan、(9)シャリヤ編 Śalyaparvan、(10)夜間襲撃編 Sauptikaparvan、(11)女性編 Strīparvan、(12)静寂編 Śāntiparvan、(13)教訓編 Anuśāsanaparvan、(14)馬祀祭編 Aśvamedhaparvan、(15)アーシュラマ編 Āśramaparvan、(16)棍棒戦編 Mausalaparvan、(17)旅立編 Mahāprasthanikaparvan、(18)昇天編 Svargārohaṇaparvan から成る。その背景となっているのは一八日間の戦闘にまつわる物語ではあるが、この主題に直接的に関係する部分は全体の約五分の一ほどである。その他の部分は神話・伝説・宗教・道徳などの教訓詩、法制・政治・経済などのあらゆる分野にわたる物語・説話が取り入れられている。

この大叙事詩の主題となる物語の舞台はバラタ王の子孫のクル族の支配するクルクシェートラ（クル族の土地）で、その都ハスティナープラにはドリタラーシュトラ、パーンドゥの二王子がいた。兄のドリタラーシュトラは生れつきの盲目であったので、弟のパーンドゥが王となったが、早くに亡くなり、盲目の兄が王位についた。パーンドゥにはクンティー夫人とのあいだに生れたユディシュティラ、ビーマ、アルジュナ、そしてマードリー夫人とのあいだに生れたナクラ、サハデーヴァの五人の王子があった。彼らは父の名によってパーンダヴァ（パーンドゥの子供たち）と呼ばれた。盲目のドリタラーシュトラ王も妻ガーンダーリーとのあいだに生れたドゥリヨーダナをはじめとする百人



クルクシェートラで18日間行なわれた
バラタ族の大戦争

の王子があり、彼らはカウラヴァ（クル族の子孫）と呼ばれる。

父の死後、パーンダヴァの五王子は母クンティーとともにドリタラーシュトラの宮廷に引きとられ、百王子たちと一緒に育てられた。彼らは分けへだてなく学芸・武術を学んだのであるが、五王子はそのいずれにも優れ、次第に五王子たちと百王子たちは対立するようになって行った。盲目の王ドリタラーシュトラは王位を継ぐ者として五王子の長兄ユディシュティラを指名するが、百王子の長子ドゥリヨーダナはこれを快く思わず、陰謀をめぐらして五王子をハスティナープラの都から追放したうえで、森の中の燃えやすい小屋に入れ、焼き殺そうとした。しかし、五王子は危うく難を逃れ、隠者の姿をして諸国をさまよううち、たまたまパンチャーラ国のドルパダ王の娘ドラウパディーの婿選びの会が催された。これに出席したアルジュナは優れた射技で競争者を破り、ドラウパディーを五王子の共通の妻とした。他方、カウラヴァは焼死したと思っていた五王子がパンチャーラ国にあらわれたのを見て驚き、不安にかられた百王子の長兄ドゥリヨーダナは父王に申し出て王国を二分し、カウラヴァはそのままハスティナープラを都とし、パーンダヴァは新たにインドラプラスタを都と定めて両国が併立することとなった。

これらの両国の中ではパーンダヴァの長兄ユディシュティラが高徳の王として名声高く、やがて即位式をあげることになり、その式典でカウラヴァのドゥリヨーダナは数々の失敗をして面目を失った。ドゥリヨーダナはこれを深く恨み、母方の叔父シャクニと相談して賭博好きなユディシュティラを宮殿に招き、賭博の会で仇を討とうとした。シャクニは賭博の名人であったので、ユディシュティラをさんざんに打ち負かし、財宝・牛馬・王国をはじめ、ついにはユディシュティラとその弟たち（五王子）の共通の妻ドラウパディーまでをも賭けさせ奪ってしまった。老王ドリタラーシュトラの温情によって、パーンドゥの王子とドラウパディーは敵の奴隷となることをまぬがれ、一二年のあいだ森の中で放浪の生活をし、一三年目を人に知られずに過すという条件でハスティナープラから追放された。母クンティーは一族の中の賢者ヴィドゥラの家にとどまり、五王子と彼らの妻ドラウパディーは隠者の生活に入ることとなった。

この間、多くの友人たちが彼らを慰めるために森を訪れたが、その中でも最も多くやって来たのはヤーダヴァ族のクリシュナで、彼はユディシュティラにカウラヴァと戦って国を取りもどすようにとすすめた。しかし、ユディシュティラは、約束は守らなければならないとして隠者の生活

を続け、最後の一三年目に五王子はともにマツヤ国のヴィラータ王の宮殿で素姓をかくして召使となっていた。この時、たまたまカウラヴァはトリガルタ国と同盟してマツヤ国に侵入し、ヴィラータ王の牛を掠奪したので、ヴィラータ王とカウラヴァ・トリガルタ連合軍とのあいだに戦いが始まった。五王子はヴィラータ軍に加わって激しい戦闘を行ない、侵入者を打ち破った。この戦争の三日後、追放の期限が切れたので、五王子はヴィラータ王に素姓を明かした。王は大いに喜び、パーンダヴァとマツヤ国は同盟を結んだ。パーンダヴァはハスティナープラに使者を送り、旧領の返還を申し入れたがドゥリヨーダナはこれを拒否し、ついにクル族はカウラヴァとパーンダヴァの二大陣営に分かれて同族あい殺しあう戦争が始められることになった。

正義の土地（ダルマクシェートラ）と呼ばれるクルクシェートラで、一八日間にわたって行なわれた凄惨な戦闘の様子は、ビーシュマ編、ドローナ編、カルナ編、シャリヤ編などに物語られているが、夜間襲撃編に記されるドローナの子アシュヴァッターマンがパーンダヴァの陣営に忍びこんで眠っている勇士たちを一人一人虐殺していくシーンはとりわけ凄惨である。

この大戦争の結果、カウラヴァ軍は全滅し、パーンダヴァ軍も勝利したとはいうものの、多くの勇士を失った。ド



パーンダヴァとカウラヴァとの凄惨な戦闘

ラウパディーの五人の息子たちも最後の夜に殺された。戦いが終わったとき、パーンダヴァの王ユディシュティラは両軍の戦死者の葬儀を行ない、多くの親族や友人を失ったことを嘆いて森に隠遁しようとしたが、一族の長老ヴィヤーサのすすめによって馬祀祭（アシュヴァメーダ）を行ない、罪を浄めたうえでハスティナープラで王位についた。盲目のドリタラーシュトラ老王は全クル族の長老としてユディシュティラの王宮で生活したが、かの大戦争で死んだ一族のものたちのことを思って心が晴れないまま一五年後に森に隠退し、老妻ガーンダーリーとともに森の火事にまき込まれて生命を失った。一族中の賢者ヴィドゥラも亡くなり、最大の友であったクリシュナとその部族が滅亡したのを知ったパーンダヴァはもはや慰められようもなく、最後の旅に出る決心をした。ユディシュティラは王位を弟アルジュナの子のパリークシットにゆずり、五人の兄弟と彼らの妻ドラウパディーは一匹の犬だけを連れて都を出た。彼らは神々の世界を目指してヒマーラヤに登ったが、途中でドラウパディーがまず倒れ、ついでサハデーヴァ、ナクラ、アルジュナが、最後にビーマが倒れた。やがて彼らは天上に昇るのであるが、『マハーバーラタ』の最後に置かれる旅立編、昇天編は無常観を色濃くただよわせているところであり、昇天編でユディシュティラが地獄を見るところは罪の問題が主題とされているとも見られるほどである。

『マハーバーラタ』にとり入れられている挿話のなかで最もよく知られているものは、若い王子と王女の恋愛物語「ナラ王物語」、貞節な妻「サーヴィトリー物語」であり、後世、これらの主題にもとづいた多くの作品が書かれた。とくにサーヴィトリーの貞節はインド女性の模範としてたたえられ、現在でもサーヴィトリーをたたえるサーヴィトリー・プージャーと呼ばれる祭りが行なわれる。

教訓詩はとくに静寂編、教訓編にあつめられ、静寂編には解脱を説く『解脱法品』（モークシャダルマ Mokṣadharma）がおさめられている。また、ビーシュマ編にはヒンドゥー教の最高の聖典とされる『バガヴァッド・ギーター』が入れられている。

さらにこの大叙事詩の中には、蛇祠伝説、チヤヴァナ伝説、インドラ、アグニ、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァに関する神話、洪水伝説、リシュヤシュリンガ伝説、ヴァシシュタ伝説など、さまざまな神話・伝説がとり入れられ、プラーナとともにヒンドゥーの神話・伝説の源泉となった。

補遺「ハリ・ヴァンシャ」は一万六三七四の詩句から成る著作で、主としてヴィシュヌ信仰を背景としたクリシュナ伝説を述べ、これによってヴィシュヌ＝クリシュナの信仰が全インドに広められることになった。このようにして

『マハーバーラタ』の主題や説話、教訓詩は後世のインドの宗教・文学・芸術その他のあらゆる面において多くの影響を与えた。『マハーバーラタ』は『ラーマーヤナ』とともに早くから南方諸国に伝えられ、その一部が劇化されている。『マハーバーラタ』の説話の中には仏典と共通するものもあり、たとえば「リシュヤシュリンガ（羚羊）仙の物語」は仏教徒の伝承では「一角仙の物語」となって『ナリニカー・ジャータカ』、『マハーヴァストゥ』、『バドラカルパ・アヴァダーナ』などの所伝となり、『仏本行集経』『大智度論』などを経て日本の『今昔物語集』（巻五第四話）「一角仙人、被負女人、従山来王城語」となった。

マハープララヤ　Mahāpralaya　「大帰滅」の意で、世界の終末の時をいう。プラーナの世界観によれば、ブラフマー神の出生から死までの期間をマハーカルパ（大劫）といい、このマハーカルパの終わりにマハープララヤが起こって、七つの世界とそこに住む人々、人間、聖者、神々、ブラフマー自身も死に絶える。このマハープララヤはジャハーナカ、クシティ、あるいはサンハーラともいわれる。この時宇宙を支配しているのは女神マハーカーリーであるといわれる。

マハーヨーギン　Mahāyogin　「偉大な修行者」の意で、シヴァ神の別名。→シヴァ

マヒシャ　Mahiṣa　「水牛」の意で、悪魔アスラの名。マヒシャースラとも呼ばれる。シヴァ神の神妃チャンダー、あるいはドゥルガーによって殺されたアスラの名。このアスラは苦行の結果、その力が非常に強大となり、神々をも破って天界に居すわってしまった。神々は絶望的になり、世界をさまようばかりであったが、ヴィシュヌ神とシヴァ神のすすめによって彼らの力を集中し、火を噴出してそれより恐ろしい形相をしたドゥルガー女神が生まれ出た。ライオンに乗り、神々から与えられた武器で武装した女神はさまざまに姿を変えるマヒシャを攻め、悪魔が水牛の姿となった時にその首を切り落とした。それ以来、ドゥルガー女神はマヒシャースラマルディニー（悪魔マヒシャを殺す女神）と呼ばれるようになった。→ドゥルガー


ドゥルガー女神に殺される悪魔マヒシャ

マヒシャマルディニー　Mahiṣamardinī　「マヒシャを殺す女神」の意で、シヴァの神妃ドゥルガーの別名。

マヘーシュヴァリー　Maheśvarī　「大自在天女」「偉大なる女神」の意で、マヘーシュヴァラ（大自在神）、すなわちシヴァ神の神妃のこと。具体的にはパールヴァティー、ドゥルガー、ウマーをさす。

マヘーンドラ　Mahendra　㈠「偉大なインドラ」の意で、インドラ神の尊称。あるいは、ヴィシュヌ、シヴァの別名。インドラ神は敵ヴリトラを殺してからこのように言われるようになったという。

㈡インドラとハリ（ヴィシュヌ）の聖地とされる山脈名。

㈢マウリア王朝のアショーカ王の兄弟、あるいは弟の比丘で、仏教を初めてスリーランカーへ伝えたといわれる人。

マホーダヤ　Mahodaya　カーニヤクブジャ（カナウジ）国の町の名。

マホーラガ　Mahoraga　「偉大な蛇」の意で、蛇族の王シェーシャなどのことをいう。仏典ではこの蛇神を摩睺羅迦と音写する。

ママター　Mamatā　ブリハスパティの義理の妹。ブリハスパティは彼女が身籠っているとき彼女と関係をもとうとしたが胎児に邪魔されたので、胎児に呪いをかけた。彼女は夫に見捨てられることを恐れて生れた男の子を棄てようとした。しかし、神々は彼女に「二人の父親から生れた子を育てよ（バラ・ドゥヴァージャム）」と言ったので、その子はバラドゥヴァージャと名づけられたという。

マヤ　Maya　アスラの世界の建築家、技術者であったダイティヤの名。彼は神々の世界の技術者ヴィシュヴァカルマンに相当する。彼はヴィプラチッティの息子で、ヴァジュラカーマーとランカーの羅刹王ラーヴァナの妻マンドーダリーの父。現在のデリーから遠くないところにあるデーヴァギリに住み、ダイティヤたちと同様に人間のためにも働き、『マハーバーラタ』では彼がパーンダヴァのための町を建設したとしている。

マーヤー　Māyā　㈠「幻、幻力」の意で、幻を女神として神格化したもの。呪術的力の根源、あるいは世間的な非実在物の神格としてのドゥルガー女神のことをいう。このことから、ドゥルガーはマーヤーデーヴィーともマハーマーヤーともよばれることがある。

㈡七大聖都の一つ、ガヤーの別名。

マーヤーデーヴィー　Māyādevī　あるいはマヤーヴァティーともいい、悪魔シャムバラの妻。彼女はクシャトリヤの息子プラディユムナを育てあげ、愛の神カーマの生れ変わりである彼と結婚したという。その結果、マーヤーデーヴィーはカーマの妻でヒンドゥー神話のヴィーナスに当

るラティと同一視されるようになった。

マーリシャー　Māriṣā　聖者カンドゥの娘で、プロチェータサスの妻、ダクシャの母。彼女の母はカンドゥ仙の修行を妨げるために天上から派遣された天界の水の女精プラムローチャーである（『ヴィシュヌ・プラーナ』）。↓プラムローチャー

マリーチ　Marīci　マルト神群の首長で、プラジャーパティの一人。彼はブラフマーの意から生れたといわれる。七大聖者の一人。聖仙カシュヤパはマリーチの子である。↓補遺

マーリーチャ　Mārīca　ランカーの羅刹王ラーヴァナの伯父で、ターラカーの息子として生れた（『ラーマーヤナ』森林編）。『ラーマーヤナ』によれば、彼はヴィシュヴァーミトラの祭祀を妨げ、アヨーディヤーの王子ラーマに打ち倒されたことがあった。その後、ランカーの魔王ラーヴァナの大臣となり、王に従ってラーマとシーターの住む森に行き、ラーマをだましておびき寄せるために黄金の鹿に姿を変えた。ラーマはこの金色の鹿を追いかけて倒した。死の間ぎわにマーリーチャは本当の姿を現わしたので、ラーマは自分が誰を殺したかを知った。この間にラーヴァナはラーマの愛妻シーターを奪い去る。こうしてラーヴァナ軍とラーマの軍勢の大戦争が始まるのである（森林編）。

マーリニー　Mālinī　ヴァルナの子プシュカラの娘のアプサラス（天界の水の女精）の名。彼女は聖仙ルチの妻となり、マヌ・ラウチャと呼ばれる息子を産んだ（『マールカンデーヤ・プラーナ』九八）。

マールカンデーヤ　Mārkaṇḍeya　ムリカンダの息子で、『マールカンデーヤ・プラーナ』の作者とされる聖者。彼は激しい苦行と長寿で知られ、ディールガーユス（長寿の人）とも呼ばれる。

マルッタ　Marutta　(一)ヴァイヴァスヴァタ・マヌの子孫の王。

(二)スーリヤヴァンシャ（日種族）の王の名。彼はヴァプシュマットによって殺されたが、その息子ダマが父の仇をとった。

マルト神群　Marutaḥ　『リグ・ヴェーダ』の暴風雨神群。風雨・雷光・雷鳴を伴う暴風雨の現象を神格したもので、彼らの特性は光輝、美観、偉大、激烈、強力であり、山中に住み、輝く槍を持ち、光りまばゆい車に乗っている。通常、暴風雨神ルドラと牝牛プリシュニーとのあいだに生れたといわれるが、天上の大海から生れたとも、風神ヴァーユの子供たちであるとも、ダルマ神の妻の一人マルトヴァティーの子であるともいわれる。その数は三三とも二七とも、一一とも、七ともいわれ、不定である。ヴェーダの

神格であるインドラの友人・同盟者であり、火神アグニ、風神ヴァーユとも関係が深い。プラーナ文献ではマルト神群はカシュヤパ仙の妻ディティの子とされる。『ヴァーマナ・プラーナ』（七二）によれば、ディティの胎内の子が四九片に引き裂かれ、四九のマルト神が生れたという。

カシュヤパ仙の第一の妻アディティは神々の母となり、第二の妻ディティはダイティヤたちの母となったが、神々の首長であるインドラはダイティヤたちの長とされるヒラニヤークシャとヒラニヤカシプを憎み、ヴィシュヌ神に依頼して彼らを殺してしまった。彼らの母ディティは非常に悲しみ、夫のカシュヤパにインドラを倒すだけの力をもった子供を与えてほしいと頼んだ。そこでカシュヤパ仙は、ディティが天界の一万年に当る間、きびしい苦行を行なうならば、望みをかなえようと約束した。それは、いかなる生物も傷つけてはならない、呪いをかけてはならない、嘘をついてはならない、爪や髪の毛を切ってはならない、不浄なものに触れてはならない、などの実にきびしい掟を守る修行であった。ディティは夫に言われた通りの苦行を始め、夫の聖仙はウダヤ山に去った。その時、この事情を知ったインドラがディティの前に姿を変えてあらわれ、友情をよそおって彼女にお仕えしたいと申し出た。それがインドラの計略であるとは知らずに、ディティはそれを許した。ある日、彼女が激しい苦行に疲れてまどろんでいる時、インドラは彼女の鼻孔からその胎内に入り込み、自慢の武器であるヴァジュラで胎内の児を七片に引き裂いた。その時、胎内の児が泣き声をあげたので、インドラは「マー・ルダ（泣くな）」といい、七片がそれぞれ七片に引きさかれ、合計四九の神々が生れることになった。インドラが「マー・ルダ」と言ったことから、マルトという名で呼ばれるようになったという。

マンガラ　Maṅgala　火星のことで、軍神カールッティケーヤと同一視される。彼はシヴァ神と大地の女神とのあいだの子といわれ、このことにより、アンガーラカ、バウマ、ブーミプトラ、マヒースタ（大地の子）ともいわれる。彼はまた、シヴァガルマジャ（シヴァ神の汗から生れた者）、ガガノールムカ（空のたいまつ）、ローヒタ（赤い者）、ナヴァールチ（九条の光をもつ者）などとも呼ばれる。

マーンダヴィー　Māṇḍavī　シーターの従兄弟クシャドヴァジャの娘で、ラーマの兄弟バラタの妻（『ラーマーヤナ』）。

マーンダカルニ　Māṇḍakarṇi　ダンダカの森に住む聖者。『ラーマーヤナ』によれば、彼は同じ名の湖を造ったという。マーンダカルニの激しい苦行は神々を驚かせ、神々の主であるインドラは、湖の中に立ったままで一万年ものあいだ何も食べないで実践している彼の苦行を妨げるため

に五人のアプサラス（天界の水の精女）を彼のもとに送った。神々の計画は成功して彼女らはマンダカルニの妻となり、湖の中にある苦行者の家に住んだ。このことによって、湖はパンチャープサラスと呼ばれるようになった。

マンダーキニー　Mandākinī　天界を流れるガンガー（ガンジス河）の名で天の川のこと。ケーダーラナータ（ケーダールナート）を通って流れるガンジス河の一支流。『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』両叙事詩によれば、チトラクータ山の近くにあり、その附近にラーマとシーターの隠棲する場所があったという。

マーンダートリ　Māndhātri　スーリヤヴァンシャ（日種族）に属する王族の聖者（ラージャルシ）。ユヴァナーシュヴァ王の子。ユヴァナーシュヴァ王には長いあいだ子供がなかったので、彼のために聖者たちは子供を得るための祭祀を始めた。その祭祀の中に祭壇に水をいっぱいにした器を置くように定められているところがあったが、夜中、喉が渇いたユヴァナーシュヴァはその器の水に子供を生ずる力があるとは知らずにそれを飲んでしまい、その結果、一人の男の子が彼の右脇から生れ出た。彼が生れた子供を養ってくれる人を求めていると、そこにインドラ神があらわれ、子供にしゃぶらせるために自分の指を与え、「彼は私をしゃぶるであろう」（マーン・アヤン・ダースヤティ）と言った。そこでこの子はマーンダートリという名となったという。マーンダートリはよく王国を治め、ヴィンドゥマティーを妻として五〇人の娘と三人の息子をもうけた。これらの五〇人の娘たちは年老いた聖者サウバリの妻となった（『ヴァーユ・プラーナ』四・二）。→サウバリ

マンダパーラ　Mandapāla　子供のいない聖者で、『マハーバーラタ』によれば、彼は長い間祭祀を行ない苦行をつづけた後、死んでヤマ神のところに行った。そこでも彼は望みをかなえられず、その理由をたずねると、彼のすべての努力は息子がいないという理由によって（〝息子〟をあらわすプトラという言葉をプト put 〝地獄〟とアトラ atra 〝引き出す者〟に分解し、プトラを〝地獄から救い出す者〟と解したもの）、失敗に帰したのであると告げられた。そこで彼はシャールンギカーという鳥に姿を変え、同じ鳥のジャリターによって、はじめて四人の子供をもうけたという。

マンタラー　Mantharā　ダシャラタ王の妻カイケーイーの侍女でせむしの奴隷女。ダシャラタの別の妻カウサリヤーの王子ラーマが皇太子に立てられたとき、カイケーイーをそそのかしてラーマを一四年間追放することに成功した。このことを知った弟のシャトルグナは彼女を打ちすえ殺そうとしたが、同じ兄弟のバラタによって救われた（『ラーマーヤナ』アヨーディヤー編）。

マンドゥーカ　Maṇḍūka　「蛙」の意で、雨との結びつきから、降雨の呪文に関連して語られる。ヴァシシュタ仙が雨を降らせようとして雲を生ずると、蛙が現われて彼を称讃した。それに満足した聖仙はかえって蛙をたたえたという。『リグ・ヴェーダ』の蛙の歌（七・一〇三）は雨請いを目的とするものであるとされる。蛙はまた清涼の機能をもつものともいわれ、この理由によって、屍体を焼く火が水によって消されたのち、その上に置かれる（『リグ・ヴェーダ』一〇・一六）。火の祭壇からしたたり落ちる水の最後のものが蛙になったともいわれる（『シャタパタ・ブラーフマナ』九・一・二）。

マーンドゥケーヤ　Māṇḍukeya　『リグ・ヴェーダ』の聖仙の一人。彼は自分の父であるインドラプラマティから学問を受け継いだという。

マンドーダリー　Mandodarī　「細い腰の女」の意で、アスラの技術者マヤの美しい娘。ランカーの魔王ラーヴァナの妻となって、インドラジットを産んだ。

ミティラー　Mithilā　北ビハールのヴィデーハ国の首都。現在のガンダキー川とコーシー川とのあいだにあるティルフートとプラニヤに比定されている。この都はジャナカ王が治め、ジャナカ王の首都の名ジャナカプラの名は、北方の辺境のジャナクプールとして生きているといわれる。

ミトラ　Mitra　『リグ・ヴェーダ』の友愛の神。ヴァルナとともにその起源はインド・イラン共同時代までさかのぼり、もともと「契約」を意味し、この契約によって結ばれた「盟友」を意味するようになり、契約や友愛・友情を守る神となった。ゾロアスター教の『アヴェスター』の最高神であるアフラ・マズダに対応するのが『リグ・ヴェーダ』の司法神ヴァルナであるのに対して、ミスラに対応するのがミトラである。ミトラはヴァルナとともに讃歌をうけているものの、『リグ・ヴェーダ』においてはそれほど重要な役割を果していない。それに対して、イランの宗教においてミスラは重要な位置をもっており、ヨーロッパにまで入ってミスラ教（ミトラス教）の主神となった。『リグ・ヴェーダ』においては、ミトラはヴァルナとともにMitrā-Varuṇau という両数形で表わされ、ミトラのみに捧げられた独立讃歌は一篇を数えるだけである。

「〔契約の〕名にし負うミトラ（〔契約〕）は、人々をして互いに合意せしむ。ミトラは天と地とを支う。ミトラは瞬きせず、諸民を見守る。グリタに満つる供物をミトラに捧げよ。（三・五九・一）ミトラよ、掟に従いてなれに奉仕する人は卓越してあれ、栄養に富む者として、アーディティア（ミトラ）よ。長く支援を受くる者は殺さるることなく、克服せらるることなし。困厄の彼に達す

ることなし、近くよりも、遠くよりも(二)。病患なく、強壮の飲料に酔いつつ、地の面の拡がるかぎり鞏固なる膝もて立ち、アーディティアの掟を固く守りつつ、われら願わくは、ミトラの好意に住せんことを(三)。ミトラは神々および人間のあいだに、好ましき掟(誓願)に適う栄養を作れり、〔祭壇〕に草を敷く人(祭祀者)のため(九)。」(辻直四郎訳)。

プラーナ文献ではミトラは重要な役割をもっておらず、アディティの一二人の子の一人であり、アルジュナが生れたとき、天空に現われ(『マハーバーラタ』集会編)、カーンダヴァの森が焼かれたとき、クリシュナとアルジュナに対抗して戦うためにインドラ神によって送られたものの一人であり(同、初編)、更にはミトラがインドラの集会の一人であること(同、集会編)、彼がスヴラタとサティヤサンダという名の二人のパールシャダ（侍者）をスブラフマニヤに贈ったこと（同、シャリヤ編）などが記されている。

↓ヴァルナ、アーディティヤ

ミーナークシー　Mīnākṣī　「魚の目をもつ女神」の意で、南インドで崇拝されている女神。もとドラヴィダ系の女神であったが、正統派のヒンドゥー教にとり入れられ、シヴァの神妃パールヴァティーと同一視されるようになったと推定されている。タミルナドゥ州のマドゥライには一七世紀に建立されたミーナークシー寺院があり、この地方では四～五月にシヴァ神とミーナークシー女神の結婚の祭りがある。

ミンジカ　Miñjika　ミンジカーともいい、ルドラ神の精子が山に落ちて生れ出た男性神と女性神。彼らは子供の幸福を願うものによって、とくに崇拝される。

ムーカ　Mūka　ウパスンダの息子のダーナヴァの名。彼は野猪の姿となってアルジュナを殺そうとしたが、キラータの姿をしたシヴァ神に殺された。

ムカリンガ　Mukhaliṅga　「顔をもつリンガ」の意で、シヴァ神のさまざまな面を表わす一つ、あるいはそれ以上の顔を彫りこんであるリンガのこと。顔の数はそれぞれのリンガの祀られる場所で異なり、一つの顔をもつリンガは村の中に建てられ、二つの顔をもつものは丘の上あるいは国境の近くに、三つのものは三つの扉をもつ寺院の中に、四つのものは同じく四扉の寺院の中に、五つのものは丘の上に建てられ、敵を滅ぼす儀式において用いられる。

ムクンダー　Mukundā　インドラ神によって誘惑された聖仙ヴァーチャクナヴィーの妻。インドラは彼女を誘惑するためルクマーンガダ王に姿を変え、彼女はその魅力に引かれたといわれる。

ムシュティカ　Muṣṭika　マトゥラーの悪王カンサに仕

えていた力士で、王の命令によってヴァスデーヴァの子のクリシュナとバララーマを殺そうとしたが、かえってバララーマに倒され、殺された。

ムチュクンダ　Mucukunda　日種族の王マーンダートリの子。神々がアスラと戦ったとき、神々に味方した恩恵として、中断されることのない眠りと彼を邪魔するものは彼の火のような一にらみで焼きつくされるという保証を与えられた。クリシュナはこのことを知って、ヤヴァナ王カーラヤヴァナの軍勢をムチュクンダの眠っている洞窟におびきよせ、眠りを妨げられたムチュクンダは彼の一にらみでヤヴァナ軍を焼き殺したという(『ヴァーユ・プラーナ』)。

ムドガラ　Mudgala　寛大な心をもつことで知られるヴェーダの聖仙。貧乏な生活をしていたが、落穂を拾って一〇〇〇人のバラモンを養ったという。

ムラ　Mura　ムルともいう。五つの頭をもつダイティヤで、七〇〇〇人の息子の父。クリシュナとの戦いの時に悪魔ナラカと一緒になったが、クリシュナはそのヴァジュラでムラとその息子たちを殺した(『ヴァーユ・プラーナ』四・二九)。

ムーラリンガ　Mūlaliṅga　「根本のリンガ」の意で、ヒンドゥー寺院の本殿（ガルバグリハ）の中央に祀られたリンガのこと。

ムリガシラス　Mṛgaśiras　「鹿の頭」の意で、星座の名。プラジャーパティは自分の娘が雌鹿の姿となった時、近親相姦を行なおうとした。これを知った神々は恐ろしい姿をした神格ブータヴァットをつくり出し、プラジャーパティに矢を射かけさせた。この結果、プラジャーパティは空中に飛び出して「鹿の頭」と呼ばれる星座になり、娘はローヒニー星座となったという（『シャタパタ・ブラーフマナ』一・七）。

ムリティユ　Mṛtyu　「死」の意で、死を神格化したもの。死の神ヤマ。プラーナでは死の神に関してさまざまな神話が語られており、『ヴァーユ・プラーナ』（一・七）では、ムリティユはブラフマーによって生れたとも、バヤ（恐怖）の子とも、マーヤー（幻）の子ともいわれ、彼らの子供はヴィヤーディ（病気）、ジャラー（老年）、ショーカ（悲しみ）、トリシュナー（渇き）、クローダ（怒り）であるという。

ムレッチャ　Mleccha　「外国人」、あるいは「辺境の人」の意で、インド・アーリヤ族以外の人々を指し、野蛮人の意にも用いられる。彼らは非インド・アーリヤ的な地方方言を話し、ヴェーダの伝統の中にないものであり、聖者たちがヴェーナの身体をこすったときに生れ出たといわれる。ムレッチャの女性形ムレッチー Mlecchī は武器を作

る人々、あるいは農業に従事する者たちともいわれる。

ムンダ　Muṇḍa　「頭のはげた者」の意で、シヴァの神妃ドゥルガーによって殺された悪魔の名。

メーカラ　Mekala　ナルマダー河が流れ出している山の名。このことによって、同河はメーカラーとも、メーカラカニヤー（メーカラ山の娘）とも呼ばれる。あるいは、この山の付近に住んでいたとされる種族の名。

メーダーティティ　Medhātithi　ヴェーダの聖仙の名。彼の前にインドラ神が雄羊の姿をして現われたという（『リグ・ヴェーダ』八・二）。あるいは、プリヤヴラタ王の一〇人の息子の一人の名で、王は彼にプラクシャドヴィーパを支配することを命じた（『ヴァーユ・プラーナ』二一・二）。

メーナー　Menā　あるいはメーナカー。㈠『リグ・ヴェーダ』では、ヴリシャナシュヴァの娘。プラーナでは、ヒマーラヤ山の神ヒマヴァットの妻で、マイナーカ、シヴァ神の妻ウマー、ガンジス河の女神ガンガーの母。

㈡ヴィシュヴァーミトラ仙の苦行を妨げるために天から遣わされたアプサラス（天界の水の精女）の名。プラーナにはインドラの命令でメーナカーが多くの聖仙を誘惑し、彼らが苦行で得た力を失わせた多くの物語が語られている。

(1)ある時、メーナカーはヴィシュヴァーヴァスという名のガンダルヴァによって身籠り、女の子を産み落とすと、彼女は天界に戻った。その近くで修行していたストゥーラケーシャという聖者が拾いあげて育てた女の子はプラマドヴァラーと名づけられ、ルルと結婚した。

(2)ヴィシュヴァーミトラが森の中で苦行をしている時、メーナカーはインドラ神の命令によって修行しているヴィシュヴァーミトラに近づき、誘惑して苦行を中断させた。このことによって彼女には女の子が生れ、のちにシャクンタラーと呼ばれる美女となった（カーリダーサのドラマ『シャクンタラー』は、彼女を主題にしたものである）。

(3)また、ある時、ヴィシュヴァーミトラがプシュカラティールタで苦行していると、メーナカーが近づいて彼と恋におち、一〇年間一緒に暮らしたことがあった。

メール　Meru　ヒンドゥー教の宇宙観において、人間の住むジャムブドヴィーパ（閻浮提洲）の中心にある山。黄金の山ともいわれ、地上八万四〇〇〇ヨージャナ（約六七万二〇〇〇キロ）、地下一万六〇〇〇ヨージャナ（約一二万八〇〇〇キロ）で、その頂上にインドラ天、神々の住む世界がある。スメール、ヘーマードリ（黄金の山）、ラトナサーヌ（宝の峰）、カルニカーチャラ（蓮華の山）、アマラードリ、デーヴァパルヴァタ（神の山）などともいわれる。

ヤ　行

ヤヴァクリー　Yavakrī　あるいはヤヴァクリータ。「大麦で買われたもの」の意で、バラドヴァージャ仙の子。彼はヴェーダの知識を身につけるために激しい苦行を行ない、見事にこれを達成し、さらにインドラ神からさまざまな恩恵を授けられ、すっかりごう慢になってしまった。他の聖者たちを見下し、その上、父の友人ライビヤの子パラーヴァスの妻に言い寄った。立腹したパラーヴァスは供犠の祭を行ない、恐ろしい羅刹を呼び寄せて、父の礼拝堂でヤヴァクリータを殺させた。バラドヴァージャ仙は悲しみの余りに、息子を火葬にする火の中に身を投げたが、その前にパラーヴァスに自分の父を殺すように呪いをかけた。そのためにパラーヴァスはかもしかと間違えて父ライビヤを殺す結果となった。このようにして死んだ三人は、ライビヤのもう一人の息子アルヴァーヴァスの信仰が神々を動かし、生命を回復することになった（『マハーバーラタ』）。

ヤヴァナ　Yavana　「ギリシャ人」の意で、最初は紀元前六世紀ころバクトリアに定住して黒海の南からインドの西北部を支配していたイオニア人（ギリシャ人）を指した。パーリ語で書かれたプリヤダルシン王（アショーカ王）の刻文ではヨーナ Yona といい、イオニアの音写であることを示している。プラーナでは、ヤヴァナはトゥルヴァスの子孫とされるが、その記述はつねにインド西北部の諸種族と結びついている。

ヤクシー　Yakṣī　ヤクシニーともいう。ヤクシャの女性形、薬叉女。あるいは、富の神クヴェーラの妻。

ヤクシャ　Yakṣa　富の神クヴェーラの従者とされる神秘的存在。森、ジャングル、野原などに出没する精霊的な存在で、仏典では薬叉と音写される。ヤクシャの信仰はヴェーダ以前にさかのぼるともいわれ、善良な者、富の保持



マンゴーの実を取るヤクシャ

者とされる。ジャイナ教・仏教ではヤクシャは地域の守護者とされる。仏教ではサーンチーの大塔、アマラーヴァティー、バールフートの彫刻に姿をあらわし、ジャイナ教では二四人のティールタンカラ（預言者）それぞれの従者の中に入れられている。ヤクシャは美しい女性やその他のさまざまな姿をとるが、仏教神話や叙事詩の神話では人間の姿であらわれることが多い。

ヤージャ　Yāja　高潔さで知られるバラモン。パンチャーラのドルパダ王の懇願によって、牝牛一〇〇〇万頭を供え、祭祀を行なった結果、その祭火の中からドリシュタデイユムナとドラウパディーが生れ出たといわれる。

ヤジュニャ　Yajña　「犠牡」「祭祀」の意で、プラーナでは人格化されてルチの子、ダクシナー（「供物」の意）の夫とされる。彼は鹿の頭をもっていて、ダクシャの祭祀のときにヴィーラバドラによって殺された。『ハリ・ヴァンシャ』によれば、彼はブラフマー神によって天空に昇り、ムリガシラス（鹿の頭）と呼ばれる星座となったという。

ヤージュニャヴァルキヤ　Yājñavalkya　ウパニシャッドの哲学者として知られる聖仙で、『白ヤジュルヴェーダ』、『シャタパタ・ブラーフマナ』、『ブリハドアーラニヤカ』、『ヤージュニャヴァルキヤ法典』の伝説上の著者。『シャタパタ・ブラーフマナ』によれば、彼はヴィデーハ王ジャナカの宮廷でしばしば催された哲学上の討論会で多くの論敵を破った。ヴィダグダ・シャーカリヤという名のバラモンがとくに彼の論敵として有力であったが、ヤージュニャヴァルキヤはついに彼を論破して呪いをかけ、その結果、ヴィダグダ・シャーカリヤの首は落とされ、その骨は盗人に持ち去られたという。彼にはマイトレーイーとカーティヤーヤニーという二人の妻があり、ブラフマ・ヴァーディニー（哲学を論ずる女性）といわれるマイトレーイーにアートマンの教えを説いた話が知られている（『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』一・四）。

ヤジュニャセーナ　Yajñasena　パンチャーラの王ドルパダの別名。

ヤショーダー　Yaśodā　牧人ナンダの妻で、クリシュナの養い親。↓クリシュナ

ヤースカ　Yāska　ヴェーダの難解な言葉についての註釈書『ニルクタ』の著者。

ヤーダヴァ　Yādava　「ヤドゥの子孫」の意で、ヤドゥを祖とする部族名、その王朝、王国名。クリシュナはこの部族の出身である。ヤドゥの系譜はアトリから始まり、チャンドラ、ブダ、プルーラヴァス、アーユス、ナフシャと続き、ナフシャにはアーヤティとヤヤーティという二人の息子があった。ヤヤーティには二人の妻サルミシュターとデーヴァヤーニーがあり、シャルミシュターとのあいだにドルヒユ、アヌドルヒユ、プールという三人の男子をもうけた。このうち、プールからプール・ヴァンシャ（プールの系統）が始まる。ヤヤーティはデーヴァヤーニーとのあいだにも二人の息子ヤドゥとトゥルヴァシュをもうけ、このうちのヤドゥからヤドゥ・ヴァンシャ（ヤドゥの系統）すなわち、ヤーダヴァ（ヤドゥの子孫）が始まる。

ヤドゥには四人の息子サハスラジット、クローシュトリ、ナラ、リプがあり、サハスラジットの子シャタジットには三人の子マハーバヤ、ヴェーヌハヤ、ヘーハヤがあり、このうちヘーハヤはヘーハヤ・ヴァンシャ（ヘーハヤの系統）となる。彼の子ダルマにはクンティ（あるいはクニ）という息子があり、クンティはサダージット、マーヒシュマット、バドラセーナ、ドゥルダマという四人の子を持った。このうち、バドラセーナにダナカが生れ、ダナカにはクリタヴィーリヤ、クリターグニ、クリタヴァルマン、クリタウジャスがあり、このうち長子のクリタヴィーリヤからカールタヴィーリヤールジュナが生れた。彼には五人の息子、ジャヤドヴァジャ、シューラセーナ、ヴリシャバ、マドゥ、ウールッジタがあり、このうちのマドゥの子としてヴリシュニが生れ、ここよりヤドゥの系統はヴリシュニ・ヴァンシャ（ヴリシュニの系統）となる。ヴリシュニには四人の子があったが、ヤドゥの系統はそのうちのユダージットへと続き、そのシニからサティヤカが生れ、サティヤカからサティヤキが、サティヤキからサーティヤキが生れ、さらにジャヤ、クニ、アナミトラ、プリシュニ、チトララタ、ヴィドゥーラタ、シューラ、シニ、ボージャ、フリディーカ、シューラと続き、このシューラとその妻マーリーシャーとのあいだにヴァス、デーヴァバーガ、デーヴァシュラヴァス、アーナカ、スリンジャヤ、カーカーニーカ、シャーマカ、ヴァツァ、カヴーカ、ヴァスデーヴァが生れた。このヴァスデーヴァとカンサの従妹であるその妻デーヴァキーとのあいだに生れたのがクリシュナである。クリシュナよりプラディユムナ、アニルッダ、ヴァジュラと続いてヤーダヴァの系譜は終わる。バラタ族の戦争ののち、三六年目にヤーダヴァ族は滅亡した。

ヤートゥ　Yātu　あるいはヤートゥダーナ。悪魔、あるいは邪悪な精霊で、犬やハゲ鷹などの姿をとって人間に害を与えるといわれる。ヤートゥはラークシャサ（羅刹）と別のものであったが、叙事詩やプラーナでは両者は同一のものとして扱われている。『ヴァーユ・プラーナ』では一二のヤートゥダーナの名をあげ、カシュヤパ仙とスラサーから生れたとされる。

ヤドゥ　yadu　月種族（チャンドラヴァンシャ）の王ヤ

ヤーティの子で、ヤーダヴァ王朝の創始者。↓ヤーダヴァ

ヤマ Yama 死者の王。仏教では閻魔天という。ヤマの起源はインド・イラン共同時代にまでさかのぼり、『アヴエスター』のイマ（最初の人間、理想的な統治者）に対応する。『リグ・ヴェーダ』においては、ヤマはヴィヴァスヴァット（太陽神）を父とし、サラニヤーを母として生まれた（一〇・一四、一七・一）といわれ、ヴァイヴァスヴァタ（ヴィヴァスヴァットの子）と呼ばれることもある。

ヤマは最初の人間として最初に死の道を発見し（一・三八）、死界の王となって最高天にある楽園に君臨しているのであって、『リグ・ヴェーダ』においては、死後、悪事をはたらいた人々を罰する最後の審判を行なうものという記述



ヤマ神

はどこにもない。ヴェーダ時代の来世観においては、人はこの地上で長寿を保ったのちにヤマの世界に行き、そこで祖霊たちとともに安楽に暮らすことが理想とされていたのである。従って、ヤマに対して

「行け、行け、太古の道によって、われらの古き祖先が去り行きしところへ。スヴァダー（祖霊への供物）を楽しむ両王を汝は見ん、ヤマと神ヴァルナとを。祖先と合同せよ、ヤマと（合同せよ）、祭祀・善行の（果報）と（合体せよ）、最高天（ヤマの住所）において。欠陥を棄てて、（汝の）家郷（死者の世界）に帰れ。光輝に満ちて、（新たなる）身体と合体せよ。」（一〇・一四・七―八、辻直四郎訳）。

という讃歌が捧げられるのである。このうちで死者の国が地下ではなくヤマの住所の最高天とされる点はとくに注意すべきである。

『リグ・ヴェーダ』においては、ヤマは妹ヤミーと双生児であったとされるが、彼らは最初の一組の夫婦であって人類は彼ら二人から生れ出たと見る説（Roth）もあり、ヤマを昼、ヤミーを夜、父ヴィヴァスヴァトを天空、母サラニヤーを暁とする見解もある（M.Muiller）。「ヤマとヤミーとの対話」（『リグ・ヴェーダ』一〇・一〇）では、ヤミーはヤマに彼女の夫となるように求め、激情的な恋の言葉で兄を誘って人類を滅亡しないようにしようとするが、ヤマ

はこの申し出を退ける。これを、夜と昼は分けることができないとともに結合もできないと解したのである。

ヤマには神話的な牝犬サラマーの子である二匹の犬が番犬として付き従っている。それらの犬たちは四つの眼をもち、斑があり、広い鼻をしていてヤマの守護者としてその道を守っている（一〇・一四）。この犬たちは人間界をも歩きまわって死ぬべき人を嗅ぎ出し、ヤマの世界に連れていくといわれる。『アタルヴァ・ヴェーダ』では、死はヤマの使者であり（五・三〇）、睡眠もヤマの国から来るものといわれる（一九・五六）。

このようにしてヴェーダ時代にはヤマの国は天上の最も遠いところにあり、死者はヤマの国で祖霊と一体になるとされるのであるが、叙事詩の時代になると、死者の生前の善悪の行為を記録してその賞罰を司る神としての性格を持つようになった。一般に恐ろしい容貌をし、血のように赤い服をつけ、王冠をかぶって水牛に乗り、手には棒と縄を持つものとされ、死の神として人間の生命をうばう者とも、死者の王とも呼ばれる。

プラーナ神話によれば、太陽神スーリヤはヴィシュヴァカルマンの娘サンジュニャーと結婚して、マヌ、ヤマ、ヤミーの三人の子をもうけた。しかし、スーリヤの発散する光の熱気に耐え切れなくなったサンジュニャーは、侍女のチャーヤー（「影」の意味）を代わりにして自分は森のなかに隠れた。スーリヤはこれに気付かず、シャニシュチャラ、マヌ、タパティーをチャーヤーとのあいだにもうけた。ところが、チャーヤーは自分の言うことを聞かなかったヤマに呪いの言葉を浴びせたので、ヤマと父スーリヤは彼女が真実の母親ではないことを知ったという（『ヴィシュヌ・プラーナ』三・二）。

ヤマが方角を守る神とされるようになったことについては次のような物語がある。ある時、クヴェーラがブラフマー神に対する罪のあがないに一〇〇〇年のあいだ水につかる苦行を行なった。満足したブラフマー神がクヴェーラの前に姿を表わすと、彼は方角を守る神々（ディクパーラカ）の一人にして欲しいと願い出た。そこで、ブラフマー神は彼の願いを聞き入れ、インドラを東の、ヤマを南の、ヴァルナを西の、クヴェーラを北の守護神とした。ヤマの町はサンヤミニーと呼ばれた（『ウッタラ・ラーマーヤナ』）。

ヤマの国であるヤマプリー（ヤマの町）は広さ一〇〇〇ヨージャナ（一ヨージャナは約七〜八キロメートル）で、四面に入口があり、町をとりまく砦は鉄でできている。ヤマプリーには一〇〇の街があり、旗や花で飾られている。この町の一角にチトラグプタの館がある。その館には一群の人々がいて、生きている人々の生命の長さを計り、人間

の善悪の結果を吟味している。チトラグプタの住居の南にジヴァラマンディラ（病気の住居）があり、それに隣接してあらゆる病気の住居がある。チトグプタの住居から二〇ヨージャナのところにヤマの家があり、それは二〇〇ヨージャナの広さと五〇ヨージャナの高さで、一〇〇〇本の柱で支えられている。この家の一角に巨大な集会堂があり、ここは現世で善行を積んだ人々の住居で、彼らはここで永遠に幸福な生活を送るのである（『ガルダ・プラーナ』一四）。プラーナによれば、三界の中央にピトリローカ（祖霊の世界）といわれる世界があり、ヤマはこの世界の支配者である。ヤマは正義・公正を司っているものであるから、ヤマダルマ（ヤマの法、ヤマの正義）といわれる。彼は人々がこの世で行なった善悪の行為の結果を公正に査定し、ヤマダルマによってその罪に応じた地獄に送られるのである。『アグニ・プラーナ』（五六）によれば、人々は「ヤマよ、水牛よ、来れ。棒を手にするものよ、偉大な力をもてるものよ、汝は南門を守護せよ。ヴィヴァスヴァトの子よ、汝に帰命する。」というマントラ（呪文―秘密の言葉）を唱えてヤマ神を呼び出し礼拝したという。

　仏教に入ったヤマは、一方では夜摩天として六欲天のなかの第三位の天とされ、他方では閻魔王として冥界の支配者、現世での人間の行為の審判者とされるようになった。その住居は三悪道のうちの餓鬼界とされ、やがて地獄界とされるようになり、とくに中国において五官王、八王、十王などの思想と混淆して死者を裁く恐ろしい冥界の大王となった。密教では焔摩天といわれ、金胎両部曼荼羅の中にその図像を表わし、護世八方天の一つとしている。

〔別名〕ムリティユ（死）、カーラ（時、死）、アンタカ（最後のもの、死）、クリターンタ（終らせる者、死）シャマナ（消滅させる者）、ダンディー、ダンダダラ（棒を持つ者）、ビーマシャーサナ（恐ろしい法令）、パーシン（縄を持つ者））、ピトリパティ（祖霊の主）、プレータ・ラージャ（死者の王）、シュラーッダデーヴァ（葬礼の主）、ダルマラージャ（正義の王）、ヴァイヴァスヴァット（ヴィヴァスヴァットの子）、アウドゥムバラ（ウドゥムバラの木に関係ある者）。

ヤミー　Yamī　ヤマの妹。ヤムナー河の女神。『リグ・ヴェーダ』ではヤマの双生児とされ、「ヤマとヤミーとの対話」（一〇・一〇）では兄のヤマを近親相姦に誘い拒否される。プラーナでは太陽神スーリヤと工巧神ヴィシュヴァカルマンの娘サンジュニャーとのあいだに生れたとされる。

ヤヤーティ　Yayāti　月種族（チャンドラヴァンシャ）の聖王。ナクシャの子。デーヴァヤーニーとサルミシュターという二人の妻があり、前者からヤドゥが、後者からプルが生れ、それぞれヤーダヴァ族とパウラヴァ族の祖先と

なった。ヤヤーティの子にははこの二人のほかに、ドルヒユ、トゥルヴァシュ、アヌがあって、彼らはそれぞれの部族を形成し、バラタ王スダースに対抗して連合を結んだと伝えられる。ルドラデーヴァ作とされる『ヤヤーティ・チャリトラ』（ヤヤーティ王行状記）は、ヤヤーティとサルミシュターとの一生を扱った七幕のドラマである。

ユヴァナーシュヴァ　Yuvanāśva　日種族の王、マーンダートリの父。

ユガ　Yuga　ヒンドゥー教の世界観でいう世界周期のこと。この世界は生成・消滅をくり返すとして、この間をクリタ・ユガ、トレーター・ユガ、ドヴァーパラ・ユガ　カリ・ユガの四期に分ける。それぞれのユガの年数については種々の数え方があり、『マヌ法典』（一・六九―七四）によれば、第一のクリタ・ユガは黎明期四〇〇年、本期四〇〇〇年、黄昏期四〇〇年とで四八〇〇年、第二のトレーター・ユガは黎明期三〇〇年、本期三〇〇〇年、黄昏期三〇〇年とで三六〇〇年、第三のドヴァーパラ・ユガは同じようにして二四〇〇年、第四のカリ・ユガは一二〇〇年とされる。クリタ・ユガからカリ・ユガにいたる一万二〇〇〇年は人間のユガで、この一万二〇〇〇年が神のユガの一日にあたり、神のユガの一〇〇〇がブラフマーの一日にあたる。これにたいして、プラーナ文献では、四ユガの合計一万二〇〇〇年は神々のユガで、神々の一年は人間の三六〇年にあたるとされるから、このプラーナの説によれば、クリタ、トレーター、ドヴァーパラ、カリの各ユガは、人間世界の年数になおすと、それぞれ一七二万八〇〇〇年、一二九万六〇〇〇年、八六万四〇〇〇年、四三万二〇〇〇年となる。これらの合計四三二万年が一マハーユガと呼ばれ、ブラフマーの昼夜はそれぞれ一〇〇〇マハーユガとされるところから、人間の年数でいうと八六億四〇〇〇万年が一カルパ（劫）といわれ、この周期で世界は生成・消滅をくり返すという（『ヴィシュヌ・プラーナ』一・三）。

　古い文献では、クリタ・ユガにおいては人間の寿命は四〇〇年で、トレーター・ユガ以下のユガにおいてはそれぞれ四分の一づつ減っていくとされるが（『マヌ法典』一・八三）、一般的にはプラーナ文献によって、クリタ・ユガでは人間の寿命は四〇〇〇歳、トレーター・ユガでは三〇〇〇歳、ドヴァーパラ・ユガでは二〇〇〇歳、カリ・ユガでは不定となるといわれる。

　クリタ・ユガは正しい法の時代で、人間は無病で、すべての目的を達成することができる。第二のトレーター・ユガは正しい法が四分の一だけ欠けた時代、ドヴァーパラ・ユガは正しい法が四分の二欠けた時、最後のカリ・ユガ期は、正しい法が四分の一だけしか残っていない時代である。

現在はこのうちのカリ・ユガ期にあたり、人間の誠実さ、寛容さ、慈悲はもとより、寿命も体力も智慧の力もなくなる。カーストやアーシュラマ（バラモン族の生活階梯）は乱れ、財産だけがすべての基準となり、人々は欲ばることしか知らない状態となる。飢餓がはびこり、大風・大雨などの災害が起こり、人々はますます悲惨なありさまとなってゆく。仏教の末法の時代に相当するのがカリ・ユガであり、この時代にはヴィシュヌ神は仏陀とカルキとして出現し、人々を救済するといわれる。

ユダーマニユ　Yudāmanyu　パンチャーラの王家の出身で、バーラタ戦争においてはパーンダヴァ側に立ち、カウラヴァと戦った勇士。戦場においてはクリパ、ヴァルマン、ドゥリヨーダナ、アシュヴァッターマンなどと闘い、チトラセーナを殺した（『マハーバーラタ』ドローナ編・カルナ編）。大戦終結の前夜、パーンダヴァの陣営で眠っているところをドローナの子アシュヴァッターマンにおそわれて殺された（夜間襲撃編）。

ユディシュティラ　Yudhiṣṭhira　クル族の王パーンドゥの五王子の長兄。アルジュナ、ビーマとともにクンティーから生まれた。クルクシェートラの大戦争では、パーンダヴァの総帥として戦い、勝利した。

『マハーバーラタ』の伝説によれば、パーンドゥ王にはクンティーとマードリーという二人の妻があったが、キンダマ仙にかけられた呪い（パーンドゥは妻に触れた瞬間に生命を落とさねばならない）のために子供をもうけることができなかった。しかし、クンティーはかってドゥルヴァーサス仙から、子供を産みたい時には、ある神を心に念じて唱えれば必ず望みがかなえられるマントラ（呪文―秘密の言葉）を授けられていたので、ダルマデーヴァ神を心に念じてマントラを唱えた。たちまち彼女は身籠って男子を産んだ。この子が生れる時、天から「この子は人々のなかでも最も正義感の強い勇敢な王となり、ユディシュティラ（戦いにおいて堅忍不抜な者）と呼ばれる者となろう」という声が聞えた。その神聖な声に従って、ユディシュティラと名づけられた（初編）。ダルマデーヴァによる子であるところから、ダルマプトラ（ダルマの子、「正義の子」の意味となる）と呼ばれる。

クル族の王であった父王パーンドゥが死んだのち、ユディシュティラをはじめとするパーンダヴァの五王子は母クンティーとともにハスティナープラのドリタラーシュトラ王の宮殿で育てられた。ここで、ドゥリヨーダナをはじめとする諸王子、カルナ、アシュヴァッターマンなどと一緒に、五王子はクリパ、ドローナなどについて学芸・武術を学んだ。一年ののち、ドリタラーシュトラ王は、正義を愛

し、あらゆる徳にすぐれたユディシュティラを王位の継承者に定めた。そのほかのアルジュナ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァの四王子も武術においてすぐれた技を示した。パーンダヴァの力が強くなることに不安を感じたドリタラーシュトラの長子ドゥリヨーダナは、弟のドゥッシャーサナ、叔父のシャクニと相談し、ある口実を設けてパーンダヴァをヴァーラナーヴァタに追放し、漆などの燃えやすい材料を使った家を作らせ、そこにパーンダヴァを住まわせて焼き殺してしまおうと計画した。しかし、この奸計をヴィドラがユディシュティラに知らせたので、パーンダヴァはかろうじてこの難を逃れた。

しばらくして、パンチャーラ王ドルパダが娘クリシュナー（パーンチャーリー、ドラウパディー）の自選式（婿選びの行事）を行ない、この行事にユディシュティラをはじめとするパーンダヴァの五王子も参加した。多数の勇士たちのうちで、設けられた標的を射とめたのはアルジュナであった。こうして、パーンダヴァの古いしきたりによって、ドラウパディーはユディシュティラ以下の五王子の共通の妻となった。

クル族の長老ビーシュマは、パーンドゥ王の子供たちに国の半分を与えるようドリタラーシュトラに忠告し、これが聞き入れられてユディシュティラはカーンダヴァプラスタに移り、大都市インドラプラスタ（現在のデリー附近）を建設した。ユディシュティラ王は公正に政治を行ない、人々は幸福な日々を送った（初編）。アルジュナ、ビーマ、サハデーヴァ、ナクラはそれぞれ北・東・南・西に遠征を行ない、ユディシュティラは世界の王となる即位式を行なった。カウラヴァのドゥリヨーダナは、パーンダヴァの隆盛のさまを見て危機感を強め、叔父のシャクニと相談して、さいころ賭博の会を催し、ユディシュティラを招いて全領土を賭けさせた上で、比べるもののないシャクニの賭博術で取りあげようと計画した。ユディシュティラはこの賭博に黄金・宝石・象・戦車・全領土までを賭け、そのたびに負けた。彼は賭博熱におかされて弟のナクラ、サハデーヴァ、アルジュナ、ビーマまで賭け、彼らを失



戦車に乗る王と大臣

い、さらに自分自身をも、最愛の妻ドラウパディーをも賭けて負けた。勝ち誇ったドゥリヨーダナはユディシュティラを嘲笑し、パーンダヴァにさまざまな恥辱を加えた。しかし、ドリタラーシュトラの宮殿にはジャッカルの鳴き声などの不吉なきざしがあらわれたので、この老王はドゥリヨーダナに、王国を返還してユディシュティラと和解するよう勧告し、この危機は回避された。しかし、その後間もなく、ドゥリヨーダナは弟のドゥッシャーサナとともに再び賭博の会を開き、ユディシュティラを招いた。この時は、賭博に敗けたものは一二年間森の中に追放され、一三年目は人に知られずに暮らし、一四年目に帰還が許されるというものであり、ユディシュティラはこの勝負にも負けてパーンダヴァは追放生活に入らなければならなかった。



さいころを使った賭博

ドラウパディーとビーマはユディシュティラに力をもって王位を回復することを迫ったが、彼は約束に忠実でなければならないと考えていた。また彼は、カウラヴァの中でカルナだけを恐れていた。カルナは絶対に傷つけられない甲冑と耳環を持っていたからである。ユディシュティラのカルナにたいする恐怖心を除こうとして、インドラがバラモンの姿で現われ、カルナにその甲冑と耳環を自分に布施するよう頼んだ。バラモンの申し出を拒否することはできないので、カルナはそれらを彼に与え、そのお返しに生涯のうちで最も危険な時に一度だけ使用できる槍を与えられた。ユディシュティラをはじめとするパーンダヴァは、その後マツヤ王ヴィラータの宮殿ですごした。

パーンダヴァ、カウラヴァ両陣営のあいだで和平交渉が行なわれたが成功せず、ついにダルマクシェートラ（正義の土地）といわれるクルクシェートラで同族相争う戦いが始まった。一八日間にわたるこの戦いで、双方の多くの勇士たちが勇敢に戦って死んだ。ユディシュティラは最後の日のカウラヴァ軍の総指揮シャリヤと闘って彼を殺し、この戦いはパーンダヴァの勝利に終わった。ユディシュティラは戦没したすべてのもののための葬儀を行なったが、多くの血を分けた親族のものを殺したことを悔い、とくにカルナにたいしては兄殺しの罪を犯したとして罪の意識に苦しんだ。彼はすべてを棄てて森に入ろうとしたが、聖仙ヴィヤーサが馬祠祭を行なって一切の罪を浄めることをすすめ、彼もこれに従って盛大な犠牲祭を行なって国を治めた

（馬祠祭編）。

クル族の老王ドリタラーシュトラは一族の長老として双方のあつい尊敬を受け、それより一五年のあいだユディシュティラの宮殿ですごしたのち、妻のガーンダーリー、弟パーンドゥの未亡人クンティー、サンジャヤ、ヴィドゥラなどと共に森に入り、老王とガーンダーリ、クンティーは森の火事で死んだ（アーシュラマ編）。他方、五王子の妻クンティーと血のつながるクリシュナとその一族（ヤーダヴァ族）は滅亡した（棍棒戦編）。ユディシュティラは、これらの悲報をナーラダから聞くと、王位をアビマニユ（アルジュナとスバドラーの子）の息子のパリークシットに譲り、彼が成長するまでクリパーチャーリヤに師として後見させることとし、ヴァジュラをインドラプラスタの長に任命して臣下と別れ、五人の兄弟とその妻ドラウパディーとともに一匹の犬を連れただけでヒマーラヤを遍歴した。彼らはヒマーラヤ山に登り、神々の山メールに達したが、天に昇る途中で最愛の妻ドラウパディーがまず倒れ、次いでサハデーヴァ、ナクラ、アルジュナが、最後にビーマが倒れた。その時、インドラ神が天の車に乗って迎えに来たが、ユディシュティラは弟たちと一緒でなければ天に入りたくないと言うと、インドラは彼らはすでに天上に入っていると答えた。さらに彼は犬も連れていかなければならないと主張したが、これだけは認められないとインドラは答えた。すると、犬はダルマデーヴァに姿を変え、ユディシュティラの思いやりに満足の意をあらわした（旅立編）。

このようにして天国に入ったユディシュティラが最初に見たものは弟たちの姿ではなく、カウラヴァの邪悪な王ドゥリヨーダナが光輝に包まれて天の座に列している姿であった。怒りで一杯になったユディシュティラは「私は邪悪なドゥリヨーダナと共に天にいたいとは思わない。彼は生前、常に私たちに圧迫を加え、森へ追放した。彼は私たちを同族相対立する戦争へ追い込み、愛するドラウパディーに集会堂で兄弟たちの見ている前で侮辱を加えた。私は彼の顔を見たくない。私は弟たちのいるところへ行きたい。」と大声で叫んだ。ナーラダはこれに対し、天上には恨みも憎しみもなく、ましてドゥリヨーダナはクシャトリヤの定めとして戦争の火の中に自分の身体を犠牲として捧げた結果神々の列に加えられたのであると言って説得したが無駄であった。ユディシュティラはあくまでドリシュタディユムナ、サーティヤキ、ヴィラータ、カルナ、アルジュナ、ドラウパディーのいるところに行きたいと主張したので、天の使者は彼をその弟たちのいるところへ連れて行った。

進むにつれて、あたりは暗くなり、道には死肉や骨がころがり、死人の毛の髪や手足のない死体であたり一面いっ

ぱいになっていた。このすさまじい光景と耐えがたい悪臭にたまりかねたユディシュティラが引き返そうかと思ったとき、哀れな声がかすかに聞こえた。それは、「ダルマプトラよ、帰らないで下さい。わずかの間でもいいから、ここにとどまって下さい。あなたがここにおられるだけで、私たちはつかの間のあいだ苦しみから逃れられます。あなたがここに来たとき、清らかな風が吹き、よい香りが立ちこめました。クンティーの子よ、あなたがここにおられる間は、私は苦しみから解放されています。どうか、ここにおとどまり下さい。」と訴えていた。哀れみの心で一杯になったユディシュティラは「あなた方は誰か。何故、ここにいるのか。」と尋ねた。すると「私はカルナです」とある声が答え、「私はビーマです」と他の声が答え、「私はアルジュナです」と第三の声が答えた。こうして彼は兄弟たちが地獄で苦しんでいるのを知った。怒りと悲しみで一杯になってユディシュティラは「世にある時、邪悪の限りをつくしたドゥリヨーダナが天上の神々の中で暮らしているのに、善良で誠実なクンティーの子供たちがどうしてここで苦しまなければならないのだ。彼らがここで苦しまねばならないのなら、私もいつまでもここにいよう。」と言って天の使者を返してしまった。

ほんのわずかな時間ののち、ユディシュティラの前にインドラ神とヤマ神が現われた。すると、あたり一面をおおっていた暗闇は消え、恐ろしい地獄の光景も苦しむ人々の姿も消え去った。インドラがユディシュティラを慰めて言うには、人間は誰でも生涯に善悪の業を作るものだが、悪業が圧倒的に多いものはまず天に行って少しではあるが善業の果を味わい、次に地獄に行って苦しみを受ける。それに対してわずかの罪しか犯していないものは、まず初めに地獄に行ってその罪を贖い、それから天上で永遠の幸福をうけるのである。ユディシュティラ自身も、かつてドローナをあざむいたことがあるために、まず地獄に送られて一日の三〇分の一の時間だけその苦しみを味わったのであり、彼の兄弟たちも同様で、ここで罪を浄めた後に天に昇ったのである、と。ダルマデーヴァも「私は汝を試した。しかし、汝は一人で天国に入るよりも兄弟たちと一緒に行くことを選んだ。汝はすでに罪を浄め終った。汝の兄弟たちはもはや地獄にはいない。地獄のありさまはインドラによって作り出された幻である。」と語った。彼は光に包まれてアルジュナ、カルナ、ビーマ、ナクラ、サハデーヴァ、ドゥラパディーなどが神々の座に着いているのを見た（昇天編）。

〔別名〕アージャミーダ（アジャミーダの子孫）、バーラタ（バラタの子孫）、バーラタシャールドゥーラ（バラタ族の最上の人）、バーラタサッタマ（同）、バラタルシャバ（バ

ラタ族の牡牛）、バーラタシンハ（バラタ族のライオン）、ビーマプールヴァジャ（ビーマより前に生れた者）、ダルマジャ（ダルマ神により生れた者）、ダルマナンダナ（ダルマ神の息子）、ダルマプラバヴァ（同）、ダルマプトラ（同）、ダルマラート（正義の王）、ダルマラージャ（同）、カウンテーヤ（クンティーの子）カウラヴァシュレーシュタ（クル族中の最上の人）、カウラヴァナータ（クル族の指導者）、クンティーナンダナ（クンティーの子）、パーンダヴァシュレーシュタ（パーンドゥの子孫の中の最上の人）、パーンダヴァナンダ（パーンドゥの子）、パーンドゥプトラ（同）、パールタ（プリターの子）ヤーダヴィープトラ（ヤーダヴァ族の子孫）など。

ユユツ　Yuyutsu　クル族の王ドリタラーシュトラと身分の低いヴァイシュヤの女とのあいだに生れた子で、いわゆる「百王子」の中には含まれず、バラタ族の戦争ではパーンダヴァ側に立って戦った（『マハーバーラタ』ビーシュマ編）。彼は勇敢であるばかりでなく、正直で心優しい戦士であり、カウラヴァ側の諸王が彼を攻めたがひるむことがなかった（ドローナ編）。大戦が終ったのち、ユディシュティラの勧めでドリタラーシュトラ老王のもとに帰ったが、パーンダヴァの人々が王位をパリークシットにゆだねて最後の旅に出ると、ユユツはこの国にとどまってパリークシット王を助けた。

〔別名〕ドリタラーシュトラプトラ（ドリタラーシュトラ王の子）、ヴァイシュヤープトラ（ヴァイシュヤ女の子）など。

ヨーガニドラー　Yoganidrā　「ヨーガの眠り」の意で、ヴィシュヌ神の偉大な幻の力、および、女神デーヴィーのマハーマーヤー（大幻力）をいう。

ヨーギニー　Yoginī　女の邪術師、魔女の一種。シヴァ神の妃ドゥルガーの従者で、ドゥルガー自身もヨーギニーと呼ばれる。彼女は自分と夫シヴァに奉仕させるためにヨーギニーを造り出したといわれ、その数は八とも、六〇とも六四、六五ともいわれる。

ヨーニ　Yoni　女性性器のことで、それ自身で、あるいはリンガ（男性性器、とくにシヴァ神の象徴）と結びついて、シャクティ崇拝をする人々により信仰の対象とされる。

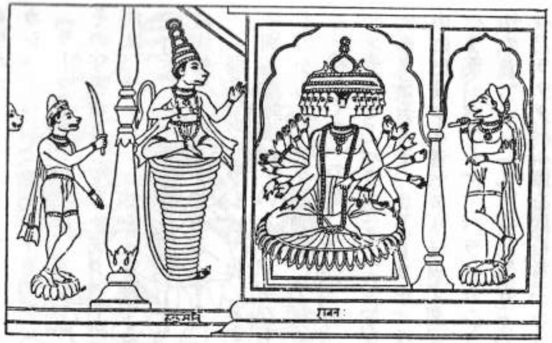
ラ 行

ライヴァタ Raivata レーヴァタの子で、カクドミンとも呼ばれる。クシャスタリーを都とするアーナールタ国の王。レーヴァタにはレーヴァティーという美しい娘があり、適当な結婚の相手がなかったので、ブラフマーの世界に行き、ブラフマー神に相談した。ところが、天上に昇ると美しい天の合唱隊の歌が聞こえ、その歌に聞きほれているうちに途方もなく長い時間がたってしまった。ブラフマー神に娘の結婚相手について相談し、ブラフマーの「王の意中の人は誰か」という問いに答えて彼があげた二、三の王子たちの名は、もう久しい昔に死んだ者たちのものであった。ブラフマー神はこれを見て、今、クシャスタリーに住んでいるヴィシュヌの化身であるバララーマこそレーヴァティーの夫にふさわしいとすすめたので、レーヴァタはこれに従い、レーヴァティーはバララーマの妻となった。

ライビヤ Raibhya バラドヴァージャの友人の聖者。彼にはアルヴァーヴァスとパラーヴァスという二人の息子があったが、パラーヴァスはバラドヴァージャ仙の呪いをうけて、鹿の皮を着て歩いていた父親のライビヤをかもしかと見誤って殺してしまった。アルヴァーヴァスは弟の罪をあがなおうとして森に入って苦行を続けたが、家に戻ると弟はまたこの兄に罪を負わせた。そこでアルヴァーヴァスは再び森に入って苦行を行なった。神々はこれを見て心を動かされ、弟を追放したうえで、ライビヤに生命をとりもどさせた。→ヤヴァクリータ

ラヴァ Lava ラーマとシーターとのあいだに生まれた双生児の一人。→クシャ

ラーヴァナ Rāvaṇa ラーマの妻シーターを奪ったランカーの羅刹の王。ヴィシュラヴァスと羅刹スマーリンの娘ニカシャーとのあいだに生まれた。クヴェーラの異父兄弟。あらゆる羅刹族の祖といわれるプラスティヤ仙の孫。彼はきびしい苦行とブラフマー神への帰依によって、神々やあらゆる悪魔に対して決して敗れることのない力を身につけていたが、女性に関することがらで死ぬように運命づけられていた。あらゆる羅刹は邪悪であったが、彼はその中でも最も邪悪であった。彼は一〇の頭と二〇の腕と銅色の目と月のように輝く歯を持ち、その姿は雲か山のようであった。ラーヴァナにはシュールパナカーという妹があり、ラーマが追放されてダンダカの森に住んでいた時、ラーマを恋したが拒絶されたことを恨んでランカーの兄のもとに行


魔王ラーヴァナの前に坐る猿の勇士ハヌマーン

き、ラーヴァナにラーマの妻シーターの美しさを語って彼女を奪うようそそのかした。妹の言葉に心を動かされたラーヴァナは海を渡ってダンダカの森に飛来し、シーターを奪ってランカーに連れ帰った。彼はシーターを自分のものにしようとしたが、彼女は最後まで貞節を守り通した。猿の軍勢の助けをかりてランカーに侵攻したラーマ軍とのあいだに大戦闘が始まり、激しい戦いののちラーヴァナとその一族はラーマに滅ぼされた。彼の妻にはマンドーダリーをはじめ、多くのラークシャシー（羅刹女）がいたが、彼の葬式に際してすべて焼き殺された。彼の息子たちの中で最も勇敢だったのはインドラジットで、そのほかラーヴァニ、アクシャ、トリシラス、デーヴァーンタ、ナラーンタカ、アティカーヤなどの名が『ラーマーヤナ』に記されている。→ラーマ

ラウドラ Raudra 「ルドラの子」の意で、軍神カールッティケーヤの別名。

ラーカー Rākā ヴィシュラヴァスの妻の羅刹女。カラとシュールパナカーの母（『ラーマーヤナ』）。

ラーガヴァ Rāghava 「ラグの子孫」の意で、ラーマの別名。

ラグ Raghu 日種族の王で、ディリーパの子、ラーマの祖父（カーリダーサ『ラグヴァンシャ』）。理想の帝王チャクラヴァルティン（転輪聖王）といわれる。ラグの系統の首長（ラグパティ）の称号を与えられている。

ラークシャサ Rākṣasa 悪鬼。仏典では羅刹と音写し、可畏、速疾鬼などと訳す。邪悪な存在。通常、夜になると出没し、犬・ワシ・フクロウ・カッコウ・野猪・夫・妻などさまざまな形をとることができるといわれる。火のように光る鋭い眼をし、異常に長い尾をもっていて、犠牲の祭を混乱させる。墓場の屍体の中に住み、人肉を食うものもあり、とくに新生児にとって最も危険な存在とされる。プラーナの伝説によれば、ラークシャサはプラスティヤ仙か

ら生れたとも、ブラフマー神の足から生れたとも、また、カシュヤパ仙とカシャーとのあいだに生れたともいわれる。

『ラーマーヤナ』では、ブラフマー神が河を造ったときにその守護者としてラークシャサを同時に造ったといい（これは、ラークシャサを「守護する」を意味する動詞ラクシュ rakṣ に由来すると解釈したもの）、その王はランカー島に住むラーヴァナであるとする。

〔別名〕ラークシャサは、その性格と行動から実に多くの別名で呼ばれているが、主なものをあげると次のようなものがある。アヌシャラ、アシャラ、ハヌーシャ（いずれも「殺りく者」の意）、イシュティパチャ（供物を盗む者）、サンディヤーバラ（たそがれに力をもつ者）、クシャパータ、ナクタンチャラ、ラートリチャラ、シャマニーシャダ（夜中に出没する者）、ヌリジャグダ、ヌリチャクシャ（人食鬼）、パララ、パラーダ、パランカシャ、クラヴィヤード（肉食性の者）、アスラパ、アシュリクパ、カウナパ、キーラーラパ、ラクタパ（血を飲む者）、マリナムカ（黒い顔の者）など。→ラーヴァナ

ラークシャシー Rākṣasī ラークシャサの女。羅刹女。

ラクシュマナ Lakṣmaṇa (一)アヨーディヤーの王ダシャラタとその妻スミトラーの子。ダシャラタ王には三人の妻があったが、長いあいだ息子がなかったので、アシュヴァメーダ（馬祀祭）を行なった結果、カウサリヤーからはヴィシュヌ神の生れ変わりであるラーマが、カイケーイーからはバラタが、スミトラーからはラクシュマナとシャトルグナが生れた。ダシャラタ王は長子のラーマを王位継承者に定めたが、カイケーイーの奸計によって一四年のあいだ追放された。兄ラーマを尊敬するラクシュマナは兄について宮殿を出、森の中で樹皮をまとって暮らし、ランカーの魔王ラーヴァナとの戦いにおいてもラーマを助けた。

(二)クル族の王ドゥリヨーダナの子。バーラタ戦争においてパーンダヴァ側のアビマニユと戦って殺された（『マハーバーラタ』ドローナ編）。

ラクシュミー Lakṣmī ヴィシュヌ神の妻で、幸運と美の女神。吉祥天女。『リグ・ヴェーダ』（一〇・七一）においては、ラクシュミーは「幸福」の意味で用いられ、『アタルヴァヴェーダ』では幸・不幸を支配する女神とされる。『ヴァージャサネーイ・サンヒター』のなかでは註釈家によれば、シュリーとともにアーディティヤ神の妻とされ、『シャタパタ・ブラーフマナ』ではシュリーをプラジャーパティの娘としている。このような幸運と繁栄の女神ラクシュミーがヴィシュヌの神妃とされるようになったのは叙事詩の時代であり、『マハーバーラタ』ではラクシュミーはヴィシュヌ＝ナーラーヤナの妻とされ、シュリーと同一の

女神とされる。『ラーマーヤナ』（少年編）の神話によれば、神々とアスラたちが不死の霊水アムリタを求めて乳の海をかきまわしたとき、手に蓮の花を持った美しい女神ラクシュミーがあらわれたという。また、他の神話によれば、天地創造のとき、この女神は蓮の花の上に乗って浮んでいたという。この出生神話によって、彼女は「乳の海の娘」と呼ばれ、パドマー（「紅蓮花」をあらわすパドマの女性形）とも呼ばれる。『ヴィシュヌ・プラーナ』（一・九）では、ラクシュミーをブリグの娘と説き、彼女が乳の海から美しい姿を現わすと、たちまちヴィシュヌ神は自分の妻にしてしまったという。ヴィシュヌ神がブリグ族のパラシュラーマとして生れると、彼女はダーラニーとなって彼に従い、ヴィシュヌがクリシュナとしての姿を現わすとその妻ルクミニーとなった。さらにヴィシュヌ神がそのときどきの必要に応じて、一〇、あるいは二〇の化身（アヴァターラ）を現わすと、ラクシュミーもそれに対応した姿となって夫に寄りそうのである。



幸運と美の女神ラクシュミー

ラクシュミーの立像は普通赤い睡蓮の花の上に立つ四本の腕をもつ女性として表わされる。ラクシュミーの像には八つの姿があるとされるが、その中でもよく見られるのはガジャ・ラクシュミーと呼ばれるもので、二頭のガジャ（象）が左右から蓮華の上に坐っている女神の頭上に水を注いでいる。女神自身は四本の腕をもち、それぞれ蓮華、不死の霊水アムリタの瓶、ビルヴァの実、ホラ貝を持っているも



ラクシュミー女神と
その夫ヴィシュヌ

の、二本の腕だけをもつものなどがある。

仏教の中にとりいれられたラクシュミーは吉祥天女・吉祥功徳天として古くから信仰されていたと見られる。『大集経』（五七）では功徳天がむかし釈尊とともに因陀羅幢相王仏のもとで修行した因縁について述べ、『金光明経』功徳天品などではこの天女がむかし宝華功徳海琉璃金山照明如来の世に生れ、さまざまな善行を行なった結果として現在のような福徳をそなえたものとなったのであるから、人が『金光明経』を読み、諸仏・天女を供養すれば必ず願いがかなえられると説かれる。その住居は北方の毘沙門天で、未来においてシュリーマニラトナサムバヴァ（吉祥摩尼宝生如来）として成仏するといわれる。

（別名）ヒーラー、インディラー、ジャラディジャー（海より生れたもの）、チャンチャラー（移り気なもの）、ローカマーター（世界の母）など。

ラクタヴィージャ　Raktavīja　デーヴィー（シヴァの神妃）、チャンディカー（あるいはチャームンダー）と戦った巨大なアスラの名。彼の傷からしたたり落ちる血がそれぞれアスラの姿となったが、チャームンダーはその血を飲みほし、ついにラクタヴィージャを倒した（『デーヴィーマーハートミヤ』）。

ラジ　Raji　アーユスの息子で、五〇〇人の剛勇の子の父。神々とアスラとの長い戦いのあいだに、ブラフマーは勇士ラジが加わった側が勝つと明言した。彼はアスラからも味方になることをすすめられたが、神々の側に立ち、アスラが敗北したのちにインドラに代わって神々の王となった。インドラ神はラジの生存中はその下に立っていたが、彼の死後、彼の子供たちを追放して天上の支配権を回復したといわれる。

ラージャグリハ　Rājagṛha　マガダ国の首都。現ビハール州のラージギルで、仏教徒の聖地の一つ。パーリ語でラージャガハ、漢訳仏典では王舎城と訳される。ここに都を遷したビムビサーラ王はブッダに帰依し、厚く仏教を保護したことにより仏教関係の遺跡が多い。中でも、ブッダの説法の場であったグリドラクータ（霊鷲山）、アジャータシャトル王（阿闍世王）が父ビムビサーラを幽閉したという牢獄の跡、同王の建てたストゥーパなどがよく知られている。また、第二回目の仏典結集が行なわれたのもこの地であると伝えられる。

ラージャスーヤ　Rājasūya　「王室の供犠祭」の意で、ヴェーダに説かれる古代インドの王の即位祭のこと。この即位式には、供犠祭を行なう僧のほかに人民の代表も参加し、虎の皮でおおった玉座に坐った王に、ウドゥムバラの木で作った器に入れた水やバターや蜜などをふりそそぐ灌

水の行為が基本となっている。

ラージャルシ　Rājarṣi　ラージャ（王）とリシ（聖者）と結合した語で、クシャトリヤ（王族階級）の聖者のこと。ヴィシュヴァーミトラやプルーラヴァスのように、地上で清浄な生活を送ったのちにインドラ天に昇ったといわれるクシャトリヤを指す。

ラーダー　Rādhā　ヴリンダーヴァナの牛飼いアヤナゴーシャの妻。美しい牧女（ゴーピー）。クリシュナはマトゥラーの悪王カンサのもとを逃れて、牧人カンダのもとで育てられ、成長すると牧人の妻や娘たちと恋愛をしたが、その中で一番のお気に入りがラーダーであったという。一二世紀のベンガルの詩人、ジャヤデーヴァの詩作品『ギータ・ゴーヴィンダ』はクリシュナとラーダーとの恋愛を主題としたものである。ラーダーはラクシュミー女神の化身であるともいわれる。タントラによれば、ラーダーの無限の愛はクリシュナの本質を形成するものであり、女性はラーダーの本質をもち、男性はクリシュナの本質をもっている。そこで、クリシュナとラーダーとの恋愛の本質は肉体によってのみ知られるものであり、このような普遍的な真理は肉体の上でのみ体得されると説かれる。



クリシュナと恋女ラーダー

ラティ　Rati　「愛」を意味する女神で、愛の神カーマの妻。アプサラス（天界の水の精女）の姿をし、性的なよろこびをあらわす。ダクシャの娘。ラティはレーヴァー、カーミー、プリーティ（よろこび）、カーマパトニー（カーマの妻）、カーマプリヤー（カーマの愛する女）、ラーガラター（愛のつる草）、マーヤーヴァティー（詐欺師）、ケーリキラー（浮気者）、シュバーンギー（汚れない肢体をもつ女性）など、さまざまに呼ばれる。

ラートリー　Rātrī　『リグ・ヴェーダ』の夜の女神。暁紅の女神ウシャスの姉妹として両神が合せ讃えられることが多い（一・一四二、一八八）。ウシャスと同じように「天の娘」と呼ばれ、すべてのものに安息を与える女神とされ

る。

「女神ラートリーは近づきつつ、その眼（まなこ）（星）もていたるところをうち眺めつ。〔女神は〕あらゆる美を身につけたり（一〇・一二七・一）。不死の女神は、広大なる〔空間を〕満たせり、低きところも、高きところも。〔女神は〕光明によりて暗黒を駆逐す(二)。女神は近づきつつ、妹なるウシャスと交替せり。暗黒をしてまた遠ざからしめよ(三)。」（辻直四郎訳）。

ラーフ Rāhu「捕える人」の意で、日食・月食と関係をもつとされる悪魔。叙事詩やプラーナの神話においては、ラーフはダーナヴァであり、神々が乳海を攪拌して不死の霊水アムリタを手に入れようとした時、彼は変装して神々の仲間に入り込んでアムリタを飲んだ。その時、太陽神スーリヤと月神ソーマが彼の正体を見破り神々に告げたため、ヴィシュヌ神はラーフの首を切り落とした。その首は大空へはね上げられ大声でわめいた。このようにして、天空におけるラーフの首と太陽・月の長い戦いが始まった。ラーフが太陽や月を捕え飲み込むとき、太陽・月は光を失うのであり、この意味で彼はアプラピシャーチャ（天空の悪魔）とも呼ばれる。彼はヴィプラチッティとシンヒカーとの子で、四本の腕をもっている。彼の乗る車は八頭の黒い馬が結びつけられていて、彼の宮は天の南西の方角にある。彼の息子たちは三三の彗星（ケートゥ）で、天災地変、外国人の侵入、王の死などの前兆として現われる。〔別名〕マハーグラハ（偉大な捕獲者）、サインヒケーヤ（シンヒカーの子供）、バラニーブー（バラニー星から生れた者）。仏教では九曜のうちの羅睺星（らごせい）がこれに当る。

ラーマ Rāma あるいはラーマチャンドラ。コーサラ国のアヨーディヤーを支配するダシャラタ王の長子、シーターの夫。『ラーマーヤナ』の主人公。ダシャラタ王には王位を継ぐ子がなかったので、アシュヴァメーダ（馬祀祭）を行ない、神々に祈りをささげた。その結果、彼の願いは聞き入れられ、神々は彼に四人の息子が生れることを約束



花婿姿のラーマ

した。その時、ランカー島のラークシャサ（羅刹）の王ラーヴァナが激しい苦行を行ないブラフマー神に祈りをささげて強大な力をつけて横暴となり、神々は恐怖におちいっていた。神々がヴィシュヌ神に救いを求めると、この世に人間の姿で出現して羅刹を殺すことを約束した。ダシャラタ王が供犠祭を行なっていると、祭火の中からヴィシュヌ神が光り輝く存在として現われ、王に神酒のつぼを渡し、王妃に飲ませるようにといって姿をかくした。王は神酒の半分を第一の妻カウサリヤーに飲ませると彼女から神の本質の半分をもったラーマが生れ、神酒の四分の一を第二の妻カイケーイーに与えると神の本質の四分の一をもったバラタが生れ、残った神酒を第三の妻スミトラーに与えるとそれぞれ八分の一づつの神の本質をもったラクシュマナとシャトルグナが生れた。四人はアヨーディヤーで一緒に育てられたが、ラーマはヴィシュヴァーミトラ仙に羅刹からの守護を依頼され、武術をしこまれた。同仙に連れられてヴィデーハ王ジャナカの宮殿に行き、ラーマはそれまで誰も引くことのできなかった強弓をやすやすと引き、その上真二つに折ってしまった。このようにしてラーマはジャナカ王の娘で絶世の美女シーターを妻とし、三人の弟たちはシーターの妹と従姉妹たちを妻とすることになった。ラーマは王位継承者に定められたが、カイケーイーは自分の産んだ息子を王位につけようとして王に願い、ラーマとシータは一四年のあいだ宮殿から追放され森で暮らすうちに、シーターがランカーの羅刹王ラーヴァナに奪われるという事態が起こり、叙事詩『ラーマーヤナ』の物語が展開するのである。↓ラーマーヤナ

プラーナでは、ラーマはヴィシュヌ神の第七番目の化身（アヴァターラ）として神格化される。プラーナのクリシュナ伝説におけるラーマはバララーマと呼ばれ、ヤーダヴァ族のヴァスデーヴァとその妻デーヴァキーとのあいだの第七子として生れたといわれる。マトゥラーの悪王カンサはヴァスデーヴァとデーヴァキーが結婚するとき、その第八番目の子に殺されると予言されていたため、二人のあいだに生れる子供を次々に殺していったが、第七子のバララーマは生れる直前に母の胎内からヴァスデーヴァのもう一人の妻ローヒニーの胎内に移されて助けられた。その後、彼は第八子のクリシュナと一緒に牧人ナンダとその妻ヤショーダーに育てられた。叙事詩ラーマーヤナのラーマも、ランカーの魔王ラーヴァナを退治するためにヴィシュヌ神がこの地上に姿を現わしたとする点は変わりない。ラーマの名は、「ラーム・ラーム」としてヴィシュヌ神を信仰する人々の祈りの言葉として生き続け、インド独立の父とたたえられるマハートマー・ガーンディーの最後の言葉が

「ヘー・ラーム」（おお、ラーマよ）であったことはよく知られている。

ラーマセートゥ Rāmasetu 「ラーマの橋」の意で、アダムス・ブリッジのこと。→セートゥバンダ

ラーマーヤナ Rāmāyaṇa 「ラーマ王行状記」の意味の古インドの国民的大叙事詩。『マハーバーラタ』とともに二大叙事詩といわれる。サンスクリット語で書かれ、全七編、二万四千の詩句（シュローカ）より成っている。作者は「最初の詩人」（アーディカヴィ）と呼ばれるヴァールミーキで、シュローカという韻文の形式も彼の発明であると伝えられる。古代インドの英雄ラーマの伝説が一つにまとまった形となったのは紀元前数世紀のころであり、その後多くの増補が行なわれて、現存する形となったのは西暦二世紀のころと推定されている。

(1)少年編。アヨーディヤーを都とするコーサラ国王ダシャラタには後継者がなかったので、王子の誕生を願って馬祀祭（アシュヴァメーダ）を行なった。そのころ、天上の神々の世界はラークシャサと呼ばれる悪魔の王ラーヴァナの横暴に悩まされていたので、神々が相談した結果、ヴィシュヌ神がダシャラタ王の王子として生れ、ラーヴァナを殺すことになった。やがてダシャラタ王の三人の妃に四人の子供が生れた。カウサリヤーからはラーマが、カイケーイーからはバラタが、スミトラーからはラクシュマナとシャトルグナの双生児が生れた。四人の王子のなかでもラーマが文武両道にわたってすぐれ、ヴィデーハ国王ジャナカの娘シーターの婿選びの会（スヴァヤンヴァラ）に出席して多くの競争者に武技で勝ち、シーターを妻とした。

(2)アヨーディヤー編。ダシャラタ王は老齢となったので国民の信望の高いラーマを王位継承者とし、即位式の準備をした。しかし、その即位式の前夜、侍女にそそのかされたカイケーイー妃はラーマを一四年間森の中に追放し、自分の生んだ息子バラタを王位継承者とするよう王にせまった。王はかつて彼女に二つの願いをかなえてやると約束していたので、この申し出を認めざるを得なかった。父王のカイケーイーへの約束を知って、ラーマは自分から弟ラクシュマナと妻シーターとともにアヨーディヤーを出た。ダシャラタ王は悲しみの余り世を去り、バラタはラーマに王位につくよう森に出向いて懇願したがラーマは聞き入れなかったので、王の玉座にラーマの靴を安置して自分はラーマの代理として国の政治をとることになった。

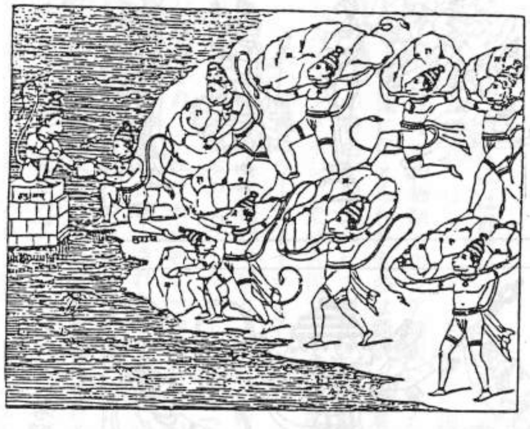
(3)森林編。追放されたラーマたちがダンダカの森に住んでいたとき、森の行者たちから依頼されて悪魔ラークシャサを征服した。魔王の妹シュールパナカーはラーマに言い寄って拒否され、さらにラクシュマナからは耳と鼻を切り

落とされたのを恨んでランカーに急行し、兄のラーヴァナを煽動してシーターを奪い取らせ、ラーマに復讐しようとした。ダンダカの森に飛来したラーヴァナは部下を金色の羚羊（かもしか）の姿とならせ、ラーマとラクシュマナがこれを追っているうちにシーターをさらった。ハゲ鷹のジャターユスはシーターの悲鳴を聞いてかけつけたが、ラーヴァナに致命傷を負わせられ、シーターはついにランカーに連れて行かれた。ラーヴァナはシーターを自分のものにしようとするが激しく拒絶され、立腹して一年以内に彼の意に従わないなら食べてしまうとおどかしたうえで城内に監禁してしまった。ラーマは愛妻シーターがランカーに連れ去られたことを瀕死のジャターユスから聞いた。

(4)キシュキンダー編。シーターを救出する旅に出たラーマは、パムパー湖のほとりで、猿王スグリーヴァが兄のヴァーリンに国と妻を奪われているのを知って同盟を結び、キシュキンダーのヴァーリンを攻め滅ぼした。スグリーヴァは王位に復帰させて貰った返礼にシーター奪還に全力をつくすことを約束した。勇敢な猿の勇士ハヌマーンはスグリーヴァの命によってラーマを助けてシーターの所在を探し、ついに彼女の監禁されているところをつきとめた。

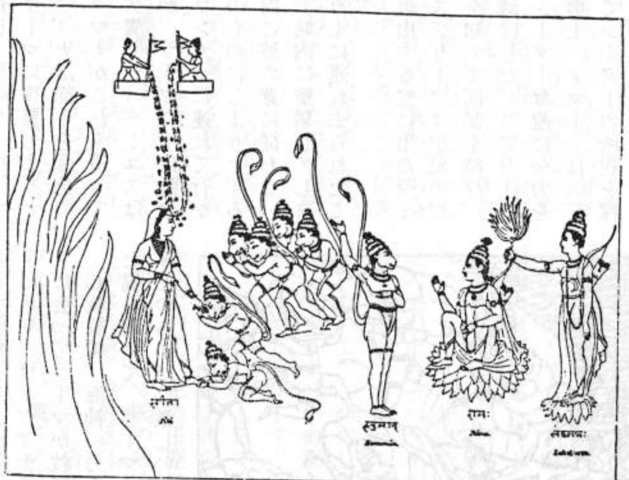
(5)華美編。ラーマと猿軍は海岸に着いたが、海をへだてたランカーに渡ることは困難であった。しかし、風神の子としての能力をもつハヌマーンは単身空中を飛んでランカーに渡り、ラーヴァナの宮殿をつぶさに調べあげ、シーターに会ってラーマが救援に来る日が近いと告げて帰った。

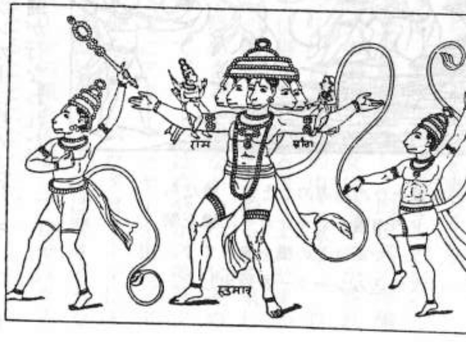
(6)戦闘編。海神の力をかりて猿の将軍によって架けられた橋を渡って、ラーマはランカーに攻め込み、ラーヴァナ軍とのあいだに激しい戦闘が行なわれた。



猿の将軍ナラの指導のもとに，猿たちはインドの南端からランカーに橋を架けた。ラーマ軍はこの橋を渡ってランカーに攻め込みシーターを救出した。


魔王ラーヴァナと戦うラーマ


ハヌマーン、捕われの身のシーターと会見する


ラーマとシーターを乗せて帰還するハヌマーン

ラーマはついにラーヴァナを殺してシーターを救出したが、身の潔白を疑われたシーターは火の中に身を投げた。しかし、火神アグニは彼女の身の清浄であることを証明して救い出した。このようにして、ラーマはシーターを連れてアヨーディヤーの都に帰還し、王位についた。

(7)終末編。王位についたラーマは高徳のほまれ高く、よく国を治めたが、国民のあいだにまだシーターの身の潔白を疑う声のあることを知り、弟のラクシュマナに彼女を森の中に棄てさせた。悲嘆にくれたシーターは森の中に入ったが、ヴァールミーキ仙の草庵でクシャとラヴァの双生児を産んだ。ヴァールミーキ仙自身がシーターは純血で無垢であることをラーマに証明したが、ラーマは疑いの心をすてなかった。シーターは身の清浄を証明してくれるよう地母神に祈ると、母なる地神がたちまち涌出し、王座に坐ったままシーターを抱き、地中に消えた。間もなくラーマはクシャとラヴァに王位をゆずって天上に昇った。天上で再びもとのヴィシュヌ神にもどった。

この大叙事詩の成立について説きおこす少年編と、ラーマをヴィシュヌ神の化身であるとする第七終末編の二編は、中心部分が成立した後に付加されたものと推定されている。この叙事詩によって、ヴィシュヌの化身である正義の王子ラーマは国民的英雄として崇拝を受けるようになり、その妻シーターは貞婦の鑑(かがみ)として、ラーマの弟ラクシュマナは孝順の範として、猿の勇士ハヌマーンは忠節の権化として敬愛されるようになった。『ラーマーヤナ』にもとづく文芸作品は非常に多く、中でもヒンディー文学のトゥルシーダース（一五三二―一六二三）の『ラーム＝チャリト＝マーナス』Rām-carit-mānas（ラーマの所行の湖）は有名である。

『ラーマーヤナ』は近代インドのさまざまな言語に翻訳・翻案されただけではなく、インド文化の国外への広がりとともに、ラーマの物語もアジア諸国に伝えられた。なかでも南方諸国に伝えられたものは翻訳・翻案だけではなく、その国々の特色が加えられて劇化され、舞踊に作り変えられた。インドネシアでは古代ジャワ語訳されてカーカーウィン詩の作品『ラーマーヤナ・カーカーウィン』（一二世紀ころ）となり、さらにワヤンとよばれる影絵芝居の主題となった。タイ伝本の『ラーマーヤナ』は『ラーマキエン』に改編され、アユタヤ王朝（一四〇七―一七六七）のころタイ民族舞踊劇の主題とされた。ラオスではパラパランという名で伝えられ、カンボジャではクメール語訳されてすでに六世紀の碑文にその名が記され、スーリヤヴァルマン王（一一世紀）建立のアンコールワット寺院の浮彫りにその主題があらわれている。ビルマでは『ラーマ・ヴァット

ゥ』(一一世紀ころ)、マレーシアでは『ヒヤーカット・セリ・ラーマ』、フィリッピンでは『マラディア・ラワナ』として伝えられている。スリーランカーには、インド・タミール伝本による『カムバラーマーヤナ』、カシュミールには『シュリーラーマーヴァターラ・チャリタ』、ネパールには『ラーマーシュヴァメーダ』がある。他方、この大叙事詩は北アジアにも伝えられ、敦煌出土のチベット語文書中にチベット訳の伝本があり、またモンゴル語訳も作られている。中央アジアからは中世北インドの伝本からのコータン語訳が発見され、西方ではサンスクリット本からのペルシャ語訳が作られた。日本へは叙事詩中の説話のいくつかが『六度集経』『雑宝蔵経』などを通して伝えられ、平安朝の『宝物集』に収められた。このように、『ラーマーヤナ』はアジア諸国にさまざまな形で伝えられ、それぞれの国に大きな影響を与えた。一九七五年にニューデリーで開かれた「アジアにおけるラーマーヤナの伝承に関する国際セミナー」は、このようなアジア諸国に伝えられている叙事詩の伝本、およびそれぞれの地域における文化的な影響をテーマとした国際会議である。この会議での研究報告は『アジアにおけるラーマーヤナの伝承』として公刊された(この中ではアジアの諸国の研究者の四四の論文が収められている)。

ラムバー　Rambhā　神々とアスラたちが乳海を攪拌したときに生れ出た美しいアプサラス。インドラ神がヴィシュヴァーミトラの修行を妨げるためにその傍らに送ったが、かえって聖仙の呪いをうけて一年のあいだ石にされていた。『ラーマーヤナ』によれば、ランカーの魔王ラーヴァナがカイラーサ山に行ったとき彼女を見た瞬間にその美しさのとりことなり、彼女がラーヴァナの兄弟クヴェーラの子ナラクーヴァラの妻であると言ったのにもかかわらず、力づくでラムバーを自分のものにした。

ラーメーシュヴァラム　Rāmeśvaram　「ラーマの主」の意味で、シヴァ神の一二大リンガの一つ、あるいは、インド最南端のマドゥライ東南のスリーランカーに向かって突き出している半島の先にあるシヴァのリンガを祀った聖なる島の聖地の名。ここは『ラーマーヤナ』の伝説では、ラーマがランカーに奪い去られた妻シーターをとりもどすために猿の英雄ナラの助力でランカーに橋を架けたところであり、島の北端にあるラーマスヴァーミー寺院には、ラーマが魔王ラーヴァナを滅ぼして戻った時に祀ったといわれるシヴァのリンガが安置されている。この島の東岸はベンガル湾とインド洋の海水が交わる神聖な場所とされ、ヒンドゥー教徒にとっては重要な沐浴の場である。ラーメーシュヴァラムは、ヒンドゥー教徒にとっては北インドのヴ

アーラーナシーに匹敵する南インド最大の聖地とされている。

ランカー　Laṅkā　現在のスリーランカーのことで、『ラーマーヤナ』では羅刹の王ラーヴァナの住む島とされる。同名の首都はクヴェーラの住居としてヴィシュヴァカルマンが造ったといわれる。『バーガヴァタ・プラーナ』では、この島はもとメール山の峰であったが、風神ヴァーユによって折り取られ、太洋の中に投げ込まれて出来あがったものともいわれる。

ランティデーヴァ　Rantideva　月種族のバラタ王から六代目に当る信心深く慈悲深い王。『マハーバーラタ』やプラーナによれば、彼は非常に富んでおり、二万人の料理人に何千頭の家畜を料理させる程であったという。

リシ　Ṛṣi　聖者、聖仙。元来はヴェーダの言葉が啓示された詩人のことをいい、一般的には修行の結果、宗教的に高い心境に達したものをいう。バラモン階級に属する聖者をブラフマルシといい、クシャトリヤ(王族)階級に属する聖者をラージャルシという。古くから七人の聖仙をまとめて述べることが行なわれ、七聖仙(サプタルシ)として、『シャタパタ・ブラーフマナ』では、ゴータマ、バラドヴァージャ、ヴィシュヴァーミトラ、ジャマダグニ、ヴァシシュタ、カシュヤパ、アトリの七人をあげている。『マハーバーラタ』では七聖仙として、マリーチ、アトリ、アンギラス、プラハ、クラトゥ、プラスティヤ、ヴァシシュタの名をあげ、『ヴァーユ・プラーナ』ではこれらにブリグを加えて八人の名をあげながらも七聖仙と述べている。『ヴィシュヌ・プラーナ』では、ブリグとダクシャを加えて九人のブラフマルシとしてまとめている。

リシケーシュ　Ṛṣikeś　「聖者の髪の毛」の意で、ハルドワールからガンジス河をさかのぼって約二五キロのところにある聖地。河の両岸はアーシュラマと呼ばれる行者の修行する道場が立ち並んだ聖者の町である。アーシュラマの中では、シヴァーナンダ(一八八七―一九六四)が建てたシヴァーナンダ・アーシュラマ、マハリシ・マヘーシュ・ヨーギーのアーシュラマ、カーンヴァ・リシ・アーシュラマなどが有名である。リシケーシュの寺院には、堂内に『バガヴァッド・ギーター』の全章を書きしるしたギーター寺院、バラタ王が修行したところといわれるバラタ寺院、サティヤ・ナラヤン寺院などがある。リシ(聖者)ケーシュ(髪の毛)という名の由来は、天上の河であったガンジス河がバギーラタの願いによって地上に流れ落ちたとき、シヴァ神がその髪の毛で受けとめて流したという伝説による。

リシャバ　Ṛṣabha　ナービとメールとの子で、一〇〇人の息子の父。その中の長子がバラタである。彼は自分の

王国を息子にゆずり、きびしい苦行者の生活に入った。プラーナでは、彼をジャイナ教の最初の祖師リシャバと混同している。

リシュヤシュリンガ　Ṛṣyaśṛṅga　「かもしかの角をもつもの」の意で、カシュヤパ仙と牝鹿とのあいだに生れた仙人。仏教文献では一角仙と呼ばれる。

『マハーバーラタ』(森林編)によれば、ある朝、カシュヤパ仙が川で口をすすいでいる時、美しい天女ウルヴァシーを見て思わず水の中に射精し、この水を飲んだ牝鹿が身ごもって男子を産んだ。額に一本の角があったのでリシュヤシュリンガと名づけた。この子は父親の庵で成長したために父親以外の人間を見たことがなく、女については全く無知であった。ある時、アンガ国の王ローマパーダの領土でインドラ神の怒りのため雨が降らず大旱魃となった。どうしたらよいかをバラモンたちに問うと、彼らは森の庵にいるリシュヤシュリンガをチャンパーの都に連れて来ることができれば雨が降るだろうと答えた。王の命令で一人の老女が美しい遊女たちを大勢連れてリシュヤシュリンガの住む庵に近づき、彼を誘惑し、ついにローマパーダの領内に連れて来ることに成功し、その結果として大雨が降り人々は生き返った。父カシュヤパ仙は怒って王を呪詛しようとしたが、王はさまざまな贈物をして聖仙をなだめ、リシュヤシュリンガを王女シャーンターと結婚させた。このリシュヤシュリンガ仙の説話は、ほぼ同様な形で『ラーマーヤナ』(少年編)、『パドマ・プラーナ』などにも見られる。

この説話は仏教説話にも取り入れられ広く展開された。まず南方上座部の系統に属する『ナリニカー・ジャータカ』(『ジャータカ』第五二六話)では、リシュヤシュリンガのパーリ語形のイシシンガが王女ナリニカーに誘惑される話となっている。昔、ブラフマダッタ王がカーシー国(現在のヴァーラーナシー)を治めていた頃、一人の苦行者がヒマラヤ山中で苦行をしていた。ある時、一匹の牝鹿が苦行者の小便をしたところへ来て水を飲んだが、そこに行者の精液が混っていたので身籠り、やがて行者の庵の傍で男子を産んだ。イシシンガと名づけられたこの子は苦行者の子として育てられ、自分も父と同じように苦行者となった。イシシンガの苦行は激しく続けられ、そのために天上のインドラ神の宮殿が震動した。そこで、インドラ神は三年のあいだカーシー国に一滴も雨を降らせず、イシシンガの苦行を妨げようとしたので、住人は困りはてた。カーシー王もどうしてよいかわからないままでいる時、インドラ神が夜中に現われ、「王女ナリニカーがイシシンガの苦行を妨げれば雨が降るであろう」と告げた。王の命令をうけた王女ナリニカーはイシシンガの住む庵に行き、苦行者の姿で中

に入って、ついに苦行者を誘惑することに成功する。ナリニカーが帰ったあと、父の忠告に従ってイシシンガの苦行は続けられたが、一時的に苦行が妨げられたことによってカーシー国に雨が降った。仏伝経典『マハーヴァストゥ』では、主人公の名はエーカ・シュリンガ(一本の角を持つもの)といわれ、その他『エーカシュリンガ・アヴァダーナ』など多くのサンスクリット仏教文学作品にとり入れられ、漢訳の経典を経て、日本の『今昔物語集』(巻五の四「一角仙人、女ヲ負ハレ、山ヨリ王城ニ来レルコト」)にとり入れられた(この説話のインド・中国・日本への展開については、岩本裕『仏教説話』筑摩書房　参照)。

リブ　Ṛbhu　ふつうリバヴァ Ṛbhava (リブたち) という複数形で表現される。『リグ・ヴェーダ』に出てくるリブクシャン(「リブたちの首長」の意)、ヴァージャ、ヴィブヴァンの三神の総称。彼らは他の神々と同じように、人々に富と活力を与え、子孫を繁栄させるほか、とくにすぐれた技術をもった巧みな工匠として知られる。アシュヴィン双神のために軽快な車をつくったのも彼らであり(一・一六一)、インドラのために二頭の栗毛の馬を作り(同)、ブリハスパティのためにヴィシュヴァ・ルーパーという牝牛を作ったのも彼らである。『リグ・ヴェーダ』における最高の技術者としてあがめられる工巧神(くぎょうしん)トヴァシュトリの作った杯(神々が神酒を飲むための器)を四個に作りかえた話は有名である。彼らはもともと人間であったが、その巧妙な技術によって神々の列に加えられ、神酒ソーマを飲んで不死の存在となった。彼らが年老いた両親を若返らせたこともよく知られている。神々の中ではインドラ神、サヴィトリ(激励の神・太陽神)との関係が深い。

「インドラのために、言葉に応じて〔車に〕繋がる二頭の栗毛の馬を、意〔思考力〕によりて造作したる彼ら〔リブ三神〕は、その努力のゆえに祭祀〔に参加する資格〕に到達せり(一・二〇・二)。彼らはナーサティア双神〔アシュヴィン双神〕のために、〔世界を〕周行する軽快なる車を造作せり。彼らは永久(とわ)に乳搾らしむる乳牛を造作せり(三)。その聖語の真実にして・心せば正直(せいちょく)なるリブたちは、勤労により両親を若返らせたり(四)。また汝らは、かの名高き・トゥヴァシュトリ神が新たに作りいだしたる杯を、四個に作りかえたり(六)。」

「汝らは霊感により、皮より牝牛を作りいだせり。汝らは老いゆく両〔親〕を若くなしたり。スダンヴァンの子らよ、一頭の馬よりさらに一頭の馬を造作せり。車を装いたるのち、汝らは神々に近づけり(一・一六一・七)。」

(辻直四郎訳)。

リチーカ　Ṛcīka　ブリグの子孫の聖者で、ウールヴァ

の息子。サティヤヴァティーの夫で、ジャマダグニの父。『マハーバーラタ』や『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、リチーカがカーニヤクブジャの王ガーディの娘サティヤヴァティーに結婚を申し入れたとき、すでに年老いていた。ガーディ王は自分の娘をこの老人に与えることに気のりせず、その条件として黒い耳を持つ一〇〇〇頭の白馬を要求した。リチーカはヴァルナ神に懇願してこれらの馬を用意し、サティヤヴァティーを妻とすることができた。『ラーマーヤナ』によれば、彼は息子シュナハシェーパを犠牲にささげるものとして売ったともいわれる。

リトゥパルナ　Ṛtuparṇa　日種族のイクシュヴァークの系統を引くサルヴァカーマの子で、アヨーディヤーの王。『マハーバーラタ』の伝説によれば、ニシャダの王ナラはダマヤンティーのもとを離れてから、深い森の中でナーガ（蛇）のカルコータカにかみつかれた。彼の顔色は蛇の毒のためまっ青になった。カルコータカは、それを着ると元の姿にもどることができる上着を彼に与えた。ナラ王はカルコータカの忠告によって、アヨーディヤーのリトゥパルナの宮殿に行き、王の御者となった。彼はそこで王の車を非常なスピードで馬に引かせる技術をマスターし、王の御者の長となった（森林編）。

リンガ　Linga　「しるし」の意で、男性のしるし、すなわち「男根」をあらわし、とくに男根として象徴されるシヴァ神をいう。インドの土着的な男根崇拝とシヴァ神の信仰が結びついたのは『マハーバーラタ』においてであるといわれる。寺院の中に祀られているリンガの彫像は、形状・用途によって多種であり、インド全土にわたって一二の大リンガといわれるものがある。㈠ソーマ・ナータ（月の王）。グジャラートに残るソームナート・パッタンにあったもので、ガズニーのムハムードによって破壊されたという。㈡マッリカールジュナ、あるいはシュリー・シャイラ。クリシュナー河の近くにある山の上にある。㈢ウッジャインのマハーカーラ、あるいはマハーカーレーシュヴァラ。㈣オームカーラ。ウッジャインにあったといわれる。㈤アマレーシュヴァラ（神中の神）。ウッジャイン。㈥ベンガルのデオガルフにあるヴァイディヤ・ナータ（医者の王）。㈦ラーメーシュヴァラム、あるいはラーメーシャ（ラーマの主）。タミールナドゥ洲のマドゥライの東南、スリー



一つの顔をもつムカ・リンガ

ランカーに向かってつき出ている半島の先にある聖なる島にあり、ラーマがスリーランカーの魔王ラーヴァナを倒して凱旋したときに建てたと伝えられる。㈧ビーマ・シャンカラ。ダークシニーにある。㈨ヴィシュヴェーシュヴァラ（万物の主）、ジョーティル・リンガムともいわれ、ヴァーラーナシーにある。㈩ゴーマティーの岸にあるトリヤムバカ、あるいはトリヤクシャ（三つの目をもつもの）。(十一)ガウタメーシャ（ガウタマの主）。(十二)ケーダーレーシャ、ケーダーラナータ。ウッタラプラデーシュ洲のヒマーラヤ山中のケーダールナートにある。

リンガの上部に神像の頭部を浮彫したものをムカ・リンガ（顔をもつリンガ）といい、その浮彫された神像頭部は一個のもの、二、四、五個のものとがある。

ルクミニー　Rukmiṇī　クリシュナの妻。ラクシュミー女神の化身であるとされる。かつてラクシュミー女神は、ブリグとその妻キヤーティとのあいだに生れ、次に神々とアスラが共同して霊水アムリタを求めて乳の海をかきまわしたとき、乳海の中より生れ、ヴィシュヌ神がアーディティヤとして生れるとラクシュミーは蓮華の中から生れ、ヴィシュヌ神がパラシュラーマとなるとラクシュミー女神は大地の女神となった。ヴィシュヌ神がラーマになると彼女はシーターとなり、クリシュナになるとその妻ルクミニーとなった（『ヴィシュヌ・プラーナ』一）。

『マハーバーラタ』の補遺の『ハリヴァンシャ』によれば、ルクミニーはヴィダルバ王ビーシュマカの娘として生れた。ルクミニーがクリシュナを恋するようになり、父王はこれを認めたが兄のルクミンは認めようとはせず、チェーディ国のシシュパーラ王と婚約させた。結婚式の準備が調い、アンガ、カリンガ、マーラヴァ、ケーカヤ、ヴァンガ、マガダ、コーサラ、サールヴァ、チョーラ、ケーララなどの諸国の王たちが列席している式場に、クリシュナがラーマとともに軍勢を連れて突入し、花嫁ルクミニーを奪った。兄のルクミンや諸侯は彼を追跡したがラーマに撃退され、シシュパーラは殺された（このような略奪婚をガン



カダムバの樹の下で寄りそう
クリシュナとルクミニー

ダルヴァ婚という)。クリシュナとルクミニーの結婚式はドヴァーラカーで行なわれ、両者のあいだにプラディユムナ、チャールデーシュナ、スデーシュナ、チャールデーハ、スチャール、バドラチャール、チャールチャンドラ、チャールバドラ、チャールの一〇人の息子が生れた。長子プラディユムナはのちにルクミンの娘と結婚したという。夫クリシュナの死後、ルクミニーはクリシュナの他の妻シャイビヤー、ガーンダーリー、ハイマヴァティー、ジャームバヴァティーとともに燃える火の中に身を投げた(『マハーバーラタ』棍棒戦編)。→クリシュナ

ルクミン　Rukmin　ヴィダルバ国のボージャカタ地方の王。ヴィダルバ王ビーシュマカの子で、クリシュナの妻となったルクミニーの兄。ビーシュマカ王は娘であるルクミニーをシシュパーラ王と婚約させ、まさに結婚式が始まろうとしていたとき、クリシュナがバララーマとともにそこにやって来てルクミニーを力づくで奪った。ルクミンは妹を奪い返すためにクリシュナと激しく戦ったが敗れ、妹のとりなしでかろうじて命を助けられた(『ハリヴァンシャ』)。クリシュナに敗れてから、ルクミンはクリシュナと和解しようとしたところ、これを知ったパーンドゥ側は彼を自分たちの宮殿に招いた。彼はパーンドゥの五王子の一人アルジュナが助けを求めるならば味方してもよいと答えたが、アルジュナは助けはいらないと言ったので、反対に敵のドゥリヨーダナの宮殿に行って味方することを申し入れた。しかし、ルクミンの日ごろの行動を知っているドゥリヨーダナは彼をうけいれなかった(『マハーバーラタ』戦争準備編)。

ルチ　Ruci　「光」「輝き」の意で、一〇人のプラジャーパティ(造物主)の一人。

ルドラ　Rudra　『リグ・ヴェーダ』の暴風神。暴風雨神群マルトの父。シヴァ神の前身。インドの伝承によれば、ルドラの名は動詞語根 rud (泣く、ほえる) に由来し、「咆吼するもの」の意味であり、その起源は強大な破壊力と大地に生物を育成させるモンスーンの力を神格化したものとされる。また、ルドラの起源をインドの民間信仰の中に求める説もある。『リグ・ヴェーダ』においては、ルドラは独立讃歌三編、そのほかに一部分がソーマに捧げられたもの一編、ソーマと共有するもの一編を持ち、全編を通じて七五回その名が記されているが、特に有力な神格ではない。ルドラは強健な身体をもち、赤褐色で金色に輝いている。黄金の装飾をつけ、武器として弓矢を持っている(二・三三、七・四六)。また、武器ヴァジュラを手に持つ者よ、と呼びかけられることもある。『アタルヴァ・ヴェーダ』では千の眼を持ち(一一・二)、黒い腹と赤い背中と青い首と頭

髪を持つとされる。彼は宇宙の主宰者、神々の世界とともに人間の世界の支配者といわれ、比べるもののない強力な破壊力を持ち、世界の野猪とも牡牛とも称される。暴風雨神群マルトの父とされ、ルドラの怒りと武器に対して人々がどのように恐れおののいたかが、多くの讃歌のなかに表明されている。しかし、これはルドラのもつ一面であり、その反面では彼のもつ医薬の力は人々に多くの恵みを与え、賢明で寛容な神として讃えられている。『リグ・ヴェーダ』においては、のちにこの神の通称となったシヴァ(吉祥な)という言葉は形容詞として一回現われるだけであるが、中期の古ウパニシャッドではシヴァという形容詞をともなったルドラがしばしば崇拝の対象とされている(『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』三・五―六、三・一一、四・一四など)。

　プラーナ文献では、ルドラはブラフマー神から生れたといわれる。プラーナの神話によれば、プラジャーパティの世界創造の前に、ブラフマー神はサナンダナ、サナカ、サナータナ、サナトクマーラの四神を創造していた。しかし、これらの四神は世俗的なことがらに関心をもたず、禁欲的で子孫を増やそうとはしなかった。これを知った創造神ブラフマーは三つの世界を破壊してしまうかと思うほど腹を立てた。このとき三界はブラフマー神の激怒の火によって真紅になった。この怒りでつりあがったブラフマーの眉のあいだから、真昼の大陽のようにまばゆく光る姿をしたものが生れた。それがルドラであった。荒れ狂うルドラの獰猛な身体の半分は男性であり、あとの半分は女性であった。ブラフマー神は「おまえの身体を分割せよ」といって姿をかくした。ルドラはすぐに自分自身を男と女の姿に分けた。彼は、さらに男性の身体を一一に分割した。これが一一のルドラといわれるもので、あるプラーナではマニユ、マヌ、マヒーナサ、マハーン、シヴァ、リトゥドヴァジャ、ウグラレータス、バヴァ、カーマ、ヴァーマデーヴァ、ドリタヴラタの名をあげ、また、他のプラーナはアジャ、エーカパーダ、アヒルブドニヤ、トゥヴァシュトリ、ルドラ、ハラ、シャムブ、トリヤムバカ、アパラージタ、イーシャーナ、トリブヴァナの一一をあげている。ブラフマー神は一一のルドラに心臓と五つの感覚器官と五つの行為器官の計一一のものを割当て、ルドラ自身には生命、地、水、火、風、空、太陽、月の八つを配当した。さらに女性の姿からは一一の女性の姿をしたルドラーニーが生れた。彼女たちはディー、ヴリッティ、ウシャナー、ウマー、ニユター、サルピス、イラー、アムビカー、イラーヴァティー、スダー、ディークシャーであり、それぞれ十一のルドラの妻になったという(『ヴィシュヌ・プラーナ』一・七)。

また、他のところでは次のようにいわれる。劫（カルパ）の初めのとき、ブラフマー神は自分に似た子供を得たいと思って苦行を行なったところ、彼のひざの上に青い顔色をした子供が現われ出た。この子は大声で叫びながらあちこち走りまわったので、ブラフマーが「おまえは何故叫んでいるのか」と尋ねると、彼は「私は名前が欲しい」と答えた。そこで、大声で叫んでいたことによってルドラ（叫ぶ者）という名を与えた。ルドラはさらに七回叫んだので七つの名が与えられた。それらの名とは、バヴァ、シャルヴァ、イーシャーナ、パシュパティ、ビーマ、ウグラ、マハーデーヴァである。こうして八ルドラとなった。ブラフマー神は彼らのそれぞれに地位と妻と子供を与えた。太陽・水・地・風・火・空・バラモン・月がそれぞれに割当てられ、スヴァルチャラー、ウシャー、ヴィケーシー、シヴァー、スヴァーハー、ディーシャー、ディークシャー、ローヒニーがそれぞれの妻となって、彼らの子孫でこの世界はいっぱいになったという（『ヴィシュヌ・プラーナ』一・八）。プラーナ文献では、ルドラはシヴァ神に関連して現われ、ついにはシヴァ神自身の言葉として「おお、ハリよ、私の化身であるルドラよ、災難のときには汝が崇拝をうけるべきである」（『シヴァ・プラーナ』三・一〇・一三）などと語られるように、ルドラとシヴァ神が同一視されるようになるのである。→シヴァ

ルドラークシャ　Rudrākṣa　「ルドラ（シヴァ）の眼」の意味で、シヴァ派で最も重視する植物。単にアクシャ Akṣa ともいい、学名は Elaeocarpus sphaericue、和名インドジュズノキ。あるいはジュズボダイジュ。仏教ではボダイジュの実で作った数珠が最高のものとされるが、実際にはインドボダイジュの種子では数珠は作れず、数珠を作るのは正しくはルドラークシャ（インドジュズノキ）の種子である。直径一・五〜二・〇センチの球形の実で、表面にある凹凸をそのまま磨いてまだらな杢目を出して数珠にする。ルドラークシャの種子には一ないし一二のムカ（顔）と呼ばれる面があり、その中で一つの面だけをもつ種子が最も重要で、これを所持するものは好運と富の女神ラクシ



ルドラークシャ樹。この実から数珠が作られる。

ュミーから、あるゆる現世の幸福を授けられるという。この種子には二一の面をもつものもあるというが、一般には五面のものが多く、二つの種子が一つにつながっているものはガウリー・シャンカラと呼ばれ、パールヴァティーとシヴァ神をあらわすという。『シヴァ・プラーナ』によれば、ルドラークシャの木はガウダ国（ベンガルの中央部と推定されている）に生い育ち、シヴァ神のお気に入りの木となり、あるゆる罪を除く力のある木であるという（一・二五・九―一〇）。ルドラークシャの種子一一〇〇個を身につければ、その人はルドラ（シヴァ）そのものの姿となり、その功徳は一〇〇年かかっても書き切れないともいわれる（同、二五・二四―二五）。もし一一〇〇個の実を身につけることができない場合には、髪の毛の束の上に一個、頭の上に三〇個、首の周りに五〇個、両腕に一七個づつ、手首に一二個、腰の部分に五〇〇個、聖なる糸に一〇八個をつけることによって、その人はルドラと同じ功徳をもつものとなり、すべての神々もその人をルドラと同じように崇拝するようになる。髪の毛の束に上に一個、頭の上に四〇個、首の周りに三二個、胸のところに一〇八個、両耳に六個づつ、両腕に一六個づつ、両手に一二、あるいは二四個づつをつけたものは、偉大なシヴァ信者とみなされる。一個あるいは数個のルドラークシャの実を身につけていただけでも大きな功徳があるといわれる（『シヴァ・プラーナ』一・二五・二九―三九）。一面のルドラークシャの種子はシヴァ神そのものであり、二面のものはイーシャー、四面はブラフマー神、五面はルドラ神、六面はカールッティケーヤ、七面はアナンガ、八面はヴァスムールティとバイラヴァ、九面はバイラヴァ、一〇面はジャナールダナ、一一面はルドラ、一二面はアーディティヤ、一三面はヴィシュヴェーデーヴァ、一四面は最高神シヴァをあらわす。これらのルドラークシャの実を身につけ、それぞれの面の数によって、シヴァ、イーシャーなどのマントラ（真言）をとなえることによって、偉大な功徳が生れるともいわれる（同、一・二五・六四―八一）。

ルドラーニー　Rudrāṇī　ルドラの妻。ブラーフマナでは、彼女は森の奥から出現して病気・恐怖・死をひき起こす残酷な女神としてえがかれている。後世の文献では、彼女はシヴァの神妃ドゥルガーと同一視される。

レーヴァー　Revā　カルナの妻の名。あるいは愛の神カーマの妻ラティの別名。

レーヴァタ　Revata　バララーマの妻レーヴァティーの父。アーナッタの子で、シャリャーティ王の祖父に当る。

レーヴァティー　Revatī　(一)バララーマの妻。クシャスタリー島の支配者レーヴァタの末娘。ブラフマー神の勧め

でバララーマと結婚した(『バーガヴァタ・プラーナ』一〇)。

㈡第五のマヌ期の時代の王ライヴァタの母。『マールカンデーヤ・プラーナ』の伝説によれば、レーヴァティー星の日に聖者リタヴァークに一人の男の子が生れた。しかし、この少年は日に日に邪悪な性格をあらわしていった。ガールギヤ仙から少年がレーヴァティー星の日に生れたことによって邪悪なのだということを聞いた父リタヴァークはレーヴァティー星を星座より蹴り落とした。その星の地上に落ちたところは湖となり、そこから美しい少女が生れた。聖者はこの娘を連れ帰って養育し、ヴィクラマシーラ王の息子ドゥルカマの妻に与えた。レーヴァティーの求めに応じて結婚式はレーヴァティー星の日に行なわれた。聖者はこの娘から生れる子供はマヌ期の王となるであろうという祝福を与え、これによって彼女からライヴァタ王が生れることになった。

㈢二十七星の一つ。

レーヴァンタ　Revanta　太陽神スーリヤとその妻サンジュニャーとのあいだの息子。サンジュニャーはマヌ、ヤマ、ヤミーの三子を産んだが、夫スーリヤの光があまりにもまぶしすぎたので、夫のもとをのがれて森に入り苦行をしていた。彼女の侍女のチャーヤー(「影」の意)が彼女の代理をつとめ、スーリヤとのあいだにシャナイシュチャラ、マヌ、タパティーの三子をもうけた。スーリヤは牡馬の姿となり森の中に入って雌馬の姿で修行しているサンジュニャーとともに暮らし、その時、アシュヴィン双神とレーヴァンタが生れたという(『ヴィシュヌ・プラーナ』三)。レーヴァンタの信仰はベルガル地方に起源をもつと見られており、馬と狩猟とに関係があるといわれている。↓スーリヤ、サンジュニャー

レーヌカー　Reṇukā　プラセーナジット王の娘で、ジャマダグニの妻。パラシュラーマの母。プラーナの伝説によれば、パラシュラーマが一四歳になったときのこと、ジャマダグニが森に木の実や草の根を取りに行っているあいだに、レーヌカーは一人でナルマダー河に水を汲みに行った。河に着くと、そこでカールタヴィールヤールジュナとその妻たちが遊びたわむれていたので、彼らが立ち去るまで彼女はしばらく待ってから水を汲もうとしたが、そこの水は彼らのために濁っていた。そこで、少し東の方に行くと、そこでもサールヴァ王のチトララタが妻とたわむれていた。彼らの姿が余りにも美しかったのでレーヌカーはしばらくの間見とれていた。気がついて彼女が水を汲んで急いで家に戻ると、ずっと前に帰っていたジャマダグニが疲れと空腹にいらいらしながら待っていた。彼女から遅くなった訳を聞き、ジャマダグニは怒り心頭に発して息子達を呼び、彼女を殺すよう命じた。しかし、下の四人は女を殺すと大罪となると言って、自分たちの母親を殺すことを嫌がった。しかし、パラシュラーマは父の命に従って母の首を切り落とした。ジャマダグニは命令に背いた四人の息子に森の住人となっていつまでも森に住むようにと呪いをかけた。しかし、父の命令とはいえ、母を殺したパラシュラーマは悲しみにくれ、卒倒した。怒りがおさまり、正気にもどった父はパラシュラーマをひざの上にのせ、何でも願いをかなえてやろうと言った。息子は母親の生命をよみがえらせてほしいと言うと、ジャマダグニは大いによろこび、レーヌカーの生命をよみがえらせた。(『ブラフマーンダ・プラーナ』六〇)。

ローカパーラ　Lokapāla　「世界を守る者」の意で、護世神。『アタルヴァ・ヴェーダ』(三・二七)ではアグニ(東)、インドラ(南)、ヴァルナ(西)、ソーマ(北)などをあげ、『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』(三・九・二九)ではスーリヤ(東)、ヤマ(南)、ヴァルナ(西)、ソーマ(北)、アグニ(上)の名を記している。『マヌ法典』や『マハーバーラタ』では、クヴェーラ(北)、ヴァルナ(西)、インドラ(東)、ヤマ(南)、ヴァーユ、あるいはマルト(北西)、ソーマ、あるいはイーシャーナ(北東)、ニルリッテイ、あるいはスーリヤ(南西)、アグニ(南東)の八守護神をあげている。『マハーバーラタ』(ビーシュマ編、ドローナ編)によれば、それぞれの守護神は、同じくローカパーラと呼ばれる雄象に乗っている。インドラの象はアイラーヴァタ、あるいはアブラマータンガと呼ばれ、アグニのそれはプンダリーカ、ヤマのそれはヴァーマナ、スーリヤのそれはクムダ、ヴァルナのそれはアンジャナ、ヴァーユのそれはプシュパダンタ、クヴェーラのそれはサールヴァバウマ、ソーマのそれはスプラティーカという名であるという。仏教では、ドリタラーシュトラ(持国天)、ヴィルーダカ(増長天)、ヴィルーパクシャ(広目天)、ヴァイシュラヴァナ(多聞天)の四天王が、それぞれ東方、南方、西方、北方を守護するという。

ローダシー　Rodasī　ヴェーダの女神。ルドラの妻としての電光を神格化したもの。彼女は不死であり、マルト神群の母といわれる(『リグ・ヴェーダ』一・一六七)。

ローパームドラー　Lopāmudrā　ヴェーダの聖者アガスティヤの妻(『リグ・ヴェーダ』一・一七九)。『マハーバーラタ』の伝説によれば、アガスティヤ仙はさまざまな動物の美しい部分を使ってローパームドラーをつくりあげ、彼女が成長すると自分の妻としたという。

ローヒタ　Rohita　「赤」の意で、太陽の馬、火の馬。『アタルヴァ・ヴェーダ』では太陽、あるいは火の姿を神

格化したもの。また、ハリシュチャンドラ王の息子もローヒタ、あるいはローヒタ・アシュヴァ（赤色の馬）と呼ばれる。

ローヒニー Rohiṇī ㈠ヤーダヴァ族のマトゥラー王カンサの大臣ヴァスデーヴァの妻の一人。ヴァスデーヴァはもう一人の妻デーヴァキーとのあいだに八人の子供をもうけたが、デーヴァキーの子供の一人に殺されるという予言をうけていたカンサ王に六人までを殺され、第七子バララーマは生れる前にデーヴァキーの胎内よりローヒニーの胎内に移しかえられて無事出生した。ローヒニーはダールカという名の使者から、ヤーダヴァ族の人々がドヴァーラカーで全滅したという知らせを聞き、ヴァスデーヴァ、デーヴァキーとともに悲しみの余り世を去ったという（『バーガヴァタ・プラーナ』一一）。→バララーマ

㈡牛の産みの母。プラジャーパティ・カシュヤパはダクシャの第七番目の娘スラビと結婚して二人の娘ローヒニーとガンダルヴィーをもうけた。のちにローヒニーからは牛たちが生れ、ガンダルヴィーからは馬が生れ出た（『ラーマーヤナ』森林編）。ローヒニーからは二人の娘ヴィマラーとアナラーが生れ、この二人の娘から家畜が生れたともいわれる（『マハーバーラタ』集会編）。

㈢月の神チャンドラの妻の一人。

補遺

ウッタラー Uttarā マツヤ王ヴィラータの娘で、パーンドゥの第三王子アルジュナの妻となって、パリークシットを産んだ。→アルジュナ、パリークシット

サティー Satī ダクシャの娘であるところからダークシャーヤニーと呼ばれる。シヴァ神の最初の妻。ダクシャがシヴァ神を尊敬せず、彼が主催する供儀祭にシヴァ神を招かなかったことなどが原因で、サティーは供犠の火に身を投じて死んだ。シヴァ神の妻ウマー、パールヴァティーは彼女の生れかわりであるとされる。『デーヴィーバーガヴアタ』によれば、愛妻サティーの死によって悲しみと怒りに耐え切れなくなったシヴァ神は、妻の遺体を抱いて世界中を放浪した。ついに神々は遺体をばらばらに破砕することにし、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シャニが遺体に入りこんでばらばらにしたという。タントラ文献によれば、このときサティーの遺体の一部がまき散らされたところがピータ・スターナとよばれる女神の聖地となり、その数は四つとも、五一とも一〇八ともいわれる。→シヴァ、ダクシャ

シーラヴァティー Śīlavatī ウグラシュラヴァスの妻で、プラーナ文献に登場する女性の中で、最も夫に対する貞節心をもった女性といわれる。→アトリ

シャクンタラー Śakuntalā ヴィシュヴァーミトラと天界の水の精女アプサラスのメーナーとのあいだに生れた娘で、月種族のドゥシュマンタ（ドゥシュヤンタ）の妻。ヴィシュヴァーミトラがヒマーラヤ山中のマーリニー河の岸辺で苦行をしていたとき、インドラは彼の力が強大になることを恐れて、美しいアプサラスのメーナーに苦行の邪魔をさせようとした。彼女はインドラに命じられたとおりにヴィシュヴァーミトラを誘惑し、たちまち身ごもった。やがて一人の女の子が生れたが、彼女はその子をマーリニー河の岸辺に棄てて、天界へ帰ってしまった。岸辺に棄てられた赤子のそばに鳥（シャクンタ）たちが集まって来て面倒を見た。そこに聖仙カヌヴァが通りかかり、自分の草庵に連れ帰って育てた。この女児は鳥たちが面倒を見ていたというところからシャクンタラーと名づけられた。成長したシャクンタラーは月種族のドゥシュマンタ（ドゥシュヤンタ）王の妻となり、バラタを産んだ。シャクンタラーとドゥシュマンタ王の物語のあらすじは、『マハーバーラタ』中で語られているものと、カーリダーサの『アビジュ

ニャーナ・シャクンタラー』とに大別される。

スヴァヤムブヴァ　Svayambhuva　正しくはスヴァーヤムブヴァといい、「スヴァヤムブー（ブラフマー神）から生れたもの」の意味で、プラーナ文献では人間の始祖とされる一四人のマヌの中の最初のマヌをいう。ふつうスヴァヤムブヴァ・マヌといわれる。↓マヌ

スカニヤー　Sukanyā　年老いたチヤヴァナ仙の妻。聖仙サリヤータの娘（『シャタパタ・ブラーフマナ』）とも、シャリヤーティ王の娘（『マハーバーラタ』森林編）ともいわれる。↓アシュヴィン双神、チヤヴァナ

ダヌ　Danu　ダクシャの娘で、プラジャーパティ（造物主）の首長カシュヤパの妻となって、ヴィプラチッティ、シャムバラ、ナムチ、プローマン、アシローマン、エーカチャクラ、ニクムバなど一〇〇人のダーナヴァ（魔神）を産んだ（『マハーバーラタ』初編）。

ディティ　Diti　ダクシャの一三人の娘の一人で、姉妹たちとともにプラジャーパティ（造物主）の首長カシュヤパ仙の妻となり、ヒラニヤカシプ、ヒラニヤークシャ、シューラパドマ、シンハヴァクトラ、ターラカースラ、ゴームカ、アジャームカ、シンヒカーなどのダイティヤ（魔神）、アスラたちを産んだ。彼らの中で最も有力なのはヒラニヤカシプ、ヒラニヤークシャである。ダイティヤはディティの子孫の魔族の総称。

マリーチ　Marīci　マリーチには数人の妻がいたが、プラジャーパティ（造物主）カルダマの娘カラーとのあいだに、プラジャーパティ中の首長といわれるカシュヤパとプールニマンが生れ、別の妻ウールナーとのあいだには六人の息子が生れた。彼らはブラフマー神の呪いによって、初めはダイティヤのヒラニヤカシプの子として生れ、次にマトゥラー王カンサの大臣ヴァスデーヴァとその妻デーヴァキーの息子として生れるように定められた。第七子バララーマ、第八子クリシュナが生れる前に、悪王カンサによって次々に殺されたのは、マリーチとウールナーとのあいだに生れた六人の息子の生れかわりであったといわれる。

参考文献

本辞典作成にあたって参照した文献のうちの主要なものに限り、雑誌論文は省いた。原典類については現在容易に利用できる主な翻訳のみにとどめた。

I　神話・伝説に直接関係するもの

Garrett, J.; A Classical Dictionary of India. Illustrated of the Mythology, Philosophy, Literature, Antiquities, Arts, Manners, Customs of the Hindus. Delhi, n.d.

Dowson, J.; Classical Dictionary of Hindu Mythology and Religion, Geography, History and Literature. London, 1961.

Mani, V.; Purāṇic Encyclopaedia. A Comprehensive Dictionary and Purāṇic Literature. Delhi, 1964.

Bhattachary, S.; A Dictionary of Indian History. N.Y., 1967.

Walker, B.; Hindu World. 2 vols. London, 1968.

Stutley, Margaret; A Dictionary of Hinduism. London, 1977.

Ramakrishna, G., Gayatri, N., Chattopadhyaya, D.; An Encyclopaedia of Southern Indian Culture. Calcutta, 1983.

*

Ŝābda-kalpadruma, 5vols. Delhi, 1961.

Sörensen, S.; An Index to the Names in the Mahabharata. Delhi, 1963.

Rai, R.; Mahābhārata-Kosha, 2 vols. Varanasi, 1964.

Rai, R.; Vālmikirāmāyaṇa-Kosha, Varanasi, 1965.

Macdonell, A.A.; Vedic Index of Names and Subjects, 2 vols. Delhi, 1967.

*

Baileys; The Mythology of Brahma. Delhi, 1983.

Bakşi, D.N.; Divinities in Japanese Buddhist Pantheon. Calcutta, 1979.

Coburn, T.B.; Devīmāhātmya. The Crystalization of the Goddess Tradition. Delhi, 1984.

Dange, S.A.; Legends in the Mahābharata. Bombay, 1969.

Das, R.K.; Legends of Jagannath Puri. Bhadrak, 1978.

Detmold,G. & Rubel, M.; The Gods and Goddesses, Nepal. Kathmandu, 1979.
Edwardes, M.; Everyday Life in early India. N.Y. 1960.
Getty, A.; Gaṇeśa. New Delhi, 1971.
Ghurye, G.S.; Gods and Men. Bombay, 1962.
Hazra, R.C.; Studies in the Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs, Delhi, 1975.
Hillebrandt, A. Translated by Sharma, R.S.; Vedic Mythology, 2vols. 1980.
Hopkins, E.W.; Epic Mythology. Varanasi, 1968.
Khan, M.Z.; Sarasvati in Sanskrit Literature. Delhi, 1978.
Macdonell, A.A.; The Vedic Mythology. Varanasi, 1963.
Martin, R.E.O.; The Gods of India. Delhi, 1972.
Mathothn; The Development of the Concept of Trimūrti in Hinduism. Palai, Kerala. 1974.
Mitchner, J.E.; Traditions of the Seven Rishis. Delhi, 1982.
Sarkar, A.; Śiva in Medieval Indian Literature. Calcutta, 1974.
Sastri, H.K.; South Indian Images of Gods and Goddesses. Delhi, 1974.
Sircar, D.C.; Studies in the Religious Life of Ancient and Medieval India. Delhi, 1971.
Sivaramamurti, C.; Śrī Lakṣmī in Indian Art and Thought. New Delhi, 1982.
Thomas, P.; Festivals and Holidays of India. Bombay, 1971.
do; Epics, Myths and Legends of India. Bombay, 1973.
do; Hindu Religion, Customs and Manners. Bombay, 1975.
Vassilis G.; Hindu Epics, Myths and Legends in Popular Illustrations. Bombay, 1977.
Wilkins, W.J.; Hindu Mythology, Vedic and Purānic. Delhi, 1970.

*

上西洞学人『神様の戸籍調べ』(三松堂書店　一九一九年)
藤沢衛彦『印度の伝説』(大東出版社　一九四二年)
井原徹山『印度教』(大東出版社　一九四三年)
ウルセル・P・M、モラン・L、美田稔訳『インドの神話』(みすず書房　一九六三年)
ヴィンテルニッツ、中野義照訳『ヴェーダの文学』(高野山大学　一九六四年)
同『叙事詩とプラーナ』(同　一九六五年)

同『インドの純文学』(同　一九六六年)
辻直四郎『インド文明の曙』(岩波新書　一九六七年)
山崎利男『神秘と現実』(淡交社　一九六九年)
辻直四郎『古代インドの説話』(春秋社　一九七八年)
岩本裕『仏教説話の源流と展開』(開明書院　一九七八年)
佐藤任『密教の神々』(平河出版　一九七九年)
立川武蔵・石黒淳・菱田邦男・島岩『ヒンドゥーの神々』(せりか書房　一九八〇年)
佐藤任『悲しき阿修羅』(平河出版　一九八一年)
ルヌー・L、フィリオザ・J、山本智教訳『インド学大事典』ヴェーダ編(金花舎　一九八一年)
同『インド学大事典』バラモン編(同)
上村勝彦『インド神話』(東京書籍　一九八二年)

II　叙事詩・プラーナ、ヒンドゥー教一般に関するもの

Agrawara, P.K.; Goddesses in Ancient India. Delhi, 1984.
Anderson, M.M.; The Festivals of Nepal. London, 1977.
Basham, A.C.; The Wonder that was India. N.Y., 1959.
Bhandarkar, R.G.; Vaiṣṇavism, Śaivism and Minor Religious systems. Poona, 1959.
Bhattacharya, N.; Indian Mother Goddess. Calcutta, 1971.
Berier, R.M.; The Temples of Nepal. New Delhi, 1978.
Deshpande, C.R.; Transmission of the Mahābhārata Tradition. Calcutta, 1978.
Detmold, G. and Rubel, M.; The Gods and Goddesses of Nepal. Kathmandu, 1979.
Farquhar, J.N.; An outline of the Religious Literature of India. Bombay, 1920.
Fergusson, J. & Burgess, J.; The Cave Temples of India. Delhi, 1969.
do.; The Crown of Hinduism. New Delhi, 1971.
Ghurye, G.S.; The Legacy of the Rāmāyaṇa. Bombay, 1979.
Gonda, J.; Aspects of Early Viṣṇuism. Delhi, 1969.
do.; Viṣṇuism and Śaivism, A comparison. New Delhi, 1976.
Gyani, S.D.; Agni-purāṇa. A Study. Varanasi, 1964.
Jaiswal, S.; The Origin and Development of Vaisnavism. Delhi, 1967.
Jayal, S.; The Status of Women in the Epics. Delhi, 1966.
Johnson, Donald & Jean; God and Gods in Hinduism. Delhi, 1972.
Kairrāja, M.G.; Philosophy of Gorakṣanath. Delhi, 1983.

Khan, B.; The Concept of Dharma in Vālmīki Rāmāyaṇa. Delhi, 1965.
Kosambi, D.D.; Myth and Reality. Bombay, 1962.
Kramrisch, S.; The Hindu Temple. 2 vols. Delhi, 1976.
Macnicol, N.; Indian Theism. Delhi, 1968.
Majupuria, T.C.; Glimpses of Nepal. Jullundur, 1979.
do.; Nepal. The Land of Festivals. New Delhi, 1981.
Mehta, R.J.; Konarak. The Sun-Temple of Love. Bombay, 1969.
Michell, G.; The Hindu Temple. London, 1977.
Nandimath, S.C.; A Handbook of Viraśaivism. Delhi, 1979.
Pandey, L.P.; Sun-worship in Ancient India. Delhi, 1971.
Pushpendra, K.; Śakti Cult in Ancient India. Varanasi, 1974.
Raghavan, V.ed.; The Rāmāyana Tradition in Asia. Bombay, 1980.
Randhawa, M.S.; The Cult of trees and treeworship in Buddhist-Hindu Sculpture. New Delhi, 1964.
Roy, S.B.; Date of Mahābhārata Battle. New Delhi, 1976.
Sankalia, H.D.; The Rāmāyaṇa in Historical Perspective. Delhi, 1982.
Sastri, K.A.N.; A History of South India. Madras, 1966.
Sharma, R.; A Socio-political Study of the Vālmīki-rāmāyaṇa. Delhi, 1971.
Sinha, N.K.P.; Political Ideas and Ideals in the Mahābhārata. New Delhi, 1976.
Sinha, J.P.; The Mahābhārata. A Critical Study. New Delhi, 1977.
Sinha, B.C.; Tree Worship in Ancient India. New Delhi, 1979.
do.; Serpent Worship in Ancient India. New Delhi, 1979.
Sircar, D.C.; The Śakti Cult and Tārā. Calcutta, 1967.
Wilson, H.H.; Religious Sects of the Hindus. Delhi, 1972.

*

Prater, S.H.; The book of Indian Animals. Bombay, 1971.
Ali, S.; The book of Indian Birds. Bombay, 1977.
Majumdar, B.; Kṛṣṇa in History and Legend. Calcutta, 1969.
Majupuria, T.C.; Sacred and Useful Plants & Trees. Kathmandu, 1978.
McCann, C.; 100 Beautiful Trees of India. Bombay, 1966.
Cowen, D.V.; Flowering Trees and Shrubs in India.

Bombay, 1970.

*

和久博隆編『仏教植物辞典』（国書刊行会　一九七九年）
満久崇麿『仏典の植物』（八坂書房　一九七七年）

*

金岡秀友『インド哲学史概説』（佼成出版社　一九七九年）
金倉円照『印度古代精神史』（岩波書店　一九四八年）
同『印度中世精神史』上・中（岩波書店　一九四九、一九六二年）
坂井尚夫『インドの宗教』（山喜房仏書林　一九五六年）
菅沼晃『ヒンドゥー教―その現象と思想―』（評論社　一九七六年）
田中於莵弥・坂田貞二『インドの文学』（ピタカ　一九七八年）
辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』（創元社　一九五三年）
同『サンスクリット文学史』（岩波書店　一九七三年）
土井・黒柳編『アジア仏教史・インド編Ⅴ』（佼成出版社　一九七三年）
中村元『インド思想史』（岩波書店　一九五六年）
同『ヒンドゥー教史』（山川出版社　一九七九年）
原実『古典インドの苦行』（春秋社　一九七九年）
マクドネル、木村俊彦訳『サンスクリット文学史』（山喜房仏書林　一九七五年）
ルイ・ルヌー、渡辺・美田訳『インド教』（白水社クセジュ文庫　一九六〇年）
斉藤昭俊『インドの民族宗教』（吉川弘文館　一九八四年）

*

中村元・山田統編『世界思想教養辞典』日本東洋編（東京堂出版　一九六五年）
武石・菅沼編『仏教文学辞典』（東京堂出版　一九八〇年）

Ⅲ　神話・伝説に直接関係ある原典の翻訳

Bhaktivedāntaswāmi, A.C.; Śrīmad Bhāgavatam. 3 vols. Delhi, 1962.
Buitenem, J.A.B.; The Mahābhārata. Chicago. vol.1. 1973. vol.2. 1975. vol.3. 1978.
do.; The Bhagavadgītā in the Mahābhārata. Chicago, 1981.
Dutt, R.C.; The Rāmāyaṇa and the Mahābhārata. Everyman's Library. No. 403. London, 1955.
Dutt, M.N.; Mahānirvāṇatantram. Varanasi, 1979.
Edgerton, F.; The Bhagavadgītā. 2 vols. London, 1952.
Eggeling, J.; The Śatapatha Brāhmaṇa 5 vols. SBE, 12,

26,41,43,44.
Growse, F.S.; The Rāmāyaṇa of Tulasīdāsa. Delhi, 1978.
Lal, P.; The Mahābhārata of Vyāsa. Delhi, 1980.
Macdonell, A.A.; the Bṛhaddevatā, 2 vols. HOS. Rep. Delhi, 1965.
Macnicol, N.; Hindu Scriptures. Everyman's Library No. 944. London, 1957.
Narayan, R.K.; The Mahābhārata. Delhi, 1978.
Radhakrisham, S.; The Bhagavadgītā. London, 1948.
Rajagopalachari, C.; Mahābhārata. Bhavan's Book University. Bombay, 1983.
do: Rāmāyaṇa. 〃 Bombay, 1983.
Rai Bahadur Lala Baij Nath; The Adhyātma Rāmāyaṇa. New Delhi, 1979.
Ras, C.V.S.; Mahābhārata (A bridged) Bangalore, 1956.
Roy, P.C.; The Mahābhārata, Translated into English prose, 12 vols. Calcutta, n.d.
Sanyal, J.M.; The Śrimad-Bhāgavatam of Krishna-Dwaipāyana Vyāsa, 5 vols. Calcutta, 1957.
Saloman, R.; The Bridge to the three Holy Cities, Delhi, 1984.
Sen, M.L.; The Rāmāyaṇa. A Modernized Version in English Prose, 3 vols. Calcutta, 1927.
Shastri, H.P.; The Rāmāyaṇa of Vālmiki, 3 vols. London, 1962.
Shastri, M.N.D.; Agni Purāṇa. A prose English Translation, 2 vols. Varaṇasi, 1967.
Shastri, L. ed.; Ancient Indian Tradition and Mythology.
No.1-4 The Śiva-purāṇa, 4 vols. 1970.
No.5-6 The Liṅga-purāṇa, 2 vols. 1973.
No.7-11 Bhāgavata-purāṇa, 5 vols. 1976.
No.12-14 Garuḍa-purāna, 3 vols. 1978.
No.15-19 Nārada-purāṇa, 5 vols. 1981-82.
No.20-21 Kūrma-purāṇa, 2 vols. 1982.
No.22-26 Brahmāṇḍa-purāṇa, 5vols. 1983-84.
Shastri, M.N.D.; Agni-purāṇa, 2 vols. Varanasi, 1967.
Singh, J.; Śiva-sūtras. Delhi, 1979.
Wilson, H.N.; The Viṣṇu Purāṇa. A Stystem of Hindu Mythology and Tradition. Indian Edition Varanasi, 1967.
Wilson, F.; The Love of Kṛṣṇa. Pennsylvania, 1975.

*

池田澄達『マハーバーラタとラーマーヤナ』(日本評論社　一九四四年)

岩本裕訳『ラーマーヤナ』I、(平凡社・東洋文庫　一九八〇年)
同『カター・サリット・サーガラ』(岩波文庫　全四冊　一九五四年)
同『カーマ・スートラ』(杜陵書院　一九四九年)
金倉・北川訳『ヒトーパデーシャ』(岩波文庫　一九六八年)
上村勝彦訳『屍死鬼二十五話』(平凡社　一九七八年)
佐保田鶴治訳『ウパニシャッド』(平河出版社　一九七九年)
田中於菟弥『インド民話集』(ピタカ　一九七八年)
同『インド説話集』(同　一九七八年)
田中於菟弥訳『鸚鵡七十話』(平凡社　一九六三年)
田中・上村訳『パンチャタントラ』(大日本絵画　一九八〇年)
辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』(岩波文庫　一九七〇年)
同『アタルヴァ・ヴェーダ讃歌』(岩波文庫　一九七九年)
同『バガヴァッド・ギーター』(講談社　一九八〇年)
同『シャクンタラー』(岩波文庫　一九七七年)
辻直四郎編『ヴェーダ・アヴェスター』(世界古典文学全集3　筑摩書房　一九六七年)
辻・前田・田中他『インド集』(世界文学大系4　筑摩書房　一九五九年)
田辺繁子訳『マヌの法典』(岩波文庫　一九五三年)
中野義照訳『マヌ法典』(高野山大学　一九五一年)
長尾雅人編『バラモン教典・原始仏典』(中央公論社　一九六九年)
藤谷政躬・姚田圭子訳『ナラ王物語』(たまいらぼ　一九八三年)
菅沼晃『サンスクリット講読・インド思想編』(平河出版　一九八六年)
Goldman, R.P.; The Rāmāyaṇa of Vālmīki. Princeton University Press. vol. 1. 1984, vol. 2. 1986.
Hawley, J.S.; At Play with Krishna. Princeton University Press. 1985.
ひろさちや編『仏教とインドの神々』(世界聖典刊行会　一九八四年)
Stutley, M.; The Illustrated Dictionary of Hindu Iconography. London, 1985.
Kinslay, D.; Hindu Goddesses, London, 1986.
Hawley, J.S. & Wulff, D.M. ed.; The Divine Consert. Delhi, 1984.
Coburn, T.B.; Devi-Māhātmya. Delhi, 1984.

インドの主要な古典

一、ヴェーダ　Veda

紀元前一五〇〇年ころインドの西北部パンジャーブ地方へ侵入したインドアーリヤ人の宗教・バラモン教の根本聖典。文献的には、サンヒター Saṃhitā（本集、マントラ、すなわち讃歌・祭詞・呪法用の讃歌をふくむ基本的な部分）、ブラーフマナ Brāhmaṇa（梵書、サンヒターに附随して祭祀の説明を主体とする散文の部分）、アーラニヤカ Āraṇyaka（森林書、森林のなかで伝授すべき秘義・秘法を説く部分）、ウパニシャッド Upaniṣad（奥義書、世界をアートマン＝ブラフマンの一元によってとらえようとする哲学的部分）の四部分となる。

㈠サンヒター　祭祀との関係で四種に分類される。

(1)『リグ・ヴェーダ』Ṛgveda（神々を祭場に勧請し、讃歌をとなえるホートリ hotṛ 祭官に属するもので、一〇巻、一〇一七の讃歌に補遺歌一一を加えて合計一〇二八の讃歌より成る）。

(2)『サーマ・ヴェーダ』Sāmaveda（祭式のあいだに行なわれる歌詠を司るウドガートリ udgātṛ 祭官に属するもの）。

(3)『ヤジュル・ヴェーダ』Yajurveda（祭式の庶務を担当するアドヴァリユ adhvaryu 祭官に属するもの）。

(4)『アタルヴァ・ヴェーダ』Atharvaveda（本来は呪法についてのものであったが、後に内容が追加されて祭式全体を総監するブラフマン祭官に属するものとされた）。

㈡ブラーフマナ　本来祭式の説明を目的とするもので、讃歌・祭詞の意義、祭式の順序、方法などを内容とするが、とくに初めの二書は神話・伝説を多く含んでいる。

(1)『シャタパタ・ブラーフマナ』Śatapatha-brāhmaṇa（白ヤジュル・ヴェーダ所属）。

(2)『ジャイミニーヤ・ブラーフマナ』Jaiminiya-brāhmaṇa（サーマ・ヴェーダ所属）。

(3)『アイタレーヤ・ブラーフマナ』Aitareya-brāhmaṇa（リグ・ヴェーダ所属）。

(4)『カウシータキ・ブラーフマナ』Kauṣītaki-brāhmaṇa（リグ・ヴェーダ所属）。

(5)『パンチャヴィンシャティ・ブラーフマナ』Pañcaviṃśati-brāhmaṇa（サーマヴェーダ所属）。

(6)『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』Taittirīya-brāh

maṇa（黒ヤジュル・ヴェーダ所属）。

㈢アーラニヤカ　ブラーフマナとウパニシャッドとの中間的存在で、祭式とともに哲学的内容を含んでいる。

(1)『アイタレーヤ・アーラニヤカ』Aitareya-āraṇyaka『シャーンカーヤナ・アーラニヤカ』Śāṅkhāyana-āraṇyaka（リグ・ヴェーダ所属）。

(2)『タイッティリーヤ・アーラニヤカ』Taittirīya-āraṇyaka（黒ヤジュル・ヴェーダ所属）。

㈣ウパニシャッド　古ウパニシャッドと新ウパニシャッドに大別され、古ウパニシャッドは内容・形式から一般に三期に分類される。新ウパニシャッドは内容の上から通常五群に分けられる（以下の分類は辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』による）。

〔古ウパニシャッド〕

A、古散文ウパニシャッド

(1)『ブリハドアーラニヤカ・ウパニシャッド』Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad（白ヤジュル・ヴェーダ所属）。

(2)『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』Chāndogya-up.（サーマ・ヴェーダ所属）

(3)『カウシータキ・ウパニシャッド』Kauṣītaki-up.（リグ・ヴェーダ所属）。

(4)『アイタレーヤ・ウパニシャッド』Aitareya-up.（リグ・ヴェーダ所属）。

(5)『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』Taittirīya-up.（黒ヤジュル・ヴェーダ所属）。

B、韻文ウパニシャッド

(6)『ケーナ・ウパニシャッド』Kena-up.（サーマ・ヴェーダ所属）。

(7)『イーシャー・ウパニシャッド』Īśā-up.（白ヤジュル・ヴェーダ所属）。

(8)『カタ（あるいはカータカ）・ウパニシャッド』Kaṭha (Kāṭhaka)-up.（黒ヤジュル・ヴェーダ所属）。

(9)『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』Śvetāśvatara-up.（黒ヤジュル・ヴェーダ所属）。

(10)『ムンダカ・ウパニシャッド』Muṇḍaka-up.（アタルヴァ・ヴェーダ所属）。

(11)『マハーナーラーヤナ・ウパニシャッド』Mahānārāyaṇa-up.（黒ヤジュル・ヴェーダ所属）。

C、新散文ウパニシャッド

(12)『プラシュナ・ウパニシャッド』Praśna-up.（アタルヴァ・ヴェーダ所属）。

(13)『マーンドゥーキヤ・ウパニシャッド』Māṇḍūkya-up.（アタルヴァ・ヴェーダ所属）。

(14)『マイトリ・ウパニシャッド』Maitri-up.（黒ヤジュ

ル・ヴェーダ所属)。

D、二〇世紀になって原典の発表されたもの。

(15)『チャーガレーヤ・ウパニシャッド』Chāgaleya-up.(ヤジュル・ヴェーダ所属)。

(16)『バーシュカラマントラ・ウパニシャッド』Bāṣkaramantra-up.(リグ・ヴェーダ所属)。

(17)『アールシェーヤ・ウパニシャッド』Ārṣeya-up.(アタルヴァ・ヴェーダ所属)。

二、カルパ・スートラ Kalpa-sūtra(祭事経。祭式綱要書)

(一)シュラウタ・スートラ Śrauta-sūtra(天啓経。三個の祭火をもちいるヴェーダ祭式の綱要書)。

『シャーンカーヤナ』Śāṅkhāyana、『アーシュヴァラーヤナ』Āśvalāyana、『マシャカ』Maśaka、『ラーティヤーヤナ』Lāṭyāyana、『ドラーヒヤーヤナ』Drāhyāyana、『ジャイミニ』Jaimini、『カーティヤーヤナ』Kātyāyana、『アーパスタムバ』Āpastamba、『ヒラニヤケーシン』Hiraṇyakeśin、『バウダーヤナ』Baudhāyana、『バーラドヴァージャ』Bhāradvāja、『マーナヴァ』Mānava、『ヴァイターナ』Vaitāna。

(二)グリヒヤ・スートラ Gṛhya-sūtra(家庭経。一個の祭火をもちいる家庭における祭式の綱要書)。

『シャーンカーヤナ』、『シャームバヴィヤ』Śāmbavya、『アーシュヴァラーヤナ』、『ゴービラ』Gobhila、『カーディラ』Khādira、『ジャイミニ』、『パーラスカラ』Pāraskara、『アーパスタムバ』、『ヒラニヤケーシン』、『バウダーヤナ』、『バーラドヴァージャ』、『マーナヴァ』、『ヴァイカーナサ』Vaikhānasa、『カウシカ』Kauśika。

(三)ダルマ・スートラ Dharma-sūtra(律法経。四つの階級の権利・義務・生活法を規定する綱要書)。

『アーパスタムバ』、『ヒラニヤケーシン』、『バウダーヤナ』、『ガウタマ』Gautama、『ヴァーシシュタ』Vāsiṣṭha。

(四)シュルヴァ・スートラ Śulva-sūtra(祭壇経。祭場・祭壇・祭火を設置する場合の測量についての綱要書)。

『バウダーヤナ』、『アーパスタンバ』。

三、ダルマ・シャーストラ Dharma-śāstra(法典)

ヴェーダの補助学の律法経を独立させたもの。法律的なことがらを組織的に扱い、それぞれの階級の人々が守るべき法を規定。

(1)『マーナヴァ・ダルマシャーストラ』Mānava-dharmaśāstra(マヌ法典)。

(2)『ヤージュニャヴァルキヤ』Yājñavalkya。

(3)『ナーラダ』Nārada。

(4)『ブリハスパティ』Bṛhaspati。

四、アルタ・シャーストラ Arthaśāstra(実利論)および付属の諸学科

工業・経済・政治などの実際生活に関係する学術文献を総称して実利論といい、とくに政治を重視するところからニーティ・シャーストラ Nītiśāstra(政治論)、ラージャニーティ Rājanīti(君主政治論)ともいう。また、行政の中心としての刑罰権の行使ということからダンダニーティ Daṇḍanīti(行刑政治)ともいう。

(1)『カウティリヤ実利論』Kauṭilīya Arthaśāstra。マウリヤ王朝チャンドラグプタ王の大臣カウティリヤ(あるいは、チャーナキヤ Cāṇakya)の著。

(2)『ニーティ・サーラ』Nīti-sāra(政治精要)。カーマンダキ Kāmandaki著。

(3)『ニーティヴァーキヤームリタ』Nītivākyāmṛta(政治学説の甘露)。ソーマデーヴァスーリ Somadevasūri著。

(4)『ラグ・アルハンニーティサーラ』Laghu-arhannītisāra(ジャイナ教徒のための小政治精要)。ヘーマチャンドラ Hemacandra(一一、一二世紀)著。

(5)『バールハスパティ・ニーティスートラーニ』Bārhaspati-nītisūtrāni(ブリハスパティの政治諸論)。

(6)『ハスティアーユル・ヴェーダ』Hasty-āyurveda(象医学)。象に関する一切の知識の集成。

(7)『マーナ・サーラ』Mānasāra。シルパ・スートラ Śilpasūtra の一つで、寺廟・家屋の建築、神像の奉納などを扱う。

(8)『アーリヤ・マンジュシュリー・ムーラカルパ』Āryamañjuśrīmūlakalpa。マヘーシュヴェーラの建築書。

(9)『ハヤシールシャ・パンチャラートラ』Hayaśīrṣa-pañcarātra。ヴィシュヌ派の建築、尊像奉納を扱う。

(10)『アパラージタ・プリッチャー』Aparājita-pṛcchā 南方学派を代表するブヴァナデーヴァ Bhuvanadeva(一二、三世紀)の建築学書。

(11)『サマラーンガナ・スートラダーラ』Samarāṅgaṇa-sūtradhāra。ボージャデーヴァの北方学派を代表する建築学書。

(12)『サンギータ・ラトナーカラ』Saṅgīta-ratnākara。サンギータ・シャーストラ Saṅgītaśāstra(演奏学)に属するもので、ニッシャンカ・シャールンガデーヴァ Niśśaṅka Śārṅgadeva の作。

(13)『サンギータ・ダーモーダラ』Saṅgīta-dāmodara。

シュバンカラ Śubhaṅkara 作の音楽・演劇論。

(14)『アウマーパタム』Aumāpatam。音楽・舞踊論。

(15)『サンギートーパニシャトサーローッダーラ』Saṅgītopaniṣatsāroddhāra。音楽・舞踊論。

(16)『ヌリティヤ・サングラハ』Nṛtya-saṃgraha。舞踏論。

五、カーマ・シャーストラ Kāma-śāstra（情事学）

カーマ・シャーストラは、それによって人々が情事を最高に満喫できる方法を明らかにする学問で、カーマは人生の三つの目標の一つ。

(1)『カーマ・スートラ』Kāma-sūtra。マッラナーガ・ヴァーツヤーヤナ Mallanāga Vātsyāyana の作。

(2)『ジャヤマンガラー』Jayamaṅgalā。ヤショーダラ・インドラパーダ Yaśodhara Indrapāda（一三世紀）による『カーマ・スートラ』註。

(3)『ラティラハスヤ』Ratirahasya（情事の秘密）。コーッカカ Kokkaka の作。

(4)『アナンガランガ』Anaṅgaraṅga（愛神の舞台）。カリヤーナマッラ Kalyāṇamalla（一六世紀）の作。

六、叙事詩・プラーナ

(一)『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』。

(二)プラーナ、ウパプラーナ（いずれも本文参照）。

七、正統派の哲学的文献（六派哲学の根本聖典、その他）

(一)ミーマーンサー学派（開祖ジャイミニ Jaimini）。

(1)『ミーマーンサー・スートラ』Mīmāṃsā-sūtra（紀元前二〇〇年—一〇〇年ころ）。

(2)シャバラスヴァーミン Śabarasvāmin（五五〇年ころ）『ミーマーンサー・スートラ註』Bhāṣya。

(3)クマーリラ Kumārila（六五〇—七〇〇ころ）『ミーマーンサー・シュローカヴァールッティカ』Mīmāṃsā-ślokavārttika。

(4)プラバーカラ Prabhākara（七〇〇年ころ）『ブリハティー』Bṛhatī。

(5)マンダナミシュラ Maṇḍanamiśra（六七〇—七二〇年ころ）『ヴィディヴィヴェーカ』Vidhiviveka。

(二)ヴェーダーンタ学派（開祖バーダラーヤナ Bādarāyaṇa）。

(1)『ブラフマ・スートラ』Brahma-sūtra。別名『ヴェーダーンタ・スートラ』Vedānta-sūtra（四〇〇年—四五〇年ころ現形成立）。

(2)ガウダパーダ Gauḍapāda（六四〇—六九〇年ころ）『マーンドゥーキヤ頌・カーリカー』Māṇḍūkya-kārikā。

(3)シャンカラ Śaṅkara（八世紀）『ブラフマ・スートラ註』Brahma-sūtra-bhāṣya。

(4)バースカラ Bhāskara（八世紀）『ブラフマ・スートラ註』Brahma-sūtra-bhāṣya。

(5)バーラティーティールタ Bhāratītīrtha、マーダヴァ Mādhava（一三五〇年ころ）『パンチャダシー』Pañcadaśī。

(6)サダーナンダ Sadānanda（一五世紀末）『ヴェーダーンタ・サーラ』Vedānta-sāra。

(三)サーンキヤ学派（開祖カピラ Kapila）。

(1)イーシュヴァラクリシュナ Īśvarakṛṣṇa『サーンキヤ・カーリカー』Sāṃkhya-kārikā（四世紀）。

(2)『金七十論』真諦訳（六世紀後半）。

(3)ガウダパーダ Gauḍapāda（六〇〇—七〇〇年ころ）『サーンキヤ・カーリカー註』Bhāṣya。

(4)ヴァーチャスパティ Vācaspati（八〇〇—八七〇年ころ）『サーンキヤ・タットヴァカウムディー』Sāṃkhya-tattvakaumudī。

(5)カピラ Kapila（一四、五世紀）『サーンキヤ・スートラ』Sāṃkhya-sūtra。

(四)ヨーガ学派（開祖パタンジャリ Patañjali）。

(1)『ヨーガ・スートラ』Yoga-sūtra（四〇〇—四五〇年ころ）。

(2)ヴィヤーサ Vyāsa（五〇〇年ころ）『註』Bhāṣya。

(3)ヴァーチャスパティ Vācaspati（八五〇年ころ）『タットヴァヴァイシャーラディー』Tattvavaiśāradī。

(4)ヴィジュニャーナビクシュ Vijñānabhikṣu（一六世紀）『ヨーガヴァールッティカ』Yogavārttika。

(5)ラーマーナンダ・サラスヴァティー Rāmānanda Sarasvatī（一六世紀）『マニプラバー』Maṇiprabhā。

(五)ヴァイシェーシカ学派（開祖カナーダ Kaṇāda）。

(1)『ヴァイシェーシカ・スートラ』Vaiśeṣika-sūtra（五〇—一五〇年ころ成立）。

(2)プラシャスタパーダ Praśastapāda（四五〇—五〇〇年ころ）『諸原理の特質の綱要』Padārthadharmasaṃgraha。

(3)チャンドラーナンダ Candrānanda（七世紀）『註』Vṛtti。

(4)シャンカラミシュラ Śaṅkaramiśra（一五世紀）『ヴァイシェーシカ・スートラ・ウパスカーラ』Vaiśeṣika-sūtra-

upaskāra。

(5)アンナン・バッタ Annam Bhaṭṭa（一六世紀後半）『タルカ・サングラハ』Tarka-saṃgraha。

㈥ニヤーヤ学派（開祖ガウタマ Gautama）。

(1)『ニヤーヤ・スートラ』Nyāya-sūtra（二九〇—三五〇）。

(2)ヴァーツヤーヤナ Vātsyāyana（五〇〇年ころ）『ニヤーヤ・スートラ註』Nyāya-bhāṣya。

(3)ウッディヨータカラ Uddyotakara（七世紀）『ニヤーヤ・ヴァールッティカ』Nyāya-vārttika。

(4)ガンゲーシャ Gaṅgeśa（一三世紀）『タットヴァチンターマニ』Tattvacintāmaṇi。

(5)ケーシャヴァ・ミシュラ Keśava Miśra（一三世紀）『タルカ・バーシュヤ』Tarka-bhāṣya。

㈦哲学綱要書。

(1)ハリバドラ Haribhadra（九世紀）『六派哲学集成』Ṣaḍdarśanasamuccaya。

(2)『全哲学説綱要』Sarvamatasaṃgraha。

(3)『全定説綱要』Sarvasiddhāntasaṃgraha。

(4)マーダヴァ Mādhava（一四世紀）『全哲学綱要』Sarvadarśanasaṃgraha。

(5)マドゥスーダナ・サラスヴァティー Madhusūdana Sarasvatī（一五〇〇年ころ）『種々な道』Prasthānabheda。

八、タントラ文献

サンヒター Saṃhitā（ヴィシュヌ派の聖典）、アーガマ Āgama（シヴァ派の聖典）、タントラ Tantra（シャークタ派の聖典）を総称してタントラという。完全なタントラ（サンヒター、アーガマ）は、㈠智（ジュニャーナ jñāna、哲学説）、㈡ヨーガ（精神集中）、㈢所作（クリヤー kriyā、尊像の製作、寺廟の建設まで）、㈣行為（チャリヤー caryā、儀式、祝祭、社会的義務など）の四つの課題をもっている。

㈠アーガマ（シヴァ派）

シヴァ派は伝統的に二八のアーガマ、一〇八のウパ・アーガマを認める。

㈡サンヒター（ヴィシュヌ派）

(1)『アヒルブッドニヤ・サンヒター』Ahirbudhnya-saṃhitā（四世紀、カシュミール）。

(2)『パンチャラートラ・サンヒター』Pañcarātra-saṃhitā（五—九世紀、北インド）。

(3)『イーシュヴァラ・サンヒター』Īśvara-saṃhitā（南インド）。

(4)『ブリハドブラフマ・サンヒター』Bṛhadbrahma-sa

ṃhitā。

㈢タントラ（シャークタ派）

(1)『マハーニルヴァーナ・タントラ』Mahānirvāṇa-tantra。

(2)『プラパンチャサーラ・タントラ』Prapañcasāra-tantra。

(3)『タントララージャ・タントラ』Tantrarāja-tantra。

(4)『カーリーヴィラーサ・タントラ』Kālīvilāsa-tantra。

(5)『ジュニャーナールナヴァ・タントラ』Jñānārṇava-tantra。

(6)『シャーラダーティラカ・タントラ』Śāradātilaka-tantra（一一世紀、ラクシュマナデーシカ Lakṣmaṇadeśika 著）。

九、その他の学術書

㈠医学（アーユル・ヴェーダ Āyur-veda）。

(1)『チャラカ・サンヒター』Caraka-saṃhitā。古代インド医学の三大古匠の一人、チャラカによる医学書。

(2)『スシュルタ・サンヒター』Suśruta-saṃhitā。三大古匠の一人、スシュルタによる医学書。

(3)『アシュターンガ・サングラハ』Aṣṭāṅga-saṃgraha（医学八支綱要）、『アシュターンガ・フリダヤ・サングラハ』Aṣṭāṅga-hṛdaya-saṃgraha（医学八支真髄集）。三古匠の第三、ヴァーグバタ Vāgbhaṭa の作。

㈡天文学・占星術。

(1)『ガールギー・サンヒター』Gārgīsaṃhitā。天文学の権威ガルガ Garga の作。

(2)『ヴリッダ・ガルガ・サンヒター』Vṛddhagarga-saṃhitā（占星術、天文学書）。

(3)『スーリヤ・シッダーンタ』Sūryasiddhānta。ラータ Lāṭa による天文学書。

(4)『パンチャ・シッダーンティカー』Pañca-siddhāntikā。天文学者兼占星術家ヴァラーハミヒラ Varāhamihira の作。

(5)『アーリヤバティーヤ』Āryabhaṭīya。アーリヤバタ Āryabhaṭa の天文・数学書。

(6)『シッダーンタ・シローマニ』Siddhānta-śiromaṇi。バースカラ Bhāskara（一二世紀）の天文学書。

(7)『ブリハト・サンヒター』Bṛhat-saṃhitā。ヴァラーハミヒラの占星術書。

(8)『ブリハド・ヴィヴァーハ・パタラ』Bṛhad-vivāha-paṭala、『スヴァルパ・ヴィヴァーハ・パタラ』Svalpa-vivāha-paṭala。ヴァラーハミヒラの結論に関する占星術書。

(9)『ジョーティシャーローッダーラ』Jyotiṣāroddhāra。ハルシャキールティ・スーリ Harṣakīrti Sūri の書いたジャイナ教の天文学書。

㈢文法学（ヴィヤーカラナ vyākaraṇa）。辞典。

(1)『アシュターディヤーイー』Aṣṭādhyāyī（八章編）。『シャブダーヌシャーサナ』Śabdānuśāsana ともいい、パーニニ Pāṇini の古典サンスクリット文典。

(2)『マハーバーシュヤ』Mahābhāṣya（大註釈書）。パタンジャリ Patañjali の作。

(3)『カーシカー・ヴリッティ』Kāśikā-vṛtti。ジャヤーディティヤ Jayāditya とヴァーマナ Vāmaṇa との合作。

(4)『シッダーンタ・カウムディー』Siddhānta-kaumudī。バットージ・ディークシタ Bhaṭṭoji Dīkṣita（一七世紀）作。

(5)『アマラコーシャ』Amarakośa。くわしくは『ナーマーリンガーヌシャーサナ』Nāmāliṅgānuśāsana という、アマラシンハ Amarasiṃha の作。三編より成る同義語辞典。

〔註〕バッタ・クシーラスヴァーミン Bhaṭṭa Kṣīrasvāmin の註（一一世紀）、ブリハスパティ・ラーヤムクタマニ Bṛhaspati Rāyamukutamaṇi の註（一五世紀）。

(6)『アネーカールタ・サムッチャヤ』Anekārtha-samuccaya。シャーシュヴァタ Śāśvata（六世紀）の異義語辞典。

(7)『ヴァイジャヤンティー』Vaijayantī。ヤーダヴァプラカーシャ Yādavaprakāśa（一一世紀）作の辞典。

(8)『アビダーナチンターマニ・ナーマ・マーラー』Abhidhānacintāmaṇi-nāma-mālā（言語如意と名づける花鬘）。ヘーマチャンドラ Hemacandra 作の同義語辞典。

十、文学（古典サンスクリット文学）

ヴェーダ、二大叙事詩を経て古典サンスクリット文学が成立する。修辞学的にはカーヴィヤ Kāvya と呼ばれる美文体の文学作品が多く書かれた。叙情詩、戯曲、説話、寓話、伝奇小説、詩論、修辞学などがある。

㈠バーサ Bhāsa（劇作家、三世紀ころ）。

(1)『アヴィマーラカ』Avimāraka（六幕）。

(2)『プラティジュニャーヤウガンダラーヤナ』Pratijñāyaugandharāyaṇa（四章）。ヴァッツ王ウダヤナとヴァーサヴァダッターの恋愛劇。

(3)『スヴァプナヴァーサヴァダッター』Svapnavāsavadattā。『スヴァプナ・ナータカ』（夢の劇）ともいい、バーサの戯曲中の傑作。

(4)『チャールダッタ』Cārudatta（四章未完）。

㈡シュードラカ Śūdraka。

(1)『ムリッチャカティカー』Mṛcchakaṭikā（土の小事）。女主人公の名をとって『ヴァサンタセーナー』Vasantasenā とも呼ばれる。

㈢カーリダーサ Kālidāsa（四世紀末から五世紀初頭）。

(1)『クマーラサムバヴァ』Kumārasambhava（軍神クマーラの誕生）。八章より成る美文体叙事詩。

(2)『ラグヴァンシャ』Raghuvaṃśa（ラグ族の王統）。英雄ラーマの事跡、祖先、子孫について扱う。

(3)『メーガドゥータ』Meghadūta（雲の使者）。叙情詩中の傑作といわれる。

(4)『リトゥサンハーラ』Ṛtusaṃhāra（季節のめぐり）。サンスクリット文学の規定する一年の六季（春・夏・雨季・秋・冬・寒季）を六編一五三頌の詩にうたったもの。

(5)『アビジュニャーナ・シャクンタラー』Abhijñāna-śakuntalā（記念の品によって思い出されたシャクンタラー）。ヒロインの名をとって、一般に『シャクンタラー』と呼ばれる。インド古典文学の最大の傑作といわれる七幕の劇。

(6)『ヴィクラモールヴァシーヤ』Vikramorvasīya（勇気によって得られたウルヴァシー）。プラティシュターナの王プルーラヴァスとアプサラス（天上の水の精女）ウルヴァシーの恋愛物語を扱った五幕の戯曲。

(7)『マーラヴィカーグニミトラ』Mālavikāgnimitra。アグニミトラ王を主人公とする五幕の劇。

㈣バルトリハリ Bhartṛhari。

(1)『シュリンガーラ・シャタカ』Śṛṅgāra-śataka（恋愛百頌）。恋愛の情緒を主題とした叙情詩。

(2)『ニーティ・シャタカ』Nīti-śataka（処世百頌）、『ヴァイラーギヤ・シャタカ』Vairāgya-śataka（離欲百頌）。処世・解脱の道を説く教訓詩。

㈤アマル Amaru（あるいはアマルカ Amaruka）。

(1)『アマル・シャタカ』Amaru-śataka（アマル百頌）。恋愛の情緒をえがいた叙情詩。

㈥ビルハナ Bilhaṇa（一一世紀）。

(1)『チャウラパンチャーシカー』Caurapañcāśikā（秘めたる恋の五〇頌）。恋愛叙情詩。

(2)『ヴィクラマーンカデーヴァチャリタ』Vikramāṅkadevacarita。チャールキヤ王朝のヴィクラマーディティヤ六世の事跡を讃えた歴史的叙事詩。

(3)『カルナスンダリー』Karṇasundarī。カルナデーヴァ王の結婚を主題とするドラマ。

㈦ジャヤデーヴァ Jayadeva（一二世紀）。

(1)『ギーターゴーヴィンダ』Gītagovinda（牛飼いの歌）。ヴィシュヌ神の化身としての牧童クリシュナと牧女（ゴーピー）たちとの恋愛を主題とした叙情詩集で、ヴィシュヌ文学の中心。

(八)宗教的叙情詩・格言詩。

(1)『スーリヤ・シャタカ』Sūrya-śataka（太陽神スーリヤ百頌）。マユーラ Mayūra（七世紀）の作。

(2)『チャンディー・シャタカ』Caṇḍī-śataka。バーナ作。シヴァの神妃チャンディーを賛美した宗教的叙情詩。

(3)『チャーナキヤ・シャタカ』Cāṇakya-śataka（チャーナキヤ百頌）。マウリヤ王朝チャンドラグプタ王の大臣チャーナキヤの作といわれる格言詩。

(九)詞華集（アンソロジー）。

(1)『スバーシタ・ラトナコーシャ』Subhāṣita-ratnakośa（佳句の宝庫）。ヴィディヤーカラ作。

(2)『サドゥクティ・カルナームリタ』Sadukti-karuṇāmṛta（佳句による耳への甘露）。シュリーダラダーサ Śrīdharadāsa（一二、三世紀）の作。

(3)『スバーシターヴァリ』Subhāṣitāvali（佳句連集）。カシュミールの詩人ヴァッラバデーヴァ Vallabhadeva（一五世紀）作。

(十)叙事詩。

(1)『キラータールジュニーヤ』Kirātārjunīya。バーラヴィ Bhāravi（五―六世紀）の作。『マハーバーラタ』を題材とした一八章の叙事詩。

(2)『ラーヴァナヴァダ』Rāvaṇavadha（ラーヴァナの殺戮）。バッティ Bhaṭṭi 作。ラーマの誕生からラーヴァナの殺戮までを描いたもので、作者の名をとって『バッティ・カーヴィヤ』Bhaṭṭi-kāvya ともいわれる。

(3)『シシュパーラヴァダ』Śiśupālavadha。マーガ Māgha（七世紀ころ）の作。『マハーバーラタ』にもとづく叙事詩。

(4)『ジャーナキーハラナ』Jānakīharaṇa（ジャーナキー、すなわちシーターの誘拐）。クマーラダーサ Kumāradāsa の作。

(5)『ラージャタランギニー』Rājataraṃgiṇī（諸王の流れ）。カシュミールのカルハナ Kalhaṇa（一二世紀）作。カシュミール王統の歴史を扱う叙事詩。

(土)戯曲。

(1)ヴィシャーカダッタ Viśākhadatta。

『ムドラーラークシャサ』Mudrārākṣasa（ラークシャサと印綬）。六幕の政治劇。

(2)ハルシャ Harṣa（あるいはシュリー・ハルシャ、ハルシャデーヴァ、ハルシャヴァルダナとも呼ばれる。七世紀、カーニヤクブジャ〈曲女城〉を支配した王。仏典では戒日王）。

『プリヤダルシカー』Priyadarśikā。ヴァツァ国王ウダヤナの恋愛事件を主題にした戯曲。

『ラトナーヴァリー』Ratnāvalī。同じ主題の四幕劇。

『ナーガーナンダ』Nāgānanda（龍王の喜び）。五幕の仏教劇。

(3)バヴァブーティ Bhavabhūti（八世紀）。

『マーラティーマーダヴァ』Mālatīmādhava。バヴァブーティの最高傑作といわれる一〇幕の戯曲。

『マハーヴィーラチャリタ』Mahāvīracarita（偉大な英雄の生涯）。『ラーマーヤナ』にもとづいて、ラーマ王の生涯を七幕に脚色したドラマ。

『ウッタララーマチャリタ』Uttararāmacarita（ラーマ王の後日物語）。『ラーマーヤナ』の第七編に相当するドラマ。

(4)バッタ・ナーラーヤナ Bhaṭṭa Nārāyaṇa（八世紀ころ）。

『ヴェーニーサンハーラ』Veṇīsaṃhāra（結髪）。『マハーバーラタ』の賭博の場面でのパーンドゥの五王子の妻ドラウパディーを主題とするドラマ。

(5)その他の叙事詩にもとづく戯曲。

『アナルガラーガヴァ』Anargharāghava（至尊のラーガヴァ）。ムラーリ Murāri（九世紀）の『ラーマーヤナ』によるドラマ。

『バーララーマーヤナ』Bālarāmāyaṇa（少年ラーマーヤナ）。ラージャシェーカラ Rājaśekhara（一〇世紀）作。

『バーラバーラタ』Bālabhārata（少年マハーバーラタ）。同。『マハーバーラタ』によるドラマで『プラチャンダパーンダヴァ』Pracaṇḍapāṇḍava（怒れるパーンダヴァ）とも呼ばれる。

『カルプーラマンジャリー』Karpūramañjarī。登場人物がすべてプラークリット（俗語）をもちいている作品。

『プラボーダ・チャンドローダヤ』Prabodha-candrodaya（悟りの月の出）。クリシュナミシュラ Kṛṣṇamiśra（一一世紀）作のヴィシュヌ派の教義を説く譬喩劇。

(主)伝奇小説。

(1)ダンディン Daṇḍin。

『ダシャクマーラチャリタ』Daśakumāracarita（十王子物語）。伝奇小説の代表作。

『カーヴィヤーダルシャ』Kāvyādarśa（詩作の鏡）。詩論書。

(2)スバンドゥ Subandhu（七世紀ころ）。

『ヴァーサヴァダッター』Vāsavadattā。ウッジャイニーの王女ヴァーサヴァダッターとカンダルパケートゥ王子との波乱にみちた恋愛物語。

(3)バーナ Bāṇa（ハルシャ王の宮廷詩人）。

『ハルシャチャリタ』Harṣacarita（ハルシャ王一代記）。

『カーダムバリー』Kādambarī。大説話集『ブリハットカター』から題材をとった説話的伝奇小説。

(十三)説話文学。

(1)『パンチャタントラ』Pañcatantra（五編の物語）。アマラシャクティ王の依頼によってバラモンのヴィシュヌシャルマンが三人の王子に、寓話の形で処世術、統治、倫理などを教える形式の説話集。①朋友の分離、②朋友の獲得、③カラスとフクロウの争い、④得たものを失うこと、⑤思慮のない行為の五編から成る。

(2)『ヒトーパデーシャ』Hitopadeśa（有益な教訓）。ナーラーヤナ Nārāyaṇa によって『パンチャタントラ』五編が四編に改編されたもの。

(3)『ブリハット・カター』Bṛhat-kathā（大説話集）。グナーディヤ Guṇādhya によってパイシャーチー語という俗語で書かれた一〇万頌の作品といわれるが、原本は現存しない。後世、数種の改作本がつくられた。

(4)『ブリハット・カター・マンジャリー』Bṛhat-kathā-mañjarī（ブリハットカターの花束）。カシュミールのクシェーメーンドラ Kṣemendra（一一世紀）による大説話集の改作。

(5)『カターサリットサーガラ』Kathāsaritsāgara（物語の流れ入る海）。カシュミールのソーマデーヴァ Somadeva（一一世紀）による大説話集の改作。一八巻、二万一三八八頌、三五〇種の物語を含む。

(6)『ヴァスデーヴァヒンディ』Vasudevahiṇḍi（ヴァスデーヴァの遍歴）。ジャイナ教徒サンガダーサガニン Saṅghadāsagaṇin の改作。

(7)『ヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー』Vetāla-pañcaviṃśatikā（死屍鬼二十五話）。死屍鬼ヴェーターラが語る二五の説話。

(8)『シンハーサナ・ドヴァートリンシカー』Siṃhāsana-dvātriṃśikā（獅子座三二話）。『ヴィクラマチャリタ』Vikramacarita（ヴィクラマ王行状記）とも呼ばれる。

(9)『シュカ・サプタティ』Śuka-saptati（オウム七〇話）。旅に出た商人マダセーナの妻に賢いオウムが語る七〇の説話。

(十四)詩論、演劇論。

(1)『カーヴィヤーランカーラ』Kāvyālaṃkāra。バーマハ Bhāmaha（七世紀）の詩的修辞学書。

(2)『カーヴィヤーランカーラスートラ』Kavyālaṃkārasūtra。ヴァーマナ Vāmana（一〇世紀）の文体を主とした詩論。

(3)『アビナヴァ・バーラティー』Abhinava-bhāratī。アビナヴァグプタ Abhinavagupta（一一世紀）のラサ（感情、または情緒）理論の書。

(4)『カーヴィヤプラカーシャ』Kāvyaprakāśa。マンマタ Mammaṭa（一一世紀）による各派の詩論の総括書。

(5)『ドゥヴァニヤーローカ』Dhvanyāloka。アーナンダヴァルダナ Ānandavardhana（九世紀）によるドゥヴァニ（詩における暗示）の理論の書。

(6)『ナーティヤ・シャーストラ』Nāṭya-śāstra。バラタ仙の作とされる演劇論。三〜四世紀の成立とみられ、演劇に関する各種の理論（音楽・舞踊・装飾・劇場・俳優・観客など）を扱う。

ヒンドゥー教の主要な宗派

一、ヴィシュヌ派 Vaiṣṇava

ヴィシュヌ神を最高神とする宗派

㈠ バーガヴァタ派 Bhāgavata

ヴィシュヌをバガヴァット Bhagavat（主）として崇拝する書をもちいるヴィシュヌ派

(1) マラーター Marāthā のバーガヴァタ派

マラーター地方のヴィシュヌ派教徒。ナームデーヴァ Nāmdeva（一五世紀前半）、エークナート Eknāth（—一六〇八）、トゥカーラーム Tukārām（一六〇八—一六四九）。

(2) マドヴァ派 Madhva

マドヴァ（一一九九—一二七八）が創始、南インドで流行。

(3) ヴィシュヌスヴァーミン派 Viṣṇusvāmin

ヴィシュヌスヴァーミンの創始。ラーダーの崇拝。

(4) ニムバールカ派 Nimbārka

ニムバールカ（一〇六二—一一六二）の創始。クリシュナとその妻ラーダーの信仰。

(5) ヴァッラバ派 Vallabha

ヴァッラバ（一四七九—一五三一）の創始。ヴィシュヌスヴァーミン派を併合（一七世紀）。四大弟子、スール・ダース Sūr Dās クリシュナ・ダース Kṛṣṇa Dās、パラマナンド・ダース Paramanand Dās、クムバン・ダース Kumbhan Dās。

(6) チャイタニヤ派 Caitanya

ヴィシュヴァムバラ・ミシュラ Viśvambhara Miśra（一四八五—一五三三）の創始。ラーダー・クリシュナ Rādhā-Kṛṣṇa の崇拝。現在もベンガル地方において信者が多い。

㈡ パーンチャラートラ派 Pāñcarātra

『パーンチャラートラ・サンヒター』を根本聖典とする宗派。ヴィシュヌ派ではあるがシャクティ派の原理を認める。

(1) シュリーヴァイシュナヴァ派 Śrīvaiṣṇava

シュリーランガム Śrīraṅgam を本山とする。吟遊詩人アールワール Āḻvār の活躍（七—一〇世紀）。ナータムニ Nāthamuni（一〇—一一世紀）、ラーマーヌジャ Rāmānuja。南方派テンガライ Teṅgalai と北方派ヴァダガライ Vadagalai に分裂（一三世紀）。ピッライ・ローカーチャーリヤ Piḷḷai Lokācārya（一三世紀、南方派）、ヴェーダー

ンタ・デーシカ Vedānta Deśika（一三世紀、北方派）。

(2) サーターニ派 Sātāni

マイソール、タミール、テルグ地方。

(3) マンバウ派 Manbhau

チャクラダル Cakradhar（一三世紀）の創始。

(4) ナラシンハ派 Narasiṃha

ヴィシュヌの化身としてのヌリシンハ（人獅子）を崇拝する宗派。

(5) ラーマ派 Rāma

ヴィシュヌの化身としてのラーマにバクティ bhakti（信愛）をささげることを説く一派。ラーマーナンダ Rāmānanda（一五世紀）、トゥルシー・ダース Tulsī Dās（一五三二—一六二三）『ラーマチャリットマーナス』Rāmacaritmānas

二、シヴァ派 Śaiva

㈠ アーガマ Āgama を認める宗派

(1) シヴァシッダーンタ派 Śaivasiddhānta

「アーガマ」を根本聖典とする宗派。シュリーカーンタ・シヴァーチャーリヤ Śrīkāṇṭha Śivācārya（一四〇〇年ころ）『シャイヴァ・バーシュヤ』Śaiva-bhāṣya

(2) タミールのシヴァシッダーンタ派

吟遊詩人ナーヤナール Nāyanār たちの活躍（七、八世紀）。ティル・ムーラール Tiru Mūlār（八〇〇年ころ）『ティルマントラム』Tirumantram、マーニッカヴァーチャカル Māṇikkavācakar（九〇〇年ころ）抒情詩集『ティルヴァーチャカム』Tiruvācakam、メーイカンダ・デーヴァ Meykaṇḍa Deva（一三世紀）『シヴァジュニャーナボーダ』Śivajñānabodha

(3) カシュミールのシヴァ派

『シヴァ・スートラ』Śiva-sūtra にもとづいて、ヴァスグプタ Vasugupta（八五〇年ころ）が創始。ソーマーナンダ Somānanda（九〇〇年ころ）『シヴァ・ドリシュティ』Śivadṛṣṭi、バースカラ Bhāskara（一一世紀）『シヴァ・スートラ・ヴァールッティカ』Śiva-sūtra-vārttika

(4) ヴィーラシヴァ派 Vīraśaiva

リンガーヤット Liṅgāyat ともいい、開祖はバサヴァ Basava ともエーカーンタ Ekānta ともいわれる。

㈡ パーシュパタ的な宗派

(1) パーシュパタ派 Pāśupata

シヴァをパシュパティ Paśupati（獣の主）として崇拝する宗派。古名はマーヘーシュヴァラ派 Māheśvara。

(2) カーパーリカ派 Kāpālika

カパーリン Kapālin（頭蓋骨を持つ人）ともいわれる。

(3) ゴーラクシャナータ派 Gorakṣanātha

ゴーラクシャナータ（一般にはゴーラクナートといわれ、一三世紀ころ）を開祖とし、北インド、ネパールで流行。この派の行者をカームパタヨーギン Kāmphatayoginといい、北インド、ネパールで流行。

三、シャクティ派 Śākta

シヴァの神妃デーヴィーの崇拝にもとづくシャクティ（性力）信仰を中心に、輪座礼拝などの礼拝儀礼をもつ宗派。この派の聖典はタントラ Tantra。

(1) 左道シャクティ派 Vāmācāra-śākta ベンガル、アッサム地方で流行。カルカッタのカーリーガート寺院はこの派の中心。

(2) 右道シャクティ派 Dakṣiṇācāra-śākta 左道シャクティの改革派。最初の学者はラクシュミーダラ・ヴィディヤーナータ Lakṣmīdhara Vidyānātha（一三世紀後半）。

四、スマールタ派 Smārta、その他

(1) スマールタ派 スムリティ（聖伝）、とくに『家庭経』（グリヒヤ・スートラ）に定められた簡単な儀礼を行なう宗派。ヴァーツヤーヤナ Vātsyāyana（約三五〇—四〇〇）、プラシャスタパーダ Praśastapāda（四五〇—五〇〇ころ）、ウッディヨータカラ Uddyotakara（五五〇—六〇〇）、シャンカラ、クマーリラ、プラバーカラ、ヴァーチャスパティミシュラ、マーダヴァ、サーヤナなど。

(2) サウラ派 Saura 太陽を最高原理・最高神として崇拝する宗派。『サウラ・サンヒター』Saura-saṃhitā。

(3) ガーナパティヤ派 Gāṇapatya ガネーシャ、あるいはガナパティを崇拝する宗派。『ガネーシャ・プラーナ』Gaṇeśa-purāṇa。

五、改革派

(一) カビール派 Kabīrpanthī ヒンドゥー教の改革者の一人、カビール（一四四〇—一五一八）を祖とする一派。

(二) シーク教　Sikh ナーナク Nānak（一四六九—一五三八）を始祖とし、本山はアムリトサルにあるゴールデン・テンプル（黄金寺院）。聖典『アーディグラント』

(三) ダードゥー派 Dādūpanthī ダードゥー（一五四四—一六〇三）を始祖とする一派。

(四) ラール・ダース派 Lāl Dāsī ラール・ダース（一七世紀）の創始した派。

(五) サトナーミー派 Satnāmī 「真実の名」の意で、この派の信者はカビールの影響をうけて唯一の実在（サット）を尊崇する。

(六) その他のカビールの影響下に成立した宗派。(1)バーバー・ラール派 Bābā Lālī (2)サード派 Sādh (3)チャラン・ダース派 Caran Dāsī (4)シヴァ・ナーラーヤナ派 Śiva Nārāyaṇī (5)ガリーブ・ダース派 Garīb Dāsī (6)ラーム・サネーヒー派 Rām Sanehī

(七) アーリヤ・サマージ Ārya Samāj ダヤーナンダ・サラスヴァティー Dayānanda Sarasvatī が一八七五年ボンベイに設立。

(八) デーヴァ・サマージ Deva Samāj サティヤーナンド Satyānand が一八八七年に創始。

(九) ブラフマ・サマージ Brahma Samāj ラーム・モーハン・ローイ Rām Mohan Roy が一八二八年に創立。

(十) ラーマクリシュナ・ミッション Rāmakrishna Mission ヴィヴェーカーナンダ Vivekānanda（一八六二—一九〇二）が、師ラーマクリシュナ（一八三四—一八八六）のあとを受けてヴェーダーンタ教理を改めるために設立。

ヒンドゥー教の主要な寺院

〔北インド〕

(一) デリー Delhi（デリー州）

ラクシュミー・ナーラーヤナ寺院

通称ビルラー寺院。一九三八年ビルラー財団が建立。ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）とその神妃ラクシュミーを祀る。

(二) マトゥラー Mathurā（ウッタラプラデーシュ州）

ヴリンダーヴァン Vrindāvan（マトゥラーの北一〇キロ、クリシュナ生誕の地）の寺院群。

①ジュガル・キショール寺院（一一世紀）
②ゴーヴィンド・デーオ寺院（一六世紀）
③バーンケー・ビハーリー寺院
④ラーダー・ヴァッラブ寺院

(三) ヴァーラーナシー Vārāṇasī（ベナレス、ウッタラプラデーシュ州）

①ヴィシュヴァナート寺院
通称、黄金寺院 Golden Temple シヴァ神を祀る。

②ドゥルガー寺院
通称、モンキー・テンプル Monkey Temple シヴァの神妃ドゥルガーを祀る。

③バーラト・マーター寺院
「インドの母」の意味で、堂内に大きなインドの立体地図がある。

(四) カジュラーホー Khajurāho（マディヤプラデーシュ州）

チャンデーラ王朝の最盛期（九五〇―一〇五〇）の一〇〇年間に建てられた八〇余のヒンドゥー寺院がある。

(1) 西部寺院群

①マータンゲーシュヴァラ寺院
現在も信者が参詣する寺院。

②ラクシュマナ寺院
四隅に小祀堂をもつパンチャーヤタナ Pañcāyatana という形式の寺院。

③カンダリヤー・マハーデーヴァ寺院
カジュラーホー最大の寺院で、アルダマンダパ ardhamaṇḍapa（前堂）、マンダパ maṇḍapa（ホール）、マハーマンダパ Mahāmaṇḍapa（大ホール）、ガルバグリハ garbhagṛha（本殿）を完備。

④デーヴィー・ジャガダムバー寺院
もとヴィシュヌ神が祀られていたが、後にカーリー女神を祀るようになったといわれる。

⑤ヴァラーハ寺院
ヴィシュヌの化身であるヴァラーハ（野猪）の像を祀る。

⑥ヴィシュヴァナート寺院
神殿にシヴァのリンガを祀る。一〇〇二―三年にダンガ王がシヴァ神のために建立。

⑦ナンディー寺院
シヴァ神の乗り物の牡牛ナンディンの像を祀る。ヴィシュヴァナート寺院と同時代の建立。

⑧チトラグプタ寺院
⑨パールヴァティー寺院
⑩ラクシュミー寺院

(2) 東部寺院群

①ヴァーマナ寺院
ヴィシュヌの化身としてのヴァーマナ（倭人）の像を祀る。

②ジャヴァーリ寺院
四つの顔をもつヴィシュヌ像を祀る。

③ブラフマー寺院
四面の像を安置するので、ブラフマー寺院とよばれているが、実際にはそれはシヴァのリンガであるという。

(3) 南部寺院群

①チャトゥルブジャ寺院
四本の腕をもつ巨大なヴィシュヌの神像が祀られている。

②ドゥルハデーヴァ寺院
もとシヴァ神の像を祀っていたが、後にシヴァのリンガを祀るようになったといわれる。

(五) ジャイプール Jaipur（ラジャスターン州）

シーラーデーヴィー寺院
アムベール城の中にあり、カーリー女神を祀る。

㈥ ウダイプール Udaipur（ラジャスターン州）

ジャグディッシュ寺院

一六五一年建立のウダイプール最大の寺院。

㈦ チットーガル Chittaugarh（ラジャスターン州）

ミーラーバーイー寺院

㈧ シュリーナガル Śrinagar（ジャム・カシュミール州）

①パンドレータン寺院

一二世紀建立のシヴァ寺院。

②アヴァンティプル寺院

アヴァンティヴァルマン王時代（九世紀）の建立。ヴィシュヌ寺院。

③マールタンド寺院

ラリターディティヤ王時代（七―八世紀）の建立。スーリヤ（太陽）寺院。

㈨ ハルドワール Hardwar（ウッタラプラデーシュ州）

①マナサー・デーヴィー寺院

シワリクの丘の上にあり、マナサー女神を祀る。

②チャンディー・デーヴィー寺院

③マーヤー・デーヴィー寺院

シヴァの神妃を祀る。この寺名に因んで町の名をマーヤープリー Māyāpuri ともいう。

④アンジャニー・デーヴィー寺院

⑤シャルワン・ナート寺院

パシュパティナートとしてのシヴァ神とその乗物ナンディンが祀られている。

⑥バーラト・マーター寺院

七階建ての新しい寺院で、それぞれの階に神々から歴史的な聖者・英雄の像に至るまでを祀る。一階にはバーラト・マーター（母なるインド）を祀り、二階にはブッダ、マハーヴィーラ、グルナーナク、カビール、トゥルシーダース、シャンカラの像を祀り、三階には政治上の指導者マハーラーナー・プラタプ、シヴァージー、グル・ゴーヴィンドシング、チャンドラ・シェーカラ・アザド、ハケーカト・ラーイ、サルダル・バガット・シングの像を祀り、四階はサティー寺院と名付けられてシーター・サヴィトリー、ラクシュミー・バイーを、五階はシャクティ寺院でナヴァ・ドゥルガ

ー、ジャガダムバー、ミーナークシーの像を祀り、六階はヴィシュヌ寺院でラーダー・クリシュナ、シーター・ラーム、ラクシュミー・ナライン、バドリーナートの像を祀り、七階はシヴァ寺院でナタラージャ、ウマー・マヘーシュの像を祀る。

⑦ゴーラクシャナータ寺院

ゴーラクシャナータに捧げられた寺。

⑧カングラ寺院

パンジャーブのライオンと称されたマハーラージャ・ランジット・シングによってガンジス河の右岸に建立された大理石の寺。イスラム教徒の破壊をまぬがれた。

⑨サプタリシ・アーシュラマ

市中より五キロ北にある修行道場。

⑩パラマールタ・アーシュラマ

一九世紀にスヴァーミー・スカデーヴ・ナンドによってガンジス河の岸に建てられた修行道場。

㈩ リシケーシュ Rishkesh（ウッタラプラデーシュ州）

①バーラト寺院

ラーマの母バーラトジーがここで修行したといわれる。リシケーシュ最古の寺。

②カイラーサ・ニケータン寺院

③サティヤ・ナーラーヤナ寺院

④カンヴァ・リシ・アーシュラマ

古代の聖仙カンヴァが住み、シャクンタラーも滞在したことがあるという場所に建てられた修行道場。

⑤スワーミー・シヴァーナンダ・アーシュラマ

スワーミー・シヴァーナンダによって一九三六年に建てられた修行道場。

⑥ギーター寺院

寺院内に『バガヴァッド・ギーター』の全章が書き記されている。

(十一) ウッタラカーンドUttarākānd（ウッタラプラデーシュ州）

①バドリーナート寺院

ガンジス河の一支流アラカナンダー川上流の聖地バドリーナートにあるシヴァ神を祀る寺院。

②ケーダールナート寺院

ガンジスの支流マンダキニー川の上流のケーダールナートにあるシヴァリンガを祀る寺院。

③ガンゴートリー寺院

ガンジスの源流バギーラティー川の水源近くの聖地ガンゴートリーにあるシヴァ寺院。

④ヤムノートリー寺院

ヤムナー河上流の聖地ヤムノートリーにあるヤムナー河の女神を祀る寺院。

(十三) アムリトサル Amritsar（パンジャーブ州、日本ではアムリッツァルという）

ハル・マンディル Har Mandir（シヴァ神の寺院）、あるいはダルバール・サーヒブ Darbar Sāhib

シーク教の本山。通称、黄金寺院（Golden Temple）。一七六一年にアフガンのアーマド・シャーによって破壊され、一七六四年に再建。一八〇二年にランジート・シングが屋根を金箔でおおったため、黄金寺院とよばれるようになった。

【東インド】

(一) カルカッタ Calcutta（西ベンガル州）

①カーリーガート寺院

カーリー女神を祀るシャクティ派の重要な寺院。カルカッタの守護神的存在。

②ダクシネーシュヴァラ寺院

一八四七年建立の寺院群で、シヴァ神を祀る寺院が一、カーリー女神を祀る寺院が十二ある。ラーマクリシュナ、ヴィヴェーカーナンダ師弟が修行をつんだところとして有名。

③ベルール・マト寺院

ヴィヴェーカーナンダがアメリカの二女性の寄進で一八九九年建立した僧院。ラーマクリシュナ・ミッションの本部。

(二) ビシュヌプール Bishnupur（西ベンガル州、「ヴィシュヌの町」の意）

①ラース・マンチャ寺院

ラーダー・クリシュナの神像を祀る寺院で、一六〇〇年ころビール・ハムビールの建立といわれる。

②シャーム・ローイ寺院

一七世紀に建立。屋根に五つの小塔をもつ寺院。

③ジョール・バーングラー寺院

一七世紀後半に建立。

④マダン・モーハン寺院

⑤マッレーシュヴァラ寺院

ビシュヌプールで唯一のシヴァ寺院。

(三) ガヤー Gayā（ビハール州）

①ガダーダル寺院

②ヴィシュヌパド寺院

両寺院ともにヴィシュヌ神を祀る。

(四) ブバネーシュワル Bhubaneshwar（オリッサ州、四大聖地の一。シヴァの聖地）

①リンガ・ラージャ寺院

一一世紀の建立で、トリ・ブヴァネーシュヴァラ Tribhuvaneśvara（三界の主）としてのシヴァ神を祀る。ブバネーシュワル最大の寺院。

②ムクテーシュヴァラ寺院

九七五年ころ建立のシヴァ寺院。

③ラージャラーニー寺院

一一〇〇年ころの建立。

④パラメーシュヴァラ寺院

⑤ヴァイタルデーヴァ寺院

(五) プーリー Pūri（オリッサ州、四大聖地の一。ヴィシュヌの聖地）

ジャガンナート寺院

一一〇〇年ころの建立、ジャガンナート（宇宙の主）としてのヴィシュヌ・クリシュナを祀る。コナーラクのスーリヤ寺院を黒塔とよぶのに対して、この寺院を白塔という。オリッサ寺院中の最大のもの。毎年六月下旬には、ラタ・ジャートラ（山車祭）が行われる。

(六) コナーラク Konarak（オリッサ州）

スーリヤ寺院

一三世紀の中ごろ、ナラシンハ・デーヴァ一世 Narasimha Deva I が建立した太陽神スーリヤを祀った寺院。この寺院全体が天空をかけるスーリヤの馬車の形をしていて、前には馬、基台には巨大な車輪が彫られている。寺院の外壁一面にカジュラーホーのようなミトゥナ像（男女交合像）が彫りこまれている。

(七) ガウハーティー Gauhāti（アッサム州、ヒンドゥー教五大聖地の一）

カーマーキャー寺院

シヴァ神は妻カーリーが死んだとき、嘆き悲しんで妻の死体を抱いて空を飛んだ。その際、女神の性器が落ちたところに建てられたという。

〔西インド〕

(一) ボンベイ Bombay（マハーラーシュトラ州）

①ムンバーデーヴィー寺院

ムンバー女神を祀った寺で、ボンベイという地名もこの女神の名によるといわれる。

②マハーラクシュミー寺院

ラクシュミー女神を祀る寺院。

(二) プーナ Poona（あるいはプネー Pune、マハーラーシュトラ州）

パールヴァティー寺院

一八世紀、バージラーオ一世が建立したパールヴァティー女神を主神とする寺院。

(三) マハーバレーシュワル Mahābaleshwar（マハーラーシュトラ州）

クリシュナバーイー寺院

クリシュナ川の水源に建てられた寺院。

(四) エローラ Ellora（マハーラーシュトラ州、オーランガバードの北西三〇キロの石窟寺院群）

①カイラーサ・ナータ寺院

第一六窟。カイラーサ山の主としてのシヴァ神を祀った巨大な寺院。ラーシュトラクータ朝のクリシュナ一世の命により七五六年に着工、一〇〇年以上をかけて完成したといわれる。

②グリシュネーシュワル寺院

石窟から一・五キロほどのところにあるシヴァ寺院。

(五) ドワールカー Dwārkā（ドヴァーラカー、グジャラート州。カーティヤーワール半島西端のヒンドゥー

教の聖地）

ドワールカーナート寺院（ドヴァーラカナータ）

クリシュナ神を祀る寺院。

〔南インド〕

(一) マドラス Madras（タミールナドゥ州）

①カパレーシュヴァラ寺院

高いゴープラム門塔をもった南インド様式のシヴァ寺院。

②パールタサーラティ寺院

クリシュナ神を祀るヴィシュヌ派の寺。

(二) カーンチープラム Kanchipuram（タミールナドゥ州、七大聖都の一つ）

①カイラーサナータ寺院

カイラーサの主としてのシヴァ神を祀る。

②ヴァイクンタペルマール寺院

ナンディヴァルマン王（七一七―七七九）建立のパッラヴァ朝初期の寺院。

③エーカーンバレーシュヴァラ寺院

④カーマコーティピータ寺院

⑤ヴァラダラージャスヴァーミー寺院

(三) マハーバリプラム Mahābalipuram（タミールナドゥ州）

①五つの堂 Five Ratha

サハデーヴァ・ラタ、ドラウパディー・ラタ、アルジュナ・ラタ、ビーマ・ラタ、ダルマラージャ・ラタとよばれる五つの岩彫りの堂の総称。中央のビーマ・ラタのかまぼこ型の屋根はゴープラムの原型といわれる（七世紀建立）。

②海岸寺院 Shore temple

八世紀前半ころ建立のシヴァ寺院。

③アディラーマチャンダ寺院

④ダルマラージャ寺院

⑤パンチャパーンダヴァ寺院

⑥ラーマーヌジャ寺院

(四) チダムバラム Chidambaram（タミールナドゥ州、

南インドの代表的聖地）

ナタラージャ寺院

一〇世紀建立のナタラージャ（舞踏の主）としてのシヴァ神を祀った大寺院。チョーラ王ヴィーラ・チョーラがシヴァ神が海岸で妻パールヴァティーと踊っているのを見てカナカ・サバー Kanaka-sabhā（黄金の神殿）を建て、踊るシヴァ神を祀ったと伝えられる。

㈤ タンジャーヴール Thanjavur（タンジョール Tanjore、タミールナドゥ州）

①ブリハディーシュヴァラ寺院

チョーラ王ラージャラージャ一世が一〇一〇年に建立したシヴァ寺院。一般にはグレート（あるいはビッグ）テンプル Great (Big) Temple として知られる。チョーラ王朝の王たちが建立した寺院の中最大のもの。

②スブラマニエーシュヴァラ寺院

一八世紀建立のヴィシュヌ寺院。

㈥ ティルチラパッリ Tiruchirapalli（タミールナドゥ州）

①ラグナータスヴァーミー寺院

カーヴェーリー川の中洲中央にあるヴィシュヌ寺院で、通称はシュリーランガム Śrīraṅgam 寺院。チョーラ王朝時代（一二世紀）、ラーマーヌジャが滞在したところとして知られる。現在の建物は一七世紀のもの。

②ジャムブケーシュヴァラ寺院

別名をティルワーナイカーヴァル寺院といい、シヴァ神を祀る。

㈦ マドゥライ Madurai（タミールナドゥ州）

ミーナークシー寺院

ミーナークシー（魚の目をもつ女神）を祀る寺院で、ナーヤカ王朝のティルマライ・ナーヤカ王（一六二三―五九）の時代の建立。この寺院を中心に、シヴァ神とミーナークシー女神との結婚の祭りがおこなわれる（四―五月）。

㈧ ラーメーシュヴァラム Rāmeśvaram（タミールナドゥ州）

ラーマナータスヴァーミー寺院

マドゥライの東南、スリーランカーの方角に向ってつき出した半島の先端の島にある寺院。シヴァ神のリンガを祀る。南インドのヒンドゥー教徒にとっては、北インドの聖地ヴァーラーナシーへ行って聖なる河ガンジスの水を汲み、その水を持ち帰ってラーメーシュヴァラムのシヴァ・リンガを洗い清めて、初めて巡礼が完成すると信じられている。

㈨ トリヴァンドラム Trivandram（ケララ州）

パドマナーバスヴァーミー寺院

パドマナーバ（ヴィシュヌ神）はこの町を首都としたトラヴァンコール王家の守護神で、一八世紀にマルタンダ・ヴァルマン王によって建立された。

㈩ シュリーランガパトナム Śrīraṅgapatnam（カルナータカ州、マイソールの北、カーヴェーリー川の中洲の町）

シュリーランガナータ寺院

シュリーランガナータ（ヴィシュヌ神）を祀る。

(十一) ベルール Belur（カルナータカ州、ホイサラ王朝の首都だった町）

①チェーンナ・ケーシャヴァ寺院

一一一三年ホイサラ王ヴィシュヌ・ヴァルダナが建立したヴィシュヌ寺院

②ホイサレーシュヴァラ寺院

ホイサラ王朝の古都の一つハレービードにあるシヴァ寺院。ホイサレーシュヴァラとよばれるシヴァ・リンガを祀る。ホイサラ様式の最大の寺といわれる（現在は遺跡）。

(十二) ハンピ Hampi（ヴィジャヤナガル Vijayanagar、カルナータカ州）

①ヴィッタラスヴァーミー寺院

ヴィジャヤナガル様式の代表的な寺院。

②ヴィルーパクシャ寺院

③コーダンダラーマ寺院

(十三) バーダーミ Badami（カルナータカ州、チャールキヤ王朝の古都）

①マーレーギッティ・シヴァーラヤ寺院
バーダーミ石窟院の北側の丘にある。
②ヴィルーパクシャ寺院
③マッリカールジュナ寺院
④パパナータ寺院
（以上、バーダーミに近いパッタダカルにある）
⑤ラーダーカーン寺院
⑥ドゥルガー寺院
（以上、アイホーレにある）

(十四) ワーランガル Warangal（アンドラプラデーシュ州、カーカティーヤ王朝の古都）

ラーマッパ寺院
カーカティーヤ王朝のガナパティ王（一一九九—一二六二）の建立で、この時代のデカン様式の代表的寺院。

(十五) ティルパティ Tirupati（アンドラプラデーシュ州、ヒンドゥー教の重要な聖地の一）

①ヴェーンカテーシュヴァラ寺院
この地はドラヴィダ民族の山岳信仰と結びついて、七—八世紀ころから聖地とされ、一六世紀のヴィジャヤナガル王の時代にもっとも栄えた。
②カーラハステーシュヴァラ寺院
ティルパティから四〇キロ東にあるシヴァ寺院。

〔付〕ネパール（カトマンドゥ盆地）のヒンドゥー教寺院

(一) カトマンドゥ Kāthmāṇḍu

①クマーリー寺院（生きている女神クマーリーの住む寺院）
②ナーラーヤナ寺院（一六六八年建立のマハーデーヴァ＝ナーラーヤナ神を祀る寺院）
③タレジュ寺院（一六世紀マルラ王朝時代に建立されたネパール王室の寺。）
④シヴァ寺院（一六九二年にブーパレーンドラ・マルラ王の母によって建立されたシヴァ寺院。）
⑤ヴィシュヌ寺院（三層建てのヴィシュヌ寺院）
⑥シヴァ・パールヴァティー寺院（ラーナ・バハードゥル・シャーが一八世紀に建立したもの）
⑦クリシュナ寺院（一六四九年建立のヴィシュヌ派寺院）

⑧ジャガンナータ寺院（一七世紀にラージャー・プラターパ・マルラによって建立されたシヴァ寺院。合歓像が多く安置されている。）
⑨ビーマセーナ寺院
⑩マハーカーラ寺院
⑪セートー・マチェーンドラナート寺院 Seto Machendranāth（シュヴェータ・マツィエーンドラナータ Śveta Matsyendranātha、ジャナ・バハール Jana Bahal、ローケーシュヴァラ Lokeśvara ともよばれる。この寺の本尊をヒンドゥー教徒はシヴァ神として、仏教徒は観音として崇拝する。）
⑫アンナプールナー寺院（アンナプールナー女神を祀る。）
⑬パシュパティ・ナート（カトマンドゥ市の東五キロにあるシヴァ寺院。ガンジス河の支流バグマティー川のほとりにあり、ネパール最大のヒンドゥー教徒の巡礼地。川の岸には沐浴場と火葬場があり、その北側には二〇〇〇以上のシヴァ・リンガが祀られている。）

(二) パタン Patan（ラリトプール Lalitpur）

①クリシュナ寺院（一七二三年、ヨーガナレーンドラ・マルラ王の娘ヨーガマティーによって建立されたヴィシュヌ寺院）
②ハリ・シャンカラ寺院（シヴァ・ヴィシュヌ両神を祀る寺院）
③ナラシンハ寺院（一五九〇年にプランダラ・シングによって建立された寺院）
④クリシュナ・ラーダー寺院（ダーバー広場にあるネパール最大の寺の一つ。カトマンドゥ盆地で最も神聖な場所の一つ。一七世紀にラージャー・シッディ・マッラ王によって建立）
⑤ジャガンナーラーヤナ寺院（一般にはチャル・ナーラーヤナとよばれ、一五六六年プランダラ・シンハ・マッラ王によって建立）
⑥ヴィシュヴァナータ寺院（一六二七年、ラージャー・シッディ・ナラシンハ王によって建立）
⑦ラトー・マチェーンドラナート寺院（ラクトー・マツィエーンドラナータ Rakto Matsyendranātha、ターハー・バハール Tāhā Bahāl、アヴァローキテーシュヴァラ Avalokiteśvara ともよばれる。一四〇八年の建立で、ヒンドゥー教徒からも仏教徒からも崇拝される。）
⑧クムベーシュヴァラ寺院（ネパールで最も重要な寺院の一つ。パゴダ様式の五重の塔をもつ寺で、シヴァ神を祀る。一四世紀の建立）

(三) バドガオン Bhadgaon（バクタプール Bhaktapur）

①ニャータポーラ寺院（五階建ての寺院の意で、五重の塔の寺。一八世紀、マッラ朝最後のバドガオン王ブーパティーンドラ・マッラの建立）

②バイラヴァナート寺院（シヴァの化身バイラヴァを祀る寺で、一七世紀の建立）

③ダッタトレーヤ寺院（一四二七年、ヤクシャマルラ王によって建立されたもので、ヴィシュヌ神を祀る）

ヒンドゥー教の主要な祭礼

一　全国的な祭礼

(一) マカラサンクラーンティ Makarasaṅkrānti

太陽暦の元旦。太陽がマカラ宮に入り、黄道上で南から北に移る日として、インド各地でさまざまな祭りが行なわれる。とくに南インドではポンガルとよばれる祭りが盛大におこなわれる。

(二) ヴァサンタ・パンチャミー Vasanta Pañcamī

「ヴァサンタ月の第五日」の意味で、マーガ月（一―二月）の五日に行なわれるサラスヴァティー女神の祭り。シュリーパンチャミー Śrīpañcamī ともよばれる。

(三) マハーシヴァラートリー Mahāśivarātri

「シヴァ大夜祭」の意で、単にシヴァラートリーともいう。パールグナ月（二―三月）に行なわれるヒンドゥー教の主要な祭礼の一つ。シヴァ教徒はこの夜祭の日は断食し、精進潔斎してシヴァの象徴であるリンガを礼拝する。

(四) ホーリー Holī 祭

パールグナ月（二―三月）に行なわれる。ヒンドゥー教の「春の祭典」で、満月の日の十日前から始り、満月の当日に終る。もとは豊年祈願から始まった祭礼であり、北インドを中心に、インド中の人々が参加する大祭。

(五) ラーマ・ナヴァミー Rāma Navamī

チャイトラ月（三―四月）の九日から十一日にかけて行なわれるラーマ生誕祭。ラーマの生誕地といわれる北インドではとくに盛大に祝われ、人々は『ラーマーヤナ』の朗読を聞き、サラユー川で沐浴を行なう。

(六) ジャンマ・アシュタミー Janma Aṣṭamī

シュラーヴァナ月（七―八月）に行なわれるヴィシュヌ神の化身クリシュナの生誕祭。ゴークラ・アシュタミー Gokula Aṣṭamī、クリシュナ・ジャヤンティー Kṛṣṇa Jayantī ともよばれる。クリシュナの生誕地といわれるマトゥラーを中心に北インドで盛大に祝われる。祭礼はクリシュナが生れたとつたえられる夜中に行なわれ、熱心な信者はそれまで断食する。

(七) ラーキー・プールニマー Rākhī Pūrṇimā、あるいはナーラリー・プールニマー Nāralī Pūrṇimā（ココナット満月祭）

シュラーヴァナ月（七—八月）に行なわれる水神ヴァルナの祭り。水辺で市が開かれ、人々は神に捧げるココナットを水に流す。

(八) ガネーシャ・チャトゥルティー Gaṇeśa Caturthī

バードラパダ月（八—九月）の四日に行なわれるガネーシャの生誕祭。人々は土で象の頭をしたガネーシャ像をつくり、あるいは街頭で売っているガネーシャ像を買って来て家に三日間飾って祈りを捧げた後に水に沈める。

(九) ドゥルガープージャー Durgāpūjā、ダシャラー Dussera

アーシュヴィン月（九—十月）に行なわれるシヴァの神妃ドゥルガーの祭礼。ヒンドゥー教の三大祭の一つ。祭礼は十日間つづけられ、はじめの九夜をナヴァラートリー Navarātrī（九夜）といい、この間音楽や舞踊の催しが行なわれる。十日目にドゥルガー女神の像がかつぎ出され、信者たちによって水に沈められて祭りを終える。とくにベンガル地方で盛んに行なわれ、月例祭の八日とドゥルガーが悪牛マヒシャ・アスラにうち勝った記念日の十日が重視される。地方によっては、初めの三日にドゥルガー女神、つぎの三日にヴィシュヌ神の神妃ラクシュミー、最後の三日にブラフマー神の神妃サラスヴァティーを祝うところもある。

(十) ディーワーリー Diwārī

カールッティカ月（十—十一月）に行なわれるラクシュミー女神を祀る祭礼。正しくはディーパーヴァリー Dīpāvalī といい、全国的に祝われるヒンドゥー教の三大祭の一つ。商人階級や庶民の祭り。

二　地方的な祭礼

(一) ポンガル Pongal

太陽暦の元日の祝いを南インドのタミールナドゥ、アーンドラプデーシュではポンガルという名の収穫祭として祝う。

(二) ボーガリ・ビフ Bhogali Bihu

アッサム地方で一月に行なわれる収穫祭。

(三) ハヌマーン・ジャヤンティ Hanumān Jayanti

チャイトラ月（三—四月）の満月の日に行なわれる。『ラーマーヤナ』の物語の中でラーマを助けた猿の英雄ハヌマーンの祭礼。マハーラーシュトラ州で行なわれる。

(四) シヴァージー・ジャヤンティ Shivaji Jayanti

五月七日、マラータの英雄シヴァージー（一六三〇—一六八〇）の生誕を祝う祭。マハーラーシュトラ州。

(五) ティージュ Teej

アーシャーダ月（六月—七月）にラージャースターン州で行なわれる祭礼。シヴァ神の神妃パールヴァティーの祭りで、人々はこの女神を親もとから夫のもとへ行く娘として扱うのが特色。

(六) ナーガ・パンチャミー Nāga Pañcamī

シュラーヴァナ月（七—八月）に、主として南インド、マハーラーシュトラ州、ベンガル地方で行なわれるナーガ（蛇）の祭り。

(七) オーナム Onam

バードラパダ月（八—九月）にケララ州で行なわれる祭り。ヒンドゥー神話の悪魔マハーバリを祭る。この地方では、ヴィシュヌ神によって地獄に追われた魔神は、実はこの地方の王であると信じられており、一年に一日、地獄より迎えいれて祭るのである。

三　特定の寺院に関係する祭礼

(一) ラタ・ジャートラ Ratha Jātra（山車の祭り）

プリー（オリッサ州）のジャガーンナート寺院に関係する祭礼。毎年六月下旬に行なわれ、一六の車輪をもつ巨大な山車三台に、クリシュナと兄のバララーマ、妹のスバドラーの三神像を乗せて、二キロ離れたところにあるグンディチャ・バリとよばれる寺院まで引いて行く行事を中心とした祭り。

(二) ヴィトーバ Vithoba 寺院の祭礼

マハーラーシュトラ州のパンダルプルにあるヴィトーバ寺院の祭り。この地方では、ヴィトーバはヴィシュヌ神の化身と信じられており、毎年四、七、十一月にヴィトーバの祭りが行なわれる。

(三) ブラフモートサヴァ Brahmotsava

アーンドラプラデーシュのティルパティにあるヴェーンカテーシュヴァラ寺院の祭礼。毎年九月に、ヴェーンカタ

（丘の名）の主であるヴィシュヌ（あるいはクリシュナ）の祭りが行なわれる。

㈣　ミーナークシー寺院の祭礼

タミールナドゥ州のマドゥライにあるミーナークシー寺院は、「魚の目をもつ女神」を祀っている。この女神はもともとドラヴィダ系の地方神であったが、次第にシヴァ神の信仰と結合してシヴァの神妃パールヴァティーと同一視されるようになった。この結合が、現在、ヴァイシャーカ月（四―五月）に、シヴァ神とミーナークシー女神の結婚の祭りとして祝われている。

㈤　ヴァイクンタ・エーカーダシー Vaikuṇṭha Ekādaśī

タミールナドゥ州ティルチラパッリにあるラグナータスヴァーミー寺院（通称シュリーランガム寺院）の祭礼。パウシャ月（十二―一月）にヴィシュヌの大祭が行なわれる。

㈥　プーラム Pooram

ケララ州中部のトリチュルで毎年五月に行なわれる祭り。象のパレードで知られる。

四　メーラー Melā

川の岸辺、湖の岸、丘などの聖なる場所で行なわれる祝祭をメーラーといい、毎年行なわれるものと特定の年に行なわれるものとがある。日本の縁日に当り、市が開かれ、多くの人々が集まる。

(1)　クムバ・メーラー Kumbha Melā

一二年間に一度（一月）、ハルドワール、ウッジャイン、プラヤーガ（アラーハーバード）、ナーシクの四聖地で行なわれるインド最大の祝祭。これらの四つの地は、神々とアスラたちが乳海を攪拌して取り出した不死の霊水アムリタを奪いあったときに、霊水のこぼれた場所であると信じられてる。

(2)　マーガ・メーラー Māgha Melā

毎年マーガ月（一―二月）にプラヤーガで行なわれる。このとき聖なる河で沐浴すれば最も功徳があると信じられている。

(3)　クルクシェートラの日食・月食時の祝祭

『マハーバーラタ』の古都クルクシェートラ（デリーの北西約一九三キロにある）で、日食・月食のとき行なわれる祝祭。

(4)　カールッティカ月のメーラー

タミールナドゥ州のアルナーチャラ Aruṇācara（ティルヴァンナーマライ Tiruvaṇṇāmalai）でカールッティカ月（十一―十二月）に行なわれるシヴァ・リンガの祭り。南インドではアルナーチャラの丘そのものが聖なるシヴァ・リンガとみなされている。

(5)　カンサ・カー・メーラー Kansa-kā Melā

クリシュナの生誕の地といわれるマトゥラーで、カールッティカ月（十一―十二月）に行なわれる祭り。クリシュナとバララーマの兄弟が悪王カンサを滅ぼしたことを祝う。

(6)　ガンガーサーガラ・メーラー Gaṅgāsāgara Melā

ガンジス河の河口近くにある聖なる島サーガル島で、毎年マーガ月（一―二月）に行なわれる祭り。

(7)　プシュカラ・カー・メーラー Puṣkara-kā Melā

ラージャースターン州アジュメール市にあるプシュカラ湖畔で、毎年カールッティカ月（十―十一月）に行なわれるブラフマー神の祭り。

〔付〕　ネパール（カトマンドゥ盆地）のヒンドゥー教の祭礼

㈠　マーガ月（一―二月）

マカラ・サンクラーンティ Makara Saṃkrānti

マーガ・サンクラーンティ Māgha Saṃkrānti（マーガ月の初日の祝祭）ともいう。

㈡　パールグナ月（二―三月）

ヴァサンタ・パンチャミー Vasanta Pañcamī あるいはシュリーパンチャミー Śrīpañcamī

シヴァラートリー Śivarātrī（シヴァ神の夜祭り）

㈢　チャイトラ月（三―四月）

ホーリー・プージャー Holī Pūjā（春の色粉掛け祭り）

ゴーラ・ジャートラ Ghora Jātra（悪疫退散のための競馬祭り）

ラーマ・ナヴァミー Rāma Navamī（ラーマ生誕祭）

㈣　ヴァイシャーカ月（四―五月）

ナヴァ・ヴァルシャ Nava Varṣa、あるいはエーク・バイサーク Ek Baisākh（新年元旦の祝い）

ラトー・マチェーンドラナート・ジャートラ Rato Machendranāth Jātra（赤マチェーンドラナート寺院の山車祭。カトマンドゥ盆地最大の祭礼）
バラジュ・メーラー Balaju Melā（この月の満月の日に行なわれるバラジュの祭り）

(五) ジェーシュタ月（五―六月）
クマール・シャシュティ Kumār Saṣṭhī（この月の第六日に行なわれる軍神クマールの生誕祭）

(六) アーシャーダ月（六―七月）
ナーガパンチャミー Nāgapañcamī（蛇の祭り）
ガンタ・カルナ Ghanta Karṇa（すべての邪悪なものをはらう行事）

(七) バドラ月（八―九月）
ガイ・ジャートラ Gai Jātra（牛祭り）
クリシュナ・ジャヤンティ Kṛṣṇa Jayanti（クリシュナ生誕祭）
ティージュ Teej（女性の祭り）

(八) アーシュヴィン月（九―十月）
インドラ・ジャートラ Indra Jātra（インドラ神の仮面祭り）
ダサイン Dasain、あるいはドゥルガー・プージャー Durgā Pūjā（ドゥルガー女神の祭礼）

(九) カールッティカ月（十―十一月）
ディワーリー Diwālī、あるいはディーパーヴァリー・プージャー Dīpāvalī Pūjā（灯明の祭り）
ハリボーディニー・エーカーダシー Haribodhinī Ekādaśī（ヴィシュヌ神の帰還の祝祭）

(十) マーガ月（十一―十二月）
グジェーシュヴァリー・ジャートラ Gujeśvarī Jātra（シヴァの神妃サティーの祭り）
シーター・ビバハ・パンチャミー Sītā Bibaha Pañcamī（シーターとラーマの結婚を祝う祭り）
ダニヤ・プールニマー Dhanya Pūrnimā（秋の収穫祭）

(十一) パウシャ月（十二―一月）
セートー・マチェーンドラナート・スナン Seto Machendranāth Snan（白マチェーンドラナート寺院の祭礼）
ビームセーム・プージャー Bhimsem Pūjā（ビーマセーナの祭礼）

インド宗教・文化史年表（＊仏教関係 ◇イスラム教関係）

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
前三〇〇〇		インダス文明（三〇〇〇―二〇〇〇ころ）
		アーリヤ人、パンジャーブ地方に侵入（一三〇〇ころ）
一〇〇〇	『リグ・ヴェーダ』成立（一二〇〇―一〇〇〇）	
八〇〇	『ブラーフマナ』成立	
六〇〇	初期の古ウパニシャッド成立	アーリヤ人、ガンジス川流域に進出
	クリシュナ、ヤーダヴァ族の間に新宗教を説く（前七世紀以前）	
五〇〇	＊釈尊入滅（南伝四八五、または四八六、北伝三八三）	都市の成立（五〇〇ころ）
	ジャイナ教開祖マハーヴィーラ（四四四―三七二ころ）	
四〇〇		マガダ国王アジャータシャトル即位（三九〇ころ）
三五〇	パーニニ、ヴァースデーヴァの信仰について記す	『パーニニ文典』成立（三五〇ころ）
		アレキサンドロス大王インド侵入（三二七）
		チャンドラグプタ、マウリヤ王朝創始（三一七）
三〇〇	カウティリヤ、シヴァ神殿について記す	カウティリヤ『実利論』
	メガステネース、シヴァ・クリシュナ信仰について記す	メガステネース、パータリプトラ滞在（三〇〇ころ）
	ガウタミープトラ、ガルダ・ドヴァジァを建てる	ビンドゥサーラ王（二九三―二六八在位）
		アショーカ王即位（二六八）

西紀

二六〇　二五〇　二〇〇　一五〇　一〇〇　五〇

インド宗教史関係

*アショーカ王、仏教に帰依、インド各地に伝道師派遣

『祭事経』成立

古典サーンキヤ学派成立

ミーマーンサー学派開祖ジャイミニ（二〇〇―一〇〇ころ）

*プシュヤミトラ王、仏教を迫害

*メナンドロス（ミリンダ）王、仏教を信仰

*説一切有部成立

カナーダ（ヴァイシェーシカ学派開祖、一五〇―五〇ころ）

『バガヴァッド・ギーター』原型成立

パタンジャリ『大註解書』を著し、シヴァ・スカンダ、シヴァ・バーガヴァタの信仰について記す

*部派分裂ほぼ終る

バーダラーヤナ（ヴェーダーンタ学派開祖、一〇〇―一ころ）

*般若経原型成立。大乗仏教興起

インド一般史関係

アショーカ王、カリンガ征服（二六一）

ディオドトス、バクトリヤ王国をたてる（二五〇）

アルサケース、アルサケース王朝創始（二四八ころ）

ペルシャ、ササン朝成立（二二六）

バクトリヤ第四代デーメートリオス即位（一八九ころ）、インド侵入

プシュヤミトラ、マウリヤ王朝を滅ぼしてシュンガ王朝創始（一八〇ころ）

エウクラティデース、バクトリヤを奪う（一七五ころ）

ミトラダテース王（一七一―一三八）

アポロドトス王、西部インド支配（一六七―一六三ころ）

メナンドロス王統治（一五五―一三〇ころ）

サカ族、バクトリヤ侵入（一四〇ころ）

サカ族のマウエース王、ガンダーラに侵入（九〇―八〇ころ）

シュンガ王朝滅亡、カーンヴァ王朝おこる（七五ころ）

ヴィクラマ紀元始まる（五八、あるいは五七）

アゼース一世、カーブル渓谷地方征服（三八）

カーンヴァ王朝滅ぶ（三〇ころ）

シムカ、南インドにシャータヴァーハナ王朝をたてる（三〇

紀元後　一〇〇　二〇〇　三〇〇

インド宗教史関係

『バラタのナーティヤ・シャーストラ』

ガウタマ（ニヤーヤ学派開祖、五〇―一五〇ころ）

『ヴァイシェーシカ・スートラ』成立（五〇―一五〇ころ）

『ミーマーンサー・スートラ』成立（一〇〇ころ）

*『法華経』『華厳経』などの初期大乗経典成立（一―三世紀ころ）

*カニシュカ王、仏教に帰依

*『阿毘達磨大毘婆沙論』成立

*アシュヴァゴーシャ『仏所行讃』

*アマラーヴァティー大塔（一五〇―二五〇）

*フヴィシュカ寺建立

*ナーガールジュナ（龍樹、一五〇―二五〇）『中論』『十二門論』『大智度論』

*ラーフラバドラ（中観派、二〇〇―三〇〇）

『マヌ法典』成立（前二〇〇―二〇〇）

*中期大乗経典成立（二〇〇―四〇〇ころ）

『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』（前二〇〇―二〇〇ころ成立、四〇〇ころ現形確定）

*マイトレーヤ（弥勒、二七〇ころ）『瑜伽師地論』『大乗荘厳経論』

イーシュヴァラクリシュナ（四世紀）『サーンキヤ・カーリカ

インド一般史関係

ころ、前三世紀説もある）

インド・パルティヤ王ゴンドーファレース（一九―四五）

クシャーナ族のクジューラカドフィセース、バクトリア統一、インド・ガンダーラ地方侵入（一世紀前半）

フラオーテース、タクシャシラー支配（四二―四四ころ）

ウェーマ・カドフィセース、インドのクシャーナ帝国確立、シャカ暦始まる（七八）

半島南部で、チョーラ、チェーラ、パーンディヤ国おこる（一〇〇ころ）

カニシュカ王在位（一三〇―一五〇ころ）

ガウタミープトラ・シャータカルニ王、クシャハラータを滅ぼす（一三〇ころ）

ヴァーシシカ王の統治（一五二―一五六）

フヴィシュカ王の統治（一五六―一九二ころ）

ジャヤデーヴァ王、ネパールのリッチャヴィ王朝創立（二世紀）

クシャーナ王朝おとろえる（二〇〇ころ）

ヴァースデーヴァ王の統治（二〇〇―三二六ころ）

ヴァーシプタ・シリ王在位（シャータヴァーハナ王朝、二二五―二五〇ころ）

チャータムーラ王、イクシュヴァーク王朝創始（三世紀）

マウリカ王朝、西部インド支配（三世紀）

チャンドラグプタ一世即位、グプタ朝始まる（三二〇）

西紀 四〇〇

インド宗教史関係

ー』
ヴァーツヤーヤナ『カーマ・スートラ』
シュードラカ『ムリッチャカティカー』
＊アサンガ（無著、三一〇―三九〇）『摂大乗論』
チャンドラグプタ二世、ヴィシュヌ教に帰依し、自らパラマ・バーガヴァタと称す
カーリダーサ活躍
＊ヴァスバンドゥ（世親、四〇〇―四八〇）『唯識二十論』『唯識三十頌』『摂大乗論釈』
『ブラフマ・スートラ』成立（四〇〇―四五〇）
『ヨーガ・スートラ』成立（四〇〇―四五〇）
＊法顕のインド巡礼（四〇五―四一一）
＊ナーランダー寺建立
ヴィシュヌ信仰ひろがる
碑文にシヴァ・リンガについての記録あらわれる（四三六）
ウダヤギリ石窟（五世紀）
カポーテーシュヴァラ、ラード・カーン等の寺院建立
クンダクンダ（ジャイナ教空衣派、四―五世紀）
プラシャスタパーダ（ヴァイシェーシカ学派、四五〇―五〇〇）『パダールタ・ダルマサングラハ』
ウパヴァルシャ（ミーマーンサー学派、四五〇―五〇〇）
バルトリハリ（文法学派、五世紀後半）
＊ブッダパーリタ（仏護、四七〇―五四〇）『中論註』

インド一般史関係

サムドラグプタ王在位（三三五―三七六ころ）
チャンドラグプタ二世在位（三七六―四一五ころ）
キダーラ・クシャーナ族の支配（三九〇―四六〇ころ）
クマーラグプタ王在位（四一五―四五五ころ）
スカンダグプタ王在位（四五五―六七）
ハリシェーナ（ヴァーカータカ王朝、四七五―五一〇）
バタールカ、北インドにマイトラカ王朝創始（四八〇）
インドラヴァルマン、東ガンガ朝をおこす（四九八―）
デカン北部にヴァーカータカ王朝栄える（五世紀後半―六世紀中ごろ）

西紀 五〇〇 六〇〇

インド宗教史関係

ヴィシャーカダッタ『ムドラーラークシャサ』
＊ディグナーガ（四八〇―五四〇）『観所縁論』『集量論』
＊スティラマティ（安慧、五〇〇―五五〇）『唯識三十頌註』
ヴィヤーサ（ヨーガ学派、五〇〇ころ）『ヨーガ・スートラ注』
＊バーヴァヴィヴェーカ（清弁、五〇〇―五七〇）
古い『プラーナ』形をととのえる（五〇〇ころ）
アジャンター第一六・一七・一九窟（五〇〇ころ）
＊シーラバドラ（戒賢、六四五ころ）
＊アスヴァバーヴァ（無性、五三〇ころ）
＊ダルマパーラ（護法、五三〇―五六一）『成唯識論』
バーグ窟院、アイホーリのドゥルガー堂（六世紀）
シャバラスヴァーミン（五五〇ころ）『ミーマーンサー・スートラ注』
ウッディヨータカラ（ニヤーヤ学派、六世紀後半）『ニヤーヤヴァールッティカ』
＊チャンドラキールティ（月称、六〇〇―六五〇）『プラサンナ・パダー』
＊ダルマキールティ（法称、六〇〇―六八〇）『ニヤーヤ・ビンドゥ』
バーナ『ハルシャチャリタ』『カーダンバリー』
＊玄奘のナーランダー寺院滞在（六三四―六四三）
ダンディン『ダシャクマーラチャリタ』
スバンドゥ『ヴァーサヴァダッター』
アジャンター第一・二窟完成（七世紀後半）
『アーガマ』成立（七―八世紀）

インド一般史関係

エフタル王トーラマーナ、中央インド占領（六世紀初）
ミヒラクラ王即位（五一〇）
マールワー王ヤショーダルマン、匈奴（フーナ）を破る（五三〇）
プラケーシン一世、デカン西部にチャールキヤ王朝（バーダーミ）をおこす（五四三）
イーシャーナヴァルマ王（五五〇―七六ころ）のもとで、マウカリ朝（カナウジ）隆盛
グハセーナ王（五六〇ころ）のもとで、マイトラカ朝（ヴァラビー）隆盛
シンハヴィシュヌ王（五七四―六〇〇ころ）のもとで、パッラヴァ朝隆盛
ハルシャヴァルダナ王統治（六〇六―六四七）
マヘーンドラヴァルマン（パッラヴァ王朝、六〇〇―六四二ころ）
ヴィシュヌヴァルダナ、東チャールキヤ朝をおこす（六二四）
ナラシンハヴァルマン一世（六三〇―六六八）のころ、タミール三国支配
アーディティヤセーナ、後期グプタ朝を隆盛にみちびく（六七二ころ）

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
	アールワールのバクティ運動（五〇〇―八五〇ころ）（ポイカイ・アールワール、ブータッタール、ペーヤワール、ティルマリシャイ・アールワール、ナムマールワール、マドゥラカヴィ・アールワール、クラシェーカラ・アールワール、ペリアールワール、アーンダル、トンダラディッポディ・アールワール、ティルッパーン・アールワール、ティルマンガイ・アールワール） ナーヤナールの活躍、アッパル（六〇〇―六八一）、ティルニャーナサンバンダル（六〇四―六六〇）、スンダラムールティ（七一〇―七三五ころ）、マーニッカヴァーチャカル（六六〇―六九二） クマーリラ（ミーマーンサー学派、六五〇―七〇〇） ＊シャーンティデーヴァ（六五〇―七〇〇）『菩提行経』 ＊義浄、インドに滞在（六七三―六八五） ＊シャーンタラクシタ（六八〇―七四〇）『真理綱要』 エレファンタ石窟（七世紀後半）	ナラシンハヴァルマン二世（六九五―七二二）
七〇〇	シャンカラ（七〇〇―七五〇）『ウパニシャッド』『ブラフマ・スートラ』『ギーター』等に注釈し、不二一元論を唱える。 カーンチーのカイラーサナータ寺建立（七〇〇ころ） マハーバリプラム海岸寺院建立 プラバーカラ（ミーマーンサー学派グル派の祖、七〇〇ころ） アマル『アマルシャタカ』 ＊カマラシーラ（七〇〇―七五〇）『真理綱要注』	ウマイヤ朝のムハンマド・ビン・カーシムの軍隊、インダス河下流域に達する（七一二） シュリープルシャ（西ガンガ朝、七二五―八八ころ） ナーガバター、プラティハーラ朝をおこす（七三〇―五六ころ） マーラヴァルマン・ラージャシンハ一世（パーンディヤ朝、七三〇―六五）

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
	バースカラ（ヴェーダーンタ学派、七五〇―八〇〇） ＊パドマサンバヴァ（七六〇ころ） エローラのカイラーサナータ寺建立（八世紀後半）	ヴィクラマーディティヤ二世（チャールキヤ朝）、パッラヴァ朝の首都カーンチーに侵入（七四〇ころ） ゴーパラ、パーラ王朝をおこす（七五〇） ダンティドゥルガ、チャールキヤ朝を倒し、ラーシュトラクータ朝をおこす（七五二） ダルマパーラ（パーラ朝、七七〇―八一〇） ゴーヴィンダ三世（七九二―八一〇）
八〇〇	『タントラ』文献成立（八〇〇年以後） ティルムーラル『ティルマンディラム』（八〇〇ころ） カシュミールのシヴァ派おこる（九世紀初） ヴァスグプタ（カシュミールのシヴァ派）『シヴァ・スートラ』を著す（八二五） ＊ハリバドラ『現観荘厳論註』（九世紀） エローラ石窟寺院の重要部分完成（九世紀）	デーヴァパーラ（八一〇―五〇）パーラ王朝の勢力拡大 アモーガヴァルシャ一世（ラーシュトラクータ朝、八一四―八〇） ヴィジャヤーラヤ、チョーラ朝再興（八四六―七一ころ） グナガ・ヴィジャヤーディティヤ三世（東チャールキヤ朝八四九―九二） シュリー・プラムビヤムの戦（八八〇）パッラヴァ朝・チョーラ朝・ガンガ朝の連合軍、パーンディヤ朝を破る アーディティヤ一世（チョーラ朝）パッラヴァ朝を倒す（八九七ころ）
九〇〇	ソーマーナンダ（カシュミールのシヴァ）『シヴァドリシュティ』（九〇〇ころ） ウトパラ（カシュミールのシヴァ派）『プラティアビジュナー・スートラ』（九三〇） 『バーガヴァタ・プラーナ』成立（一〇世紀） アビナヴァグプタ（カシュミールのシヴァ派）『パラマールタサーラ』『プラティアビジュニャーナ・マルシニ』（九六〇ころ）	インドラ三世（ラーシュトラクータ朝、九一五―二七ころ） ムーララージャ（チャールキヤ朝、またはソーランキー朝、九四二―九七） アルプタギーン、ガズニーでガズニー朝をおこす（九六二ころ） クリシュナ三世（ラーシュトラクータ朝）北インド侵入（九六三ころ）

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
	デーヴァナーガリー文字の形成（一〇世紀） ＊アティーシャ（九八〇―一〇五二） 『ヤーラマ』（左道シャクティ派聖典）成立（一〇―一一世紀） ブバネーシュワル寺院建立（一〇世紀末）	タイラ二世、ラーシュトラクータ朝を倒し、チャールキヤ朝再興（カリヤーニのチャールキヤ朝、九七三） スブクタギーン、ガズニー朝をはじめる（九七六―九九七） ラージャラージャ一世（チョーラ朝、九八五―一〇一六）
一〇〇〇	劇作家ラージャシェーカラ 詩論家アビナヴァグプタ ナートムニ『ナーラーイラ・プラバンダム』（「タミルヴェーダ」）（一〇〇〇ころ） タンジョールのラージャラージェーシュヴァラ寺（一〇〇九ころ） ヤームナアーチャーリヤ（シュリーヴァイシュナヴァ派の真の創立者）『シッディトラヤ』『アーガマ・プラーマーニヤ』『ギーターサングラハ』（一〇五〇ころ）	マフムード在位（九九七―一〇三〇） ラージェーンドラ一世（チョーラ朝、一〇一二―一〇四四在位）、シュリーヴィジャヤと交戦、パレンバン占領 マフムード、カナウジ攻略、プラティハーラ朝を滅ぼす（一〇一八） ラクシュミーカルナ（カラチュリ朝、一〇四〇―七二） ソーメーシュヴァラ一世（チャールキヤ朝、一〇四二―六八） ヴィーララージェーンドラ一世（チョーラ朝、一〇六三―一〇七〇在位）
一〇五〇	ラーマーヌジャ（シュリーヴァイシュナヴァ派、一一三七）『ヴェーダ』『バガヴァッド・ギーター』『ブラフマ・スートラ』等に註。シュリーランガムのヴィシュヌ寺院充実 ジャイナ教のハリバドラ『六派哲学集』（一〇五〇） ◇シェイフ・イスマーイール没（一〇五六） クシェーメーンドラ『ブリハットカター・マンジャリ』 ソーマデーヴァ『カターサリットサーガラ』（一〇六三）	ソーメーシュヴァラ二世（一〇六八―一〇七六） ヴィクラマーディティヤ六世（チャールキヤ朝、一〇七六―一一二六） ヴィジャヤセーナ（一〇九六―一一五八）、セーナ王朝（ベンガル）を隆盛にみちびく
一一〇〇	シュリーヴァイシュナヴァ派、北方のヴァダカライ派と南方のテンカライ派に分裂（一一三七）	ヴィクラマ・チョーラ王在位（一一一八―三五） クロットゥンガ二世（チョーラ朝、一一三三―一一五〇）

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
	カルハナ『ラージャタランギニー』成立（一一五〇ころ） ジャヤデーヴァ『ギーター・ゴーヴィンダ』（一二世紀） クルケーシャ、ヴィシュヌチッタ（ヴァダカライ派、一二世紀） バサヴァ、ヴィーラシャイヴァ派を創始（一一六〇ころ） マドヴァ（テンカライ派、一一九七―一二七六） 『シュカサプタティ』成立 小本『パンチャタントラ』『ヒトーパデーシャ』 広本『パンチャタントラ』	バッラーラセーナ（セーナ朝、一一五八―七八ころ在位） ゴール朝、ガズニー朝を倒す（一一八六） バッラーラ二世、チャールキヤ朝を破る（一一九〇） ムハンマド・ゴーリー、ジャヤチャンドラ（ガーハダヴァーラ朝）を破る（一一九三） ジャイトゥギ（ヤーダヴァ朝）、プラターパルドラ一世を破る（一一九六）
一二〇〇	＊ヴィクラマシラー寺焼却される（一二〇三） 『ラーマーヤナ』のタミール語訳、テルグ語訳成る（一三世紀） メーイカンダデーヴァ（タミールのシャイヴァ・シッダーンタ派）『シヴァ・ジュニャーナ・ボーダ』（一二二三ころ） 『ヴェーターラパンチャヴィンティカー』 アーブー山のテージャハパーラ寺（一二三〇） アルルナンディ・シヴァアーチャーリヤ『シヴァ・ジュニャーナ・シッディ』（一二五〇ころ） ヴァラダーチャーリヤ（ヴァダカライ派、一三世紀） チャクラダル、マンバウ派形成（一三世紀中ごろ） ヴィシュヌスヴァーミン派形成（一三世紀中ごろ） ◇スーフィズムのファリード・ウッディーン没（一二六五） ◇インドのスフラワルディ派の創始者バハー・ウッディーン没（一二六七）	アクバル、奴隷王朝をはじめる（一二〇六） イールトゥトミシュ（一二一一―三六） チンギス・ハーン、北インド侵入（一二二一） ソーメーシュヴァラ（ホイサラ朝、一二三三―六二在位） ジャータヴァルマン・スンダラ・パーンディヤ一世（後期パーンディヤ王朝、一二五一―六八在位） ギャースッディーン・バルバン（奴隷王朝、一二六六―八七在位）

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
	ソームナートのケーシャヴァ寺建立（一二六八）	マルコ・ポーロ、カーヤルを訪れる（一二八八）
	マライ・ジュニャーナ・サンバンダル（一二八〇ころ）	ジャラールッディーン・ヒルジー、ヒルジー王朝をおこす（一二九〇）
	コナーラクのスーリヤ祠堂（一三世紀）	モンゴル侵入（一二九二）
	ゴーラクシャナート派形成（一三世紀）	アラーウッディーン・ヒルジー、グジャラートを征服（一二九七）
	『アディヤートマ・ラーマヤナ』成立（一三—一四世紀）	
	ラクシュミーラダ・ヴィディヤーナータ（右道シャクティ派、一三世紀後半ころ）	
一三〇〇	ジュニャーネーシュヴァラ、マラータ語で『ギーター』に註を書く（一三〇〇ころ）	トゥグルク朝はじまる（一三二〇）
	◇サイイッド・アミール・フルドのチシュティー派聖者伝『アウリヤー伝』（一四世紀ころ）	
	ウマーパティ・シヴァーチャーリヤ（タミールのシャイヴァシッダーンタ派）『シヴァ・プラカーシャ』（一三一三）	ムハンマド・ビン・トゥグルク（一三二五—五一在位）
	◇アミール・ハサン・スィズジー『心の利益』（一三二二）	イブン・バットゥータ、デリーに滞在（一三三三—四二）
	◇ハミード・カランダル『合会の幸福』（一三五四）	ハリハラ一世、ヴィジャヤナガル王国第一王朝はじめる（一三三六）
	ニンバールカ（一四世紀）不一不異説を説く	アラーウッディーン一世、バフマン王国をおこす（一三四七—五八）
	ベンガルの詩人チャンディー・ダース、クリシュナ信仰を説く（一四〇〇ころ）	ティムール、インドに侵入（一三九八）
一四〇〇	シュリーカンタ・シヴァーチャーリヤ（シャイヴァ・シッダーンタ派）『シャイヴァ・バーシュヤ』（一四〇〇ころ）	

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
	ラーマーナンダの宗教改革	デーヴァラーヤ二世（ヴィジャヤナガル第一王朝、一四二六—四六在位）
	ナームデーヴァ、マラータ語で信愛を説く（一四二五ころ）	ムハンマド・ハーン、マールワのヒルジー朝をひらく（一四三六）
	カビール（一四四〇—一五一八）の宗教改革	バハロール・ロディー、ロディー王朝をはじめる（一四五一）
	◇サイイッド・ムハンマドのマハディー運動（一四五一）	
	◇シェーフ・ジャマーリー『聖者列伝』	サールヴァ・ナーラシンハ、ヴィジャヤナガル第二王朝をはじめる（一四八六）
	ナーナク（一四六九—一五三八）シーク教を始める	ビジャープルのアーディル・シャーヒ朝（一四八九）
	ヴァッラバ（一四七三—一五三一）純粋一元論、『アヌバーシュヤ』、ヴィディヤーナガルの討論会で勝利、ヴァッラバ派形成	アフマッドナガルのニザーム、シャーヒ朝（一四九〇）
	チャイタニヤ（一四八五—一五三三）のバクティ運動、チャイタニヤ派形成	ヴァスコ・ダ・ガマ、カリカットに来る（一四九八）
一五〇〇	女流詩人ミーラ・バーイ（一四九八—一五六三）	ヴィーラ・ナラシンハ、ヴィジャヤナガル第三王朝（一五〇五）
	シーク教第三代グル・アマルダース（一五〇九—一五四）	クリシュナ・デーヴァ・ラーヤ（一五〇九—三〇）
	トゥルシー・ダース（一五三二—一六二四）、東部ヒンディー語で、『ラーム・チャリト・マーナス』を書いたシーク教第四代グル・ラームダース（一五三四—八一）	ポルトガル、ゴアを占領（一五一〇）
一五四〇	◇ササラームのシェール・シャー廟建立	バーブル、デリー入城、ムガル朝をはじめる（一五二六）
	改革派ダードゥー（一五四四—一六〇三）、ダードゥー派形成	フマーユーン（ムガル朝）即位（一五三〇）
	シーク教第五代グル・アルジャンの活躍（一五六三—一六〇六）これよりシーク教グル世襲となる	アクバル（ムガル朝）統治（一五五六—一六〇五）
一五六五	◇デーリーのフマーユーン廟	パーニーパットの戦い（一五五六）
一五七五	◇アクバル、「礼拝の家」（イバーダト・カーナ）を建てる	アクバル、アンベール王女と結婚（一五六二）
一五七九	◇アクバル、「宣言書」（マフザル）公布	ティルマラ、ヴィジャヤナガル第四王朝（一五七〇）
一五八〇	第一次イエズス会使節、アーグラのアクバルのもとに派遣される	リンスホーテン、インドに来る（一五八三）

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
一五八二	◇アクバル、「神の宗教」（ディーネ・イラーヒー）公布	
一六〇〇		イギリス、東インド会社設立（一六〇〇）
一六〇二	シーク教聖典『アーディ・グラント』成る	オランダ、東インド会社設立（一六〇二）
	シーク教第六代グル、ハル・ゴービンド（一六〇六—四五）	
	ジャハンギール、イスラム教保護	ジャハンギール在位（一六〇五—二七）
	トゥカーラーム、マラータ語で信仰を説く（一六〇八—四八）	ムガル・ミニアチュールの最盛期（一七世紀初）
一六〇八	エークナート、『バーガヴァタ・プラーナ』をマラータ語に訳す	
一六二三	◇シカンドラのアクバル廟完成	王子シャー・ジャハーンの叛乱（一六二二）
一六三三	◇タージ・マハール廟起工（一六四三完成）	シャー・ジャハーン（ムガル朝）の治世（一六二八—五八）
	ウルドゥー文学降盛に向かう（一七世紀中ごろ）	ヴィジャヤナガル王国滅亡（一六四六）
一六五三	◇アーグラのモーティー・マスジッド完成	アウランゼーブ在位（一六五八—一七〇七）
一六五九	◇ダーラー・シュコー、『二つの海の合流』	
	シーク教第九代グル・テグ・バハドゥール（一六六四—七五在位）、アウランゼーブ帝に捕えられ、処刑される	ジャート族の叛乱（一六六九） シヴァージー、マラータ王国建設（一六七四）
	シーク教第一〇代グル、ゴービンド・シング（一六七五—一七〇八在位）、入信式を定め、教団を軍隊組織とする	イギリス、ムガル朝と戦う（一六八六） フランス、シャンデルナゴル占領（一六八九）
	アウランゼーブ、イスラム教を保護し、マトゥラーのヒンドゥー寺院破壊	デカンのマラータ勢力再興（一六九二ころ） オランダ、ポンディシュリを占領（一六九三）
		イギリス、新東インド会社結成（一六九八）
一七〇〇	バラデーヴァ（チャイタニヤ派）、『ゴービンダ・バーシュヤ』を書き、不可思議不一不異説を説く（一七〇〇ころ）	イギリス、新旧東インド会社合併、カルカッタのウィリアム要塞完成（一七〇二）
一七〇三	◇シャー・ワリーウッラー『神の深遠なる証明』	

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
	バーラタ・チャンドラ・ラーイ（シャクティ派、一七一二—一七六〇）	
	ラーム・プラサド・セーン（シャクティ派、一七一八—一七七五）	ムハンマド・シャー（ムガル朝、一七一九—四八在位）
	『マールカンデーヤ・プラーナ』のテルグ語訳完成（一八世紀）	
	『デーヴィー・ヴィディヤーナータ』（シャクティ派）のマラーヤム語訳完成（一八世紀）	第一次カーナティック戦争（一七四四—四八） 第二次カーナティック戦争（一七五〇—五四）
一七三八	◇シャー・ワリーウッラー、『コーラン』のペルシャ語訳完成	プラッシーの戦い（一七五七）
一七七二	ラーム・モーハン・ローイ生れる（—一八三三）	第三次カーナティック戦争（一七五八—六三）
		第一次マイソール戦争（一七六七—六九）
		ヘースティングズ、ベンガル知事となる（一七七二）
		ヘースティングズ、初代ベンガル総督（一七七四）
		ロヒラ戦争（一七七四）
		第一次マラータ戦争（一七七五—八二）
一七八一	カルカッタにヒンドゥー・カレッジ設立	第二次マイソール戦争（一七八〇—八四）
一七八四	ジョーンズ、ベンガル・アジア協会設立	ウェルズリ、ベンガル総督（一七九八）
一七九一	サンスクリット・カレッジ設立	ランジート・シング、シーク王国形成（一七九九）
一八〇〇		第二次マラータ戦争（一八〇三—五）
一八一五	アートミーヤ・サバー創立	第三次マラータ戦争（一八一七—一九）
一八一七	デーヴェーンドラナート・タゴール生れる（—一九〇五）	出版制限（一八二三）
一八二四	ダヤーナンダ・サラスヴァティー（—一八八三）生れる	ベンティンク、ベンガル総督（一八二八—三五）
一八二八	ラーム・モーハン・ローイ、ブラーフマ・サマージ設立サティー禁止令出る	ベンティング、最初のインド総督（一八三三）
一八三六	ラーマクリシュナ生れる（—一八八六）	マコーレーの教育覚書（一八三五）

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
一八四三	ケーシャブ・チャンドラ・セーン生れる（―一八八四）	第一次アフガン戦争（一八三九―四二）
一八五一	ゾロアスター教徒指導協会結成	シーク戦争（一八四五―四九）
一八五六	「タイムス・オブ・インディア」刊行 ティラク生れる（―一九二〇）	セポイの反乱（一八五七―五八）
一八五七	カルカッタ大学・ボンベイ大学・マドラス大学創設	ムガル帝国滅亡（一八五八）
一八六三	ヴィヴェーカーナンダ生れる（―一九〇二）	
一八六六	ブーラフマ・サマージ分裂	
一八六七	プラールタナー・サマージ結成	
一八六九	ガーンディー生れる（―一九四八）	
一八七二	オーロビンド生れる（―一九五〇）	
一八七五	ダヤーナンダ、アーリヤ・サマージ結成 ブラヴァツキー夫人とオールコット大佐、神智協会を設立する	
一八七六	スレーンドラナート・バネルジー、カルカッタにインド人協会設立	国王称号法（一八七六）、イギリス女王、インド皇帝を称する（一八七七）
一八七九	ティラク、機関紙「ケーサリー」を発刊	第二次アフガン戦争（一八七八―八〇）
一八八〇	プレーム・チャンド生れる（―一九三六）	
一八八一	ヴィヴェーカーナンダ、ラーマクリシュナと会う	全インド国民会議発足（一八八三）
一八八六	マドラスでサーダーラナ・ダルマ結成（一九〇九、ヴェーディック・ミッションと合体）	第一回インド国民会議開催（一八八五）
一八八七	ダヤーナンダ・アングロ・ヴェーディック学園創立 デーヴァ・サマージ結成	
一八八九	ネルー生れる（―一九六四）	

インド宗教・文化史年表

西紀	インド宗教史関係	インド一般史関係
一八九一	＊大菩提会設立	
一八九二	アーリヤ・サマージ、カレッジ派とマハート派に分裂	
一八九三	アンベドカル生れる（―一九五六） ヴィヴェーカーナンダ、シカゴの世界宗教会議に出席	
一八九六	ヴィヴェーカーナンダ、ニューヨークにヴェーダーンタ協会設立 ラーマクリシュナ・ミッション設立	ヒンドゥスターン・ビハール・パンジャーブに飢饉（一八九六―七）
一八九九	ヴィヴェーカーナンダ、再度渡米、サンフランシスコにヴェーダーンタ協会設立	大飢饉（一八九九―一九〇〇） カーゾン総督となる（一八九九）
一九〇六	◇全インドムスリム連盟結成 『バンデー・マーラタム紙』発刊	ベンガル分割法成立（一九〇五）。インドの民族運動たかまる。 国民会議、ボイコット・スワーデーシーに賛同（一九〇五）
一九〇八	ヒンドゥー・マハーサバー設立	
一九一三	タゴール、ノーベル文学賞をうける	首都カルカッタよりデリーに遷る（一九一三）
一九一四	オーロビンド、『アーリヤ』を発刊	第一次世界大戦はじまる（一九一四）
一九一六	インド奉仕教団設立 国民会議派、ムスリムとの統一行動決定 ヴァーラーナシーにヒンドゥ大学、プーナに女子大学設立	ティラク、インド自治連盟結成（一九一六） 第三次アフガン戦争（一九一九） ローラット法（一九一九） ガーンディー、ハルタルを布告（一九一九）
一九二〇	シーク連盟結成 ガーンディーによるサティヤーグラハ運動はじまる	アムリッツァーの虐殺事件（一九一九） 国民会議派、スワラージ運動を決定（一九二〇）
一九三〇	ガーンディー、「塩の行進」	不服従運動（一九三一）
一九三六	プレーム・チャンド、『牛供養』	インド統治法（一九三五）
一九四〇	◇ムスリム連盟、パキスタン分離決議	第二次世界大戦 国民会議派、イギリスの撤退を決議（一九四二）
一九四六	◇全インド・ムスリム連盟「直接行動日」、カルカッタに暴動	

西紀	インド宗教史関係
一九四六	ボンベイ、ダッカ、ビハールでヒンドゥー・ムスリムの衝突
一九四七	パンジャーブでヒンドゥー・ムスリム衝突
一九四八	ガーンディー、ヒンドゥー・マハーサバーの青年に暗殺される
一九五〇	インド憲法施行により、カーストによる差別、不可触賤民制、法的に廃止される
一九五五	ヒンドゥー家族法改革
一九五六	アンベドカル、仏教帰依

インド一般史関係

インド・パキスタン分離独立（一九四七）
インド共和国成立（一九四八）
新憲法施行（一九五〇）
対日講和条約に不参加決定（一九五一）
日本・インド平和条約調印（一九五二）
周恩来・ネルー会談、平和五原則声明（一九五四）
ゴア解放（一九六一）

へ

ほ

ま

ひ

ふ

な

に

ち

て

と

せ

そ

た

き

く

え

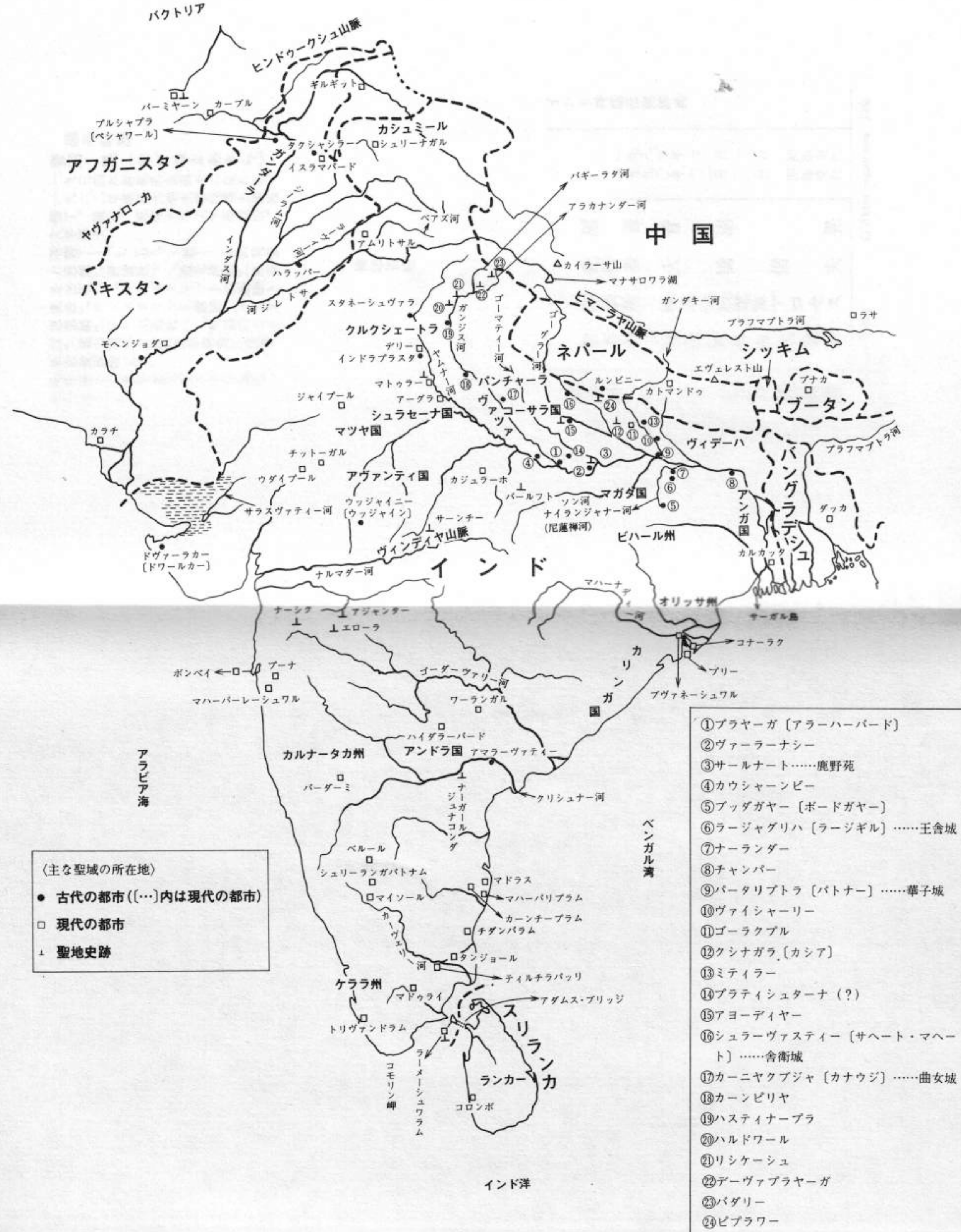
お

か

い

あ

インド神話伝説地図



〈主な聖域の所在地〉
- ● 古代の都市（〔…〕内は現代の都市）
- □ 現代の都市
- ⊥ 聖地史跡

①プラヤーガ〔アラーハーバード〕
②ヴァーラーナシー
③サールナート……鹿野苑
④カウシャーンビー
⑤ブッダガヤー〔ボードガヤー〕
⑥ラージャグリハ〔ラージギル〕……王舎城
⑦ナーランダー
⑧チャンパー
⑨パータリプトラ〔パトナー〕……華子城
⑩ヴァイシャーリー
⑪ゴーラクプル
⑫クシナガラ〔カシア〕
⑬ミティラー
⑭プラティシュターナ（？）
⑮アヨーディヤー
⑯シュラーヴァスティー〔サヘート・マヘート〕……舎衛城
⑰カーニヤクブジャ〔カナウジ〕……曲女城
⑱カーンピリヤ
⑲ハスティナープラ
⑳ハルドワール
㉑リシケーシュ
㉒デーヴァプラヤーガ
㉓バダリー
㉔ピプラワー